高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第6冊

上天神遺跡

第1分冊

1995.12
香川県教育委員会
㈶香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第6冊

上天神遺跡

第1分冊

1995.12
香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

1　上天神遺跡全景（東方上空から）

2　4 区全景（西から）

1　3区井堰検出状況

2　3区　ＳＤ02遺物出土状態

1　4区ＳＤ08遺物出土状態

2　赤彩装飾高坏（3－460）

1　把手付広片口皿（4 －938）

2　把手付広片口皿（4 －938）

1　把手付広片口皿（4 －1246）

2　把手付広片口皿（4 －944）

序　　文

香川県では，瀬戸大橋や四国横断自動車道（高松～豊浜間）の開通に始まり，現在は県東部の主要幹線道路の整備が進められているところであります。

このような状況のなかで，香川県教育委員会では，高松東道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土遺物の整理研究・報告書刊行の業務を，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託し，行ってまいりました。

このたび「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第六冊」として刊行いたしますのは，高松平野の中央部に位置します高松市上天神町の上天神遺跡についてであります。上天神遺跡の発掘調査は，昭和62・63年度，平成３・４年度と４年間にまたがって実施いたしております。

上天神遺跡では，縄文時代から鎌倉時代にかけての資料を検出しております。特に，弥生時代後期の時期には，竪穴住居や掘立柱建物で構成された集落が営まれております。また，出土した土器には，多くの他地域の土器が含まれており，この時代の高松平野に生きた人々と，瀬戸内海沿岸の広い地域の人々の間にあった多様な交流の一端をうかがわせております。

本報告書の刊行をもちまして，高松東道路のうち，高松市内区間の建設に伴って行いました埋蔵文化財発掘調査の刊行業務が終了することになりますが，各報告書が本県の歴史を考える資料として広く活用されますとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心を深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から報告書の刊行までの間，建設省四国地方建設局及び関係機関並びに地元関係各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしくご支援を賜りますようお願い申しあげます。

平成７年12月

香川県教育委員会

教育長　田中壮一郎

例　　言

1．本報告書は，高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第６冊で，香川県高松市に所在する上天神遺跡（かみてんじんいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会が建設省四国地方建設局から委託され，昭和62年度は香川県教育委員会が調査主体，昭和63年度以降は香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は，昭和62年11月から平成４年７月まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

昭和62年度　大久保徹也　植田広　石田美和　山本英之　山元敏裕　秋山成人
　　和田素子
昭和63年度　森格也　中野昇一　矢野徹
平成３年度　大久保徹也　土佐修治　満岡博隆
平成４年度　大久保徹也　高月計　高橋佳緒里

4．調査にあたって下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

高松市教育委員会　三条池水利組合　地元各自治会

5．報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。本報告書の編集は大久保・森が担当し，執筆は下記のとおり分担した。

第２章，第３章第１節・２節・４節，第４章第２節（分析資料説明）
第５章第２節～第10節――――――――――――――――――――――――大久保
第１章，第３章第３節・第５節～第10節，第５章第１節――――――――――森

また出土木製品等の樹種同定，土器胎土分析，赤色顔料の同定を以下の機関，研究者の方に依頼し，頂いた玉稿を第４章に掲載した。

第４章第１節――――――――（株）パリノ・サーベイ
第４章第２節――――――――白石純
第４章第３節――――――――本田光子

6．発掘調査および報告書の作成にあたって，下記の方々のご教示を得た。記して感謝を表したい。

（順不同，敬称略）

家田淳一，石神幸子，石野博信，井上智博，宇垣匡雅，梅木謙一，大橋雅也，加藤隆也，亀山行雄，川畑聰，白石純，菅原康夫，高橋学，出原恵三，丹羽佑一，橋本久和，平井勝，藤井雄三，藤川智之，北條芳隆，本田光子，宮崎康雄，柳田康雄，山本悦世，山本英之，山元敏裕，吉留秀敏

7．本報告書で用いる方位の北は，国土座標系第Ⅳ系の北であり，標高はＴ．Ｐ．を基準としている。

また，遺構は下記の略号により表示している。

ＳＢ　掘立柱建物跡	ＳＤ　溝状遺構	ＳＥ　井戸
ＳＦ　炉跡	ＳＨ　竪穴住居跡	ＳＫ　土坑
ＳＰ　柱穴	ＳＲ　自然河川	ＳＸ　不明遺構

8．本報告書で用いる遺構図のレベルの単位はすべてメートルである。

凡　　例

本報告書の遺物観察表では以下のような省略を行なった。

縄文土器　縄	弥生土器　弥	土師器・土師質土器　土
須恵器　須	瓦質土器　瓦	磁器　磁

また，胎土の項では以下の基準によって分類を行なった。

微	含まれる鉱物・岩石の径が0.5㎜以下		多	鉱物・岩石を非常に多く含む	
細	〃	0.6～1.0㎜	普	〃	含む
中	〃	1.1～3.9㎜	少	〃	少量含む
粗	〃	4.0㎜以上			

色調の項では『新版標準土色帳』日本色研事業株式会社を基準とし，その色名を記載した。また内・外面の色が異なれば内面から先に記入した。

単位は㎝，ｇで統一し，異なる場合はそれぞれ単位を付記した。

上天神遺跡　第１分冊

本文目次

巻頭図版

序文

例言

凡例

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯 …… (１)

第２節　調査の経過 …… (２)

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境 …… (15)

第２節　歴史的環境 …… (21)

第３章　調査の成果

第１節　１区の調査 …… (49)

第２節　２区の調査 …… (79)

第３節　３区の調査 …… (83)

第４節　４区の調査 …… (187)

第５節　５区の調査 …… (459)

第６節　６区の調査 …… (477)

第７節　７区の調査 …… (484)

第８節　８区の調査 …… (488)

第９節　９区の調査 …… (493)

第10節　10区の調査 …… (499)

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… （２）
第２図　高松東道路埋蔵文化財包蔵地（高松市内） …… （５-６）
第３図　上天神遺跡調査区割図（１／2,000） …… （９-10）
第４図　高松平野地形分類図 …… (17)
第５図　高松東道路調査区域の地形分類 …… (19)
第６図　旧石器～縄文時代草創期遺跡分布図 …… (21)
第７図　縄文時代（除く草創期）遺跡分布図 …… (23)
第８図　弥生時代遺跡分布図 …… (27-28)
第９図　古墳分布図 …… (33-34)
第10図　古代寺院・窯跡分布図 …… (40)
第11図　１区遺構配置図１（１／200） …… (45-46)
第12図　１区遺構配置図２（１／200） …… (47-48)
第13図　１区ＳＢ04平・断面図（１／80） …… (50)
第14図　１区ＳＢ05平・断面図（１／80)および出土遺物（１／４） …… (51)
第15図　１区ＳＢ06平・断面図（１／80） …… (52)
第16図　１区ＳＢ07平・断面図（１／80） …… (52)
第17図　１区ＳＤ01平・断面図（１／400・１／60） …… (53)
第18図　１区ＳＤ01付帯小溝群平・断面図（１／400・１／60） …… (54)
第19図　１区ＳＤ01出土遺物１（１／４） …… (56)
第20図　１区ＳＤ01出土遺物２（１／４） …… (57)
第21図　１区ＳＤ01出土遺物３（１／４） …… (58)
第22図　１区ＳＤ01出土遺物４（１／４） …… (59)
第23図　１区ＳＤ01出土遺物５（１／２） …… (60)
第24図　１区ＳＤ01付帯小溝群出土遺物（１／４） …… (62)
第25図　１区ＳＤ06平・断面図（１／400・１／40） …… (63)
第26図　１区ＳＤ07平・断面図（１／400・１／40）
　　および出土遺物（1／４・1／２） …… (63)
第27図　１区ＳＤ08平・断面図（１／400・１／40） …… (64)

第28図　１区ＳＤ09平・断面図（１／400・１／40）
　　および出土遺物（1／４・1／２）……(65)
第29図　１区ＳＲ01平・断面図（１／800・１／60）……(66)
第30図　１区ＳＲ01出土遺物１（１／４）……(67)
第31図　１区ＳＲ01出土遺物２（１／２）……(68)
第32図　１区ＳＲ01出土遺物３（１／２）……(69)
第33図　１区ＳＲ01出土遺物４（１／２）……(70)
第34図　１区ＳＲ01出土遺物５（１／２）……(71)
第35図　１区ＳＲ01出土遺物６（１／２）……(72)
第36図　１区ＳＲ01出土遺物７（１／２）……(73)
第37図　１区ＳＢ01平・断面図（１／80）……(74)
第38図　１区ＳＢ02平・断面図（１／80）……(75)
第39図　１区ＳＢ03平・断面図（１／80）……(76)
第40図　１区その他出土遺物１（1／４・１／２）……(77)
第41図　１区その他出土遺物２（１／２）……(78)
第42図　２区トレンチ配置図（１／800）……(79)
第43図　３区遺構配置図（１／200）……(81-82)
第44図　３区ＳＢ01平・断面図（１／80）……(83)
第45図　３区ＳＢ02平・断面図（１／80）……(84)
第46図　３区ＳＢ03・04平・断面図（１／80）……(85)
第47図　３区ＳＢ05平・断面図（１／80）
　　ＳＰ01出土遺物（１／４）……(86)
第48図　３区ＳＤ01断面図（１／50）
　　出土遺物（１／２・１／４）……(87)
第49図　３区ＳＤ02断面図（１／50）……(89)
第50図　３区ＳＤ02出土遺物１（１／４）……(90)
第51図　３区ＳＤ02出土遺物２（１／４）……(92)
第52図　３区ＳＤ02出土遺物３（１／４）……(93)
第53図　３区ＳＤ02出土遺物４（１／４）……(94)
第54図　３区ＳＤ02出土遺物５（１／４）……(96)

第55図　3区ＳＤ02出土遺物６（１／４）……(97)
第56図　3区ＳＤ02出土遺物７（１／４）……(99)
第57図　3区ＳＤ02出土遺物８（１／４）……(100)
第58図　3区ＳＤ02出土遺物９（１／４）……(102)
第59図　3区ＳＤ02出土遺物10（１／４）……(103)
第60図　3区ＳＤ02出土遺物11（１／４）……(104)
第61図　3区ＳＤ02出土遺物12（１／４）……(105)
第62図　3区ＳＤ02出土遺物13（１／４）……(107)
第63図　3区ＳＤ02出土遺物14（１／４）……(108)
第64図　3区ＳＤ02出土遺物15（１／４）……(109)
第65図　3区ＳＤ02出土遺物16（１／４）……(110)
第66図　3区ＳＤ02出土遺物17（１／４）……(111)
第67図　3区ＳＤ02出土遺物18（１／４）……(112)
第68図　3区ＳＤ02出土遺物19（１／４）……(113)
第69図　3区ＳＤ02出土遺物20（１／４）……(115)
第70図　3区ＳＤ02出土遺物21（１／４）……(117)
第71図　3区ＳＤ02出土遺物22（１／４）……(119)
第72図　3区ＳＤ02出土遺物23（１／４）……(120)
第73図　3区ＳＤ02出土遺物24（１／４）……(121)
第74図　3区ＳＤ02出土遺物25（１／４）……(123)
第75図　3区ＳＤ02出土遺物26（１／４）……(125)
第76図　3区ＳＤ02出土遺物27（１／４）……(126)
第77図　3区ＳＤ02出土遺物28（１／４）……(128)
第78図　3区ＳＤ02出土遺物29（１／２）……(129)
第79図　3区ＳＤ02出土遺物30（１／２）……(130)
第80図　3区ＳＤ02出土遺物31（１／４）……(131)
第81図　3区ＳＤ03・04断面図（１／50）……(133)
第82図　3区ＳＤ03出土遺物１（１／４）……(134)
第83図　3区ＳＤ03出土遺物２（１／４）……(135)
第84図　3区ＳＤ03出土遺物３（１／４）……(137)

第85図　3区SD03出土遺物4（1／4）……(138)
第86図　3区SD03出土遺物5（1／4）……(139)
第87図　3区SD03出土遺物6（1／4）……(140)
第88図　3区SD03出土遺物7（1／4）……(141)
第89図　3区SD03出土遺物8（1／4）……(143)
第90図　3区SD03出土遺物9（1／2）……(144)
第91図　3区SD04出土遺物1（1／4）……(146)
第92図　3区SD04出土遺物2（1／4）……(147)
第93図　3区SK01平・断面図（1／30）……(148)
第94図　3区SK01出土遺物1（1／4）……(149)
第95図　3区SK01出土遺物2（1／2・1／4）……(151)
第96図　3区SR01断面図，井堰平・立面図（1／40）……(153-154)
第97図　3区SR01出土遺物1（1／4）……(155)
第98図　3区SR01出土遺物2（1／4）……(156)
第99図　3区SR01出土遺物3（1／4）……(157)
第100図　3区SR01出土遺物4（1／4）……(159)
第101図　3区SR01出土遺物5（1／4）……(162)
第102図　3区SR01出土遺物6（1／4）……(164)
第103図　3区SR01出土遺物7（1／4）……(165)
第104図　3区SR01出土遺物8（1／4）……(167)
第105図　3区SR01出土遺物9（1／4）……(168)
第106図　3区SR01出土遺物10（1／4）……(170)
第107図　3区SR01出土遺物11（1／4）……(171)
第108図　3区SR01出土遺物12（1／2）……(172)
第109図　3区SR01出土遺物13（1／4）……(173)
第110図　3区SR01出土遺物14（1／4）……(174)
第111図　3区SR01出土遺物15（1／4）……(175)
第112図　3区SR02出土遺物（1／4）……(176)
第113図　3区SR02断面図（1／50）……(177)
第114図　3区包含層出土遺物（1／2・1／4）……(178)

第115-1図 4区遺構配置図1（1／200）……（181-182）
第115-2図 4区遺構配置図2（1／200）……（183-184）
第115-3図 4区遺構配置図3（1／200）……（185-186）
第116図　4区基本層序1（1／80）……（190）
第117図　4区基本層序2（1／80）……（191）
第118図　4区SH01平・断面図（1／80・1／40）……（193）
第119図　4区SH01出土遺物1（1／4）……（194）
第120図　4区SH01出土遺物2（1／4・1／2）……（195）
第121図　4区SH02・SK14平・断面図（1／80・1／40）……（196）
第122図　4区SH02出土遺物（1／4）……（197）
第123図　4区SH03平・断面図（1／80）
　　および出土遺物（1／4）……（199）
第124図　4区SH04・SK15・16・17・18・
　　SD14平・断面図（1／80・1／40）……（200）
第125図　4区SH04変遷想定図（1／120）……（201）
第126図　4区SH04出土遺物1（1／4）……（202）
第127図　4区SH04出土遺物2（1／4）……（203）
第128図　4区SH01出土遺物3（1／4・1／2）……（204）
第129図　4区SH05・SK19・20平・断面図（1／80・1／40）……（206）
第130図　4区SH05出土遺物（1／4・1／2）……（207）
第131図　4区SH06平・断面図（1／80）……（208）
第132図　4区SH07平・断面図（1／80）および出土遺物（1／4）……（209）
第133図　4区SH08平・断面図（1／80）……（210）
第134図　4区SH09平・断面図（1／80）および出土遺物（1／4）……（211）
第135図　4区SH10平・断面図（1／80）……（212）
第136図　4区SH11平・断面図（1／80）……（213）
第137図　4区SB01平・断面図（1／80）および出土遺物（1／4）……（214）
第138図　4区SB02平・断面図（1／80）……（215）
第139図　4区SB02出土遺物（1／4）……（216）
第140図　4区SB03平・断面図（1／80）……（217）

第141図　4区ＳＢ04平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）……（218）
第142図　4区ＳＢ05平・断面図（１／80）……（219）
第143図　4区ＳＢ07平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）……（220）
第144図　4区ＳＢ08平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）……（221）
第145図　4区ＳＢ09平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）……（222）
第146図　4区ＳＢ10平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）……（224）
第147図　4区ＳＢ11平・断面図（１／80）……（225）
第148図　4区ＳＢ12平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）……（226）
第149図　4区ＳＢ13平・断面図（１／80）……（227）
第150図　4区ＳＢ14平・断面図（１／80）……（228）
第151図　4区ＳＢ15平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）……（229）
第152図　4区ＳＢ16平・断面図（１／80）……（230）
第153図　4区ＳＤ01平・断面図（１／200・1／40）……（230）
第154図　4区ＳＤ01出土遺物（１／４・1／２）……（231）
第155図　4区ＳＤ06平・断面図（１／400・1／40）……（231）
第156図　4区ＳＤ06出土遺物１（１／４）……（232）
第157図　4区ＳＤ06出土遺物２（１／４）……（233）
第158図　4区ＳＤ06出土遺物３（１／４）……（234）
第159図　4区ＳＤ06出土遺物４（１／４）……（235）
第160図　4区ＳＤ06出土遺物５（１／４・１／２）……（236）
第161図　4区ＳＤ06出土遺物６（１／４）……（237）
第162図　4区ＳＤ06出土遺物７（１／４）……（238）
第163図　4区ＳＤ07平・断面図（１／200・1／60）……（239）
第164図　4区ＳＤ07出土遺物１（１／４）……（240）
第165図　4区ＳＤ07出土遺物２（１／２）……（241）
第166図　4区ＳＤ07出土遺物３（１／２）……（242）
第167図　4区ＳＤ07出土遺物４（１／２）……（243）
第168図　4区ＳＤ08・09平・断面図（１／400・1／40）……（245）
第169図　4区ＳＤ08出土遺物１（１／４）……（246）
第170図　4区ＳＤ08出土遺物２（１／４）……（247）

第171図　4区SD08出土遺物3（1／4）……(248)
第172図　4区SD08出土遺物4（1／4）……(250)
第173図　4区SD08出土遺物5（1／4）……(251)
第174図　4区SD08出土遺物6（1／4）……(252)
第175図　4区SD08出土遺物7（1／4）……(253)
第176図　4区SD08出土遺物8（1／4）……(254)
第177図　4区SD08出土遺物9（1／4）……(255)
第178図　4区SD08出土遺物10（1／4）……(256)
第179図　4区SD08出土遺物11（1／4）……(257)
第180図　4区SD08出土遺物12（1／4）……(259)
第181図　4区SD08出土遺物13（1／4）……(260)
第182図　4区SD08出土遺物14（1／4）……(261)
第183図　4区SD08出土遺物15（1／4）……(262)
第184図　4区SD08出土遺物16（1／4）……(263)
第185図　4区SD08出土遺物17（1／4）……(264)
第186図　4区SD08出土遺物18（1／4）……(265)
第187図　4区SD08出土遺物19（1／4）……(266)
第188図　4区SD08出土遺物20（1／4）……(267)
第189図　4区SD08出土遺物21（1／4）……(268)
第190図　4区SD08出土遺物22（1／4）……(269)
第191図　4区SD08出土遺物23（1／4）……(270)
第192図　4区SD08出土遺物24（1／4）……(271)
第193図　4区SD08出土遺物25（1／4）……(273)
第194図　4区SD08出土遺物26（1／4）……(274)
第195図　4区SD08出土遺物27（1／4）……(275)
第196図　4区SD08出土遺物28（1／4）……(276)
第197図　4区SD08出土遺物29（1／4）……(277)
第198図　4区SD08出土遺物30（1／4）……(278)
第199図　4区SD08出土遺物31（1／4）……(279)
第200図　4区SD08出土遺物32（1／4）……(280)

第201図　4区SD08出土遺物33（1／4）……（281）
第202図　4区SD08出土遺物34（1／4）……（282）
第203図　4区SD08出土遺物35（1／4）……（283）
第204図　4区SD08出土遺物36（1／4）……（284）
第205図　4区SD08出土遺物37（1／4）……（285）
第206図　4区SD08出土遺物38（1／4）……（286）
第207図　4区SD08出土遺物39（1／4）……（287）
第208図　4区SD08出土遺物40（1／4）……（288）
第209図　4区SD08出土遺物41（1／4）……（289）
第210図　4区SD08出土遺物42（1／2）……（290）
第211図　4区SD08出土遺物43（1／2）……（291）
第212図　4区SD08出土遺物44（1／4）……（292）
第213図　4区SD08出土遺物45（1／2）……（293）
第214図　4区SD09出土遺物1（1／4）……（295）
第215図　4区SD09出土遺物2（1／4）……（296）
第216図　4区SD09出土遺物3（1／4）……（297）
第217図　4区SD10平・断面図（1／200・1／40）……（298）
第218図　4区SD10出土遺物（1／4）……（299）
第219図　4区SD11平・断面図（1／400・1／40）……（300）
第220図　4区SD11出土遺物（1／4）……（301）
第221図　4区SD12平・断面図（1／200・1／40）……（302）
第222図　4区SD13平・断面図（1／200・1／40）……（302）
第223図　4区SD15平・断面図（1／200・1／40），出土遺物（1／4）……（302）
第224図　4区SD16平・断面図（1／400・1／40）……（303-304）
第225図　4区SD16a～c・i溝想定図（1／80・1／150）……（305）
第226図　4区SD16e_3～e_5溝想定図（1／80・1／150）……（306）
第227図　4区SD16e_1・e_2・h溝想定図（1／80・1／150）……（307）
第228図　4区SD16d溝想定図（1／80・1／150）……（308）
第229図　4区SD16f溝想定図（1／80・1／150）……（309）
第230図　4区SD16a溝出土遺物・b溝出土遺物（1／4）……（310）

第231図　4区SD16c溝出土遺物・ab溝出土遺物1（1／4）……(311)
第232図　4区SD16ab溝出土遺物2・abc溝出土遺物1（1／4）……(312)
第233図　4区SD16abc溝出土遺物2・i溝出土遺物1（1／4）……(313)
第234図　4区SD16i溝出土遺物2（1／4）……(314)
第235図　4区SD16d•e溝出土遺物1（1／4）……(315)
第236図　4区SD16d•e溝出土遺物2（1／4）……(317)
第237図　4区SD16d•e溝出土遺物3（1／4）……(318)
第238図　4区SD16d•e溝出土遺物4（1／4）……(319)
第239図　4区SD16d•e溝出土遺物5（1／4）……(320)
第240図　4区SD16d•e溝出土遺物6（1／4）……(321)
第241図　4区SD16d•e溝出土遺物7（1／4）……(322)
第242図　4区SD16d•e溝出土遺物8（1／4）……(323)
第243図　4区SD16d•e溝出土遺物9（1／4）……(324)
第244図　4区SD16d•e溝出土遺物10（1／4）……(325)
第245図　4区SD16d•e溝出土遺物11（1／4）……(326)
第246図　4区SD16h溝出土遺物（1／4）……(328)
第247図　4区SD16f溝出土遺物1（1／4）……(329)
第248図　4区SD16f溝出土遺物2（1／4）……(330)
第249図　4区SD16f溝出土遺物3（1／4）……(331)
第250図　4区SD16f溝出土遺物4（1／4）……(332)
第251図　4区SD16f溝出土遺物5（1／4）……(333)
第252図　4区SD16f溝出土遺物6（1／4）……(335)
第253図　4区SD16f溝出土遺物7（1／4）……(336)
第254図　4区SD16f溝出土遺物8（1／4）……(337)
第255図　4区SD16f溝出土遺物9（1／4）……(338)
第256図　4区SD16f溝出土遺物10（1／4）……(339)
第257図　4区SD16f溝出土遺物11（1／4）……(341)
第258図　4区SD16f溝出土遺物12（1／4）……(342)
第259図　4区SD16f溝出土遺物13（1／4）……(343)
第260図　4区SD16f溝出土遺物14（1／4）……(344)

第261図　4区SD16f溝出土遺物15（1／4）……(345)
第262図　4区SD16f溝出土遺物16（1／4）……(346)
第263図　4区SD16f溝出土遺物17（1／4）……(347)
第264図　4区SD16f溝出土遺物18（1／4）……(348)
第265図　4区SD16f溝出土遺物19（1／4）……(349)
第266図　4区SD16f溝出土遺物20（1／4）……(350)
第267図　4区SD16f溝出土遺物21（1／4）……(351)
第268図　4区SD16f溝出土遺物22（1／4）……(353)
第269図　4区SD16f溝出土遺物23（1／4）……(354)
第270図　4区SD16f溝出土遺物24（1／4）……(355)
第271図　4区SD16f溝出土遺物25（1／4）……(356)
第272図　4区SD16f溝出土遺物26（1／4）……(357)
第273図　4区SD16f溝出土遺物27（1／4）……(358)
第274図　4区SD16f溝出土遺物28（1／4）……(359)
第275図　4区SD16f溝出土遺物29（1／4）……(360)
第276図　4区SD16f溝出土遺物30（1／4）……(361)
第277図　4区SD16f溝出土遺物31（1／4）……(362)
第278図　4区SD16出土遺物1（1／4）……(363)
第279図　4区SD16出土遺物2（1／4）……(364)
第280図　4区SD16出土遺物3（1／4）……(365)
第281図　4区SD16出土遺物4（1／4）……(366)
第282図　4区SD16出土遺物5（1／2）……(367)
第283図　4区SD16出土遺物6（1／2）……(368)
第284図　4区SD16出土遺物7（1／2）……(369)
第285図　4区SD16出土遺物8（1／2）……(370)
第286図　4区SD16出土遺物9（1／2）……(371)
第287図　4区SD16出土遺物10（1／2）……(372)
第288図　4区SD16出土遺物11（1／3・1／2）……(373)
第289図　4区SD17平・断面図（1／400・1／40）……(374)
第290図　4区SD17上層出土遺物1（1／4）……(375)

第291図　4区ＳＤ17上層出土遺物２（１／４）……(376)
第292図　4区ＳＤ17下層出土遺物（１／４）……(377)
第293図　4区ＳＤ17出土遺物１（１／２）……(379)
第294図　4区ＳＤ17出土遺物２（１／２）……(380)
第295図　4区ＳＤ17出土遺物３（１／２・１／３）……(381)
第296図　4区ＳＤ18～22平・断面図（１／200・1／40）……(382)
第297図　4区ＳＤ18出土遺物（１／４）……(383)
第298図　4区ＳＤ19出土遺物１（１／４）……(385)
第299図　4区ＳＤ19出土遺物２（１／４）……(386)
第300図　4区ＳＤ19出土遺物３（１／４）……(387)
第301図　4区ＳＤ19出土遺物４（１／４）……(388)
第302図　4区ＳＤ20・22出土遺物（１／４）……(389)
第303図　4区ＳＫ01平・断面図（１／40）……(389)
第304図　4区ＳＫ01出土遺物１（１／４）……(390)
第305図　4区ＳＫ01出土遺物２（１／４）……(391)
第306図　4区ＳＫ01出土遺物３（１／４）……(392)
第307図　4区ＳＫ01出土遺物４（１／４）……(393)
第308図　4区ＳＫ01出土遺物５（１／４）……(394)
第309図　4区ＳＫ01出土遺物６（１／２・１／３）……(395)
第310図　4区ＳＫ02平・断面図（１／40）および出土遺物１（１／４）……(397)
第311図　4区ＳＫ02出土遺物２（１／４）……(398)
第312図　4区ＳＫ03平・断面図（１／40）……(399)
第313図　4区ＳＫ03出土遺物１（１／４）……(400)
第314図　4区ＳＫ03出土遺物２（１／４）……(401)
第315図　4区ＳＫ03出土遺物３（１／４）……(402)
第316図　4区ＳＫ03出土遺物４（１／４）……(403)
第317図　4区ＳＫ04平・断面図（1／40）……(404)
第318図　4区ＳＫ04出土遺物１（１／４）……(405)
第319図　4区ＳＫ04出土遺物２（１／４）……(406)
第320図　4区ＳＫ05平・断面図（１／40）……(408)

第321図　4区ＳＫ05出土遺物１（１／４）……(409)
第322図　4区ＳＫ05出土遺物２（１／４）……(410)
第323図　4区ＳＫ05出土遺物３（１／４）……(411)
第324図　4区ＳＫ05出土遺物４（１／４）……(412)
第325図　4区ＳＫ05出土遺物５（１／２・１／３）……(413)
第326図　4区ＳＫ06平・断面図（１／40）および出土遺物（１／４）……(414)
第327図　4区ＳＫ07平・断面図（１／40）および出土遺物（１／４）……(416)
第328図　4区ＳＫ08平・断面図（１／40），出土遺物（１／４・１／２）……(417)
第329図　4区ＳＫ09平・断面図（１／40），出土遺物１（１／４・１／２）……(418)
第330図　4区ＳＫ10平・断面図（１／40）および出土遺物（１／４）……(419)
第331図　4区ＳＫ11平・断面図（１／40）および出土遺物（１／４）……(421)
第332図　4区ＳＫ12平・断面図（１／40），出土遺物（１／４・１／２）……(422)
第333図　4区ＳＫ13平・断面図（１／40）および出土遺物（１／４）……(423)
第334図　4区柱穴出土遺物１（１／４）……(424)
第335図　4区柱穴出土遺物２（１／４）……(425)
第336図　4区柱穴出土遺物３（１／４）……(426)
第337図　4区柱穴出土遺物４（１／４・１／３）……(427)
第338図　4区柱穴出土遺物５（１／３）……(428)
第339図　4区撹乱土坑群平面図（１／300）……(429)
第340図　4区撹乱土坑群混入遺物１（１／４）……(430)
第341図　4区撹乱土坑群混入遺物２（１／２）……(431)
第342図　4区ＳＢ06平・断面図（１／80 ）および出土遺物（１／４）……(432)
第343図　4区ＳＤ02・03平・断面図（１／400・1／60）……(433)
第344図　4区ＳＤ02出土遺物１（１／４）……(434)
第345図　4区ＳＤ02出土遺物２（１／４・１／２）……(435)
第346図　4区ＳＤ02出土遺物３（１／２）……(436)
第347図　4区ＳＤ03出土遺物（１／４）……(437)
第348図　4区ＳＤ04平・断面図（１／600・１／40）……(438)
第349図　4区ＳＤ04出土遺物（１／４・１／２）……(439)
第350図　4区ＳＤ05平・断面図（１／400・1／40）……(440)

第351図　4区ＳＤ05出土遺物１（１／４）……(441)
第352図　4区ＳＤ05出土遺物２（１／２）……(442)
第353図　4区包含層出土遺物１（１／４）……(443)
第354図　4区包含層出土遺物２（１／２）……(444)
第355図　4区包含層出土遺物３（１／２）……(445)
第356図　4区その他遺物１（１／４）……(447)
第357図　4区その他遺物２（１／２）……(449)
第358図　4区その他遺物３（１／２）……(450)
第359図　4区その他遺物４（１／２）……(451)
第360図　4区その他遺物５（１／２・１／３）……(452)
第361図－１　赤色顔料付着資料（補遺１）（１／４）……(453)
第361図－２　4区出土石器（補遺２）（１／２）……(455)
第361図－３　4区出土石器（補遺３）（１／２）……(456)
第362図　5区遺構配置図（１／200）……(457-458)
第363図　5区ＳＤ01出土遺物（１／４）……(459)
第364図　5区ＳＤ01断面図（１／80）……(460)
第365図　5区ＳＤ02平・断面図（１／40），出土遺物（１／４）……(461)
第366図　5区ＳＤ03出土遺物（１／４）……(462)
第367図　5区ＳＤ05断面図（１／40）……(463)
第368図　5区ＳＫ01平・断面図（１／50）……(463)
第369図　5区ＳＫ01出土遺物（１／４）……(464)
第370図　5区ＳＰ01平・断面図，遺物出土状況図（１／20），出土遺物（１／４）(465)
第371図　5区ＳＰ02平・断面図（１／20）……(466)
第372図　5区ＳＰ03平・断面図（１／20）……(466)
第373図　5区ＳＰ04出土遺物（１／４）……(467)
第374図　5区ＳＦ01・ＳＸ01平面図（１／80）……(467)
第375図　5区ＳＸ01出土遺物（１／２・１／４）……(468)
第376図　5区包含層出土遺物１（１／４）……(469)
第377図　5区包含層出土遺物２（１／２）……(470)
第378図　6区遺構配置図１（１／200）……(473-474)

第379図　6区遺構配置図2（1／200）……(475-476)
第380図　6区SR01・02断面図（1／50）……(479-480)
第381図　6区SR01出土遺物（1／2・1／4）……(481)
第382図　6区SK01平・断面図（1／30）……(482)
第383図　6区SR02出土遺物（1／4）……(482)
第384図　7区包含層出土遺物（1／4）……(484)
第385図　8区遺構配置図（1／200）……(485-486)
第386図　8区SK01平・断面図（1／30），出土遺物（1／4）……(488)
第387図　8区SK02平・断面図（1／30）……(490)
第388図　8区SK03平・断面図（1／40）……(490)
第389図　9区遺構配置図（1／200）……(491-492)
第390図　9区包含層出土遺物（1／4）……(493)
第391図　10区遺構配置図1（1／200）……(495-496)
第392図　10区遺構配置図2（1／200）……(497-498)
第393図　10区南壁部分SR01・02断面図（1／50）……(500)

巻頭図版目次

巻頭図版1　1．上天神遺跡全景（東方上空から）
2．4区全景（西から）
巻頭図版2　1．3区井堰検出状況
2．3区SD02遺物出土状態
巻頭図版3　1．4区SD08遺物出土状態
2．赤彩装飾高坏（3-460）
巻頭図版4　1．把手付広片口皿（4-938）
2．把手付広片口皿（4-938）
巻頭図版5　1．把手付広片口皿（4-1246）
2．把手付広片口皿（4-944）

表 目 次

第１表　高松東道路（上天神～前田東）調査遺跡一覧 …… （３）
第２表　上天神遺跡整理作業工程表 …… (13)
第３表　高松東道路調査区域の遺跡動向 …… (20)
第４表　旧石器～縄文時代草創期遺跡一覧 …… (22)
第５表　縄文時代遺跡一覧（除く草創期） …… (24)
第６表　弥生時代遺跡一覧（１） …… (29)
第７表　弥生時代遺跡一覧（２） …… (30)
第８表　古墳一覧（１） …… (35)
第９表　古墳一覧（２） …… (36)
第10表　古墳一覧（３） …… (37)
第11表　古墳一覧（４） …… (38)
第12表　古墳一覧（５） …… (39)
第13表　古代寺院・窯跡一覧 …… (41)

上天神遺跡　第2分冊

本文目次

第4章　自然科学調査の成果
第1節　井堰構築材および土坑から出土した種実の種類 …… (1)
第2節　上天神遺跡出土土器の胎土分析 …… (12)
第3節　高松市上天神遺跡出土土器に付着している赤色顔料 …… (30)
第5章　まとめ
第1節　高松平野における弥生時代の石器生産と流通 …… (37)
第2節　上天神遺跡における弥生後期土器の構成 …… (51)
第3節　上天神遺跡資料に先行する資料群 …… (94)
第4節　後期前半段階の資料群 …… (103)
第5節　上天神遺跡の「在地」土器と「搬入」土器 …… (114)
第6節　上天神遺跡の他系統「在地」土器 …… (136)
第7節　上天神遺跡における石器石材の搬入状況 …… (140)
第8節　上天神遺跡出土赤色顔料付着資料について …… (145)
第9節　上天神遺跡の集落構成 …… (173)
第10節　基幹的潅漑水路と潅漑単位 …… (180)

挿図目次

第394図　木材（1）…… (8)
第395図　木材（2）…… (9)
第396図　木材（3）…… (10)
第397図　木材（4）・種実 …… (11)
第398図　胎土分析資料（4区SD08砂粒分類1）…… (14)
第399図　胎土分析資料（4区SD08砂粒分類1・2）…… (15)
第400図　胎土分析資料（4区SD08砂粒分類2・3）…… (16)
第401図　胎土分析資料（4区SD08砂粒分類3・4）…… (17)
第402図　胎土分析資料（4区SD08砂粒分類5・6，4区SK08）…… (18)
第403図　K_2O-CaO　散布図　上天神遺跡甕形土器の形態・
技法・胎土・色調の違いによる分析値の比較 …… (23)
第404図　$Fe_2O_3-TiO_2$　散布図　上天神遺跡甕形土器の形態・
技法・胎土・色調の違いによる分析値の比較 …… (23)
第405図　Sr－Rb　散布図　上天神遺跡甕形土器の形態・
技法・胎土・色調の違いによる分析値の比較 …… (24)
第406図　K_2O-CaO　散布図　讃岐各地域の遺跡出土土器の比較 …… (24)
第407図　$Fe_2O_3-TiO_2$　散布図　讃岐各地域の遺跡出土土器の比較 …… (25)
第408図　Sr－Rb　散布図　讃岐各地域の遺跡出土土器の比較 …… (25)
第409図　高松市内遺跡分布図 …… (42)
第410図　石器組成変遷図 …… (46)
第411図　金山付近遺跡分布図 …… (48)
第412図　広口壷A …… (53)
第413図　広口壷B …… (54)
第414図　広口壷C …… (54)
第415図　広口壷D …… (55)
第416図　広口壷E …… (56)
第417図　広口壷F …… (56)
第418図　直口壷A …… (57)

第419図　直口壷B …… (58)
第420図　直口壷C …… (59)
第421図　直口壷D …… (59)
第422図　直口壷E …… (60)
第423図　直口壷F …… (60)
第424図　直口壷G …… (60)
第425図　短頸壷A …… (61)
第426図　短頸壷B …… (61)
第427図　無頸壷 …… (62)
第428図　細頸壷 …… (62)
第429図　甕A …… (63)
第430図　甕B …… (64)
第431図　甕C …… (65)
第432図　甕D …… (65)
第433図　甕E …… (65)
第434図　甕F …… (66)
第435図　甕G・H …… (67)
第436図　大形甕 …… (68)
第437図　高坏A …… (70)
第438図　高坏B …… (71)
第439図　高坏C …… (72)
第440図　高坏D …… (72)
第441図　高坏E …… (73)
第442図　高坏F …… (73)
第443図　高坏G …… (74)
第444図　脚A …… (75)
第445図　脚B …… (77)
第446図　脚C …… (78)
第447図　脚D …… (79)
第448図　脚E・F・G・H …… (80)

第449図　装飾高坏 …… (81)
第450図　小形器台 …… (82)
第451図　小形器台脚 …… (83)
第452図　大形器台 …… (85)
第453図　大形鉢Ａ・Ｂ …… (87)
第454図　大形鉢Ｃ・Ｄ …… (88)
第455図　大形鉢Ｅ・Ｆ・Ｇ …… (89)
第456図　大形鉢Ｈ・Ｉ・Ｊ …… (90)
第457図　蓋・把手付鉢 …… (92)
第458図　支脚 …… (93)
第459図　彼ノ宗遺跡ＳＴ１９ …… (94)
第460図　矢ノ塚遺跡ＳＤ８５０３１ …… (95)
第461図　矢ノ塚遺跡ＳＸ８５００２ …… (96)
第462図　仲善寺遺跡ＳＨ９２０２ …… (98)
第463図　久米池南遺跡２号テラス（１） …… (100)
第464図　久米池南遺跡２号テラス（２） …… (101)
第465図　大空遺跡（１） …… (104)
第466図　大空遺跡（２） …… (105)
第467図　大空遺跡（３） …… (106)
第468図　小山南谷遺跡ＳＨ０３ …… (107)
第469図　林坊城遺跡ＳＸ０３（１） …… (108)
第470図　林坊城遺跡ＳＸ０３（２） …… (109)
第471図　空港跡地遺跡ＳＫ０１・０２・ＳＥ０１（１） …… (110)
第472図　空港跡地遺跡ＳＫ０１・０２・ＳＥ０１（２） …… (111)
第473図　高松平野における「胎土１類」土器の分布状況 …… (115)
第474図　高松平野における「胎土１類」土器出現頻度 …… (116)
第475図　搬入土器・讃岐（１） …… (121)
第476図　搬入土器・讃岐（２） …… (122)
第477図　搬入土器・吉備南部 …… (123)
第478図　搬入土器・阿波 …… (124)

第479図　搬入土器・西部瀬戸内諸地方 …… (125)
第480図　搬入土器・その他系統不明 …… (126)
第481図　近畿地方系統の「在地」土器 …… (137)
第482図　内面赤色顔料付着土器（1） …… (146)
第483図　内面赤色顔料付着土器（2） …… (147)
第484図　内面赤色顔料付着土器（3） …… (148)
第485図　把手付広片口皿の形態 …… (150)
第486図　把手付広片口皿の分類 …… (152)
第487図　把手付広片口皿の諸形態 …… (153)
第488図　上天神遺跡　集落単位1 …… (175)
第489図　上天神遺跡　集落単位2 …… (176)
第490図　上天神遺跡　集落単位3 …… (177)
第491図　上天神遺跡　集落単位4 …… (177)
第492図　上天神遺跡の集落構成 …… (178)
第493図　上天神遺跡の大形潅漑水路 …… (181)

図版目次

図版1　1区ＳＢ04・05（南から），ＳＢ02（南から）
図版2　1区ＳＤ01検出状態（南から），ＳＤ01上層砂層除去（西から）
図版3　1区ＳＤ07・ＳＢ06・07（西から），ＳＤ08・09（南から）
図版4　1区ＳＤ10・11（西から），ＳＲ01土層断面（南から）
図版5　3区全景，3区全景（東から）
図版6　3区ＳＢ01（北から），3区ＳＢ02（西から）
図版7　3区ＳＢ03（西から），3区ＳＢ04（東から）
図版8　3区ＳＤ01（南から），
　　3区ＳＤ01・02交点部分断面（Ｄ－Ｄ’）（南から）
図版9　3区ＳＤ02（北から），3区ＳＤ02遺物出土状況（南から）
図版10　3区ＳＤ02遺物出土状況（北から），
　　3区ＳＤ02遺物出土状況（南から）

図版11　3区ＳＤ02遺物出土状況（西から），
　　3区ＳＤ04遺物出土状況（北から）
図版12　3区ＳＫ01上層遺物出土状況（西から），
　　3区ＳＫ01中層遺物出土状況
図版13　3区ＳＲ01（東から），3区ＳＲ01井堰（東から）
図版14　3区ＳＲ01井堰（東から），3区ＳＤ03・ＳＲ02（北東から）
図版15　4区全景写真（東から），同上（南から）
図版16　4区調査前風景（西から），同上（南から）
図版17　4区C12•13遺構検出状態（南から），C13•14遺構検出状態（南から）
図版18　4区B13•14遺構検出状態（東から），C14•15遺構検出状態（南から）
図版19　4区C11•12遺構完掘状態（西から），B13•14遺構完掘状態（西から）
図版20　4区B15近世以降撹乱土坑群，BC16•17遺構完掘状態（南から）
図版21　4区ＳＨ01（南から），ＳＨ02（北から）
図版22　4区ＳＨ02中央穴，ＳＨ02付帯土坑（ＳＫ14）遺物出土状態
図版23　4区ＳＨ04（西から），ＳＨ04付帯土坑（ＳＫ19）
図版24　4区ＳＨ04付帯土坑（ＳＫ20），ＳＫ20遺物出土状態
図版25　4区ＳＢ01柱痕検出状態（西から），
　　ＳＢ03柱痕検出状態（南から）
図版26　4区ＳＢ04（東から），ＳＢ10（北から）
図版27　4区ＳＢ12（東から），ＳＢ14・15（西から）
図版28　4区ＳＢ15（西から），ＳＢ16（西から）
図版29　4区C12　ＳＤ02・05・08検出状態（南から），
　　B12　ＳＤ02・03・08・09検出状態（北から）
図版30　4区ＳＤ09完掘（北から），B12　ＳＤ08遺物出土状態（北から）
図版31　4区B12　ＳＤ08（北から），ＳＤ08土層断面
図版32　4区C12　ＳＤ08遺物出土状態（南から）
図版33　4区C15　ＳＤ16ａ・ｂ・ｃ・ｉ溝（南から），
　　C15　ＳＤ16ｆ溝完掘（南から）
図版34　4区B15　ＳＤ16検出状態（北から），B15　ＳＤ16ａ～ｃ溝（北から）
図版35　4区B15　ＳＤ16ｄ・ｅ溝（北から），

ＳＤ16ｆ溝遺物出土状態（北から）

図版36　４区B15　ＳＤ16ｆ溝完掘（北から）

図版37　４区C15　ＳＤ16ａ・ｂ・ｃ・ｉ溝検出状態（東から），

C15　ＳＤ16ａ・ｂ・ｃ・ｉ溝（東から）

図版38　４区C15　ＳＤ16ｆ溝遺物出土状態

図版39　４区ＳＤ16ｆ溝遺物出土状態

図版40　４区B15　ＳＤ16検出状態（西から），B15　ＳＤ16ａ～ｃ溝（西から）

図版41　４区B15　ＳＤ16ｆ溝遺物出土状態（西から），

ＳＤ16ｆ溝完掘（西から）

図版42　４区ＳＤ17検出状態（西から），ＳＤ17土層断面

図版43　４区ＳＤ04（西から），（東から），ＳＤ04土層断面

図版44　４区ＳＤ05（南から），ＳＢ06（北から）

図版45　４区ＳＫ01遺物出土状態，ＳＫ01

図版46　４区ＳＫ02遺物出土状態，ＳＫ03遺物出土状態

図版47　４区ＳＫ04，ＳＫ04遺物出土状態

図版48　４区ＳＫ05土層断面，ＳＫ05遺物出土状態

図版49　４区ＳＫ07，ＳＫ07土層断面

図版50　４区ＳＫ06土層断面，ＳＫ10遺物出土状態

図版51　４区ＳＫ11遺物出土状態

図版52　４区作業風景

図版53　５区全景，５区全景（東から）

図版54　５区ＳＤ03（東から），５区ＳＫ01（南から）

図版55　５区ＳＰ01遺物出土状況，５区ＳＸ01・ＳＦ01（東から）

図版56　５区ＳＸ01遺物出土状況，６区ＳＫ01（南東から）

図版57　６区ＳＲ01（東から），６区ＳＲ02（西から）

図版58　６区ＳＲ01・02断面（南から），７区全景（西から）

図版59　８区全景（西から），８区ＳＤ01，ＳＫ01（西から）

図版60　８区ＳＫ01（北から），９区全景（西から）

図版61　10区（８区南側）全景（東から），10区（７区南側）全景（西から）

図版62　10区（６区南側）ＳＤ01（東から），

10区（６区南側）ＳＲ01（東から）
図版 63～図版 71　１区出土遺物（１）～（９）
図版 72～図版138　３区出土遺物（１）～（67）
図版139～図版234　４区出土遺物（１）～（96）
図版235～図版237　５区出土遺物（１）～（３）
図版238　６区～９区出土遺物

表　目　次

第14表　井堰構築材の樹種同定結果 …… （２）
第15表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（１）…… (26)
第16表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（２）…… (27)
第17表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（３）…… (28)
第18表　上天神遺跡及び讃岐地方の各遺跡の胎土分析試料分析値一覧表（４）…… (29)
第19表　試料一覧と分析結果 …… (35)
第20表　上天神遺跡石器組成（遺跡全体）…… (38)
第21表　上天神遺跡石器組成（縄文晩期～弥生前期）…… (39)
第22表　上天神遺跡石器組成（弥生後期）…… (40)
第23表　上天神遺跡　弥生後期土器器種構成表 …… (52)
第24表　高松平野の弥生後期前半段階土器編年案 …… (112)
第25表　４区ＳＤ08「搬入」土器比率 …… (119)
第26表　４区ＳＤ16ｆ溝「搬入」土器比率 …… (120)
第27表　１・４区「搬入」土器一覧（１）…… (128)
第28表　１・４区「搬入」土器一覧（２）…… (129)
第29表　１・４区「搬入」土器一覧（３）…… (130)
第30表　１・４区「搬入」土器一覧（４）…… (131)
第31表　１・４区「搬入」土器一覧（５）…… (132)
第32表　１・４区「搬入」土器一覧（６）…… (133)
第33表　他系統「在地」土器の出現頻度 …… (138)
第34表　安山岩系統石材搬入量 …… (141)

第35表　サヌカイト搬入量 …… (142)
第36表　片岩系統石材搬入量 …… (143)
第37表　内面赤色顔料付着土器（1） …… (157)
第38表　内面赤色顔料付着土器（2） …… (158)
第39表　内面赤色顔料付着土器（3） …… (159)
第40表　内面赤色顔料付着土器（4） …… (160)
第41表　内面赤色顔料付着土器（5） …… (161)
第42表　内面赤色顔料付着土器（6） …… (162)
第43表　内面赤色顔料付着土器（7） …… (163)
第44表　内面赤色顔料付着土器（8） …… (164)
第45表　内面赤色顔料付着土器（9） …… (165)
第46表　内面赤色顔料付着土器（10） …… (166)
第47表　内面赤色顔料付着土器（11） …… (167)
第48表　内面赤色顔料付着土器（12） …… (168)
第49表　内面赤色顔料付着土器（13） …… (169)
第50表　内面赤色顔料付着土器（14） …… (170)
第51表　外面赤色顔料塗布土器（1） …… (171)
第52表　外面赤色顔料塗布土器（2） …… (172)
第53表　上天神遺跡　竪穴住居一覧 …… (173)
第54表　上天神遺跡　掘立柱建物一覧 …… (174)

付図目次

付図１　１区遺構配置図　（１／100）
付図２　３区遺構配置図　（１／100）
付図３　４区遺構配置図　（１／100）
付図４　５区遺構配置図　（１／100）
付図５　６区遺構配置図１（１／100）
付図６　６区遺構配置図２（１／100）
付図７　８区遺構配置図　（１／100）
付図８　９区遺構配置図　（１／100）
付図９　10区遺構配置図１（１／100）
付図10　10区遺構配置図２（１／100）
付図11　３区ＳＤ02遺物出土状況（１／40）

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

高松平野を東西に貫く高松東道路（一般国道11号高松東バイパス）の建設は，昭和53年に都市計画決定された。このことにともなって，香川県教育委員会と建設省四国地方建設局との間で建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて，協議が行われた。また，香川県教育委員会では，建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地の範囲を確定する目的で，国庫補助事業（埋蔵文化財緊急調査事業）の一環として，遺跡詳細分布調査を計画し，昭和61年度からは当該地の確認調査を用地買収の進捗にあわせて順次実施してきた。確認調査を実施したのは，高松市上天神町から同市前田東町にいたる予定路線のうち，太田第２土地区画整理事業予定地をのぞく東西の総延長約6.2kmについてである。

第１次調査は，昭和61年10月29日と12月17日～同月25日までの期間で，分布調査とトレンチによる確認調査を高松市上天神町と同市三条町において実施し，上天神遺跡の範囲を確定した。

第２次調査は，昭和62年10月５日～10月31日の期間で，トレンチによる確認調査を中心として高松市林町と同市六条町において実施し，林・坊城遺跡と六条・上所遺跡の範囲を確定した。

上記の確認調査結果を受け，香川県教育委員会事務局文化行政課では建設省四国地方建設局と昭和63年度に実施予定の国道バイパス埋蔵文化財発掘調査事業に係る調査計画及び，予算について協議を重ねる一方，高松東道路や四国横断自動車道（高松～善通寺）などの大規模開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の円滑化を図ることなどを目的として，昭和62年11月１日付けで財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設立するとともに，調査担当職員などの増員を行い，昭和63年度からの調査体制の整備を行った。

昭和63年度から始まった高松東道路の本調査は，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施している。

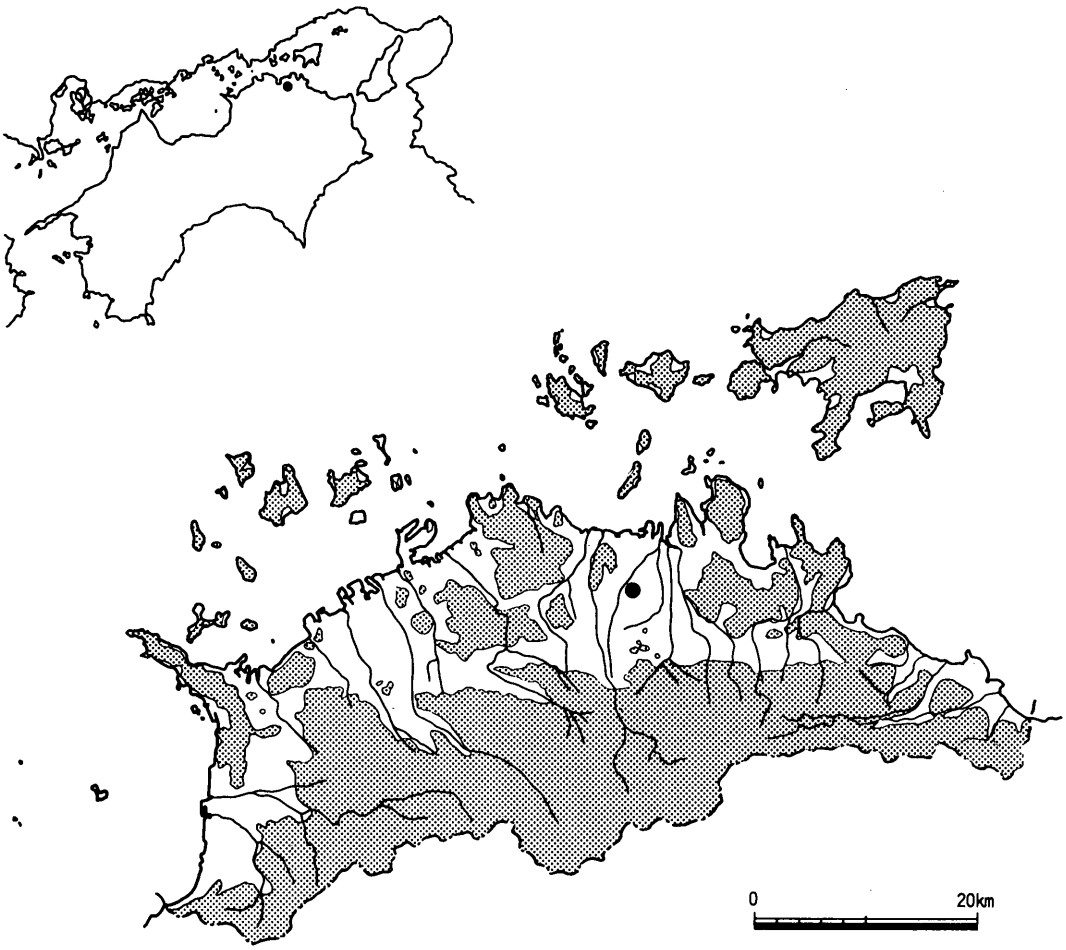
今回報告する上天神遺跡は，昭和61年10月29日，同年12月17日～12月25日の期間で実施した確認調査で調査対象面積を確定した遺跡である。この遺跡の本調査は，４次に分けて行っている。昭和62年度の調査は香川県教育委員会と建設省四国地方建設局が昭和62年11

月１日付けで締結した「埋蔵文化財調査委託契約書」により，昭和63年度の調査は，香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが昭和63年６月13日付けで締結した「埋蔵文化財調査委託契約書の一部を変更する契約」により，また平成３年度の調査は１月30日付けで，平成４年度の調査は４月１日付けでそれぞれ締結した「埋蔵文化財調査委託契約書」に基づき実施している。

第２節　調査の経過

（１）発掘調査の経過

昭和61年10月29日と12月17日～12月25日にかけての香川県教育委員会文化行政課による分布調査と試掘調査の結果をうけて，昭和62年11月１日から発掘調査を開始した。発掘調



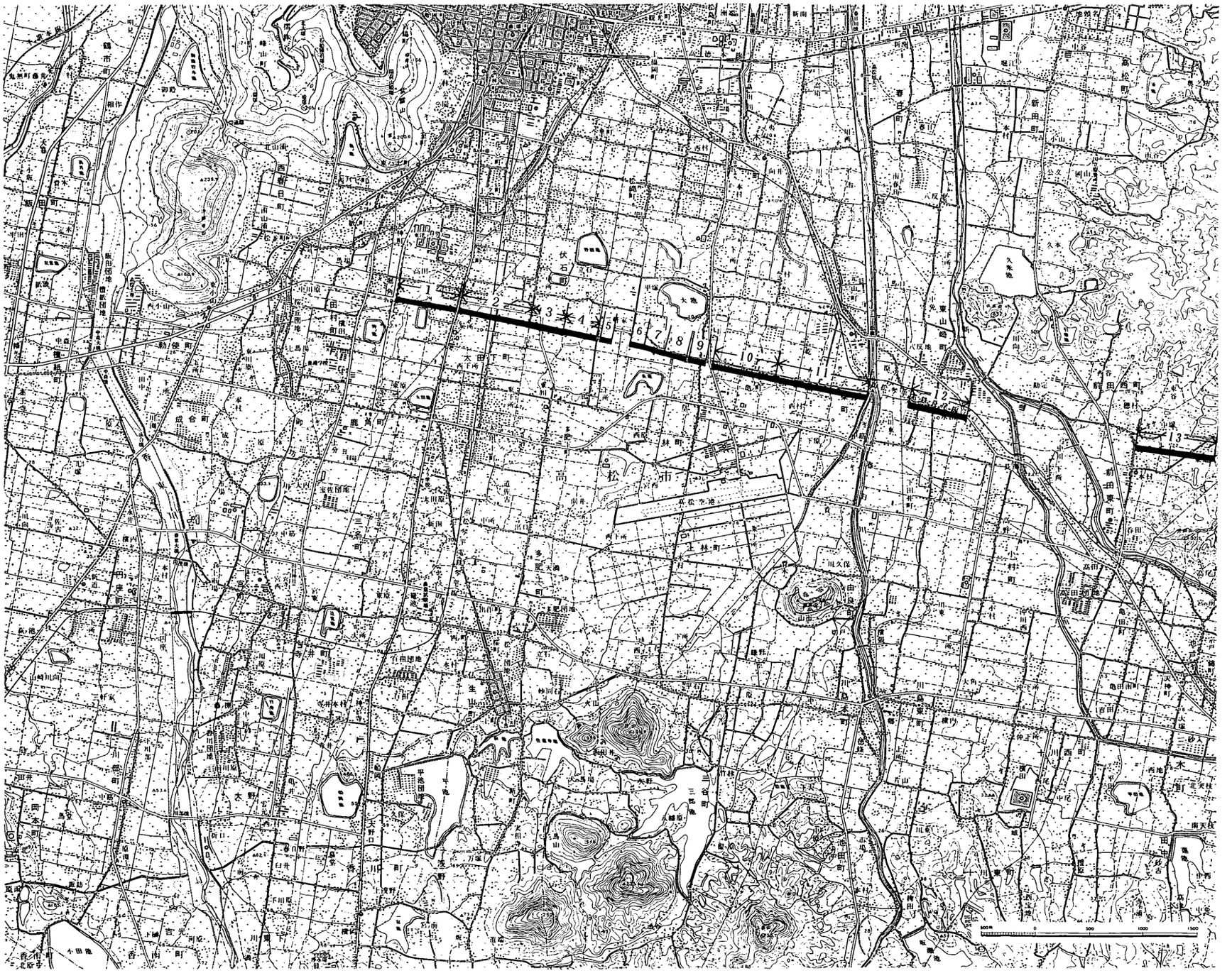
第１図　遺跡位置図

査面積は24,800㎡で，東西方向の国道建設予定地の600m分に及び，広大な調査面積と多くの遺構・遺物が検出されたため，さらに調査予定地の土地の買収の進捗状況などから，発掘調査は昭和62・63年度，平成３・４年度の４年間を要した。遺跡全体を主に現有道路，水路，河川，畦畔などによって１区～10区という大きな調査区に分けて調査を実施した。そして国道建設予定地のセンターライン上に20m間隔の杭を打設し調査の基準杭とした。この基準杭を中心に20m四方のグリッドを設定し，南から北へ向ってA，B，C，Dラインとし，さらに東西方向は西から東へ向って１から31まで設定した。グリッドの名称はそれぞれの南西コーナーの杭の名称を使用した。なお調査には航空測量を導入し図化の迅速化を計り，併せて国土座標と対応させた。

昭和62年度は香川県教育委員会文化行政課により，４区の5,000㎡を対象に調査を行なっ

遺跡名	調査対象面積	年度別調査面積						
		昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成２年度	平成３年度	平成４年度	平成５年度
上天神	24,800	5,000	12,600	0	0	1,900	5,300	0
太田下・須川	25,000	0	0	24,170	830	0	0	0
林・坊城	29,200	0	29,200	0	0	0	0	0
六条・上所	31,180	0	30,310	0	0	870	0	0
東山崎・水田	25,400	0	25,400	0	0	0	0	0
前田東・中村	34,300	0	16,170	9,320	2,485	4,705	0	1,620
合計（㎡）	169,880	5,000	113,680	33,490	3,315	7,475	5,300	1,620

第１表　高松東道路（上天神～前田東）調査遺跡一覧



1．上天神遺跡　2．太田下・須川遺跡　3．蛙股遺跡　4．居石遺跡　5．井出東Ⅱ遺跡
6．井出東Ⅰ遺跡　7．谷・長池Ⅱ遺跡　8．谷・長池遺跡　9．谷・松ノ木遺跡　10．林・坊城遺跡
11．六条・上所遺跡　12．東山崎・水田遺跡　13．前田東・中村遺跡

第２図　高松東道路埋蔵文化財包蔵地（高松市内）

た。また3区において四国電力が高圧線の鉄塔を移設するために，その対象部分213㎡の調査も併せて行った。調査を行った4区は三条池の北側部分で微高地中央部分に当たり，弥生時代後期初頭を中心とする遺構・遺物が多量に検出された。遺構では竪穴住居や掘立柱建物を検出し，集落の中心部分と思われる。そのため2月に現地説明会を開催したところ，地元の方々を中心とする多数の市民の参加があった。

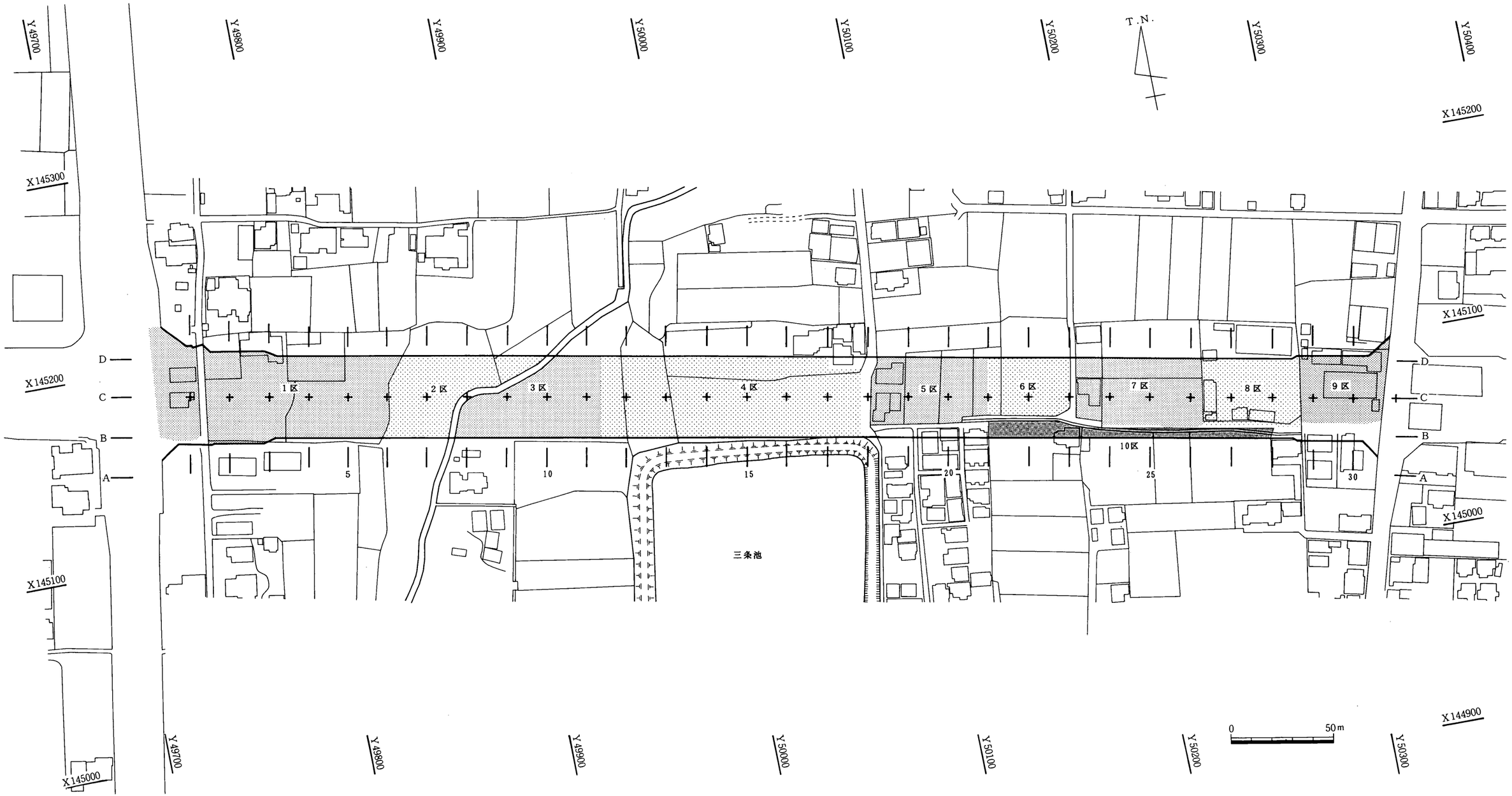
昭和63年度からは香川県教育委員会が調査主体ではあるが，高松東道路や四国横断自動車道（高松～善通寺）などの大規模工事に伴う埋蔵文化財調査の円滑化を図るために設立された，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査を担当した。

昭和63年度は3・5～10区の12,600㎡を対象に，6月13日～11月30日の期間で調査を行なった。この調査では，大規模調査に対応するために工事請負方式が導入された。しかし調査工程は1ヵ月あたり2,290㎡とあわただしいものであった。遺構・遺物は西へ向うほど疎になって行き，3区と5区で前年度確認された微高地の落ちが確認され，上天神遺跡の東西の集落の範囲が確認された。また3区では弥生時代後期の遺物が多量に出土したことと，香川県ではじめて井堰を検出するなど多大な成果を納めた。

平成3年度は直営方式により調査を行った。調査は平成4年1月30日から開始し，2区の一部の1,900㎡の調査を行い，平成4年3月19日に終了した。調査区は3区の西に位置する古川の流れる低地帯と，その西側の微高地部分に当たるが，遺構・遺物とも少なく弥生時代前期～後期の溝を検出したにとどまった。

平成4年度も直営方式により調査を行った。調査は平成4年4月3日から開始し，1区と2区の5,300㎡の調査を行い，平成4年7月31日に終了した。調査では，弥生時代前期～後期の旧河道・溝，弥生時代後期の掘立柱建物，中・近世の掘立柱建物を検出したが，全体的に削平を受けており，遺構・遺物は少なかった。

以上足掛け4年に渡り発掘調査を行なった。その結果，三条池の北側の3区～5区にかけて微高地が広がり，その微高地上に弥生時代後期初頭を中心とする集落が展開していることが判明した。香川県では弥生時代後期初頭の時期の遺跡はまだ例が少なく，さらに高松平野において最初に集落遺跡を本格的に発掘調査を行なった遺跡としても特筆されるべき遺跡である。遺構・遺物とも豊富であり，多大な成果を得た。



第３図　上天神遺跡調査区割図（１／2,000）

各年度ごとの発掘調査の調査体制は以下のとおりである。

昭和62年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	廣瀬和孝
	課長補佐	高木　尚
	副主幹	小原克己
総務	係長	宮谷昌之
	主任主事	近藤紀文
	主事	水本久美子
埋蔵文化財係長		廣瀬常雄
	技師	大久保徹也
	嘱託	植田　広　石田美和　山本英之
		山元敏裕　秋山成人　和田素子
	調査補助員	田村久雄

昭和63年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	廣瀬和孝
	課長補佐	高木　尚
	副主幹	野網朝二郎（6.1～）
総務	係長	宮谷昌之　（～5.31）
主事	横田秀幸	（6.1～）
	主事	水本久美子
埋蔵文化財係長		大山真充

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	田丸秀明
	次長	小原克己
総務	主査（事務）	加藤正司
	主査（土木）	山地　修（6.1～）
主任主事	近藤紀文	
調査	参事	前田輝夫
	係長	廣瀬常雄
	技師	中野昇一
	技師	森　格也
	調査技術員	矢野　徹

平成３年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	中村　仁
主幹		菅原良弘
	課長補佐	小原克己
総務	係長	宮内憲生
主任主事		横田秀幸（～5.31）
主事		櫻木新士（6.1～）
主事		石川恵三子
埋蔵文化財係長		藤好史郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	松本豊胤
	次長	安藤道雄
総務	係長（事務）	加藤正司（～5.31）
	係長（事務）	土井茂樹（6.1～）
	主査（土木）	山地　修（～5.31）
	係長（土木）	今田　修（6.1～）
	主任主事	黒田晃郎
調査	参事	篠丸　博
	係長	大山真充
	主任技師	土佐修治
	主任技師	大久保徹也
	調査技術員	満岡博隆
	調査補助員	田村久雄

平成４年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	中村　仁
	主幹	菅原良弘
	課長補佐	小原克己
総務	係長	宮内憲生（～5.31）
	係長	源田和幸（6.1～）
主事		櫻木新士
主事		石川恵三子
埋蔵文化財係長		藤好史郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	松本豊胤
	次長	市原敏則
総務	係長（事務）	土井茂樹
	係長（土木）	今田　修
	主任主事	黒田晃郎（～5.31）
	主任主事	大西健司（6.1～）
調査	参事	糸目末夫
	文化財専門員	西村尋文
	文化財専門員	高月　計
	主任技師	大久保徹也
	調査技術員	高橋佳緒里
	調査補助員	田村久雄

（2）整理作業の経過

整理作業は調査員の大久保と森が平成6年度に担当した。整理は調査員がそれぞれ担当した調査区について執筆・編集を行い，全体編集を大久保・森で行った。遺物は個体数や器種構成を把握する目的でなるべく小さな破片まで図化を試みた。しかし時間的制約のためすべてを図化するには到らなかった。整理作業は以下の工程のように実施し，報告書刊行業務は平成7年度に行った。

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
基礎整理（遺物注記等）	―											
遺物接合・復元		―	―									
遺物実測			―	―	―	―	―	―				
遺構・遺物レイアウト				―	―	―	―	―	―			
遺構・遺物トレース							―	―	―	―		
遺物写真撮影						―		―				
遺物観察表						―	―	―	―			
原稿執筆					―	―	―	―	―	―	―	
台帳作成											―	―
編集											―	―

第2表　上天神遺跡整理作業工程表

整理作業に係る体制は以下のとおりである。

平成６年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括	課長	高木　尚
	主幹	小原克己
	課長補佐	高木一義
総務	係長	源田和幸
	主査	星加宏明
	主事	高倉秀子
埋蔵文化財係長		藤好史郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	松本豊胤
	次長	真鍋隆幸
	主任文化財専門員	渡部明夫
総務	係長	前田和也
	主査	大西健司
調査	係長	廣瀬常雄
	文化財専門員	大久保徹也
	主任技師	森　格也
整理補助員	山下登志子	東條俊子
	石川ゆかり	西山佳代子
	白玖昇子	
整理作業員	中田裕子	石原まり子
	荒木美千子	陶川真由美
	藤川裕子	前田好美
	吉田育代	新出容子
	太田潤子	磯崎泰子
	佐々木博子	

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

１．讃岐地方の地勢

四国島は本州西部　中国地方の南に位置し、西を九州島，東を近畿地方の紀伊半島に挟まれた東西に長い分銅形を呈する。総面積は約19,000㎢である。

豊後水道，瀬戸内海（周防灘，燧灘，播磨灘，鳴門海峡）紀伊水道によって列島西南部の諸地方から隔てられるが，その間隔は狭く四国島を外界より遮断するよりもかえって情報・物資の伝達路として機能してきた。またこのことは四国島内の山が険しく主要平野が分断されていること共相俟って，四国島に共通する独自の文化を発達させず，また単一の政治的単位を生み出すことを困難としてきた。むしろ四国島内諸地方は各々対面する地方との密接な関係を維持し，独自の政治・経済圏を形成する傾向が通時代的に強いといえよう。

香川県（旧讃岐国）は，その分銅形の北東部にあたる小突出部分，東西92㎞，南北最大61㎞の狭い帯状部分を占め，面積約 1,800k㎡と中四国・九州地方で最も狭い。

瀬戸内海に面した三方は，西北面に燧灘，北面に備讃瀬戸，東北面に播磨灘を介して，それぞれ広島県（旧備後国），岡山県（旧備前・備中国），兵庫県（旧播磨国）に対する。このうち備讃瀬戸海域では塩飽諸島・直島群島・小豆島等の小島嶼が密集する。一方南方は標高500～1000ｍの山地によって，徳島県（旧阿波国）の吉野川流域等と隔てられるが，中小河川が刻んだ小河谷沿いに通じる10条余の山道によって彼我の連絡は保たれている。

さて讃岐地方は，上記したようにきわめて狭い範囲ではあるが，南端で東西に走る讃岐山地から派生して瀬戸内海に突出する幾多の山地・丘陵群によって分断され，それぞれ相対的に完結した小地域が並列している。西部の財田川・柞田川流域の観音寺平野，高瀬川流域の三野平野，中部の弘田川・金倉川・土器川・大束川流域の丸亀平野，綾川流域の綾北平野・羽床盆地，本津川・香東川・春日川・新川流域の高松平野，および東部の湊川等小河川が形成する臨海小平野群とその背後，鴨部川・津田川流域　長尾平野の各地域である。これら小地域の多くは隣接諸地域を介さずに，讃岐外部の地方と交渉しうる位置関係

にあることは重要である。

2．高松平野

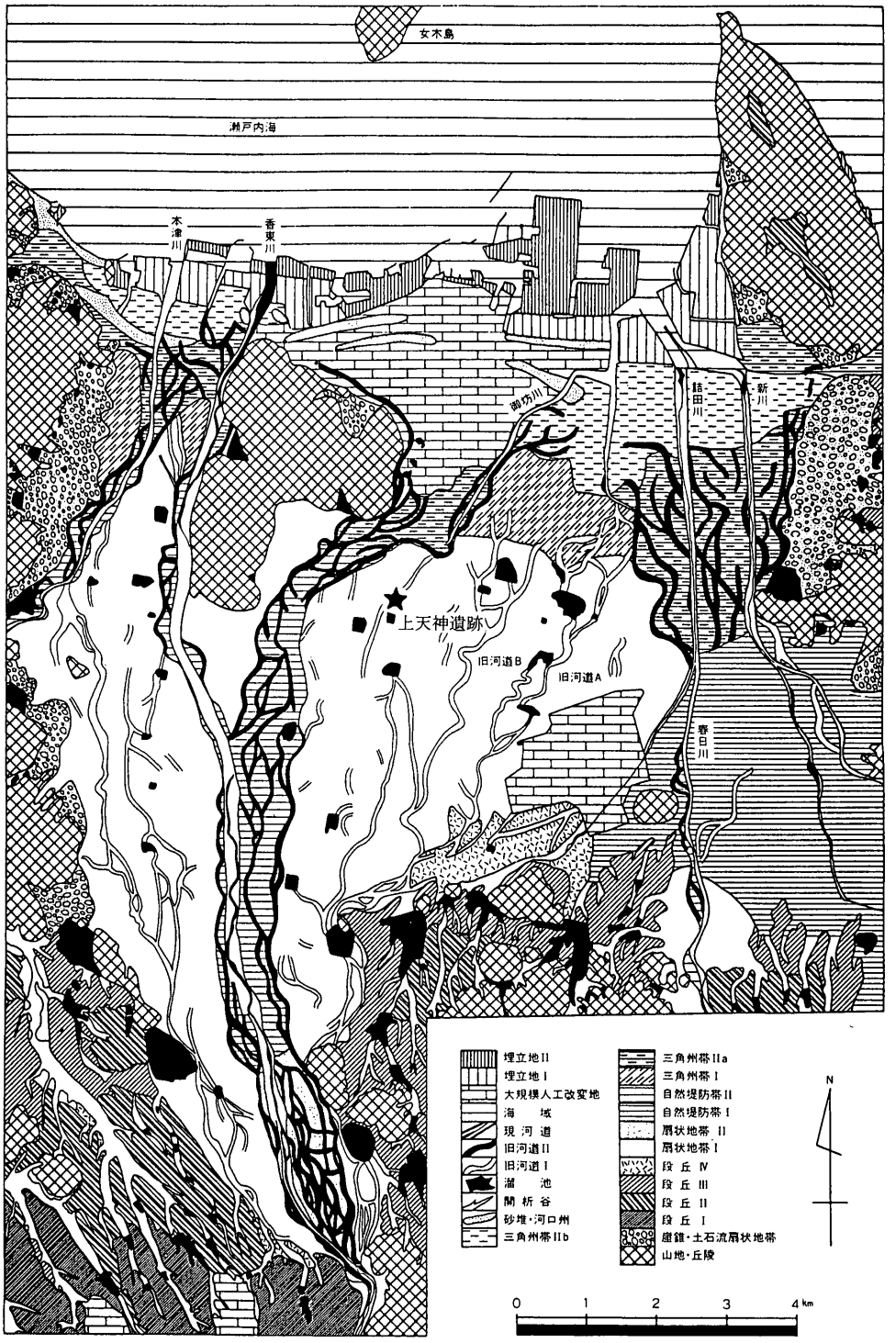
西方は五色台・堂山山地によって綾川流域から遮断され，東方は瀬戸内海に大きく突出した屋島とそれに続く立石山・雲附山山地が連なる。南方には阿讃国境を画する，竜王山，大滝山を主峰とする標高800～1000mの讃岐山脈及びその前面の前山，八丁山，高仙山山塊が二重にそびえる。さらに前山前面には枌所丘陵，千疋丘陵を経て平野東南部に香南台地が張り出す。また香東川上流の河谷を挟んだ東方の，八丁山，高仙山前面には上佐山山地・植田丘陵が伸び，それらの裾部には川東，仏生山，川島の各台地がとりつき，平野南縁を画する。

さらに平野北西部の石清尾山山塊や南東部の由良山等の独立丘が平野の景観にアクセントを添えている。

高松平野の主要河川としては本津川，香東川，春日川，新川・吉田川の各河川がある。平野の形成はこれら河川の堆積作用によるもので，このうち香東川は，延長約33km，流域面積約120km²と最も規模が大きい。大滝山・竜王山等と，八丁山・高仙山等に挟まれた阿讃山地北面，三木町津柳を水源として塩江町安原あたりまで西下した後，大きく湾曲して平野中央部に向かって北流する。本川流域では中流域の香川町川東の西部（標高96m）を頂部とする扇状地形が発達して平野中央部に大きく突出し，その先端は石清尾山南麓から，春日川に近い木太町南部にまで達する。また今でこそ石清尾山西方にその流路は固定されているが，周知のごとく近世初期には高松市成合付近から石清尾山東南麓を巡って現在の御坊川に至る流路（以下，旧本流と称する。）が主であったと推定され，先述の扇状地面にはこれ以前の主支流の痕跡が多く刻まれている。

本津川は千疋丘陵に発して堂山・鷲ノ山山地間を北流して五色台山地と堂山山地間の隘路を抜けた高松市御厩町で，香南台地の水流を集めて堂山山地東麓を北流する流れと合わさり五色台山地東側を香東川と併走して，平野西縁部に狭隘な自然堤防帯・三角州帯を形成する。

春日川は上佐山山地・植田丘陵など八丁山，高仙山北方に発して平野東部を北流する。また川島台地に発する吉田川は，東南方から流下する新川と三木町池戸で合流し，平野東縁の立石山地に沿って春日川と並流する。この流域でも大規模な扇状地形の発達は認められず，平野東縁部の中・下流域に狭隘な自然堤防帯・三角州帯を形成する。



第4図　高松平野地形分類図　（注(1)文献から加筆引用）

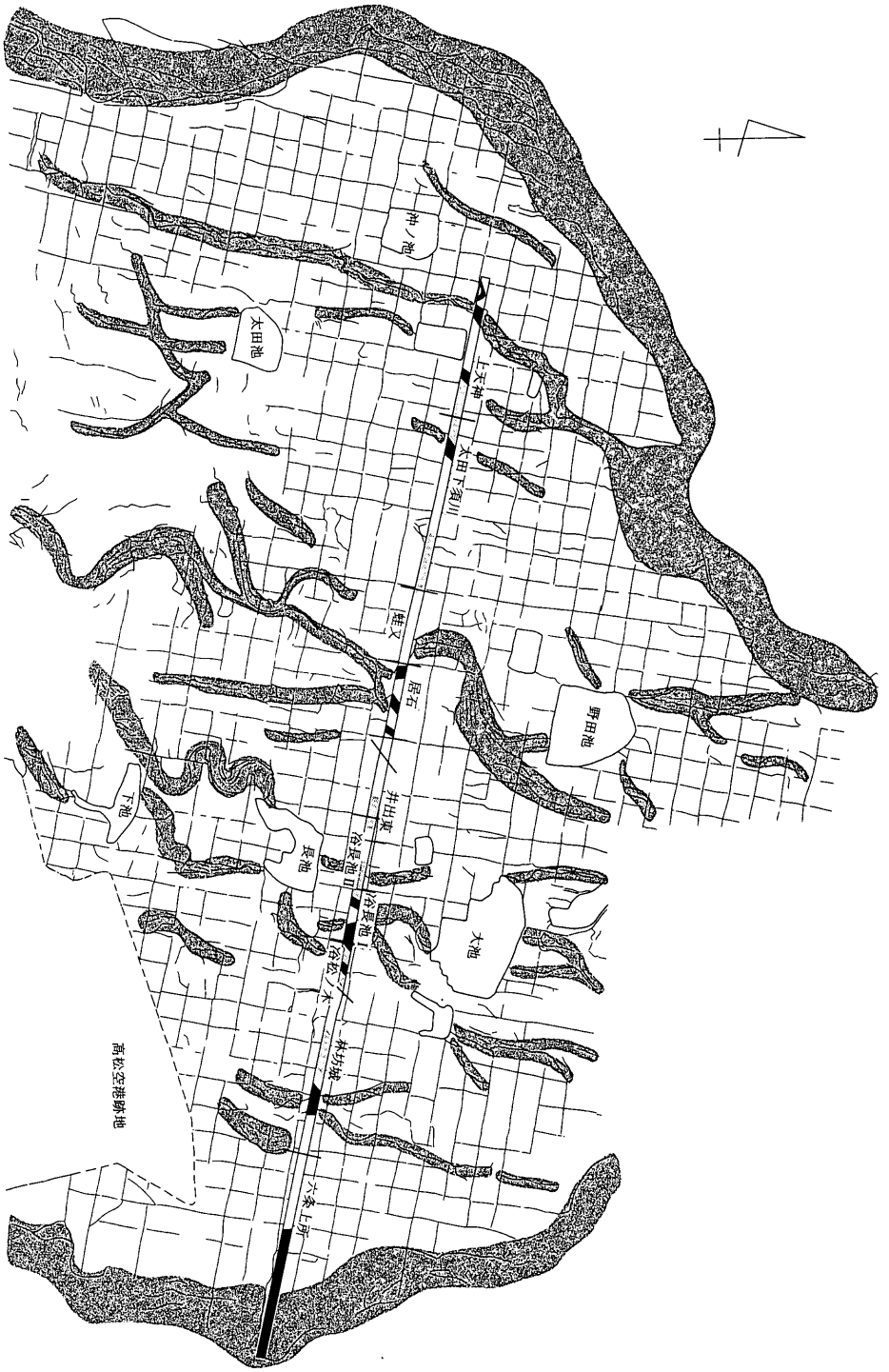
3．高松平野の中の上天神遺跡

高松東道路予定地の国道11号上天神交差点～旧国道193号間で確認された埋蔵文化財包蔵地を一括して上天神遺跡と称している。したがって本遺跡は高松市上天神町・三条町・太田下町にまたがって所在する。調査範囲中央部の南側に三条池が位置し，中程やや西寄りの部分を御坊川支流の小河川「古川」が貫く。現地表高は調査区中程で海抜16m前後を測り，わずかながら東に向かって低くなる。

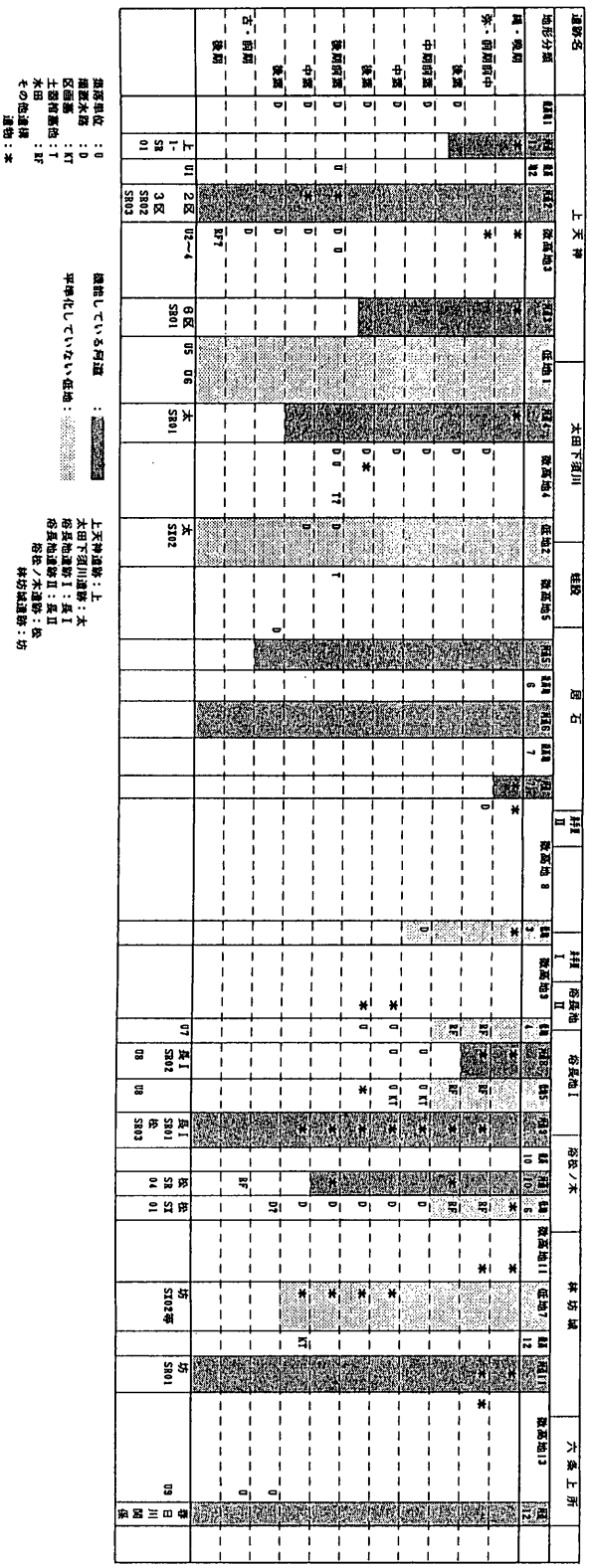
上天神遺跡は平野中央部，上記した香東川扇状地の北部に位置する。現海岸線とは直線距離で約5km隔たるが，弥生時代前後にはせいぜい2km内外の距離と推定される。また旧香東川流路の形成する低地部を挟んで石清尾山山塊の稲荷山・室山は北西約1.5kmにあり，同山塊南端の浄願寺山は2km強西方にある。平野東縁の立石山山塊までは直線距離で約6kmを，平野中央南部の上佐山山塊まで4.5kmを測る。なお主要なサヌカイト産出地である坂出市金山，および片岩分布地帯である吉野川流域まで，直線距離で各々15km，30kmとなる。

ここでより詳細に上天神遺跡の所在する香東川下流域の状況を見ておくことにする。当該地域については弘福寺領田図比定地の調査に伴い高橋学氏による詳細な地理的環境の復元[(1)]が示されている。それによれば前述の香東川の扇状地には多くの旧流路の痕跡が刻まれており，現在この部分に所在する溜池の少なからぬ部分がその凹地を利用したものと推定されている。上天神遺跡の所在する扇状地東半部，すなわち近世初期の香東川本流の東岸部に限っても，主要な旧流路だけで4条以上が確認できる。西から野田池・三条池間を通って現御坊川に続く流路，香川町浅野付近で分岐して船岡池を介する流路のうち，北流して太田池に続く流路，その東方で蓮池，野田池に連なる流路，更に下池，長池，大池を貫く流路等である。現状ではそれらのかなりの部分の埋積が進行して微妙な起伏を現地表にとどめるに過ぎないが，かつてはこれら流路群によって明瞭に複数の地形単位に分断されていた可能性を示している。そして上天神遺跡はこれら旧流の一つの東西にまたがって広がり，香東川旧本流に近接した遺跡の一つである。

更にこうした関係を，一連の高松東道路関係調査の成果から確認しておく。第5図はおそらく地表の微妙な起伏を反映するであろう水路・里道の配置図に高松東道路関係の調査成果を合成したもので，個別調査の成果から作成した第3表によってこれを補足する。高松東道路関係の調査は，春日川に至る香東川旧本流東岸部分の大部分を貫いており，これによってこの部分の東西方向での地形分布の大要とその変遷を知ることができる。確認さ



第5図　高松東道路調査区域の地形分類



第３表　高松東道路調査区域の遺跡動向

れた旧河道・低地の埋没過程は一様ではないが，弥生時代後期前葉に限れば，規模・形状及び埋没過程は異なるが少なくとも地表面に刻まれた明確な凹地帯である９単位の河道・低地によって分断された，10本の微高地が東西に並んでいる。これらの微高地の規模・形状の詳細を復元することは困難であるが，当該時期にあってはたとえば潅漑設備などの整備に当たってこうした地形的な単位が重要な意味を持ったであろうことは想像に難くない。

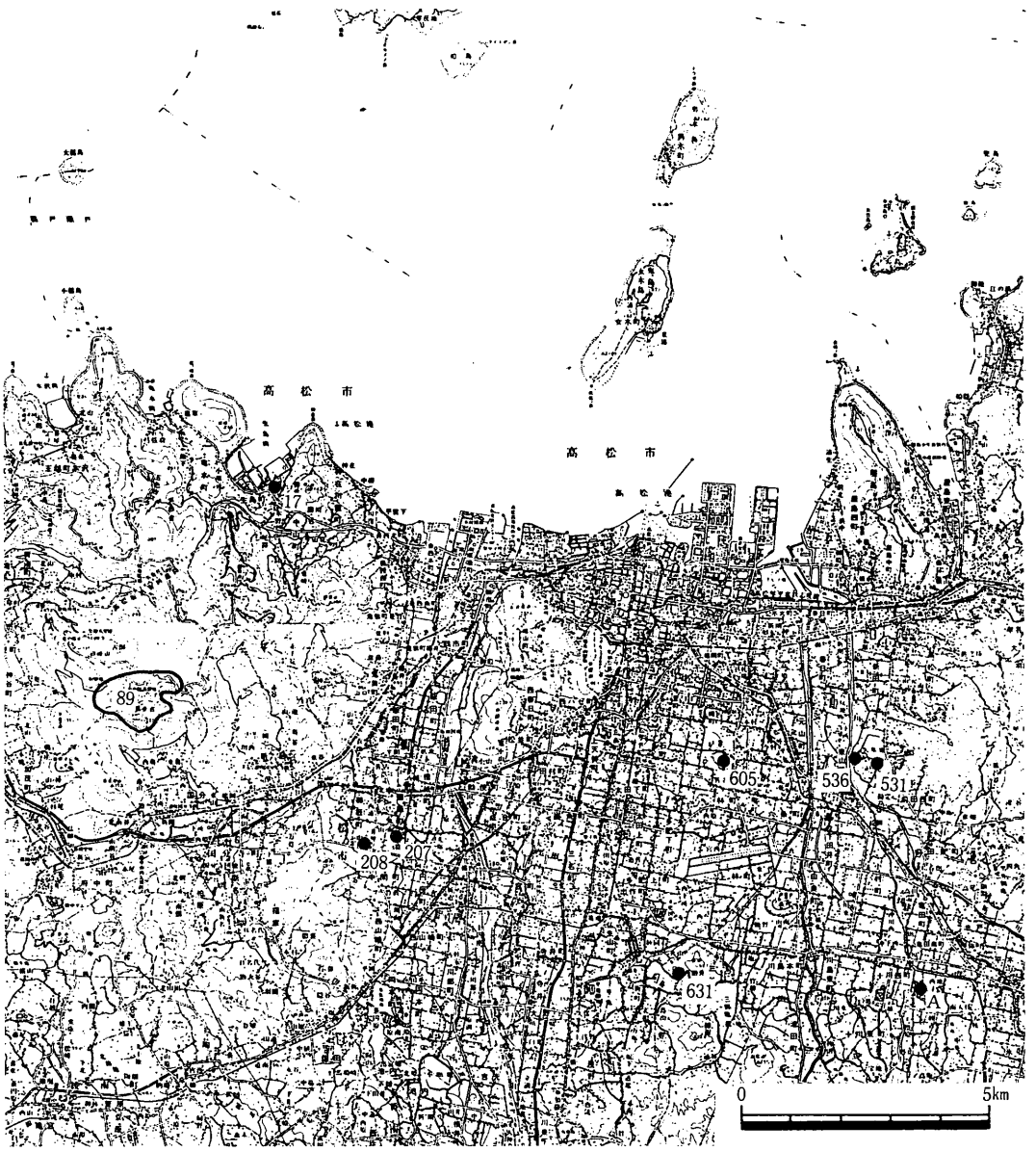
さて第３表に即して述べれば，上天神遺跡は微高地１～３に展開し，河道３・４及び低地１を挟んで東方の微高地４に太田下・須川遺跡[2]が位置する。更に東方へは微高地５の蛙股遺跡[3]，狭隘な微高地６・７を中心に居石遺跡[4]が，微高地８西部に井手東Ⅱ遺跡[5]がある。前述の下池・長池・大池を貫く旧流路周辺には浴・長池Ⅰ・Ⅱ遺跡[6][7]，浴・松ノ木遺跡[8]が連続する。

春日川に近い微高地11～13には林・坊城遺跡[9]，六条・上所遺跡[10]がある。

第2節　歴史的環境

ここでは考古資料に依拠し，古代以前の高松平野地域の様相を簡単に見ておく。しかし現段階では時代別総括ではなく，むしろ課題の若干例を提示するものにとどまる。

1．旧石器時代～縄文時代草創期



第6図　旧石器～縄文時代草創期遺跡分布図

西方に良好なサヌカイト原産地，国分台遺跡群を控えた本地域では，現在８遺跡が知られている。その多くは平野周縁部の低丘陵部で確認されておりまだ，遺跡内容の詳細を知りうる事例は多くない。その中にあって本津川流域の六目山北麓に位置する中間・西井坪遺跡[11]では100×60m以上の範囲に横長剝片利用の小形ナイフあるいは角錐状石器を主体とする良好な石器ブロック複数が存在していた。またその一部では石器群下層にAT層と推定される火山灰層を確認している。

平野中央部に大きく突出した扇状地面においても，正箱遺跡[12]，大池遺跡[13]のような事例が存在する。平野中央部の井手東遺跡で，かなり浅い位置に赤ホヤ火山灰層を確認したように平野中央部に向かって広く更新世段丘面が露出ないしは極めて浅い埋没にとどまっていることが確認されつつある。今後，当該時期の遺跡数は大きく増大するであろう。

	遺跡名	所在地	備考
00017	西畠遺跡	高松市生島町	
00207	正箱遺跡	高松市檀紙町	ナイフ
00208	中間西井坪遺跡	高松市中間町西井坪	角錐・ナイフ・AT層
00531	久米池南遺跡	高松市東山崎町久米山	ナイフ
00536	諏訪神社遺跡	高松市東山崎町久米山	ナイフ
00605	大池遺跡	高松市木太町	有舌尖頭器
00631	雨山南遺跡	高松市三谷町	ナイフ
A	十川東平田遺跡	高松市十川東町	有舌尖頭器・ナイフ

第４表　旧石器～縄文時代草創期遺跡一覧

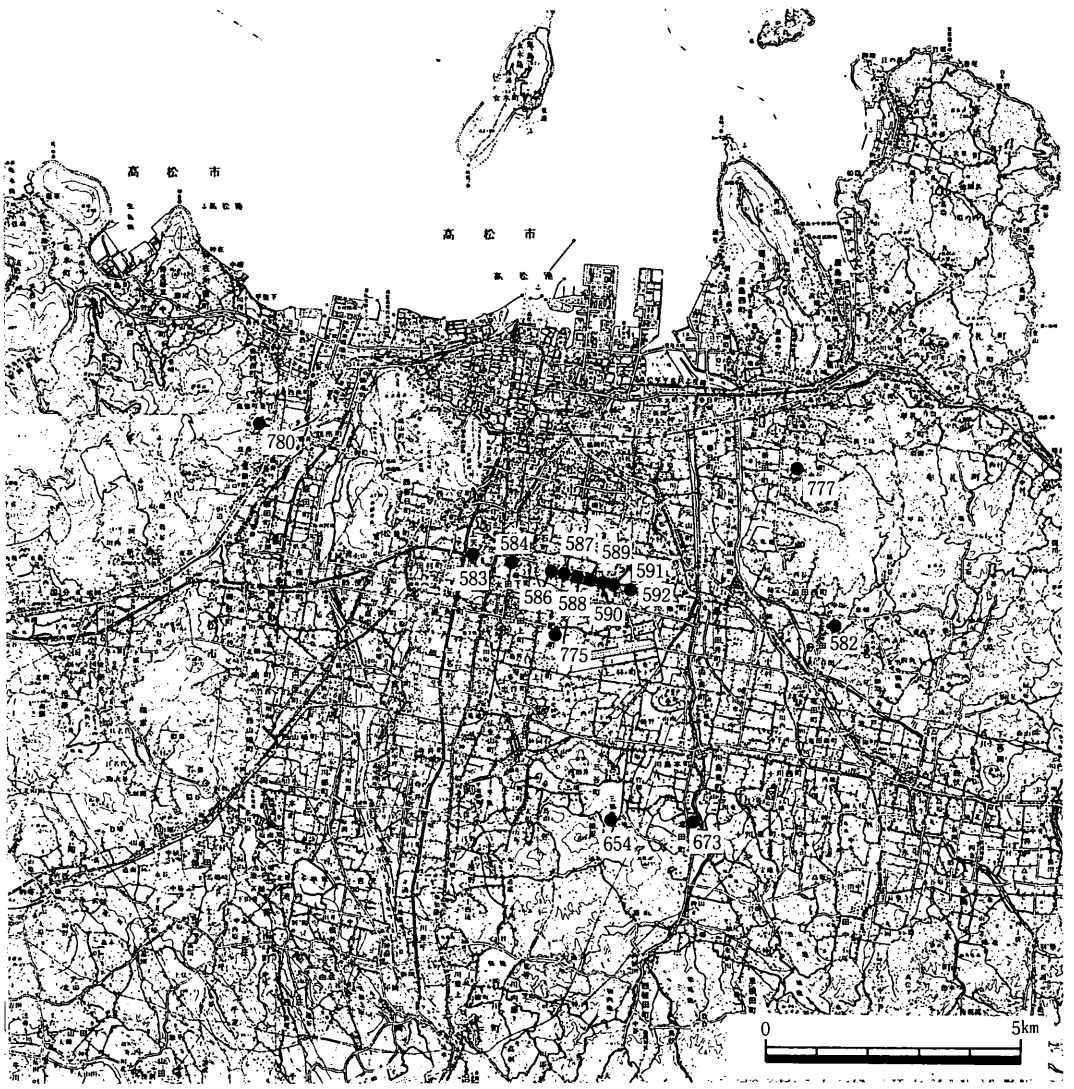
２．縄文時代（早期～）

現状では早期・中期の遺跡は全く知られていない。前期２例，後期５例はいずれも山麓部の包含層資料で遺跡の性格不明である。晩期12例は，居石遺跡を除き後半期の突帯文土器の段階である。縄文時代の全過程を通じて臨海部遺跡が乏しいことは，本地域の特色と見なして良いかもしれない。

また晩期突帯文段階の遺跡はそれまでの立地と異なり，平野中央部に多数分布し弥生前期以降の遺跡と重複する事例が多い。その技術水準・系統については今後とも，より詳細な検証過程を必要とするであろうが，林・坊城遺跡に見るように縄文時代晩期後半段階に重要な生産部門としての農耕の積極的採用は否定しがたい。またこの段階での遺跡立地の変化は，自然環境面での変化のみならず，そのことに密接に関係するであろうことも容易に想定できる。

さて遺跡立地の点で縄文時代晩期から次期への継続性は認められるが，林・坊城遺跡の

調査成果が端的に示した，突帯文系土器群といわゆる遠賀川系土器群との関係および両者の装備に見られる一定の差違についてはまだ十分な整理がついているとは言いがたい。原則的には前者から後者への移行，あるいは一定期間の両者の共存，いずれであるにせよその具体的な過程の分析は次期社会を考察する上で重要な課題であり，今後も増加を続けるであろう関係資料をふまえて解決されるであろう。



第7図　縄文時代（除く草創期）遺跡分布図

	遺跡名	所在地	備考
00582	前田東中村遺跡	高松市前田東町中村	後期・晩期突帯文
00583	上天神遺跡	高松市上天神町	晩期突帯文
00584	太田下須川遺跡	高松市太田下町須川	晩期突帯文
00586	居石遺跡	高松市伏石町居石	晩期前半
00587	井出東Ⅱ遺跡	高松市伏石町井出東	晩期突帯文
00588	井出東Ⅰ遺跡	高松市伏石町井出東	晩期突帯文
00589	浴長池Ⅱ遺跡	高松市林町長池	晩期突帯文
00590	浴長池Ⅰ遺跡	高松市林町長池	晩期突帯文
00591	浴松ノ木遺跡	高松市林町松ノ木	晩期突帯文
00592	林坊城遺跡	高松市林町坊城	晩期突帯文
00654	三谷三郎池Ｃ遺跡	高松市三谷町	後期
00673	光専寺山遺跡	高松市池田町市場	後期？晩期突帯文
00748	下司遺跡	高松市東植田町	前期
00775	多肥松林遺跡	高松市多肥上町	晩期突帯文
00777	小山南谷遺跡	高松市新田町小山	前期？後期
00780	佐料遺跡	高松市鬼無町佐料	後期

第５表　縄文時代遺跡一覧　（除く草創期）

３．弥生時代

（１）集落

単独の弥生墓や青銅製祭器出土地点を除き，集落遺跡の可能の高い資料は現状で前期16，中期20，後期28を数える。しかし近年の大規模調査によって新たに確認した遺跡が多く，従来，相対的に少なかった中期前・中葉の遺跡もこの中に多く含まれ，調査が決して平野部全域で同じ精度で進展しているとは言いがたい状況では，この遺跡数がどの程度当該時期の実態を示すかについては確定しがたい。これによって平野各小地域間の差違を評価するには慎重な検討を要する。

集落構成については，浴・長池Ⅰ・Ⅱ遺跡のような数棟以下の竪穴住居を中心とする小規模な単位と，空港跡地遺跡に見るような多数の住居が密集する相対的に大規模な単位の差が基本的にはありそうである。しかし，幸か不幸か大規模開発に伴う調査とはいえ集落単位の全体像を直接的に把握しうることは，調査の性質上，原則的に期待できないので，集落構成の差違はむしろ，急激に増大しつつある構成要素－竪穴住居，建物など－の個別的な検討を踏まえて進められるであろう。

環濠集落は，前期の天満宮西遺跡[14]で唯一想定されているだけで，中期以降の例は全く知られていない。おそらく讃岐諸地域同様に中期以降の環濠集落の衰退は高松平野においても認められる。

（2）生産

弥生時代以降の基幹的な生産部門である農業生産については，水田遺構の確認や木製品を中心とする農具の検出例の増加によってその技術的水準の実態と変遷が具体的に復元されうる段階に達している。また後章で報告する大形水路や空港跡地遺跡で明らかにされた「出水」遺構[15]の存在など，潅漑技術に関する知見の増加も重要である。特に高松平野の形成過程の復元について大きな成果を挙げつつある地理学的検討を踏まえた耕地開発過程の詳細な考察が今後期待される。

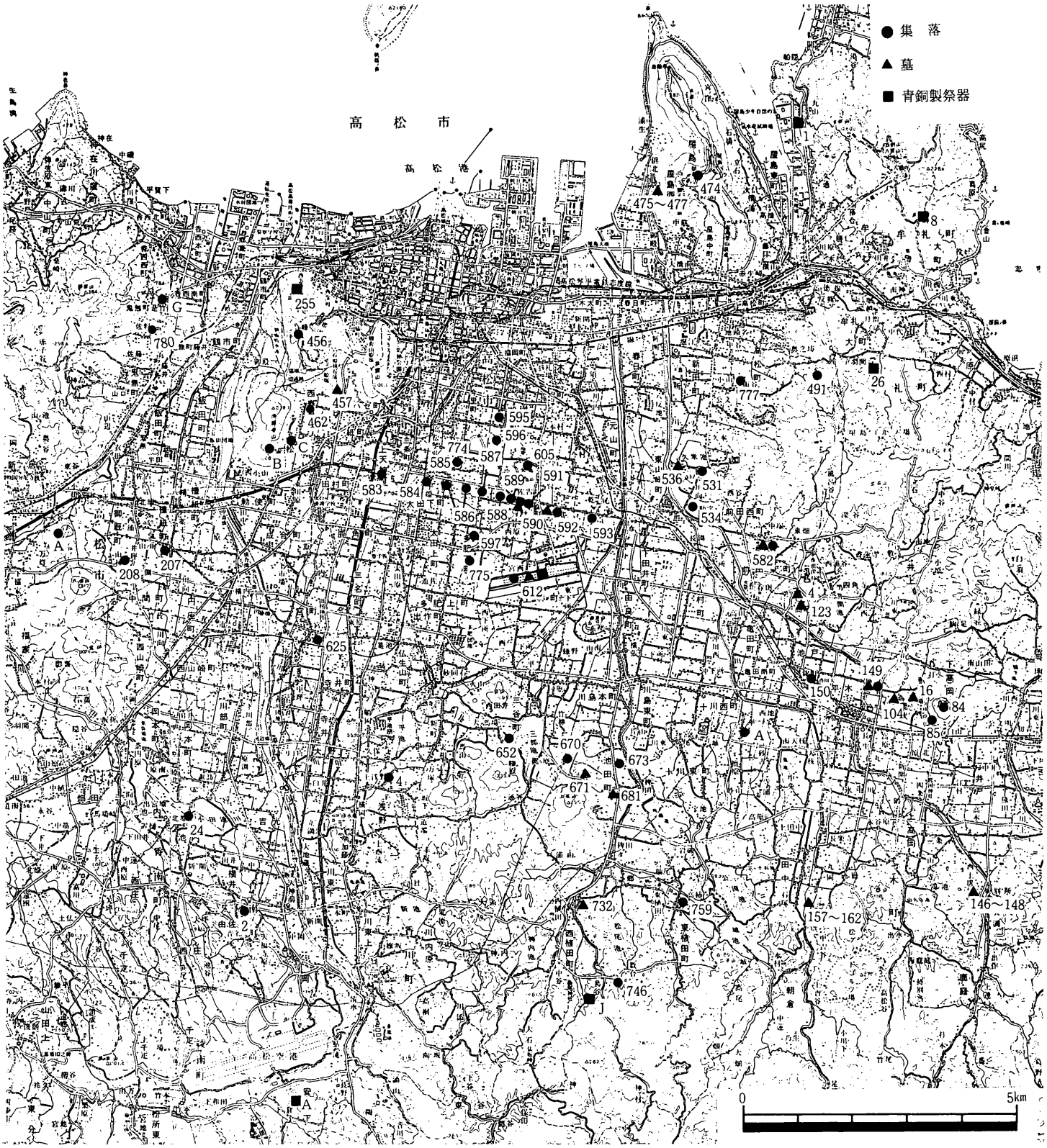
その他の生産諸部門の考察についても，基礎資料は増加しつつあり，単に各部門の技術的問題に限定されることなく，物資・技術の生産及び流通を規定する集団関係の問題に踏み込むべき段階に近づいている。石器生産および石材・製品の流通の問題もこの一つである。近年，資料が増加しつつある木製品についても同様であろう。また讃岐地方本土部でいち早く採用された土器製塩が，初期の段階では高松平野東縁部に著しく遍在する現象は当該時期の集団間分業の性質を考察する上で看過できない課題であろう。

（3）弥生墓制の動向

この地域における弥生墓制の全般的な特徴として，まず第一に居住域との原則的な乖離を挙げることができる。このことは積極的には三谷通谷遺跡[16]や空港跡地遺跡[17]の墓群に見られる当該時期の居住域から隔絶された墓域の設定から，消極的にはこれまで確認された集落遺跡における墓域の非共伴から想定できる。

第二に区画墓のあり方に注意を向ける必要がある。浴・長池Ⅰ遺跡における中期中葉段階に遡りうる「方形周溝墓」が，現状では高松平野地域の最も遡及しうる区画墓の事例であるが，丸亀平野における状況[18]などから区画墓の出現は更に遡りうる可能性が高いといえよう。その形態には方形基調，円形基調が共に認められ，出現以降少なくとも弥生時代末まで両者が共存する。今のところこうした区画墓は単独で存在するか，せいぜい小規模な群集形態をとるにとどまり，近畿地方などの様相と異なり，かなり限定的な存在であることが予想できる。また林坊城遺跡の事例では，早くも後期前半に単純な方形ないしは円形形態にとどまらず突出部を付した区画墓形態が出現する可能性がある。後の前方後円墳あるいは前方後円形墳墓との関係で注意しなければならない。

第三に，上記したように本地方では，区画墓が限定的な存在だとすれば，大多数の集団成員の墓制が問題となる。高松平野地域に限らず，弥生時代の群集形態をとる木棺墓・土



第8図　弥生時代遺跡分布図

	遺跡名	所在地	時期	備考
00001	丸山遺跡	庵治町丸山		中細形銅矛出土地
00004	浅野八幡遺跡	香川町浅野		
A	下倉遺跡	香川町安原下		平形銅剣出土地
00002	冠桜八幡遺跡	香南町由佐		
00024	小田池遺跡	香南町吉光		
00010	鷲ヶ峰貝塚	高松市女木町牛ｶｹ	中	高地性集落
00013	宮の上遺跡	高松市女木町宮の上		
00207	正箱遺跡	高松市檀紙町	後	集落
00208	中間西井坪遺跡	高松市中間町西井坪	後	AT層・集落・埴輪生産
00255	下の山遺跡	高松市西浜田下の山		中広形銅矛出土地
00300-304	鶴尾神社古墳群	高松市西春日町北山浦	後	４号前方後円墳（弥生墓？）
00456	摺鉢谷遺跡	高松市峰山町	中	高地性集落
00457	奥の池遺跡	高松市室新町奥の池	中	
00462	南山浦遺跡	高松市西春日町	中	
00474	屋島境内遺跡	高松市屋島西町	中	高地性集落
00475-477	浜北古墳群	高松市屋島西町浜北	後	２号、弥生墓（前方後円形）の可能性
00491	大空遺跡	高松市高松町大空すべり山	後	高地性集落
00531	久米池南遺跡	高松市東山崎町久米山	中	
00534	川添ポンプ場遺跡	高松市東山崎町	後	
00536	諏訪神社遺跡	高松市東山崎町久米山	前後	弥生墳丘墓・散布地
00582	前田東中村遺跡	高松市前田東町中村	前中後	集落・周溝墓
00583	上天神遺跡	高松市上天神町	前中後	集落
00584	太田下須川遺跡	高松市太田下町須川	前中後	集落
00585	蛙股遺跡	高松市太田下町蛙又	後	赤ホヤ層
00586	居石遺跡	高松市伏石町居石	後	
00587	井出東Ⅱ遺跡	高松市伏石町井出東	前中後	水田
00588	井出東Ⅰ遺跡	高松市伏石町井出東	中	赤ホヤ層・水田
00589	浴長池Ⅱ遺跡	高松市林町長池	前中後	
00590	浴長池Ⅰ遺跡	高松市林町長池	前中後	集落・周溝墓
00591	浴松ノ木遺跡	高松市林町松ノ木	前中後	
00592	林坊城遺跡	高松市林町坊城	前後	周溝墓
00593	六条上所遺跡	高松市六条町	後	
00595	天満宮西遺跡	高松市松縄町天満宮西	前後	集落
00596	松縄下所遺跡	高松市松縄町下所	前後	
00597	凹原遺跡	高松市木太町	中後	集落
00605	大池遺跡	高松市木太町	前後	

第６表　弥生時代遺跡一覧(1)

	遺跡名	所在地	時期	備考
00612	空港跡地遺跡	高松市林町	前中後	集落・周溝墓
00625	田村神社御旅所遺跡	高松市一宮町	後	土器棺
00652	三谷三郎池Ａ遺跡	高松市三谷町	前中後	
00670	三谷通谷遺跡	高松市三谷町通谷	中	土器棺・区画墓？
00671	上佐山山麓土器棺墓	高松市池田町下山田	後	土器棺７基
00673	光専寺山遺跡	高松市池田町市場	前	集落
00681	合子神社古墳	高松市池田町市場	後	弥生墓（前方後円形）の可能性
00732	切谷甕棺墓	高松市西植田町切谷		土器棺
00746	葛谷遺跡	高松市西植田	後	
00759	竹元遺跡	高松市東植田町	後	
00774	キモンドー遺跡	高松市伏石町	後	
00775	多肥松林遺跡	高松市多肥上町	前中後	集落・周溝墓
00777	小山南谷遺跡	高松市新田町小山	中	集落
00780	佐料遺跡	高松市鬼無町佐料	後	
A	十川東平田遺跡	高松市十川東町	中	集落
B	片山池下遺跡	高松市西春日町	後	
C	坂田廃寺下層遺跡	高松市西春日町	後	
G	是竹薬師遺跡	高松市鬼無町是竹	後	
J	剣山下遺跡	高松市西植田町剣山下		細形銅剣？出土地
A	伽藍山遺跡	国分寺町新居		高地性集落
00004	高尾遺跡	三木町池戸高尾	後？	弥生墓
00016	白山遺跡１	三木町下高岡正一		袈裟襷文銅鐸出土地
00084	白山遺跡２	三木町下高岡白山	中	高地性集落
00085	白山３遺跡	三木町下高岡白山	中	
00104	天神山古墳群	三木町鹿伏		集団墓・区画墓
00122	権八原古墳群Ｃ	三木町池戸鍋渕	後	弥生墓？
00146-148	西土居遺跡	三木町井戸西土居	後	土器棺
00149	鹿伏中所遺跡	三木町鹿伏	中	集落・土器棺
00150	農学部遺跡	三木町平木	前	
00157-162	丸岡Ｂ遺跡	三木町氷上丸岡	後？	土器棺墓・台状墓
00026	羽間西ノ谷遺跡	牟礼町羽間西ノ谷		中細形銅剣出土地
00008	大平東谷遺跡	牟礼町源氏ヶ峰		袈裟襷文銅鐸出土地

第７表　弥生時代遺跡一覧(2)

拡墓の確認例は極めて乏しい。わずかに観音寺市樋ノ口遺跡[19]で，前期後半のそれが知られているにすぎない。むしろ一般には小児埋葬と理解されることの多い土器棺墓の群集形態の方がはるかに多く報告されている。前期段階の樋ノ口遺跡木棺墓群では成人埋葬と小児

埋葬が共存していること，土器棺墓確認数が他の埋葬形態に比べて極端に優越することから，当該時期におそらく存在したであろう集団墓の考察にあたっては，土器棺墓被葬者の再検討を含めて課題とすべきであろう。

（4）青銅製祭器

ほとんどの事例が偶発的発見に基づく現状では踏み込んだ検討は避けなければならないが，青銅製祭器類確認例の些少さ，特に丸亀平野以西と比較した場合に顕著な新しい段階の青銅製武器形祭器類の少なさは，以前から指摘されているように本地域の重要な特徴となるであろう。また空港跡地遺跡における細形銅剣転用加工品[20]や，多肥・松林遺跡等の銅剣形木製品[21]は，祭器類の保有形態やそれに関する祭祀内容を検討する上で示唆的である。

4．古墳時代

集落遺跡の確認例，特に後期前半以前のそれの確認例が著しく少ない。そのこと自体，重要な検討課題になる可能性が高いが，ここでは墓制から抽出できる課題に限って若干検討してみたい。

（1）弥生墓と前方後円墳

鶴尾神社4号「墳」[22]が典型的な前方後円墳出現時期以後の所産か，それに先行する存在であるかはまだ確定的ではないが，いずれにしても奈良県箸墓古墳等の典型的な最古段階の前方後円墳とは，墳丘・主体部形態その他において看過しがたい相違が存在することは大方の認めるところであろう。と同時にたとえそうであっても，本地方の首長墓の変遷の中で画期的な存在であることも事実である。

先に弥生墓制で示したように突出部を付した形態の区画墓はすでに弥生後期前半段階に出現している可能性が高い。鶴尾神社4号「墳」に近接した時期の所産である空港跡地ＳＴ01，ＳＴ05はやや狭小な突出部を付した前方後円（方）形を有するし，これより後出する中間西井坪1号墳[23]でも同様の小規模な突出部が想定できる。徳島県萩原1号墓[24]や長尾町尾崎西遺跡ＳＴ24[25]の事例を考慮すると，この様な突出部を付す形態は本地方の特徴と見なすことができよう。またそうした形態が主丘部径10m以下の小規模な墳墓にも認められることは，その採用が一定程度の階層的広がりを持つことを予想させる。さらに古墳時代に入ってもそうした形態の墳墓が存続する可能性にも注意する必要がある。

単純に内在的発展で律しきることはおそらく妥当ではないだろうが，鶴尾神社4号「墳」はその下地が本地方の後期前半以来の伝統の中で用意されたものであり，その特徴的な形態は，飛躍の具体的契機に外的要因が加わるにせよ，先行するそれらの型式的整備と位置

づけることができるであろう。また単純に規模を問題にすれば，一定の階層幅で採用された突出部付区画墓総体の中で上部に位置する。

そしてその出現は，外的諸関係の課題と共に内的諸関係，首長層の階層的再編成の一定の帰結として評価できるであろう。その様相は第一に本地方の弥生時代の具体的な歴史過程総体から探られなければならないであろう。

（2）前期古墳の分布

少なくとも，下位の首長墳を除く一定程度以上の規模（概ね長20m以上）の首長墳が集落域から隔絶された丘陵部に営まれることは，讃岐地方において特に顕著な傾向であろう。本津川流域では五色台，堂山山塊東麓に，一定の格差を持った首長墳系列の複数単位が認められる。生島周辺，今岡，袋山，中間，西山崎，本尭寺等の各群である。また春日川，新川流域及び香東川中上流域においても同様の複数単位を認めることができ，これらは大きな群集形態をとらず，一般に個別系列の存続期間は長くない。

一方，平野中央部の石清尾山山塊には双方中円墳2基，前方後円墳8基以上を含む前期古墳が集中する。年代観と位置関係から首長墳複数系列が併立していると見なすべきであろう。おそらく香東川下流域諸集団の首長層が結集した形態と予想できる。その点で香東川下流地域は，他の高松平野諸地域とは異なる様相を示す可能性がある。相対的に強固な香東川下流域諸集団の連鎖の要因は，その内在的な条件と他集団との関係形態の二方向から検討されるべきであろう。とはいえ規模・墳丘形態に一定の格差を有するものの，明らかに従属的な小墳群を除けば小規模でも前方後円墳を採用し，墳墓相互の位置関係にも強い規制は見出だし難い。いわばかなり緩やかな結集形態であるといえよう。

この地域の一定の首長階層が，特定の区域に墳墓を集中させる形態は，相作牛塚古墳を代表とする中期～後期前半の石清尾山西側の飯田町周辺の古墳群や，更に浄願寺山古墳群などの後期後半段階の石清尾山山塊の古墳群に引き継がれる可能性はあるが，群集規模を除けば，個別の墳墓の内容は，前期段階のように平野諸集団の中で傑出した存在ではなくなっている。

（3）後期古墳

古墳時代後期後半段階，横穴式石室普及期の首長墳では平野東縁部，新川流域の山下古墳・久本古墳等と，西縁部本津川流域の古宮権現古墳・鬼無大塚古墳などの2群が突出した存在である。これに準ずる内容の首長墳は平野各部にかなり分散的に見られる。複数の

第9図　古墳分布図

	遺跡名	所在地	分類	備考
00066	こめ塚古墳	高松市鬼無町山口	2B	
00067-68	神高池南西古墳群	高松市鬼無町山口	2B	
00069	古宮権現古墳	高松市鬼無町山口	2B	
00070	空家古墳	高松市鬼無町山口	2B	
00071	山野塚	高松市鬼無町山口	2B	
00079	袋山古墳	高松市鬼無町袋山	2A	前方後円墳？
00081	衣掛古墳	高松市鬼無町袋山	2A	前方後円墳？
00083	あきやま塚古墳	高松市鶴市町中所	2A	
00084	中所地神社前塚古墳	高松市鶴市町中所	2A	
00085	王墓古墳	高松市鶴市町王墓	2A	
00086	相作牛塚古墳	高松市鶴市町相作	2A	
00087	相作馬塚	高松市鶴市町相作	2A	
00127-140	青木古墳群	高松市飯田町青木	2A	
00176	御厩大塚古墳	高松市御厩町川原	2B	
00210	御厩天神社古墳	高松市御厩町	2A	前方後円墳
00211	御厩池古墳	高松市御厩町池内	2B	
00212	三つ塚古墳	高松市御厩町池内下所	2B	
00213	山王社古墳	高松市御厩町池内	2B	
00216	矢塚北古墳	高松市中間町峠	2B	
00217	矢塚南古墳	高松市中間町峠	2B	
00219-222,00788	西山崎古墳群	高松市西山崎町上所下	2A	
00228-29	本堯寺北古墳群	高松市西山崎町上所上	2A	
00230	本堯寺西古墳	高松市西山崎町上所上	2A	
00245	奈良須池西北古墳	高松市岡本町立石	2	
00246	耳塚古墳	高松市岡本町立石	2	
00256-258	西宝寺南古墳群	高松市西宝寺町	2B	
00259-264	木里神社古墳群	高松市西宝町	2B	
00265	北大塚西古墳	高松市峰山町	2A	前方後円墳
00266	北大塚古墳	高松市峰山町	2A	前方後円墳
00267	北大塚東古墳	高松市峰山町	2A	
00268	鏡塚古墳	高松市鶴市町御殿	2A	双方中円墳
00269	石船塚古墳	高松市峰山町	2A	前方後円墳
00271	姫塚古墳	高松市峰山町	2A	前方後円墳
00272	猫塚古墳	高松市鶴市町御殿	2A	双方中円墳
00294	猫塚東古墳	高松市西春日町	2	
00273-295	摺鉢谷古墳群	高松市西春日町	2B	含む前方後円墳（９号・前期）
00296	峰山墓地古墳	高松市峰山町	2B	

第８表　古墳一覧(1)

	遺跡名	所在地	分類	備考
00297	峰山墓地南古墳	高松市峰山町	2B	
00300-304	鶴尾神社古墳群	高松市西春日町北山浦	2A	４号前方後円墳（弥生墓？）
00306	稲荷山姫塚古墳	高松市宮脇町	2A	前方後円墳
00307-310	稲荷山北古墳群	高松市宮脇町	2A	
00311-313	稲荷山古墳群	高松市室町紫雲山	2A	前方後円墳
00316-320	奥の池西古墳群	高松市西春日町北山浦	2B	
00339-340	北山浦古墳群	高松市西春日町北山浦	2B	
00370-373	野山古墳群	高松市西春日町野山	2B	
00381-437	浄願寺山古墳群	高松市西春日町・飯田町	2B	
00432-436	経塚南古墳群	高松市飯田町東山	2	
00439-452	南山浦古墳群	高松市西春日町南山浦	2B	
00453-455	片山池南古墳群	高松市西春日町南山浦	2B	
00466	がめ塚古墳	高松市勅使町西小山	2A	前方後円墳
00471	長崎鼻古墳	高松市屋島西町長崎鼻	2A	前方後円墳
00475-477	浜北古墳群	高松市屋島西町浜北	2A	２号、弥生墓（前方後円形）の可能性
00479	中筋北古墳	高松市屋島西町中筋	2	
00480	屋島中央西古墳	高松市屋島西町中央谷東	2B	
00481	屋島中央東古墳	高松市屋島西町中央谷東	2B	
00482	金刀比羅社域古墳	高松市屋島中町東山地	2	
00484-486	湯ノ谷古墳群	高松市屋島東町三崎湯ノ谷	2B	
00488-490	長尾古墳群	高松市高松町長尾	2B	
00494	小山古墳	高松市新田町小山	2B	
00496	山下古墳	高松市新田町久本	2B	
00498-512	岡山小古墳群	高松市新田町岡山	2B	
00513-515	岡山古墳群	高松市新田町岡山	2B	
00524	久本古墳	高松市新田町久本甲	2B	
00525	久本山東峰古墳	高松市新田町久本	2	
00526	高松茶臼山古墳	高松市東山崎町久米山	2A	前方後円墳
00527	高松茶臼山南古墳	高松市東山崎町前田境	2A	
00528	高松茶臼山東古墳	高松市前田西町引妻	2A	
00529-530	西茶臼山古墳群	高松市東山崎町前田境	2A	
00538-542	久米山古墳群	高松市東山崎町久米山	2A	
00543	久米山古墳	高松市東山崎町久米山	2A	
00544	北山古墳	高松市前田西町引妻	2A	
00545	滝本神社古墳	高松市前田西町滝本	2B	
00554	田楽古墳	高松市前田西町田楽	2B	
00558-563	金石山古墳群	高松市前田町金石	2B	

第９表　古墳一覧(2)

	遺跡名	所在地	分類	備考
00564-567	平尾古墳群	高松市前田東町平尾	2B	
00568-578	平尾小古墳群	高松市前田東町東畑	2B	
00579	山本古墳	高松市前田東町東畑	2B	
00583	上天神遺跡	高松市上天神町	1	集落
00601	白山神社古墳	高松市木太町	2A	
00632-636	雨山南古墳	高松市三谷町犬の馬場	2B	
00643-644	瘤山古墳群	高松市三谷町火山南瘤山	2A	前方後円墳
00645-649	平石上古墳群	高松市三谷町	2B	
00650	犬の馬場古墳	高松市三谷町犬の馬場中央	2B	
00651	矢野面古墳	高松市三谷町犬の馬場矢野面	2B	
00659	北山古墳	高松市三谷町通谷北山	2	
00660	北地古墳	高松市三谷町通谷北山	2	
00661	高野丸山古墳	高松市川島本町高野中	2A	
00663-664	高野南古墳群	高松市川島本町南高野	2A	
00665	三谷石船古墳	高松市三谷町原原上	2A	前方後円墳
00669	池田下代古墳	高松市池田町南中原	2A	
00675-00676	光専寺山古墳	高松市池田町市場	2A	
00680	毘沙門堂古墳	高松市池田町井口川	2A	
00681	合子神社古墳	高松市池田町市場	2A	弥生墓（前方後円形）の可能性
00682-683	中山田古墳群	高松市池田町中山田	12B	弥生集落と重複
00685	上佐山東麓古墳	高松市池田町下山田	2	
00686	上佐大明神社古墳	高松市池田町中山田	2A	
00690-691	天満池北西古墳	高松市西植田町天満	2	
00692-693	尾越古墳群	高松市西植田町尾越	2A	
00695-700	大亀古墳群	高松市西植田町備前谷	2A	
00701-703	本村古墳群	高松市西植田町本村北	2	
00705	松宇八幡馬場古墳	高松市川島東町	2	
00706	西尾天神社古墳	高松市十川西町西尾	2A	
00708	古塚古墳	高松市川島東町山南	2	
00709-710	川東古墳群	高松市池田町川東	2	
00711	こんぼうじ古墳	高松市川島東町	2	
00736	松尾池池ノ神古墳	高松市西植田町松尾池	2	
00762-763	東植田八幡神社馬場先古墳群	高松市東植田町宮谷	2	
00781	相越古墳	高松市鬼無町相越	2A	前方後円墳
00784-786	中間西井坪古墳群	高松市中間町西井坪	2A	含む前方後円墳？
00794	高松茶臼山西古墳	高松市東山崎町前田境	2A	
00799-807	石船池古墳群	高松市三谷町	2AB	
00810	稗田東古墳	高松市西植田町稗田東	2	

第10表　古墳一覧(3)

	遺跡名	所在地	分類	備考
E	小坂馬塚古墳	高松市飯田町小坂	2A	
F	半田塚古墳	高松市飯田町半田	2A	
H	円養寺古墳群	高松市西植田町	2A	含む前方後円墳？
I	首取山遺跡	高松市鬼無町佐料	2A	
00001	高尾権現社古墳	三木町池戸高尾	2	
00002	池戸大宮八幡古墳	三木町池戸大宮	2A	前方後円墳
00003	池戸八幡社古墳群	三木町池戸大宮	2A	
00005	高野八幡社古墳	三木町平木高野	2	
00012	鳥打古墳	三木町下高岡鳥打	2	
00013	八王子古墳	三木町下高岡塚脇	2	
00014, 81	鳥打大西谷古墳群	三木町下高岡鳥打	2	
00015	狸地蔵南丘古墳	三木町下高岡白山東	2	
00018, 82	中代古墳群	三木町井戸中代	2	
00019	小倉東丘頂古墳	三木町井戸南山田	2	
00020	長谷丘上古墳	三木町井戸南山田	2	
00021	高木古墳	三木町井戸高木	2	
00025	風呂谷古墳	三木町池戸風呂谷	2B	
00028	山大寺池北丘上古墳	三木町上高岡鴻池	2B	
00031-32	丸岡古墳群	三木町氷上丸岡神社境内	2B	
00034-35	堀切古墳群	三木町氷上青岸	2B	
00040	雷塚古墳	三木町田中宮下	2A	
00041-00056	蛇角古墳群	三木町田中蛇角	2B	
00057	四十塚古墳	三木町田中北高原	2B	
00058	竜現社古墳群	三木町朝倉南原	2B	
00059	丸山古墳群	三木町朝倉中谷	2B	
00060-69	城地古墳群	三木町朝倉中谷	2B	
00070-72	池下古墳群	三木町朝倉中谷	2B	
00074-75	野倉古墳群	三木町鹿庭出作	2A	
00073	天満古墳	三木町鹿庭天満	2	
00076	剣山古墳	三木町鹿庭	2	
00089	塚谷古墳	三木町井上小谷	2	
00094	七つ塚古墳	三木町池戸四角寺	2	
00097	立石塚古墳	三木町池戸立石	2	
00098	野越古墳	三木町井上川東	2	
00099	深谷古墳	三木町池戸	2B	
00104	天神山古墳群	三木町鹿伏	2B	集団墓・区画墓
00105	椿社古墳	三木町池戸風呂谷	2B	
00106-114	権八原古墳群A	三木町池戸鍋渕	2A	
00115-121	権八原古墳群B	三木町池戸鍋渕	2A	

第11表　古墳一覧(4)

	遺跡名	所在地	分類	備考
00122	権八原古墳群C	三木町池戸鍋渕	2A	弥生墓？
00124-135	かんかん山古墳群	三木町上高岡諏訪	2B	
00136	山大寺池西丘上古墳群	三木町上高岡山大寺池	2B	
00140-143	西土居古墳群	三木町井戸西土居	2B	
00154-156	丸岡A古墳群	三木町氷上丸岡		
00168-172	石塚A古墳群	三木町朝倉下吉谷	2B	
00173-175	勝負谷古墳群	三木町朝倉	2B	
A	池戸西浦谷古墳	三木町池戸西浦谷	2A	

第12表　古墳一覧(5)

大形墳が認められる上記2群についても，傑出した内容の古墳が継起的に築造されることは重要であるが，前期段階の石清尾山古墳群のように複数系列の首長墳が結集する形態ではなさそうである。

それより下位の一般的な規模の横穴式石室墳の分布ではやはり偏在的な傾向が認められる。浄願寺山古墳群をはじめとする石清尾山山塊の古墳群が，密集度・造営数共に突出した存在であるが，他に十数基単位の群集墳は平尾古墳群，岡山古墳群など平野東縁部に多い。その他では2～3基程度の小規模な群集が散在的に見られることが多い。また石清尾山山塊の群集墳は，前代の飯田町周辺の古墳群に後続する可能性があるものの，基本的に先行する時期の分布傾向をそのままでは引き継がないようである。

5．古代

本津川（古川），香東川，春日川，新川流域に，律令制下で香川郡，山田郡，三木郡の3郡が設置される。郡衙その他の官衙遺跡は現状では未確認である。それに関わる問題は全く今後の検討にゆだねられる。また現在平野部の広範囲に認められる方格地割りの祖形と推定されるいわゆる条里地割りの問題も重要である。施行の始点時期と，拡充過程に関する知見が増加している。例えば，8世紀前半以前に遡る可能性を持つ松縄下所遺跡の道路遺構[26]や，8世紀後半代に中心を持つ正箱遺跡では周辺の現存方格地割と合致した宅地割り複数単位が復元できることはこの点からも興味深い。

礎石など遺構が全く未確認で瓦などの散布から推定されているものが少なくないが，7～8世紀代の古代寺院は香川郡4例（白鳳1，奈良3），山田郡5例（白鳳2，奈良3），三木郡3（白鳳3）が知られる。特に山田郡東部から三木郡に集中し，1郷1ヵ寺に近い状態を現出する。讃岐地方一般の状況とは異なり，寺院建立の契機あるいは造営主体の点

第10図　古代寺院・窯跡分布図

から注目できる。令制下，山田郡宮処郷に位置する前田東・中村遺跡[27]は白鳳期創建の宝寿寺廃寺に隣接するか寺域の一部を包含し，それと同型式瓦多数を検出している。そこでは概ね８～10世紀の首長層の居宅の一部と見られる大形建物群が確認されている。おそらく宝寿寺の造営・維持に直接関与した存在と推定でき在地の首長層の寺院経営の具体相を知りうる資料として重要である。

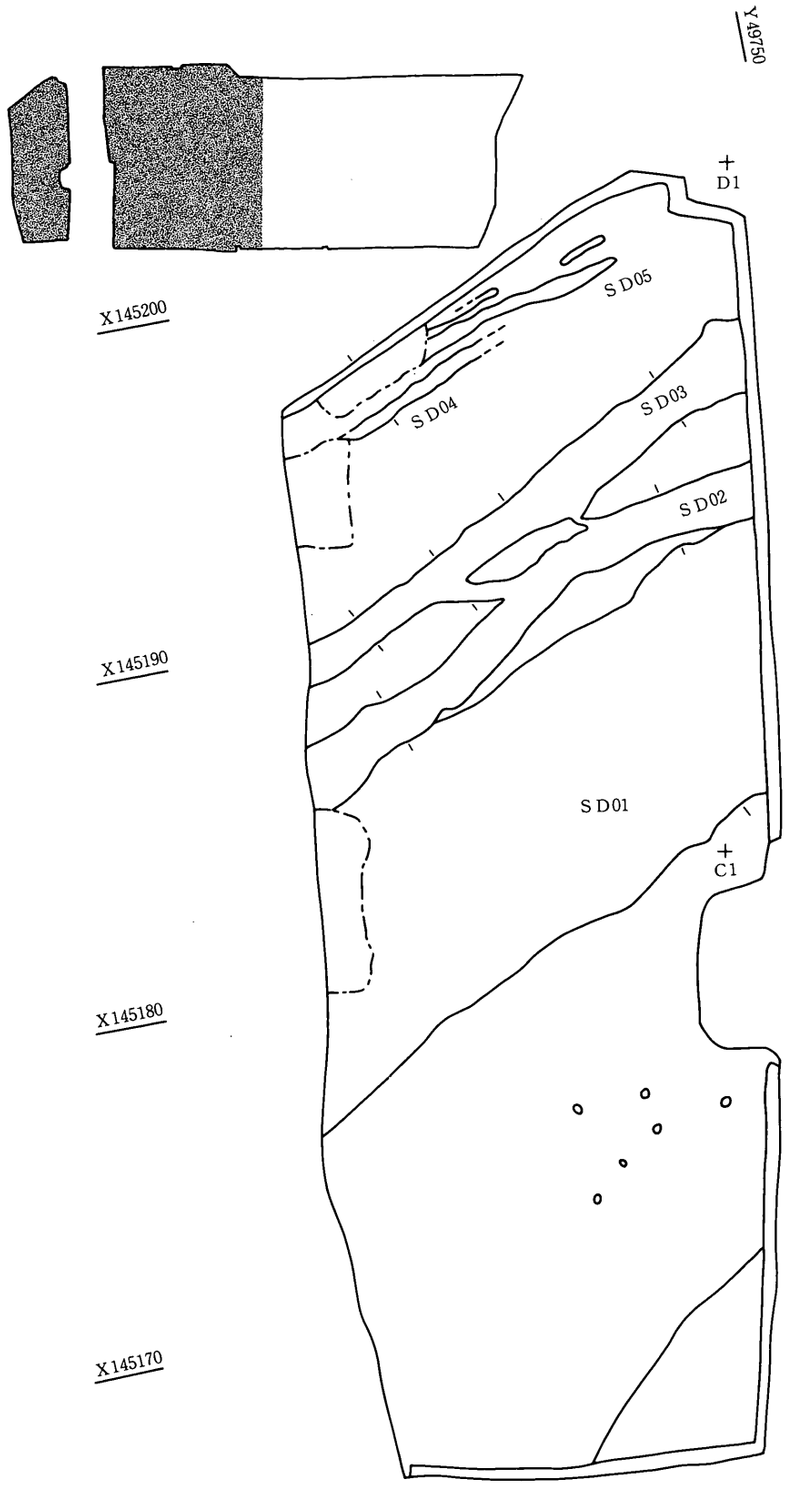
7世紀後半～8世紀前半に南部丘陵地帯の香南台地と新川水系上流地域で，須恵器生産が活性化する。高松平野地域の須恵器生産は，現状でも5世紀代の三谷三郎池西岸窯の短期的な操業まで遡るが，以後古墳時代を通じて有力な生産地は確認できていない。7世紀後半段階で生産体制が増強されることは，おそらく内在的な需要の変化だけから説明することは困難であろう。より広域的枠組みでの，おそらくは「貢納制」の問題をも含み込んだ生産・流通体制の変動を反映している可能性を持つ。

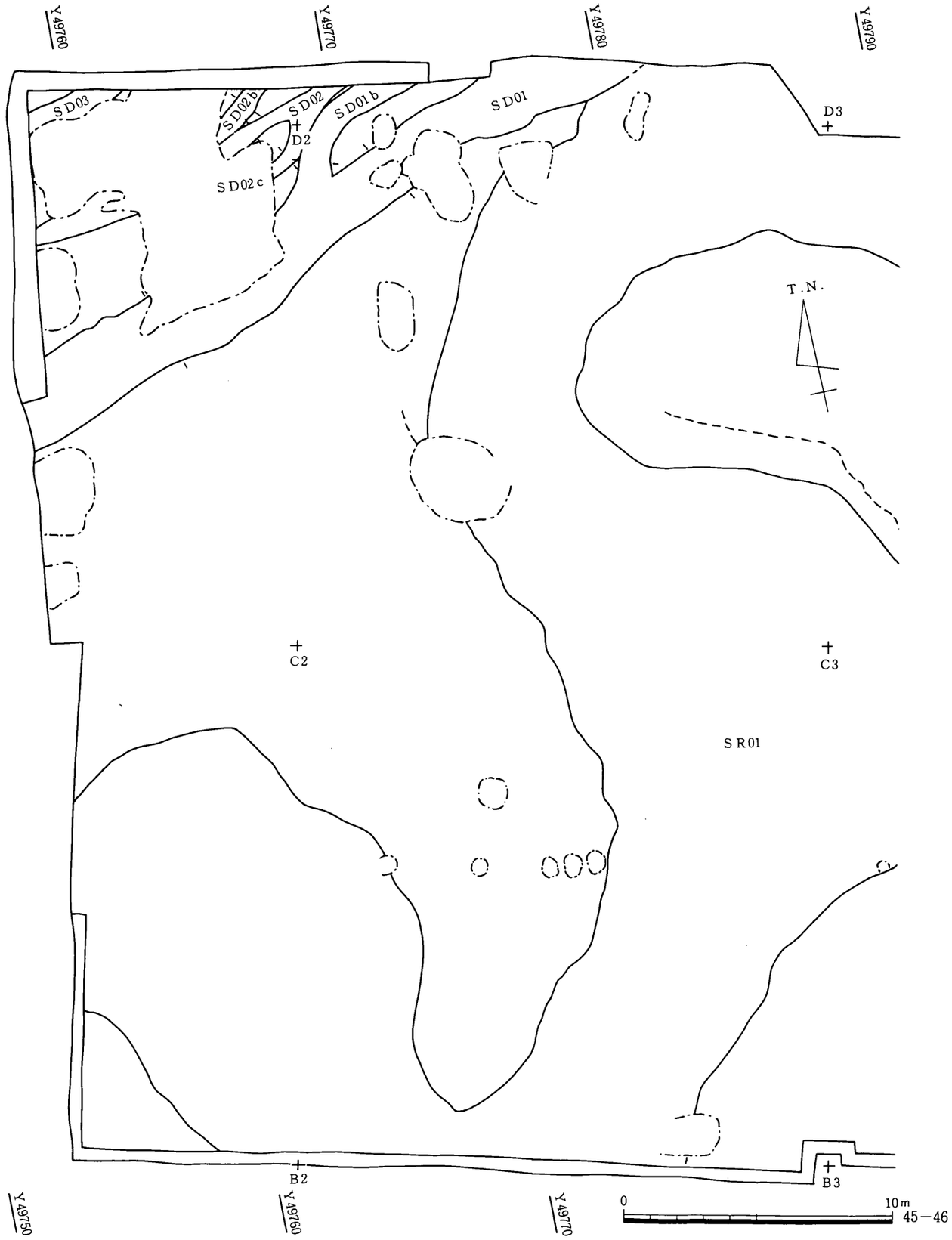
	遺跡名	所在地	備考
00040	勝賀廃寺	高松市香西西町奥の堂	奈良
00463	坂田廃寺	高松市西春日町小山	白鳳・礎石
00497	山下廃寺	高松市新田町	奈良
00580	宝寿寺廃寺	高松市前田東町中村	白鳳・礎石
00613	拝師廃寺	高松市上林町	奈良
00624	田村神社神宮寺	高松市一宮町	奈良
00626	百相廃寺	高松市仏生山町百相	奈良
00662	高野廃寺	高松市川島本町	奈良
00748	下司廃寺	高松市東植田町下司	白鳳・礎石
B	上高岡廃寺	三木町上高岡	白鳳
00010	始覚寺廃寺	三木町井上川西	白鳳
00036	長楽寺廃寺	三木町氷上長楽寺丸岡	白鳳
00088	小谷須恵器窯	三木町井上小谷	
	宮池窯跡	三木町朝倉	
00750-758	公渕池窯跡群	高松市東植田町高柿	
00042	新池窯跡	香南町西庄	
00003	西庄窯跡	香南町西庄大坪	
00008	大坪窯跡	香南町西庄大坪	
00027	茶園窯跡	香南町由佐	
00043	音谷池東岸窯跡	香南町由佐	
00044	音谷池西岸窯跡	香南町由佐	
00464	坂田窯跡	高松市西春日町浄願寺山	鎌倉
00656	三谷三郎池西岸窯跡	高松市三谷町	初期須恵器

第13表　古代寺院・窯跡一覧

(1)高橋学「高松平野の環境復元」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会　1992
(2)北山健一郎・森下友子他『太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター　1995
(3)「蛙股遺跡」『むかしの高松』3号　高松市教育委員会　1993
(4)山元敏裕「居石遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会　1992
(5)山元敏裕「井手東遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会　1992
(6)山本英之・山元敏裕他『浴・長池』高松市教育委員会　1993
(7)山元敏裕他『浴・長池Ⅱ』高松市教育委員会　1994
(8)山元敏裕他『浴・松ノ木』高松市教育委員会　1994
(9)宮崎哲治他『林・坊城遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1993
(10)昭和63年度，平成3年度に香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センターが調査実施，平成7年度報告書刊行予定
(11)大久保徹也「中間西井坪遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成2年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1991
森下英治「中間西井坪遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成3年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1992
(12)廣瀬常雄・西村尋文『正箱・薬王寺遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1994
(13)浜田重人「高松市大池採集の有舌尖頭器」『香川考古』2号　1994
(14)川畑聰「天満宮西遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会　1992
(15)佐藤竜馬「出水遺構について」『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成4年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1993
(16)松本敏三他『三谷通谷遺跡発掘調査概報』高松市教育委員会　1974
(17)山下平重他『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成3年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1992
佐藤竜馬他『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成4年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1993
(18)宮崎哲治「龍川五条遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成元年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1990

(19)片桐孝浩「樋の口遺跡」『香川県埋蔵文化財発掘調査年報　昭和59～62年度』香川県教育委員会　1988
(20)注16文献
(21)真下拓也他『多肥・松林遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1994
(22)渡部明夫・藤井雄三『鶴尾神社４号墳調査報告書』高松市教育委員会　1983
(23)注11文献
(24)菅原康夫他『萩原墳墓群』徳島県教育委員会　1983
(25)森下英治他『尾崎西遺跡発掘調査概報　平成４年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1993
(26)山本英之「松縄下所遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会　1992
(27)森格也・古野徳久他『前田東・中村遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1995





第11図　1区遺構配置図1（1／200）

Y 49800　Y 49810　Y 49820　Y 49830　Y 49840　Y 49850

D4　D5　D6

X 145180

S D06　S D08

X 145170

S B01　S B02　S B03　S B04　S B05

T.N.

C4　C5　C6

X 145160

S D09

S B06　S B07

X 145150

S D07

B4　B5　B6

Y 49790　Y 49800　Y 49810　Y 49820　Y 49830

0　10m

第12図　1区遺構配置図2（1／200）

第３章　調査の成果

第１節　１区の調査

１．１区の概要と層序

１区は上天神遺跡調査範囲の東端に位置し，３区以東の遺跡中心部とは，御坊川支流「古川」によって隔てられる。またこの部分は，旧香東川氾濫原と「古川」に挟まれた，微高地面の東半部に相当する。この微高地は調査範囲西方の鹿角街道付近をピークとし，旧香東川東岸の最も川よりの安定した微高地面である。したがって１区部分は基本的に「古川」に向かって緩やかに低くなる。最も低くなった調査区北東隅で，僅かながら暗褐色粘質土層（弥生後期包含層）の薄層を確認した。弥生期の微高地斜面堆積層の残骸である。現「古川」に引き継がれるこの微高地間の低地が弥生後期には形成されていたことを示す。

１区部分は，西端部の市道両側に宅地があった以外は畑地ないしは水田で微地形に合わせた東西方向３段，南北方向１～２段の耕地割りが現状で認められた。宅地部分では建物基礎あるいは家屋破却時の掘削による撹乱が一定程度認められた。

宅地以外の耕地部分でも，他調査区同様に全般的に地下げが著しい。遺構の残存状況からすれば３区以東よりも地下げは著しく全体的に数十cm以上の削平を想定する必要がある。また市道に東接する宅地周辺の削平は特に著しく，市道を挟んだ１区西端部分に比べ遺構検出面が30cm前後低い。このため後述するようにこの部分で双方に連続する大溝ＳＤ01の接続などの理解に困難を極めた。

１区では部分的な造成土を除いて現耕作土層・床土層（計20cm程度）直下に淡黄色～黄褐色シルト・粘質土層がある。遺構は全てこの層の上面で検出できる。本層構成物の粒径・色調は地点によって漸移的に変化し，調査区の東西端に向かい構成物が細かくなる傾向が認められた。また側溝・試掘トレンチなどの所見では本層は0.5～１ｍ前後の厚みを持ち，その下部に暗灰色砂礫層の堆積を確認している。十分な下部確認はできていないが，この砂礫層は緩やかな起伏を持って堆積し，同層まで掘り下げても１区部分では湧水はほとん

どない。なお4区等で認められた淡～暗灰色土層（古墳時代後期～平安時代遺物包含層）は，本調査区では僅かに，後述する自然河川ＳＲ01上面に残存するにすぎない。また他調査区で部分的に確認した，現耕作土層直下の，先行する旧耕作土・床土層の連続堆積層も観察することができない。このことは少なくとも遺構の残存状況などから推定される大規模な削平が，比較的近年になされたことを示す。

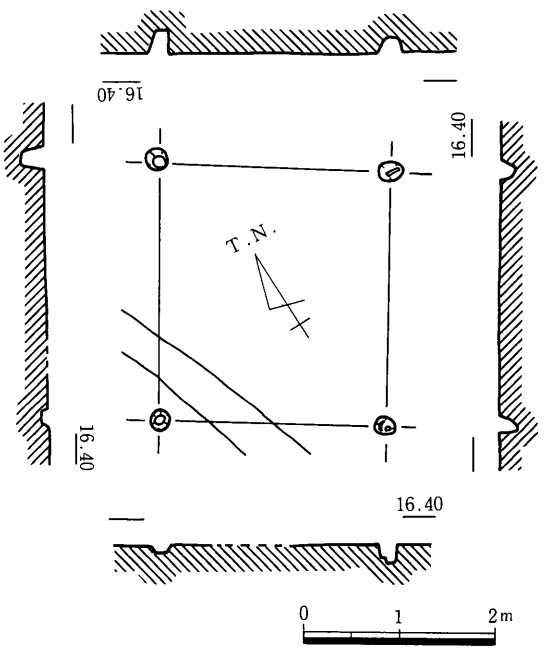
なお1区中央部から西部にかけて極端に蛇行して流れる小規模な自然河川ＳＲ01が存在するが，埋積はかなり早く，弥生後期にはもはや浅い凹地と化し，遅くとも中世までにはほぼ完全に平坦になっている。

2．縄文・弥生時代の遺構・遺物

ＳＢ04（第13図）

1区東部で，掘立柱建物ＳＢ05および小規模溝ＳＤ06と重複関係にある遺構である。桁行1間（2.7m），梁間1間（2.4m）の矩形を呈し主軸方位はN56° E，この部分の面積で，6.5㎡を測る。柱配置・間隔から掘立柱建物と見るよりも，削平された竪穴住居の主柱穴列と見たほうがよい。

柱掘り方は概ね径0.2m前後の不定円形を呈し，残存深は0.1～0.2mと良くない。なお遺物は全く出土していないが，埋土および周辺遺構から弥生時代後期と推定される。



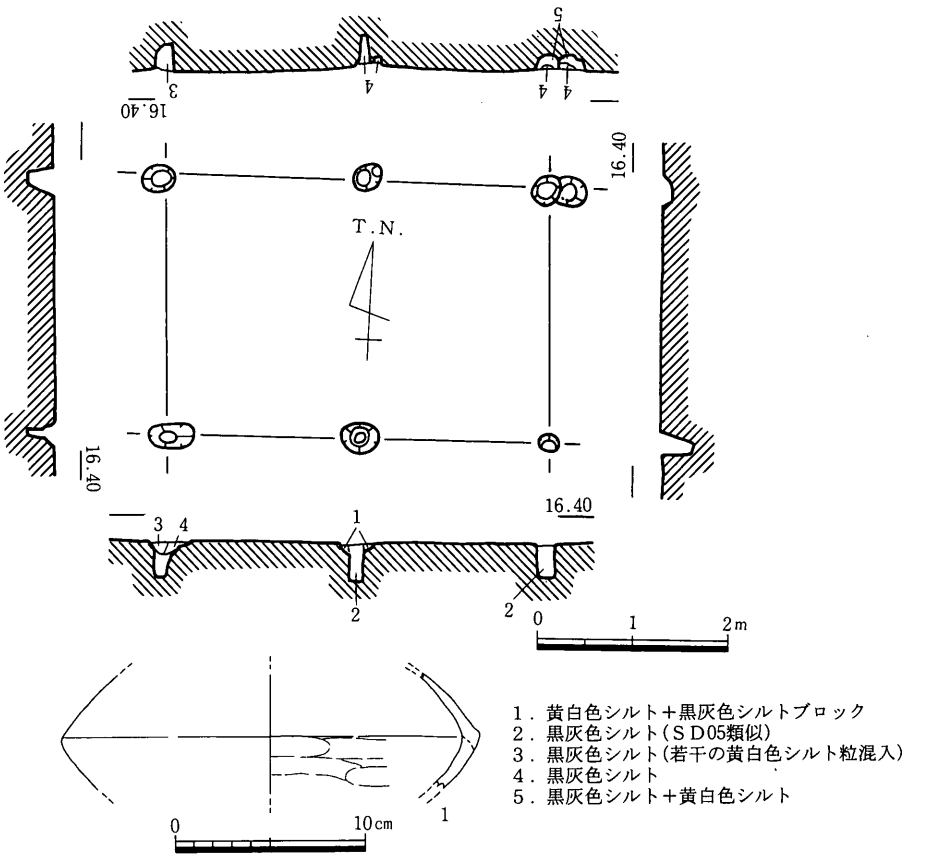
第13図　1区ＳＢ04平・断面図（1／80）

ＳＢ05（第14図）

１区東部で，ＳＢ04および小規模溝ＳＤ06と重複関係にある掘立柱建物である。本建物は桁行２間（4.2m），梁間１間（2.7m）の側柱建物で，主軸方位はＮ87° Ｅ，床面積11.3㎡を測る。なお南東部２穴を除く，４穴で柱立て替えが認められる。

柱掘り方は概ね径0.3～0.4m前後の不定円形を呈し，全穴で径0.1m強の柱痕を確認している。残存深は0.2m弱にすぎない北東隅穴を除き約0.4m前後と１区建物遺構中，最も良好で，下端レベルも前者以外では標高15.7～15.8ｍと揃っている。桁行方向の柱間は1.9～2.2m，梁間方向では2.6～2.7ｍとバラツキが少ない。

北西隅穴から少量の土器片を検出している。（１）はやや扁平な体部で中位の最大径部に鈍い稜を持つ。細頸壷体部の可能性がある。後期初頭段階に位置付けてよいであろう。



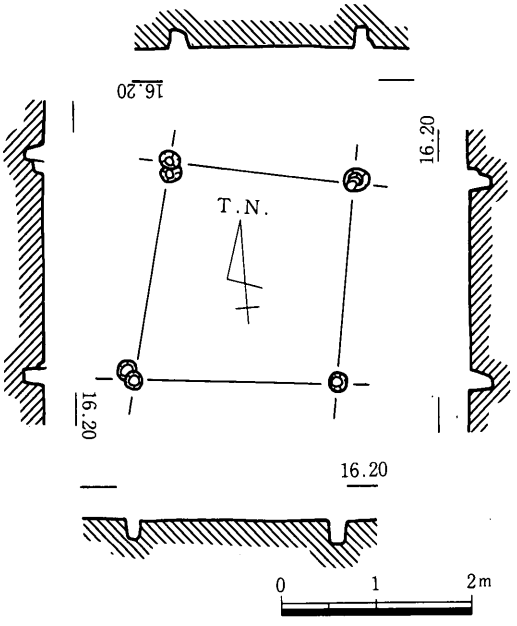
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1	壺				細・極多	褐色	強く張った体最大径部には鈍い稜	1/6	角閃石極多、雲母多

第14図　１区ＳＢ05平・断面図（１／80）および出土遺物（１／４）

ＳＢ06（第15図）

１区東部で，掘立柱建物ＳＢ07の北側に位置する。桁行１間（2.1～2.2m），梁間１間（1.9～2.1m）の矩形を呈し主軸方位はN12° E，この部分の面積で，4.3㎡を測る。柱配置・間隔から掘立柱建物と見るよりも，極度に削平された竪穴住居主柱穴列残欠と判断できる。なお西側列では，２穴ずつ重複している。

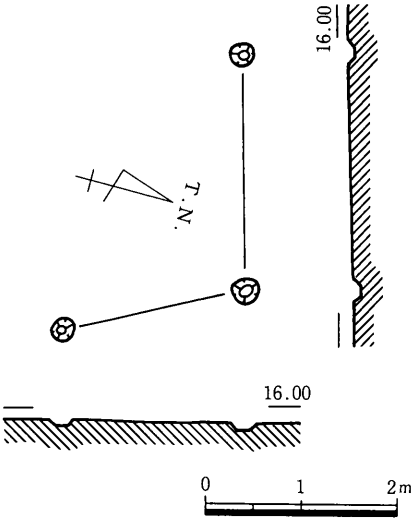
柱掘り方は概ね径0.2m前後の不定円形を呈し，残存深は0.2m強で，下端レベルも標高15.5m前後に揃う。



第15図　１区ＳＢ06平・断面図（１／80）

ＳＢ07（第16図）

１区東部で，小規模溝ＳＤ07に近接してその北側，ＳＢ06の南にあるが，ＳＢ06，ＳＤ07との併存は困難であろう。本遺構は３穴のみ検出したにすぎないが，本来的には南西隅穴を欠くものの１間（2.5m），１間（2.0m）以上の規模をもつと考える。また柱間の東西間隔と南北間隔が著しく異なることから，竪穴住居主柱列残欠ではなく，掘立柱建物と見做すべきであろう。柱掘り方は概ね径0.2～0.3m前後の略円形を呈し，残存深は0.1m弱にすぎない。

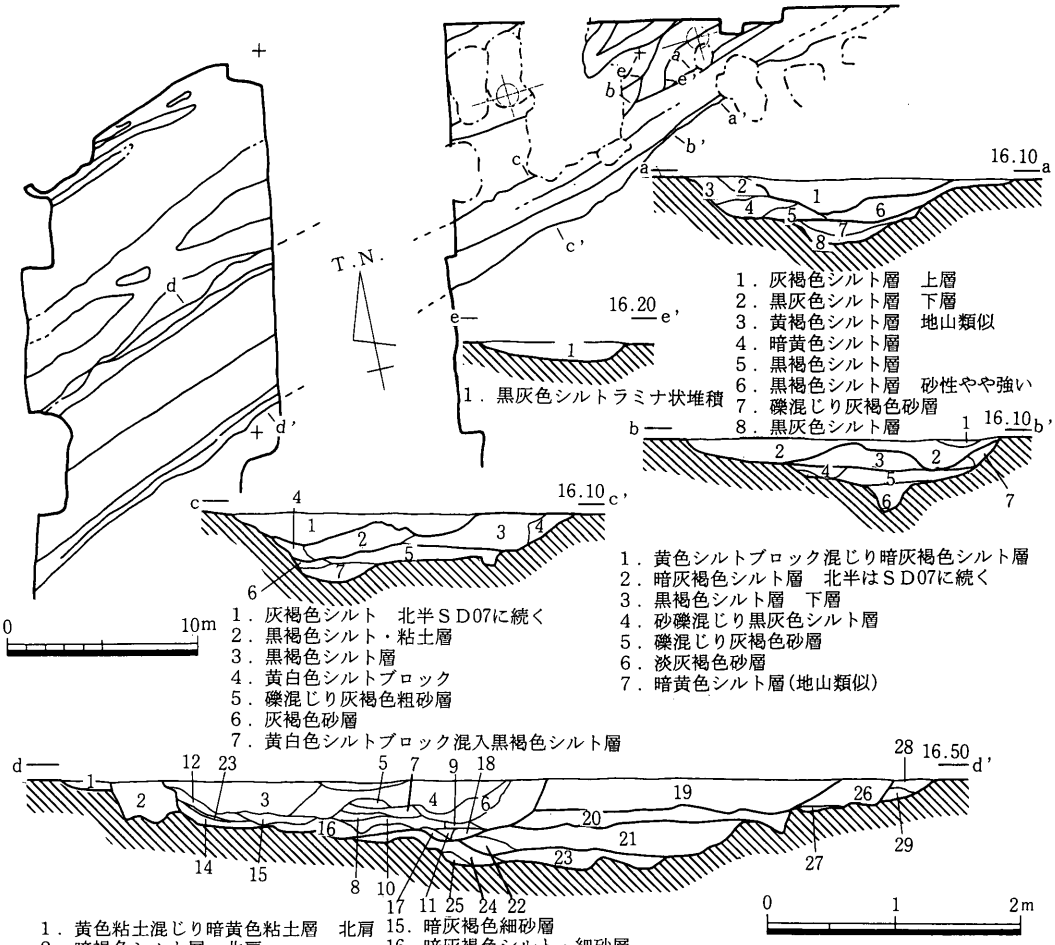


第16図　１区ＳＢ07平・断面図（１／80）

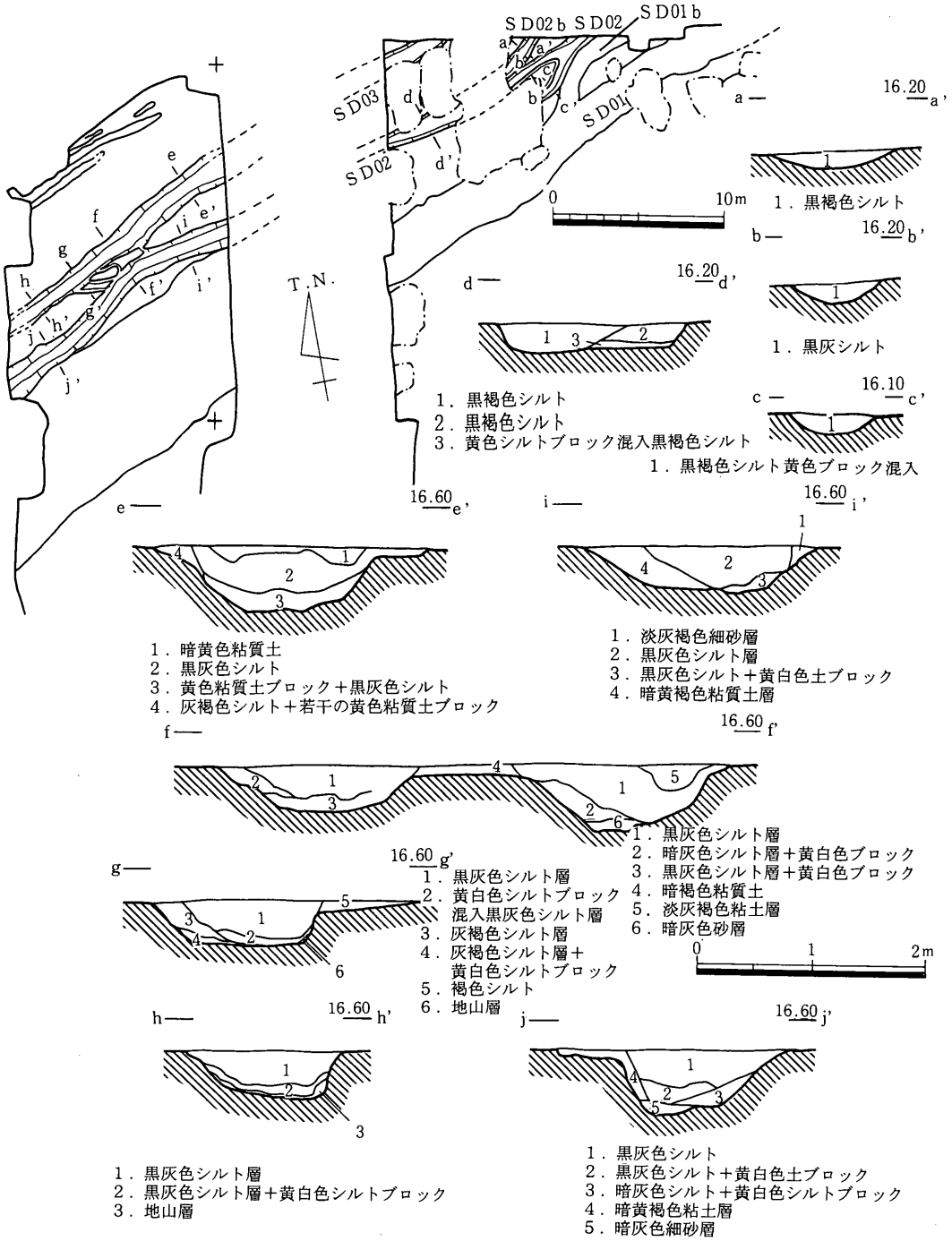
ＳＤ01～05（第17～24図）

１区西北隅，ＳＲ01西岸で検出し，概ね南南西～北北東に並走する溝群である。本流のＳＤ01と，おそらくこれから分岐・並走する支流群と理解できる。中間に道路敷未調査部

分を挟み，検出範囲東半は削平・撹乱が著しいため各溝の関係を把握することが困難な部分もある。全体として，開削は弥生前期に遡り，複次の改修を経て古墳時代初頭に最終埋没する。ただし付随する支流溝の全てが同時に併存するわけではないと見られる。以下では個別溝について報告する。



第17図　１区ＳＤ01平・断面図（１／400・１／60）



第18図　1区ＳＤ01付帯小溝群平・断面図（1／400・1／60）

SD01

調査区西端B・C－0区からA－2区にかけて南南西～北北東に流れる。一連の溝群の南端に位置し，その規模・継続年代から一貫して溝群の本流として機能したと考えられる。

より残りの良いB－0区断面により規模・形状および変遷を観察する。全体幅7mで，残存深は0.7mに達するが，これは最低3回の改修と一時期，肩部に並走した小溝との累積であって一時の溝はこれよりやや規模が小さいと思われる。最下層（Ⅳ層）には漆黒色粘土・シルトブロックを部分的に交える暗灰褐色細砂層が薄く堆積する。堆積層下面，すなわち大溝床面レベルは標高15.5m前後を測る。初回改修前の堆積層と考えられる。本層には弥生前期土器のみを少量包含し，本溝開削時期の下限を示す。

下層堆積層（Ⅲ層）は黒灰色シルト層からなり，厚0.2m前後で弥生前期～中期中葉の資料を少量含む。下面の標高は15.8mである。

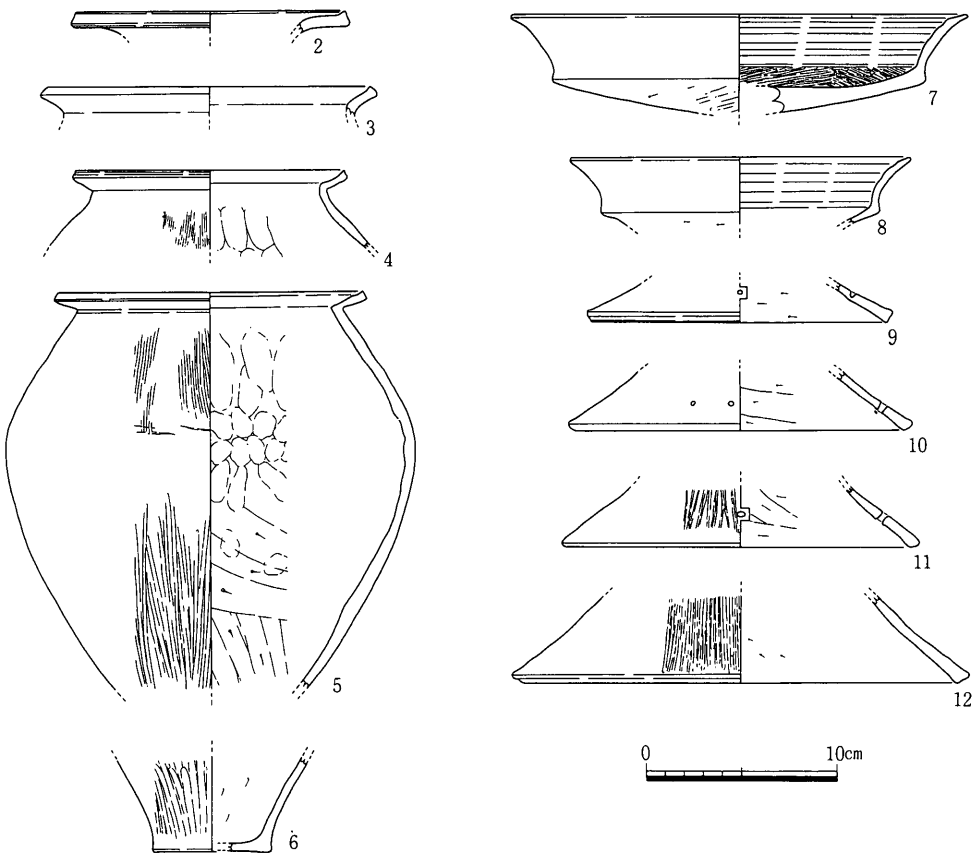
上層（Ⅱ層）はほぼ大溝南半部に分布し，溝北肩部の1・2層は本層の末端部分の可能性もある。黒灰色～黒褐色粘土層の近似した堆積層だが，包含遺物などから19層（Ⅱ1層）と20・26層（Ⅱ2層）に2分できる可能性が高い。弥生後期の資料を含み，下面は標高16m前後となる。

最上層（Ⅰ層）は溝北半部に分布し幅3m，深さ0.45mを測る。暗灰～暗褐色シルト・細砂層からなり，Ⅱ～Ⅳ層と北肩部2層を切って堆積する。弥生後期末ないしは古墳時代初頭の資料を含む。これらは本溝の最終埋没時期を示すであろう。また南肩部の26～29層はⅢ・Ⅳ層末端部もしくは併存する小溝残部であろうが確定しがたい。

なお東半部のB－1～A－2区ではⅡ・Ⅲ層を分別できなかったものの堆積層・包含遺物に矛盾はない。

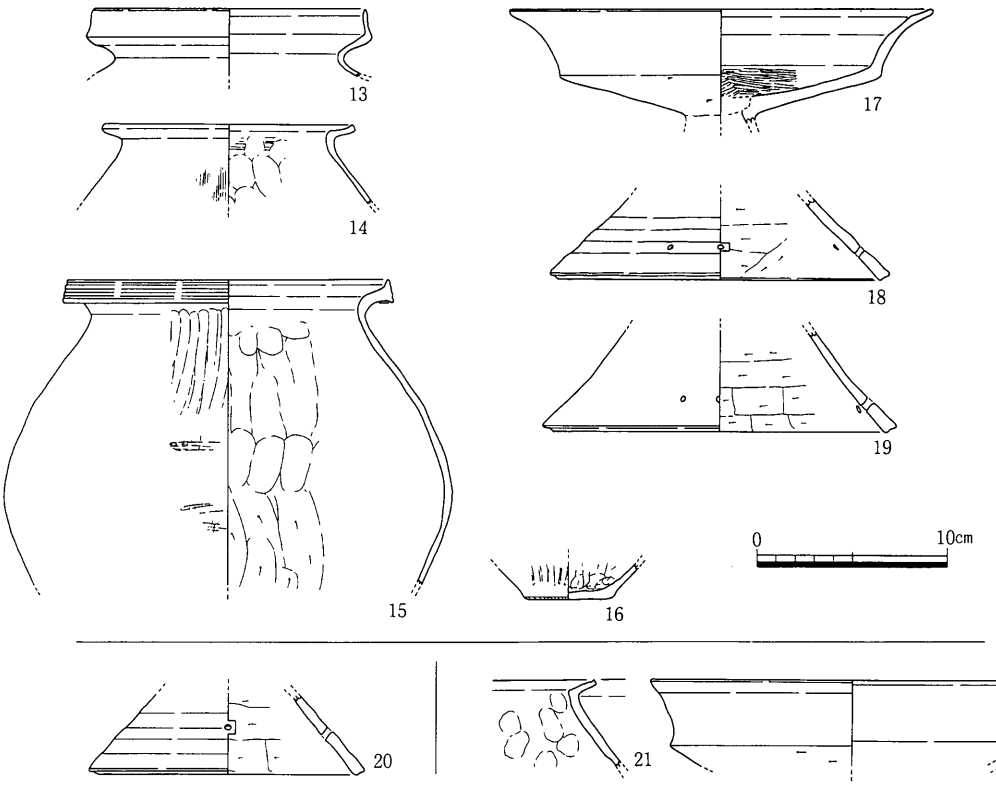
（2）～（12）は西半部のⅠ層出土遺物。（2）は壷口縁部。強く折り返して水平に開く。端部は断面三角形状に小さく摘み上げる。甕（3）～（6）は典型的な下川津B類の形態を示す。底部（6）の形状からすれば後期末葉までは下らない。高坏も同様に下川津B類。坏部（7・8）は強く発達した上半部は，上端部凹線の強調も失いより後出的な形態といえるが，器高と口径からみて，やはり後期末葉までは下らないであろう。脚部（9）～（12）は，痕跡的ながら脚端部の肥厚形態を留める。また（10）のように小円形透かし2孔1対の原則を維持している。これらの点から本層出土資料は後期後半に位置付けられる。

（13）～（19）は西半部のⅡ1層出土遺物。吉備系二重口縁甕（13）は胎土から判断する



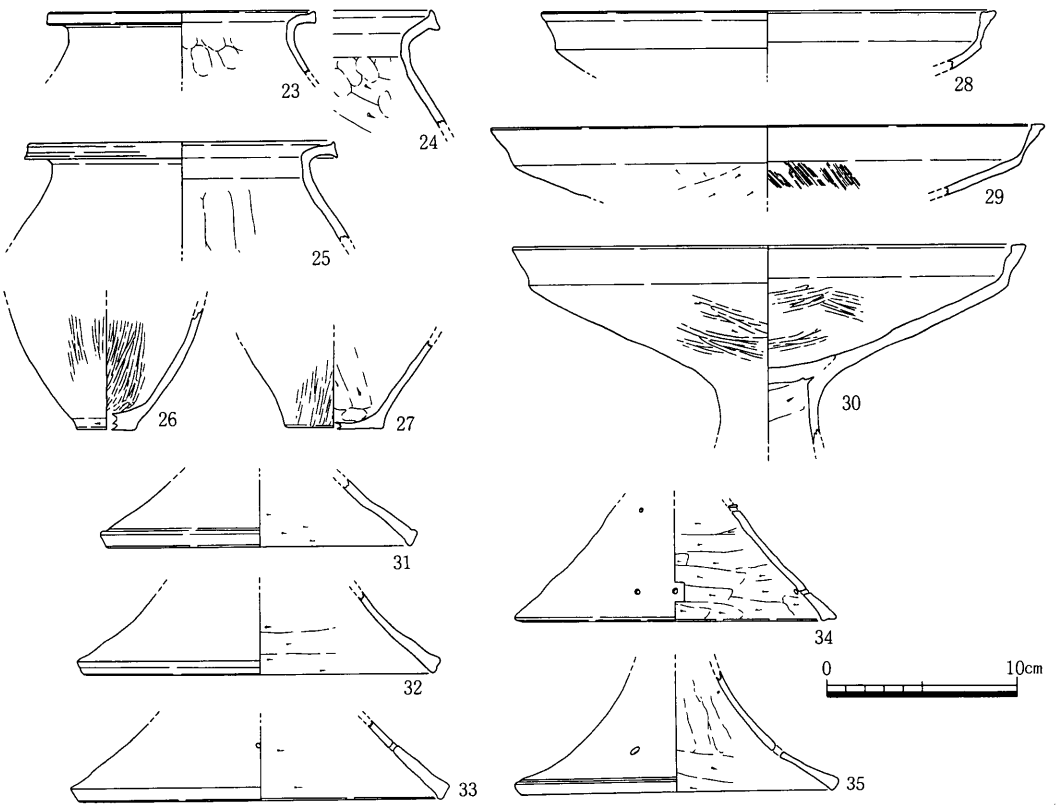
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
2	広口壺	14.0			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して短いが水平に開く。端部は小さく摘み出す。	1/8	角閃石極多、石英等 B類広口壺
3	甕	17.0			細・極多	橙色	口縁部は短く開き端部は小さく上方に摘み出すと共に下方もやや張る。	1/8	角閃石極多、雲母・石英等
4	甕	14.0			細・極多	浅黄色	不明瞭な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は小さく摘み上げる。口縁・頸部の横ﾅﾃﾞにより折り返し部に稜。肩部外面縦ﾊｹ内面指押さえ顕著	1/4	角閃石極多、石英等・雲母 B類甕
5	甕	15.8			細・極多	にぶい黄橙色	内面上半部指押さえ顕著 最大径部は深い指頭圧痕、上位は浅い指腹圧痕	1/3	角閃石極多、石英等多 B類甕
6	甕			6.0	細・極多	にぶい黄橙色	薄作りで、わずかに窪み底。外面縦ﾐｶﾞｷ後下端部横ﾅﾃﾞ、内面ｹｽﾞﾘ	1/2	角閃石極多
7	高坏	23.8			細・極多	浅黄色	上半部は強く外反して開き内面に凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ後横ﾐｶﾞｷ内面分割横ﾐｶﾞｷ	1/8	角閃石極多、石英等・雲母 B類高坏
8	高坏	17.8			細・極多	にぶい黄橙色	上半部外反強い、内面凹線顕著	3/7	角閃石極多、石英等多 B類甕
9	脚			15.3	細・極多	橙色	脚端部は鈍く肥厚して、端面に凹線。裾部の円形透かしは貫通していない。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｹｽﾞﾘ	1/8	角閃石極多、石英等・雲母多
10	脚			17.0	細・極多	橙色	脚端部はわずかに肥厚する。端上部を鈍く張り出す。内面横ｹｽﾞﾘ、外面横ﾅﾃﾞ。裾部の円形透かしは2孔1対	1/4	角閃石極多、石英等・雲母
11	脚			17.8	細・極多	橙色	脚端部はほとんど肥厚しない。端上部を張り出して、狭い端面に凹線。内面横ｹｽﾞﾘ、外面縦ﾐｶﾞｷ	1/10	角閃石極多、石英等・雲母
12	脚			22.6	細・極多	にぶい黄橙色	脚端部はほとんど肥厚しない。端上部をわずかに張り出して、端面に凹線。内面横ｹｽﾞﾘ、外面縦ﾐｶﾞｷ	1/20	角閃石極多、石英等

第19図　1区ＳＤ01出土遺物１（１／４）



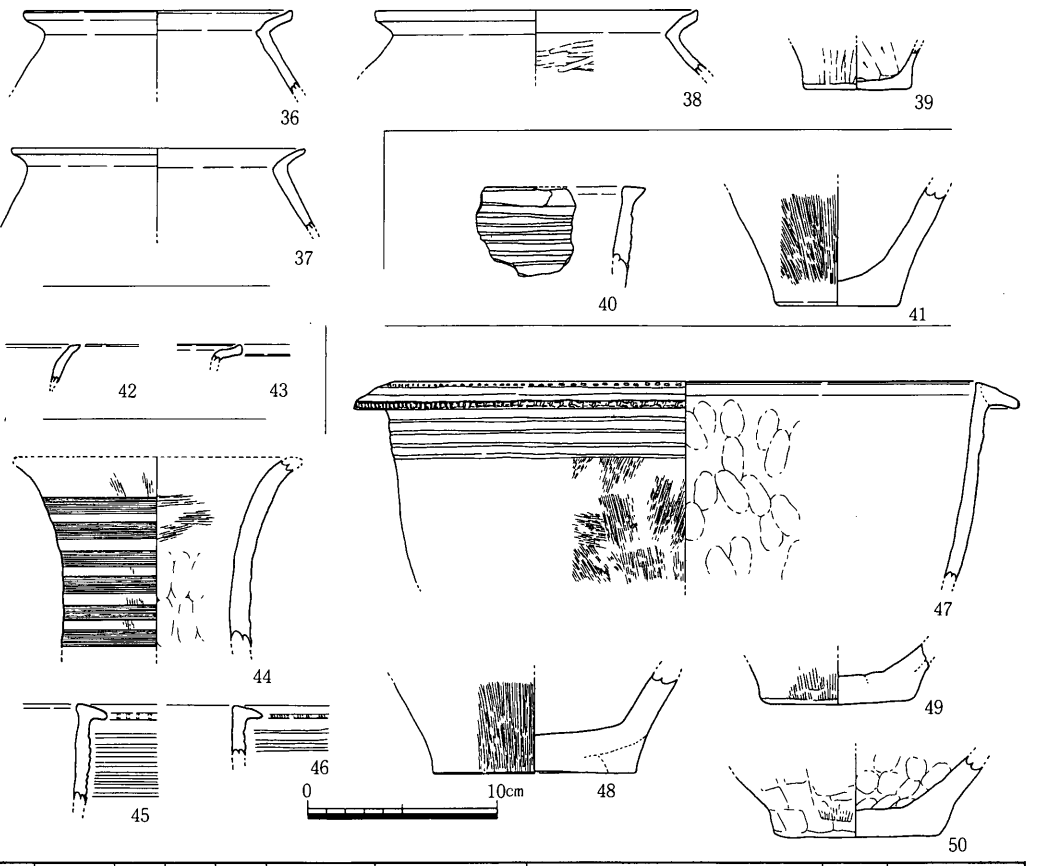
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
13	甕	14.2			細・多	にぶい黄橙色	二重口縁。口縁部は強く折り返し短く開く。立ち上がり部はやや内傾し薄く伸びる。端部丸く納める。立上り部外面剝落。	1/6	石英等多、角閃石少 搬入品（吉備系）
14	甕	12.9			細・極多	橙色	不明瞭な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は小さく摘み上げる。口縁・頸部の横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜。外面縦ﾊｹ内面頸部横ﾊｹ後上半部指押さえ	1/8	角閃石極多、石英等 B類甕
15	甕	16.8			細・極多	橙色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に摘み出すと共に下方もやや突出する。端面に凹線。外面上半部に縦ﾐｶﾞｷか、最大径部に叩き目、内面下半ｹｽﾞﾘ後上半部指押さえ	1/4	角閃石極多、雲母多
16	？			2.8	細・極多	にぶい黄橙色	薄作りで、外面は底面を含めてﾐｶﾞｷ、内面はｹｽﾞﾘ後底面指押さえ	1/2	角閃石極多、石英等・雲母
17	高坏	22.2			細・極多	にぶい黄橙色	上半部は強く外反して開き内面に鈍い凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ内面分割横ﾐｶﾞｷ	1/10	角閃石極多、石英等 B類高坏
18	脚			16.9	細・極多	にぶい黄橙色	脚端部はほとんど肥厚しない。端上部をわずかに張り出して、端面に凹線。内面横ｹｽﾞﾘ、外面横ﾅﾃﾞによる凹面。裾部円形透かし２孔１対。	1/5	角閃石極多、石英等・雲母
19	脚			17.6	細・極多	橙色	脚端部はほとんど肥厚しない。狭い端面に凹線。内面横ｹｽﾞﾘ、外面横ﾅﾃﾞ、裾部の円形透かしは２孔１対	1/8	角閃石極多、石英等
20	脚			14.6	細・極多	橙色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部肥厚せずに凹面	1/6	角閃石極多、石英等・雲母 B類甕
21	甕				細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく摘み上げる。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞにより折り返し部に稜。肩部内面指押さえ顕著		角閃石極多、石英等・雲母多 B類甕
22	高坏	21.0			細・極多	にぶい黄橙色	上半部内面に凹線 上端部顕著	1/8	角閃石極多、石英等 B類甕

第20図　１区ＳＤ01出土遺物２（１／４）



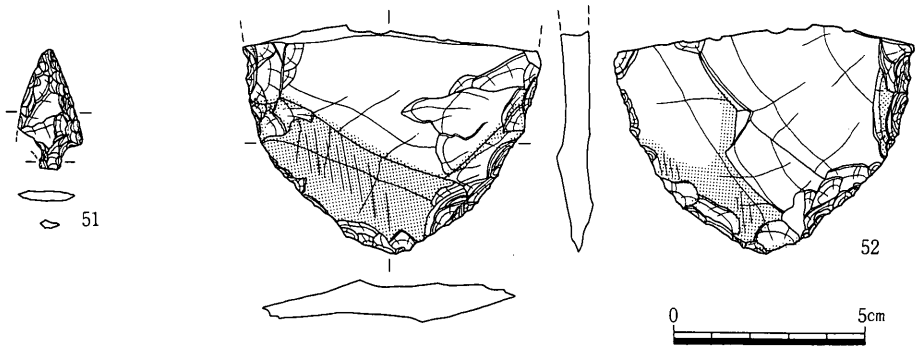
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
23	甕	13.9			細・極多	明褐色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく上下に摘み出す。肩部内面指押さえ	1/12	角閃石極多、石英等
24	甕				細・極多	明褐色	短い不明瞭な頸部から口縁部は緩やかに折り返す。端部は上下に摘み出して狭い端面。肩部内面削り後上端部指押さえ。		角閃石極多、雲母・赤色粒
25	甕	15.8			細・極多	橙色	短く不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に小さく摘み出して狭い端面。頸部内面横ﾅﾃﾞにより凹面、肩部は指押さえ	1/8	角閃石極多、石英等・雲母
26	小形鉢？			3.0	細・極多	にぶい黄橙色　褐灰色	小形の突出気味の底部で開きは弱い。内外面縦ﾐｶﾞｷ	1/2	角閃石極多、石英等・赤色粒
27	甕			4.9	細・極多	明赤褐色　にぶい黄色	薄作り、外面ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘ後底面指押さえ	ほぼ全周	角閃石極多、石英等・雲母
28	高坏	23.8			細・極多	橙色	口縁端部は鈍く外方に摘み出して頂部に狭い平坦面。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部不明	1/4	角閃石極多、石英等・雲母
29	高坏	27.6			細・極多、中・多	橙色	口縁端部は外方に鈍く張り出すと共に内方に小さく突出して頂部に狭い平坦面。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ内面粗い横ﾐｶﾞｷ	1/8	角閃石極多、石英等多
30	高坏	26.9			細・極多	明赤褐色	口縁端部は内方に小さく突出して頂部に狭い平坦面。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ後横ﾐｶﾞｷ、内面分割横ﾐｶﾞｷ	1/2	角閃石極多、石英等多
31	脚			15.8	細・極多	明黄褐色	脚端部は鈍く肥厚して、下方に小さく引き出すと共に上方も小さく突出する。内面横ｹｽﾞﾘ	1/8	角閃石極多、石英等・雲母
32	脚			18.0	細・極多	橙色	脚端部は鈍く肥厚して、下方に小さく引き出し、狭い端面に凹線。内面横ｹｽﾞﾘ	1/6	角閃石極多、石英等・雲母
33	脚			19.0	細・極多	にぶい黄橙色	脚端部は鈍く肥厚して、下方に小さく引き出す。内面横ｹｽﾞﾘ	1/6	角閃石極多、石英等・雲母
34	脚			17.6	細・極多	黄褐色	脚端部はわずかに肥厚する。端上部を鈍く張り出し端面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ、外面横ﾅﾃﾞ。裾部に２段の円形透かし、下段は２孔１対	1/4	角閃石極多、石英等多、雲母
35	脚			16.3	細・極多	明褐色	脚端部は鈍く肥厚して、下方に小さく引き出す。内面下端横ｹｽﾞﾘ上部に絞り目	2/3	角閃石極多、石英等

第21図　１区ＳＤ01出土遺物３（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
36	甕	14.0			中・多	灰白色	口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の横ﾅﾃﾞにより折り返し部に稜。	1/10	石英等多
37	甕	15.3			中・多	灰白色	口縁部短く折り返す。内面横ﾅﾃﾞ	1/4	石英等多
38	甕	16.9			中・多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返し短く開く。口縁・頸部内面の横ﾅﾃﾞにより折り返し部に稜。肩部内面横ﾐｶﾞｷ	1/8	石英等多
39	甕			5.5	細・多	褐灰色　灰白色	薄作りの底部。内面削り、外面縦ﾐｶﾞｷ	全周	石英等多
40	甕				粗・多	灰白色	逆し字状貼り付け口縁剝落。直下に多条化した篦描沈線		石英等多
41	？			6.6	中・多	灰白色	大形の平底だが突出しない。外面縦ﾊｹのち下端部横ﾅﾃﾞ、内面横ﾅﾃﾞ	1/2	石英等多
42	高坏				細・極多	にぶい黄色	口縁部は外反して開き端部尖る。内面に凹線		角閃石極多、石英等多、赤色粒　B類高坏
43	甕				細・極多	橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく摘み上げる。		角閃石極多、石英等・雲母
44	壺				粗・多	浅黄色	外反して伸びる頸部に櫛描沈線６段以上。内面下半指押さえ上半横ﾊｹ	1/3	石英等多、赤色粒
45	甕				中・多	浅黄橙色	突出度の高い貼付口縁。口縁直下に多条化した篦描沈線、口縁端部に刻み目		石英等多
46	甕				中・多	にぶい黄橙色	やや垂れ気味だが突出度の高い貼付口縁。口縁直下に篦描沈線、端部に刻み目		石英等多
47	甕	30.7			中・多	暗褐色	突出度の高い貼付口縁。頂部に刺突文列、外面縦ﾊｹ後篦描沈線４条、口縁端部に刻み目	1/12	石英等多
48	？			10.4	中・多	灰白色	分厚い底部は粘土板２枚を重ねて成形。外面縦ﾊｹ内面ﾅﾃﾞ	1/3	石英等多
49	？			8.2	粗・多少	灰白色	わずかに突出気味で外面縦ﾊｹ	全周	石英等多
50	？			8.7	粗・多	灰白色	厚手で突出気味。外面板ﾅﾃﾞで局部的に縦ﾊｹ残る。内面指押さえ	全周	石英等多

第22図　１区ＳＤ01出土遺物４（１／４）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
51	石鏃	3.1	1.7	0.3	1.5	ｻﾇｶｲﾄ	有茎	一部折損
52	石鏃	5.8	7.8	0.9	47.1	ｻﾇｶｲﾄ	先端部摩耗顕著・刃部擦痕	先端部片

第23図　1区ＳＤ01出土遺物５（１／２）

かぎり搬入品である。器表が剥落して，立ち上がり部の施文は不明だが，形状から吉備系二重口縁甕でも後出的な形態と考えられる。下川津Ｂ類甕（14）は口縁端部の摘み出しが小さい。甕（15）は口縁端部の摘み出しがやや弱いが，後期初頭に位置付けられる。体部最大径以上の内面は顕著な指押さえが観察できる。高坏（17～19）は下川津Ｂ類形態でもやや後出する。

後期初頭に遡る資料を一部含むが，後期後半以降の資料を中心とし，上層との明確な時間差はない。

（20）は西半部の南肩28・29層出土の下川津Ｂ類高坏。（21・22）は同北肩２層出土資料。後者の口縁部形態は下川津Ｂ類高坏でも古い様相を示している。

（23～35）は西半部のⅡ２層出土遺物。甕（23～25）は口縁部がやや伸びると共に，端部の摘み出しをまだ残すもののひどく矮小化している。口縁部拡張形態の高坏（28～30）は口縁部を肥厚させるだけで端部の摘み出しは微弱，中位の屈曲もやや鈍い。脚端部（31～35）の肥厚も同様に退化している。本層出土資料は，後期初頭でも最も新しい様相を示すものである。

Ⅲ層出土遺物（36～39）は少ないが，単一時期の様相を持つ。甕（36・37）の口縁端部は小さく面取りするだけで肥厚・拡張はしない。また（38）では体部内面にミガキ調整を認める。弥生中期中葉に位置付けられる。

（40・41）は最下層Ⅳ層出土資料。前者は剥落しているが「Ｌ」字状貼付口縁の甕。口縁部直下に多条化した篦描沈線文がある。底部（41）は分厚い頑丈な平底形態で外面ハケ調整。共に前期後葉に比定でき，本溝開削年代の下限を示すものである。

（42・43）は東半部の上層出土資料。前者は下川津Ｂ類高坏口縁部でやや古い様相を示す。後者は同類の甕口縁端部片。

（44～50）は同下層出土遺物。櫛描並行沈線を６段以上めぐらす壷頸部（44）は中期前葉まで下るであろう。多条化した箆描沈線文を持つ「Ｌ」字状貼付口縁甕（46・47）は前期後葉に比定できる。これらは口縁端部に刻み目を加え，(47)では頂部に刺突文をも施す。

（51）は上層出土の有茎鏃。明瞭な逆刺を作り出す。（52）は石鏃刃部片。縁辺部の二次調整は浅く粗雑である。

ＳＤ02

ＳＤ02はＢ－０区で検出し，大溝北岸に並走する。約0.5ｍの間隔を以て同規模・同形のＳＤ03が並行する。残りの良い部分で幅１ｍ前後，深さ0.4ｍを測り，断面逆台形を呈する。床面レベルは標高15.8～16ｍでわずかに東に下る。西半部では下層に薄く黄白色粘土（地山土）を含む黒灰色シルト層が堆積し，上位には黒灰色シルト層を見る。なお堆積状態から西半部ではＳＤ02が先行し，後にＳＤ02ｂに付け替えたと見られる。

本溝では殆ど遺物が検出できず，わずかに図示しえたのは底部片（57）１点にすぎない。比較的シャープな形状で，内面ケズリ調整のち指押さえを見る。後期前半に位置付けられようか。

ＳＤ03

南側で並走するＳＤ02とほぼ同規模・同形であるが，それよりも0.1ｍほど浅い。堆積状態も類似していて黒灰色シルト層を主体とし，下層に薄く地山土ブロックを含む部分がある。ごく少量の時期比定困難な土器細片を検出したにすぎない。

本溝も出土遺物が乏しく，図示しえたのは体下半部片（56）にすぎない。胎土と形状から弥生後期段階の資料であることは間違いない。

ＳＤ01ｂ

Ａ・Ｂ－２区で検出したＳＤ01より分岐する小溝。削平が著しく幅1.1m，深さ0.15ｍ程度の断面皿形でしか残存していない。埋土は黒灰色シルト層である。

（53）は「Ｌ」字状貼付口縁の甕。（54）は頑丈な分厚い大形平底で，鈍く突出する。共に前期後葉に位置付けられる。高坏脚部片（55）はやや大形の円形透かしを裾部に持ち，端部は丸く納める。後期前葉～中葉に比定できるであろう。

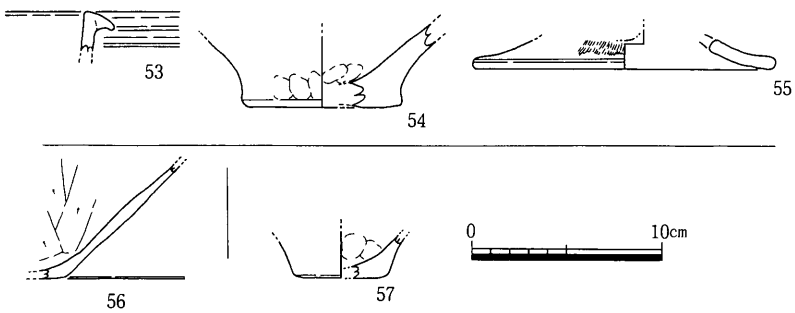
SD02c

B－1区で検出した小溝でやはりSD01から分岐すると思われる。削平・撹乱により幅0.8m，深さ0.1mの断面皿状に確認できたに過ぎない。埋土は黒褐色シルト層で，SD01bの肩部を切って穿たれている。

SD04・05

削平の著しいB－0区北端で痕跡的に検出した小溝である。各々検出幅0.2m程度，深さも0.1m以下で遺物は検出していない。位置関係・方向からやはり一連の溝と考える。

以上示したように本溝は弥生時代前期後半以前に開削され，途中埋没と改修を最低3回重ねながら，本水路群の基幹水路として弥生時代末ないしは古墳時代初頭まで機能している。その間付帯小水路はたびたび付け替えられた可能性が高いがその詳細は確認できなかった。4区SD16と同様の機能が想定でき，かつそれよりも存続期間がはるかに長い。

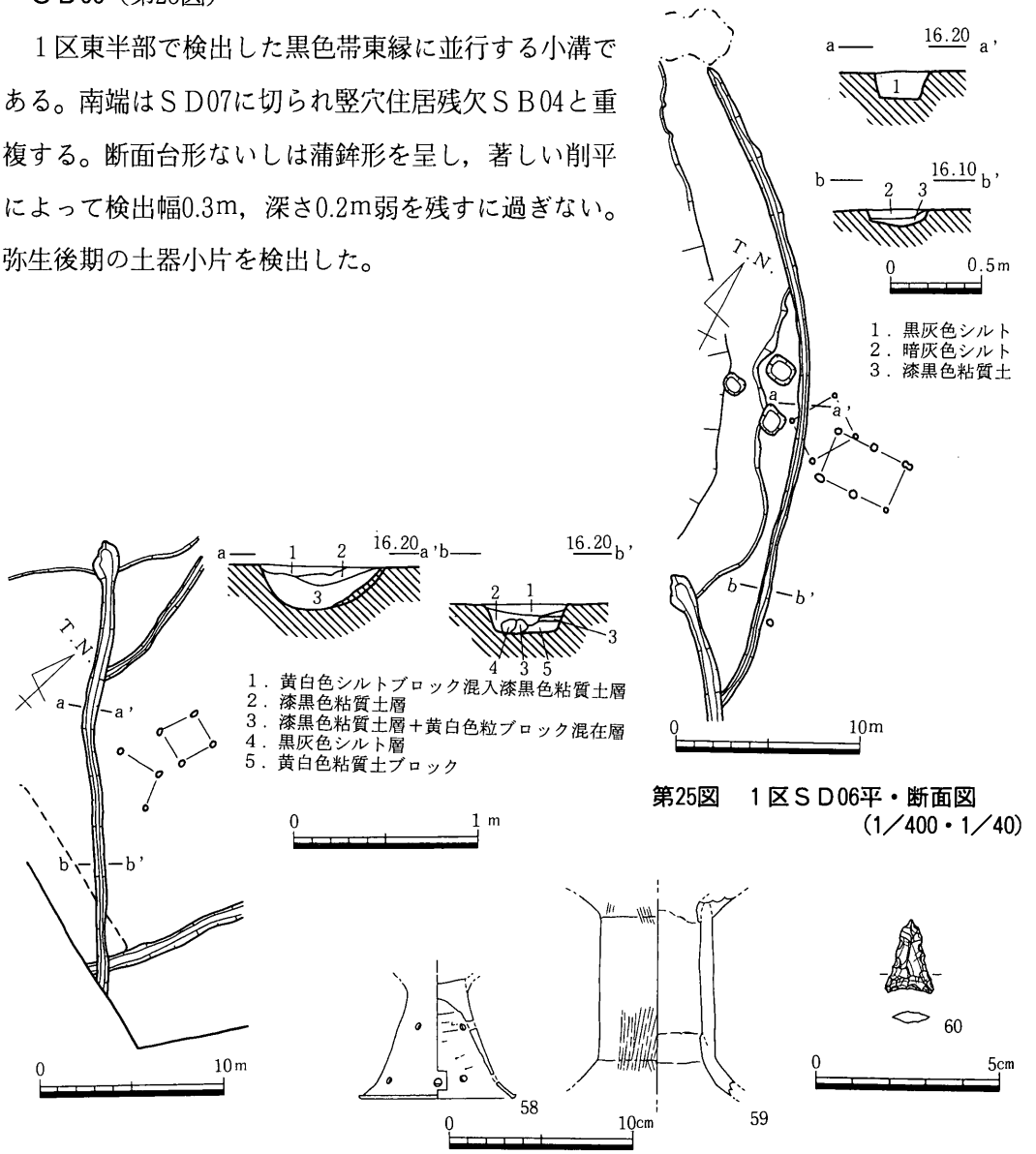


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
53	甕				粗・多	にぶい黄橙色	やや垂れ気味だが突出度の高い貼付口縁。口縁直下に篦描沈線		石英等多
54	?			8.2	中・多	灰白色	分厚い突出底。底部縁辺は指押さえ	1/3	石英等多
55	脚			15.8	細・極多	にぶい黄褐色	脚裾は強く開き端部肥厚気味に丸く納める。外面縦ﾐｶﾞｷ内面横ﾅﾃﾞで大形の円形透かし	1/8	角閃石極多
56	?				細・極多	明褐色	薄作りで内面ｸｽﾞﾘ		角閃石極多
57	?			4.9	中・普	灰白色	薄手の小形平底。内面指押さえ	1/4	石英等

第24図　1区SD01付帯小溝群出土遺物（1／4）

ＳＤ06（第25図）

１区東半部で検出した黒色帯東縁に並行する小溝である。南端はＳＤ07に切られ竪穴住居残欠ＳＢ04と重複する。断面台形ないしは蒲鉾形を呈し，著しい削平によって検出幅0.3m，深さ0.2m弱を残すに過ぎない。弥生後期の土器小片を検出した。



第25図　１区ＳＤ06平・断面図
（1／400・1／40）

挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
58	脚			8.2	細・極多	黄褐色	脚端部は肥厚せずに小さく外反して丸く納める。内面横ｸｽﾞﾘで２段に円形透かし	7/8	角閃石極多
59	脚				細・極多	にぶい黄橙色	わずかに中膨らみの柱状軸部。外面縦ﾊｹ、内面ﾅﾃﾞか	全周	角閃石極多

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
60	石鏃	1.9	1.3	0.3	0.5	ｻﾇｶｲﾄ	凹基	

第26図　１区ＳＤ07平・断面図（１／400・１／40）および出土遺物（1／４・1／２）

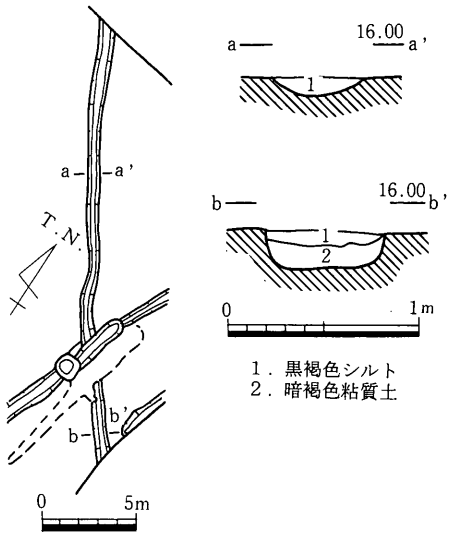
ＳＤ07（第26図）

１区東端で検出した東西溝で東流する。掘立柱建物ＳＢ07との併存は困難であろう。検出幅0.5～0.7ｍで深さ0.2ｍを残す。

出土遺物は多くない。(58）は円錐形の高坏脚部。脚端部を小さく外反する。やや小形の円形透かしを２段に配する。(59）は高坏円柱状軸部。共に弥生後期初頭に比定できる。(60）は小形の凹基式石鏃。二次調整は深くまで及び，中心部に稜を持つ。

ＳＤ08（第27図）

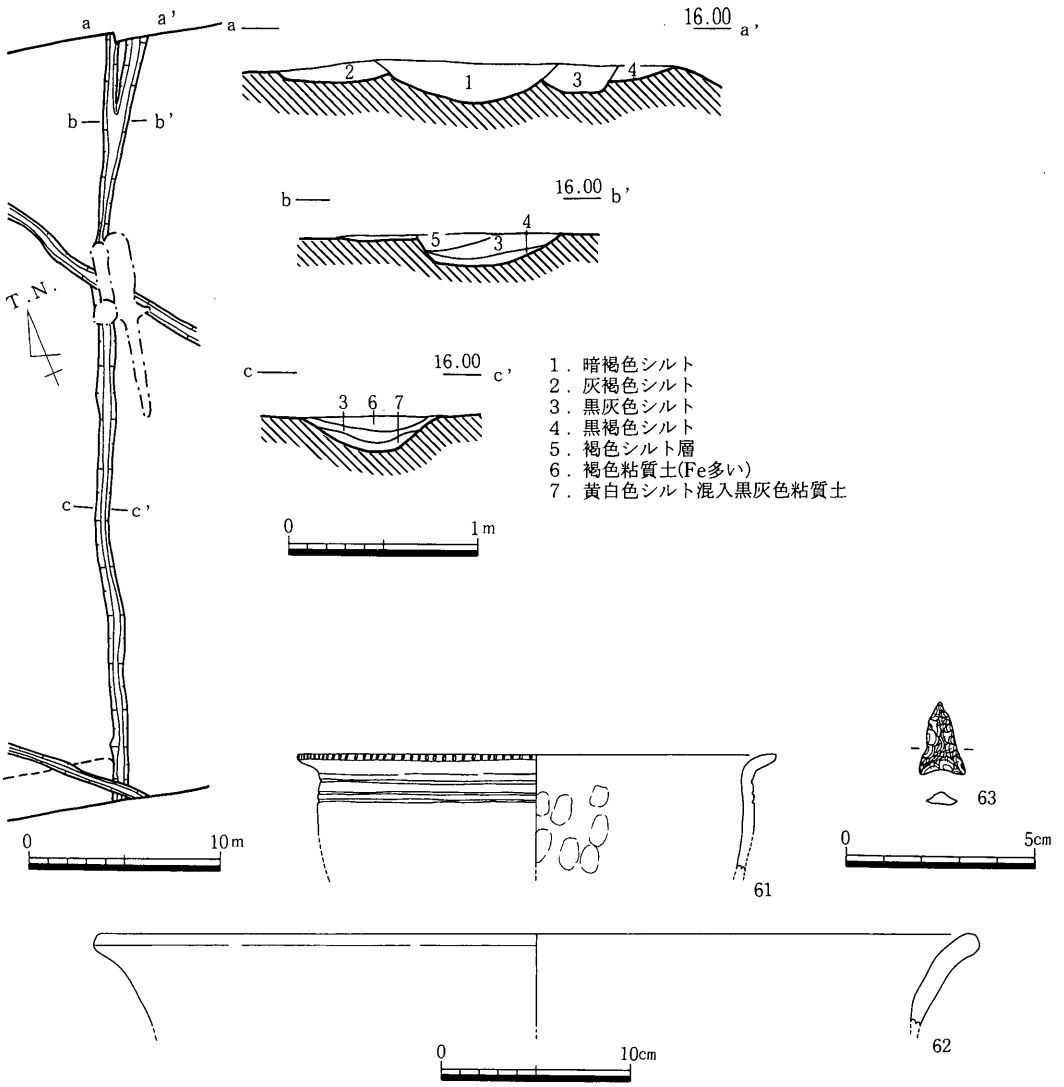
１区東端で確認した小溝である。ＳＤ07に並行する方向をもつ。検出幅0.5～0.8m，深さ0.1～0.2ｍを残すに過ぎない。床面レベルから東流が推定できる。埋土や周辺遺構の状況から弥生時代後期と推定できる。



第27図　１区ＳＤ08平・断面図（1／400・1／40）

ＳＤ09（第28図）

１区東端，すなわち第２微高地東縁に沿う南北溝で北端で分岐する。ＳＤ07・08に切られる。断面蒲鉾形を呈し検出幅0.7ｍ前後，深さ0.2ｍを測る。ごく少量の弥生時代前期資料を包含する。如意状口縁の甕（61）は端部に刻み目を配し，口縁部直下には箆描沈線３条をもつ。前期中葉に位置付けられる。(62）は大形壷口縁部。口縁部はやや角張り鈍く外反する。胎土中に片岩粒を含む搬入品である。(63）は小形の凹基式石鏃。縁辺の調整剥離は比較的深く整っている。出土遺物から弥生時代前期に位置づけられる。



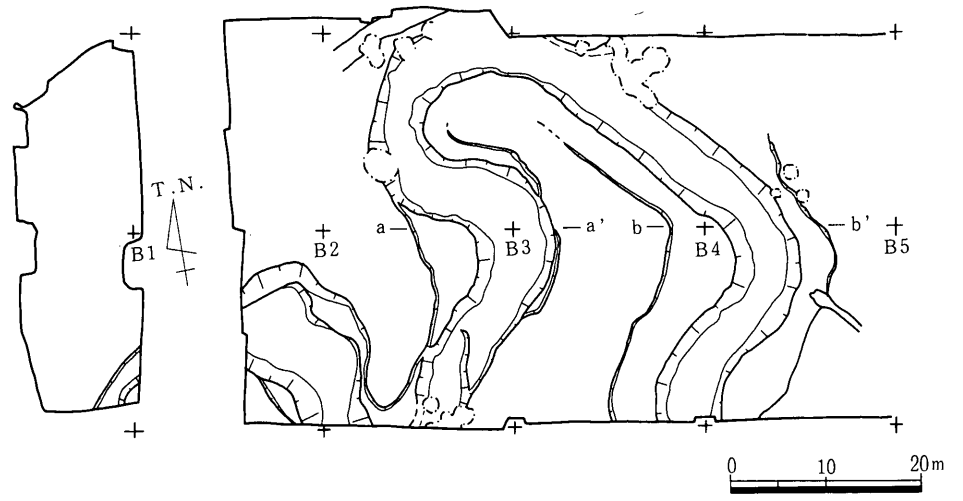
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
61	甕	25.0			粗・多	灰白色	如意状口縁。端部刻み目、直下篦描沈線3条	1/16	石英等多
62	壺	46.0			中・普	橙色	口縁部は鈍く外反して開き四角く納める	1/12	片岩　搬入品

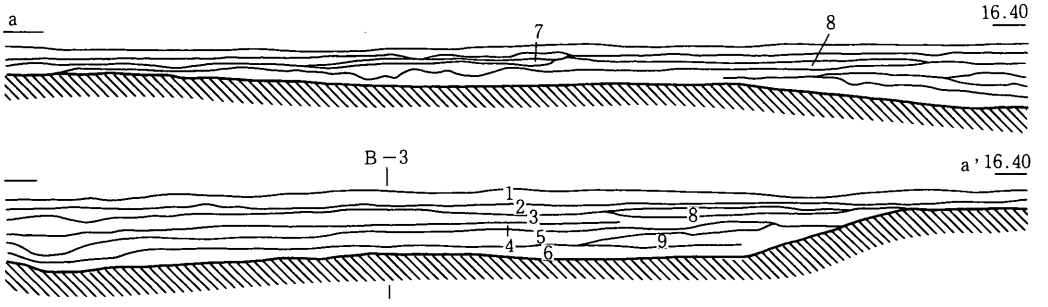
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
63	石鏃	1.9	1.2	0.3	0.4	ｻﾇｶｲﾄ	凹基	

第28図　1区ＳＤ09平・断面図（1／400・1／40）および出土遺物（1／4・1／2）

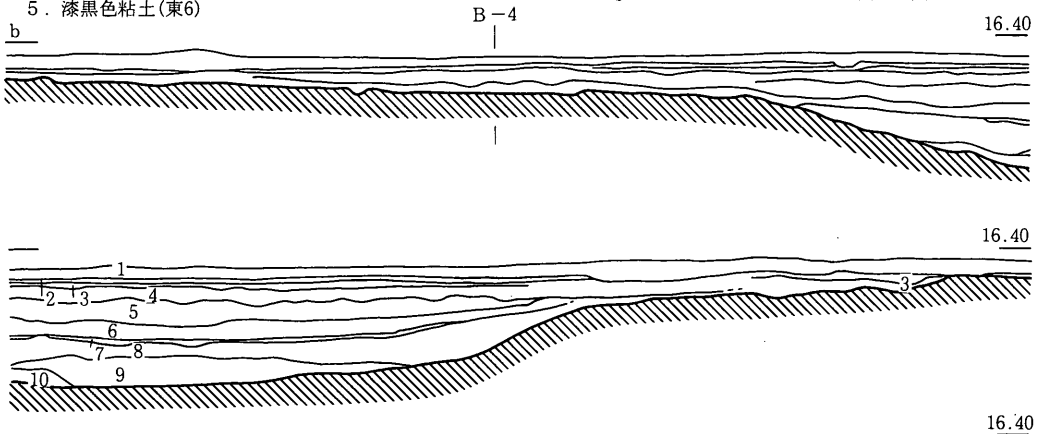
ＳＲ01（第29～36図）

1区中央部～西部にかけて検出した小規模な自然河川で，極端に蛇行して流れる。検出幅は5.2m～17mと変化が大きい。深さは最大でも0.8m程度と浅いが，床面は地山下部の灰色砂礫層に達している。床面はやや起伏に富み，流下方向は確定できていない。堆積層

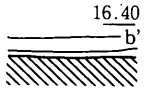


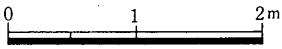


1．耕作土・暗灰色シルト(東1)
2．耕作土・床土撹乱層　灰黄色＋明燈色シルト(東2)
3．暗灰色シルト　上部Ｍｎ少・中下Ｆｅ堅斑少(東3･4)
4．黒灰色～黒褐色粘土　Ｆｅ堅斑(東5)
5．漆黒色粘土(東6)
6．黒灰色砂質土　1cm大風化円礫少(東8～10？)
7．暗灰色砂層　1～3cm大風化円礫多
8．暗灰色粘質土(東部3層か)
9．黒灰色シルト層(6層より粗く風化礫含まず)

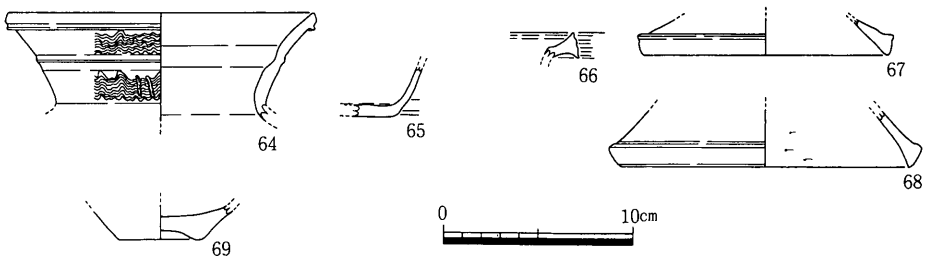


1．耕作土・暗灰色シルト層
2．床土・明燈白シルト層　Ｍｎ沈着
3．暗灰色粘質土層　Mn沈着
4．暗灰色シルト　灰白色細砂混入　Ｆｅ少量
5．暗灰色粘土　堅にＦｅ斑あり
6．漆黒色粘土層
7．黒灰色シルト　炭細粒多､灰色シルトラミナ
8．漆黒色シルト　5mm風化礫少　Ｆｅ堅斑少
9．漆黒色砂質土層　1cm大風化礫多い
10．暗灰～黒灰色砂礫層　1～2cm大風化円礫多





第29図　１区ＳＲ01平・断面図（１／800・１／60）



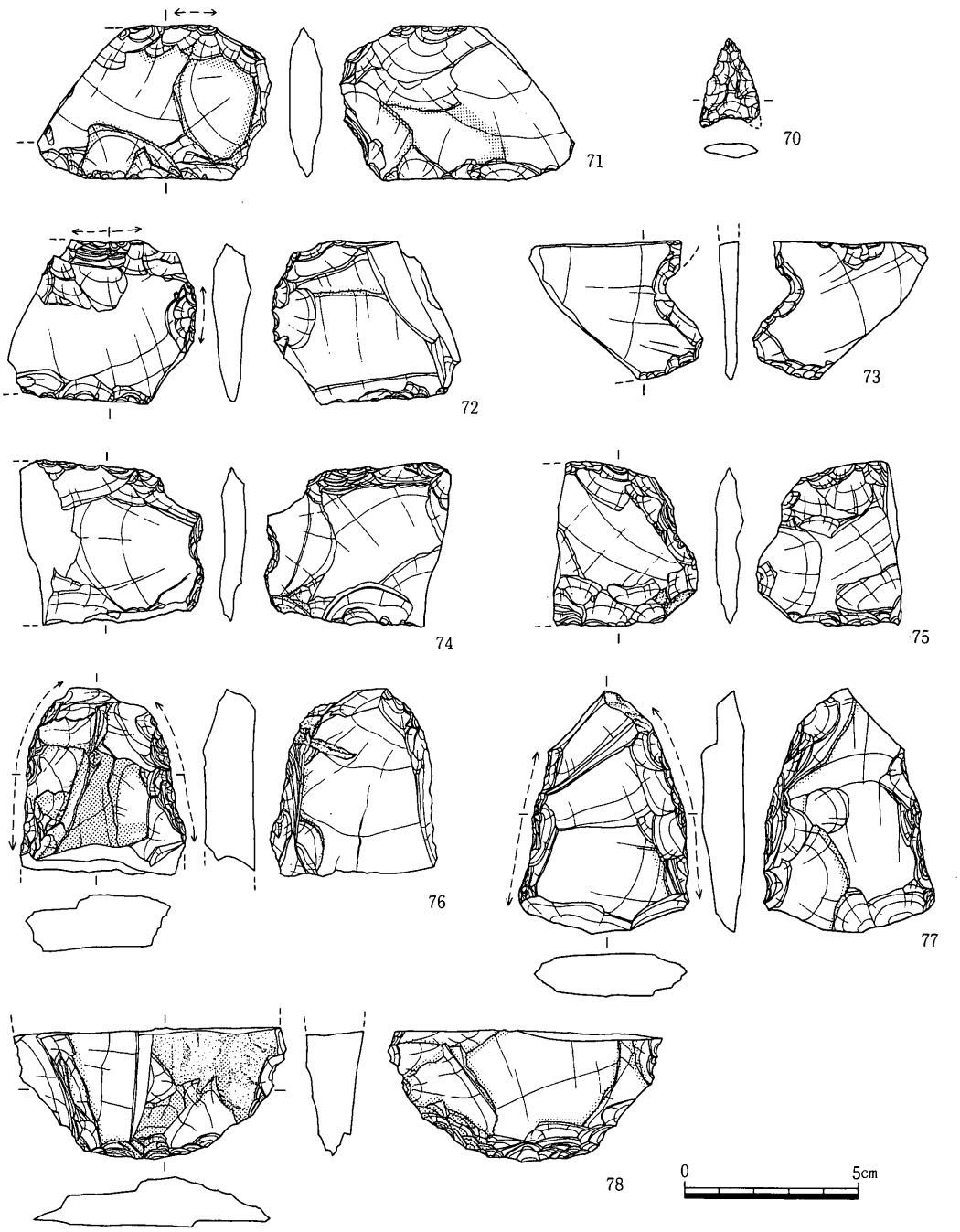
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
64	須恵器小形甕	16.0			細・少	青灰色	口縁端部は四角く納め、直下と頸中位に小突帯。頸部に櫛描波状文２段　TK208並行か	1/8	石英等少
65	須恵器坏				細・少	灰白色	やや厚手で体部は直線的に立ち上がる。回転ﾅﾃﾞ8C-9C前半		石英等少
66	甕？				細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に小さく摘み出して端面に凹線。口縁部内面の横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜		角閃石極多
67	脚			12.8	細・極多	明褐色	脚端部は鈍く肥厚し、下方に小さく引き出すと共に上方も鈍く突出する。内面横ｹｽﾞﾘ	1/8	角閃石極多、雲母・石英等
68	脚			15.0	細・極多	にぶい黄橙色	脚端部は鈍く肥厚し、下方に小さく引き出すと共に上方も鈍く隆起する。内面横ｹｽﾞﾘ	1/12	角閃石極多、雲母・石英等
69	？			4.2	細・普	橙色　灰黄褐色	明瞭な窪み底で体部はよく開く	全周	石英等

第30図　１区ＳＲ01出土遺物１（１／４）

下層は１～３cm大の風化礫を多量に含む黒灰色粘質土層からなり，中位に黒色～漆黒色粘質土層，上層にやや淡い黒灰色シルト・粘質土層が堆積する。また上層堆積後，すなわちＳＲ01がほぼ埋没した段階の凹地に薄く堆積した暗灰色シルト層が認められる。包含遺物は少ないが４区などで確認した古墳時代後期～中世包含層に対応する層であろう。

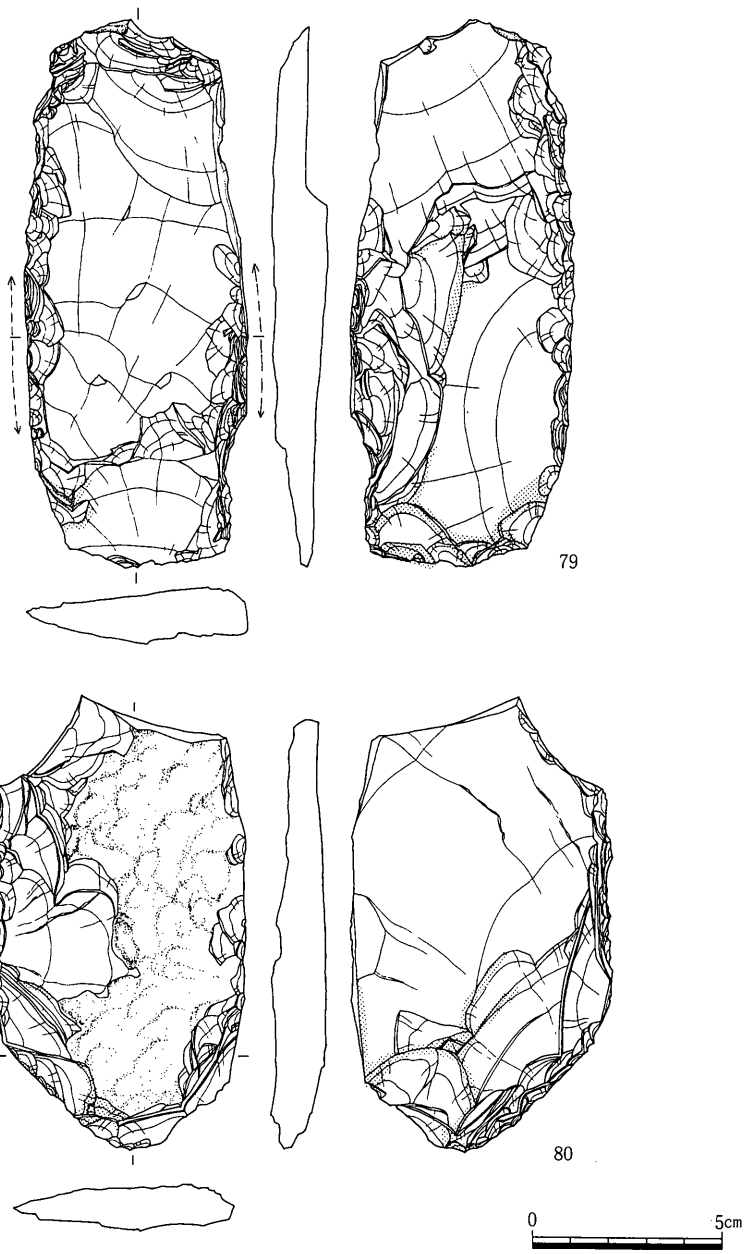
遺物では比較的まとまった量の石器は出土しているが，土器は全般的に多くない。図化した石器は全て中・下層出土資料である。須恵器（64・65）は上面付近で検出した資料である。前者は単純に丸く納めずにやや上方に摘み出した口縁端部形態や，口頸部の突帯から TK208式並行期に比定できる小形の甕である。本遺跡でこの時期の資料は他にない。後者はやや厚手ながら，体部は強く屈曲してかなり直線的に開く形態の坏。平安初頭まで下る可能性がある。これらはむしろ上位の暗灰色シルト層に帰属する可能性が高い。

（66～68）は上層出土資料。（66）は口縁端部を鈍く肥厚した甕小片。脚（67・68）は端部を肥厚しつつやや下方に摘み出す。これらは後期初頭でも新しい様相を示すが，ＳＤ20Ⅱ２層資料よりはやや先行するであろう。中・下層出土資料は大部分が細片で図化し得るものは殆どないが，胎土などからみて縄文晩期～弥生前期に位置付けられると思われる。図示した底部片（69）も明瞭な凹み底をもち，縄文晩期に遡るものであろう。



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
70	石鏃	2.2	2.2	0.3	1.0	サヌカイト	凹基	
71	打製石庖丁	6.2	4.3	0.9	36.2	サヌカイト	稜部摩耗	折損
72	打製石庖丁	5.2	4.5	1.1	28.3	サヌカイト	右面稜部摩耗微弱	折損
73	打製石庖丁	4.4	3.8	0.8	12.5	サヌカイト	背部折り取り面	折損
74	打製石庖丁	5.2	4.6	0.9	25.3	サヌカイト		折損
75	打製石庖丁	4.2	4.6	0.9	20.4	サヌカイト		折損
76	石鏃	5.2	4.7	1.4	49.1	サヌカイト	側縁折り取り面　左面摩耗顕著	基部片
77	石鏃	6.8	4.9	1.3	50.1	サヌカイト	稜部摩耗微弱	
78	石鏃	3.8	7.9	1.3	46.0	サヌカイト	摩耗顕著	先端部片

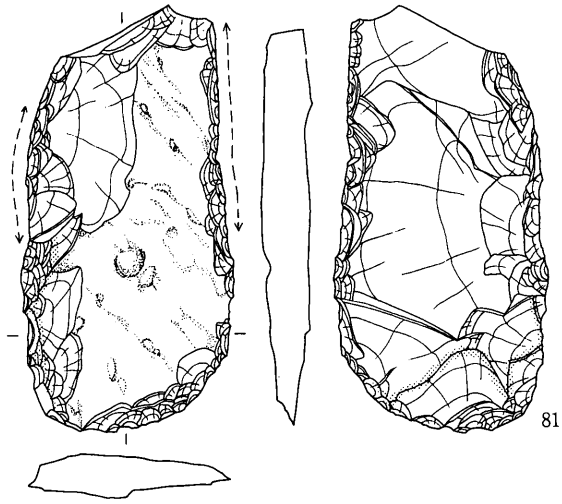
第31図　１区ＳＲ01出土遺物２（１／２）

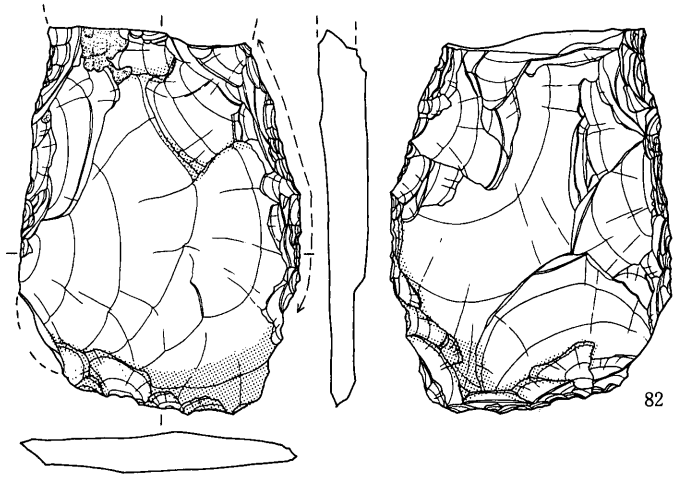


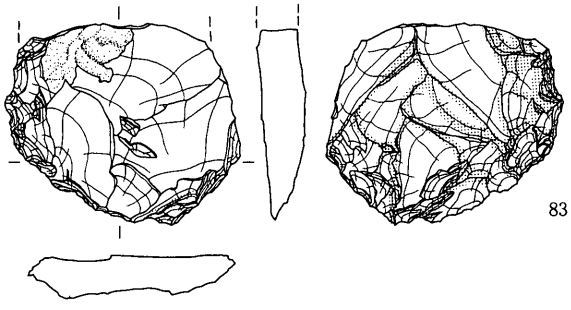
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
79	石鏃	14.2	5.7	1.5	146.0	ｻﾇｶｲﾄ	一側縁折り取り面　右面先端部摩耗	
80	石鏃	12.0	6.9	1.5	136.6	ｻﾇｶｲﾄ	一側縁折り取り面　先端部摩耗	

第32図　1区ＳＲ01出土遺物３（１／２）

石鏃（70）は凹基式でやや扁平。二次調整はやや浅く必ずしも中心部まで及ばない。（71）は抉りはないが，背部と刃部の作り分けが明確なので石庖丁とした。（72・74・75）は短辺に抉り部の作出を意図したような大きな剥離面を持つが，その形状は明瞭ではない。

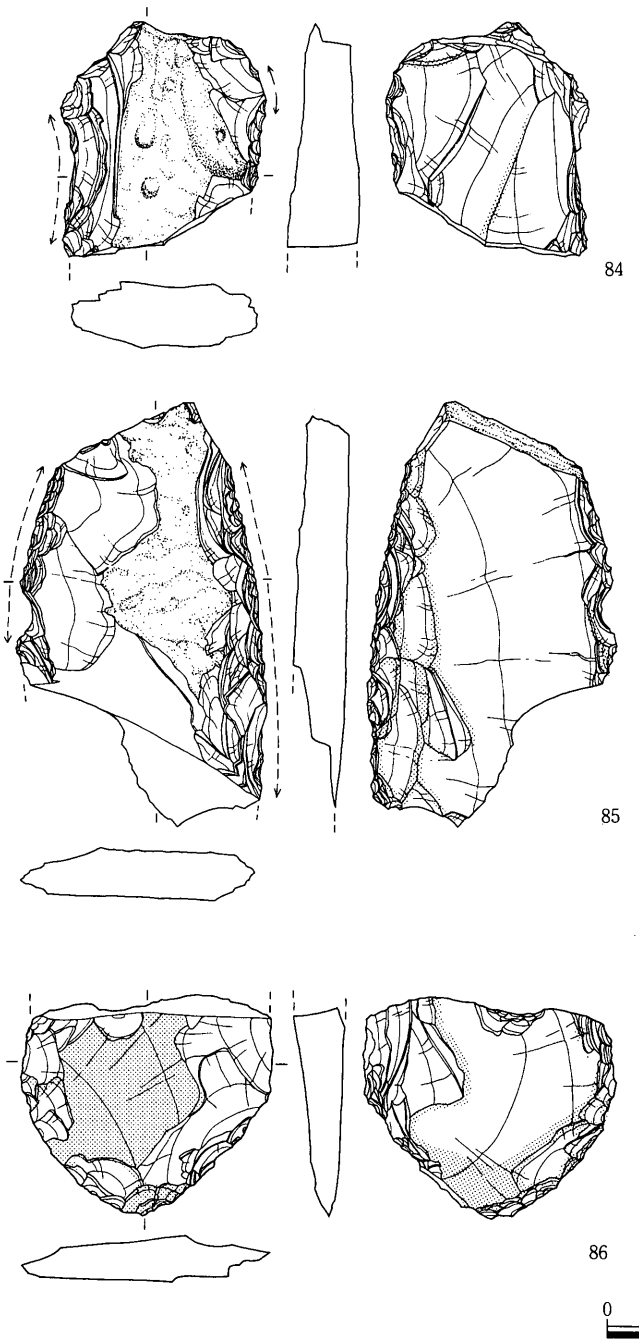






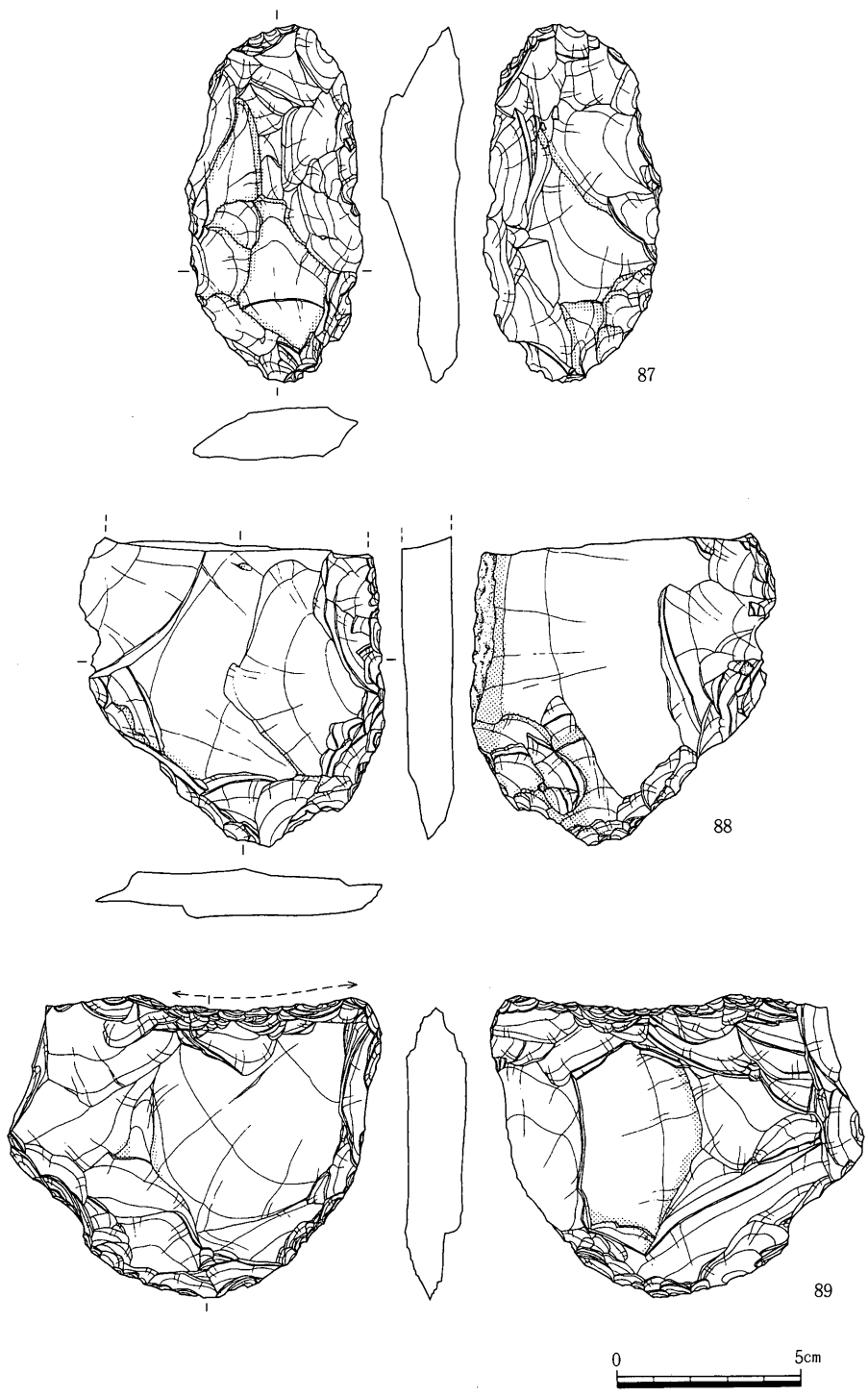
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
81	石鏃	10.9	5.7	1.3	97.8	ｻﾇｶｲﾄ	両側縁潰し　先端部摩耗微弱	
82	石鏃	9.9	7.4	1.4	117.4	ｻﾇｶｲﾄ	先端部摩耗顕著	基部折損
83	石鏃	5.2	6.0	1.2	53.3	ｻﾇｶｲﾄ	右面摩耗	先端部片

第33図　１区ＳＲ01出土遺物４（１／２）



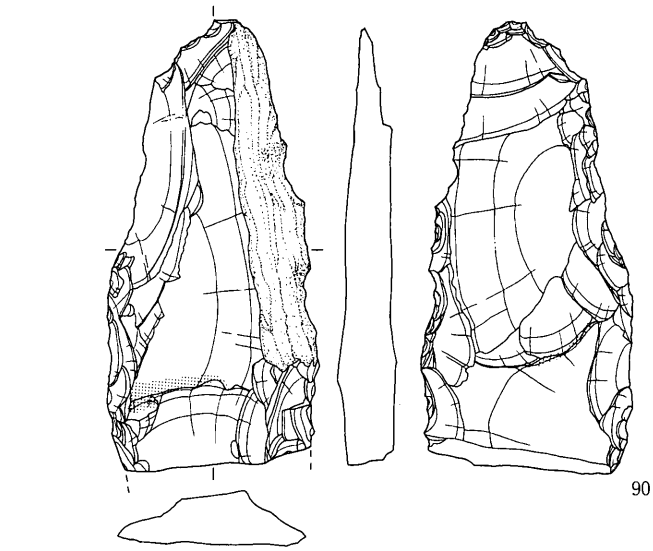
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
84	石鏃	5.9	5.4	1.8	67.5	サヌカイト	両側縁潰し　右面鋸部摩耗微弱	基部片
85	石鏃	11.1	6.6	1.5	118.5	サヌカイト	両側縁潰し　右面鋸部摩耗	先端部折損
86	石鏃	5.3	6.5	1.4	51.1	サヌカイト	先端部摩耗顕著	先端部片

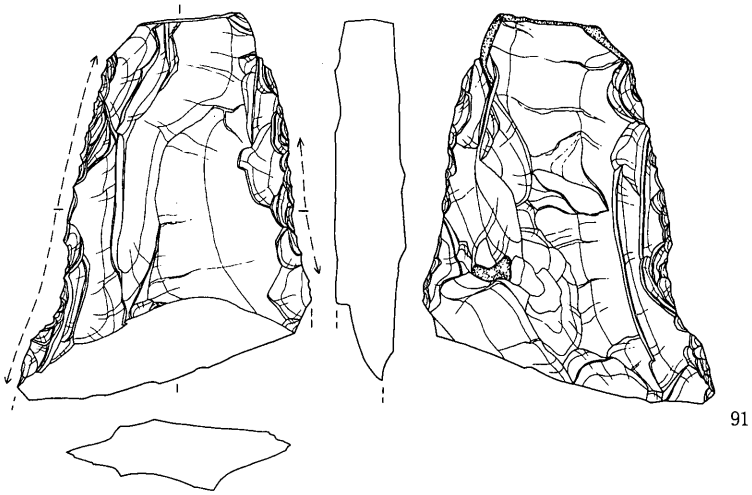
第34図　１区ＳＲ01出土遺物５（１／２）

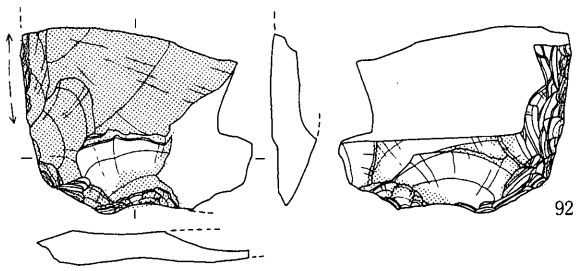


挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
87	石鏃	9.6	4.7	2.1	93.1	サヌカイト	稜部摩耗微弱	
88	石鏃	8.2	8.1	1.4	123.4	サヌカイト	右面摩耗顕著	基部折損
89	?	10.4	8.0	1.6	165.5	サヌカイト	稜部摩耗微弱	

第35図　１区ＳＲ01出土遺物６（１／２）







0 5cm

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
90	石鏃	11.4	5.5	1.6	106.6	ｻﾇｶｲﾄ	摩耗	先端部折損
91	石鏃	10.2	6.9	1.9	136.8	ｻﾇｶｲﾄ	両側縁潰し	先端部折損
92	石鏃	4.9	6.1	1.1	36.2	ｻﾇｶｲﾄ	左面摩耗顕著	先端部片

第36図　１区ＳＲ01出土遺物７（１／２）

(73) は大形剥片を打割して素材とする。背部は二次調整を加えず，折り取り面をそのまま残す。石鏃基部片（76）も大形剥片を打割して素材とし，側縁に折り取り面を残す。(79・80) も同様である。石鏃は全般的に側縁・刃部の整形が粗雑で横長剥片あるいは分割した大形剥片からなる素材の形状を大きく改変していない場合が多い。その中で小形で舌状を呈する（87）は両面とも側縁からの調整剥離が深く及んでいる。

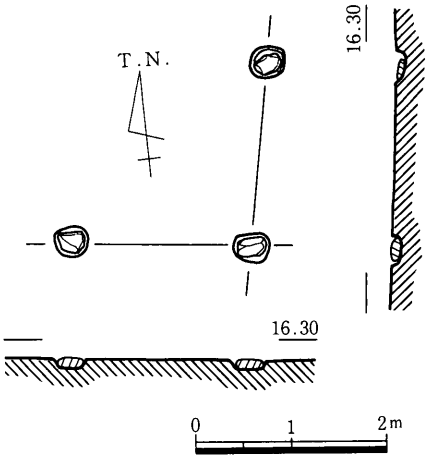
以上少量の資料からではあるが，ＳＲ01は縄文晩期～弥生前期にかなりの程度まで埋没が進行し，遅くとも弥生後期段階には河川機能はほぼ失いわずかな凹地であったにすぎないであろう。その部分も平安期の終わりまでには平準化している。

3．中世以降の遺構・遺物

ＳＢ01（第37図）

１区中央部で検出した建物残欠である。３穴のみを確認している。黒色帯湾曲部に位置し，本建物とＳＢ02・03が近接して東西に並ぶ。

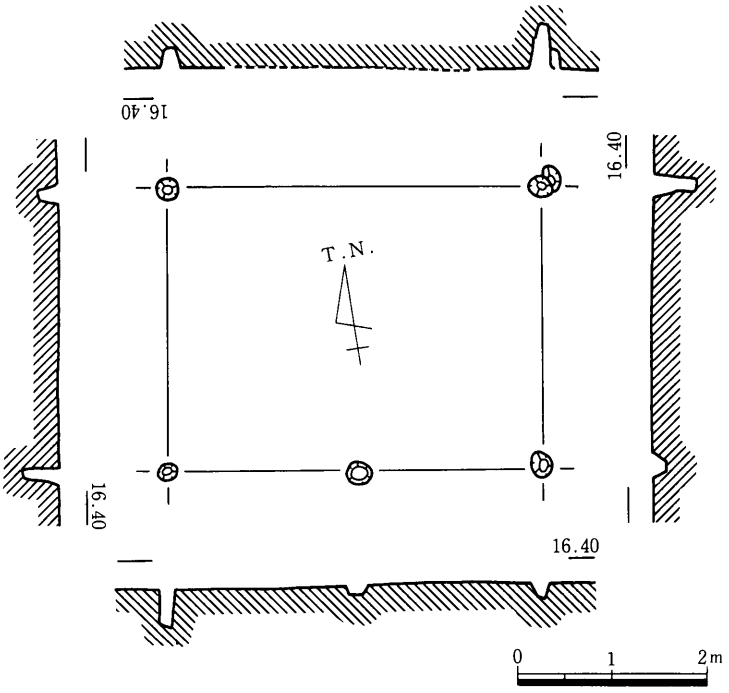
確認した３穴は東西1.9m，南北1.8mの間隔を以て直角に配される。いずれも径0.3m強の不定円形を呈し，残存深は0.1m前後にすぎないが，掘り方いっぱいに平石が据えられ，その上面はほぼ遺構検出面と一致し，標高16.0mに揃っている。周辺遺構の状況から，本遺構についても一定程度の削平を想定する必要がある。しかし掘り方内に据えられた平石は形状・設置状態から掘立柱建物柱穴の根石より，礎石に近い機能を想定したほうが良いであろう。伴出遺物はないが灰白色～黄白色系統のシルト質土を主体とする埋土から近世遺構と想定する。



第37図　１区ＳＢ01平・断面図（１／80）

ＳＢ02（第38図）

１区中央で，一部分はＳＲ01埋没面に展開する掘立柱建物である。東西にほぼ同一軸をもつ掘立柱建物ＳＢ01・03が接している。本建物は桁行２間（3.9m），梁間１間（3.0m）の側柱建物で，主軸方位はN81° E，床面積11.7㎡を測る。なお北東隅柱のみ２穴が重複し，北側列の中央穴は近世土坑と重複して残存しない。



第38図　1区ＳＢ02平・断面図（1／80）

柱掘り方は概ね径0.2m前後の不定円形を呈し，残存深は北東・南東隅2穴が約0.4mと一際深い他は0.1～0.2mにすぎない。桁行方向の柱間は1.9～2.0m，梁間方向では2.9mとなる。

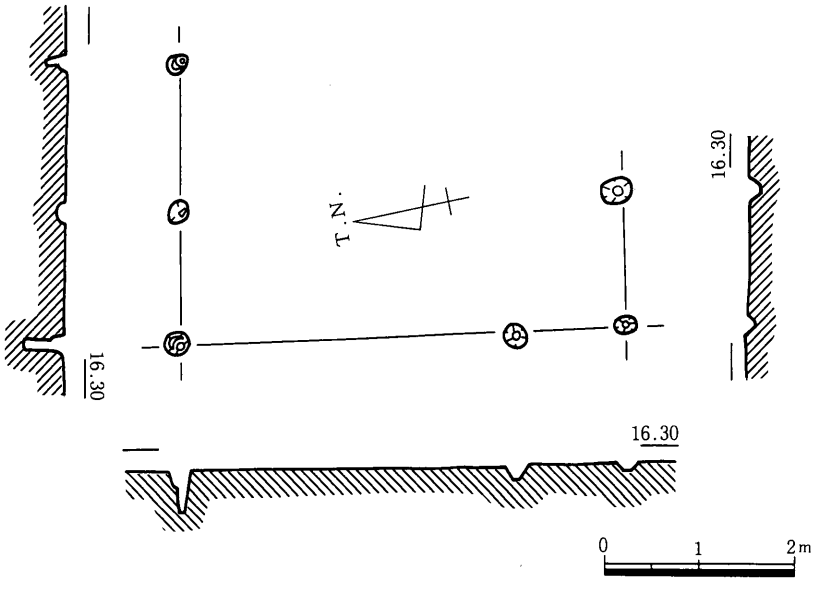
伴出遺物はないが，灰白色～黄白色系統のシルト質土を主体とする埋土から近世遺構と想定する。

ＳＢ03（第39図）

1区中央部で検出した建物残欠と考えられる柱穴群である。3穴のみを確認している。黒色帯埋没層上面で検出し，本建物とＳＢ01・02が近接して東西に並ぶ。

ほぼ等間隔で東西に並ぶ3穴と，4.7m南側に並行する2穴など6穴を確認している。これら全体で1棟の建物を構成するとすれば南北4.7m，東西2.9m以上の規模となる。柱穴はいずれも径0.2m強の不定円形を呈し，北側両端2穴が残存深0.2～4.1mに達する以外は，1m前後を残すに過ぎない。

伴出遺物はないが灰白色～黄白色系統のシルト質土を主体とする埋土から近世遺構と想定する。



第39図　1区ＳＢ03平・断面図（1／80）

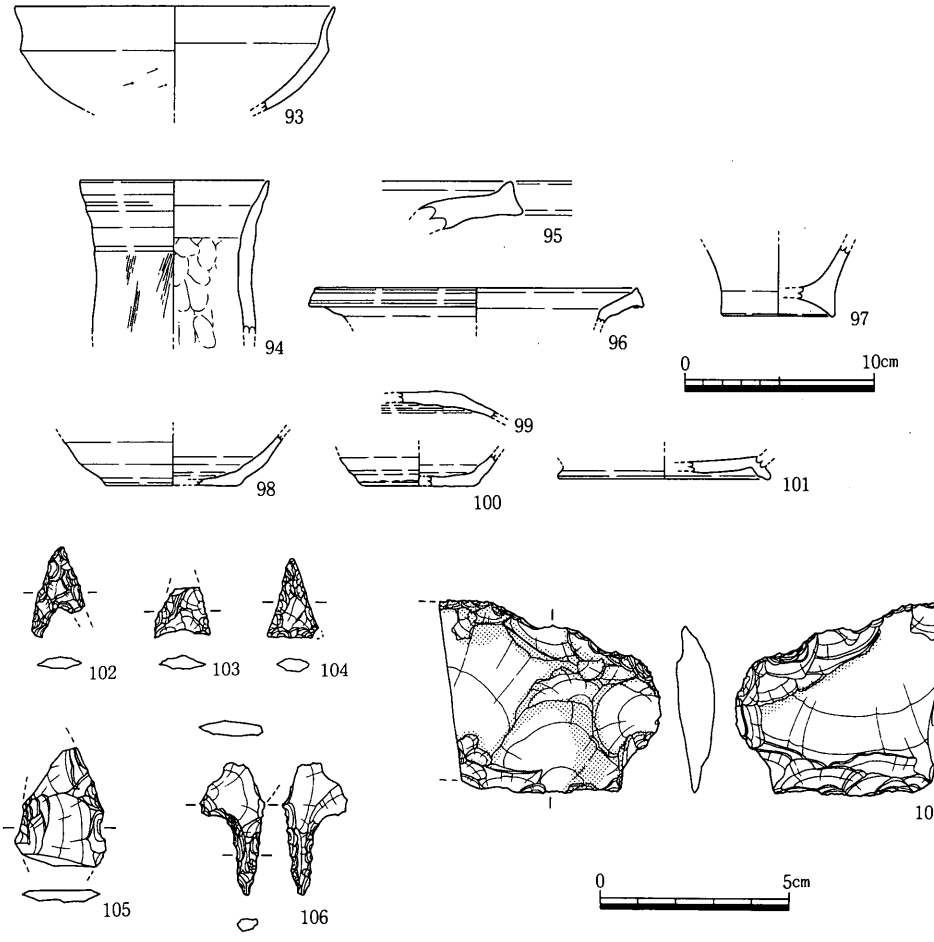
その他の遺物（第40・41図）

高坏（93）は1区東北端の微高地斜面堆積層（黒褐色粘質土層）出土遺物。深めの坏部で中位で鈍く屈曲して上半部は短く外反する。後期前葉～中葉に比定できる。

直口壷（94）は口縁部付近にだけ鈍い凹線文を見る。（95）は大形の広口壷口縁部片。端部の拡張は弱い。（96）も口縁端部の肥厚・拡張が微弱である。（97）は明瞭な凹み底の形態を持つ。これらは弥生後期初頭～前葉に比定できる。須恵器坏（98・100）は平安時代前半期に下る資料。（99・101）はこれより遡る資料であろう。

（102・103）は深く抉れ込んだ小形の凹基式。縄文時代に遡るものであろうか。小形平基の（104）は二次調整が浅く扁平な形態。（105）は大形鏃だがやはり二次調整は浅く扁平な形態をとる。（107）は短辺に抉り部を認めないが，粗雑ながら背部と刃部の作り分けがみられるので打製石庖丁とした。（108）はかなり丁寧な二次調整で刃部・背部を作り出す。ただし抉り部の作出はやや粗雑。石鏃（109～111）は比較的丹念な二次調整で整形し，舌状を呈する。

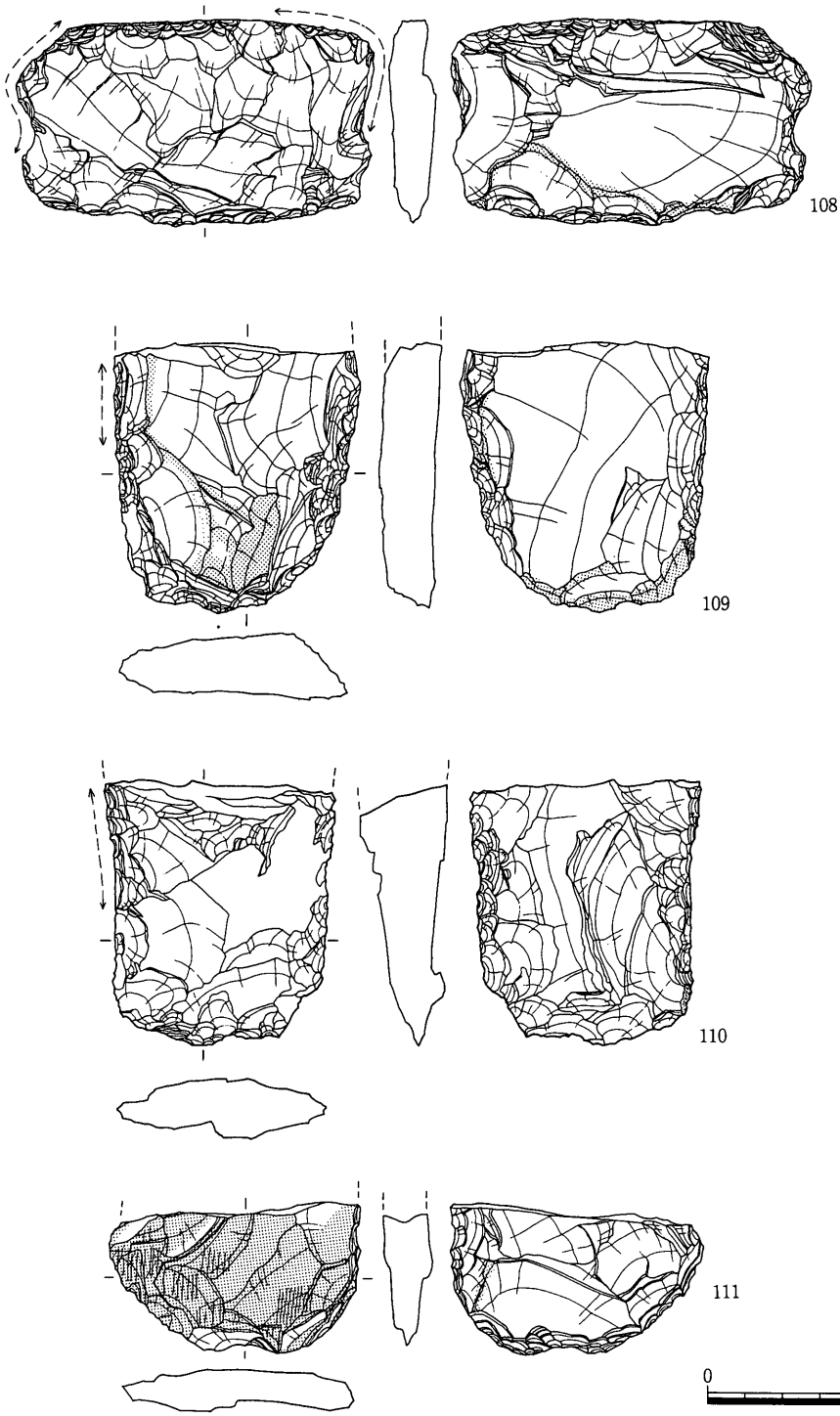
共に1区撹乱土坑・遺構面等で検出した資料である。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
93	高坏	16.7			細・極多	明黄褐色	深めの坏部　上半部は外反して端部は尖る。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ	1/6	角閃石極多、雲母多、石英等
94	直口壺	9.8			細・極多	橙色	口頸部はわずかに外反して立ち上がり端部は尖る頸部縦ﾊｹ、口縁部外面凹線、頸部内面指押さえ	1/6	角閃石極多、雲母
95	広口壺				細・極多、中・普	明黄褐色	口縁部は強く開き端部は上方に摘み出し下方も張り出す。		角閃石極多、石英等・雲母
96	広口壺	16.8			細・極多	暗褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく上下に摘み出して端面に鈍い凹線	1/8	角閃石極多、雲母
97	？			5.8	細・極多、中・少	暗赤褐色　灰黄色	整った上げ底、横ﾅﾃﾞ。蓋の可能性も。	1/4	角閃石極多、石英等少
98	須恵器坏			6.7	細・極少	灰色	わずかに突出気味の底部で、縁辺は鋭い。底部篦切り後ﾅﾃﾞ	1/3	
99	須恵器坏蓋				細・少	灰白色	頂部篦切り後回転ｹｽﾞﾘ		石英等
100	須恵器坏	8.4		5.8	細・極少	灰白色	わずかに突出気味の底部で、縁辺は鋭い。底部篦切り後ﾅﾃﾞ	1/2	角閃石極多、石英等普、赤色粒少
101	須恵器坏			11.0	細・少	灰色	底部縁辺よりやや内側に強く踏張った高台を付す。底部篦切り後回転ｹｽﾞﾘ	1/6	石英等

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
102	石鏃	1.5	1.2	0.3	0.7	ｻﾇｶｲﾄ	凹基	一部折損
103	石鏃	1.2	1.4	0.4	0.6	ｻﾇｶｲﾄ	凹基	先端部折損
104	石鏃	2.1	1.4	0.4	0.8	ｻﾇｶｲﾄ	平基	
105	石鏃	3.2	2.4	0.6	3.6	ｻﾇｶｲﾄ		両端部折損
106	石錐	3.4	1.7	0.4	1.5	ｻﾇｶｲﾄ		
107	打製石庖丁	5.6	5.0	1.0	37.6	ｻﾇｶｲﾄ	左面穿部摩耗顕著	折損

第40図　１区その他出土遺物１（1／４・１／２）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
108	打製石庖丁	9.6	5.4	1.5	93.8	サヌカイト	背部潰し　右面稜部摩耗微弱	
109	石鏃	7.1	6.5	1.7	102.4	サヌカイト	両側縁潰し　先端部摩耗	基部折損
110	石鏃	7.1	6.2	2.4	110.9	サヌカイト	両側縁潰し	基部折損
111	石鏃	3.8	6.9	1.1	41.5	サヌカイト	左面摩耗顕著・刃部擦痕	先端部片

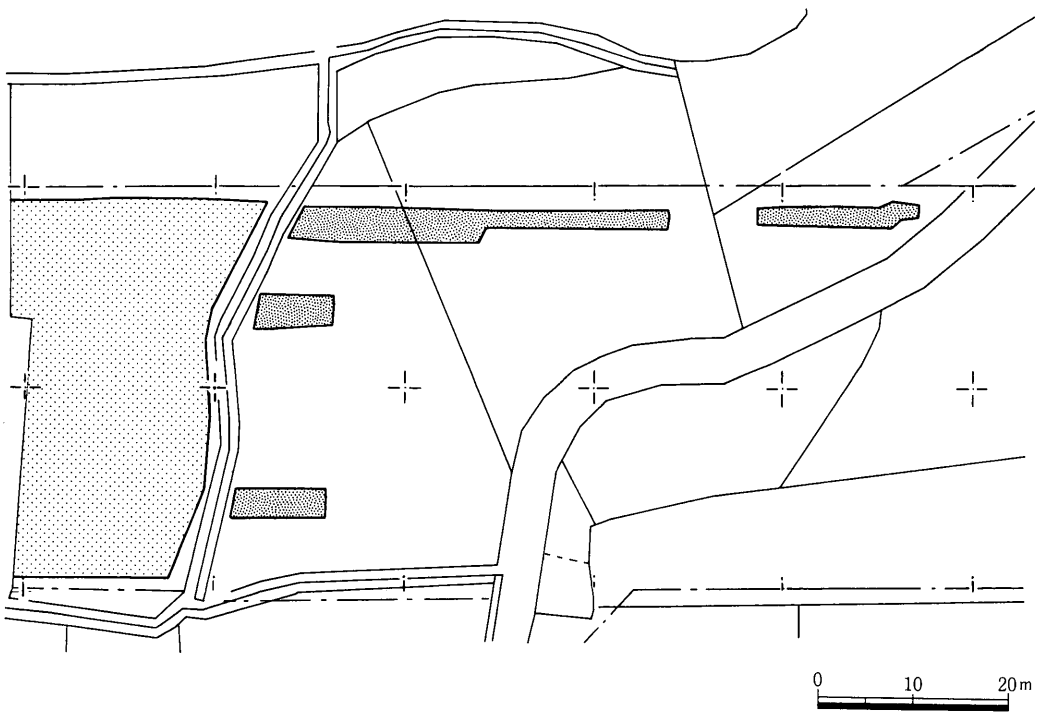
第41図　1区その他出土遺物2（1／2）

第2節　2区の調査

1．概要と層序（第42図）

2区は1区東端部と概ね0.6m程度の比高を有し，調査区の東限を画する「古川」の流下方向に沿って3段の水田に区画されている。2区と3区を分断する御坊川支流「古川」は，現状では幅5～7mの小河川で，本遺跡周辺では河岸はほぼ完全にコンクリート製護岸壁で固められている。本河川沿いに幅40～50m前後で，旧氾濫原と推定される低地部分（周辺との比高0.5m前後）が帯状に連続している。上天神遺跡調査区域では2区全体と3区西端の低地がこの部分に相当する。

このような状況から2区の調査では当初より古代以前の居住遺構等の分布は期待できなかったが，1区東北隅で確認した，弥生後期に遡る微高地斜面堆積の遺物包含層が2区に連続する可能性が想定された。またこの低地部分を利用した水田遺構等の存在をも考慮して調査を実施した。



第42図　2区トレンチ配置図（1／800）

調査に当たってはまず，東西方向に３本のトレンチを設定して，２区の堆積状況の把握・遺構・包含層の確認に努めた。

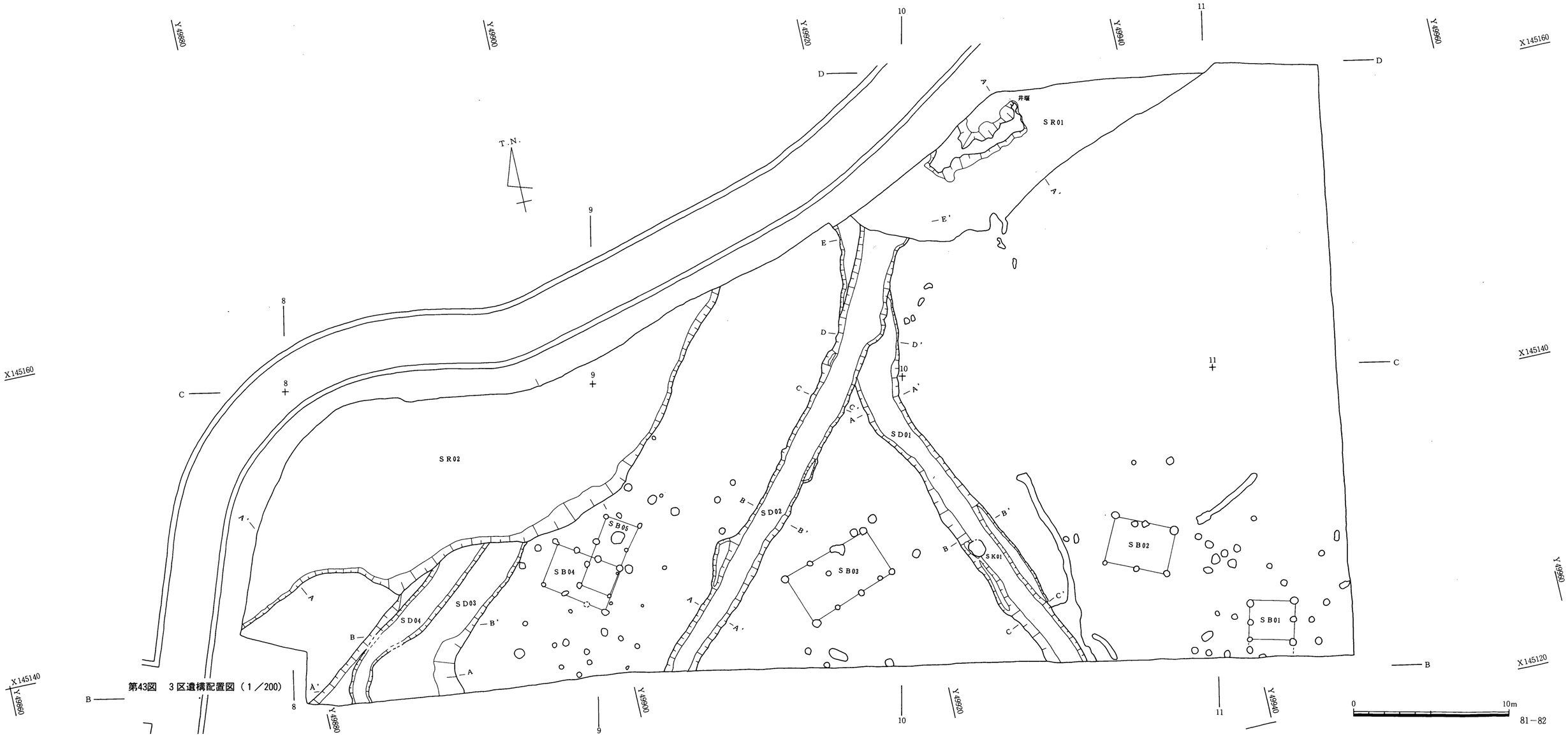
北端部のトレンチ１は既存の小水路を避けて二分し，総延長58m，幅２～3.8mの規模で設定し，西端は１・２区境，東端は「古川」護岸壁にほぼ接する。この部分は１区北東隅の弥生後期の斜面堆積層残存部分に近接しており，同層の連続が最も有望視された部分である。

概ね現地表下２m強まで掘り下げたが，１区斜面堆積層の延長は確認できなかった。現耕作土・床土層直下には暗灰色シルト・粘土層の薄いレンズ状堆積ブロックを交えた淡褐色～淡灰色砂層が厚く堆積する。同層の堆積は緩く，また１区地山層下部とは対照的に湧水が著しい。更に地表下２m前後で拳大の礫層に達するが，この層も堅く締まったものではない。遺物は全く確認できなかったが，僅かばかりの生々しい木片が砂層中に認められた。

また旧耕作土・床土層の連続的堆積層や１・４区の一部で確認した暗灰色～灰白色粘質土・シルト層（古墳時代後期～中世遺物包含層）も認められなかった。

これに続けて補足的に並行するトレンチ２・３を設定したが，同様に遺構・遺物は検出できず，堆積状況はトレンチ１と異ならない。以上を確認して２区はトレンチ調査で終了した。

２区および３区西端部の低地は，１区東端部検出の斜面堆積層等から遅くとも弥生時代後期までには形成されていたことは間違いない。しかし２区部分では同層を含めた古い堆積層は，それ以降の「古川」河川活動により完全に失われたものと考えられる。なお１区東部では古墳時代後期～中世包含層が残存していなかったので，これの形成と「古川」の新しい河川活動との時間的関係はこの部分では把握できていない。また２区では地形から見て著しい削平は想定できないにも関わらず，現耕作土層下に旧耕作土層の連続は見られない。この部分の耕地化が「古川」護岸後の新しい所産であることを示唆する。



第43図　3区遺構配置図（1／200）

第3節　3区の調査

1．調査区の概要（第43図）

3区は南北20～40m，東西67mの調査区で調査区の西端は現行の河川に規制されている調査区である。調査区の地表面は東端で標高15.9m，西端で16.0m前後，北端は15.4m，南端は15.9mとなっている。

遺構面は地表面から約0.2m～0.3mほど下で，南から北へ下っている。また西側は特に南東部分を中心に遺構面が2面確認されたが，これは東側からの遺構面が現行の河川に向かって下っており，その斜面に堆積した層に遺構が形成されているためである。遺構面は褐色砂礫土が上下し，その窪み部分に褐色系の粘質土が堆積している状況である。

調査区の西側から北側には現在の古川という川がS字形に蛇行して流れているが，この川の旧河道が古川に沿うように検出された。4区から続く微高地がこの川に向かって下っており，3区はこの微高地の縁辺部に相当するものである。

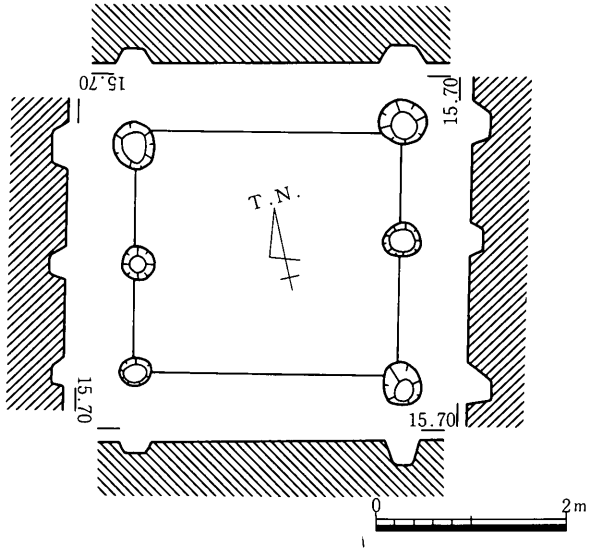
遺構は多くはないが，掘立柱建物や溝，井堰など人々の生活の一端を検出した。また遺物は溝を中心に多量に出土している。

2．調査の成果

（1）弥生時代の遺構・遺物

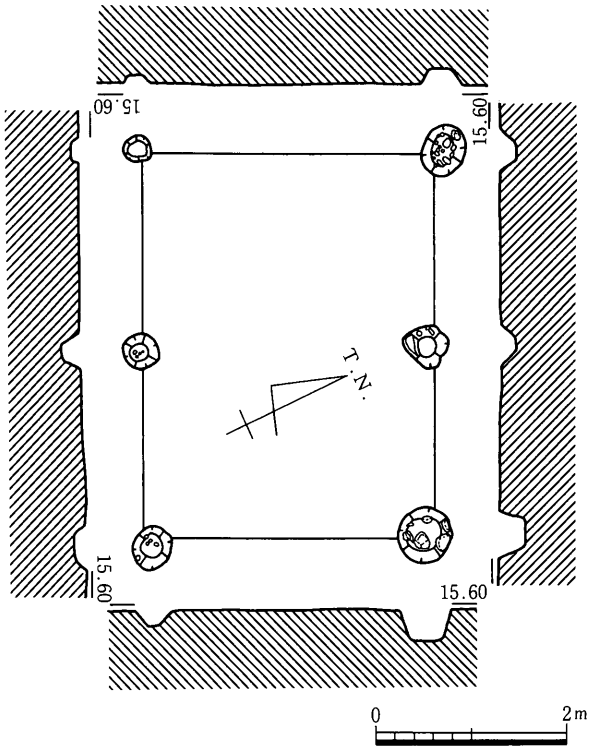
SB01（第44図）

3区の南東隅で検出した掘立柱建物である。梁行は1間で2.8m，桁行は2間で2.5m，建物面積は7.0㎡である。建物の平面形は正方形に近いものとなっている。2間のほうが梁行とも考えられるが，3区で検出した他の掘立柱建物もすべて梁行が1間であることからもここでは1間のほうを梁行と考えておく。桁行は南側に続く可能



第44図　3区SB01平・断面図（1／80）

性があるが，桁行１間分を南側に延長した場所は丁度調査区際に相当するが，柱穴に相当するものは検出されなかった。従ってこの建物の桁行は２間と考えたい。柱穴の平面形は円形で，直径は0.4ｍ前後，深さは0.15～0.2ｍ程度で残りはあまり良くない。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層となっており，柱痕は確認出来なかった。建物の主軸方位はＮ－15°－Ｅである。



第45図　３区ＳＢ02平・断面図（１／80）

ＳＢ02（第45図）

３区の南東部にあり，ＳＢ01の北西６ｍのところで検出した掘立柱建物である。梁行は１間で3.1ｍ，桁行は２間で3.9ｍ，建物面積は12.1㎡である。柱穴の平面形は概ね円形であるが，一部不正形な方形のものも含まれる。柱穴は直径0.25ｍ～0.55ｍ程度で，深さは0.1～0.3ｍ程度で残りはあまり良くない。北東コーナーの柱穴には拳大の根石が施されており，その１つ西側の柱穴の掘形は南側がテラス状になり段掘りとなっている。また西側コーナーの柱穴は他のものより一回り小さくなっている。柱穴の埋土は１㎝程度の小礫を含む暗茶褐色粘質土の単一層で，柱痕は確認出来なかった。建物の主軸方位はＮ－65°－Ｗである。

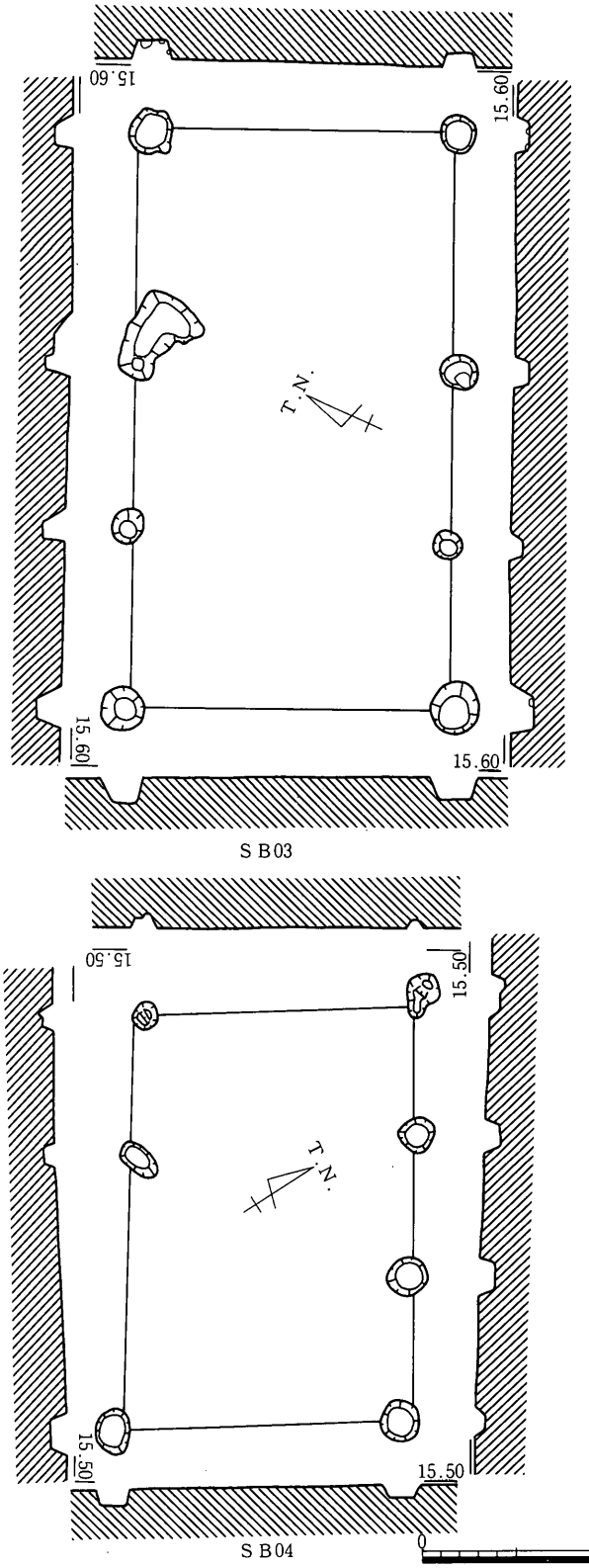
ＳＢ03（第46図）

３区の中央部南側で，ＳＤ01とＳＤ02に挟まれた部分で検出した掘立柱建物である。梁行は１間で3.4ｍ，桁行は３間で6.0ｍ，建物面積20.4㎡である。３区で検出した掘立柱建物のうちで最大のものである。桁行は３間であるが，東側１間分の柱間がその他の２間より長くなっている。また北側の桁行の東から２番目の柱穴は，柱の抜き取りのため本来の掘形が崩れて不正形となっている。桁行の西から２番目の柱穴は，南側と北側の両方とも

他のものに比べてやや小さめになっている。この2つの柱穴と北西コーナーの柱穴以外には根石が施されている。根石は南側の桁行列の東から2番目の柱穴のものが板石である以外は，拳大の円礫である。柱穴の平面形は円形で，直径は0.3～0.55m，深さは0.15～0.25mとなっている。柱穴の埋土は暗褐色粘質土の単一層で，柱痕は柱の抜き取り痕があるものを含めて確認出来なかった。建物の主軸方位はN－67°－Eである。

SB04（第46図）

3区の西部で，SD02とSD03に挟まれた部分のSD03寄りで検出した掘立柱建物である。梁行は1間で3.0m，桁行は3間で4.4m，建物面積は13.2㎡である。南側の桁行列の東から2番目の柱穴は検出されなかった。柱穴の平面形は概ね円形であるが，方形に近いものも含まれている。柱穴の直径は0.3～0.45m，深さは0.1～0.2mと残りはあまり良くない。北西隅の柱穴には北東方向に向かって柱の抜き取り痕が見られた。この柱



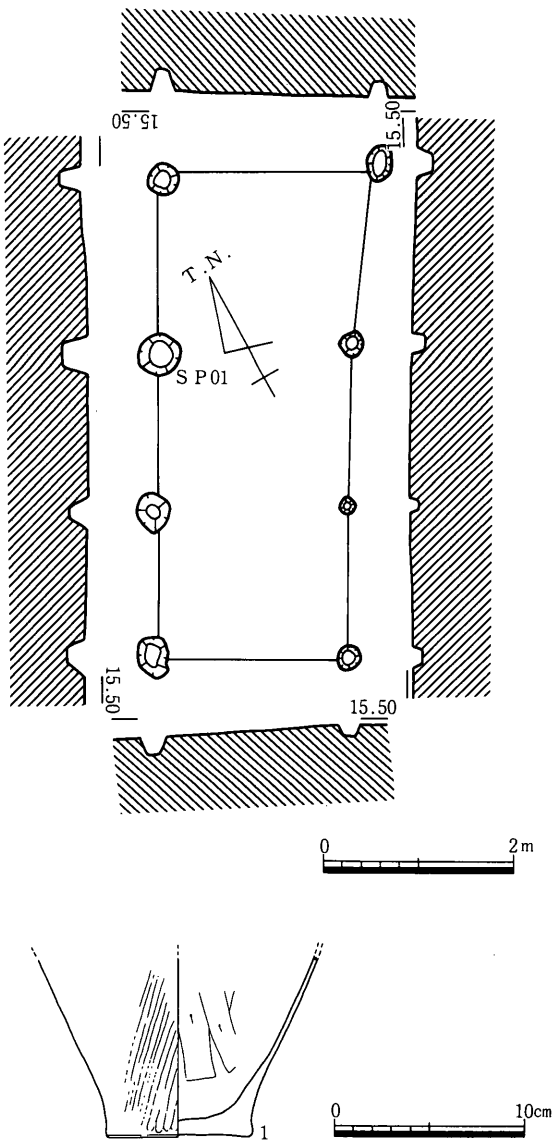
第46図　3区SB03・04平・断面図（1／80）

穴の柱が据えられていたと考えられる部分と北西隅の柱穴によって構成される西側梁行列は，他の梁行列と平行にはならずに，西側に向かって歪んでいる。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層で柱痕は確認出来なかった。建物の主軸方位はＮ－56°　－Ｗである。建物は微高地の縁辺部に建てられており，西へ向かって緩く下っている。

ＳＢ05（第47図）

３区の西部でＳＢ04と重複して検出した掘立柱建物である。梁行は１間で2.0ｍであるが，北側の梁行のみ2.3ｍと広がっている。桁行は３間で5.0ｍ，建物面積は梁行2.0ｍとして10.0㎡である。建物は細長く，北側の梁行が広がっているため東側桁行列は不揃いである。柱穴の平面形は概ね円形であるが，方形に近いものもある。柱穴の直径は0.15～0.4ｍ，深さは0.1～0.25ｍで，東側桁行列の柱穴は西側のものに比べて全体的に小さくなっている。柱穴の埋土は暗褐色粘質土の単一層で柱痕は確認出来なかった。建物の主軸方位はＮ－56°　－Ｅである。

１はＳＰ01から出土した甕の下半部である。底部はやや突出気味で，外面にはヘラミガキを，内面にはヘラケズリを施している。



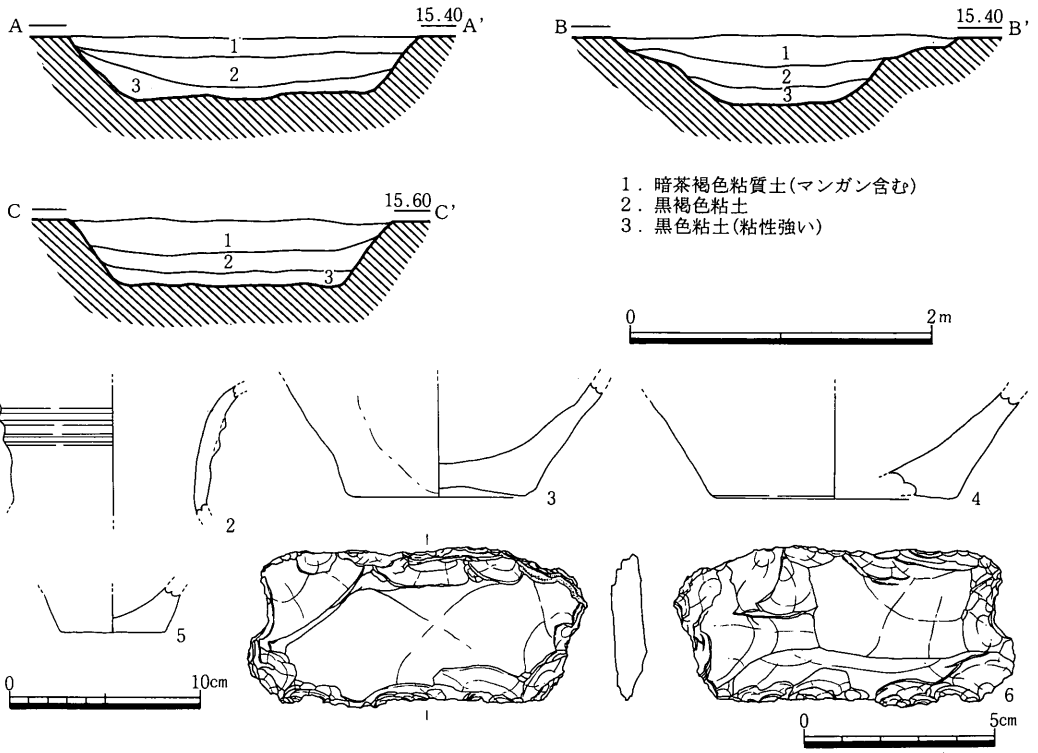
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
1	弥・甕			7.5	中・普	灰黄褐・黒	外面ミガキ、内面ケズリ	底径1/2	角閃石・雲母

第47図　３区ＳＢ05平・断面図（１／80），ＳＰ01出土遺物（１／４）

ＳＤ01（第48図）

３区の中央部やや東寄りで検出した溝である。溝は調査区の南壁から北北西方向に向かい，21ｍほどのところで北方向に緩く屈曲して調査区の北壁へと至っている。ＳＤ01は北壁から4.0～8.5ｍのところでＳＤ02に切られており，さらに北壁際でＳＲ01に切られている。またＳＤ01は南壁際で不整形な溝を切っている。溝は幅1.7～3.0ｍで，南から21ｍの溝の変換点から北側が南側に比べて幅が広くなっている。南壁から５～12ｍの部分は溝が段状に掘り込まれており，テラス状の面が形成されている。溝の深さは0.4～0.5ｍで，南から北に向かって下っている。埋土は３層に分層され，最下層には遺物を含む粘性の強い暗黒色粘土が堆積していた。

２は壷の頸部の破片であるが，緩く外反し外面に断面三角形の突帯を貼り付けている。３の底部はやや上げ底である。６は打製石庖丁で，両側縁に抉りを入れており，刃部は直線的で両面から加工を施している。遺物は少なく，弥生時代中期中葉と考えられる。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
2	弥・壷				粗・多、中・多	灰白	全体にマメツ	頸部1/3	
3	弥・壷			9.0	粗・多	浅黄橙・黒	全体にマメツ	底部完存	
4	弥・壷			13.0	中・多	橙	全体にマメツ	底径1/4	
5	弥・甕			5.5	中・多	灰黄褐	全体にマメツ	底径1/3	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
6	打製石庖丁	8.5	4.0	0.4	50.2	サヌカイト		

第48図　３区ＳＤ01断面図（１／50），出土遺物（１／２・１／４）

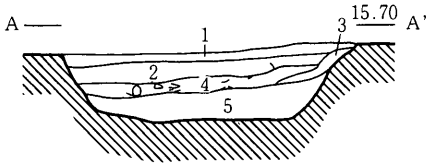
ＳＤ02（第49図～第80図）

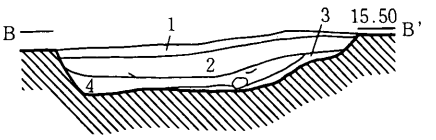
３区のほぼ中央部で検出した溝である。溝は南西－北東方向に直線的に32ｍほど延びて北壁近くでＳＲ01に切られている。そしてこのＳＲ01に切られた部分から南側10ｍにわたる部分はＳＤ01と交わっており，ＳＤ02がＳＤ01を切っている。溝は幅1.9～3.2ｍで北側のＳＤ01との交点部分がやや幅広になっている。また部分的に突出し掘り込みも段状になり，テラス状の面を形成している部分がある。断面形は緩やかなＵ字形の部分が多く，深さは0.3～0.5ｍ程度である。溝は南側から北側に向かって緩やかに下っている。埋土は最上層にマンガンを含む茶褐色粘質土が堆積しており，中程には粘性のやや強い黒褐色粘土が堆積している。また底部近くには暗黒褐色粘土が堆積しているが，この層の中から多量の土器が出土した。

遺物は土器を中心として多量に出土した。溝の南部から北部にかけて全体に出土したが，北部のＳＤ01とＳＲ01との交点部分では，本来これらの遺構に伴っていたと思われるものが混入していた。また遺物の量もこの部分はＳＤ02の他の部分に比べて少なく，ＳＲ01の形成とともに流されたものと思われる。これに対してＳＤ01との交点部分より南側の部分では，土器は土圧でそのまま押し潰された状態で出土したものや，完形のまま出土したものも多い。出土した層も暗黒褐色粘土層にほぼ限定出来ることからも，一括性の高い資料といえる。

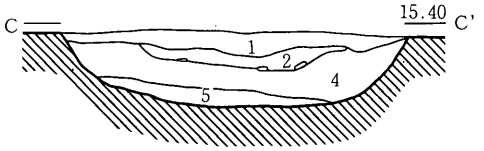
土器は壷，甕，高坏，鉢，器台，甑，水差し，把手付広片口皿，支脚が出土している。全体で267点を図化したが，このうち壷31％，甕39％，高坏19％，鉢４％，器台４％，その他のものが３％という比率になっている。また石器は16点出土している。以下，各器種ごとに述べて行く。

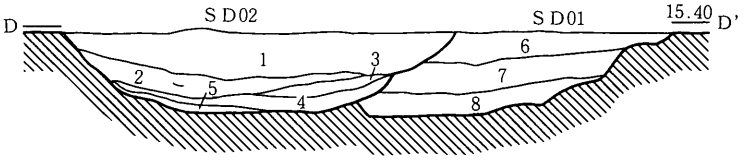
７～67は壷で，このうち７～21は口縁部端部を拡張するものであるが，上下に拡張するもの（７～10・12・16・19～21），上方に拡張するもの（13・18），下方に拡張するもの（11・14・15・17）の３種類があり，口縁部外面には15を除いて凹線が施されている。７・９は頸部に凹線文を施し，口縁部外面には竹管文を施している。11は口縁部端部の下方への拡張は弱く，頸部～体部外面にはハケ目を施している。12の頸部は直線的に内傾し，外面には凹線文を施している。13は頸部外面はハケ目の後に雑にヘラミガキを施す。体部は大きく張り，外面には叩きの後にハケ目を施しているが，叩きは残っている。15は口縁部端部は下方に拡張し，口縁部外面には鋸歯文を施している。16の口縁部端部は上下に拡張して内傾し，外面に竹管文を施す。頸部は強く外反し，外面には２方向からヘラ圧痕文

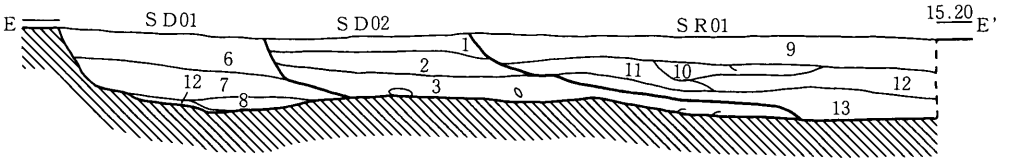




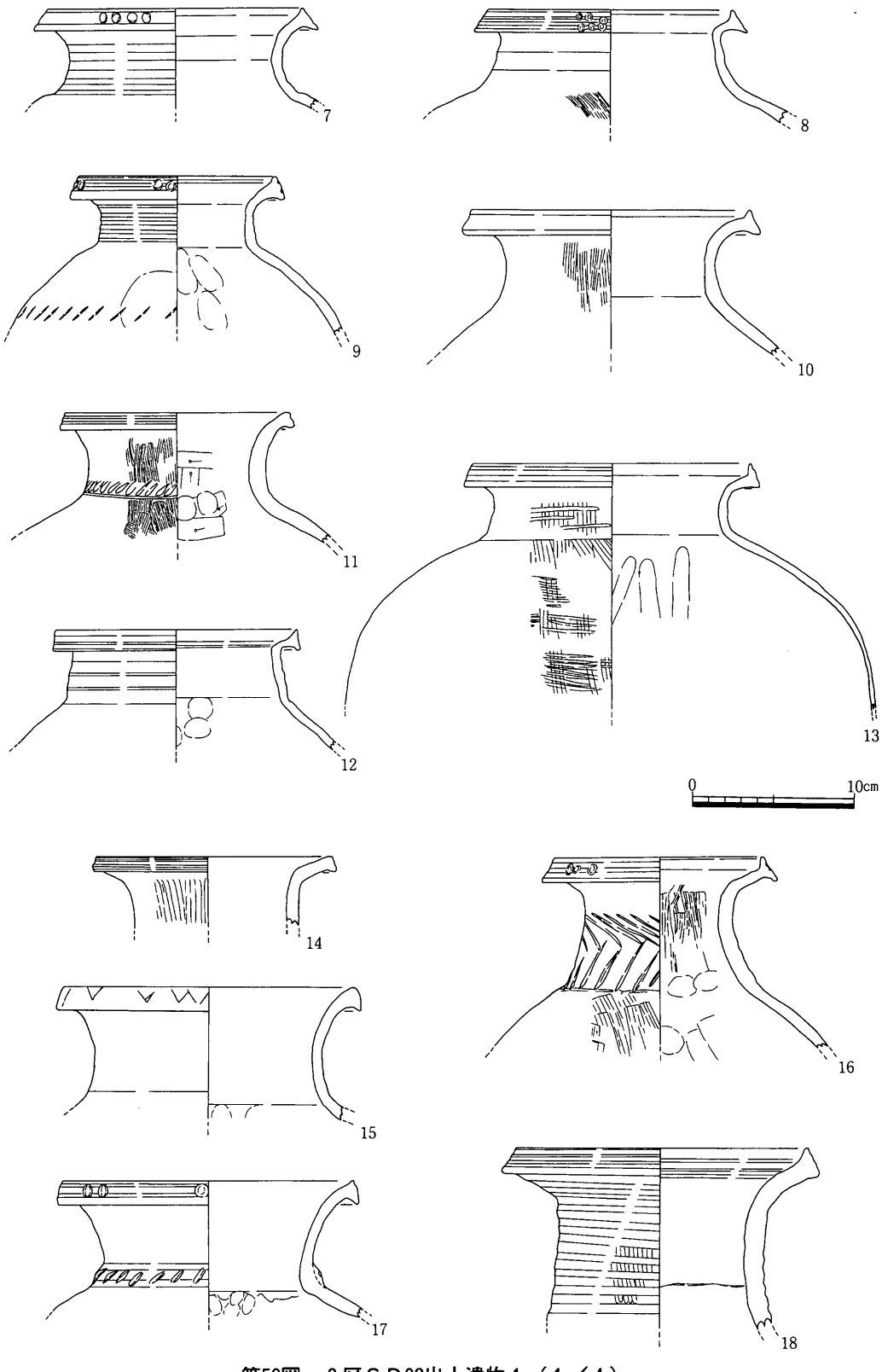
1.茶褐色粘質土(マンガン含む)
2.黒褐色粘土
3.暗灰色粘土(2～3cm大の礫含む)
4.暗黒褐色粘土
5.暗茶褐色礫混じり粘質土
6.暗茶褐色粘質土(マンガン含む)
7.黒褐色粘土
8.黒色粘土(粘性強い)
9.暗褐色粘質土
10.茶褐色砂混じり粘質土
11.暗茶褐色粘土
12.暗茶色砂混じり粘質土
13.暗灰色砂(粘土ブロック少々含む)







第49図　3区ＳＤ02断面図（1／50）



第50図　３区ＳＤ02出土遺物１（１／４）

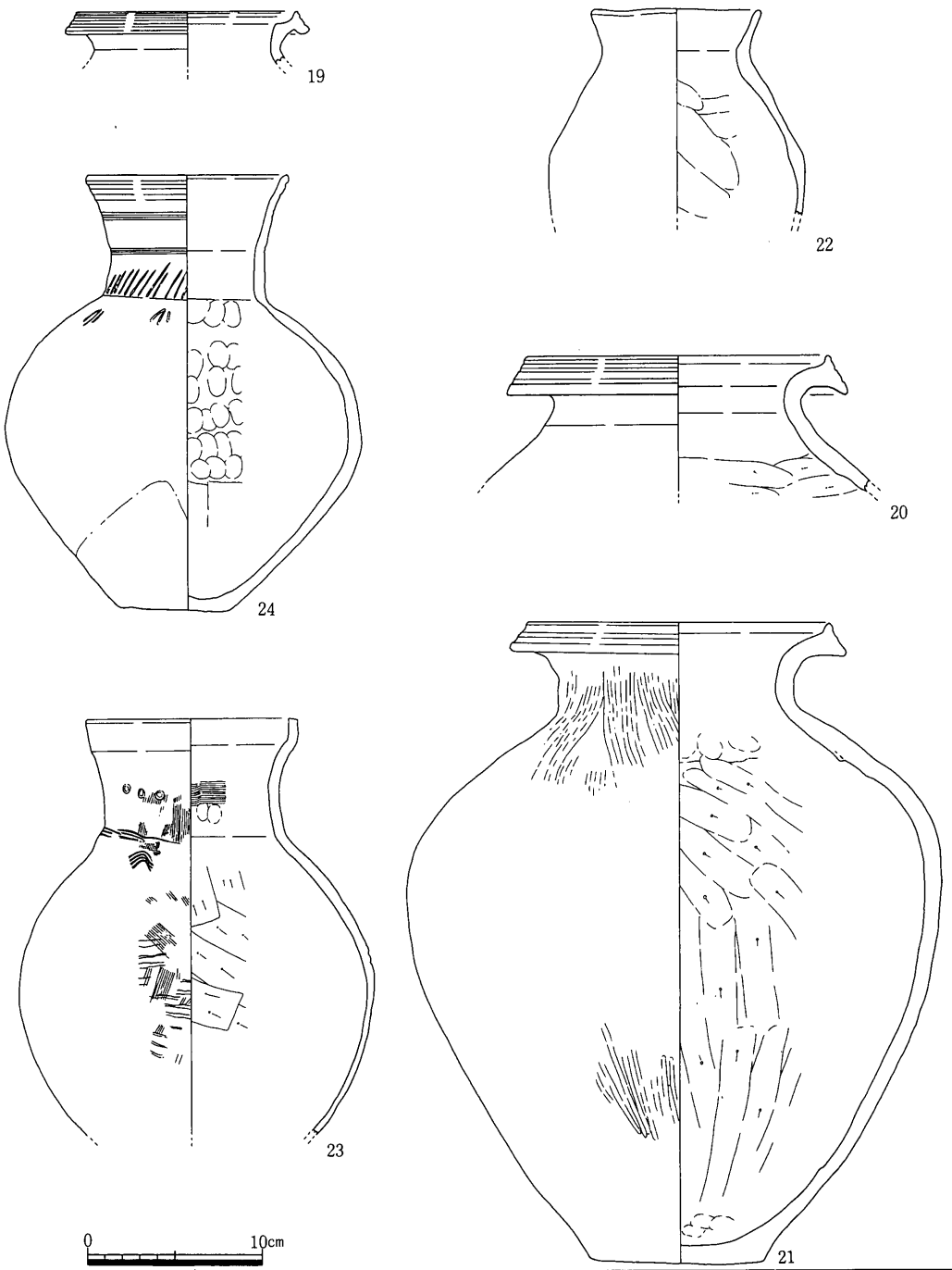
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
7	弥・壷	15.7			細・普、中・少	にぶい黄橙、にぶい橙	外面ナデ、内面ナデ	口径1/4	
8	弥・壷	15.0			中・少	橙、にぶい褐	口縁ナデ、外面ナデ・ハケ目、内面ナデ	口径1/4	角閃石
9	弥・壷	12.1			微・多、粗・少	にぶい黄褐、橙・黒	口縁ナデ、外面マメツ、内面ナデ	口径1/3	角閃石・雲母
10	弥・壷	17.1			中・多	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面マメツ	口縁完存	角閃石・雲母
11	弥・壷	13.8			中・普	にぶい黄褐	口縁ナデ，外面ハケ目、内面ケズリ	口縁完存	角閃石
12	弥・壷	15.0			粗・少、細・少	橙、にぶい橙	外面ナデ、内面ナデ・指押え	口径1/2	角閃石・雲母
13	弥・壷	17.1			粗・多	にぶい黄褐・黒	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ・ﾀﾀｷ→ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ	口縁完存	角閃石
14	弥・壷	14.6			中・少	ﾆﾌﾞｲ黄褐、ﾆﾌﾞｲ黄橙	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ナデ	頸部完存	角閃石・雲母
15	弥・壷	18.1			微・普、細・少	にぶい黄褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/3	角閃石・雲母
16	弥・壷	12.8			微・少	褐灰、にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目、内面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ	口縁完存	雲母
17	弥・壷	18.0			中・少	にぶい黄褐、にぶい褐	口縁ナデ、外面ナデ、内面ナデ・指押え	口径1/2	角閃石
18	弥・壷	17.9			粗・少、中・普	灰黄・にぶい橙	口縁ナデ、外面ミガキ→ナデ、内面ナデ	口径4/5	角閃石

3区ＳＤ02出土遺物１観察表

を施し，内面にはハケ目を施している。17は頸部と体部の境に，刻み目突帯を貼り付けている。18の頸部は緩く外反し，外面にはヘラミガキの後に凹線を施している。19は口縁部は頸部から鋭く屈曲している。21は体部最大径は上半にあり，上部外面には頸部から引き続きハケ目が施されている。外面下半にはヘラミガキが見られ，内面は全体にヘラケズリを施している。底部は安定した平底となっている。

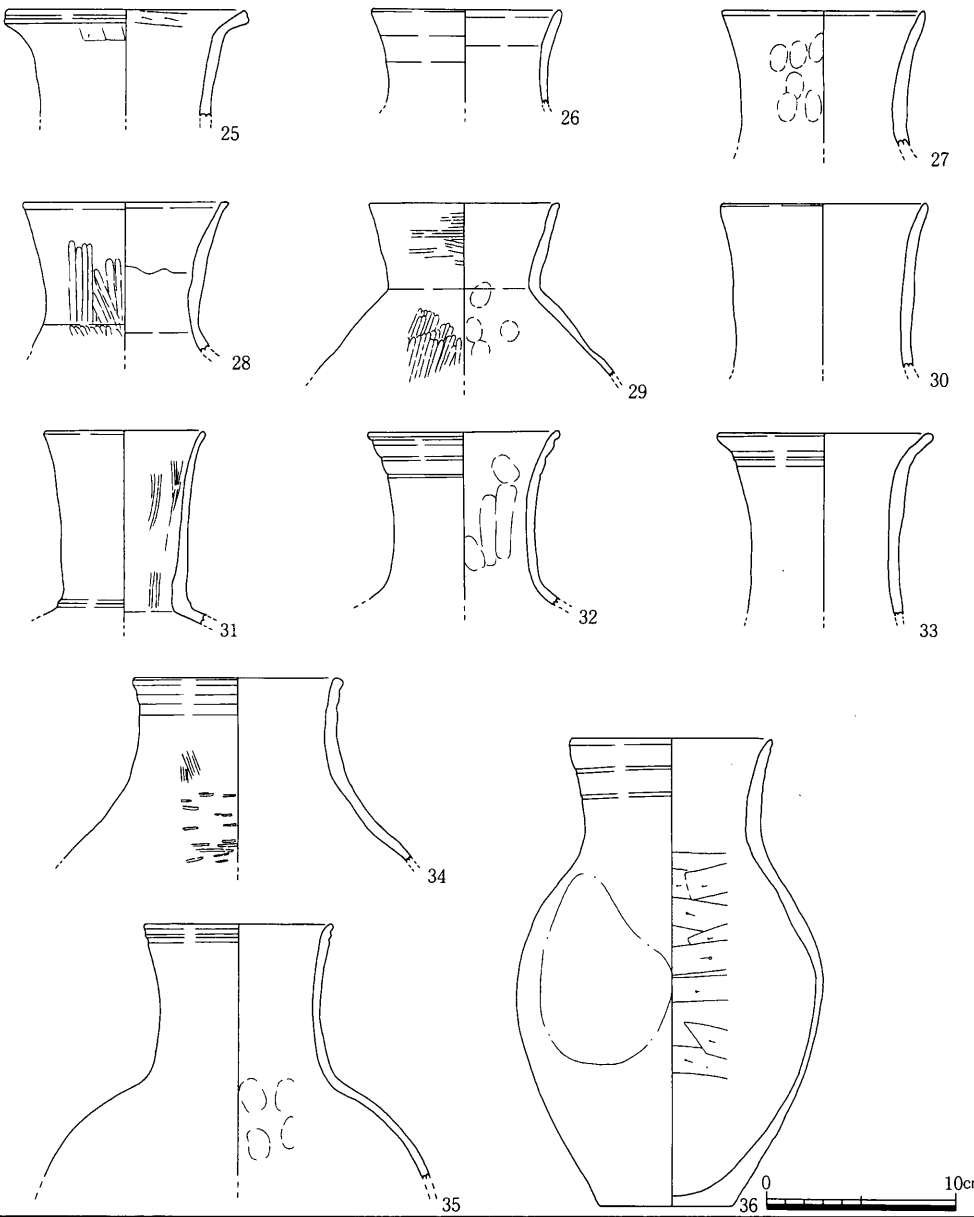
22は口縁部は直線的に斜め上方に立ち上り，端部は丸く収める。体部は肩が張らず，最大径は体部のほぼ中央部にある。23は頸部が緩く外反した後に，口縁部は上方に立ち上がり端部は平坦な面を形成する。頸部は両面にハケ目を施し，外面には竹管文が見られる。頸部と体部の境部分に，断続的な櫛描き沈線文と，体部上部に櫛描き波状文が施されている。体部は球形に近く外面は叩きの後にハケ目を，内面はヘラケズリを施している。

24～39は頸部からそのまま口縁部に至り，口縁部端部を拡張しないものである。24は口縁部外面には凹線が２条施され，頸部外面には２条１単位の櫛描き直線文が２単位施されている。また頸部下半にはヘラ圧痕文が施されている。体部は球形に近く，最大径はほぼ中央にある。体部内面には指押さえ痕が著しい。体部上部には鳥の足跡のような絵画状の記号がある。25は直線的に外傾する頸部から口縁部は外側に屈曲する。口縁部端部はやや肥厚し，外側に面を作り沈線に近い凹線を１条施している。口縁部には内・外面ともヘラケズリを施している。26・27・30・31は頸部は緩く外反し，口縁部端部は丸く収めている。28は口縁部端部は上面が平坦な面となっている。32・33も口縁部端部を丸く収めるが，口縁部直下に凹線を雑に施している。34～36は頸部は直立に近いもので，口縁部外面には凹線を施している。34は頸部から体部にかけては明瞭な境がない。体部外面には叩きが残っている。これに対し35は体部上半が大きく張るものである。36の体部は長楕円形で最大径は中央部にある。内面は上部までヘラケズリを施している。底部は安定した平底となっている。37・38の頸部は緩く外反し，口縁部端部は丸く収める。口縁部外面には凹線が巡



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
19	弥・甕	12.6			微・少	にぶい黄褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/2	角閃石
20	弥・壷	17.0			中・多	暗灰黄、にぶい褐	口縁ﾅﾃﾞ、外・内面ﾅﾃﾞ、指で器壁を削り取る	口縁完存	角閃石
21	弥・壷	17.3	36.2	9.9	微・多、細・多	にぶい褐・灰褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目・ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘ・指押え	全体2/3	角閃石
22	弥・壷	9.6			中・普	明褐	口縁ナデ・外面マメツ・内面ナデ、口縁歪む	口径3/4	角閃石
23	弥・壷	12.0			微・多、細・普	にぶい橙	口縁ﾅﾃﾞ 頸部ﾊｹ目、外叩き→ﾊｹ目、内ｹｽﾞﾘ	口縁完存	角閃石
24	弥・壷	11.4	23.8	6.4	細・普	にぶい橙	口縁ナデ、外面マメツ、内面ナデ・指押え	全体3/4	角閃石・雲母

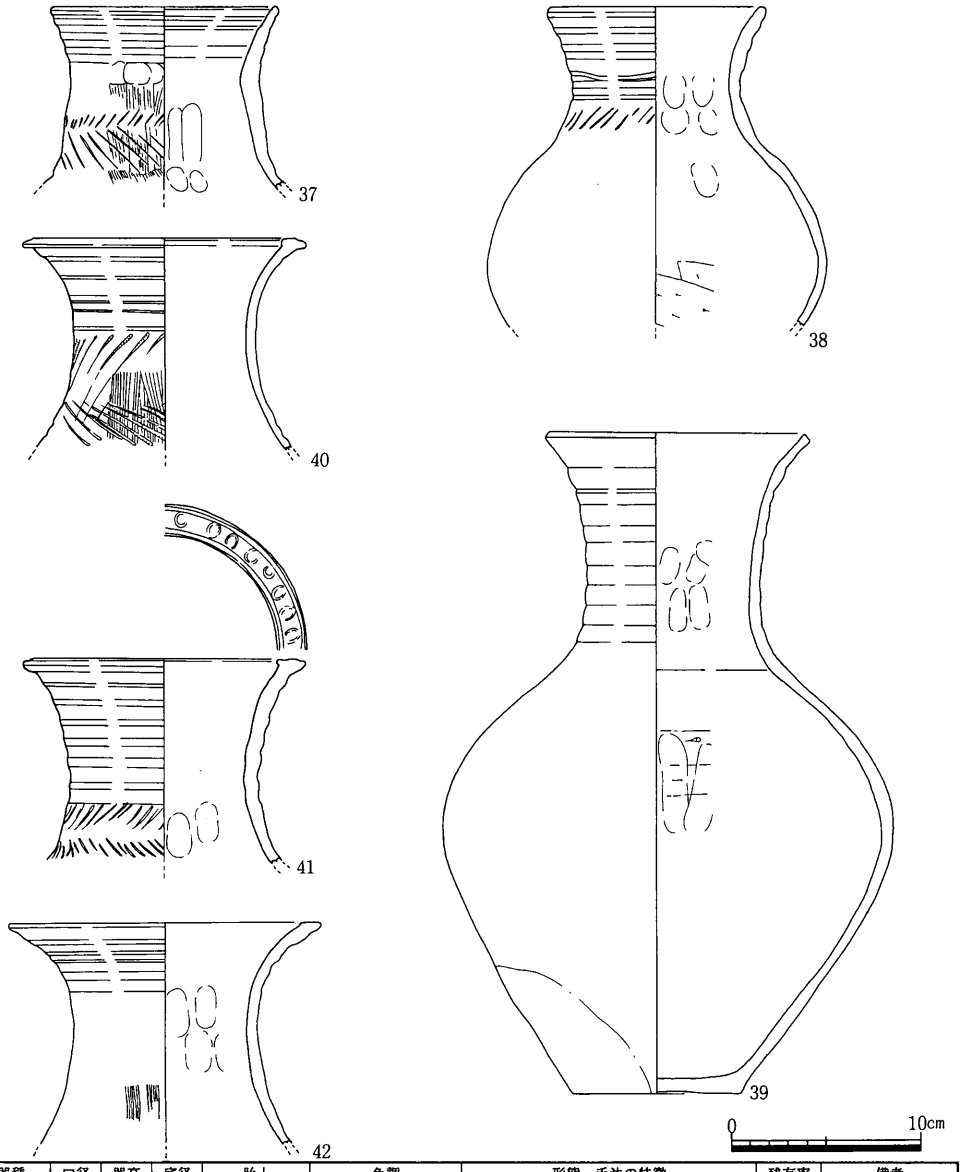
第51図　3区ＳＤ02出土遺物２（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
25	弥・壷	12.5			中・多	にぶい黄、にぶい黄橙	口縁ケズリ、外面ナデ、内面ナデ	口縁完存	角閃石・雲母
26	弥・壷	9.8			中・普	にぶい褐	外面ナデ、内面ナデ	口縁完存	角閃石
27	弥・壷	10.7			細・少	にぶい黄褐、灰黄	外面指押え・ナデ、内面ナデ	口縁完存	角閃石
28	弥・壷	10.9			中・少	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ナデ	口縁完存	角閃石・雲母
29	弥・壷	10.0			微・少	褐灰、にぶい褐	外面ハケ目・ミガキ、内面ナデ・指押え	口縁完存	角閃石
30	弥・壷	10.7			粗・多	にぶい黄	全体にマメツ	口径1/2	
31	弥・壷	8.3			中・普	にぶい褐・灰褐	外面ナデ、内面ミガキ	口径1/2	角閃石、外(赤)
32	弥・壷	10.0			細・普	明褐	外面マメツ、内面ナデ	口径2/5	角閃石
33	弥・壷	11.0			粗・少、中・多	にぶい橙、にぶい黄橙	全体にマメツ	頸部完存	
34	弥・壷	11.0			中・多	にぶい褐灰、にぶい褐	口縁ナデ、外面ハケ目・叩き、内面ナデ	口径1/3	角閃石・雲母
35	弥・壷	9.8			中・多	黒褐、褐	全体にマメツ	口径2/3	角閃石・雲母
36	弥・壷	10.5	24.4	7.0	中・多	にぶい黄褐	外面マメツ、内面ケズリ・マメツ	ほぼ完存	角閃石・雲母

第52図　3区ＳＤ02出土遺物３（１／４）

り，頸部下半にはヘラ圧痕文が施されている。38の体部はやや扁平な球形で，内面下半にヘラケズリを施している。39は頸部は長く上半が緩く外反し，外面には凹線が巡る。口縁部端部は外側に平坦な面を作る。体部は倒卵形で内面上半にはヘラケズリが認められるが後にナデているためにはっきりしない。底部は安定した平底となっている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
37	弥・壷	11.8			微・少	浅黄・にぶい褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面指押え・ナデ	口径1/2	角閃石
38	弥・壷	11.0			中・少、細・少	にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面指押え・ﾅﾃﾞ・ｸｽﾞﾘ	口径1/3	
39	弥・壷	13.4	34.6	8.8	粗・多	黒、明褐	外面ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ、体部内面ｸｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	体部1/2	角閃石
40	弥・壷	13.6			細・普	にぶい褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・しぼり目	口径1/4	角閃石・製母
41	弥・壷	14.0			粗・少、中・普	にぶい黄橙	外面ナデ、内面ナデ・指押え	口径1/4	
42	弥・壷	16.3			粗・少、中・普	にぶい黄橙	外面ナデ・ハケ目、内面ナデ	口径1/3	角閃石

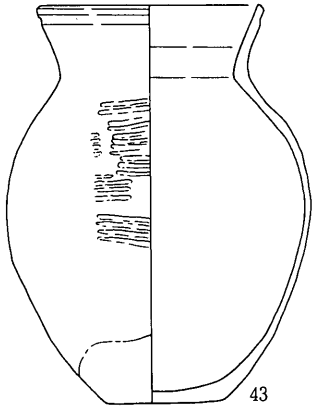
第53図　３区ＳＤ02出土遺物４（１／４）

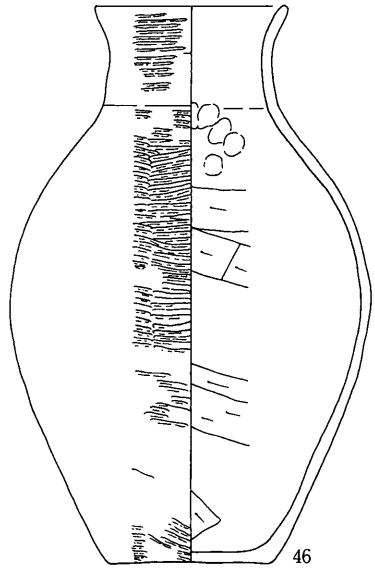
40～42は頸部は外反し，口縁部端部を左右に拡張し上側に平坦な面を形成するものである。40の口縁部端部の拡張は外側に強くなっている。頸部上半には凹線が巡り，下半にはハケ目の後にヘラ圧痕文を2方向から施している。41は口縁部端部上面に竹管文を施している。42は頸部は強く外反し，頸部上半に凹線を巡らす。器台の脚部を反転したような形である。

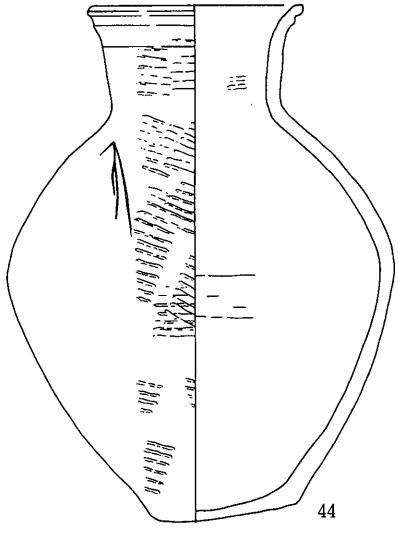
43～47は体部が長楕円形で，外面に叩きが明瞭に残るものである。43は頸部は直線的で口縁部端部直下に強い凹線が1条巡っている。体部は丸みを帯びている。44は頸部は上半が外反し，口縁部端部直下に強い凹線を1条施している。外面は頸部から体部全体にかけて叩きが施されている。体部外面の上半に絵画状のヘラ文様が認められる。45は頸部は短く全体に強く外反する。口縁部は外面に粘土を貼り付けて肥厚させ，外面を強くナデている。体部は外面全体に叩きを施し，内面は中央部にヘラケズリが認められる。46は口縁部から体部下部に至る外面全体に叩きを施している。体部内面は全体にヘラケズリの後にナデている。底部は幅広で，立ち上り部は鋭くなっている。47の頸部は短く直立に近く，口縁部は斜め上方に立ち上がる。体部は卵形に近く，外面全体に叩きを施している。

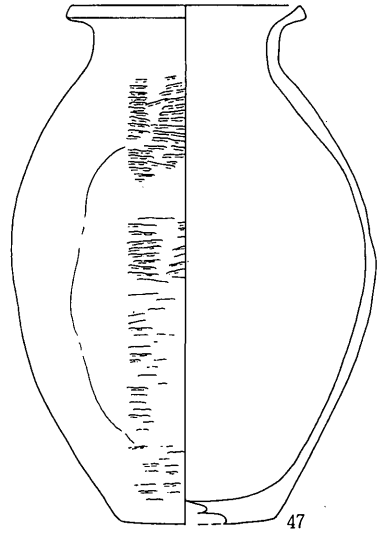
48～58は細頸壷である。48・49は頸部で筒状に細長く，口縁部付近で僅かに開く。外面にはヘラミガキが施されている。51～58は体部のみであるが，いずれも算盤玉のような扁平な形である。50は体部屈曲部の外面に鍔状の突帯を貼り巡らせている。脚が付いており体部との接合は差し込み法によるものと思われ，接続部外面には粘土を足して接続を強化している。脚部は外面にヘラミガキを施し，円形透かしが4個あるがそのうち2つは未貫通となっている。51は体部は非常に平たく屈曲の度合いが強い。底部は若干突出している。53は脚部の剥離した痕跡がある。内面の下部には板状工具で器壁に沿って螺旋状に調整した跡がある。外面下半にはヘラケズリが施されている。55は体部中央屈曲部に断面三角形の突帯を3条貼り付けており，底部は突出している。56は体部中央屈曲部をナデることにより低い突帯を2条作り出している。そしてその屈曲部に竹管文を6個1単位で施している。57は体部の上半が膨れ気味で，外面の中央部には横方向の，それ以外は斜め方向のヘラミガキを施している。底部は突出している。58も体部中央屈曲部に突帯が2条巡り，底部は突出している。

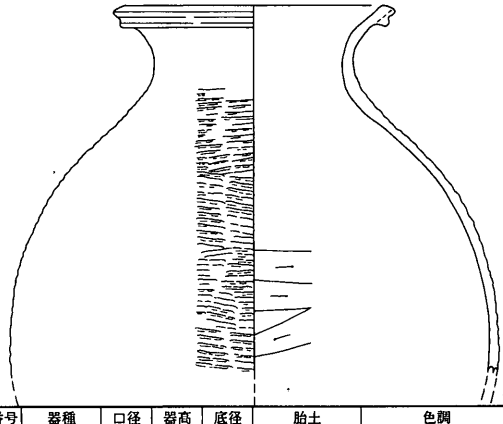
59～61は無頸壷で，体部は算盤玉形で扁平である。59は体部上半からそのまま口縁部が短く屈曲し，口縁部端部は内傾する平坦な面をもつ。口縁部の屈曲部に2個1単位の円形の穿孔が両側に施されている。体部外面の上半にはヘラミガキが，下半にはハケ目が施さ

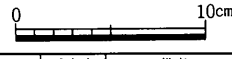






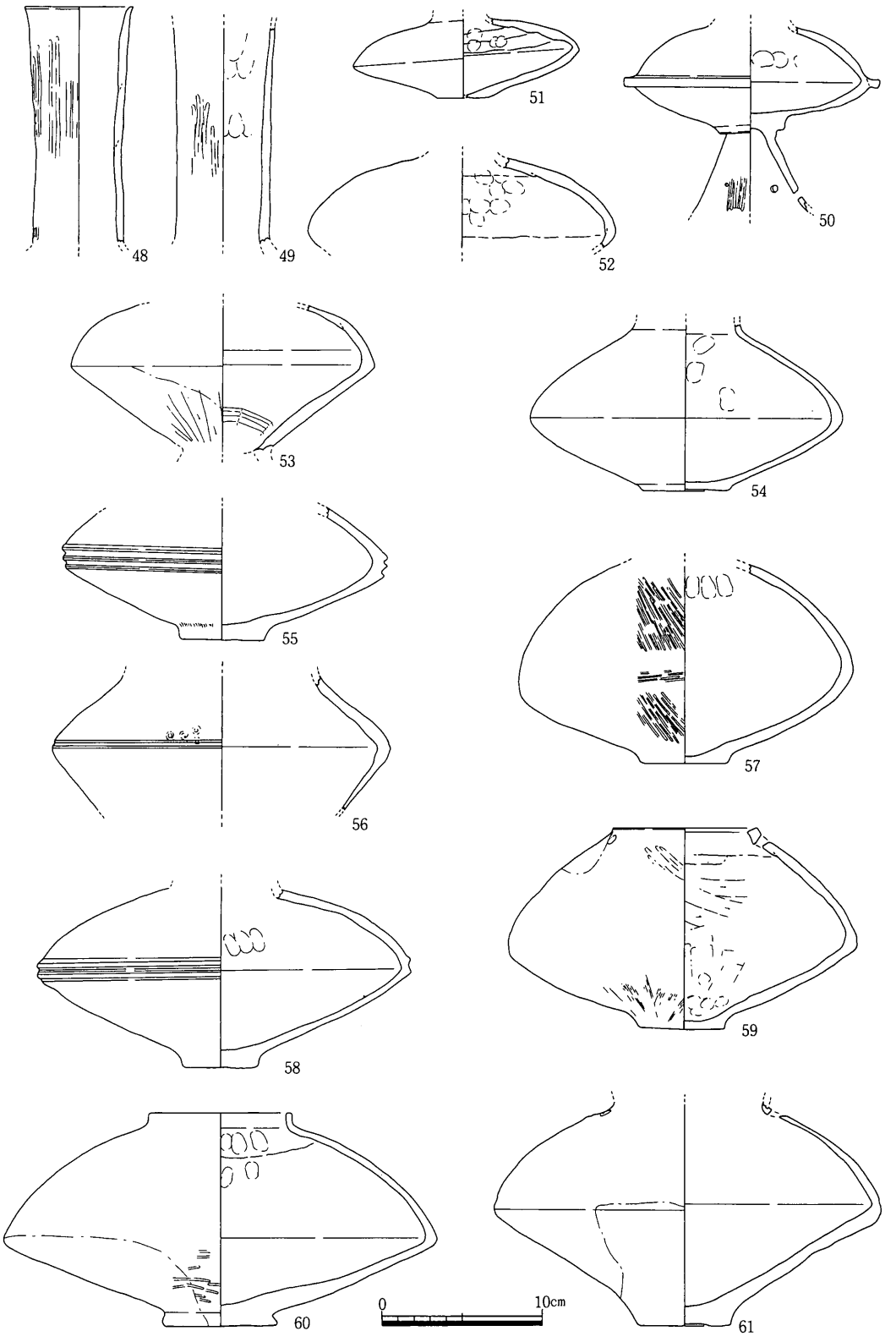






遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
43	弥・壷	11.5	20.0	6.1	中・多	にぶい褐、にぶい赤褐	口縁ナデ、外面叩き→ナデ、内面ナデ	ほぼ完存	角閃石・雲母
44	弥・壷	10.9	26.8	7.2	中・少、細・普	にぶい褐、明黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面叩き、内面ﾅﾃﾞ・ﾊｹﾒ・ｹｽﾞﾘ	体部4/5	角閃石・ヘラ記号？
45	弥・壷	13.7			細・多	明褐	口縁ナデ、外面叩き、内面ナデ・ケズリ	口径3/4	角閃石
46	弥・壷	10.0	28.3	8.6	細・普	灰、褐	外面叩き、内面ナデ・ケズリ→ナデ・指押え	全体1/2	
47	弥・壷	12.0	27.2	8.4	粗・多	明黄褐	口縁ナデ、外面叩き、内面ナデ	全体3/4	角閃石

第54図　3区ＳＤ02出土遺物５（１／４）



第55図　３区ＳＤ02出土遺物６（１／４）

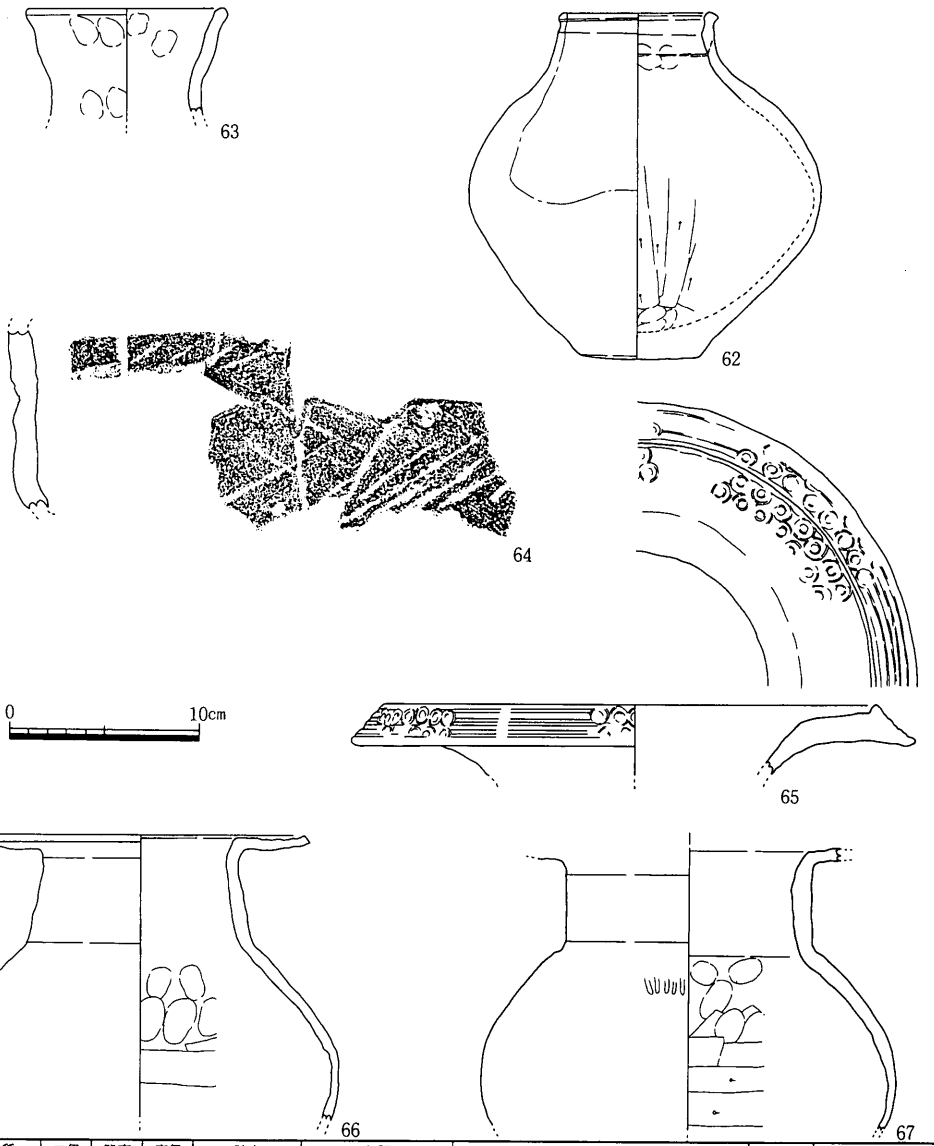
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
48	弥・壷	6.7			粗・多	にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ナデ	頸部完存	角閃石
49	弥・壷				細・普	にぶい褐、にぶい黄褐	外面ミガキ、内面指押え・ナデ	頸部3/4	角閃石
50	弥・壷				細・少	黒、にぶい黄橙	体部：外面ﾏﾒﾂ・内面指押え・ﾅﾃﾞ，脚：外面ﾐｶﾞｷ・内面ﾅﾃﾞ，円形透し4個（未貫通2）	体部1/2	角閃石
51	弥・壷			3.3	微・少	にぶい黄橙	外面ナデ、内面ナデ	体部完存	角閃石
52	弥・壷				微・少	褐灰、にぶい黄橙	外面ナデ、内面指押え・ナデ	体部完存	角閃石
53	弥・壷				細・少	にぶい黄橙	外面ナデ・ケズリ、内面ハケ目→ナデ	体部完存	角閃石
54	弥・壷			5.2	細・普	黒、にぶい黄橙	外面ナデ、内面指押え・ナデ	全体1/3	角閃石・雲母
55	弥・壷			5.2	中・普	黒、にぶい黄橙	外面ハケ目・マメツ、内面ナデ	体部1/2	角閃石
56	弥・壷				中・普	浅黄	外面マメツ、内面ナデ・マメツ	体部1/5	
57	弥・壷			5.5	微・普、細・少	にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ナデ	ほぼ完存	角閃石・雲母
58	弥・壷			4.7	微・少	黒、黄灰・にぶい黄橙	外面ナデ、内面ナデ	体部2/3	角閃石
59	弥・壷	8.9	12.5	5.4	中・普、粗・少	褐灰・にぶい黄褐、にぶい黄褐	外面ﾐｶﾞｷ・ハケ目、内面ﾊｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ・指押え、口縁に2個1単位の円孔2単位	ほぼ完形	角閃石
60	弥・壷	9.0	13.2	7.0	中・多	橙	外面ミガキ→ナデ、内面指押え・ナデ	全体1/2	
61	弥・壷			5.8	中・普	にぶい赤褐・にぶい褐	外面マメツ、内面ナデ	全体2/3	角閃石

3区ＳＤ02出土遺物６観察表

れているが，全体に摩滅しており部分的に残存しているにすぎない。内面上半にはヘラケズリが，下半には板ナデが見られる。底部は突出し，内面には指押さえ痕が顕著である。60は体部の屈曲が強く扁平の度合いが強くなっている。口縁部は短く直立している。全体に摩滅しているが，体部外面下半にヘラミガキが一部見られる。内面の上部には粘土紐の接合痕と指押さえ痕が見られ，底部は突出しているがやや潰れ気味である。61は59と同様に口縁部の屈曲部に２個１単位の円形の穿孔が両側に施されている。円形の穿孔のすぐ上に剥離痕があるが，幅の広い頸部が接続されていた可能性もある。底部は突出している。

62は短頸壷である。頸部は短く内傾し，口縁部はやや外傾し端部は外側に拡張し，内面を強くナデている。体部は球形に近く，内面下半にはヘラケズリが施されている。底部内面には指押さえ痕が見られる。

63は壷の口縁部で，内・外面に指押さえ痕が見られる。口縁部端部は丸く収めている。64は壷の頸部の破片であるが，外面にヘラ圧痕文を交互に３段施している。65は壷の口縁部であるが，口縁部は頸部から横へ開き，端部を上下に拡張させ，外面に傾斜する面を作り凹線を施している。そして口縁部の傾斜する端面と上部に，大きいものの中に小さいものを施す二重の竹管文を14個１単位でそれぞれ対応させて配置し，現存で５単位分が見られる。66・67は口縁部が頸部から横へ大きく開くもので，体部内面の上半には指押さえ痕が顕著である。66の頸部は直線的にやや内傾し，口縁部を強くナデている。体部内面の中央部以下に板ナデを施す。67の頸部は直立し，体部内面の中央部以下にはヘラケズリが施されている。

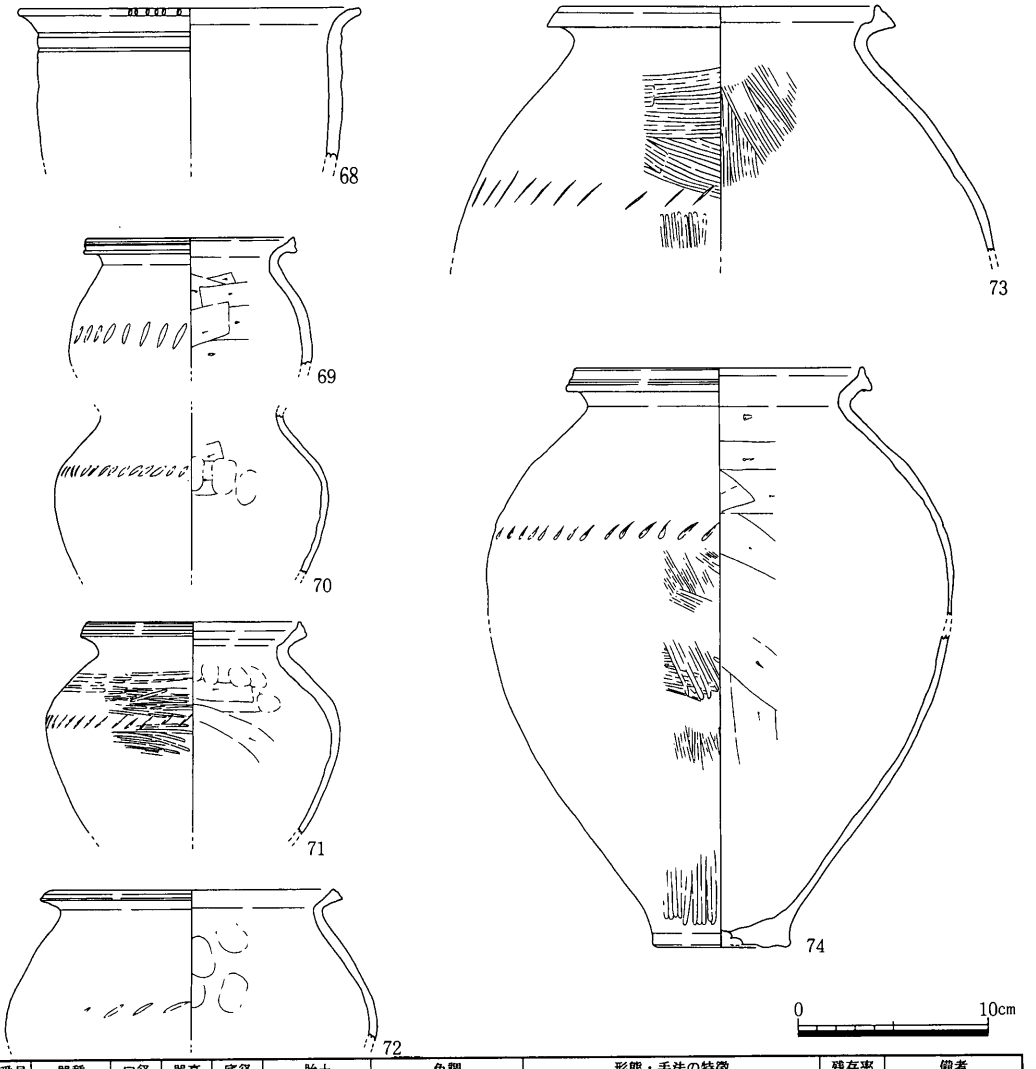


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
62	弥・壷	7.5	17.8	6.4	細・多	褐	口縁ナデ、外面ナデ、内面ナデ・ケズリ	完存	角閃石・雲母
63	弥・壷	10.2			細・普	明褐	外面指押え・ナデ、内面指押え・ナデ	口径1/2	角閃石・雲母
64	弥・壷				粗・多、中・多	黄褐・黄灰、暗赤褐	全体にマメツ	頸部1/4	
65	弥・壷	25.8			粗・多	灰黄褐・にぶい橙	外面マメツ、内面ナデ	口径3/4	
66	弥・壷	17.4			粗・普、中・多	にぶい黄橙、褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・指押え・板ﾅﾃﾞ	全体1/4	角閃石
67	弥・壷				中・多	褐・にぶい黄橙	外面マメツ、内面指押え・ケズリ・ナデ	全体1/3	角閃石・雲母

第56図　３区ＳＤ02出土遺物７（１／４）

68～151は甕である。68は如意状口縁の甕で，口縁部端部には刻み目が施され，口縁部直下にヘラ描沈線が2条巡っている。外面には煤が付着している。

69・71・73～108・110・112～123・125・126・131・137・138・145～151は口縁部端部を拡張し，端部外面に幅広の面を形成し，主に凹線を施すものである。上方に拡張するもの（71・73・94・96・98・101～103・105～108・110・112・113・117・121～123・125・131・137・138・145・146・151），下方に拡張するもの（78・82・85・118～120），上



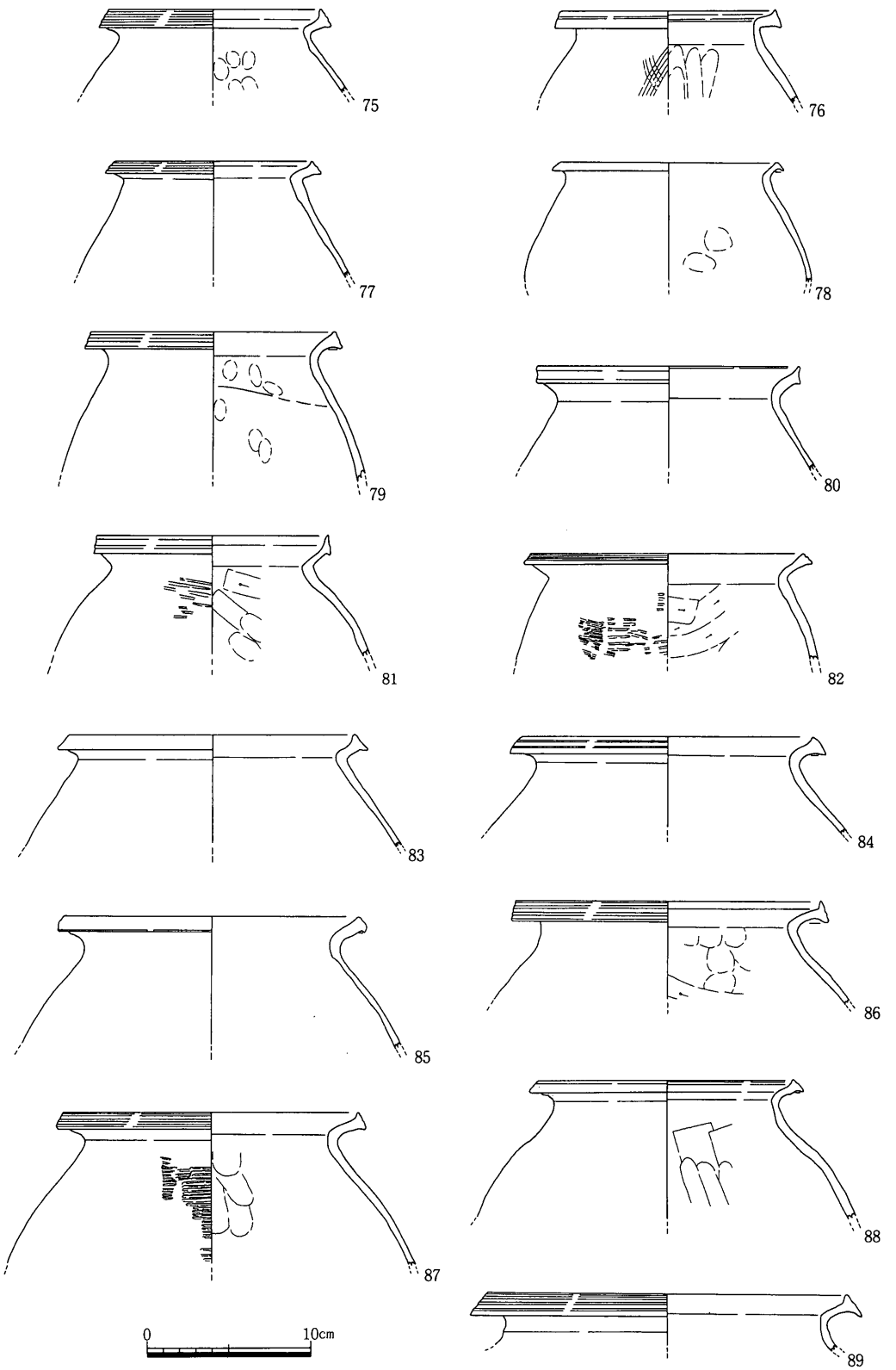
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
68	弥・甕	18.0			中・多	赤褐、明赤褐・黒	外面ナデ・内面マメツ、口縁端部に刻み目	口径1/4	
69	弥・甕	11.0			中・普	ﾆﾌﾞｲ黄褐、ﾆﾌﾞｲ黄橙	口縁ナデ、外面ナデ、内面ケズリ	口径1/4	角閃石・雲母
70	弥・甕				中・普	にぶい黄橙、灰黄・橙	外面ナデ、内面ケズリ・指押え	体部細片	
71	弥・甕	11.2			微・普	橙・黒褐、褐・黒褐	口縁ナデ、外面ミガキ、内面指押え・ケズリ	口径1/3	角閃石・雲母
72	弥・甕	14.9			中・少、細・少	にぶい褐、にぶい黄橙	外面ナデ、内面ナデ・指押え	口径1/4	角閃石・雲母
73	弥・甕	16.5			中・多、粗・普	にぶい黄	口縁ナデ、外面ハケ目・ミガキ、内面ハケ目	口縁完存	雲母
74	弥・甕	15.2	30.2	6.8	粗・少、中・少	にぶい褐・黒褐	口縁ナデ、外面ハケ目→ミガキ、内面ケズリ	全体2/3	角閃石・雲母

第57図　3区ＳＤ02出土遺物８（１／４）

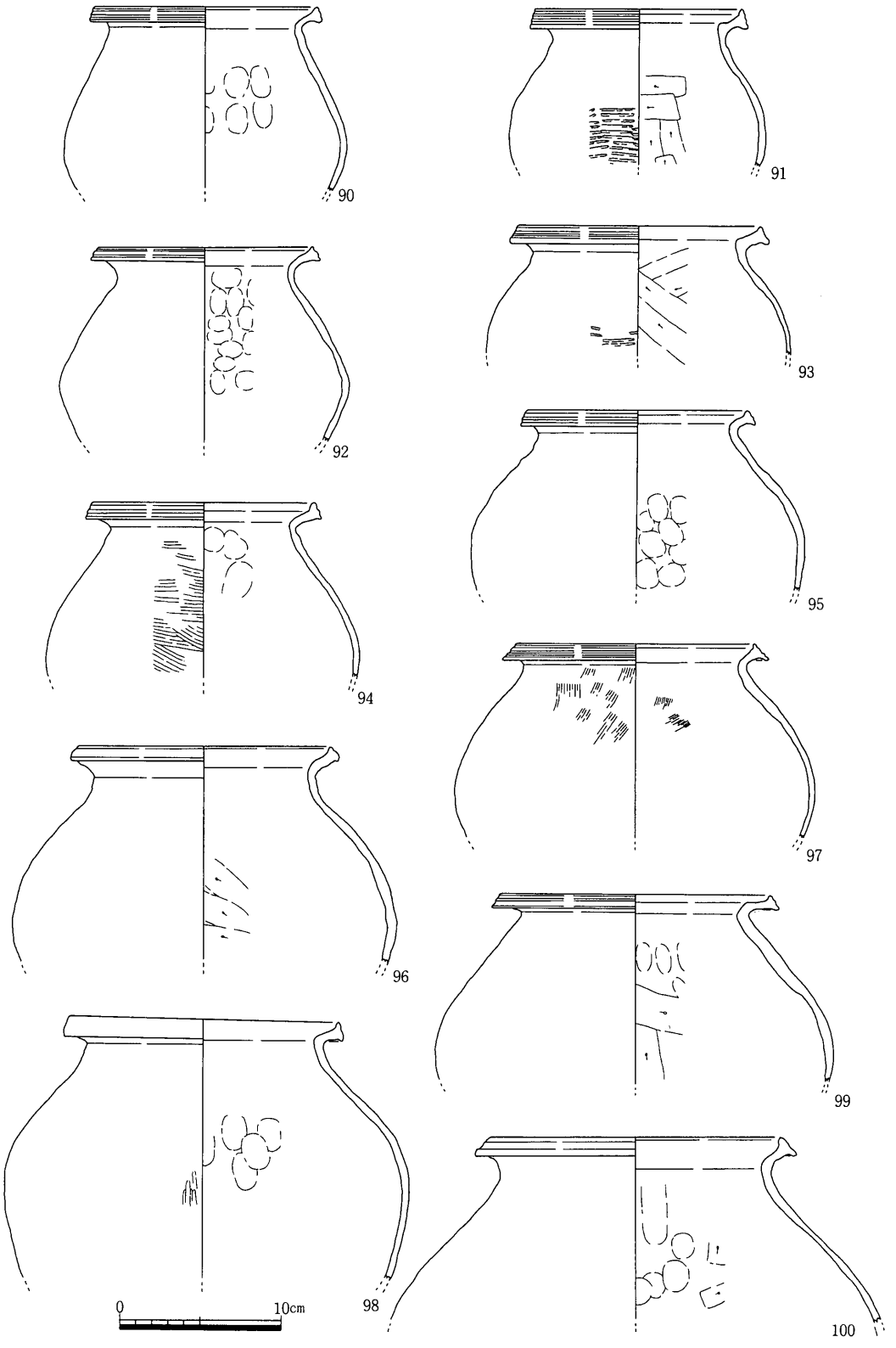
下に拡張するもの（69・74～77・79～81・83・84・86～93・95・97・99・100・104・114～116・126・147～150）がある。69は体部外面にヘラ圧痕文が見られ，内面は体部上部にまでヘラケズリが及んでいる。71は体部最大径は上部にあり，体部外面は横方向のヘラミガキと思われるが叩きの可能性も考えられる。内面には上部までヘラケズリを施している。72の口縁部端部は拡張気味である。73の口縁部端部は強く内傾する面をもつ。体部上半は内・外面ともハケ目を施し，外面下半にはヘラミガキを施している。74は口縁部は内傾する面をもち凹線を施す。体部は倒卵形で，外面はハケ目の後に下半部にヘラミガキを施している。内面はヘラケズリが上部にまで及んでいる。76は体部外面はハケ目を施し，内面は指で器壁を縦方向に削り取っている。78は口縁部端部を斜め下方に拡張し，外側に内傾する面を作る。80は口縁部端部を上下に拡張するが，外面を強くナデることによって上方に大きく拡張している。81は口縁部端部を直立に近く上下に拡張している。体部外面には叩きを施し，内面は上部までヘラケズリを施している。82は体部外面は叩きの後にハケ目を施す。内面は上部までヘラケズリを施す。83・84は体部上半部は直線的である。85は体部に比べて口縁部が全体に肥厚している。86は口縁部は体部から鋭く屈曲し，端部を上下に拡張する。87は体部外面に叩きを施している。88は体部内面は板ナデの後に指で縦方向に強くナデている。89は口縁部端部の上下の拡張は強く，外側に大きく内傾する面をもつ。91・93は口縁部は鋭く屈曲し，強くナデることにより端部を上下に拡張させている。

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
75	弥・甕	13.0			中・少	オリーブ黒、灰	口縁ナデ、外面ナデ、内面指押え・ナデ	口径7/8	角閃石
76	弥・甕	13.0			中・少、細・少	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ナデ	口径1/3	角閃石
77	弥・甕	12.0			細・普	にぶい褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/3	角閃石・雲母
78	弥・甕	13.3			中・普	黒褐・明赤褐	全体にマメツ	口径1/4	
79	弥・甕	14.8			中・普	にぶい黄褐、褐・黄褐	口縁ナデ、外面マメツ、内面指押え・ナデ	口径1/7	角閃石
80	弥・甕	16.0			中・多	灰黄・灰	全体にマメツ	口径1/5	角閃石
81	弥・甕	14.2			中・普	褐	口縁ナデ、外面叩き、内面ケズリ	口径1/2	角閃石
82	弥・甕	16.5			細・少	にぶい黄褐・褐灰	口縁ナデ、外面叩き→ハケ目、内面ケズリ	口径1/12	角閃石・雲母
83	弥・甕	17.6			中・多	にぶい黄橙	全体にマメツ	口径1/5	
84	弥・甕	17.7			中・少	ﾆﾌﾞｲ黄橙、ﾆﾌﾞｲ黄褐	全体にマメツ	口径1/4	角閃石・雲母
85	弥・甕	18.2			細・多、粗・普	橙	全体にマメツ	口径1/5	
86	弥・甕	18.8			中・多	明褐	口縁ナデ、外面マメツ、内面指押え・ケズリ	口縁完存	角閃石
87	弥・甕	18.0			細・少、粗・少	暗灰黄、にぶい黄褐	口縁ナデ、外面タタキ、内面指押え・ナデ	口径1/2	角閃石
88	弥・甕	15.6			中・少	にぶい褐	口縁ナデ、外面マメツ、内面板ナデ・ナデ	口径1/4	角閃石
89	弥・甕	22.0			中・少	暗灰、明褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/4	角閃石
90	弥・甕	13.7			粗・少、中・少	灰黄褐、褐	口縁ナデ、外面マメツ、内面指押え・ナデ	口径1/6	角閃石・雲母
91	弥・甕	12.8			中・多	褐灰、黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面叩き→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・ｸｽﾞﾘ	口径1/2	角閃石
92	弥・甕	13.3			粗・少、中・普	にぶい黄褐、褐	口縁ナデ、外面マメツ、内面指押え・ナデ	口径1/3	角閃石
93	弥・甕	15.0			中・普	にぶい黄褐、にぶい褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面叩き・ﾏﾒﾂ、内面ｹｽﾞﾘ・ﾏﾒﾂ	口径1/2	角閃石
94	弥・甕	13.6			細・普	オリーブ黒、黄褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面指押え・ナデ	口径1/2	角閃石
95	弥・甕	13.6			中・少	にぶい黄褐	外面ナデ、内面ナデ・指押え	口縁完存	角閃石
96	弥・甕	15.5			粗・普	にぶい橙・黒褐	口縁ナデ、外面ナデ、内面ナデ・ケズリ	口径1/3	
97	弥・甕	14.6			微・多	明褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ナデ・ハケ目	口径1/4	角閃石・雲母
98	弥・甕	16.6			中・少、細・普	にぶい黄橙、にぶい褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ、内面指押え・ﾅﾃﾞ	口縁完存	角閃石
99	弥・甕	16.7			中・普	橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面指押え・ｸｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	口径1/2	角閃石
100	弥・甕	18.0			中・少	明褐	外面マメツ、内面指押え・ケズリ	口径1/6	角閃石

3区ＳＤ02出土遺物９・10観察表

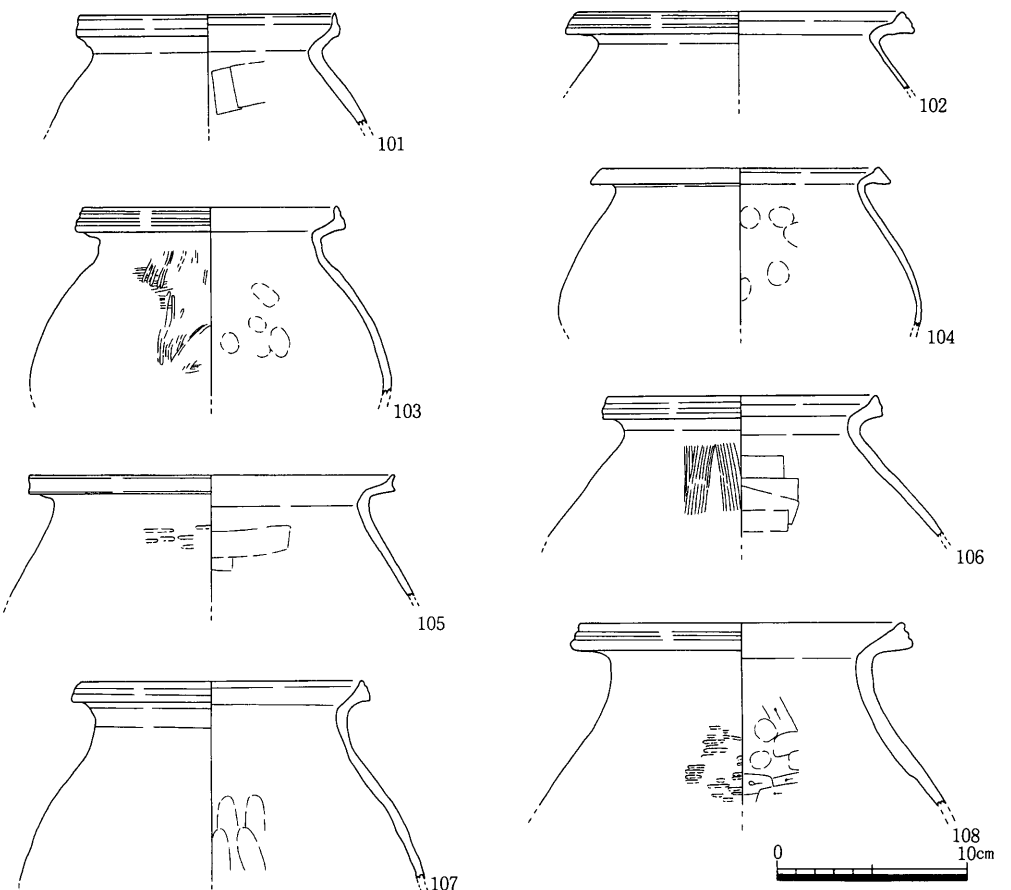


第58図　３区ＳＤ02出土遺物９（１／４）



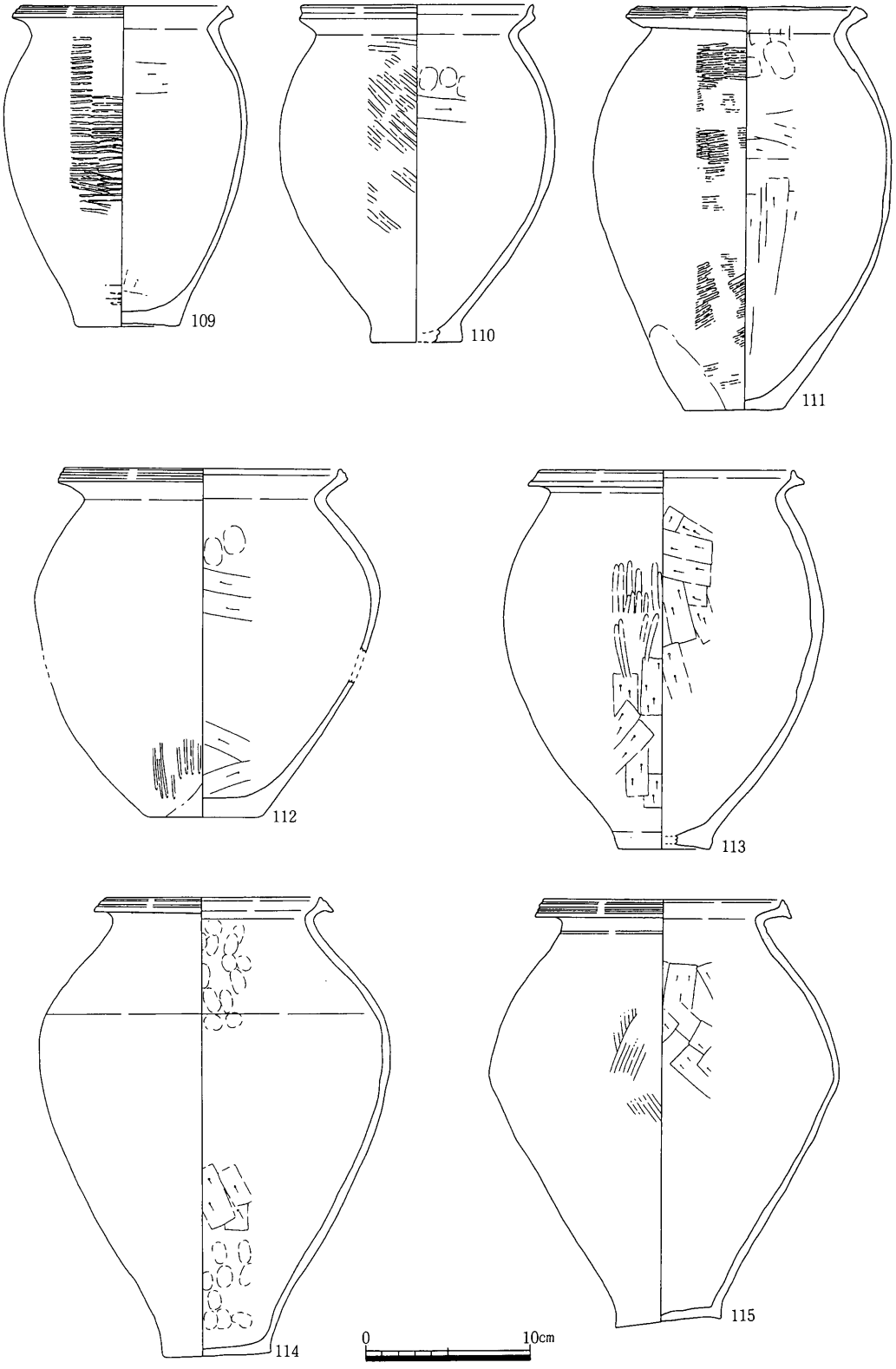
第59図　3区ＳＤ02出土遺物10（１／４）

両者とも体部外面には叩きを施し，内面はヘラケズリとなっている。94・97は体部外面にハケ目を施す。97は口縁部端部を上下に拡張するが，下方へ強く拡張している。98は体部外面下半にヘラミガキの痕跡がある。99は口縁部は真横に開いている。体部はヘラケズリの部分は器壁がかなり薄くなっている。97・99の体部最大径は上半にあり，下半は欠損しているが，おそらく倒卵形になるものと思われる。100の口縁部端部は上下に拡張し，外側の面は大きく内傾する。101・105は口縁部端部を上方に大きくつまみ上げている。102は体部の器壁が非常に薄いのに対して，口縁部は肥厚している。103は口縁部端部を上方に大きく拡張し内傾させている。体部外面はハケ目の後にヘラミガキを施している。106の体部上半部は直線的になっている。108は体部上半は内湾気味で，外面には叩きを施し



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
101	弥・甕	13.4			粗・少、細・少	黄灰・にぶい黄橙	口縁ナデ、外面マメツ、内面板ナデ	口径1/8	角閃石・雲母
102	弥・甕	17.0			細・普	にぶい橙、にぶい褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/2	角閃石
103	弥・甕	13.4			微・少	にぶい褐・褐灰	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、内面指押え・ﾅﾃﾞ	口径1/2	角閃石
104	弥・甕	14.4			微・普、細・少	灰黄褐、にぶい褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面指押え・ﾅﾃﾞ	口径1/8	角閃石・雲母
105	弥・甕	19.1			微・多、細・多	褐灰、にぶい橙	外面叩き・マメツ、内面板ナデ	口径1/4	角閃石
106	弥・甕	14.2			粗・少、細・多	黄灰、にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面板ナデ	口縁完存	角閃石
107	弥・甕	14.7			粗・少、中・多	にぶい赤褐	全体にマメツ	口径1/2	
108	弥・甕	16.8			細・多	にぶい黄褐、明褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾌﾀｷ、内面ｸｽﾞﾘ・指押え	口径1/4	角閃石

第60図　3区ＳＤ02出土遺物11（1／4）

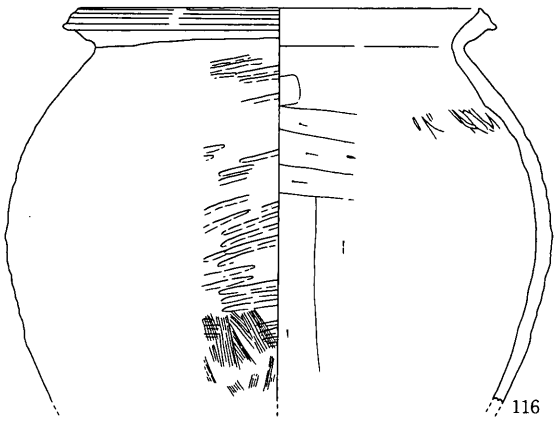


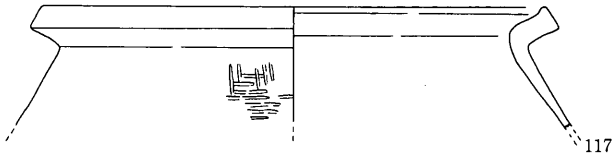
第61図　3区ＳＤ02出土遺物12（１／４）

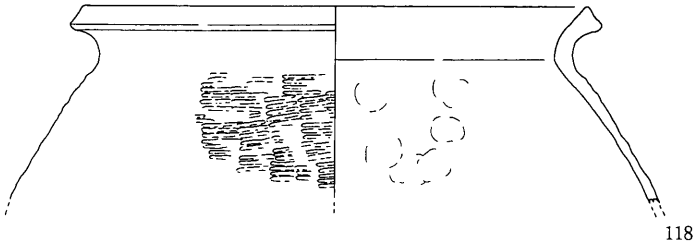
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
109	弥・甕	12.5	19.0	6.4	中・多	褐灰、にぶい褐	口縁ナデ、外面叩き、内面ケズリ・ナデ	体部1/4	角閃石
110	弥・甕	14.0	20.0	5.4	細・多	暗灰黄、にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ 面叩き、内面指押え・ｹｽﾞﾘ・ﾏﾒﾂ	全体1/2	角閃石
111	弥・甕	13.3	23.9	6.0	中・多、細・多	にぶい褐・灰褐・黒褐	口縁ﾅﾃﾞ、体部外面叩き、内面ｹｽﾞﾘ・指押え	ほぼ完存	角閃石
112	弥・甕	16.8	(21.0)	6.8	細・多	褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ、内面ｹｽﾞﾘ・ﾏﾒﾂ	ほぼ完存	角閃石
113	弥・甕	15.4	22.9	5.5	中・少	にぶい黄褐・黒褐	口縁ナデ、外面ケズリ→ミガキ、内面ケズリ	ほぼ完存	角閃石・雲母
114	弥・甕	13.1	27.7	6.6	中・少	褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面指押え・ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	口径1/2	角閃石
115	弥・甕	14.6	25.9	6.4	細・普、中・少	にぶい褐、明褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ケズリ・マメツ	口径1/2	角閃石・雲母

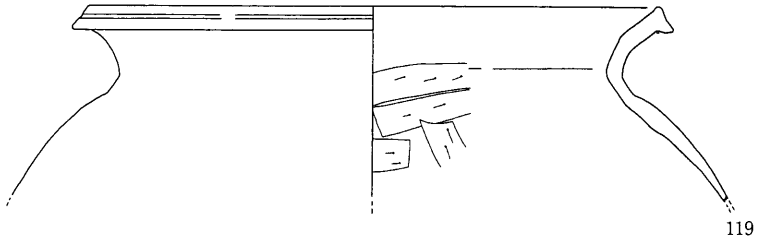
3区ＳＤ02出土遺物12観察表

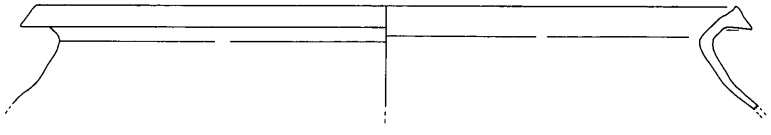
ている。内面はヘラケズリを強く施している。109は口縁部端部は拡張気味で鋭く屈曲している。体部の張りはあまり無く外面は全体に叩きを施している。内面は上部と底部付近にヘラケズリが認められ，中央部はナデている。110は口縁部端部を上方につまみ上げて，強くナデている。体部は中央部やや上側に最大径があり，外面には叩きを施している。底部は突出気味である。111は口縁部端部は拡張気味で，体部外面に叩きを施し，内面は中央やや上側までヘラケズリを施している。112は口径の割に器高が低く，全体に寸胴な甕である。113 は体部外面にヘラケズリの後に上部を中心にヘラミガキを施す。内面はヘラケズリである。114は体部下半から底部にかけて絞ったように細くなっている。内面の上部と底部付近に指押さえ痕が顕著である。115は体部最大径部分が強く屈曲している。116は体部外面は叩きの後に下半にハケ目を施している。内面は上部までヘラケズリを施しているが，ヘラ工具の角の部分が当った痕跡が認められる。117～120はいずれも口径が25cmを超える大型の甕である。117は体部に比べて口縁部がかなり肥厚している。体部外面上部には横方向の叩きの後に縦方向の叩きを施している。118の体部外面には叩きを入念に施している。119・120は口縁部端部を下方へ大きく拡張している。121・122は体部外面全体に叩きを施している。123は口縁部端部を上方につまみ上げ強くナデている。体部外面には全体に叩きを施し，内面は全体にヘラケズリである。口縁部と底部を中心に歪んでいる。124は口縁部端部は拡張気味で，外側に内傾する平坦な面を作る。125は体部最大径部分は中央やや上側にあり，大きく膨らんでいる。126 は体部外面は叩きの後にハケ目を施しているが，上部ではまだ叩きが残っている。内面は中央部までヘラケズリである。底部は歪んでおり安定が悪い。131は口縁部は体部から強く屈曲し，端部は強くナデることにより上方に拡張させている。体部外面は叩きの後にナデており，内面上部にはハケ目が見られる。137は壷に近い形態をしているが，はっきりとした口縁部がありながら頸部がないことから甕と考えたものである。体部上半部は張りがなくなだらかである。内面はヘラケズリである。138 は口縁部端部を上方に拡張し，体部は最大径が上半にある。内面は全体にヘラケズリを施している。146は口縁部は体部から鋭く屈曲している。147は体部外面







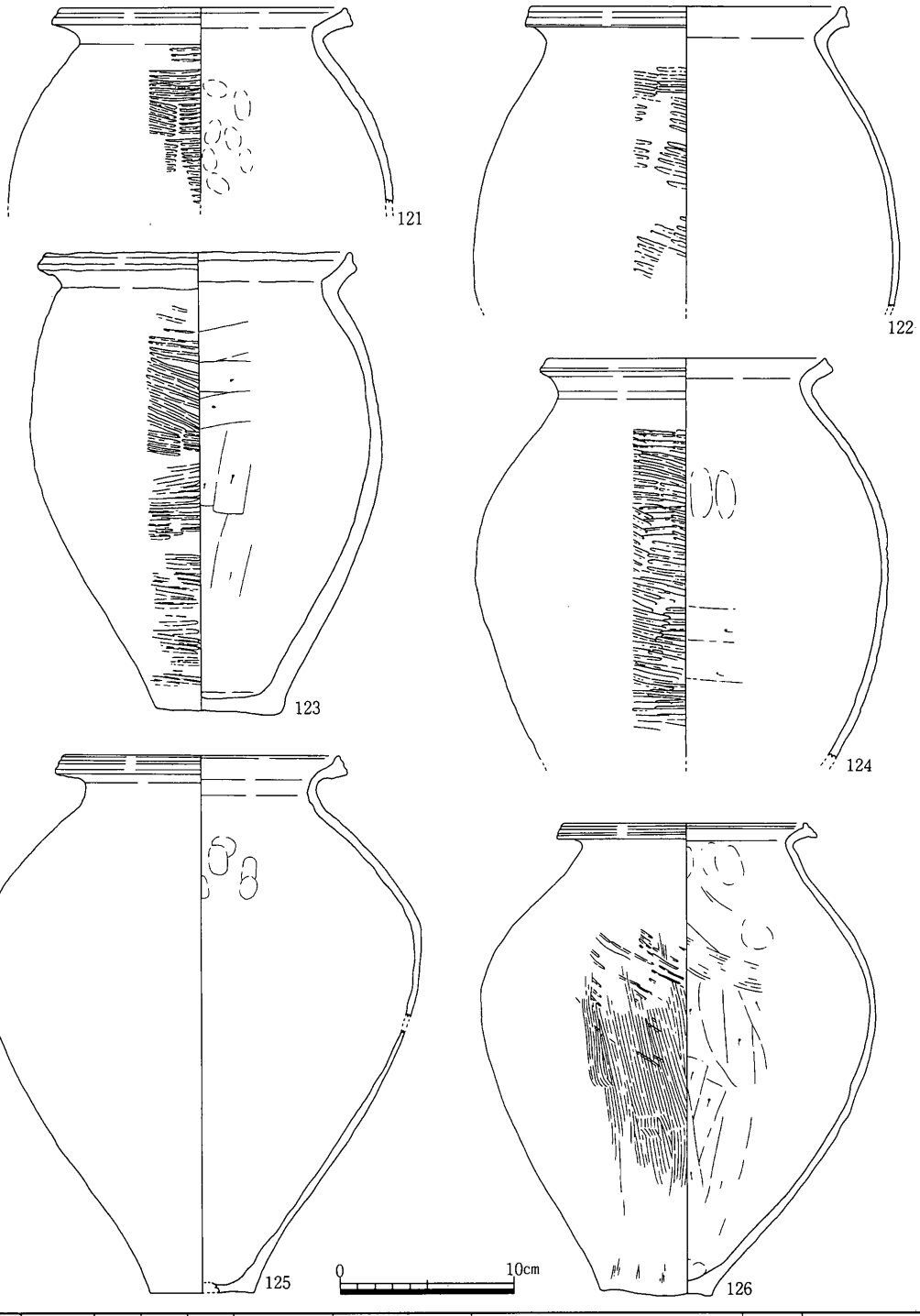




0 10cm

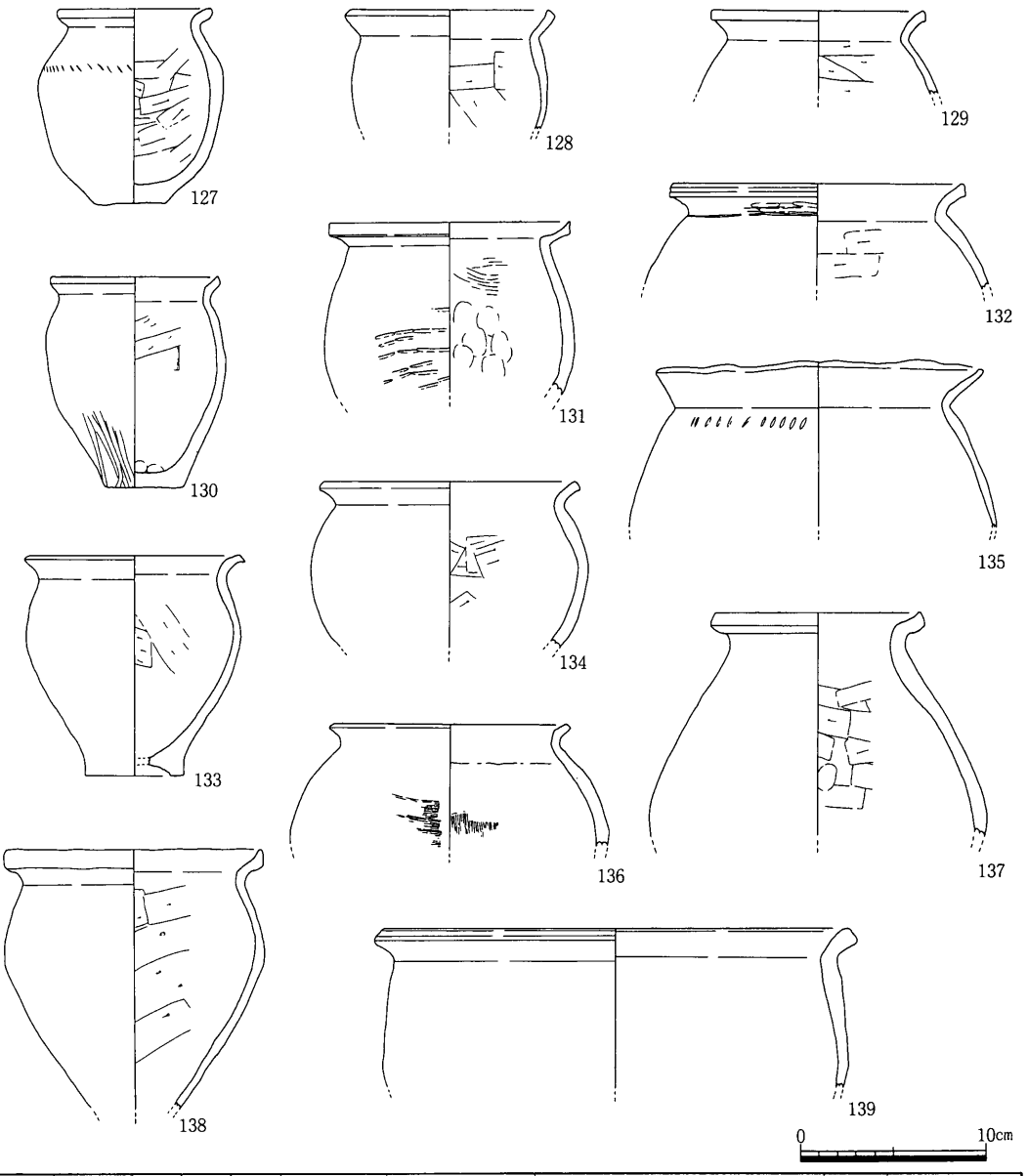
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
116	弥・甕	21.0			中・多	にぶい褐・にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、体部外面叩き→下半ﾊｹﾒ、内面ｹｽﾞﾘ	口径1/2	角閃石
117	弥・甕	26.4			中・多	明褐	口縁ナデ、外面叩き、内面マメツ	口径1/3	角閃石
118	弥・甕	26.6			細・多、中・多	明赤褐・明褐灰	口縁ナデ、外面叩き、内面指押え・ナデ	口径3/5	角閃石
119	弥・甕	30.0			細・普、中・少	灰黄褐、にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ナデ、内面ケズリ	口縁完存	角閃石
120	弥・甕	36.6			中・多、粗・少	明赤褐	全体にマメツ	口径1/8	

第62図　3区ＳＤ02出土遺物13（１／４）



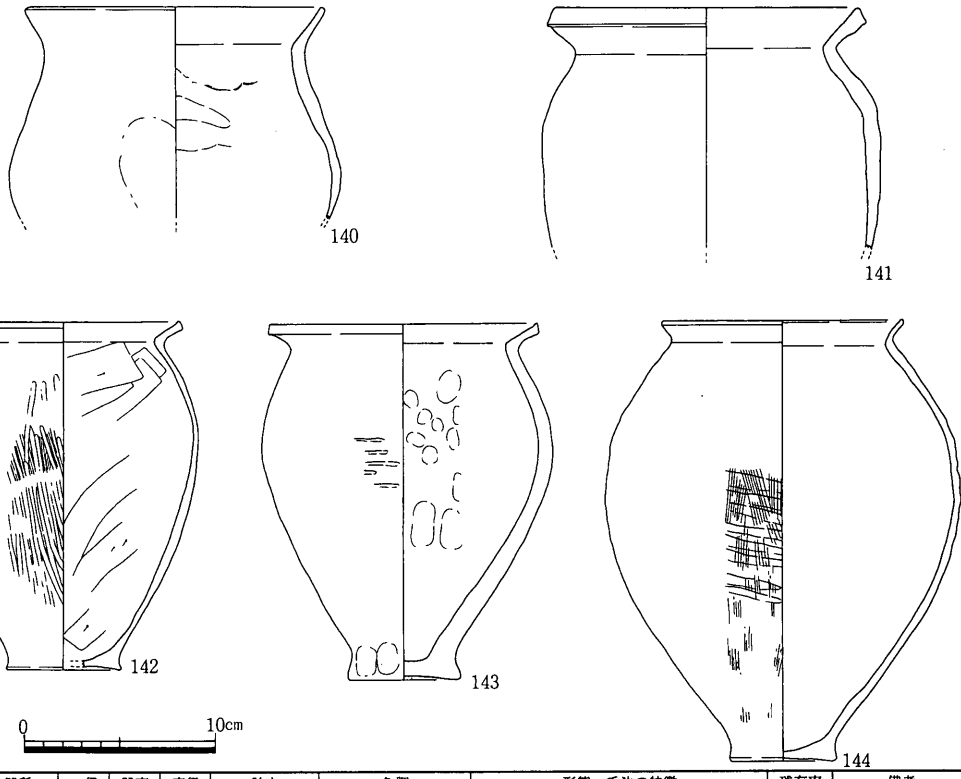
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
121	弥・甕	16.3			中・多、細・多	黒褐・にぶい黄褐	口縁ナデ、外面叩き、内面指押え・ナデ	口径2/3	角閃石
122	弥・甕	17.8			中・多	暗灰黄、灰黄褐	口縁ナデ、外面叩き、内面ナデ	口径1/7	角閃石
123	弥・甕	17.6	25.3	7.3	中・普、粗・少	にぶい黄橙・黒	口縁ナデ、外面叩き、内面ケズリ	全体3/4	角閃石
124	弥・甕	15.8			中・多	にぶい黄褐、にぶい褐	口縁ナデ、外面叩き、内面ナデ・ケズリ	口径4/5	角閃石
125	弥・甕	15.8	30.7	6.0	細・少	褐・黒	口縁ナデ、体部全体マメツ	口径2/3	角閃石
126	弥・甕	13.9	27.0	6.4	細・普	にぶい黄橙・明赤褐	口縁ﾅﾃﾞ、外ﾀﾀｷ→ﾊｹ目、内ﾊｹ目・ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	全体7/10	角閃石・雲母

第63図　3区ＳＤ02出土遺物14（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
127	弥・甕	8.0	10.2	3.8	細・普	オリーブ黒	口縁ナデ、外面ナデ、内面ケズリ	口径1/2	角閃石
128	弥・甕	10.6			粗・少、細・少	にぶい黄橙	口縁ナデ、外面マメツ、内面ケズリ	口径1/2	角閃石・雲母
129	弥・甕	11.4			中・普	にぶい褐、にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ナデ、内面ケズリ	口径1/4	角閃石・雲母
130	弥・甕	9.0	11.4	4.1	微・普	褐・黄褐、黒・橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	ほぼ完存	角閃石・雲母
131	弥・甕	12.9			細・普	灰褐、にぶい赤褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面叩き→ﾅﾃﾞ、内面ﾊｹ目・指押え	口径1/2	角閃石
132	弥・甕	15.6			細・普	にぶい橙	口縁ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、外面ﾅﾃﾞ、内面ｹｽﾞﾘ	口径1/3	角閃石
133	弥・甕	11.4	11.8	5.3	微・普	灰、黄灰・にぶい赤褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ、内面ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	口径3/4	角閃石
134	弥・甕	13.5			中・普	黒褐・にぶい黄、黒褐	口縁ナデ、外面ナデ、内面ケズリ	口径1/3	雲母
135	弥・甕	18.0 19.8			細・普、中・少	黄褐、橙	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ、全体に歪み口縁は楕円形	口縁完存	角閃石
136	弥・甕	12.5			細・普	ﾆﾌﾞｲ黄橙、ﾆﾌﾞｲ黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目	口径1/8	煤付着、角閃石・雲母
137	弥・甕	11.0			中・普	にぶい黄、明褐	口縁ナデ、外面ナデ、内面ケズリ	口径1/6	角閃石・雲母
138	弥・甕	13.8			粗・少、細・少	にぶい黄橙、黒・灰黄	口縁ナデ、外面ナデ、内面ケズリ	全体1/3	角閃石・雲母
139	弥・甕	25.0			中・多	明黄褐、ﾆﾌﾞｲ褐・黄灰	口縁ナデ、体部全体にマメツ	口径1/6	角閃石・雲母

第64図　3区ＳＤ02出土遺物15（１／４）

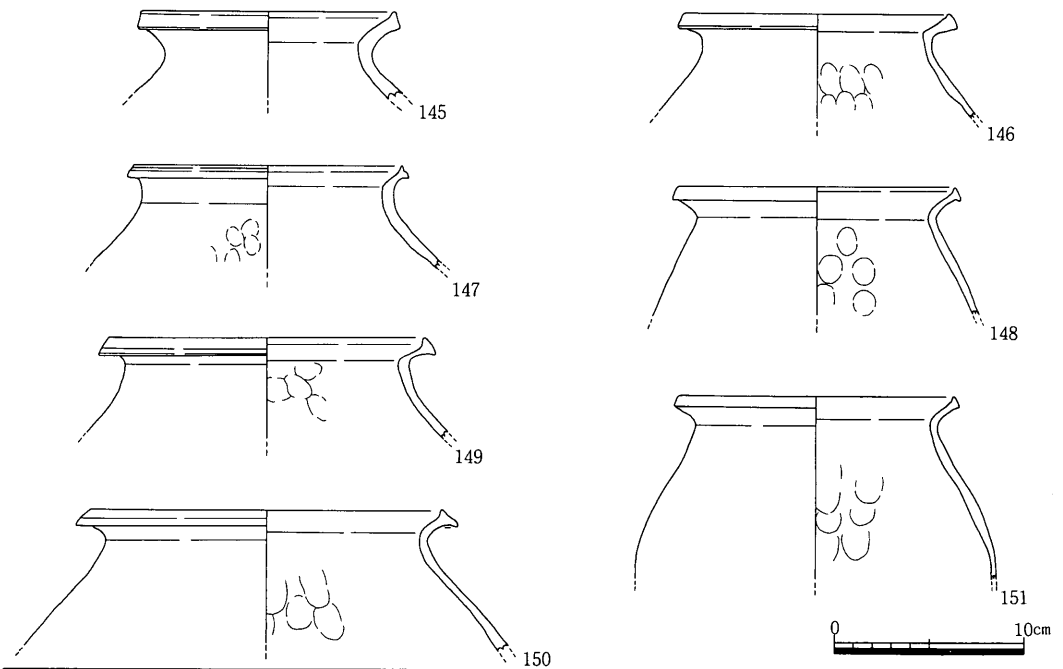


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
140	弥・甕	15.4			中・普、粗・少	にぶい黄褐、にぶい褐	外面マメツ、内面ナデ	全体1/4	角閃石
141	弥・甕	16.0			細・多、中・多	にぶい赤褐	全体にマメツ	口縁完存	
142	弥・甕	12.2	17.6	6.1	中・普	にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ハケ目→ﾐｶﾞｷ、内面ｸｽﾞﾘ	口縁完存	角閃石
143	弥・甕	14.0	18.1	5.9	中・普	にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面叩き→ﾅﾃﾞ、内面指押え・ﾅﾃﾞ	口径2/3	角閃石
144	弥・甕	12.6	22.5	5.4	細・少	灰オリーブ	口縁ﾅﾃﾞ、外面叩き→ﾊｹﾒ、内面ﾅﾃﾞ、幅広の叩き	底部完存	雲母・結晶片岩

第65図　3区ＳＤ02出土遺物16（１／４）

に指押さえ痕が見られる。149は口縁部が非常に薄くなっているが，端部は上下に拡張し肥厚している。150 は口縁部端部を上下に拡張するが，端面は強く内傾している。

127～130・132～136・139～144は口縁部端部を拡張させないものである。127の体部は全体に角張っており，内面は全体にヘラケズリを施している。129の口縁部は外反して立ち上がる。130は体部の張りがなく，外面下半にはヘラミガキを施している。132は口縁部端部外面に凹線を巡らせ，口縁部外面にはヘラミガキを施している。また口縁部と体部との境には棒状工具による凹線を１条巡らせている。133の口縁部は丸みをもって外反し，体部は最大径が上半にある。体部外面の下半部には摩滅しているがヘラミガキの痕跡が認められる。底部は上げ底で輪台状になっている。135は口縁部は長めで直線的に斜め上方に立ち上がり，端部は若干内側に肥厚する。体部外面には列点文を施す。口縁部は歪んで楕円形となっており，口径の長径は19.8cm，短径は18.0cmである。136は口縁部は短く丸



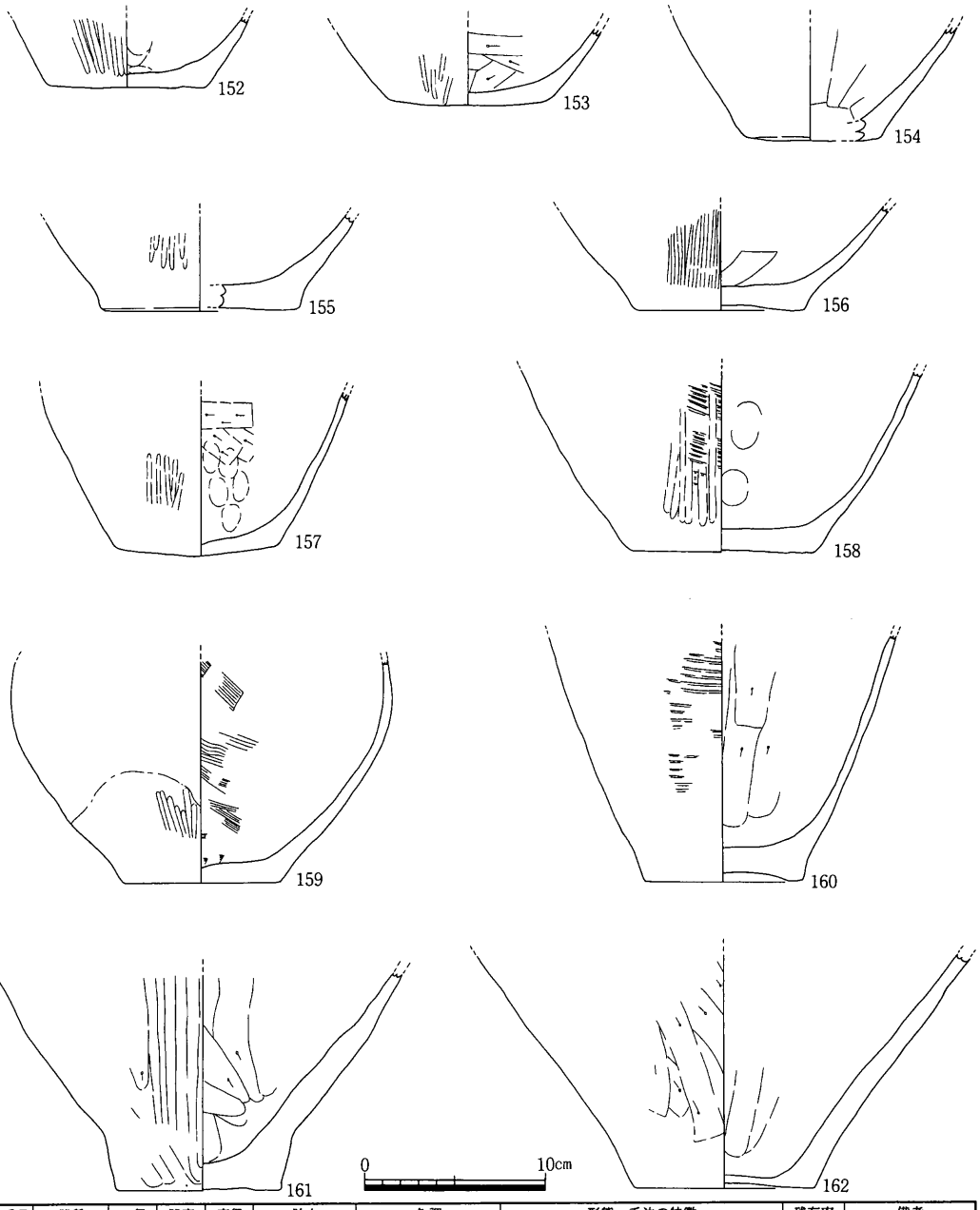
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
145	弥・甕	13.3			普・多、粗・少	橙・にぶい橙	全体にマメツ、内面指押え	口径1/3	角閃石・雲母
146	弥・甕	13.8			微・多、細・少	にぶい橙	全体にマメツ、内面指押え	口径1/4	角閃石・雲母
147	弥・甕	14.0			細・多	にぶい黄褐、明褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・指押え、内面ﾅﾃﾞ	口径1/4	角閃石・雲母
148	弥・甕	14.6			微・少	明褐	口縁ナデ、外面マメツ、内面指押え・ナデ	口径1/4	角閃石・雲母
149	弥・甕	16.5			細・多	にぶい褐	口縁ナデ、外面マメツ、内面指押え・ナデ	口径1/4	角閃石・雲母
150	弥・甕	18.2			中・少	灰黄、にぶい褐	口縁ナデ、外面マメツ、内面指押え	口径1/4	角閃石・雲母
151	弥・甕	14.4			中・普	にぶい褐、明褐	口縁ナデ、外面マメツ、内面指押え	口径1/4	角閃石・雲母

第66図　3区ＳＤ02出土遺物17（1／4）

みをもって外反し，体部は上半が大きく張る。139は体部上半が直線的で張りがない。140は口縁部は直線的で強くナデている。体部上半は直線的で，内面には指で器壁を強くナデている。141は体部上部で屈曲し，中央部が直線的になっている。142の体部外面はハケ目の後にヘラミガキを施し，内面は全体にヘラケズリを施している。底部は横に潰れたように突出している。143の口縁部は体部から鋭く屈曲し，体部外面には叩きが残る。内面には指押さえ痕が顕著である。底部は外面を指で強く押さえて絞りだしている。144の体部は大きく膨らみ，外面には叩きの後にハケ目を施している。

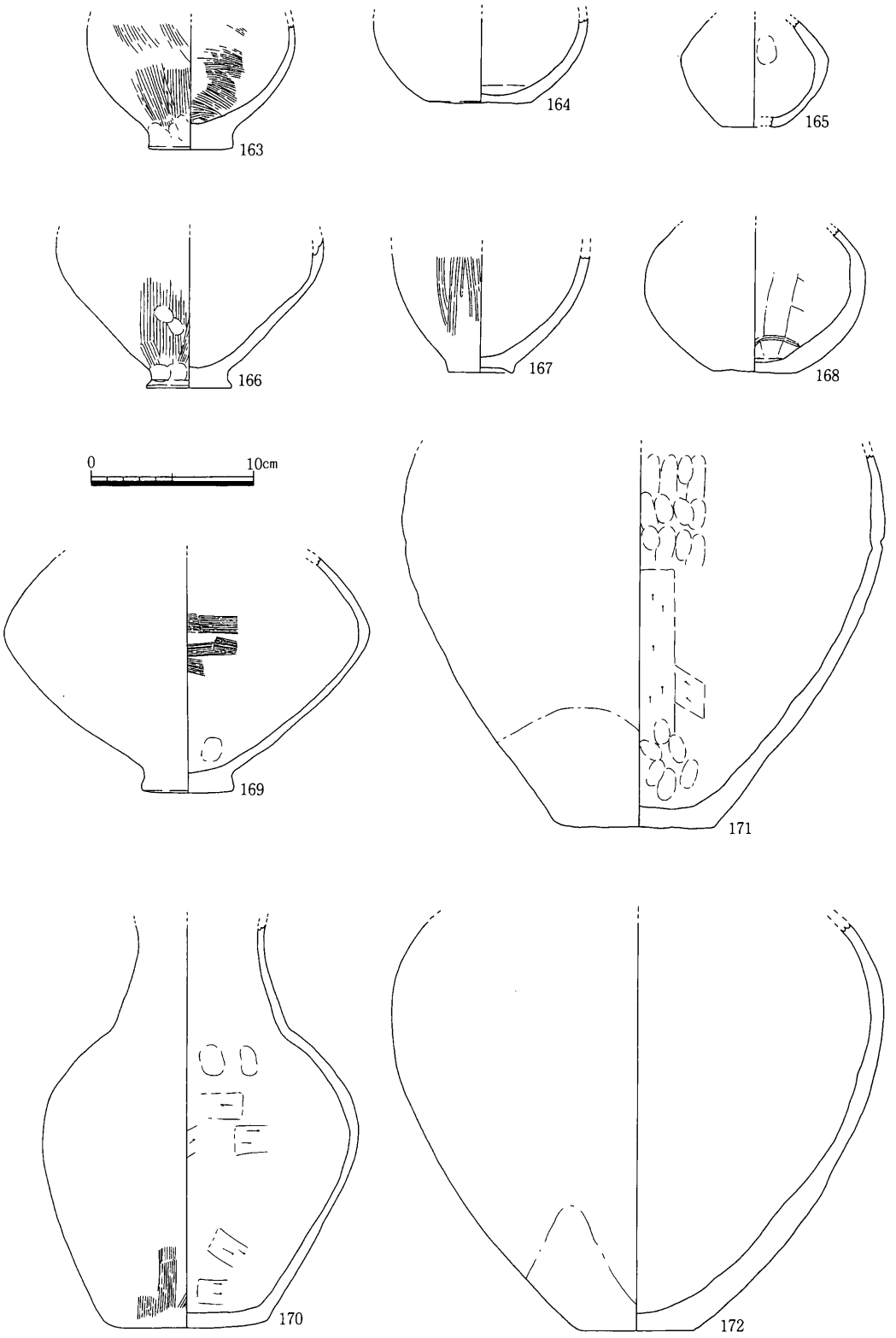
以上の７～151は口縁部の残っているものについて壷と甕に分類して述べてきた。152～192は口縁部は欠損し，底部を中心とした破片であるが，明確に判断のつきにくいものも含まれるが，体部や底部の形状から判断して壷と甕に分類した。

152～172は壷と考えられるものである。152・153・155は体部外面にヘラミガキを施している。153は内面にヘラケズリを施し，底部立ち上り部は丸みを帯びている。156は体部



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
152	弥・壷			8.3	細・普	黒、にぶい褐	外面ミガキ、内面指押え・ナデ	底部完存	角閃石・雲母
153	弥・壷			8.8	細・普	黒、黒褐	外面ミガキ、内面ケズリ、底部外面叩き	底径1/2	角閃石
154	弥・壷			7.3	細・少	浅黄、にぶい赤褐	外面ナデ、内面板ナデ	底径1/2	角閃石
155	弥・壷			11.0	粗・少、中・普	橙、にぶい褐	外面ミガキ・マメツ、内面マメツ	底径1/3	角閃石
156	弥・壷			9.2	中・普	にぶい黄褐、にぶい褐	外面ハケ目、内面板ナデ	底部完存	角閃石・雲母
157	弥・壷			9.1	細・多、中・多	黒、にぶい黄褐	外面ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘ・指押え、底外面叩き	底径3/4	角閃石
158	弥・壷			10.0	粗・少、中・普	にぶい黄、にぶい黄橙	外面ハケ目→ミガキ、内面指押え・ナデ	底径4/5	角閃石、内(赤)
159	弥・壷			8.6	細・普	にぶい橙	外面ミガキ、内面ハケ目、ハケ目原体2種類	底径1/2	角閃石
160	弥・壷			8.7	中・多	ﾆﾌﾞｲ黄、暗褐・灰黄褐	外面叩き→ナデ、内面ケズリ	底部完存	
161	弥・壷			9.0	粗・普	にぶい黄橙、にぶい褐	外面ｹｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘ→指ナデ	底部完存	角閃石
162	弥・壷			10.0	粗・少、細・普	黒、褐	外面ケズリ、内面ナデ	底径2/3	角閃石・雲母、内(赤)

第67図　3区ＳＤ02出土遺物18（１／４）



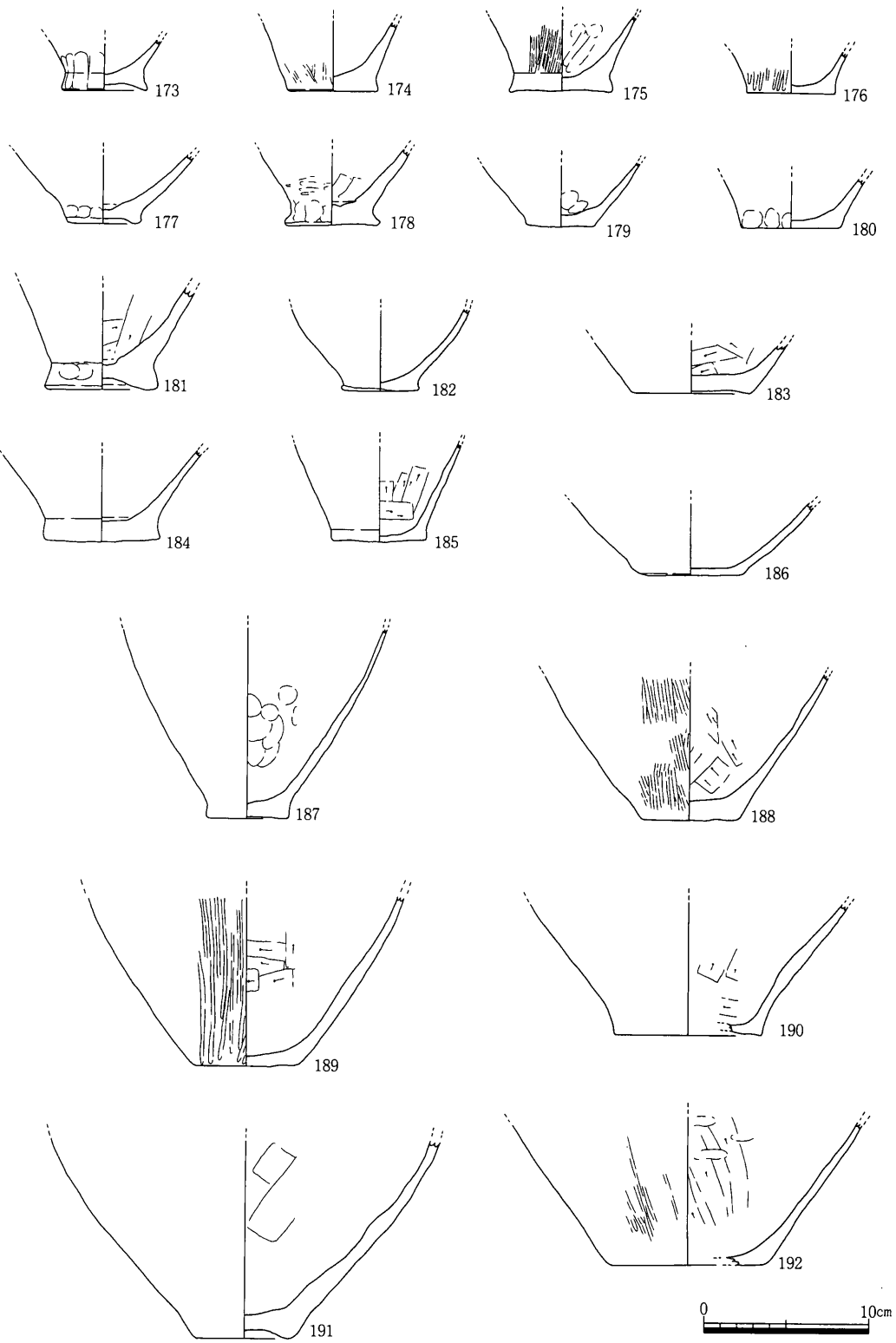
第68図　３区ＳＤ02出土遺物19（１／４）

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
163	弥・壷			5.2	微・少	黒褐、暗褐	外面ハケ目、内面ハケ目	底部完存	角閃石・雲母
164	弥・壷			6.2	細・普	灰黄	全体にマメツ	底部完存	角閃石
165	弥・壷			3.7	粗・少、中・普	灰黄	外面マメツ、内面指押え・ナデ	体部完存	
166	弥・壷			5.2	微・少	黒、暗赤褐	外面ハケ目、内面マメツ	底径1/2	角閃石・雲母
167	弥・壷			3.9	中・普、粗・少	黄褐	外面ミガキ、内面ナデ	底部完存	角閃石
168	弥・壷			5.2	細・少	黒、にぶい黄褐・灰	外面マメツ、内面板ナデ	体部2/3	角閃石・雲母
169	弥・壷			5.6	粗・少、中・少	黒褐、にぶい黄褐	外面ナデ、内面ナデ・ハケ目・指押え	体部1/2	角閃石・雲母
170	弥・壷			9.8	中・多	にぶい黄褐	外面ナデ・ハケ目、内面ナデ・ケズリ→ナデ	体部2/3	角閃石・雲母
171	弥・壷			9.4	中・普	褐、明褐	外面マメツ、内面ケズリ・指押え	底径3/4	角閃石
172	弥・壷			7.0	粗・多	黒褐、橙	全体にマメツ	全体2/3	

3区ＳＤ02出土遺物19観察表

外面にハケ目を施し，内面には板ナデを施す。157は体部外面下半にヘラミガキが残り，内面にはヘラケズリが見られる。底部外面には叩きが施されている。甕の可能性もある。158は体部外面に粗いハケ目の後にヘラミガキを施す。底部内面には赤色顔料が付着している。159の体部下半は丸みを帯びており，外面下半にはヘラミガキを，内面にはハケ目を施している。160は体部下半は直線的で開きは弱い。外面には叩きを，内面にはヘラケズリを施している。底部は上げ底となっている。甕の可能性もある。161は体部外面はヘラケズリの後に太めのヘラミガキを施している。内面は指で器壁を削り取っている。底部は突出し，器壁も厚くなっている。底部外面はヘラケズリのままで粗くなっている。162は体部は底部から大きく開き，大型の壷と考えられる。体部外面はヘラケズリのままである。底部は体部に比べて極端に薄くなっている。内面全体に赤色顔料が付着している。鉢の可能性もある。163は体部下半のみであるが，丸みが強くなっており，内・外面ともにハケ目を施している。底部は突出している。165の体部は球形に近くなっている。166の体部外面はハケ目で，底部は絞りだすように突出させ，指で押さえて整形している。167は体部外面に間隔を空けてヘラミガキを施している。底部は高台状の上げ底となっている。168の体部は扁平な球形で，内面には板状工具で螺旋状にナデており，工具の角が当った痕がある。169の体部は膨らみがあるが算盤玉形に近く，内面に一部ハケ目が見られる。底部は明瞭に突出している。170は頸部は長く内傾する。体部は上半に最大径があり，張っている。外面下部にハケ目が残り，内面はヘラケズリの後にナデている。171は大型の壷で，体部内面はヘラケズリであるが，中央部やや上側と底部付近には指押さえを入念に行なっている。172も大型の壷で，体部上部の張りが大きい。

173～192は甕と考えられるものである。173・177・181の底部は上げ底で，177は高台状になっている。174・175は体部外面にはハケ目を施し，底部は絞り出し気味である。176は体部外面にはヘラミガキを施す。178は体部外面は叩きの後にナデている。底部は指押さえによって絞り出している。182は小型の甕と考えたが，あるいは壷かも知れない。184



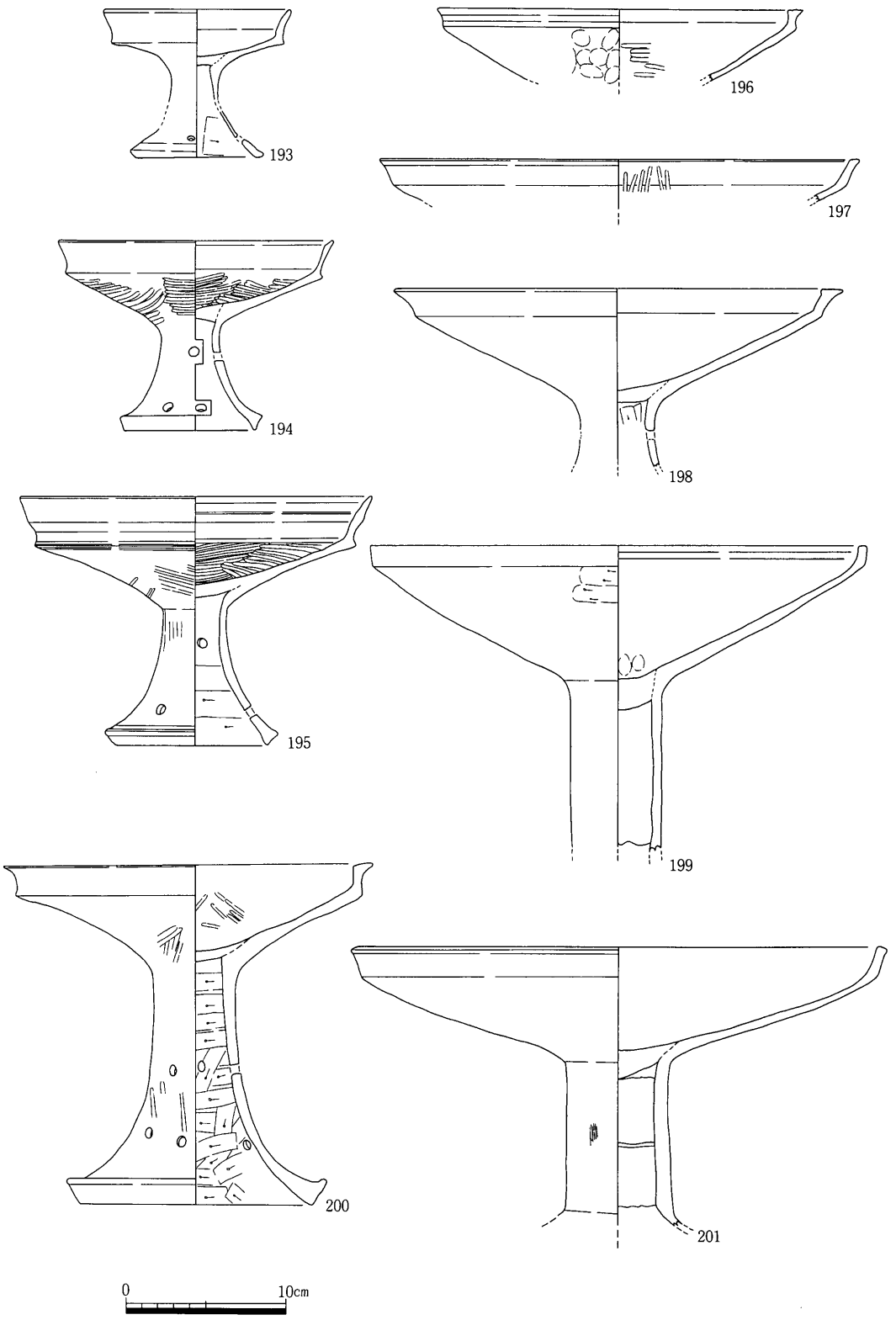
第69図　３区ＳＤ02出土遺物20（１／４）

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
173	弥・甕			5.2	中・普	にぶい褐	外面指押え・ナデ、内面ナデ	底部完存	角閃石
174	弥・甕			5.5	中・普	褐灰、にぶい赤褐	外面ハケ目、内面ナデ	底部完存	角閃石
175	弥・甕			6.2	中・少、微・少	灰黄、にぶい黄褐・黒	外面ナデ、内面指押え、底部外面ハケ目	底部完存	角閃石・雲母
176	弥・甕			5.3	中・普	明褐、にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ナデ	底部完存	角閃石
177	弥・甕			4.2	中・多	にぶい黄褐	外面マメツ、内面ナデ	底部完存	角閃石
178	弥・甕			5.7	細・普	明黄褐	外面叩き→ナデ・指押え、内面板ナデ	底径完存	角閃石・雲母
179	弥・甕			4.2	細・普	灰黄	外面マメツ、内面指押え	底部完存	雲母
180	弥・甕			6.0	細・少	明黄褐、にぶい黄褐	全体にマメツ	底部完存	角閃石
181	弥・甕			6.9	中・普、粗・少	灰黄褐・黒、橙・灰白	外面マメツ、内面ケズリ	底部完存	
182	弥・甕			4.8	中・普	黒、灰褐	外面ナデ、内面ナデ	底部完存	角閃石・雲母
183	弥・甕			7.2	微・少	黄褐、暗灰黄	外面ナデ、内面ケズリ	底径1/2	角閃石
184	弥・甕			7.0	中・多	黒、にぶい赤褐	全体にマメツ	底部完存	角閃石
185	弥・甕			5.7	微・少	褐、にぶい褐	外面ナデ、内面ケズリ	底部完存	角閃石
186	弥・甕			6.3	粗・多、中・多	灰、橙・にぶい黄橙	全体にマメツ	底部完存	結晶片岩
187	弥・甕			5.0	中・普	にぶい褐	外面マメツ、内面指押え・ナデ	底部完存	角閃石
188	弥・甕			5.9	細・普	にぶい黄橙、灰黄・黒	外面ハケ目、内面ケズリ	底部完存	角閃石
189	弥・甕			6.3	細・普	明褐、にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ケズリ	底部完存	角閃石・雲母
190	弥・甕			9.0	中・少	黒、赤褐	外面マメツ、内面ナデ・ケズリ	底径1/2	角閃石・雲母
191	弥・甕			6.0	中・多	灰黄	外面ナデ、内面板ナデ	底部完存	角閃石
192	弥・甕			9.5	細・普、中・少	にぶい黄橙	外面ミガキ、内面ケズリ	底径1/4	角閃石

3区ＳＤ02出土遺物20観察表

の底部は突出しており，器壁も厚くなっている。185は体部外面はナデており，内面にはヘラケズリを施している。187の底部は小さくなっている。188は外面にハケ目を，内面にヘラケズリを施している。189・192は体部外面にヘラミガキを，内面にヘラケズリを施している。192の底部は幅広である。190は底部立ち上り部が鋭くなっている。

193～242は高坏である。193は坏部の立ち上がりは弱く，口縁部は外側に鋭い稜を形成して緩く外反して立ち上がる。脚部は緩やかに開き，端部は丸く収める。脚端部外面を強くナデている。脚部には円形透かしが4個あり，坏部との接合は円盤充填である。全体に摩滅している。194の坏部は斜め上方に立ち上がり，口縁部は直線的に立ち上がり，口縁部端部の内側と口縁部の立ち上り部外面を強くナデている。坏部の内・外面には波状の多角形のヘラミガキを施している。脚部の開きは弱く，端部に傾斜する面をもつ。上側に1個，下側に2個で三角形となる円形透かしが3単位ある。脚部は全体にナデている。円盤充填となっている。195は口縁部を強くナデており，内面と口縁部外面立ち上り部に凹線が形成されている。坏部は内・外面とも波状の多角形のヘラミガキを施している。脚部は緩やかに外反して開き，端部は傾斜する面をもつ。脚部外面はヘラミガキの後にナデ，内面下半はヘラケズリである。上部に3個，下部に3個の円形透かしがある。円盤充填である。196は口縁部は短く直立し，内・外面を強くナデて上側に幅広の面を作る。端面には凹線が2条巡っている。坏部外面には指押さえ痕があり，内面は摩滅しているもののヘラミガキが認められる。197は口縁部は坏部から斜め上方に立ち上がり，端部を外側に拡張している。口縁部内面から坏部内面にかけてヘラミガキが施されている。198は坏部は斜

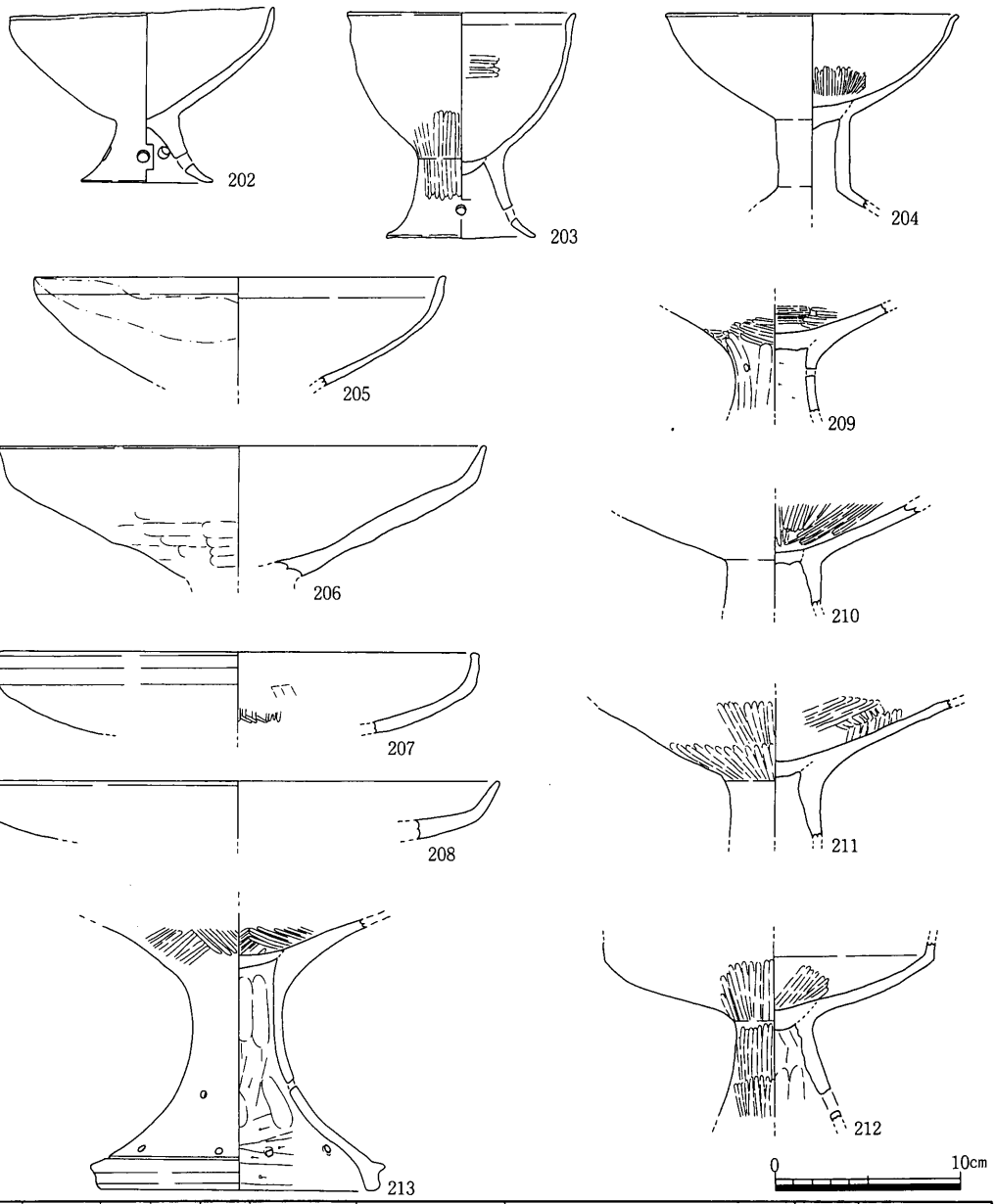


第70図　３区ＳＤ02出土遺物21（１／４）

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
193	弥・高杯	11.5	(8.9)	7.8	中・少、細・普	にぶい橙、にぶい褐	口縁ﾅﾃﾞ、脚内面ｹｽﾞﾘ、他はﾏﾒﾂ、円盤充塡	体部3/5	角閃石
194	弥・高杯	17.0	11.9	8.1	粗・少、中・少	橙、明褐	口縁ﾅﾃﾞ、外ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、円盤充塡	ほぼ完存	角閃石・雲母
195	弥・高杯	21.9	15.5	9.5	中・普	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面ﾐｶﾞｷ・ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ、円盤充塡	ほぼ完存	角閃石
196	弥・高杯	22.9			中・少	にぶい黄褐、明褐	外面指押え・マメツ、内面ナデ・ミガキ	口径1/4	角閃石
197	弥・高杯	30.0			微・少	にぶい黄	外面マメツ、内面ナデ・ミガキ	口径1/10	角閃石・雲母
198	弥・高杯	25.4			中・普	明褐	全体にマメツ、円盤充塡	口径1/6	角閃石・雲母
199	弥・高杯	31.2			中・多	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、杯外面ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ、杯内面ﾏﾒﾂ、脚ﾏﾒﾂ、円盤充塡	杯部完存	角閃石
200	弥・高杯	23.2	21.2	14.5	細・多、粗・多	にぶい黄橙・明赤褐	杯：外面ミガキ・内面ミガキ，脚：外面ミガキ・内面ケズリ，円盤充塡	全体3/4	
201	弥・高杯	33.6			細・普	にぶい黄橙	外面ナデ、内面マメツ、円盤充塡	杯部1/3	角閃石

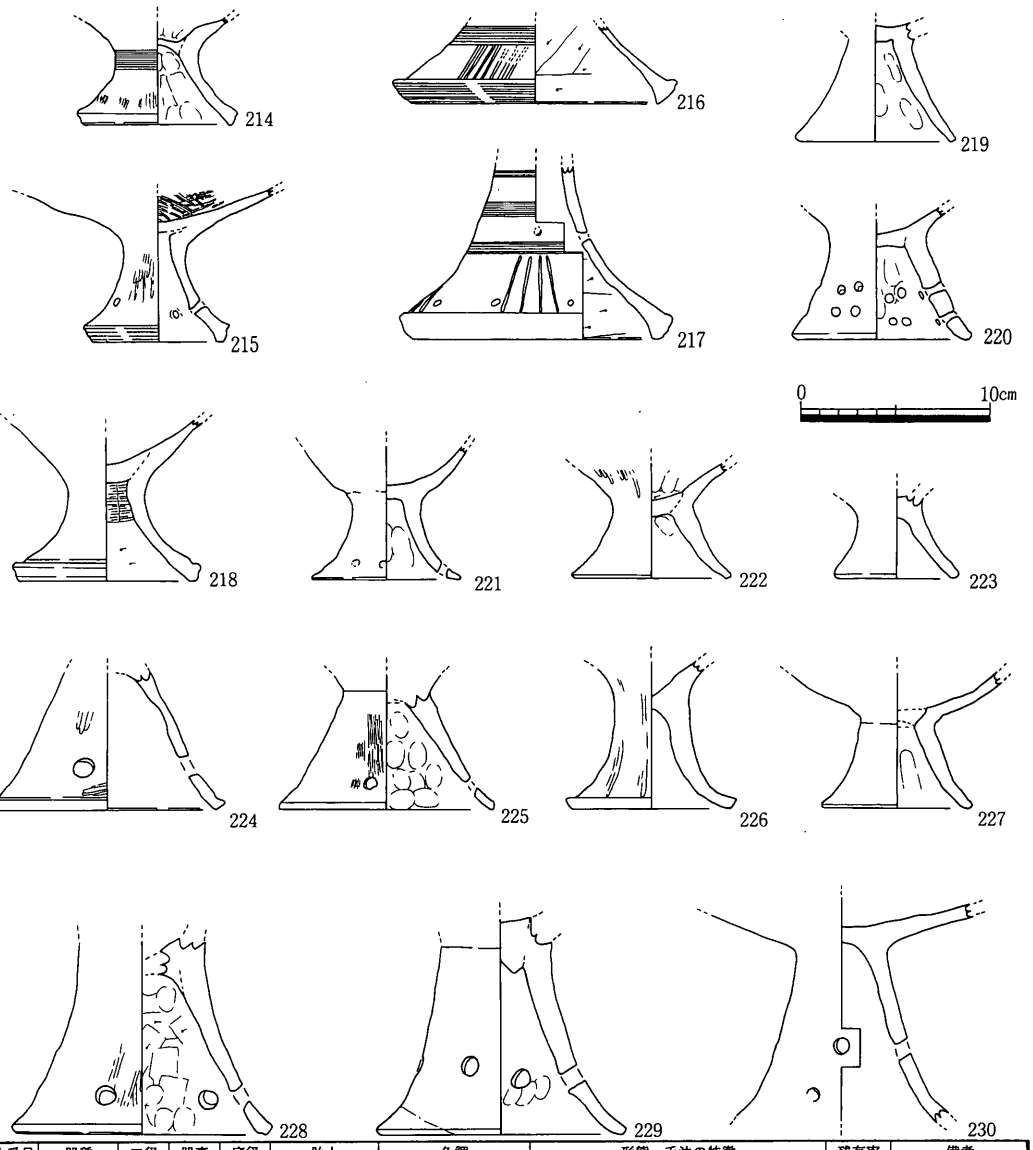
3区ＳＤ02出土遺物21観察表

め上方に立ち上がる。口縁部は坏部から短く斜め上方に立ち上がり，端部を内側と外側に拡張し上側に幅広の面を作る。全体に摩滅しており調整は観察出来ない。円盤充填となっている。199の坏部は斜め上方に立ち上がり，口縁部はほぼ直立している。坏部の口縁部直下の外面にはヘラケズリが施されている。脚柱部は緩いエンタシス状になっている。円盤充填の粘土は厚くなっている。200の口縁部は直立し，端部を外側に拡張し上側に幅広の平坦な面を作っている。坏部の内・外面には摩滅しているもののヘラミガキが認められる。脚部は長く緩やかに開き，端部は上側を拡張し外側に幅広の面を作る。脚部の外面は摩滅しているが部分的にヘラミガキが認められ，内面は全体にヘラケズリを施している。円形の透かし穴を下部に6個，上部に5個施している。201の口縁部は弱く外傾し，端部は若干外側に拡張する。坏部の口径は33.6cmと大きくなっている。脚部は円筒状の脚柱部から裾部が屈曲するものである。全体に摩滅している。202の坏部は口縁部付近で内湾し端部は先細りである。脚部は短く端部付近で強く外反し，円形の透かし穴を6個施している。203の坏部の立ち上がりは急で，口縁部をナデて外側へ屈曲させている。坏部は深くなっており，内・外面にヘラミガキを施している。脚部は短く端部付近で強く外反し，外面上半にはヘラミガキを施している。円形の透かし穴が現存で2個ある。204は坏部は浅い鉢状で，口縁部はナデて外反させている。坏部内面上半はナデ，下半はヘラミガキを施している。脚部は短い円筒状の脚柱部から裾部が鋭く屈曲する。205 は口縁部外面を強くナデている。206・208は口縁部は坏部から鋭く屈曲し，直線的に斜め上方に立ち上がる。206の坏部外面下半は指で断続的にナデている。207は口縁部は坏部から丸みをもって立ち上がる。坏部内面はヘラケズリの後にナデて，最後に内面中央部にヘラミガキを施している。209～212は坏部と脚部の接続部の破片であるが，いずれも円盤充填となっている。209の坏部外面には波状のヘラミガキを，内面には多角形のヘラミガキを施している。脚部外面には面取りを兼ねた幅広のヘラミガキを施している。211は坏部外面は放射状のヘラ



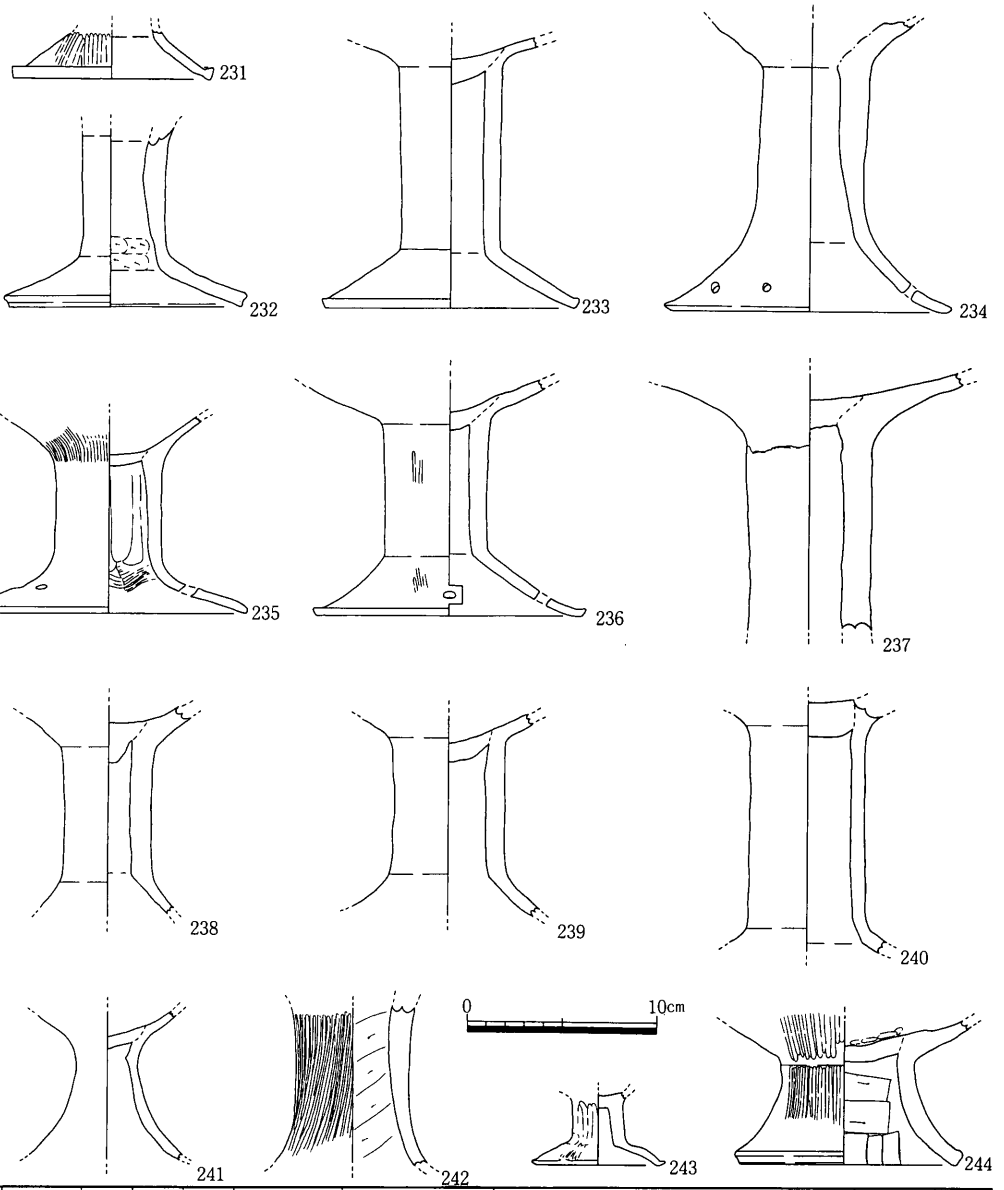
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
202	弥・高杯	14.2	9.2	7.1	細・普	橙	全体にマメツ	全体4/5	角閃石
203	弥・高杯	12.1	11.8	8.1	中・少	灰黄・黄灰	外面ミガキ・ナデ、内面ミガキ・ナデ、円形透し現存２個、円盤充塡	全体1/2	角閃石・雲母
204	弥・高杯	15.8			微・少、中・少	にぶい黄橙	外面ﾏﾒﾂ・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ、円盤充塡	全体2/3	角閃石・雲母
205	弥・高杯	22.2			中・普	黄褐、にぶい黄褐	外面ナデ、内面マメツ	口縁完存	角閃石
206	弥・高杯	26.0			細・普、粗・少	橙、にぶい褐	外面ナデ、内面マメツ	口径1/10	角閃石
207	弥・高杯	25.4			中・普	ﾆﾌﾞｲ黄褐、ﾆﾌﾞｲ黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	口径1/4	角閃石・雲母
208	弥・高杯	28.0			中・少	明褐、にぶい褐	全体にマメツ	口径1/6	角閃石
209	弥・高杯				中・少	にぶい黄橙	外面ミガキ、内面ミガキ・ケズリ、円盤充塡	脚部細片	角閃石
210	弥・高杯				細・少	灰ｵﾘｰﾌﾞ、ﾆﾌﾞｲ褐	外面マメツ、内面ミガキ・ナデ	全体3/4	角閃石
211	弥・高杯				粗・少、中・少	にぶい褐、にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ミガキ、円盤充塡	杯部完存	角閃石・雲母
212	弥・高杯				粗・少、中・少	にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ミガキ・ナデ、円盤充塡、円形透し現存1個	全体1/2	角閃石・雲母
213	弥・高杯			14.8	中・普	明褐	杯：外・内面ミガキ、脚：外面ナデ・内面ケズリ・ナデ、円盤充塡	脚部完存	角閃石・雲母

第71図　３区ＳＤ02出土遺物22（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
214	弥・高杯			7.7	細・多	残黄黄褐	外面ナデ、内面ナデ、円盤充塡	脚部1/4	
215	弥・高杯			6.8	細・普	にぶい黄橙	杯外面ﾏﾒﾂ・内面ﾐｶﾞｷ、脚外面ﾐｶﾞｷ・内面ﾅﾃﾞ、円盤充塡	脚部完存	角閃石
216	弥・高杯			13.0	中・普	浅黄	外面ナデ、内面ケズリ	脚部1/4	角閃石
217	弥・高杯			12.8	粗・普、中・普	黒・にぶい黄橙	外面ナデ、内面ケズリ・ナデ	脚部完存	角閃石
218	弥・高杯			9.2	中・多	にぶい黄褐、にぶい褐	外面ナデ、内面ハケ目・ケズリ、円盤充塡	脚部1/4	角閃石
219	弥・高杯			8.0	中・普	黄灰、にぶい黄褐	外面マメツ、内面指押え・ナデ	脚部3/4	角閃石・雲母
220	弥・高杯			9.5	中・多	にぶい橙・にぶい褐	外面ナデ、内面ナデ、円盤充塡	脚部1/2	角閃石・雲母
221	弥・高杯			8.0	細・普	にぶい赤褐・灰褐	外面ナデ、内面マメツ、円形透し現存２個	脚部1/5	角閃石
222	弥・高杯			8.3	細・普、中・少	にぶい橙・褐灰	外面ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え、円盤充塡	脚部完存	角閃石・雲母
223	弥・高杯			6.2	中・多	黒、浅黄	全体にマメツ	脚部1/2	
224	弥・高杯			11.4	中・普	灰、にぶい黄橙	外面ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ、円形透し現存3個	脚部1/2	角閃石
225	弥・高杯			11.3	中・普	灰黄、にぶい黄褐	外面ﾊｹﾒ、内面指押え・ﾅﾃﾞ、円盤充塡	脚部1/3	角閃石
226	弥・高杯			8.3	微・多、中・普	にぶい黄橙	外面ミガキ、内面ナデ	脚部2/3	
228	弥・高杯			13.3	細・多、中・多	橙、にぶい橙	外面ﾊｹ目・ﾅﾃﾞ、内面ｸｽﾞﾘ・板ﾅﾃﾞ、円盤充塡	脚部1/2	角閃石
229	弥・高杯			12.8	微・少	にぶい黄橙、にぶい橙	外面ナデ、内面ナデ、円盤充塡	脚部完存	角閃石
230	弥・高杯				中・少	にぶい黄橙	外面ナデ、内面ナデ・マメツ	脚部1/2	角閃石・雲母

第72図　３区ＳＤ02出土遺物23（１／４）



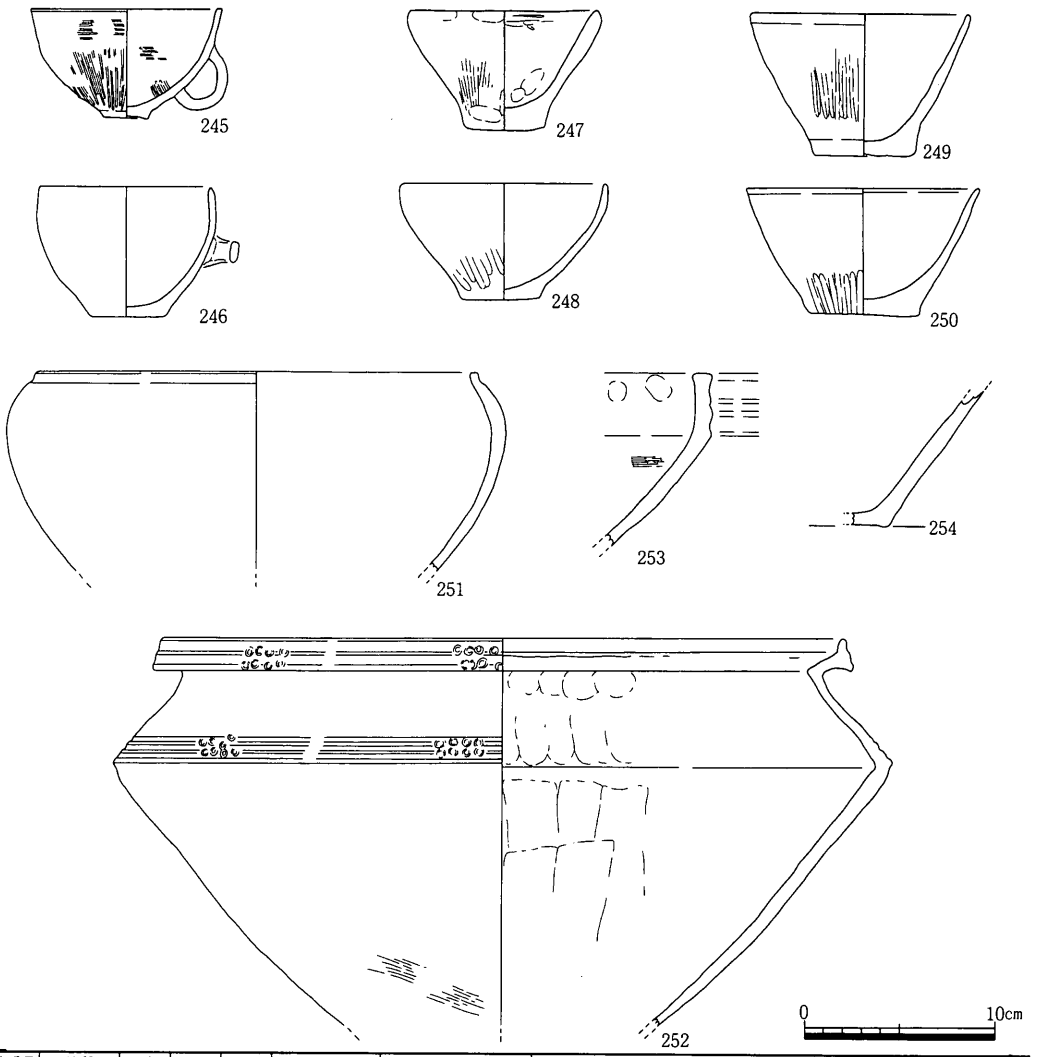
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
231	弥・高杯			10.4	中・普	褐、にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ナデ	脚部完存	角閃石
232	弥・高杯			12.2	細・普	黒褐・オリーブ黒	外面ナデ、内面ケズリ・ナデ	脚部1/2	角閃石・雲母
233	弥・高杯			13.2	細・多	暗赤褐	全体にマメツ	脚部完存	角閃石
234	弥・高杯			14.4	細・普	明褐、赤褐	全体ﾏﾒﾂ、円盤充塡、円形透し現存4個	脚部1/4	角閃石
235	弥・高杯			14.4	中・普	にぶい黄橙	外面ﾊｹ目・ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目、円盤充塡	脚部1/4	角閃石
236	弥・高杯			14.0	中・普	暗灰黄	杯：外面ﾅﾃﾞ・内面ﾐｶﾞｷ、脚：外面ﾐｶﾞｷ・内面ﾅﾃﾞ、円盤充塡	脚部3/4	角閃石・雲母
237	弥・高杯				粗・少、中・多	褐灰、にぶい橙	ﾏﾒﾂ、杯部と脚部で胎土異なる、円盤充塡	脚部完存	角閃石・雲母
238	弥・高杯				中・多	にぶい橙	外面マメツ、内面ケズリ、円盤充塡	脚部完存	角閃石
239	弥・高杯				中・少	にぶい黄橙	外面マメツ、内面ナデ、円盤充塡	脚柱完存	角閃石
240	弥・高杯				中・少	浅黄	外面ナデ、内面ナデ、円盤充塡	脚部1/2	角閃石・雲母
241	弥・高杯				中・普	灰黄	外面ナデ、内面ナデ、円盤充塡	脚部1/3	
242	弥・高杯				中・普	にぶい黄橙	外面ミガキ、内面ケズリ	脚部完存	角閃石
243	弥・鉢			6.5	微・少	灰黄褐	外面ミガキ→ナデ、内面ナデ	ほぼ完存	雲母
244	弥・鉢			11.4	細・少	にぶい黄・黄灰	外面ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面ｹｽﾞﾘ・板ﾅﾃﾞ、円盤充塡	脚部1/2	角閃石・雲母

第73図　3区ＳＤ02出土遺物24（1／4）

ミガキが，内面には多角形のヘラミガキが施されている。212は口縁部は坏部から鋭く屈曲するが端部は欠損している。坏部内・外面に放射状のヘラミガキを施している。脚部の外面にも丁寧にヘラミガキを施し，円形の透かし穴が現存で1個ある。213～242は脚部の破片である。213～218は脚部端部を拡張させ外側に幅広の面を作り，213・215・216・218はさらに凹線を巡らせている。213は脚端部の屈曲部に沈線が1条巡る。内面はヘラケズリの後に指ナデを施している。上部に2個，下部に4個の円形の透かし穴がある。214の脚部は短く，上部外面には沈線を巡らせている。外面下半にはヘラ状工具による施文が見られる。円盤充填の粘土は薄く，脚部内面側から強く押している。215の脚部外面にはヘラミガキを施し，内面は全体にナデている。円形の透かし穴が5個ある。216の脚部内面にはヘラケズリを施している。217は脚部外面に沈線による文様帯が3段あり，下部に4本1単位のヘラ描き文を施している。円形の透かし穴が上部に4個，下部に8個ある。218の脚部内面は上半がハケ目，下半がヘラケズリとなっている。220は脚部に4個1単位の円形の透かし穴が6単位ある。221は坏部は一部のみであるが，深く内湾するものである。脚部は外反し，円形の透かし穴が現存で2個ある。224の脚部の上半は緩く内湾し，端部は外側に少し拡張する。外面は摩滅しているが，一部にヘラミガキが残る。円形の透かし穴が現存で3個ある。225は内面に指押さえ痕が顕著である。226の脚部は下部で大きく外反して開く。228の内面はヘラケズリと整形のための板ナデが施されている。外面の一部にハケ目が見られる。232～240の脚部は円筒状の脚柱部から大きく屈曲して端部に至るものである。231も円筒状の脚柱部が付くものと思われ，端部を拡張させている。234の脚柱部からの開きは丸みを帯びている。235は脚柱部から端部に至る屈曲部の内面にはハケ目が施されている。237は坏部と脚部の境に接合痕が見られ，坏部がにぶい赤褐色，脚部がにぶい橙色とそれぞれ異なった胎土のものが接合されている。238は円盤充填の粘土が内面に大きく突出している。242は外面に単位の細かいヘラミガキを丁寧に施し，内面はヘラケズリとなっている。

243～254は鉢である。243は高坏の脚部にしては小さ過ぎると思われるので，小型の鉢に接続する脚部と考えたものである。脚部は短い円筒状の部分から鋭く屈曲して，内湾気味に開いて端部に至る。端部は外側につまみ出している。外面はヘラミガキの後にナデている。244は大型の鉢の脚部と思われ，器高は低いが安定のあるものである。脚部は全体に外反し，外面にはヘラミガキを，内面にはヘラケズリを施す。端部内面には板状工具の小口部分の痕跡が見られる。245・246は把手付きの鉢である。245の口縁部端部は上部を

ナデているため肥厚気味である。体部の内・外面にはヘラミガキを施し，底部は少し上げ底となっている。下方に垂れ下ったような把手が1つ付いており，ティーカップのような形になっている。246は体部は内湾しており，口縁部端部は先細りになっている。体部の中央部に把手が現存で1個横向きに付いている。247は体部は直線的であるが，底部からの立ち上り部以外が全体に肥厚している。体部外面にはヘラミガキが施され，口縁部内面



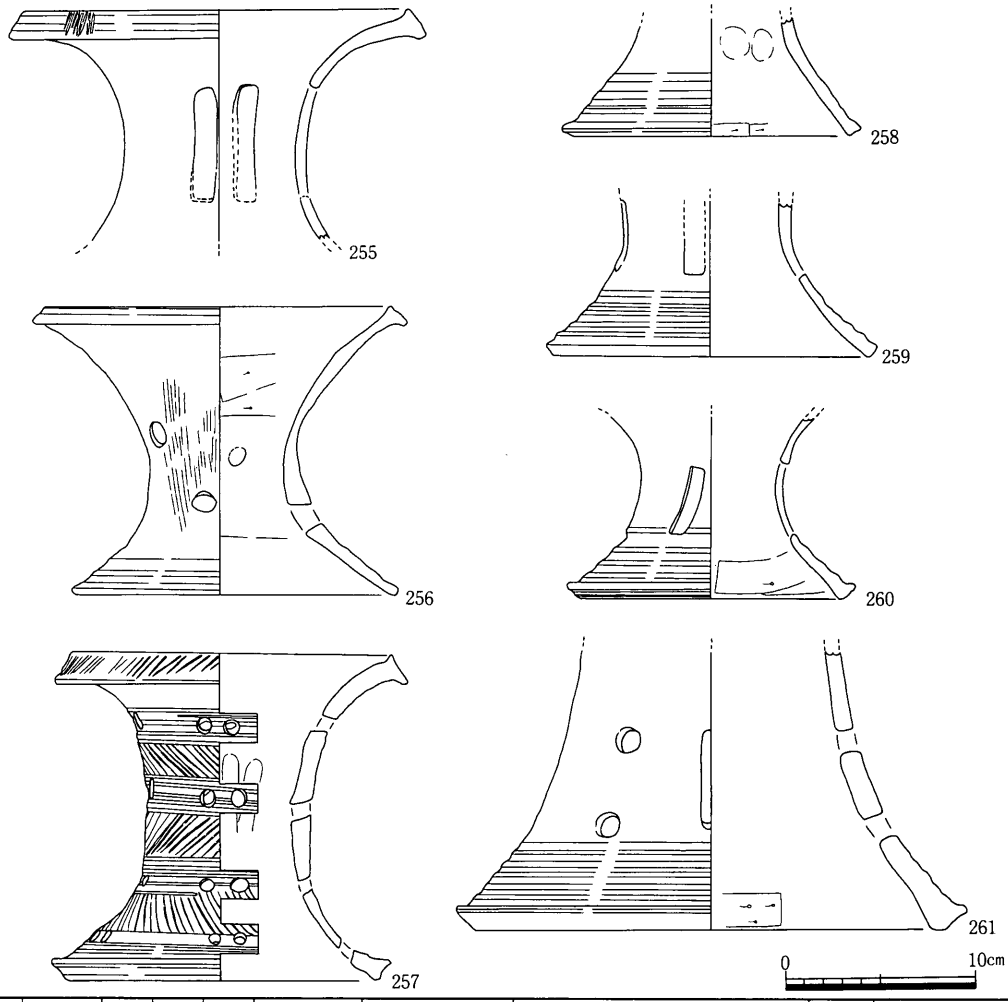
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
245	弥・鉢	10.0	5.7	2.3	細・普	にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ミガキ、把手1個	全体1/2	角閃石
246	弥・鉢	9.0	6.8	4.0	細・普	明黄褐	外面ナデ、内面ナデ	全体1/2	角閃石
247	弥・鉢	9.8	6.2	4.1	中・少	黒褐	外面ミガキ・指押え、内面ナデ・指押え	口径1/2	角閃石
248	弥・鉢	10.7	6.1	4.1	中・少、細・普	橙、にぶい黄橙	外面ミガキ・マメツ、内面マメツ	体部1/3	角閃石・雲母
249	弥・鉢	11.3	7.4	5.2	中・多	にぶい黄橙、灰黄・黒	外面ミガキ、内面マメツ	完存	角閃石
250	弥・鉢	12.3	6.6	5.8	中・多	にぶい赤褐	外面ナデ・ミガキ、内面ナデ	ほぼ完存	角閃石
251	弥・鉢	23.0			中・普	黄褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/5	角閃石
252	弥・鉢	35.7			細・多、中・多	赤灰、にぶい赤褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目、内面指押え・板ﾅﾃﾞ	口径1/3	角閃石、外内(赤)
253	弥・鉢				中・多	にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ハケ目	口縁細片	角閃石
254	弥・鉢				細・少	にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ミガキ	底部細片	角閃石、内(赤)

第74図　3区ＳＤ02出土遺物25（1／4）

には工具痕が残っている。248の体部は内湾しており，外面にはヘラミガキが一部見られる。249の体部は直線的で，口縁部を強くナデている。外面はヘラミガキである。底部の立ち上り部は肥厚しており突出気味である。250も体部は直線的で，底部は肥厚している。体部外面の上半はナデており，下半にはヘラミガキを施している。251は体部が全体的に大きく内湾し，口縁部外面を強くナデている。252は口縁部は体部から鋭く屈曲し，端部を上下に拡張させ外側に幅広の面を作り出し，凹線を2条巡らせている。体部は上半で鋭く「く」字形に屈曲し，屈曲部外面に凹線を3条巡らせている。体部外面は摩滅しているが，下半部に一部ハケ目が残っている。内面の上半は指押さえ痕が，下半は板ナデが見られる。口縁部端部と体部屈曲部のそれぞれの凹線の上に8個1単位の竹管文が施されている。口縁部から体部外面上半と内面全体にかけて，局所的ではあるが赤色顔料が付着している。253 は大型の鉢の口縁部の細片である。口縁部は直立し，外面には凹線を巡らせている。体部の内・外面の一部にはハケ目が見られる。254は鉢の底部であるが，内・外面にヘラミガキを施し，内面には赤色顔料が付着している。

255～264は器台である。255は口縁部端部を上下に拡張し，外側に斜めの面を作り出し凹線を施す。そして凹線の上からヘラ描きの文様が6本1単位で施されている。体部中央には長方形の透かし穴が4個ある。内・外面とも全体にナデている。256は全体が大きく弓なりに反っており，口径が底径を若干上回っている。口縁部は端部を下方に拡張している。脚部は外面に凹線を2条巡らせている。体部外面にはハケ目を，内面にはヘラケズリを施し，円形の透かし穴が施されている。257 は円筒状の体部から口縁部と脚部が外反して開き，口径と脚の径がほぼ等しくなっている。口縁部は端部を上下に拡張し，外側に斜めの面を作り出し斜め方向のヘラ描きの文様を施している。体部には上から4条，5条，5条のヘラ描きの沈線をそれぞれ3段巡らせ，その間にヘラ描きによる文様を交互に加えている。脚部は端部を上下に拡張し，外側の面を強くナデている。また脚裾部の外面には凹線が2条見られる。全体にナデ調整となっているが，体部内面は指で縦方向に強くナデている。体部には2対で縦方向に4段で1単位の円形の透かし穴が4単位あるが，このうち1つの透かし穴は未貫通となっている。258・259は脚部の破片であり，脚部外面にはそれぞれ凹線を施している。脚部端部はいずれも拡張せず，外側に平坦な面を作っている。259は長方形の透かし穴が現存で3個ある。260は口縁部は欠損しているが，全体に弓なりに大きく反っている。脚部端部を上方に拡張し，外側の傾斜する面には細い凹線を巡らせている。脚部外面には凹線を巡らせ，内面にはヘラケズリを施す。体部には長方形の透か

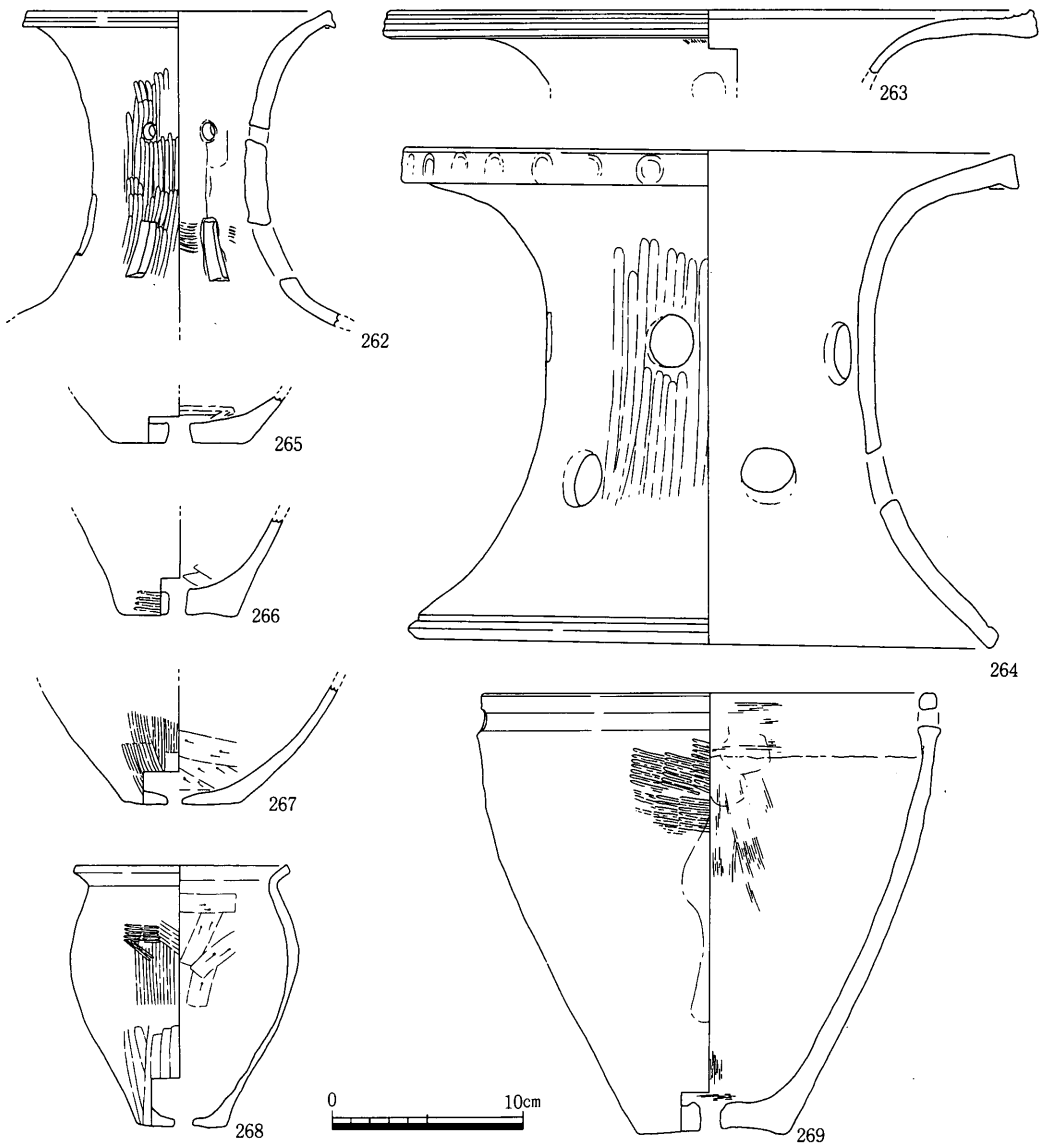
し穴が現存で2個ある。261は大型の縦長の器台の脚部で，脚部端部は上方に拡張させている。脚部の外面には凹線を巡らせ，内面にはヘラケズリを施している。現存で円形の透かし穴が縦に2個，長方形の透かし穴が円形のものに並列して1個ある。262は脚部の端部付近が欠損しているが，全体に弓なりに反っている。口縁部端部は下方に少し拡張している。体部外面にはヘラミガキを丁寧に施している。内面は透かし穴付近にハケ目を施しているが後にナデている。口縁部と脚部はナデている。体部の上部に円形の透かし穴が2個，下部に長方形の透かし穴が2個それぞれ現存している。263は器台の口縁部で大きく



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
255	弥・器台	20.2			細・普	明褐	外面ナデ、内面ナデ、長方形透し4個	全体1/2	角閃石・雲母
256	弥・器台	18.3	15.2	17.2	中・多	にぶい黄橙・黒	外面ナデ・ハケ目、内面ナデ・ケズリ	全体3/4	角閃石・雲母
257	弥・器台	16.9	17.1	16.5	中・少	褐	全体ﾅﾃﾞ、2対4段で8個1単位の円形透し4単位	完存	角閃石
258	弥・器台			16.8	粗・少、中・少	橙	外面ナデ、内面ナデ・ケズリ	口縁完存	角閃石
259	弥・器台			16.6	微・少	褐、褐～黒	外面ナデ、内面ナデ	底径3/4	角閃石
260	弥・器台			13.7	中・普	明赤褐・灰黄褐・黒	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ、方形透し２個現存	脚部1/2	角閃石
261	弥・器台			24.8	粗・普、中・普	淡黄・黄灰・橙	全体にマメツ、現存で円形透し2、方形透し1	底径1/8	

第75図　3区ＳＤ02出土遺物26（１／４）

横に開いている。外面はハケ目の後にナデており，大きな円形の透かし穴が現存で１個ある。264は大型の器台で，口縁部は直線的であるが体部から脚部にかけては緩やかに開いている。口縁部端部を下方に拡張させ，外側の面には竹管文を施している。脚部端部は拡張せず，端部のやや上に強い凹線を１条巡らせている。体部外面にはヘラミガキを施して



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
262	弥・器台	16.0			微・少	灰黄	外面ナデ・ミガキ、内面ナデ・ハケ目→ナデ	全体1/4	角閃石
263	弥・器台	33.8			中・普	にぶい黄橙	外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ、円形透し１個現存	口径1/8	角閃石
264	弥・器台	32.0	25.1	30.0	中・普	ﾆﾌﾞｲ黄褐、ﾆﾌﾞｲ黄橙	外面ナデ・ミガキ、内面ナデ	ほぼ完存	角閃石
265	弥・甕			7.1	細・少	にぶい黄橙、灰黄褐	外面ナデ、内面板ナデ	底径1/2	角閃石
266	弥・甕			6.0	中・少	にぶい黄橙、にぶい橙	外面叩き→ナデ、内面板ナデ	底径2/3	角閃石
267	弥・甕			6.0	中・少、細・普	にぶい黄橙、黒・黄褐	外面ハケ目、内面ケズリ	底部完存	角閃石
268	弥・甕	11.1	13.8	4.7	粗・少、細・普	明褐・にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外叩き→ﾊｹ目・板ﾅﾃﾞ、内ｹｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ	口径3/4	角閃石
269	弥・甕	23.5	23.3	7.8	中・多、粗・普	にぶい橙・黒褐	口縁強いﾅﾃﾞ、外面叩き・ﾅﾃﾞ、内面ﾊｹﾒ・ﾅﾃﾞ、口縁下に円孔２個	完存	角閃石

第76図　３区ＳＤ02出土遺物27（１／４）

いる。大きめの円形の透かし穴を上部に5個，下部に5個をそれぞれ交互に配置している。

265～269は甑である。265は底部内面に螺旋状に板ナデを施している。266の外面は叩きの後にナデている。267は外面にはハケ目，内面にはヘラケズリを施している。底部の穿孔は中心からずれた場所にある。268は甕の底部に穿孔して甑に転用したものである。外面は叩きの後にハケ目を施し，下半には板ナデを施している。内面の上半にはヘラケズリが見られる。269は深い植木鉢のような体部の鉢の底部に穿孔して甑としたものである。体部は全体に緩く内湾し，口縁部は端部上面をナデている。口縁部の直下には強い凹線を1条巡らせ，その凹線上に円孔が1個ずつ向かい合ってある。体部の下半は摩滅しているが，上半には叩きが丁寧に施されている。内面はハケ目の後にナデている。

270は水差し形土器である。壷の頸部と体部の境部分に把手を付けたものである。口縁部端部は内・外面に拡張し，上側に平坦な面を作る。頸部外面には細い凹線を4条巡らせている。把手は1つで体部上面の器壁とほぼ平行に取り付けられている。

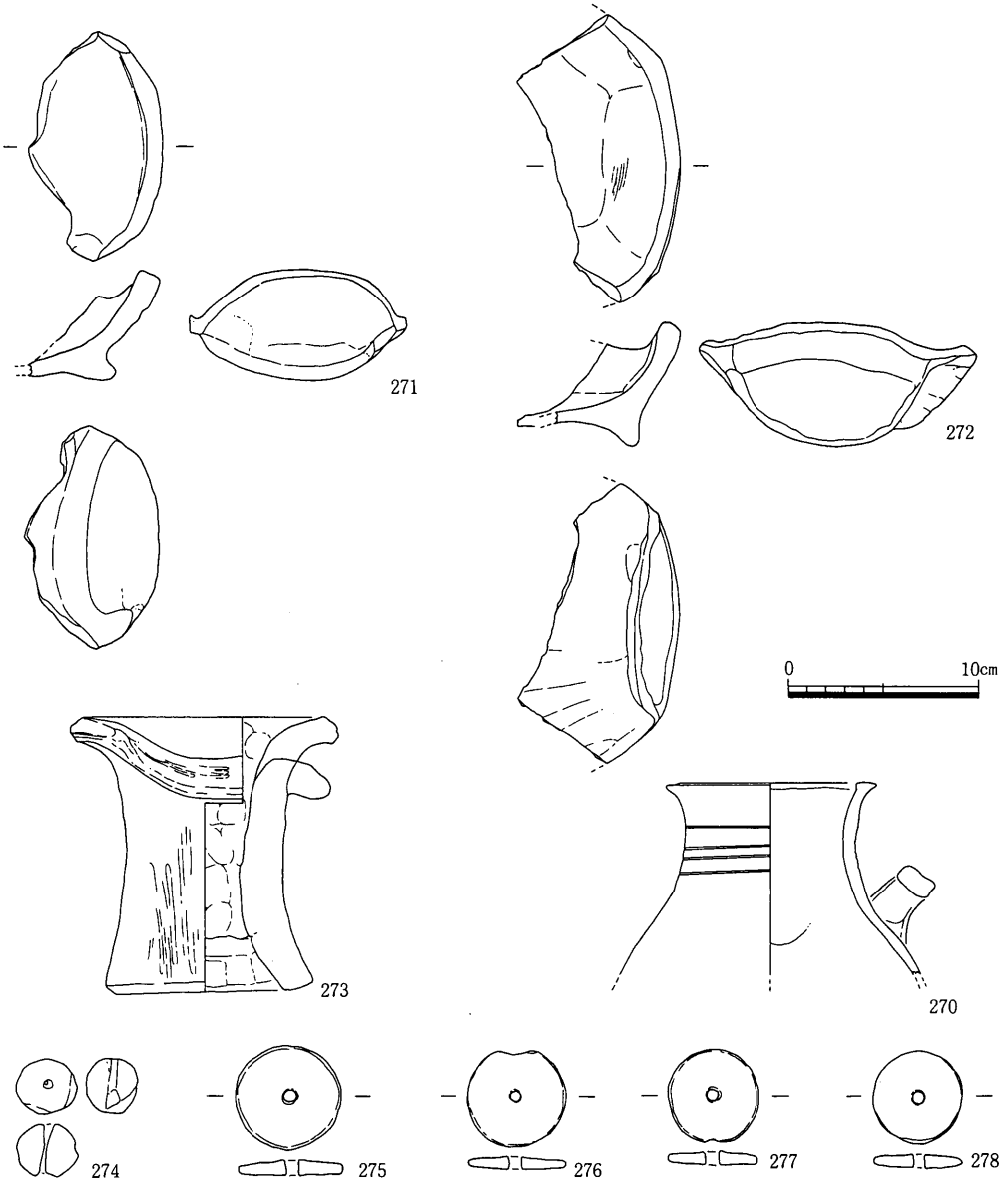
271・272は把手付広片口皿である。271は後部把手の部分で，把手は斜め上方に立ち上がる。把手立ち上り部は後方に突出している。全体に摩滅しており調整は不明であるが，内面と側面に赤色顔料が付着している。272も後部把手の部分で，把手は斜め上方に内湾気味に立ち上がる。把手立ち上がり部は斜め下方に突出している。把手部の外面はナデており，体部外面は摩滅しているものの板状工具による削りかナデの痕跡が認められる。把手部から体部にかけての内面にはヘラミガキを施し，赤色顔料が付着している。

273は支脚と考えられるものである。円筒状の体部から口縁部は大きく横へ開き，口縁部端部には細い凹線が1条巡っている。そして口縁部の1箇所を注ぎ口のように大きく斜め下方に引き出して受け部を形成している。脚部は直線的に外開きで接地部分は厚く安定している。体部の外面にはヘラミガキを施し，内面には粘土紐の接合痕が見られ指押さえ痕が顕著である。脚部内面は板ナデとなっている。口縁部はナデており，受け部の内面には若干のヘラミガキが見られる。器壁は全体に厚手となっている。器台の可能性もあるが，この土器を2～3個組み合わせて受け部で甕の体部を支える支脚と考えたい。外面に煤の付着は見られなかった。

274は球形の土玉である。中央部には指押さえにより切れ目を作り出し，この切れ目と直交して両面から穿孔している。

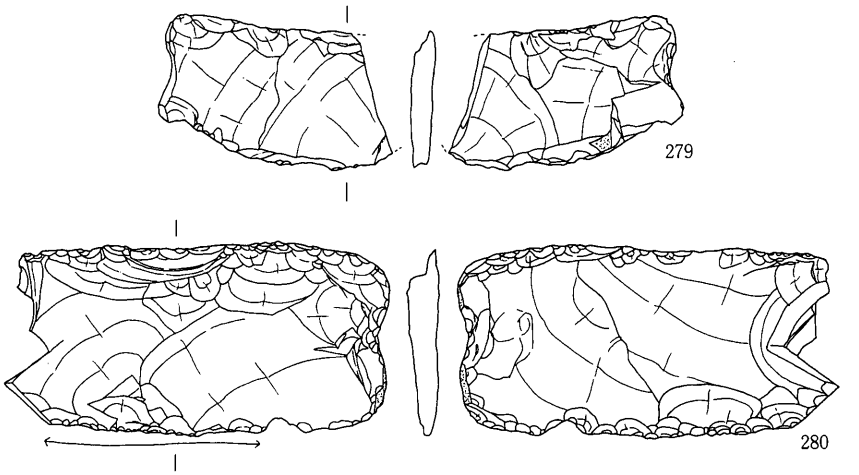
275～278は土製紡錘車である。厚さは275が0.8cm以外は0.7cmで揃っている。中央部の穿孔も直径0.6cmと同じになっている。直径のみが異なり，全体の作りは同じである。

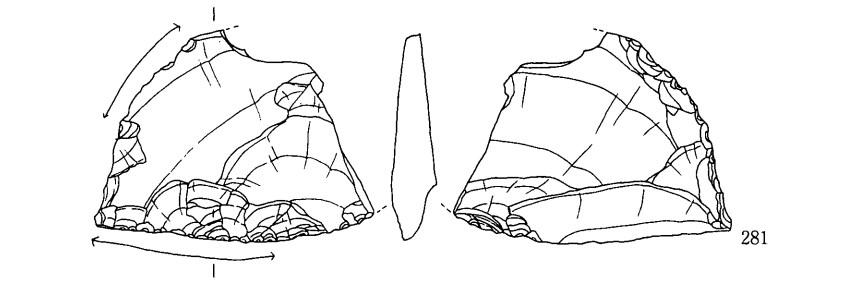
279～294は石器である。279・280は打製石庖丁である。279の刃部は外湾しており，側縁には抉りを入れている。280は刃部・背部ともに直線で長方形のものである。刃部は両側から作り出し使用による摩滅が著しい。側縁には両面から加工して抉りを入れている。

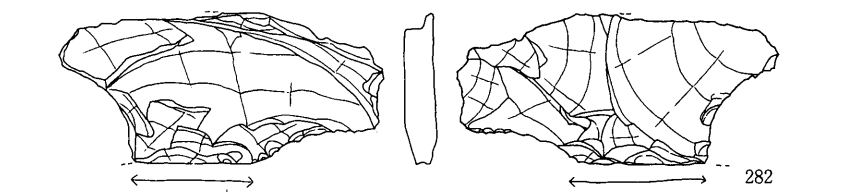


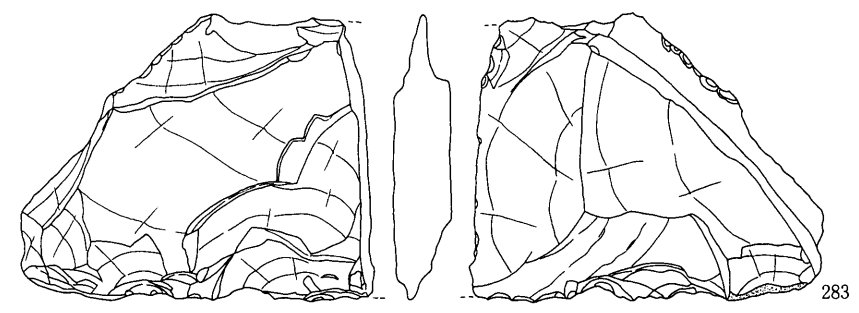
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
270	弥・水差し	11.1			粗・多	明赤褐	外面ナデ、内面ナデ、把手現存で1つ	全体2/3	
271	弥・広片口	幅11.6	厚2.3		中・普	にぶい褐・黒褐	全体にマメツ	把手完存	角閃石・雲母、内(赤)
272	弥・広片口				中・多	にぶい橙	外面マメツ、内面ミガキ・ナデ	把手完存	角閃石・内（赤）
273	弥・支脚	12.8	14.5	9.7	細・多、中・多	にぶい黄褐・灰黄褐・黒	外面ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、内面指押え・ﾅﾃﾞ、口縁注口状	完存	角閃石
274	土玉	径3.2	径2.9		中・普	にぶい黄橙・灰	ナデ、両面穿孔、指押えで切れ目を造る	完存	角閃石
275	土製紡錘車	径5.6	厚0.8		中・多	にぶい褐・黄灰	ナデ	完存	角閃石
276	土製紡錘車	径5.2	厚0.7		中・普	にぶい黄橙・灰黄褐	ナデ	ほぼ完存	角閃石
277	土製紡錘車	径4.8	厚0.7		中・多	にぶい黄橙・暗灰黄	ナデ	完存	角閃石
278	土製紡錘車	径4.6	厚0.7		中・普	にぶい黄褐	ナデ	完存	角閃石

第77図　3区ＳＤ02出土遺物28（１／４）



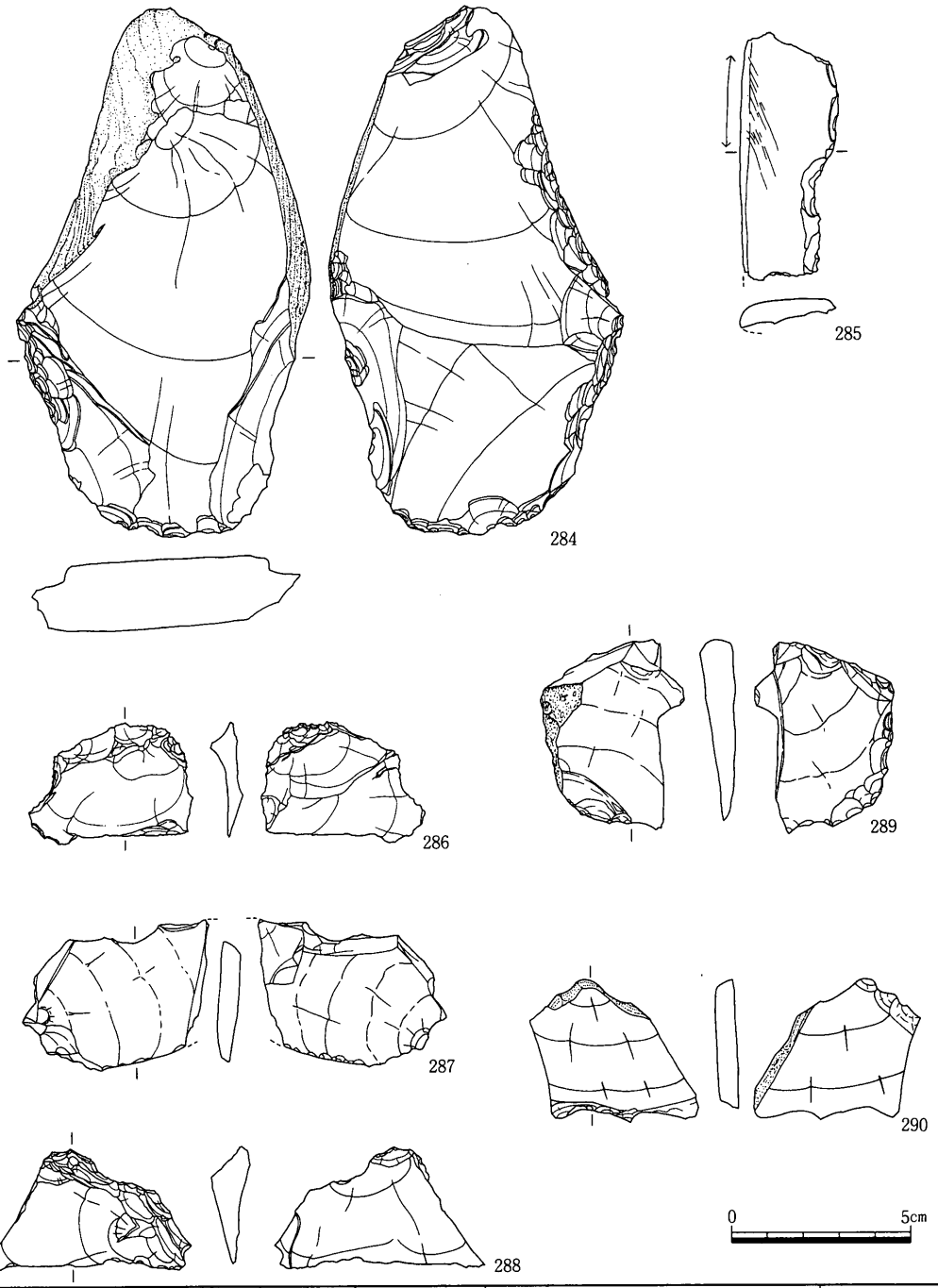






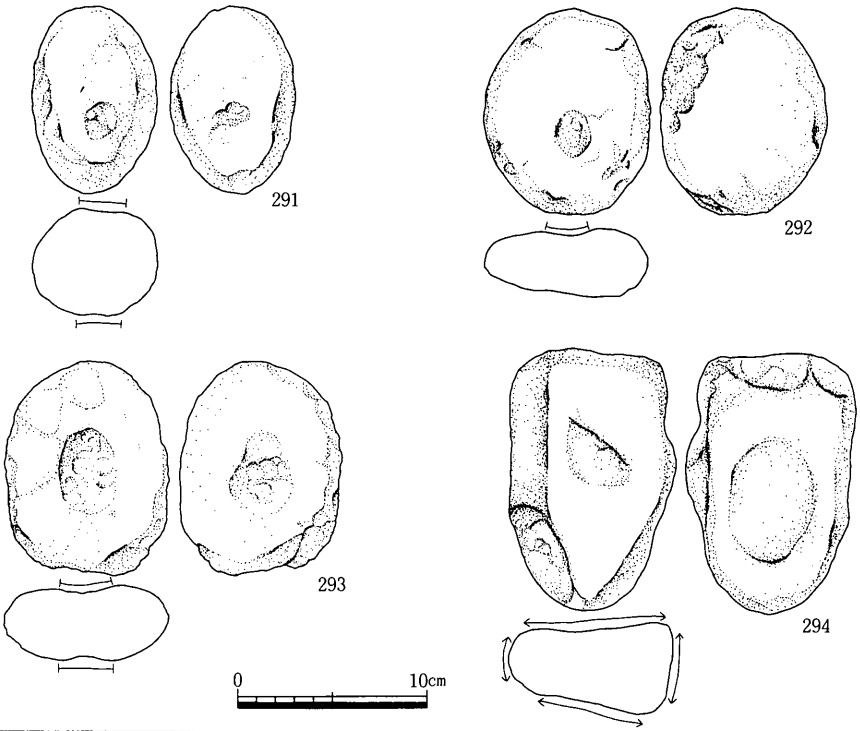
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
279	打製石庖丁	5.8	3.6	0.6	22.8	サヌカイト	外湾刃	
280	打製石庖丁	10.0	4.9	0.9	59.8	サヌカイト	刃部使用のため摩滅	
281	スクレイパー	7.3	5.6	1.3	54.6	サヌカイト	下部と側縁部の刃部摩滅	
282	スクレイパー	8.4	4.0	0.8	26.9	サヌカイト	刃部摩滅	
283	スクレイパー	9.2	7.5	1.5	166.5	サヌカイト		

第78図　3区ＳＤ02出土遺物29（１／２）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
284	打製石斧	14.2	8.1	2.3	291.1	サヌカイト		
285	磨製石斧(一部のみ)			0.5	16.3	結晶片岩		
286	二次加工のある剥片	4.5	3.2	0.7	8.0	サヌカイト		
287	二次加工のある剥片	3.7	4.8	0.6	15.3	サヌカイト		
288	二次加工のある剥片	5.9	3.4	1.1	12.2	サヌカイト		
289	二次加工のある剥片	5.0	4.0	0.9	19.0	サヌカイト		
290	二次加工のある剥片	3.6	4.1	0.6	13.6	サヌカイト		

第79図　3区ＳＤ02出土遺物30（１／２）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
291	凹石	9.6	5.5	5.6	477.6	砂岩		
292	凹石	10.6	8.7	3.5	443.4	砂岩	敲打痕、磨き痕有り	
293	凹石	11.1	8.5	4.7	550.4	砂岩	両面に敲打痕有り	
294	砥石	13.6	8.7	4.7	874.1	砂岩		

第80図　3区ＳＤ02出土遺物31（１／４）

281～283はスクレイパーである。281は下部と側縁の一部に刃部を作り出しているが，刃部はいずれも摩滅している。282は横半分が欠損しているため全体の形態は不明であるが，下部に残っている刃部は摩滅して潰れている。283はやや厚手の剥片を使用しており，刃部は下部に部分的に作り出しているにすぎない。284は打製石斧である。基部端と側縁部上半には自然面を残す。側縁部下半と刃部に調整を施す。285は磨製石斧の基部の一部で，軸に対して斜め方向の擦痕が認められる。結晶片岩製である。286～290は二次加工のある剥片である。いずれも剥片の側縁部の一部に二次的な加工を加えている。291～293は凹石である。292は片面の中央部と側縁の一部に敲打痕が認められ，さらに側縁に磨き痕も認められる。291・293は両面に敲打痕がある。294は砥石で４面使用しており，使用頻度の高い部分は窪んでいる。291～294は砂岩製である。

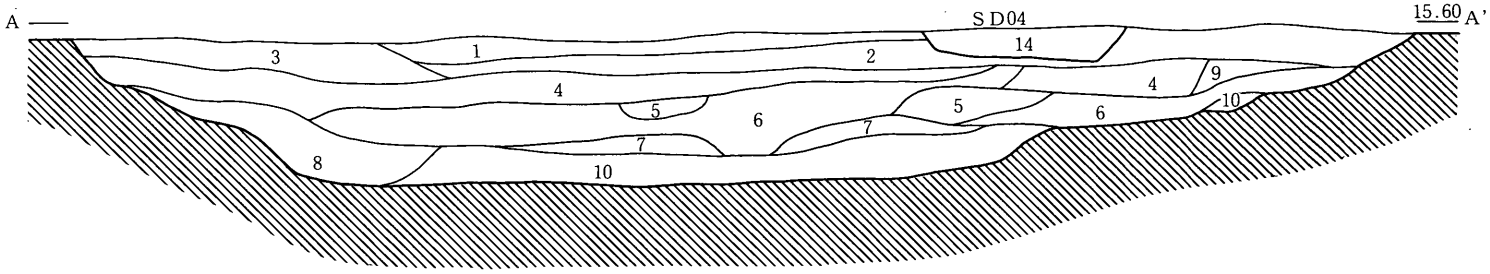
以上ＳＤ02出土の遺物について述べてきたが，ＳＤ02の北側のＳＤ01とＳＲ01との交点部分ではＳＤ02の主たる遺物より明らかに前段階のもの（68）や後段階のもの（66・67）を含むものの，全体としてほぼ同時期のものと言えよう。

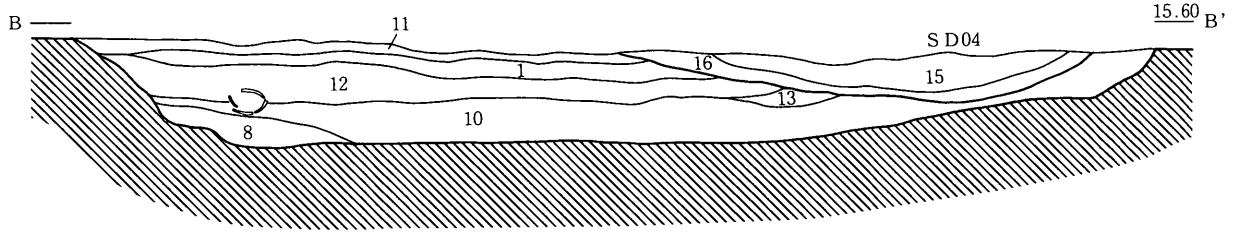
ＳＤ03（第81図～第90図）

３区の北西部分で検出した南西－北東方向の直線的な溝である。調査区の南壁から12mほど延びた所で，後述するＳＲ02に切られている。溝は幅5.3～7.3mで，調査区南壁際では東側が広がっているが，西側は直線となっている。溝がここで東側へ屈曲しているのか部分的に広がっているのかは不明である。またＳＲ02に切られた部分より北側は，ＳＤ03の続きがＳＲ02より東側で検出されないことから，このまま直進していた可能性が高い。深さは0.6～1.0m程度で，埋土は粘質土が中心で，最下層には木片などの自然物を含む暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。また中程には粘性の強い黒褐色粘土が堆積していた。土器等の遺物は主に溝の下半から出土した。大半が同一時期のものと考えられるが，若干時期の下るものも含まれていた。

遺物は土器と石器が出土し，土器では壷・甕・高坏・鉢・器台・甑・把手付広片口皿が出土した。

295～308は壷である。295は頸部に凹線を巡らせ，頸部下半にハケ目を施している。296は頸部は緩やかに外反し，口縁部端部は内側に粘土を加えて肥厚させ，上側に平坦な面を作り竹管文を３個１単位で復元で４単位施している。頸部下半から体部にかけての外面にはヘラミガキを施し，頸部には２方向からヘラ圧痕文を施している。297は頸部は外反し外面に凹線と２方向のヘラ圧痕文を施す。口縁部端部は外側へ拡張し，上側に平坦な面を作り２個１単位の竹管文を施している。体部は中央部のやや上が大きく張り，外面下半には横方向の後に縦方向のヘラミガキを施している。内面上半には指ナデを，下半にはヘラケズリを施している。頸部と体部の境部分には焼成後の長方形の穿孔が見られる。298は頸部は外反し口縁部端部は先細りとなる。上半には凹線を，下半にはハケ目の後にヘラ圧痕文を１段加えている。体部は中央部が大きく張り，外面はハケ目の後に下半にヘラミガキを加えている。内面の上部と下部に指押さえ痕が顕著で，中央部はヘラケズリとなっている。体部の上端部に断面三角形の粘土の隆起が１箇所ある。先端は摩滅しており耳状の突起かあるいは把手の剥離痕かは不明である。頸部は完存しているが把手の剥離痕は見られず，体部の突起の下側は欠損しているので把手であれば下側であろう。299は頸部は直線的でそのまま口縁部端部に至る。頸部下半にはヘラ圧痕文を施している。体部は上半のみであるが張りはない。体部外面にはハケ目の後にヘラミガキを施している。300は頸部は直立した後に口縁部は外反する。体部は球形で上部にヘラ描きの波状文を施している。301は脚台付き直口壷である。口縁部は外傾気味に直立している。体部は扁平な算盤玉形

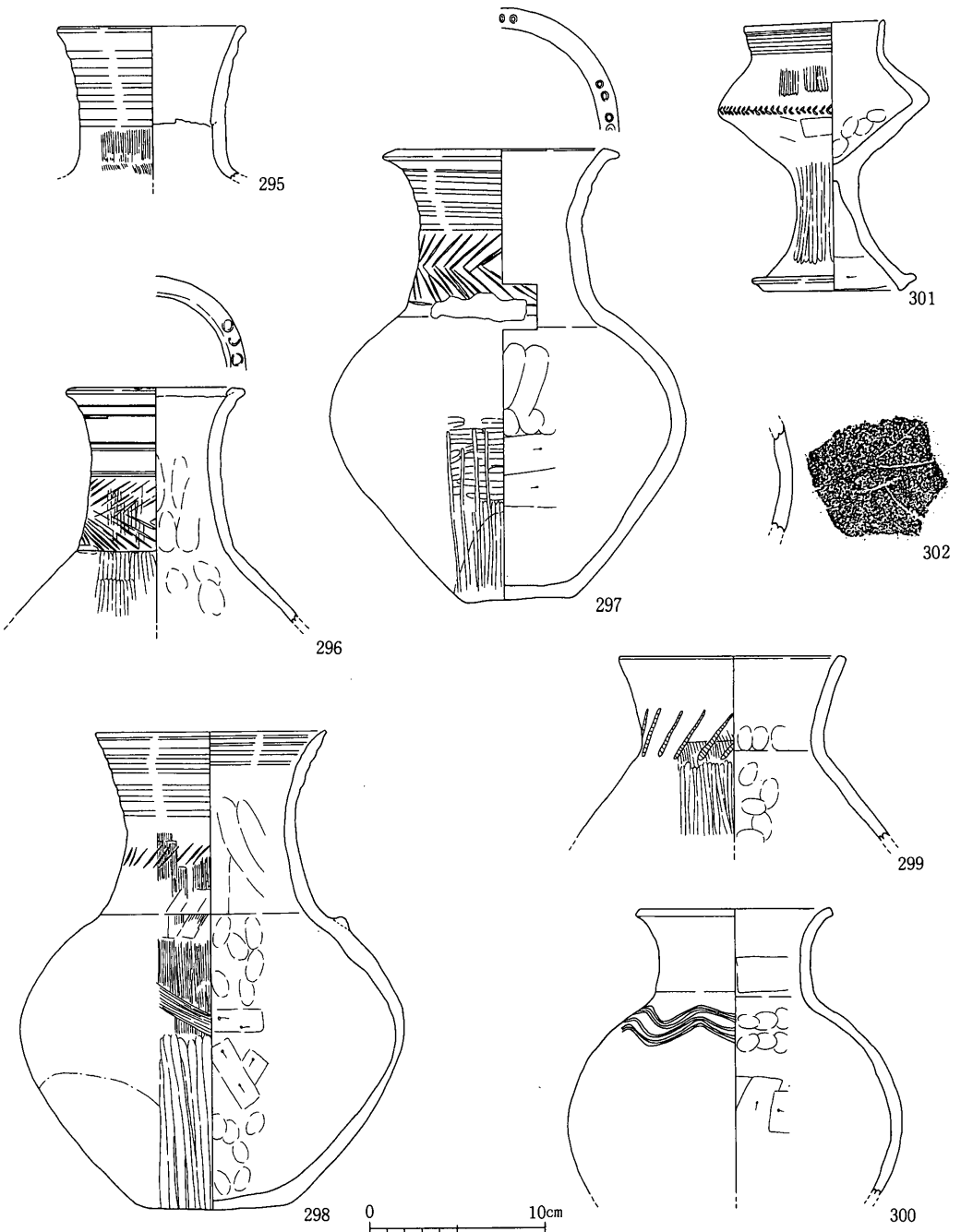




1．黒褐色粘質土
2．茶色粘質土(マンガン含む)
3．茶褐色粘質土(鉄分含む)
4．暗茶褐色砂混り粘質土(鉄分少々含む)
5．暗灰色砂
6．黒褐色粘土(粘性強い)
7．黒褐色砂混じり粘質土
8．暗灰色粘土
9．橙褐色粘質土(鉄分多い)
10．暗灰色砂混じり粘質土(自然遺物含む)
11．淡灰褐色粘質土
12．黒灰褐色粘質土
13．灰褐色粘質土
14．暗茶褐色粘土
15．灰褐色粘質土
16．黒色粘質土

0　2m

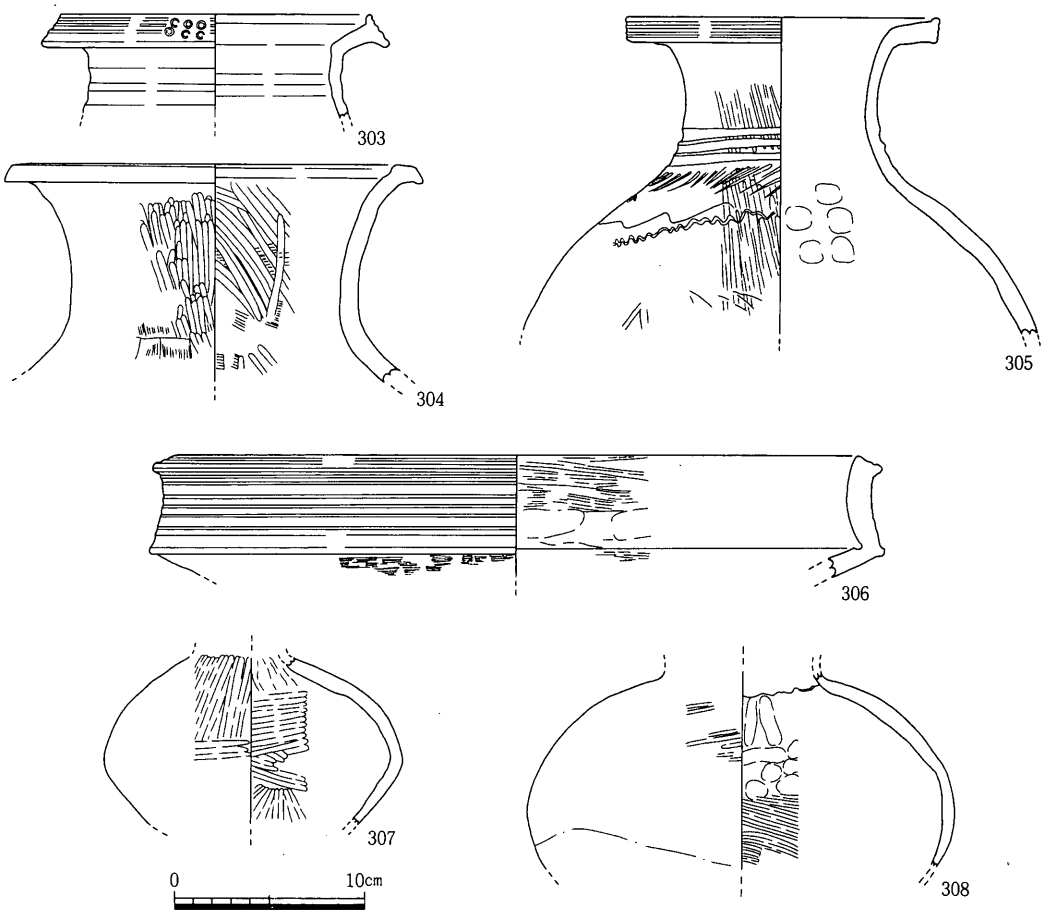
第81図　3区SD03・04断面図（1／50）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
295	弥・壷	10.2			中・少	暗灰黄	外面ナデ・ハケ目、内面ナデ	口径1/3	角閃石
296	弥・壷	8.8			細・普、粗・少	橙・灰褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指押え	口径3/4	
297	弥・壷	12.1	24.9	6.5	微・少	黒・にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	完存	角閃石
298	弥・壷	13.2	27.2	8.8	中・少、細・少	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外ﾊｹ目・ﾐｶﾞｷ、内ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ・指押え	口径2/3	角閃石・雲母
299	弥・壷	12.8			細・少	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、内面指押え・ﾅﾃﾞ	口径1/4	角閃石・雲母
300	弥・壷	10.8			中・少	灰白・褐灰	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・指押え・ｹｽﾞﾘ	全体1/3	
301	弥・壷	8.0	14.9	7.8	中・普	にぶい黄橙・黒	外面ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ、円盤充填	ほぼ完存	角閃石
302	弥・壷				中・普	灰黄、にぶい黄橙	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ、外面にﾍﾗ描の絵画状文様	体部細片	

第82図　3区ＳＤ03出土遺物１（１／４）

で，体部中央部で鋭く屈曲している。外面の屈曲部には2方向からの刻み目を巡らせ，上部にはヘラミガキを施している。脚部は端部を外側へ大きく拡張し，拡張した部分の上下を強くナデている。外面にはヘラミガキを施し，内面下半はヘラケズリとなっている。体部とは円盤充填である。302は壷の体部の中央部付近の細片であるが，外面にヘラ描きの文様の一部が見られる。303は口縁部は頸部から鋭く屈曲し，端部を上下に拡張し外側に幅広の面を作り6個1単位の竹管文を施している。頸部には凹線が巡る。304は口縁部端部の内・外・上をナデて方形に整形し，端部を下側へ少し拡張させている。頸部は内・外面ともにハケ目の後にヘラミガキを施している。内面には赤色顔料が付着している。305



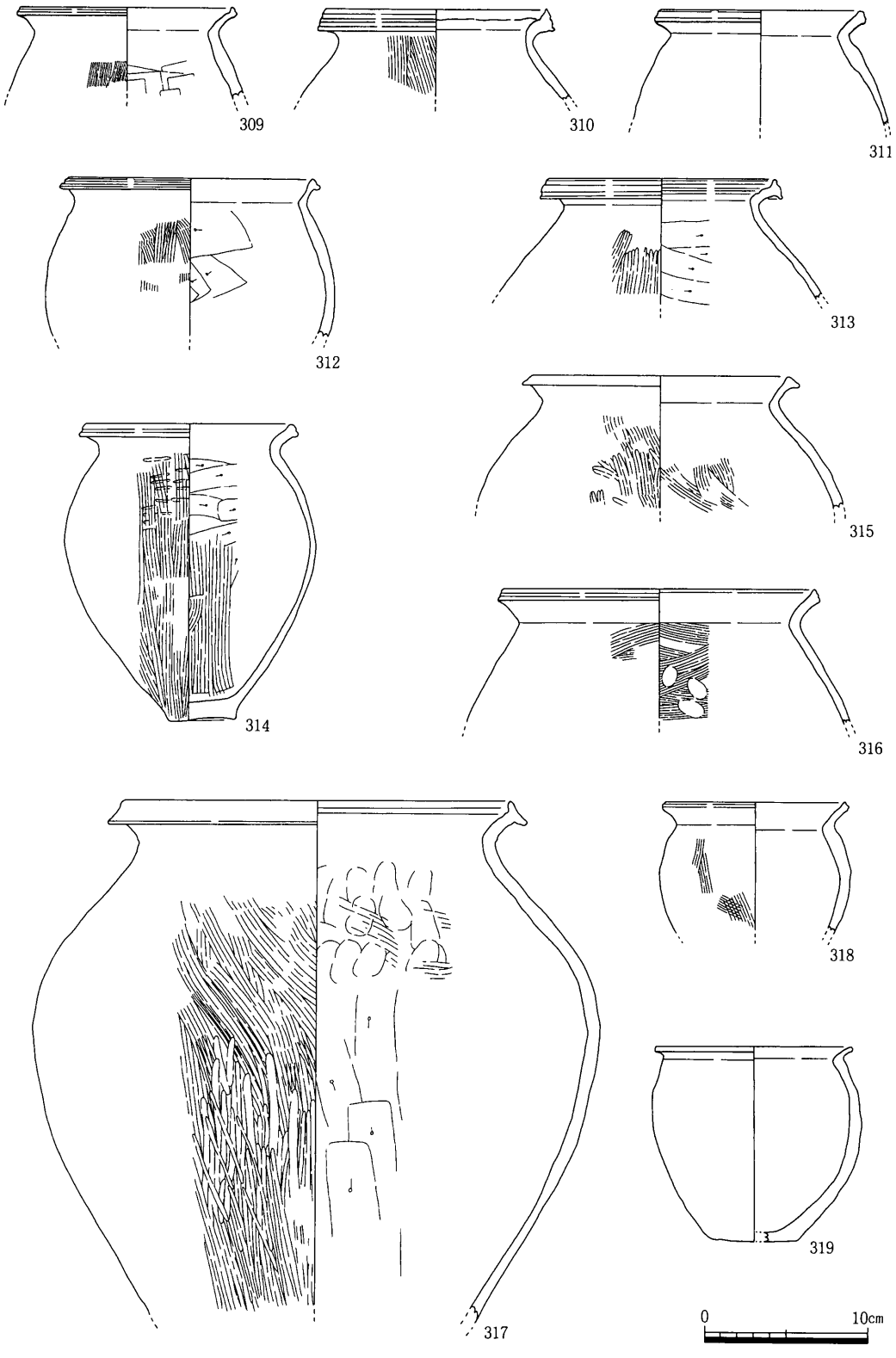
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
303	弥・壷	16.2			微・少	灰黄褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/2	角閃石・雲母
304	弥・壷	21.4			微・少、中・少	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、内面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ	口径完存	角閃石・雲母、内(赤)
305	弥・壷	16.1			粗・少、中・少	灰黄褐、にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ナデ・指押え	口径1/4	角閃石・雲母
306	弥・甕	36.0			微・普	にぶい黄橙	外面ナデ・ハケ目、内面ナデ・ハケ目	口径1/20	角閃石
307	弥・壷				細・普	灰、灰黄褐	外面ミガキ、内面ミガキ	体部1/2	角閃石・雲母
308	弥・壷				中・少	黒、明褐	外面ミガキ・マメツ、内面ハケ目・指押え	体部1/2	角閃石

第83図　3区ＳＤ03出土遺物2（1／4）

は口縁部は頸部から大きく横へ屈曲し，端部を上下に拡張している。頸部は外面にヘラミガキを施した後に，下部に3条ほど棒状工具で強く引いている。体部もヘラミガキを施し，その後に上側からヘラ圧痕文，櫛描き波状文，ヘラ描き波状文，櫛描き波状文をそれぞれ施文している。さらに中央部の欠損部分のやや上には絵画状の文様が一部見られるが，内容は不明である。306は二重口縁の壷の口縁部で，屈曲部の外面は突帯状に張り出している。端部は外側へ拡張し，傾斜する面をもつ。口縁部外面には沈線を巡らせ，内面はハケ目の後にナデている。他の一群より時期の下るものである。307はやや扁平な体部で，体部中央部は横方向の，上半は縦方向のヘラミガキを施している。内面は棒状工具でナデつけるようなヘラミガキで，装飾的効果はない。308は横長な楕円形の体部で，外面に一部ヘラミガキが残る。内面上半には指ナデと指押さえ痕が顕著で，下半にはハケ目を施している。

309～319は甕で，このうち309・310・312～315・317は口縁部端部を拡張している。309は体部の器壁は肥厚しており，外面にハケ目を，内面には板ナデを施している。310は口縁部内面に鋭い稜を形成して端部が肥厚している。311は全体に摩滅しており，体部の上部が肥厚している。312は口縁部端部を下方に拡張し，拡張された下側の端部は丸く肥厚している。口縁部は内側を強くナデており，体部は外面にハケ目を，内面にはヘラケズリの後にナデている。313は口縁部端部を上下に拡張している。口縁部内面を強く2段にナデており，凹線が形成されている。体部は外面にはヘラミガキ，内面にはヘラケズリをそれぞれ施している。314は口縁部は端部を下方にやや拡張しており，体部に比べて肥厚している。体部は上半に最大径があり倒卵形である。外面は叩きの後にハケ目を施し，内面はヘラケズリの後に下半にハケ目を施している。315は口縁部端部を下方に拡張し傾斜する面を作る。体部外面はハケ目の後にヘラミガキを，内面にはハケ目を施している。316は口縁部は直線的に立ち上がり，体部は内・外面ともにハケ目を施す。317は口縁部端部を大きく上下に拡張している。体部は上半で大きく張っており，外面はハケ目の後に下半部にヘラミガキを加えている。内面は最大径部分より上部では指押さえの後に若干のハケ目を加えている。最大径部分より下部ではヘラケズリとなっている。318は口縁部は直線的で，体部は肥厚し外面にハケ目を施している。319は口径と器高がほぼ同じで，口縁部は短くなっている。外面は摩滅しており，内面は全体にナデている。

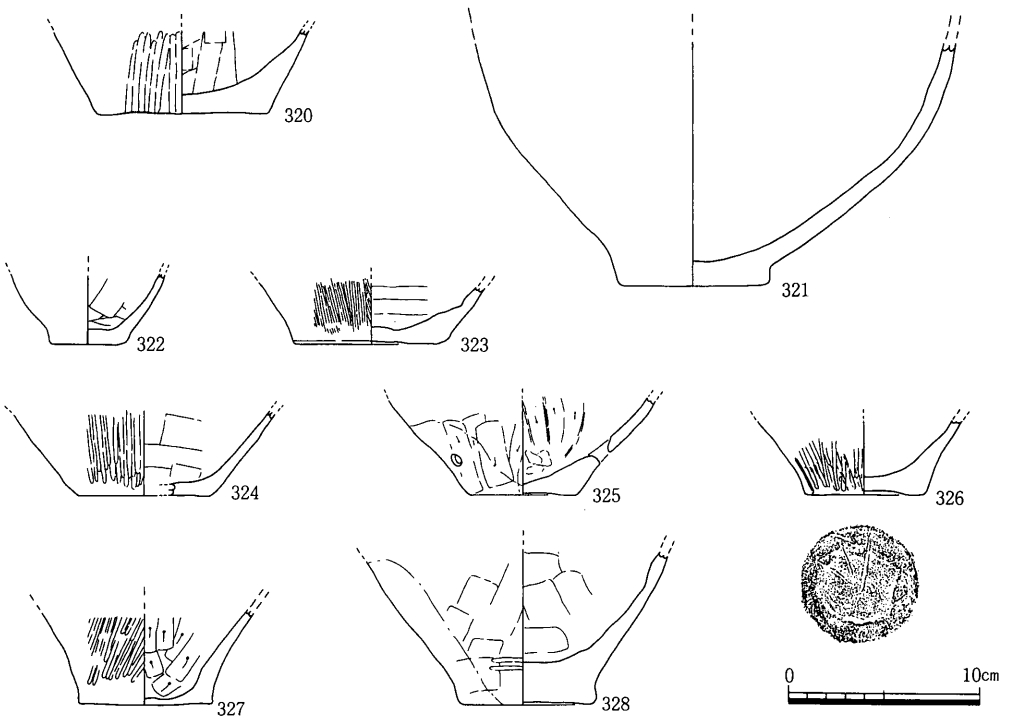
320・321は壷の底部と考えられるものである。320は体部外面と底部外面にヘラミガキを施している。内面は板ナデとなっている。321の底部は突出している。



第84図　3区ＳＤ03出土遺物３（１／４）

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
309	弥・甕	13.0			中・少	にぶい黄	口縁ナデ、外面ハケ目、内面板ナデ	口径1/7	角閃石
310	弥・甕	13.5			細・普	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ナデ	口径1/4	角閃石・雲母
311	弥・甕	12.4			中・少	灰白	全体にマメツ	口径1/6	
312	弥・甕	14.9			中・少	にぶい黄橙、灰黄	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ケズリ→ナデ	口径1/4	角閃石・雲母
313	弥・甕	14.0			微・少	にぶい黄褐・黄褐・黒	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ケズリ	口径1/4	角閃石・雲母
314	弥・甕	12.7	18.1	4.2	細・普	にぶい黄・黒	口縁ﾅﾃﾞ、外面叩き→ﾊｹ目、内面ｹｽﾞﾘ→ﾊｹ目	完存	角閃石・雲母
315	弥・甕	15.8			微・多	褐灰	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目	口径1/4	角閃石・雲母
316	弥・甕	19.2			中・多	にぶい褐・暗褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ハケ目	口径1/4	角閃石
317	弥・甕	23.7			微・普	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、内指押え・ｹｽﾞﾘ・ﾊｹ目	口径1/4	角閃石・雲母
318	弥・甕	10.9			中・少	黒、灰黄・黒	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ナデ	口径1/4	
319	弥・甕	12.0	11.8	5.4	微・少	にぶい黄橙	外面マメツ、内面ナデ	全体2/3	雲母

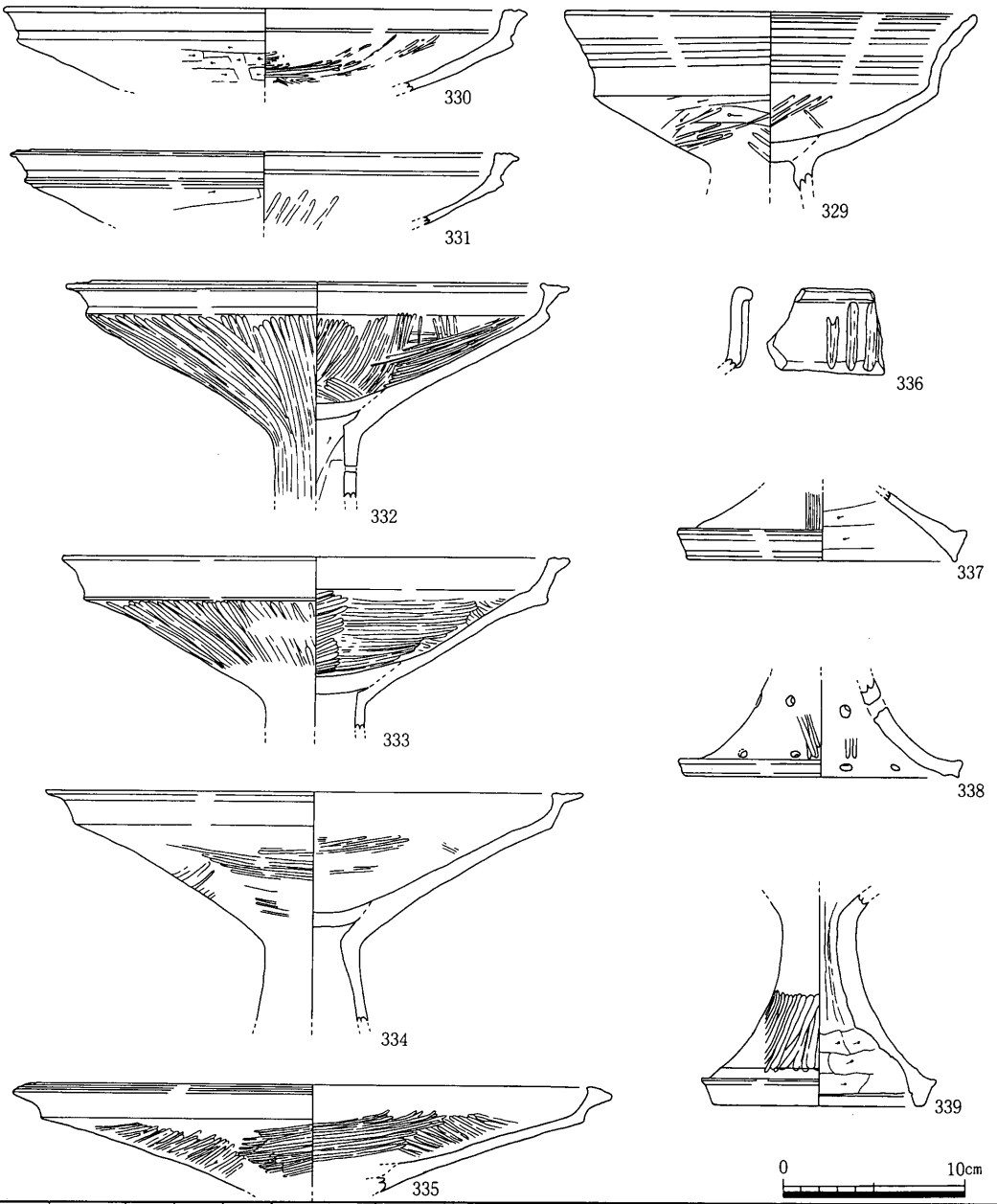
3区SD03出土遺物3観察表



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
320	弥・壷			9.1	中・普	にぶい黄褐	外面ミガキ、内面板ナデ、底部外面ミガキ	底径1/2	角閃石・雲母
321	弥・壷			8.0	中・多	黒、明黄褐	外面マメツ、内面ナデ	底部完存	
322	弥・甕			4.0	細・少	褐	外面ナデ、内面板ナデ	底部完存	角閃石
323	弥・甕			8.1	細・普	灰、黒・にぶい黄橙	外面ハケ目、内面板ナデ	底部完存	角閃石
324	弥・甕			7.0	微・少	灰黄、浅黄・黒	外面ミガキ、内面板ナデ	全体1/2	角閃石
325	弥・甕			5.6	細・少	にぶい黄褐・黒褐	外面ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ、内面ｹｽﾞﾘ・指押え	底径1/3	角閃石・雲母
326	弥・甕			6.3	細・普	暗灰黄、灰黄・黒	外面叩き→ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ、底外面にﾍﾗ記号	底部完存	角閃石・雲母
327	弥・甕			6.9	細・少	黄褐、にぶい黄褐	外面ミガキ、内面ケズリ	底部完存	角閃石
328	弥・甕			7.2	細・普	ﾆﾌﾞｲ黄褐、褐灰・黒褐	外面叩き→板ナデ、内面板ナデ	底部完存	角閃石・雲母

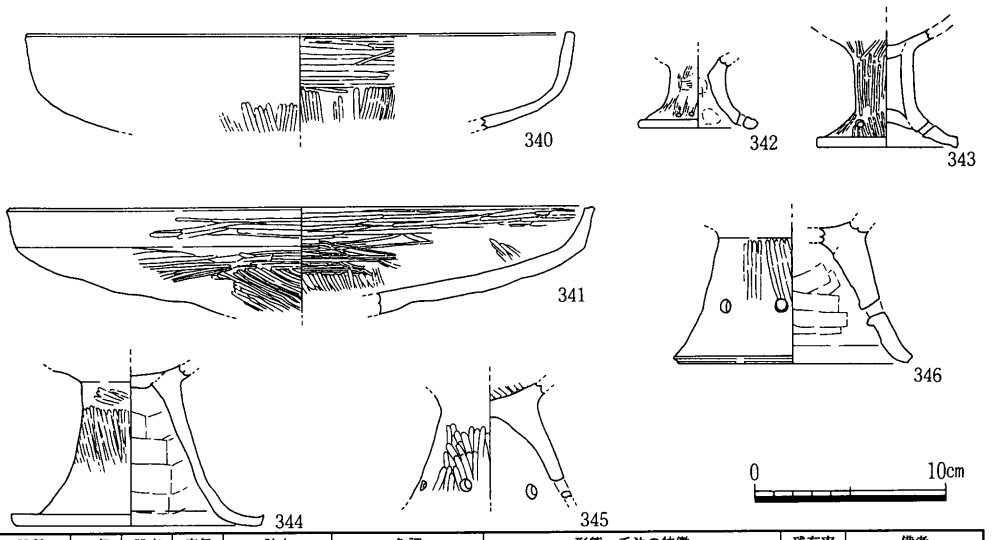
第85図　3区SD03出土遺物4（1／4）

322～328は甕の底部と考えられるものである。323は内面を板状工具で抉り取っている。324は体部外面はヘラミガキ，内面は板ナデである。325は底部のやや上に焼成後の穿孔が1個ある。体部外面はヘラケズリの後ナデている。内面はヘラケズリで，底部付近は指押



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
329	弥・高杯	22.5			中・普	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ケズリ→ミガキ、内面ミガキ	口径2/3	角閃石・雲母
330	弥・高杯	29.0			細・普	にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ケズリ→ナデ、内面ミガキ	口径1/4	角閃石・雲母
331	弥・高杯	28.0			微・少	浅黄・灰	口縁ナデ、外面ケズリ→ナデ、内面ミガキ	全体1/4	角閃石・雲母
332	弥・高杯	27.7			中・多	灰黄褐	口縁ナデ、杯外・内面ミガキ、脚外面ミガキ、内面ケズリ、円盤充塡	口径1/2	角閃石
333	弥・高杯	27.8			中・少	にぶい褐	口縁ﾅﾃﾞ、外・内面ﾐｶﾞｷ、脚内面ｹｽﾞﾘ、円盤充塡	口径1/2	角閃石
334	弥・高杯	29.6			細・普	にぶい橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ、内面ﾐｶﾞｷ、円盤充塡	口径3/4	角閃石・雲母
335	弥・高杯	30.6			中・普	橙・にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ、内面ﾐｶﾞｷ、円盤充塡	口径1/3	角閃石・雲母
336	弥・高杯				中・普	にぶい黄	外面ナデ、内面ナデ	口縁細片	雲母
337	弥・高杯			14.8	粗・少、中・普	灰褐、黒・にぶい橙	外面マメツ、内面ケズリ	全体1/4	
338	弥・高杯			15.2	微・少	黒、にぶい黄橙	外面ミガキ、内面ナデ、棒状工具痕	脚部1/6	
339	弥・高杯			11.6	中・普	灰黄褐	外面ナデ、ミガキ、内面しぼり目・ケズリ	脚部完存	角閃石・雲母

第86図　３区ＳＤ03出土遺物５（１／４）



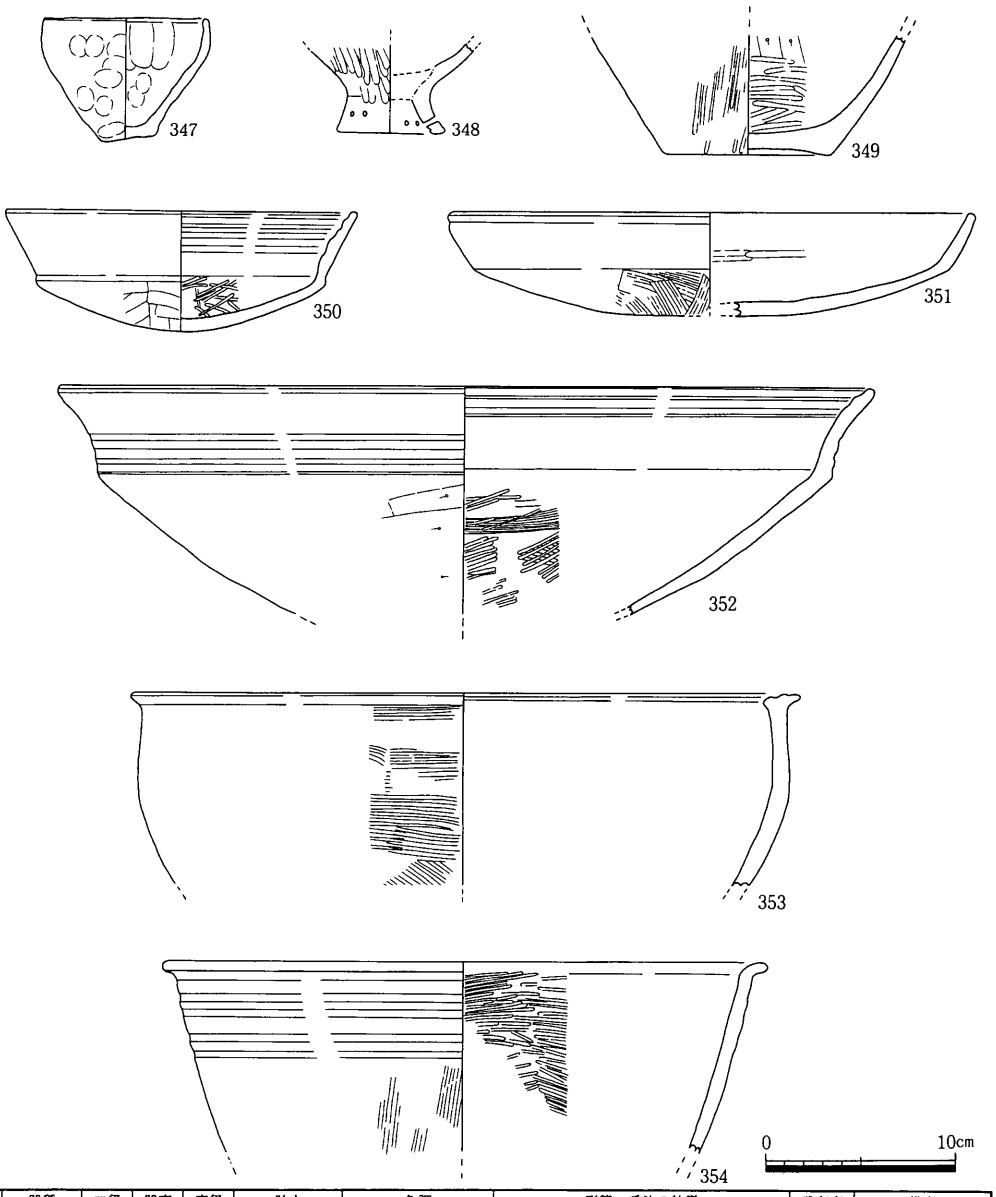
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
340	弥・高杯	28.8			細・少	黒褐・灰黄	外面ナデ・ミガキ、内面ミガキ	全体1/6	角閃石・雲母
341	弥・高杯	30.7			中・普	暗灰黄	外面ミガキ、内面ミガキ	口径1/4	角閃石・雲母
342	弥・高杯			6.0	微・多	にぶい黄橙	外面ハケ目、内面ナデ	底径1/2	角閃石
343	弥・高杯			7.4	細・少	黄褐	外面ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ、脚部の上下に円盤充填	底径3/4	角閃石
344	弥・高杯			12.9	微・少	黒褐、黄灰	外面ミガキ・ナデ、内面板ナデ、円盤充填	底径1/8	角閃石・雲母
345	弥・高杯				微・少	黒褐	外面ミガキ、内面ナデ	脚部3/4	角閃石・雲母
346	弥・高杯			12.0	粗・少、微・少	灰黄褐、にぶい黄褐	外面ミガキ→ナデ、内面板ナデ、円盤充填	底径1/4	角閃石

第87図　3区ＳＤ03出土遺物６（１／４）

さえとなっている。326は底部は輪台状に上げ底となっており，底部外面にヘラ描きの記号が描かれている。体部の外面には縦方向の叩きの後にヘラミガキを施している。327は突出気味の底部で，体部外面はヘラミガキを，内面はヘラケズリを施している。328は底部は突出し肥厚している。体部外面は叩きの後に板ナデを施している。

329～346は高坏である。329は口縁部は長く大きく外反して立ち上がり，強くナデているため口縁部の内・外面には凹線が形成されている。坏部の外面にはヘラケズリの後に多角形のヘラミガキを，内面には格子状のヘラミガキをそれぞれ施している。円盤充填となっている。330～335は口縁部が短く立ち上がり，強いナデのため口縁部立ち上り部外面には鋭い稜を形成している。口縁部端部は内・外側に拡張し上側に幅広の面を作るものである。330は口縁部端面に細い凹線を３条巡らす。坏部外面はヘラケズリの後にナデ，内面はヘラミガキを施している。331は口縁部端面に細い凹線が３条巡り，口縁部立ち上り部の内・外面に沈線が１条巡る。坏部外面はヘラケズリの後にナデている。332は口縁部端部を内・外側に大きく拡張し，端面に凹線を３条巡らす。坏部は両面とも放射状にヘラミガキを丁寧に施し，内面の坏部底部は横方向のヘラミガキを加えている。脚部の上部には円形の透かし穴が４個あるが，そのうち１個は未貫通である。円盤充填となっている。333

は口縁部端面に凹線を3条巡らす。坏部外面には放射状の，内面には多角形のヘラミガキをそれぞれ施している。脚部上端部の内面はヘラケズリとなっている。円盤充填である。334は口縁部端部を特に外側に大きく拡張する。335は口縁部端面は傾斜し凹線を2条巡らす。坏部は両面とも多角形のヘラミガキを施す。336は口縁部の細片である。口縁部は直



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
347	弥・鉢	8.5	6.4	2.8	微・少	黒・黒褐	外面指押え・ナデ、内面指押え・ナデ	全体2/3	角閃石・雲母
348	弥・鉢			5.8	細・少	にぶい黄橙、灰黄褐	外面ミガキ・ナデ、内面ナデ、円盤充塡	脚部完存	角閃石・雲母
349	弥・鉢			8.9	細・多	暗灰黄、にぶい黄	外面ﾐｶﾞｷ、内面ﾀﾃﾞﾘｰﾐｶﾞｷ、底部外面ﾐｶﾞｷ	底部完存	角閃石、内(赤)
350	弥・鉢	18.4	6.3	丸底	中・普	黄褐	口縁ナデ、外面ケズリ、内面ミガキ	全体1/2	角閃石・雲母
351	弥・鉢	27.4			微・少	にぶい黄・黒褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ナデ・ミガキ	全体1/6	角閃石・雲母
352	弥・鉢	42.5			中・多	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ケズリ、内面ハケ目→ミガキ	口径1/12	角閃石・雲母
353	弥・鉢	35.6			中・普	暗灰黄	外面ハケ目、内面ナデ	口径1/5	角閃石
354	弥・鉢	32.0			細・少	黄褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ミガキ	口径1/4	角閃石・雲母

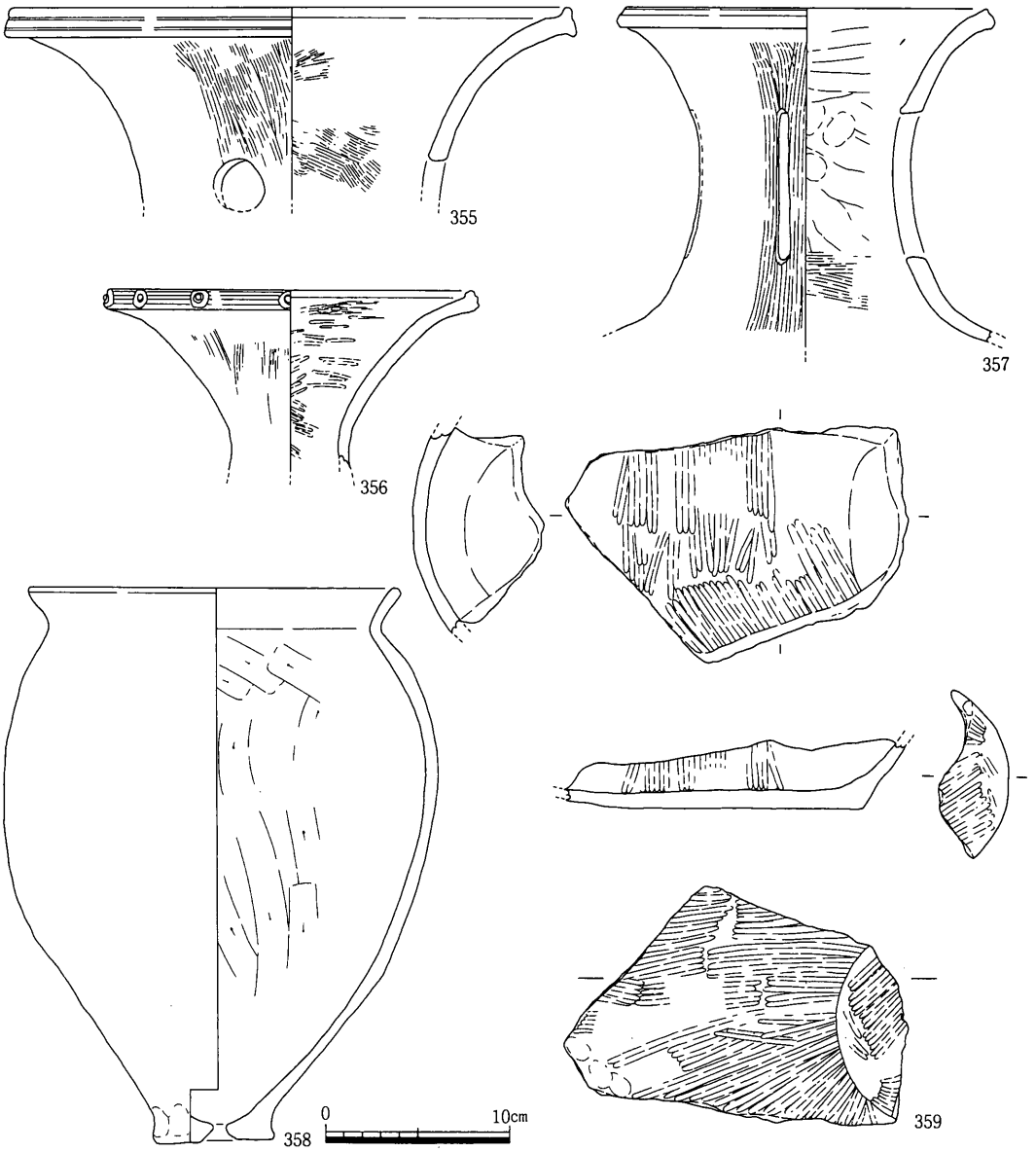
第88図　3区ＳＤ03出土遺物7（1／4）

立し端部を外側へ曲げている。口縁部外面には棒状浮文が現存で3本ある。337は脚部端部を拡張している。脚部外面下部には櫛描きにより施文されている。338は脚部端部内面を強くナデている。また脚部内面には棒状工具の痕跡がある。円形の透かし穴が現存で3個ある。339は脚部端部を拡張させており，内面下半はヘラケズリを強く施し器壁を抉り取っている。外面は下半にヘラミガキを施している。340は口縁部は丸みをもって立ち上がる。口縁部内面には横方向のヘラミガキを，坏部内面には放射状のヘラミガキを施している。341は口縁部内・外面に横方向のヘラミガキを，坏部外面には放射状，内面には格子状のヘラミガキをそれぞれ施している。342は脚部は短く大きく開く。外面にはハケ目を施し，円形の透かし穴が2個1単位で現存で3単位ある。343は坏部側と脚部側の2箇所に円盤充填を行なっている。344は脚部は端部付近で大きく屈曲して横に開き，端部を若干つまみ上げている。内面には板ナデを施している。345は脚部外面はヘラミガキである。円形の透かし穴が現存で3個ある。346は厚手の脚部で，直線的に開き端部が若干外側に開く。外面はヘラミガキの後にナデ，内面は板ナデとなっている。

347～354は鉢である。347は体部上部が内湾し，内・外面全体に指押さえ痕が顕著である。348は鉢の脚部と考えられるもので，2個1単位の円形の小さな透かし穴が6単位あるが，このうちの6個は未貫通である。脚部は短く直線的に開き，円盤充填の剥離した痕跡がある。349は鉢の底部で，体部の外面はヘラミガキ，内面はヘラケズリの後にヘラミガキを施している。底部も内・外面ともにヘラミガキとなっている。内面に赤色顔料が若干付着している。350は高坏の坏形の鉢で，口縁部は長く外反気味に立ち上がる。口縁部を強くナデており内面には凹線が形成されている。口縁部の立ち上り部は明瞭な稜がある。体部は口縁部に比べて浅く丸底となっている。外面はヘラケズリ，内面はヘラミガキとなっている。351も高坏の坏形の鉢で，口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部立ち上り部内面にはヘラミガキが施されている。体部は浅く，外面にハケ目を施している。352は大型の鉢で，口縁部は長く外反して立ち上がり，内・外面を強くナデているために凹線が形成されている。体部は外面にヘラケズリを，内面はハケ目の後にヘラミガキを施している。353は体部は上部でやや内傾し，口縁部は端部を内・外側に拡張し上側に幅広の面を作る。体部外面にはハケ目を施している。354は下半は欠損しているが，体部上半は直線的で，口縁部は外側に短く屈曲する。体部上部には凹線が施され，下部にはハケ目が施されている。内面にはヘラミガキが施されている。

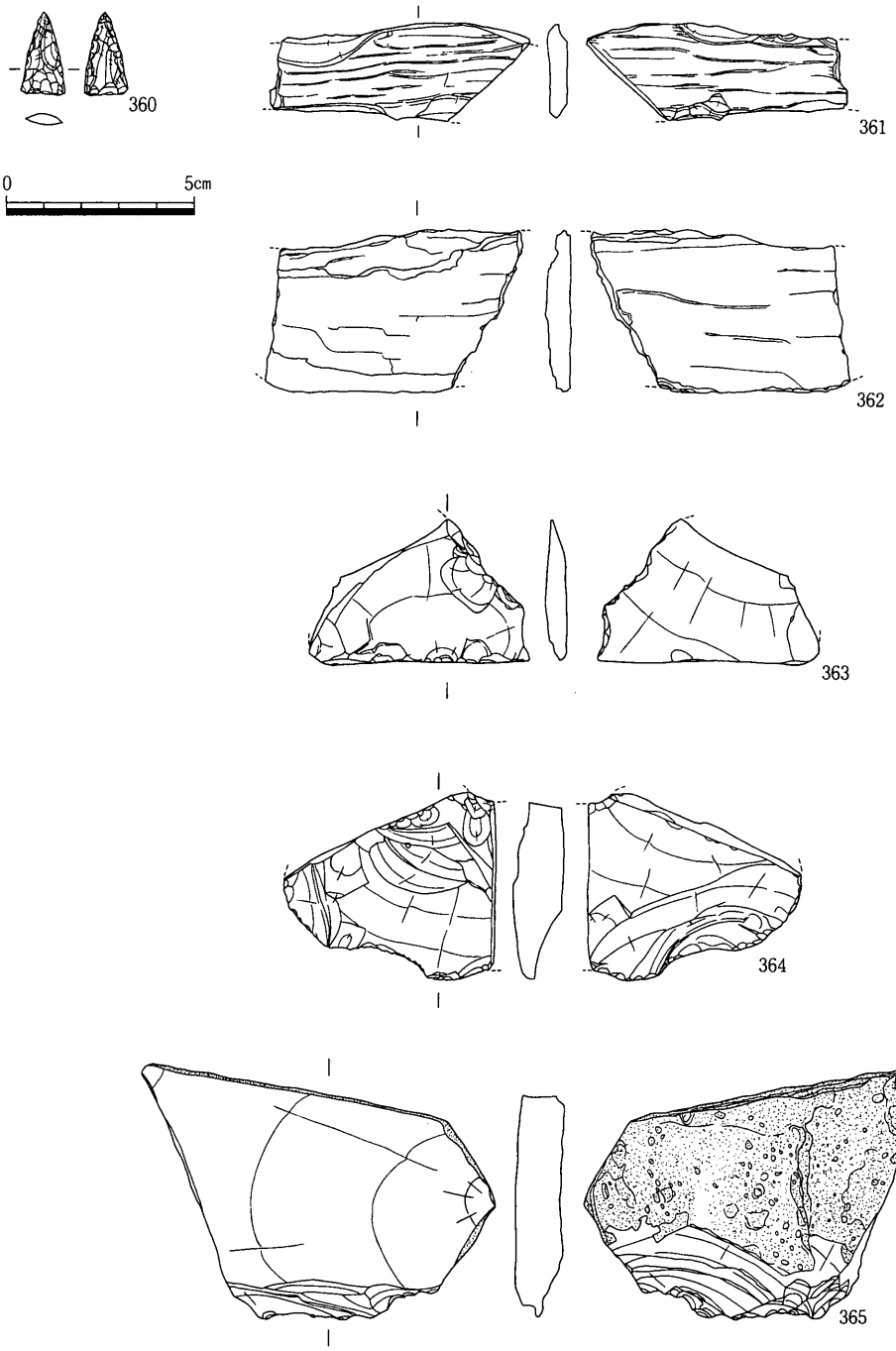
355～357は器台である。355は口縁部は大きく外反し，端部を上下に拡張させ強くナデ

ている。内・外面ともにハケ目を施し，大きな円形の透かし穴が現存で1個ある。356は下半部は欠損しているが，体部の幅は狭くなっている。口縁部端部を上方に拡張し，端面には凹線を施した後に中に竹管文を施した円形浮文を貼り付けている。外面にはハケ目を，内面にはヘラミガキを施している。357は全体に弓なりに反っており，外面には全体にハ



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
355	弥・器台	30.1			中・普、粗・少	にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ハケ目	口径1/4	角閃石・雲母
356	弥・器台	19.6			微・多	にぶい黄橙	外面ハケ目・ナデ、内面ミガキ	口径1/4	角閃石・雲母
357	弥・器台	9.6			細・少	ﾆﾌﾞｲ黄橙、ﾆﾌﾞｲ黄褐	外面ハケ目、内面板ナデ・ナデ・ハケ目	口径1/4	角閃石
358	弥・甕	20.0	29.7	6.4	中・多	にぶい赤褐・灰褐	外面マメツ、内面ケズリ	全体4/5	
359	弥・広片口	幅11.8	厚1.5		中・普	黒褐、暗灰黄・黒	外面ミガキ、内面ミガキ、内面にこげが付着	全体1/2	角閃石、側(赤)

第89図　3区ＳＤ03出土遺物8（1／4）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
360	石鏃	2.1	1.2	0.3	0.6	サヌカイト	平基	
361	打製石庖丁	6.7	2.5	0.5	13.1	結晶片岩		
362	打製石庖丁	6.5	4.1	0.6	28.7	結晶片岩		
363	二次加工のある剥片	5.85	3.7	0.6	19.4	サヌカイト		
364	スクレイパー	5.7	4.8	1.3	45.6	サヌカイト		
365	二次加工のある剥片	9.5	6.8	1.2	111.7	サヌカイト		

第90図　３区ＳＤ03出土遺物９（１／２）

ケ目を施している。内面は上部が板ナデ，下部がハケ目となっており，体部中央に長方形の透かし穴が現存で３個ある。

358は甕の底部に穿孔して甑としたものである。底部は突出しており中央よりややずれた場所に穿孔している。外面は摩滅しているが，内面は全体にヘラケズリを施している。

359は把手付広片口皿である。甕か鉢を割って転用しているような形で，甕か鉢の底部に相当する部分を奥側の把手部にしている。体部はほぼ水平だが先端部は若干上に上がっている。体部の内・外面と把手部の内・外面ともにヘラミガキを丁寧に施している。内面には何かを煮沸したと見られる焦げが付着している。また器壁の側縁部には赤色顔料が付着している。

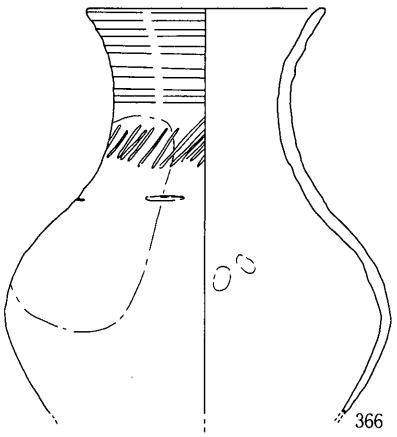
360～365は石器である。360は平基の打製石鏃である。361・362は結晶片岩製の石庖丁と考えられるが刃部の作りは弱い。363は剥片の下側に二次加工が見られる。364は欠損しており全体の形は不明であるが，下部に刃部を作り出しておりスクレイパーと考えられる。365は片面に自然面を残した剥片を利用し，下部に刃部を作り出している。

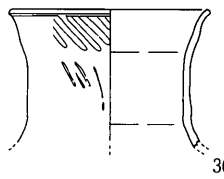
以上ＳＤ03の遺物を見てきたが，大部分は弥生時代後期初頭のものと考えられる。しかし306・329・350など弥生時代終末～古墳時代初頭まで下る遺物もあるが，これらは後世の混入と考えられ，ＳＤ03は弥生時代後期初頭の時期と考えたい。

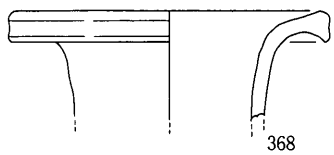
ＳＤ04（第81・91・92図）

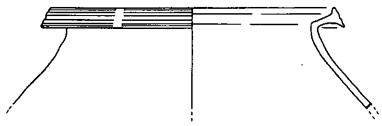
３区の西部で，ＳＤ03と重複して検出した溝である。ＳＤ04はＳＤ03の西半分に重なり，調査区の南壁際で東側に緩く曲がり調査区外に続く。溝は調査区南壁から北へ3.5ｍのところで一部途切れており，溝の北部はＳＤ03とともにＳＲ02に切られている。ＳＤ04はＳＤ03の埋没後に掘削されており，幅0.9～3.1ｍ，深さ0.2～0.35ｍほどである。埋土は南部は暗茶褐色粘土，北部は上層に灰褐色粘質土，下層に黒色粘質土が堆積していた。ＳＤ03の埋土を掘削しているため，本来ＳＤ03に属する遺物も含まれていると考えられ，また逆に本来ＳＤ04の遺物がＳＤ03に混入しているとも考えられる。ＳＤ03で時期の下ると考えられる306・329・350の遺物は本来ＳＤ04のものであった可能性が高い。

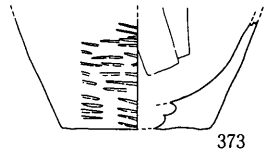
366～368・373は壷である。366は頸部は外反して外面に凹線を巡らせ，口縁部端部は丸く収める。体部上半は張りはなく体部中央部付近に最大径がくる。頸部下半にはヘラ圧痕文を施す。体部外面は摩滅しているが，上部には板状工具の小口の跡が残っている。367は口縁部外面に幅広のヘラミガキが見られる。また頸部外面には摩滅した沈線が縦に４本

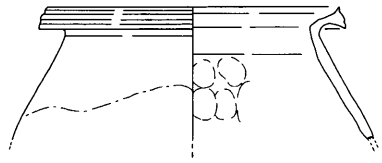


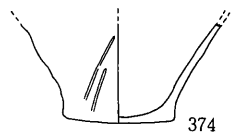


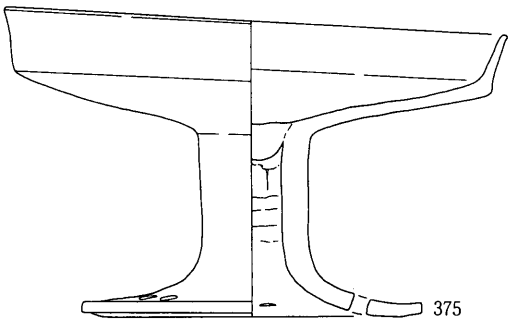


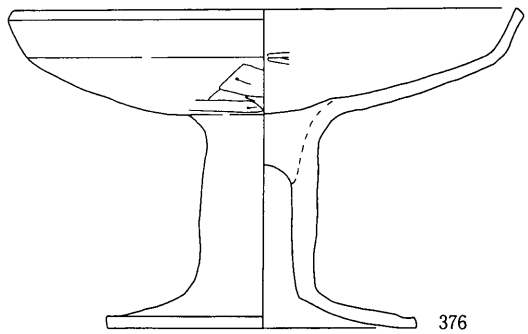






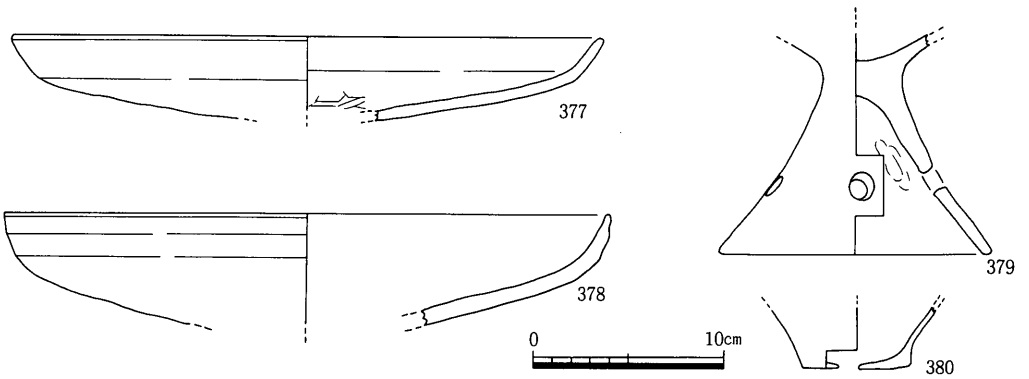






遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
366	弥・壷	12.5			中・普、粗・少	にぶい黄	外面ナデ、内面ナデ・指押え	口縁完存	角閃石
367	弥・壷	10.3			中・普	明褐	外面ナデ・ミガキ、内面ナデ	口縁完存	角閃石
368	弥・壷	16.0			中・普、細・多	灰白、浅黄橙	全体マメツ	口径1/6	
369	弥・甕	13.7			中・普	にぶい黄褐	外面ナデ・マメツ、内面ナデ	口径1/4	角閃石
370	弥・甕	13.0			中・普	にぶい黄橙	外面ナデ、内面ナデ	口径1/4	角閃石
371	弥・甕	15.0			細・普	黄褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/6	角閃石
372	弥・甕	15.4			中・少	オリーブ褐、黄褐	外面ナデ、内面ナデ・指押え	口径1/3	角閃石
373	弥・壷			7.8	中・普	褐灰、ﾆﾌﾞｲ黄橙	外面叩き、内面板ナデ・ナデ	底径1/2	角閃石
374	弥・甕			5.8	微・普	明褐	外面マメツ、内面ナデ、外面に沈線２条	底径3/4	角閃石
375	弥・高杯	26.6	16.0	18.0	微・普	明黄褐	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ、円盤充塡、円形透し穴５個	ほぼ完存	角閃石
376	弥・高杯	26.4	16.4	16.3	中・少、細・普	にぶい褐、にぶい黄褐	杯部外面ﾅﾃﾞ・ｸｽﾞﾘ、内面ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、円盤充塡	体部4/5	角閃石

第91図　３区ＳＤ04出土遺物１（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
377	弥・高杯	31.0			微・普	橙、にぶい黄褐	外面ナデ、内面ナデ・板ナデ	口径1/8	角閃石
378	弥・高杯	32.0			粗・少、中・普	にぶい黄、黄褐	外面口縁ナデ、内面マメツ	口径1/7	角閃石
379	弥・高杯			14.4	微・多、中・少	にぶい黄橙	外面マメツ、脚内面ナデ、円形透し4個	脚部完存	角閃石
380	弥・甑			5.7	細・普、中・少	明褐	外面マメツ、内面ナデ	底部完存	角閃石

第92図　3区ＳＤ04出土遺物２（１／４）

あるが，文様か絵画の一部かも知れない。368は口縁部は頸部から横へ大きく屈曲し，端部は下方に拡張している。全体に摩滅している。373は壷の底部と考えられ，底部は肥厚している。体部外面には叩きが施されている。

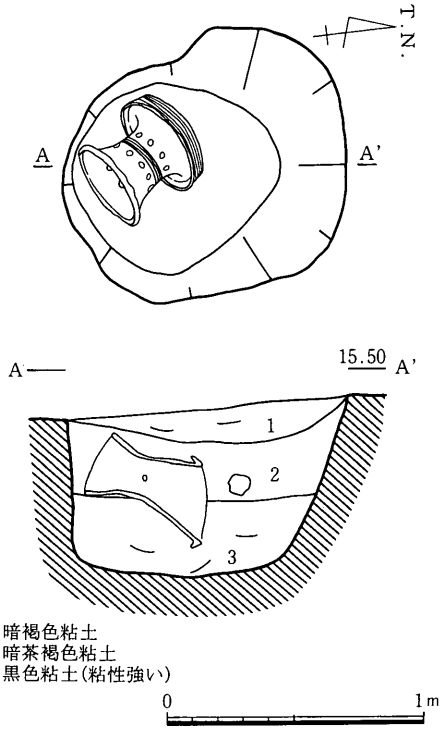
369～372・374は甕である。369は口縁部端部が肥厚している。370は口縁部は鋭く横に屈曲し，端部を下方に拡張させている。体部上部は屈曲して頸部のようになっており，内面を強くナデている。371・372の口縁部は短く鋭く屈曲し，端部を上下に拡張している。374は底部であるが，やや突出気味である。

375～379は高坏である。375は口縁部は坏部から鋭く屈曲して直線的に立ち上がる。脚部は円筒状の脚柱部から大きく真横に開き，脚部の下部は接地している。脚部端部は外側に面を作り，円形の透かし穴が５個ある。全体にナデており，円盤充填である。この高坏は大部分がＳＤ04から出土したが，ＳＤ03から出土したものとも接合している。376は口縁部は坏部から丸みをもって屈曲し，直線的に立ち上がる。坏部は外面はヘラケズリ，内面は摩滅しているが一部にヘラミガキが残っている。脚部はエンタシス状の脚柱部から鋭く屈曲して外側に開いている。脚部端部を強くナデており，脚部は全体に摩滅している。377は口縁部は坏部から鈍い稜を形成して直線的に立ち上がり，端部は丸く収めている。坏部内面に板ナデの痕跡がある。外面はナデている。378は口縁部は坏部から丸みをもって立ち上がり，強い２段のナデを施している。坏部は全体に摩滅している。379は脚部は直線的に開き，円形の透かし穴が４個ある。外面は摩滅しており，内面上半は指による強いナデ，下半は弱くナデている。

380は甕の底部に穿孔して甑としたものである。底部はやや突出しており，中央部に穿孔されている。

SK01（第93図～95図）

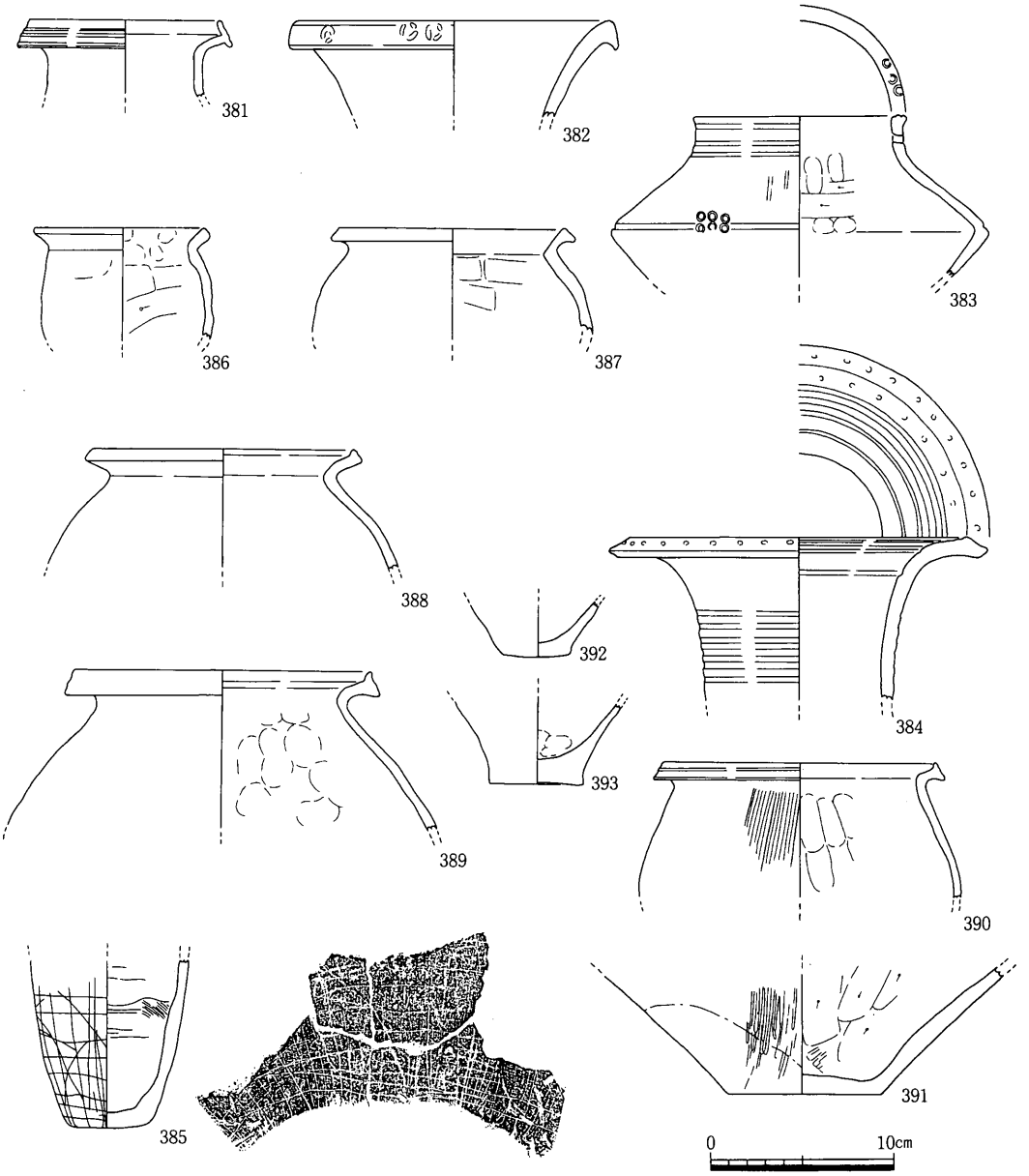
3区の中央やや東寄りで，SD01と重複して検出した土坑である。SD01の調査区南壁部分からSD01上を北に9mの所で，SD01のB－B'ベルトのすぐ南側に位置している。土坑の平面形は一部不正形ながらも，長径1.1m×短径1.0mのほぼ隅丸方形となっている。SD01の埋没後に掘削されており，土坑の南側部分の掘り込みは急で垂直に近くなっている。深さは0.65mで埋土は3層に分かれる。最上層は暗褐色粘土層であるが，土器の破片が密集して堆積していた。中層である暗茶褐色粘土層には完形の大型の器台が1個横向きになって出土した。器台は最下層にまで及んでいるが，それ自身の重みでやや沈んだものと考えられる。中層では器台以外の土器は出土しなかった。最下層の黒色粘土層は極めて粘性が強く，高坏を中心とする土器と全体に線刻を巡らす壷などが出土している。また最下層からは木製品の細片が2，3点出土したが，器種は不明で図化には至らなかった。器台に対応する大型の壷は出土しなかったものの，完形の大型器台や脚部内面に煤のついた高坏や線刻を施した特殊な壷などの出土から考えて，普通の廃棄土坑とは異なる性格の土坑と考えたい。



第93図　3区SK01平・断面図（1／30）

出土遺物のうち383・385・386・391・394～396・399は最下層出土，398は中層出土，これ以外は最上層出土となっている。

381～385・391は壷である。381は口縁部端部を上下に拡張するが，特に上方への拡張が強い。382の口縁部は大きく開き，端部は下方に拡張している。また端面には竹管文を施しているが，原体が割れているのか，3本を組み合わせたのか竹管文は途中で3箇所途切れている。383は下部が欠損しているが，おそらく脚部が付く直口壷である。頸部は短く



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
381	弥・壷	10.4			中・多	オリーブ褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/4	
382	弥・壷	17.0			細・少	灰黄、にぶい黄橙	外面ナデ、内面ナデ	口径1/4	角閃石・雲母
383	弥・壷	11.6			中・普	浅黄	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ、内面ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	口径1/3	
384	弥・壷	18.3			細・普	にぶい黄・明褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/5	角閃石
385	弥・壷			4.2	中・普	褐	外面ナデ、内面板ナデ、外面全体に線刻	底部完存	角閃石・雲母
386	弥・甕	9.3			微・普	にぶい黄橙・黒	口縁ナデ、外面ナデ、内面ケズリ	口縁完存	雲母
387	弥・甕	12.2			中・普	褐灰橙、橙	外面マメツ、内面板ナデ	口径1/4	
388	弥・甕	14.2			中・少	にぶい橙、にぶい褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/6	角閃石・雲母
389	弥・甕	16.2			粗・少	黒褐、にぶい黄褐	外面マメツ、内面指押え	口径1/4	角閃石
390	弥・甕	14.9			中・少	黒褐・にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ナデ	口径1/8	角閃石
391	弥・壷			8.4	粗・多	灰黄褐・黒	外面ミガキ、内面ケズリ	底部完存	
392	弥・甕			3.6	微・少	灰黄褐、褐灰	外面ナデ、内面ナデ	底部完存	角閃石
393	弥・甕			5.1	細・普	にぶい褐、にぶい赤褐	外面ナデ、内面指押え・ナデ	底径1/2	

第94図　3区ＳＫ01出土遺物１（１／４）

上方に立ち上がり，上側に平坦な面を作り竹管文を施す。頸部には弱い凹線が巡り，円形の穿孔が現存で1個ある。体部は扁平な算盤玉形で，中央屈曲部には凹線を1条巡らせ，6個1単位の竹管文を現存で2単位施している。全体に摩滅しているが，体部外面にはヘラミガキが一部見られる。内面はヘラケズリの後にナデている。384は口縁部は頸部から大きく横へ開き，端部を方形に作り出し竹管文を施す。口縁部内面には細かい凹線を巡らす。頸部外面には凹線を巡らし，内・外面ともにナデている。385は上部が欠損しているため全体の形状は不明であるが，下半は徳利のような形で外面に装飾を加えていることから壷と考えた。外面にはヘラ描きで格子状の線刻を全体に巡らせているが，内容は不明である。外面はナデ，内面は板ナデであるが板状工具の端部が当った痕跡が顕著である。底部の立ち上り部は丸みを帯びており，体部中程がやや肥厚する。391は壷の底部で，立ち上り部は鋭くなっている。外面はヘラミガキ，内面はヘラケズリである。

386～390・392・393は甕である。386は口縁部内面を指押さえで整形しており，体部内面はヘラケズリを施している。387は口縁部端部を下方に拡張している。388・389は口縁部端部を上方に拡張している。390は口縁部は短く，端部を上下に拡張している。体部外面にはハケ目を施す。392・393は突出気味の底部である。

394～396は高坏である。394は脚部は円筒状の脚柱部から屈曲して直線的に開く。脚部端部はやや肥厚している。395は坏部上部は欠損しているが，全体に内湾している。坏部外面はヘラミガキ，内面はナデている。脚部は短く「ハ」字形に開き，端部内側を強くナデている。396は円筒状の長い脚柱部から鋭く屈曲して直線的に開き，端部は上方に拡張している。脚柱部外面はハケ目の後にヘラミガキを丁寧に施し，内面はナデている。脚部裾部は外面にヘラミガキを施し，円形の透かし穴が現存で1個ある。また脚部裾部の内面には煤が付着している。

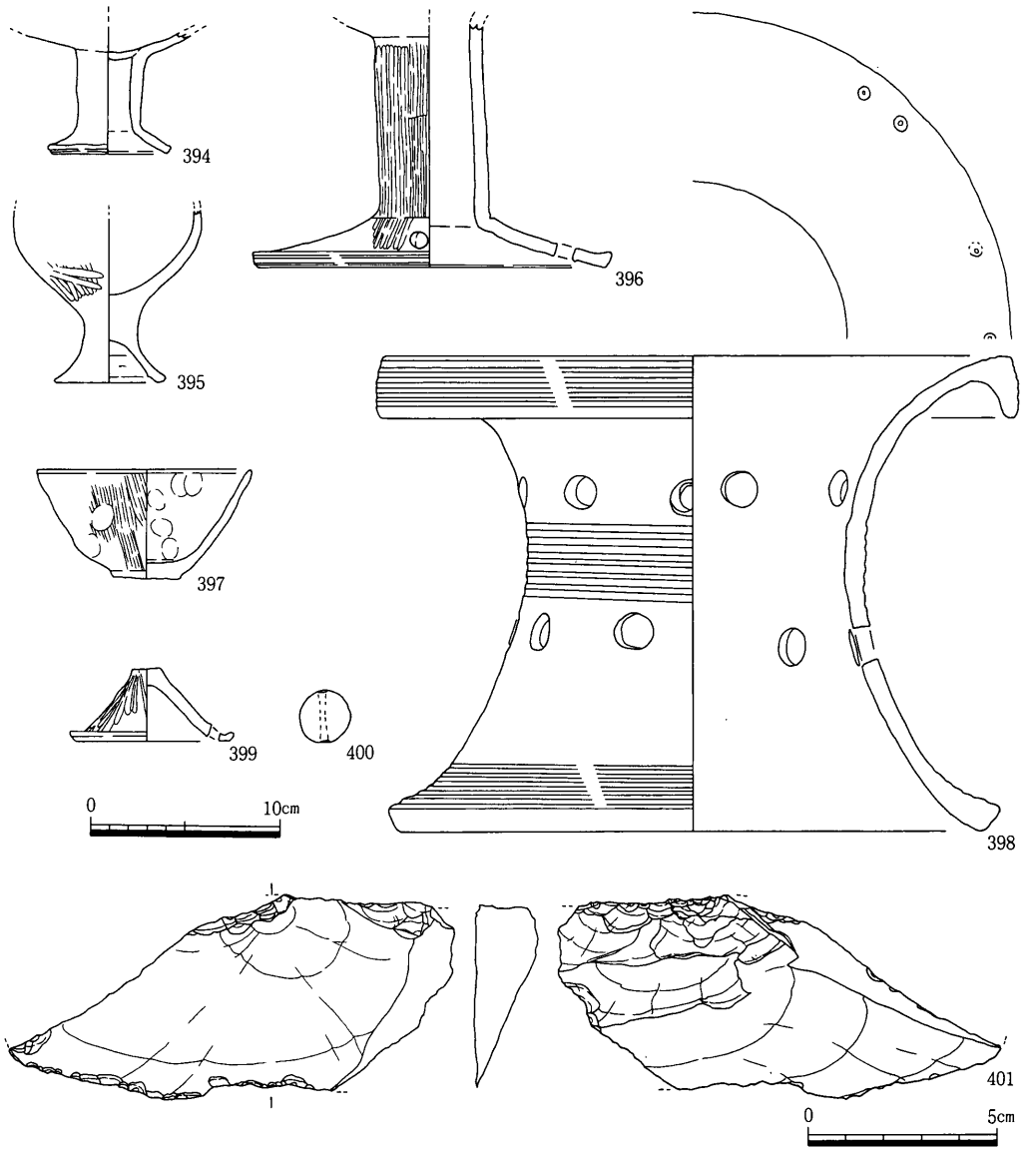
397は小型の鉢で体部は直線的に開き，口縁部がやや肥厚している。体部外面はハケ目の後に指押さえを加えている。底部は突出気味である。

398は大型の器台で，全体に弓なりに反っている。口縁部端部を下方に大きく拡張し，外側に凹線を6条巡らせている。口縁部の上側には竹管文が施されている。脚部は端部は肥厚しており，裾部外面に凹線を6条巡らせている。体部の上下に円形の透かし穴がそれぞれ9個ずつあり，透かし穴と透かし穴の間には沈線を6条巡らせている。全体に摩滅しており調整は不明である。

399は蓋である。直線的に開き，端部は横へ屈曲して斜め上方につまみ上げる。円形の

透かし穴が2個1単位で2単位ある。高坏の脚部を転用したものと思われ，上部をナデて丁寧に仕上げている。外面はヘラミガキを施し，内面はナデている。

400は土玉で，直径2.7cmの球形で中央部に両側から穿孔している。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
394	弥・高杯			6.0	細・少	黄褐	外面ナデ、内面ナデ、円盤充塡	底部完存	角閃石
395	弥・高杯			6.0	中・少、粗・少	にぶい黄褐	杯外面ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ、脚外面ﾅﾃﾞ、内面ｸｽﾞﾘ	脚部完存	角閃石
396	弥・高杯			18.4	微・少	黒褐、黒褐・褐	外面ハケ目→ミガキ、内面ナデ、円盤充塡	底径1/5	
397	弥・鉢	11.2	5.8	3.5	細・普	褐、にぶい黄褐	外面ハケ目、内面ナデ・指押え	口径1/4	
398	弥・器台	33.3	24.9	31.1	中・多	褐・にぶい黄	全体にマメツ	ほぼ完存	角閃石
399	弥・蓋			8.2	微・少	黒、灰黄褐	外面ミガキ、内面ナデ	体部4/5	角閃石・雲母
400	弥・土玉	径2.7			微・普	褐	外面ナデ、両面から穿孔	完存	角閃石

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
401	スクレイパー	12.2	5.1	1.7	63.4	サヌカイト		

第95図　3区ＳＫ01出土遺物２（１／２・１／４）

401はスクレイパーで大型の剥片を使用し，下部に刃部を片側から作り出している。上部は厚くなっており，両側から調整を加えている。

ＳＫ01の遺物は層位的な時期差は認められず，弥生時代後期初頭と考えられる。

ＳＲ01（第96図～第111図）

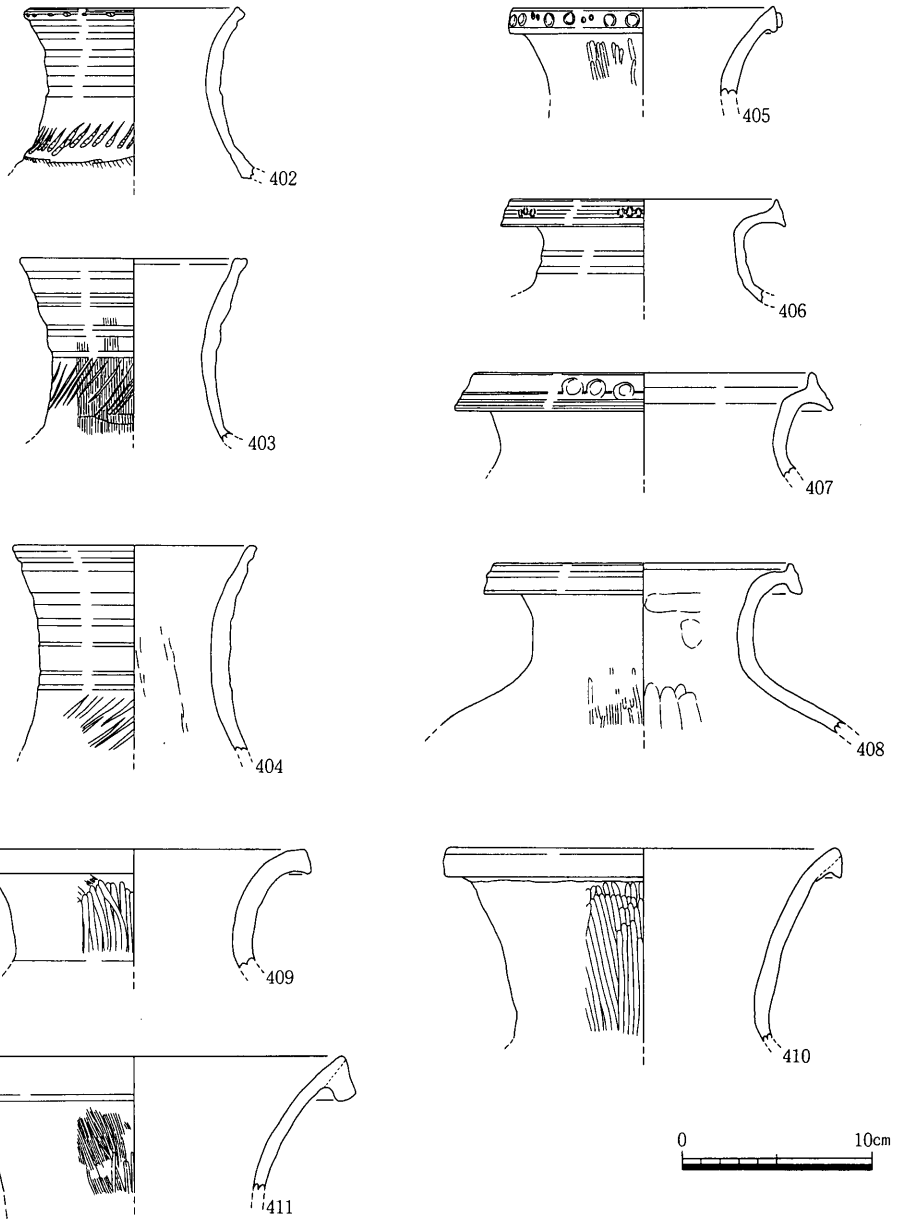
３区の北東部で検出した旧河道で，調査区内では旧河道の南側の肩のみを検出した。河の中央やや北側には中州状の高まりがあり，これを境に北側と南側に河は分岐している。

南側の流れはＳＤ01とＳＤ02との交点部分でこれらの溝を切って東西方向から北西方向に向きを変えている。南側の流れは幅3.5～7.0m，深さは0.5ｍほどで，最下層には粘性の強い黒褐色粘土が堆積している。南側の流れは西側の屈曲部分でＳＤ01とＳＤ02を切っているため，本来これらに属していた土器が西側を中心に多く出土した。しかし東側に向かうほど土器は少なくなるため，本来ＳＲ01に伴う土器は少なかったものと思われる。

北側の流れは北側の肩を検出していないため幅は不明である。河が２つに分岐する部分の北側の部分には，木杭を組み合わせて井堰を構築している。井堰は分岐点にあたる中州状の高まり部分の東側の先端部に，先端を鋭利に尖らせた木杭を地山である青灰色粘土層に縦方向に深く打ちつけて杭列を作っている。杭列は0.5ｍの間隔をあけて東西２列に見られるが，西側の杭列は残りが悪い。そして２列の杭列の間に南北方向の横木を１本渡している。この横木は途中で枝分かれする自然木を利用しており，２又に枝分かれした部分の内側にも杭を打ちつけて横木を固定している。高まりの北側の水が流れる部分の杭の残存状況は悪い。杭の多くは上側が欠損しており下部だけが地山内に残っており，地山に0.2～0.3ｍほど打ちつけている。この北側の流れの埋土は中程で粘土と砂の互層となっており，水が頻繁に流れた痕跡がある。井堰から浮遊したと考えられる杭や木片が井堰の西側に多く見られること，さらに土器が井堰の東側の部分と井堰の内部にあり西側に無いことなどから，井堰の東から西に向かって水が流れていたと考えられる。つまりこの井堰は取水部分に構築されたものと言える。

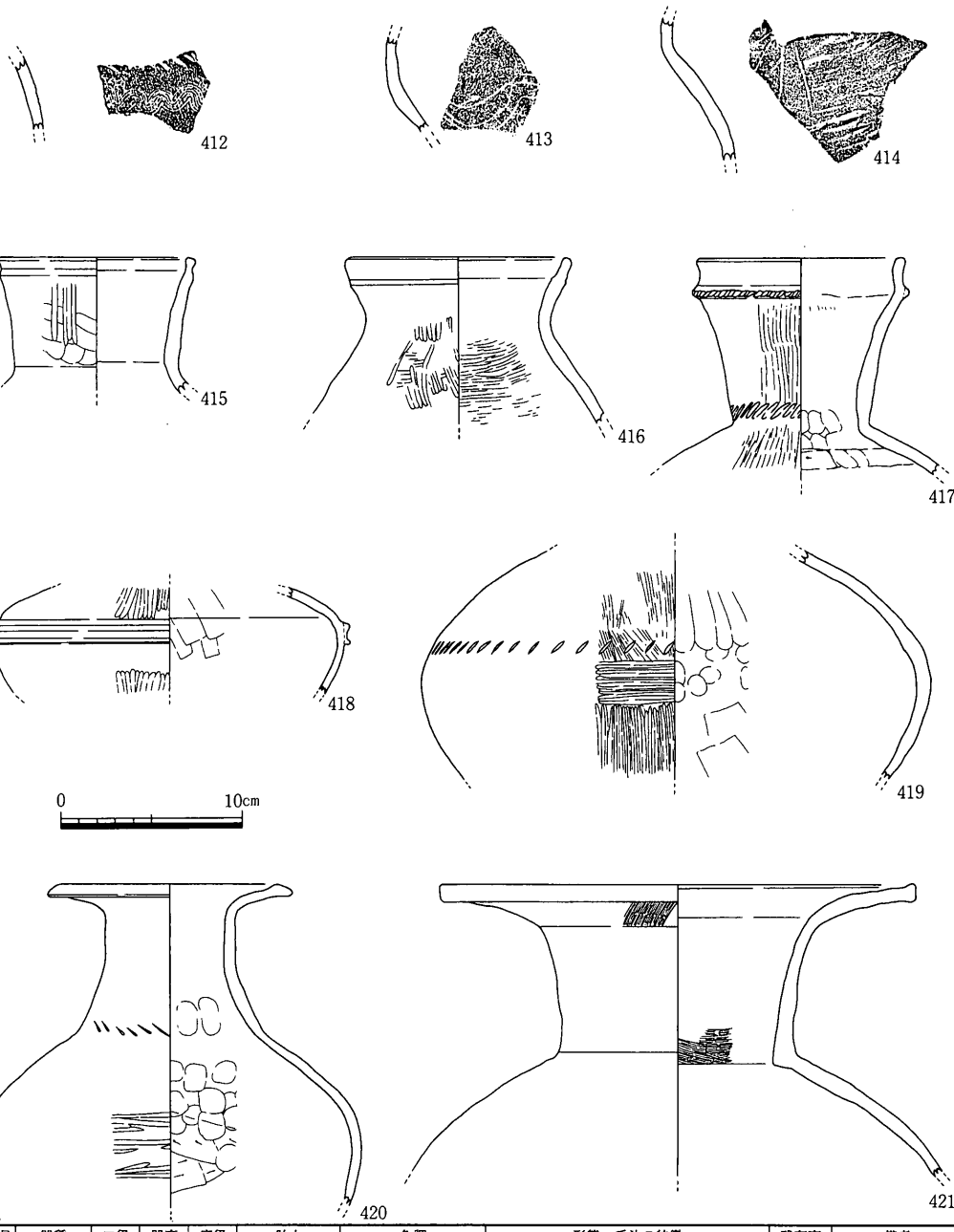
402～421は壷である。402は口縁部端部は外側に面をもち，刻み目が施されている。頸部上半には凹線を巡らせ，下半にはヘラ圧痕文を施す。体部との境部分にはハケ目が見られる。403は口縁部端部は上側に面をもち細い凹線が１条巡る。頸部は上半が肥厚し，全体にハケ目を施した後に上半をナデて凹線を巡らす。404は頸部は全体に外反し上半に凹線を巡らす。405～411は口縁部端部を拡張するものである。405は口縁部端部を下方に拡

第96図　３区ＳＲ01断面図，井堰平・立面図（１／40）



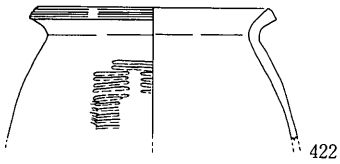
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
402	弥・壷	10.7			細・少	にぶい黄橙・黒	外面ナデ・ハケ目、内面ナデ	口縁完存	角閃石・雲母
403	弥・壷	12.0			微・少	暗灰黄	外面ハケ目→ナデ、内面ナデ	口径1/3	角閃石・雲母
404	弥・壷	12.7			中・少	にぶい黄橙・褐灰	外面ナデ、内面ナデ・絞り目	口径1/4	角閃石
405	弥・壷	13.8			細・多	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ナデ	口径1/4	角閃石・雲母
406	弥・壷	13.9			中・普	にぶい黄橙	外面ナデ、内面ナデ	口径1/3	角閃石・雲母
407	弥・壷	17.8			中・普	にぶい黄橙、灰黄褐	外面ナデ、内面マメツ	口径1/2	雲母
408	弥・壷	15.6			粗・少	にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ナデ・指押え	口径1/2	角閃石
409	弥・壷	18.0			細・少、中・少	にぶい黄褐、灰黄褐	口縁ナデ、外面ハケ目→ミガキ、内面ナデ	口径1/4	角閃石・雲母
410	弥・壷	20.3			微・少	にぶい褐	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ナデ	口径1/3	角閃石・雲母
411	弥・壷	22.0			中・多	浅黄	口縁ナデ、外面ハケ目→ミガキ、内面マメツ	口径1/3	角閃石

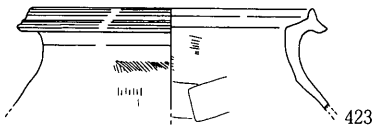
第97図　３区ＳＲ01出土遺物１（１／４）

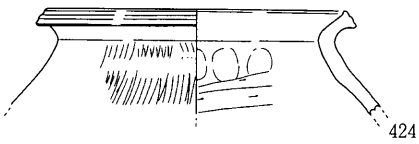


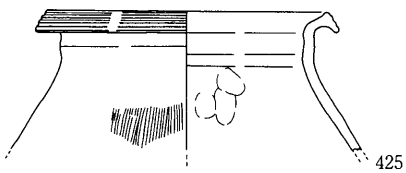
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
412	弥・壷				中・普	黒、にぶい黄褐	外面ハケ目、内面ナデ	体部細片	雲母
413	弥・壷				細・多	褐	外面ナデ、内面ナデ、外面に文様	体部細片	角閃石
414	弥・壷				中・少	にぶい黄褐・黒	外面叩き、内面ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ、外面にﾍﾗ描き文様	体部細片	角閃石・雲母
415	弥・壷	10.8			微・少	灰黄・黒	口縁ナデ、外面指押え・ミガキ、内面ナデ	口径1/2	角閃石・雲母
416	弥・壷	12.0			微・多、中・少	灰黄褐	口縁ナデ、外面ハケ目→ミガキ、内面ハケ目	口径1/3	角閃石・雲母
417	弥・壷	11.5			微・少	にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ・指押え・ｹｽﾞﾘ	口径2/5	角閃石・雲母
418	弥・壷				微・少	黒、黒・にぶい橙	外面ミガキ、内面板ナデ	体部1/3	角閃石
419	弥・壷				中・少	にぶい黄	外面ﾊｹ目・ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・指押え・板ﾅﾃﾞ	体部1/4	角閃石・雲母
420	弥・壷	12.0			粗・少、中・普	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ、内面ｹｽﾞﾘ・指押え	口径1/8	角閃石
421	弥・壷	26.2			中・多、粗・多	明赤褐・灰黄	口縁外面ﾊｹ目、頸部下部ﾊｹ目、その他ﾏﾒﾂ	口径1/2	

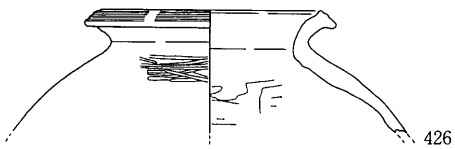
第98図　３区ＳＲ01出土遺物２（１／４）

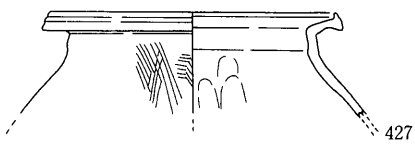

422

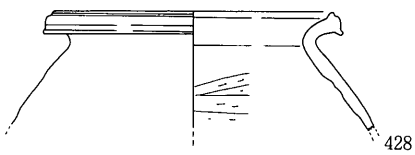

423

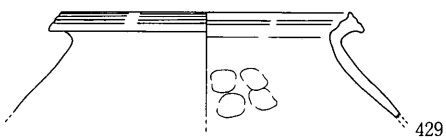

424

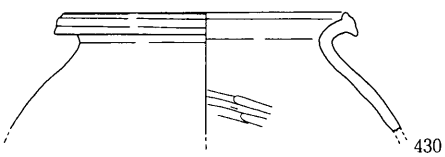

425

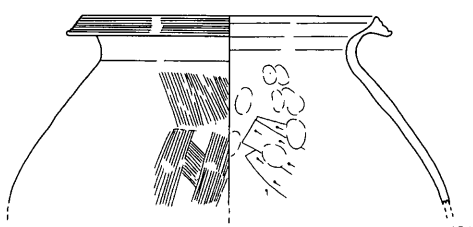

426

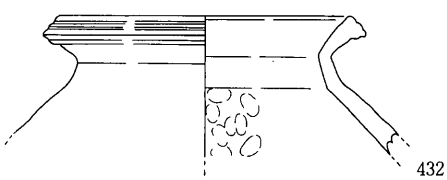

427

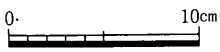

428


429


430


431

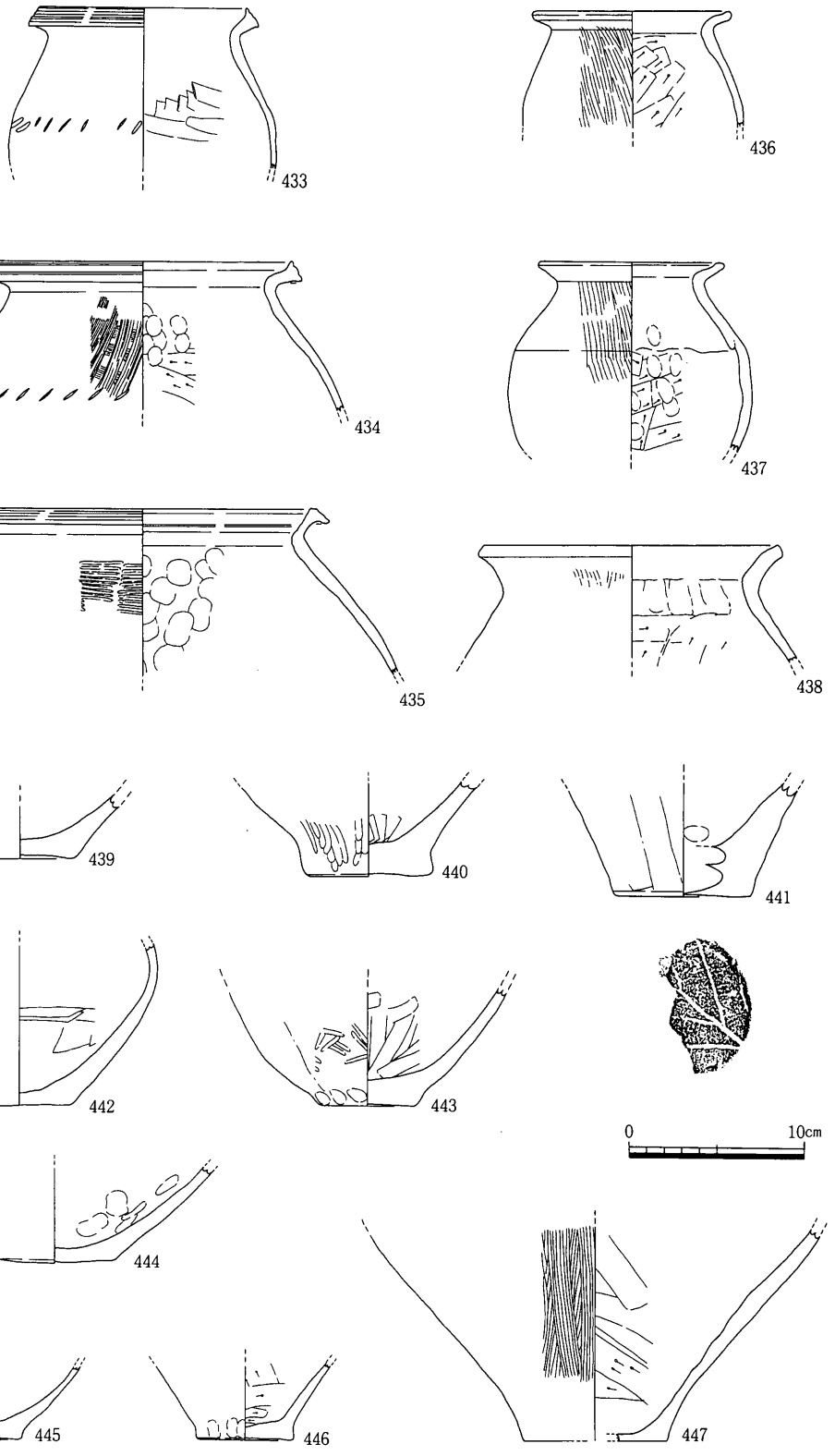

432



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
422	弥・甕	12.2			中・普	暗灰黄・黒褐	口縁ナデ、外面叩き、内面ナデ	口径1/4	角閃石
423	弥・甕	14.8			中・少、細・少	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	口径1/3	角閃石
424	弥・甕	15.6			中・少	にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ハケ目、内面指押え・ケズリ	口径1/4	角閃石・雲母
425	弥・甕	14.8			粗・少、細・少	にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ハケ目、内面指押え、ナデ	口径1/6	角閃石・雲母、内(赤)
426	弥・甕	11.6			中・普	にぶい褐・にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ケズリ	口径3/4	角閃石・雲母
427	弥・甕	15.0			微・少	にぶい黄褐・黒	口縁ナデ、外面ハケ目、内面指押え・ナデ	口径1/6	角閃石・雲母
428	弥・甕	14.8			微・少	黒褐・にぶい褐	口縁ナデ、外面ナデ、内面ケズリ	口径1/4	角閃石・雲母
429	弥・甕	15.0			中・少	ﾆﾌﾞｲ黄橙、ﾆﾌﾞｲ黄褐	口縁ナデ、外面ナデ、内面指押え・ナデ	口径1/5	角閃石・雲母
430	弥・甕	14.7			細・少	橙・黒褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・棒状工具のｹｽﾞﾘ	口径1/4	角閃石
431	弥・甕	15.5			微・普	にぶい褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目、内面指押え・ｹｽﾞﾘ	口径1/4	角閃石・雲母
432	弥・甕	15.4			細・普	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ナデ、内面ナデ・指押え	口径7/8	角閃石・雲母

第99図　3区ＳＲ01出土遺物３（１／４）

張し，外側に円形浮文を2個1単位で貼り付け，その間に竹管文を2個1単位で施す。頸部外面はヘラミガキである。406は口縁部は頸部から大きく屈曲して開き，端部を上下に拡張している。口縁部外面には凹線を施した後に3個1単位の竹管文が現存で2単位見られる。頸部には凹線が2条巡る。407は口縁部端部を大きく上下に拡張し，外面に傾斜する幅広の面を作る。そして端面には3個1単位の竹管文が現存で3単位ある。408は口縁部端部を上下に拡張するが，下側への拡張部分を肥厚させている。体部上部にはヘラミガキが施され，内面は指で縦方向に強くナデている。409は頸部全体が大きく外反し，そのまま口縁部端部に至る。口縁部端部は下方に弱く拡張する。頸部外面にはハケ目の後にヘラミガキを施している。410・411は頸部は長く直線的に外傾し，口縁部端部は下部に粘土を貼り足して下方に拡張させている。410は頸部外面にヘラミガキを丁寧に施し，内面はナデている。411は口縁部端部の下方への拡張部分は方形に肥厚している。頸部外面にはハケ目の後にヘラミガキを施している。412～414は体部の細片であるが，いずれも外面に文様が施されている。412は櫛描き波状文である。413は3本の線が角張ったS字状になっており，中央の線は途中で切れておりやや平行に重ねて続けて引いている。3本線の内側には鋭角に屈曲した線刻の一部が見えるが全体の形は不明である。414は4本の鳥の足のような記号が線刻されている。415は頸部は直線的でそのまま口縁部に至るが，口縁部下を強くナデているため深い凹線が内外に形成されている。頸部外面には指押さえの後にヘラミガキを施している。416も頸部からそのまま口縁部に至り，口縁部を強くナデている。体部上半は張りがなく，外面はハケ目の後にヘラミガキを，内面はハケ目を施している。417は頸部が直線的に開いた後に口縁部が上方に立ち上がるが，口縁部は強くナデているためやや外反している。口縁部の立ち上り部外面には断面方形の刻み目突帯を貼り付けている。頸部外面にはハケ目を施し，下部にはヘラ圧痕文を加えている。内面はナデている。頸部と体部の接合部は細くなっており，体部外面にはハケ目を施す。内面は粘土紐のつなぎ目が残り，一部ヘラケズリを施している。418は体部は扁平で，中央屈曲部に断面三角形の突帯を2条貼り巡らせている。外面にはヘラミガキを施している。419も扁平な体部の壷で，外面中央部には横方向の，下部には縦方向のヘラミガキをそれぞれ施す。上半部はハケ目で，中央やや上側に刻み目を施している。内面上半は指で縦方向に強くナデている。420は内傾気味に屈曲する頸部から口縁部は大きく開き，端部は上方に肥厚させている。体部は張りがあり，外面にはヘラミガキを施す。内面はヘラケズリの後に指押さえを多く行なうが，爪の痕跡が多数残っている。421は頸部立ち上がり部の内面は鋭くなって



第100図　３区ＳＲ01出土遺物４（１／４）

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
433	弥・甕	11.8			細・多	にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ナデ、内面ナデ・板ナデ	口径1/3	角閃石・雲母
434	弥・甕	17.0			微・普	褐灰、ﾆﾌﾞｲ赤褐・灰褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面指押え・ケズリ	口径1/8	角閃石・雲母
435	弥・甕	19.8			中・少、細・少	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面叩き→ﾅﾃﾞ、内面指押え・ﾅﾃﾞ	口径1/2	角閃石・雲母
436	弥・甕	11.0			微・多	にぶい褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ケズリ	口径1/3	角閃石
437	弥・甕	10.4			中・普	ﾆﾌﾞｲ褐、ﾆﾌﾞｲ黄褐・黒	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ナデ・ケズリ	口径1/4	角閃石・雲母
438	弥・甕	16.7			粗・多	にぶい黄橙	口縁外面ﾊｹ目、内面ﾅﾃﾞ、外面ﾏﾒﾂ、内面ｹｽﾞﾘ	口径1/2	角閃石
439	弥・壷			6.1	中・多	浅黄	全体にマメツ	底部完存	
440	弥・壷			7.2	中・普	灰黄、灰黄褐・黒	外面ミガキ、内面ナデ・板ナデ	底部完存	角閃石・雲母
441	弥・壷			7.6	中・少	灰オリーブ・黒	外面板ナデ、内面ナデ、底部外面木の葉圧痕	底径1/2	角閃石・雲母
442	弥・壷			6.0	中・少	ﾆﾌﾞｲ黄褐、ﾆﾌﾞｲ黄橙	外面マメツ、内面板ナデ	底径1/2	角閃石
443	弥・壷			5.5	細・少	にぶい黄褐	外面ミガキ、内面板ナデ	底部完存	角閃石・雲母
444	弥・壷			6.8	細・少	灰黄褐、灰黄	外面ナデ、内面ナデ・指押え	底部完存	角閃石・雲母
445	弥・甕			4.1	微・少	灰黄・黒褐	外面ナデ、内面ナデ	底部完存	雲母、内(赤)
446	弥・甕			5.5	中・多	にぶい褐・黒褐	外面マメツ、内面ケズリ	底部完存	角閃石・雲母
447	弥・甕			8.2	微・少	黒褐・にぶい褐、赤褐	外面ハケ目、内面ケズリ・板ナデ	底径1/3	角閃石・雲母、内(赤)

3区ＳＲ01出土遺物４観察表

おり，頸部を後から貼りつけた痕跡がある。

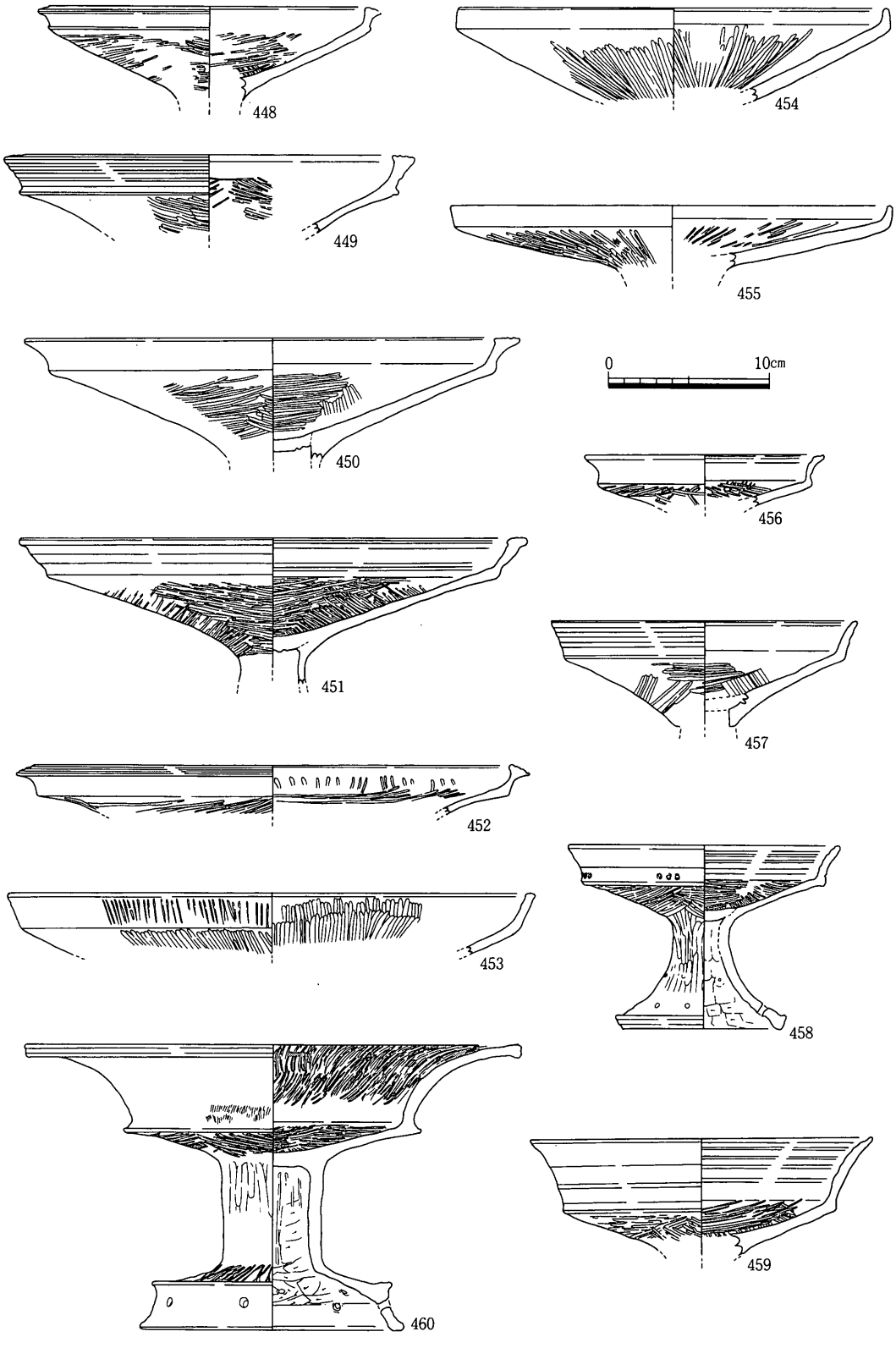
439～444は壷の底部と考えられるものである。440の底部は突出している。441は底部は非常に厚く，底部外面には木の葉の圧痕が付着している。443は突出気味の底部で，体部外面にはヘラミガキを，内面には板ナデを施している。

422～438は甕である。422は口縁部端部は肥厚し，体部外面に叩きを施す。423～435は口縁部端部を拡張するものである。423は口縁部は短く鋭く屈曲し，端部を上下に拡張する。体部外面はハケ目を施し，内面は口縁部直下はハケ目の後にナデ，その下はヘラケズリを施している。424は体部外面にハケ目を施した後に一部ナデている。内面は上部にヘラケズリが見られる。425は口縁部端部は下方へ大きく拡張し，口縁部直下を強くナデて頸部状になっている。体部外面にはハケ目が見られる。口縁部内面から体部上部にかけて赤色顔料が若干付着している。426は体部上半は大きく張って肥厚している。外面上部にはヘラミガキが，内面にはヘラケズリがそれぞれ施されている。427は口縁部直下が頸部状に立ち上り，体部外面には粗いハケ目を施す。428は口縁部端部を上下に拡張し，端面の上下部分にそれぞれ凹線を施すため，中央部分が突出している。体部内面は強くヘラケズリを施し，器壁に凹凸が顕著である。429は口縁部内面を２段にナデている。430は体部内面を棒状工具で削っている。431は口縁部は丸みをもって屈曲するが，強くナデているため器壁が非常に薄くなっている。体部はあまり張りがなく，外面にはハケ目を，内面には指押さえとヘラケズリを施している。432は口縁部端部を下方に拡張するが，拡張部の内側に細い凹線を１条巡らせている。体部の器壁は肥厚している。433は体部の張りはなく，中央やや上側にヘラ圧痕文を施す。434は体部外面はハケ目，内面はヘラケズリとなっている。435は口縁部端部を下方へ拡張し，口縁部内面を２段にナデている。体部外面

は叩きの後にナデている。436は体部外面は口縁部直下からハケ目を施し，内面は全体にヘラケズリを施す。437は下半は欠損しているものの，体部最大径は中央部にある。体部外面は口縁部直下からハケ目を施す。内面には粘土紐の接合痕が見られ，中央部以下にヘラケズリを施している。438は口縁部は体部に比べ肥厚しており，外面にハケ目が残る。内面の口縁部直下には指押さえによる整形痕が残る。

445～447は甕の底部と考えたものである。447は壷か鉢の可能性もある。外面にはハケ目を施し，内面には強くヘラケズリを施す。

448～476は高坏である。448～452は口縁部が短く立ち上がり，強いナデのため口縁部立ち上り部外面には鋭い稜を形成している。口縁部端部は内・外側に拡張し，上側に幅広の面を作るものである。448は坏部内・外面はヘラミガキを施し，円盤充填となっている。口縁部端面は傾斜している。449は口縁部外面と端面に凹線を巡らせ，屈曲部外面は突帯状に突出している。坏部内・外面には多角形のヘラミガキを施す。450も坏部内・外面に多角形のヘラミガキを施している。円盤充填である。451は口縁部外面を2段にナデている。坏部内・外面にはヘラミガキを格子状に施している。円盤充填である。452は口縁部端面は傾斜し，口縁部内面に間隔の開いた縦方向のヘラミガキを施している。453～455は口縁部が坏部から直線的に立ち上がるものである。453は口縁部と坏部の内・外面にヘラミガキを放射状に施すが，口縁部外面のヘラミガキは間隔が開いている。口縁部端部には赤色顔料が付着している。454・455は口縁部はほぼ上方に立ち上がり，坏部内・外面にヘラミガキを放射状に施す。456～460は口縁部が外反するものである。456は口縁部は強く外反し，内面上部に2段の強いナデを施す。坏部は内・外面に多角形のヘラミガキを施す。457は口縁部は緩く外反し，外面に凹線が巡る。坏部の外面には多角形の，内面には格子状のヘラミガキをそれぞれ施す。458は口縁部内面には強いナデによる凹線がある。口縁部立ち上り部外面には3個1単位の竹管文が現存で3単位ある。坏部は外面に多角形の，内面には格子状のヘラミガキを施している。脚部は緩やかに開き，端部を肥厚させ外面をナデている。脚部外面はヘラミガキの後に裾部をナデている。内面上半は板ナデ，下半はヘラケズリとなっている。脚部には円形の小さな透かし穴が上段に3個，下段に3個現存している。459は口縁部は長く外反し，内面に強いナデによる凹線が形成されている。坏部外面はヘラケズリの後にヘラミガキを格子状に施している。内面はハケ目の後にヘラミガキを格子状に施している。脚部は欠損しているが差し込み法により接合していると考えられる。460は口縁部は長く大きく外反して開く。口縁部端部は下方に肥厚させており，

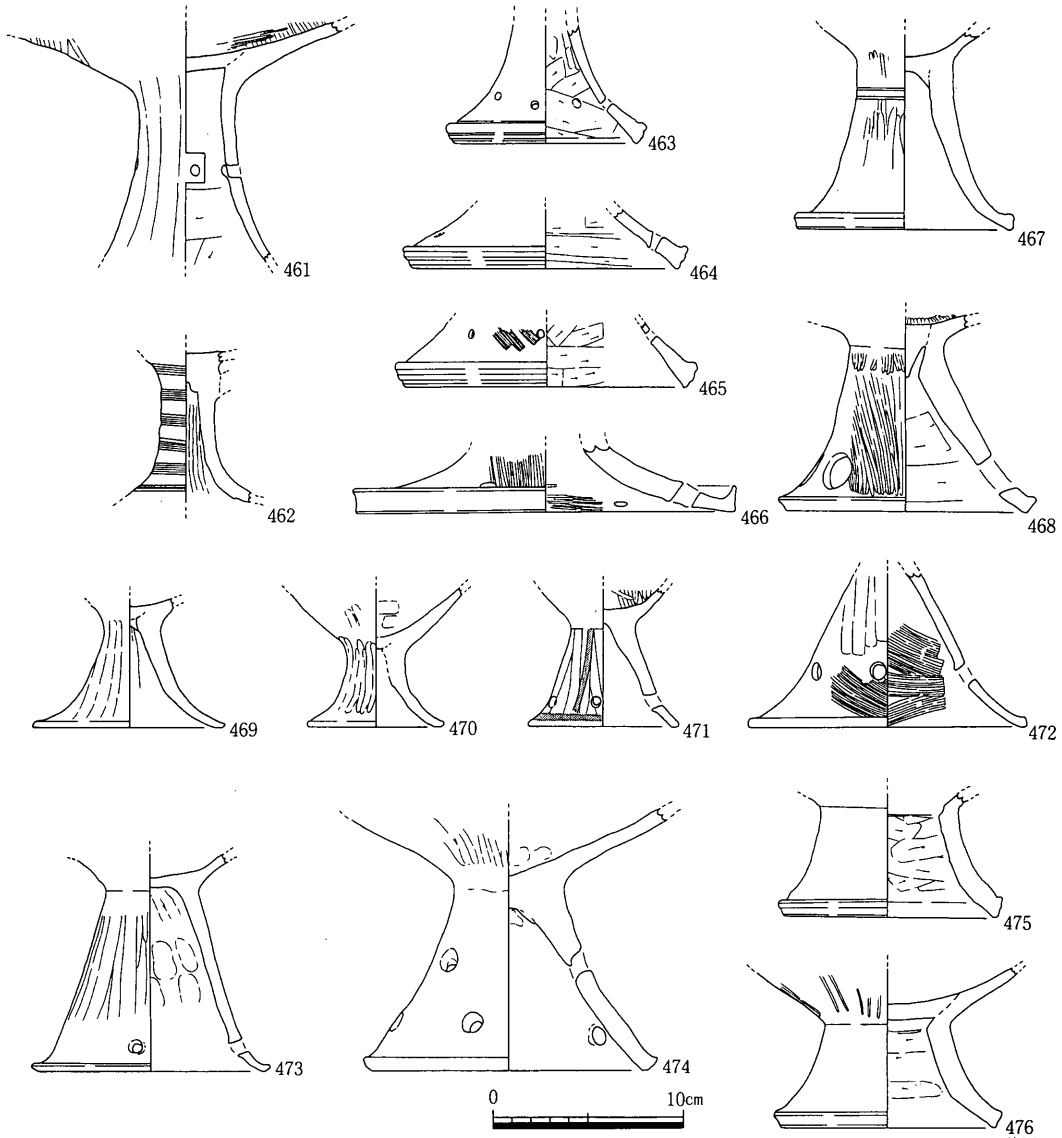


第101図　３区ＳＲ01出土遺物５（１／４）

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
448	弥・高杯	19.8			微・多、細・普	にぶい黄橙	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ミガキ	口径1/5	角閃石・雲母
449	弥・高杯	25.6			細・少	黒褐	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ミガキ	口径2/3	角閃石
450	弥・高杯	30.8			中・少	にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ、内面ﾐｶﾞｷ、円盤充填	口径1/8	角閃石・雲母
451	弥・高杯	31.2			細・多	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ、内面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、円盤充填	杯部1/2	角閃石
452	弥・高杯	29.6			中・少	にぶい褐・黒褐	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ミガキ	口径1/5	角閃石・雲母
453	弥・高杯	32.0			微・少	にぶい橙	外面ミガキ、内面ミガキ、口縁端(赤)	口径1/8	角閃石・雲母
454	弥・高杯	26.5			細・普	にぶい黄橙・黒	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ミガキ	口径1/7	角閃石・雲母
455	弥・高杯	27.6			細・普	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ミガキ	口径1/8	角閃石・雲母
456	弥・高杯	15.0			細・少	にぶい黄	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ミガキ	口径3/5	角閃石
457	弥・高杯	19.0			微・少	にぶい黄	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ミガキ、円盤充填	口径1/4	角閃石・雲母
458	弥・高杯	16.9	11.3	9.9	微・少	にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、杯:ﾐｶﾞｷ、脚外面ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・ｸｽﾞﾘ、円盤充填	口径1/2・底径1/2	角閃石・雲母
459	弥・高杯	21.1			微・多	にぶい黄橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ｸｽﾞﾘ→ﾐｶﾞｷ、内面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、差し込み法	杯部1/2	角閃石・雲母
460	弥・高杯	30.6	17.7	16.1	細・少	にぶい赤褐、橙	杯外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、内面ﾐｶﾞｷ、脚外面ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面ｸｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ、円盤充填	脚部完存杯部1/2	角閃石・雲母、外内(赤)

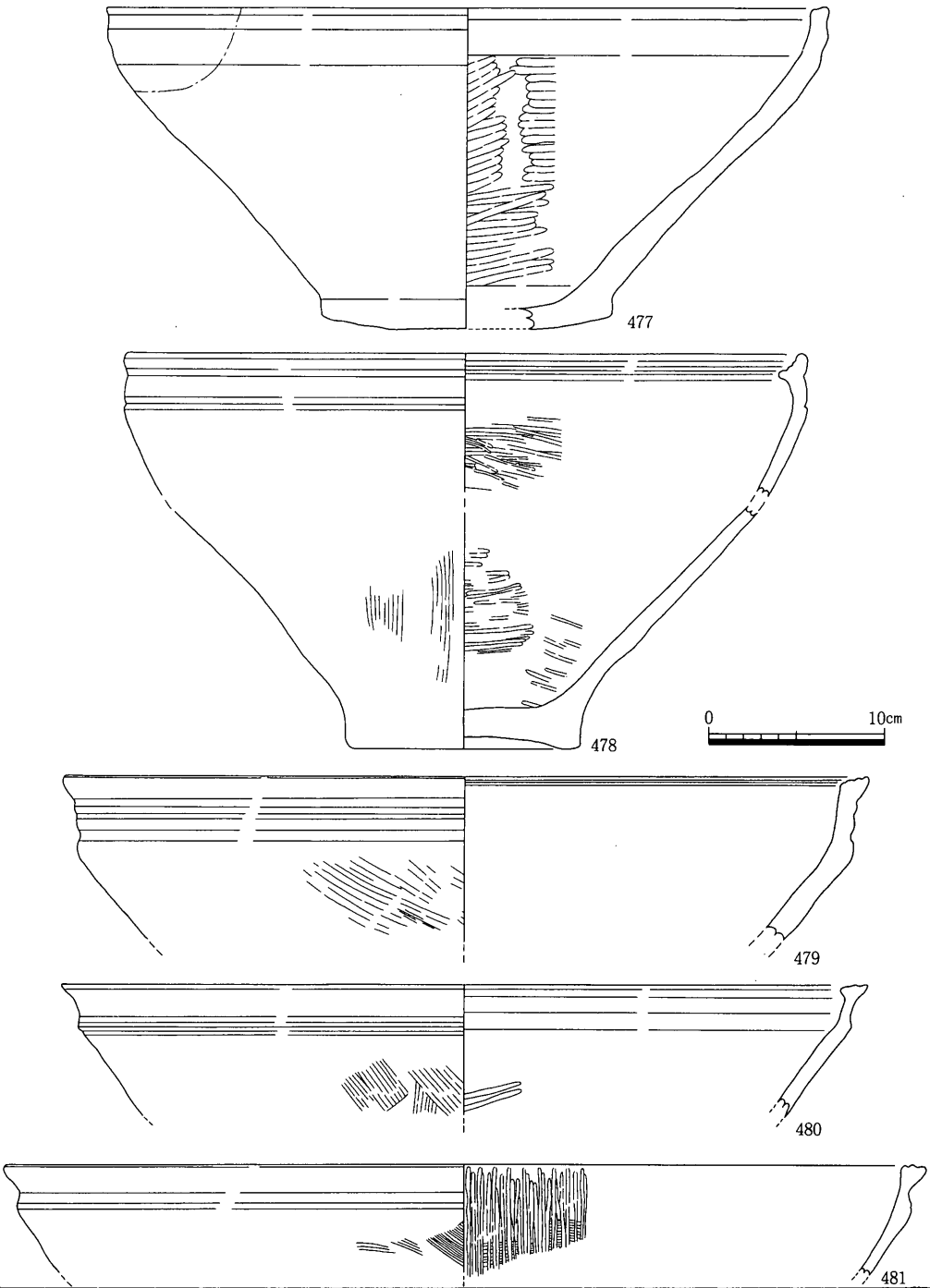
3区ＳＲ01出土遺物５観察表

端面には赤色顔料が付着している。口縁部外面はハケ目の後にナデており，内面は細かいヘラミガキを放射状に丁寧に施し，口縁部立ち上り部内面を強くナデている。口縁部内面の上部には赤色顔料による指の先で付けたような円形の施文がある。口縁部立ち上り部外面は大きく突出し，坏部は外面が多角形の，内面が格子状のヘラミガキをそれぞれ丁寧に施す。脚部は円筒状の脚柱部から２段に鋭く屈曲して端部に至る。屈曲部は突帯状に外側に大きく突出している。脚柱部の外面は太いヘラミガキの後にナデており，内面はヘラケズリとなっている。脚裾部の外面にはヘラミガキを間隔を開けて施しているが，一部は螺旋状になっている。内面はヘラケズリである。脚部端部は幅広で丁寧にナデており，外面には赤色顔料を塗っている。脚部裾部と端部には円形の透かし穴が交互に７個ずつある。全体に非常に丁寧な作りで装飾を施した高坏である。461は口縁部と脚部下半は欠損している。坏部内面は格子状のヘラミガキである。脚部外面は板ナデで面取りを行ない，内面はヘラケズリとなっている。脚部には円形の透かし穴が４個あり，円盤充填である。462は脚柱部のみであるが，外面には５～６条１単位の沈線が６単位巡っている。内面には絞り目がある。463～468は脚部端部を拡張するものである。463は脚部端部直上に凹線を１条巡らす。外面はナデ，内面はヘラケズリで円形の透かし穴が現存で５個ある。464・465は内面ヘラケズリで，円形の透かし穴が両者とも２個現存している。465の外面はハケ目の後にナデている。466は脚部端部を上方へ大きく拡張し，外側に面を作っている。外面はヘラミガキ，内面にはハケ目が施されている。円筒状あるいはエンタシス状の脚柱部が付くものと思われる。467は脚部は下部で横に開く。外面はヘラミガキの後に上部に沈線を２条施している。内面はナデており，円盤充填である。468は脚部は直線的に開き，外面はヘラミガキ，内面はヘラケズリを施している。大きな円形透かしが２個並列して現存



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
461	弥・高杯				微・普	にぶい褐	杯ﾐｶﾞｷ、脚外面板ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ、円盤充塡	全体2/3	角閃石・雲母
462	弥・高杯				微・少	にぶい黄	外面ﾅﾃﾞ、内面しぼり目、脚上面に把手剝離痕	脚柱完存	角閃石・雲母
463	弥・高杯			9.6	細・少	褐	外面ナデ、内面ケズリ	脚部2/3	角閃石
464	弥・高杯			13.8	細・普	にぶい黄褐、にぶい褐	外面ナデ、内面ケズリ	脚部1/2	角閃石
465	弥・高杯			14.7	中・少、細・普	にぶい黄褐	外面ハケ目→ナデ、内面ケズリ	脚部1/2	角閃石
466	弥・高杯			20.0	中・普	にぶい褐・褐・黒	外面ミガキ、内面ハケ目	脚部完存	角閃石・雲母
467	弥・高杯			11.0	微・多、細・普	にぶい黄橙	外面ミガキ、内面ナデ	脚部1/6	角閃石・雲母
468	弥・高杯			12.7	粗・少	灰黄	外面ミガキ、内面ケズリ・ナデ、円盤充塡	脚部1/2	角閃石・雲母
469	弥・高杯			10.1	細・普	褐灰	外面板ナデ、内面ナデ、円盤充塡	脚部完存	角閃石
470	弥・高杯			7.2	微・普	にぶい褐	外面ﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	脚部完存	角閃石・雲母
471	弥・高杯			8.0	中・普	にぶい黄褐	杯外面ﾅﾃﾞ、内面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、脚板ﾅﾃﾞ	脚部完存	角閃石、脚外面(赤)
472	弥・高杯			14.6	細・普	にぶい黄褐	外面板ナデ・ハケ目、内面ハケ目→ナデ	脚部1/8	角閃石・雲母
473	弥・高杯			11.8	細・普	灰黄褐、ﾆﾌﾞｲ黄橙・褐灰	外面板ナデ→ミガキ、内面指押え・ナデ	脚部4/5	角閃石
474	弥・高杯			14.4	中・多、粗・普	橙・灰褐	杯外面ﾐｶﾞｷ、内面ﾏﾒﾂ、脚外面ﾏﾒﾂ、内面ﾅﾃﾞ	脚部1/5	角閃石・雲母
475	弥・高杯			11.0	細・多	褐灰	外面上半マメツ・下半ナデ、内面ケズリ	脚部3/4	角閃石・雲母
476	弥・高杯			11.0	細・少	黒、にぶい黄橙・黒	杯：外面ミガキ→ナデ・内面ナデ　脚：外面ナデ・内面ケズリ・ナデ　円盤充塡	脚部1/3	角閃石・雲母

第102図　３区ＳＲ01出土遺物６（１／４）



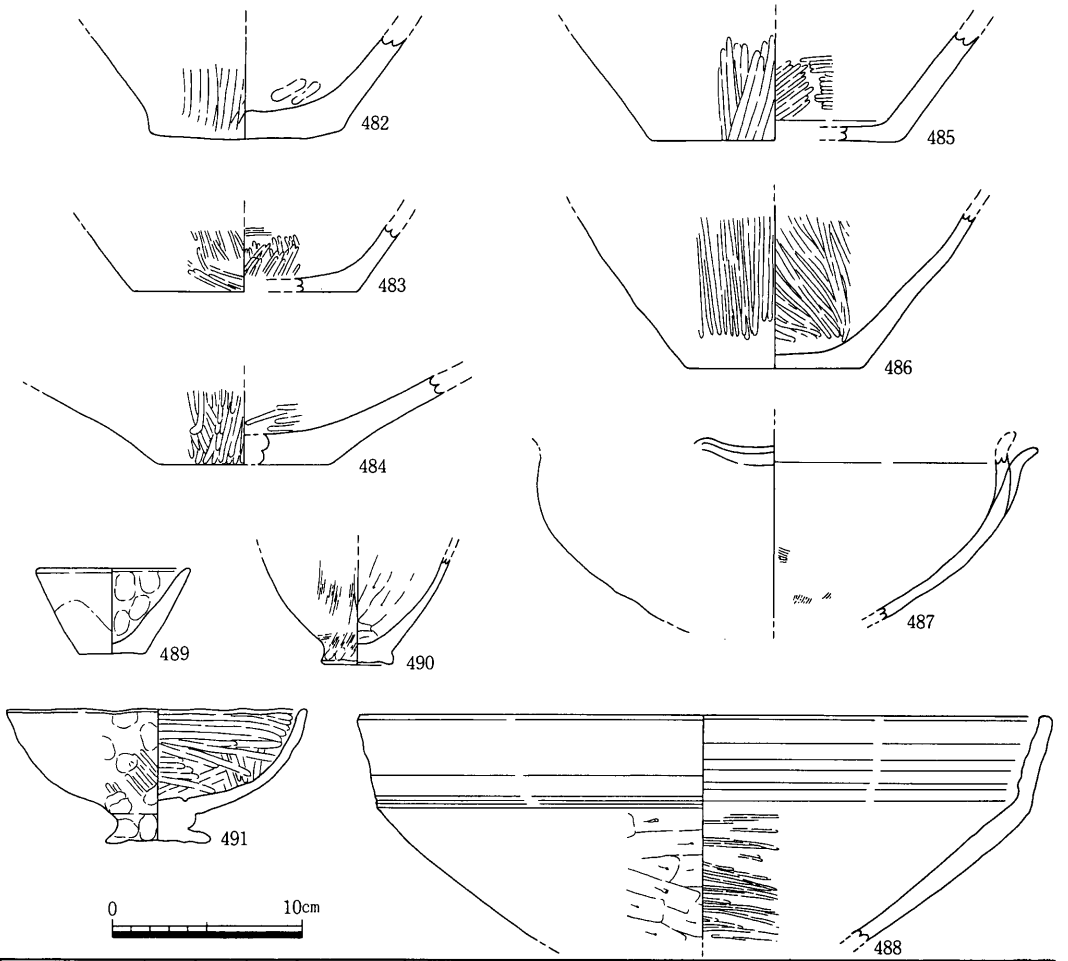
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
477	弥・鉢	41.0	17.8	16.5	粗・普、中・多	灰黄	口縁ナデ、外面ナデ、内面ミガキ	口径1/3	
478	弥・鉢	38.3	(22.5)	13.4	中・多	橙	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目、内面ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ	口径1/3	内(赤)
479	弥・鉢	45.8			微・多	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ハケ目、内面ナデ	口径1/12	角閃石・雲母、内(赤)
480	弥・鉢	46.0			中・普	黄灰・黒褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ目→ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ→ﾐｶﾞｷ	口径1/5	角閃石・雲母
481	弥・鉢	51.7			中・普	にぶい黄褐	外面ナデ・ハケ目、内面ハケ目→ミガキ	口径1/12	角閃石・雲母

第103図　３区ＳＲ01出土遺物７（１／４）

しており，円盤充填となっている。469は脚部は外反しながら開き，外面には板ナデによる面取りを行なっている。円盤充填である。470は脚部は外反して開き外面にはヘラミガキを施している。471は脚部は内面に凹凸があるもののほぼ直線的に開き，脚部端部を強くナデている。外面は板ナデによる面取りの後に，縦方向と端部に横方向に赤色顔料で施文している。坏部内面はハケ目の後にヘラミガキを施している。472は脚部上部が若干内湾している。外面の上部は板ナデ，下部はハケ目を施し，内面には全体にハケ目を施す。円形の透かし穴が現存で2個ある。473は脚部端部が横へ開く。外面には板ナデによる面取りの後にヘラミガキを加えている。内面上部には絞り目と指押さえ痕が残る。円形の透かし穴が4個ある。474は脚部は直線的に開き，円形の透かし穴が上部に2個，下部に2個現存する。坏部外面に一部ヘラミガキが残る他は摩滅が著しい。475は脚部は短いが器壁は厚く安定している。外面はナデており，内面には全体にヘラケズリを施す。476は脚部下半で弱く屈曲する。外面はナデで，内面はヘラケズリである。坏部外面はヘラミガキの後にナデており，内面にはナデの凹凸が残る。円盤充填となっている。475・476ともに壷か鉢の脚部の可能性もある。

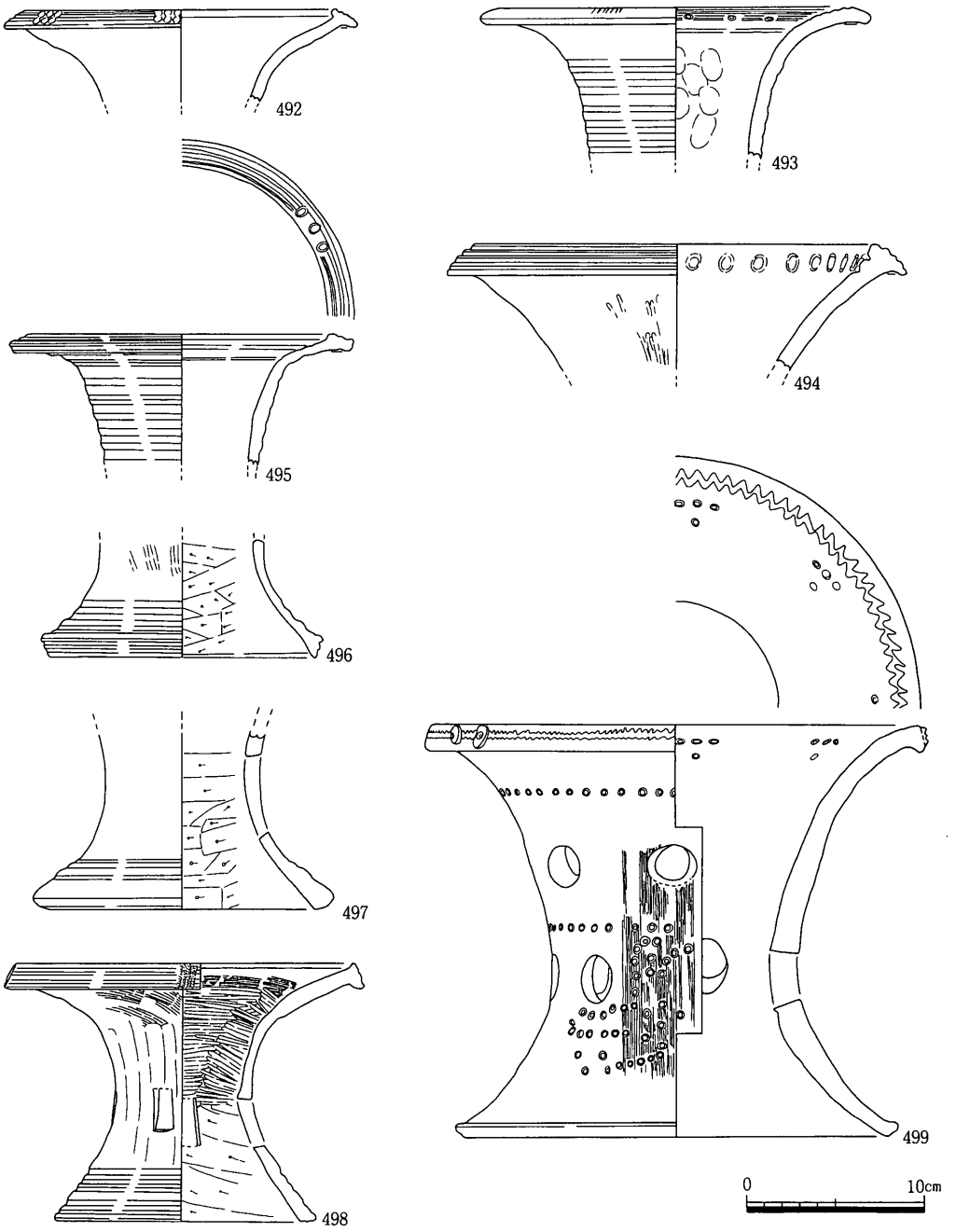
477～491は鉢である。 477は体部は斜め上方に直線的に立ち上り，口縁部は直立して上側に平坦な面をもつ。口縁部外面を2段にナデており，凹線が形成されている。底部は突出しておりやや安定が悪い。外面はナデており，体部内面にはヘラミガキを施している。478は体部は直線的に開く。口縁部は内湾しており，端部を内・外に拡張し，内傾する面を作り凹線を巡らす。また口縁部外面には間隔の開いた細かい凹線を2条巡らせている。体部外面の上半はナデており下半にはハケ目を施している。内面はハケ目の後にヘラミガキを施している。底部は上げ底で高台状になっている。体部の内面には赤色顔料が少々付着している。479は口縁部はほぼ直立し，端部は上面に緩く内傾する面を作り沈線を3条施す。口縁部外面には凹線が3条巡り，体部外面には粗いハケ目を施す。内面に赤色顔料が微量付着している。480は口縁部は短く鋭く立ち上り，内・外面を強くナデている。口縁部端部は内・外に拡張し上側に面を作り，凹線を巡らす。体部外面はハケ目の後にナデている。481は口縁部は短く口縁部外面を強くナデることによって，端部を外側に拡張している。体部外面にはハケ目を施し，内面は口縁部以下にハケ目の後にヘラミガキを施している。482～486は大型の鉢の底部である。482の内面がナデて指押さえを施している他は，内・外面にヘラミガキを丁寧に施している。また482～486はいずれも内面に赤色顔料が付着している。487は扁平なボウル状の体部に注ぎ口が1箇所付く。体部内面はハケ目

の後にナデている。488は体部から口縁部は鋭く屈曲して直線的に立ち上がる。口縁部内面を強くナデており，内面には凹線が形成されている。体部外面にはヘラケズリを，内面にはヘラミガキを施している。口縁部には注ぎ口と思われる突出部分がある。489は体部は直線的に開きそのまま口縁部端部に至る。490は底部は突出し，指押さえにより整形している。体部外面にはハケ目を施し，内面にはヘラケズリを施している。491は椀形の体部に不整形に突出する脚部をもつ。体部は内・外面にヘラミガキを施し口縁部はややいびつである。黒色土器の椀のようである。底部は指押さえにより乱雑に脚部を作っている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
482	弥・鉢			10.0	中・多	黄灰・黒褐、にぶい黄	外面ハケ目、内面指押え・ナデ	底部完存	角閃石・雲母、内(赤)
483	弥・鉢			11.8	微・少	赤、黒	外面ミガキ、内面ミガキ	底径1/2	角閃石・雲母、内(赤)
484	弥・鉢			9.0	中・普	にぶい赤褐、灰黄褐	外面ミガキ、内面ミガキ・ナデ	底径2/5	角閃石・雲母、内(赤)
485	弥・鉢			13.2	細・少	灰黄褐・黒褐、黒	外面ミガキ、内面ミガキ	底径1/6	角閃石・雲母、内(赤)
486	弥・鉢			9.2	中・普	灰黄褐・赤橙、灰・黒	外面ミガキ、内面ミガキ	底部完存	内(赤)
487	弥・鉢				微・普	黄褐	外面ナデ、内面ハケ目→ナデ、注ぎ口1か所	全体1/6	角閃石・雲母
488	弥・鉢	36.2			粗・多	にぶい褐	口縁ナデ、外面ケズリ、内面ミガキ	口径1/10	角閃石
489	弥・鉢	8.2	4.5	3.4	中・少	にぶい褐、黒褐・灰黄褐	外面ナデ、内面指押え	底径3/4	角閃石・雲母
490	弥・鉢			3.7	微・多、細少	にぶい黄橙	外面ハケ目・指押え、内面ケズリ	底部完存	角閃石・雲母
491	弥・鉢	15.7	6.8	5.5	微・少	黒、黄灰・黒褐	外面指押え・ミガキ、内面ミガキ	口径1/2	角閃石・雲母

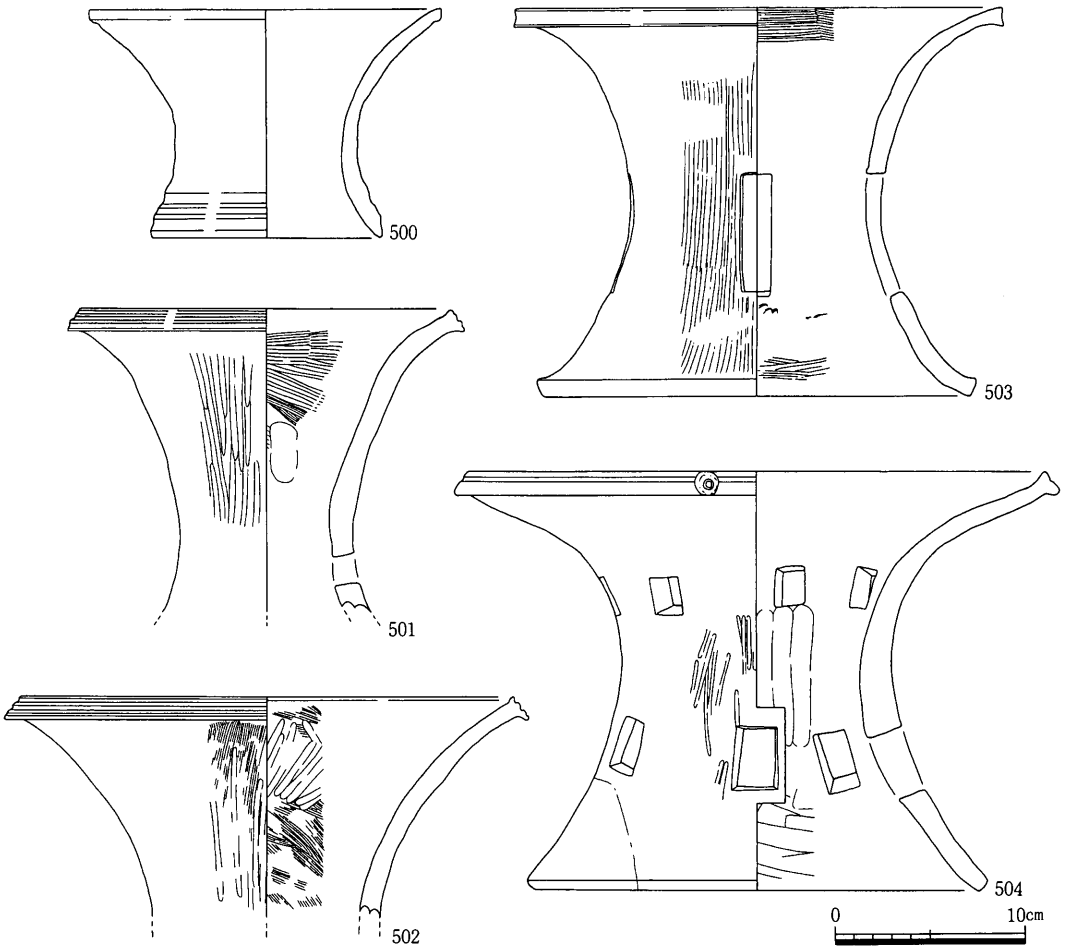
第104図　3区ＳＲ01出土遺物８（１／４）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
492	弥・器台	17.4			細・少	橙・にぶい橙	外面ナデ、内面ナデ	口径1/4	角閃石
493	弥・器台	19.9			中・少	にぶい黄橙、灰黄褐	外面ナデ、内面ナデ・指押え	口径1/4	角閃石・雲母
494	弥・器台	22.6			中・多	明褐、にぶい褐・灰褐	外面ミガキ、内面マメツ	口径1/2	角閃石
495	弥・器台	16.8			中・少	にぶい黄褐・黒	外面ナデ、内面ナデ	全体2/3	角閃石・雲母
496	弥・器台			15.0	中・少	にぶい橙	外面ハケ目→ナデ、内面ケズリ	底径1/2	角閃石・雲母
497	弥・器台			15.0	中・普、粗・少	灰黄、にぶい黄橙	外面ナデ、内面ケズリ	底径1/3	角閃石
498	弥・器台	18.9	14.5	14.3	微・多	にぶい褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ・板ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ、内面ﾊｹ・ｹｽﾞﾘｰ→ﾐｶﾞｷ	全体3/4	角閃石・雲母
499	弥・器台	27.7	22.9	24.0	細・普	にぶい黄橙	外面ナデ・ハケ目、内面ナデ	全体3/4	角閃石

第105図　3区ＳＲ01出土遺物９（１／４）

492～504は器台である。492は口縁部端部を拡張し，傾斜した幅広の面を作り，6個1単位の竹管文を現存で2単位施している。493は体部からそのまま外反して口縁部に至り，端部は上側をナデて方形に仕上げている。口縁部内面には細い凹線を6条巡らせており，その後に竹管文を施す。端部外面にはヘラ描きで7本1単位の施文を施す。体部外面には現存で凹線が7条巡っている。494は口縁部は直線的で，端部を下方に拡張している。口縁部内面には竹管文を巡らせている。495は口縁部端部を全体に方形に肥厚させている。端部上面には3個1単位の竹管文を施している。体部外面には凹線が現存で8条巡る。492～495はあるいは壷になる可能性もある。496は脚部端部を拡張し、外側に面を作り凹線を巡らす。また脚部外面にも凹線を巡らしている。外面はハケ目の後にナデ，内面にはヘラケズリを施す。体部の欠損部分に透かし穴の痕跡が2箇所ある。497は脚部端部は肥厚しており，脚部外面に凹線を3条巡らせている。内面はヘラケズリである。長方形の透かし穴の一部が2箇所認められる。498は全体に弓なりに反っているが，脚部付近は直線的になっており，口径が底径を上回っている。口縁部端部は上下に拡張しており，端面には板状工具の小口部分の圧痕により施文している。脚部の外面には凹線を巡らせている。外面はハケ目の後に，中央部以下に板ナデによる面取りを行なっている。内面は上部にハケ目を，下部にヘラケズリを施した後に，上部にヘラミガキを加えている。長方形の透かし穴が4個ある。499は大型の器台で全体に弓なりに反っており，口径が底径を上回っている。口縁部端部を下方に拡張している。端面にはヘラ描き波状文を2条施した後に，円形浮文を2個1単位で，現存で4単位貼り付けている。口縁部内面には外側にヘラ描き波状文を2条施し，その内側に4個1単位の竹管文を現存で8単位施している。脚部端部は外側へやや拡張している。体部外面にはハケ目を施し，円形の大きな透かし穴が上部に5個，下部に6個現存している。透かし穴の周囲を竹管文で飾っている。500は器高11.6cmと小型の器台で口径が底径を上回っている。脚部外面には凹線を巡らせ，端部は先細りになっている。口縁部端部直下を強くナデている。501は体部中央が細くなっており，外面にはヘラミガキを，内面上部にはハケ目を施している。円形の透かし穴が現存で1個ある。502は口縁部端部を上下に拡張する。内・外面ともにハケ目の後にヘラミガキを施す。503は全体に弓なりに反るが，均整のとれた形である。外面は全体にハケ目を施し，内面は口縁部と脚部にハケ目が残る。中央部に長方形の透かし穴が4個ある。504は口縁部端部を下方に拡張し，端面に円形浮文を貼り付けている。脚部端部はそのまま方形で収める。体部は中央部が肥厚し，外面にヘラミガキが一部見られる。内面は中央部を指で，下部を板



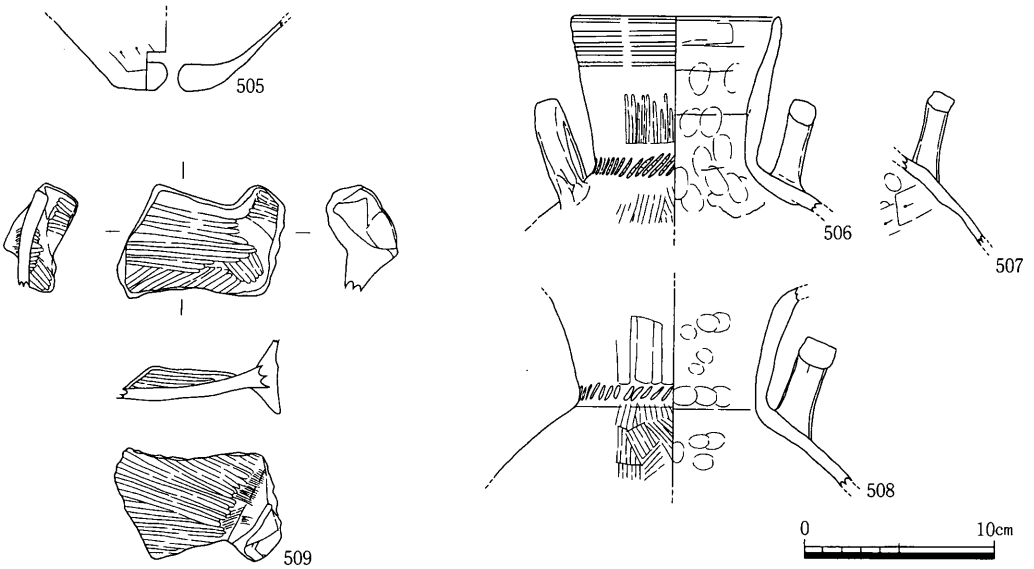
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
500	弥・器台	18.6	11.6	12.0	細・普	にぶい黄橙	全体にマメツ	全体1/2	角閃石
501	弥・器台	21.0			中・多	にぶい黄褐	口縁ナデ、外面ミガキ、内面ハケ目・ナデ	口径1/2	角閃石
502	弥・器台	25.8			細・普	黄褐	外面ハケ目→ミガキ、内面ハケ目→ミガキ	口径3/5	角閃石・雲母
503	弥・器台	25.6	19.5	22.4	中・普	にぶい黄褐	外面ハケ目、内面ハケ目・ナデ	全体2/3	角閃石
504	弥・器台	30.4	21.6	23.5	中・多	にぶい黄褐	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ・板ﾅﾃﾞ	全体1/3	角閃石・雲母

第106図　3区ＳＲ01出土遺物10（１／４）

でナデている。長方形の透かし穴が上下に４個ずつ現存している。

505は甕で底部は肥厚している。内面には赤色顔料が付着している。

506～508は水差しである。506は体部上部に半円形の把手が２個付いている。頸部は直線的に開きそのまま口縁部端部に至る。口縁部外面に凹線を巡らせ，頸部にはヘラミガキを施す。凹線の下部には一部にヘラ描き波状文が見られる。頸部と体部の境にはヘラ圧痕文があり，体部外面にはハケ目を施す。内面には指押さえ痕がある。507は把手部分の細片で，把手は半円形である。508は半円形の把手が体部上部に現存で１個あるが，元々１個であったかどうかは不明である。体部外面にはハケ目を施している。



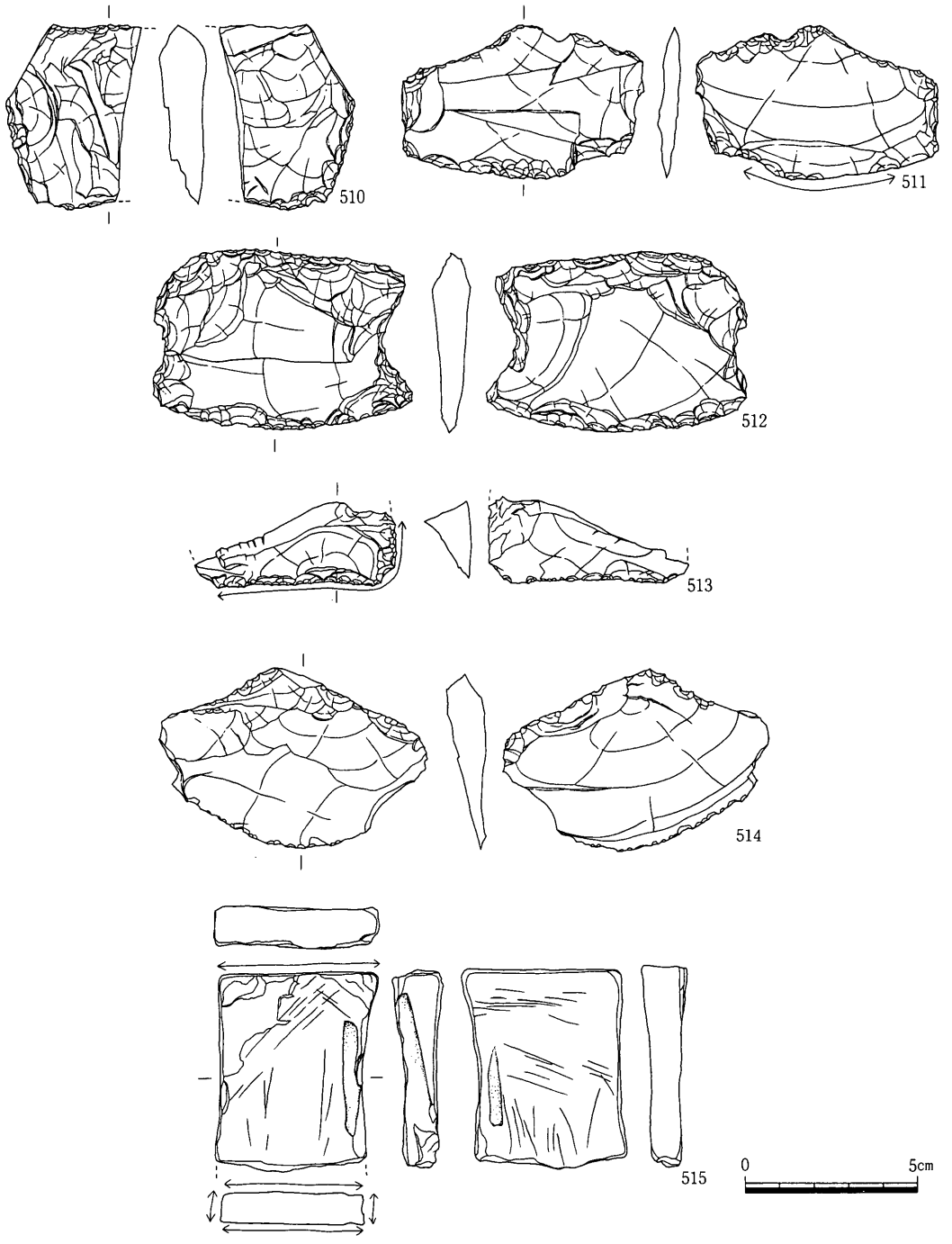
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
505	弥・甕			5.4	中・少	黒褐、灰黄・黄灰	外面ケズリ・ナデ、内面ナデ	底部完存	角閃石・雲母、内(赤)
506	弥・水差し	10.7			微・普	にぶい黄橙・褐灰	口縁ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ・ﾊｹ目、内面指押え・ﾅﾃﾞ	口径完存	角閃石
507	弥・水差し				微・少	灰・灰黄	外面ハケ目、内面指押え・ケズリ	体部細片	角閃石・雲母
508	弥・水差し				微・少	灰黄・灰黄褐	外面板ナデ・ハケ目、内面指押え・ナデ	全体1/3	角閃石
509	弥・広片口	幅5.8	長8.8	厚0.7	微・少	灰黄褐、にぶい黄褐	外ﾊｹ目→ﾐｶﾞｷ、内ﾐｶﾞｷ、外面煤、側・内(赤)	把手1/4	角閃石・雲母、側・内(赤)

第107図　3区ＳＲ01出土遺物11（１／４）

509は把手付広片口皿で，後側の把手部分の破片である。把手部分は体部より一段高くなっている。内面は全体に丁寧にヘラミガキを施し，外面はハケ目の後にヘラミガキを施している。内面と側縁部には赤色顔料が付着している。

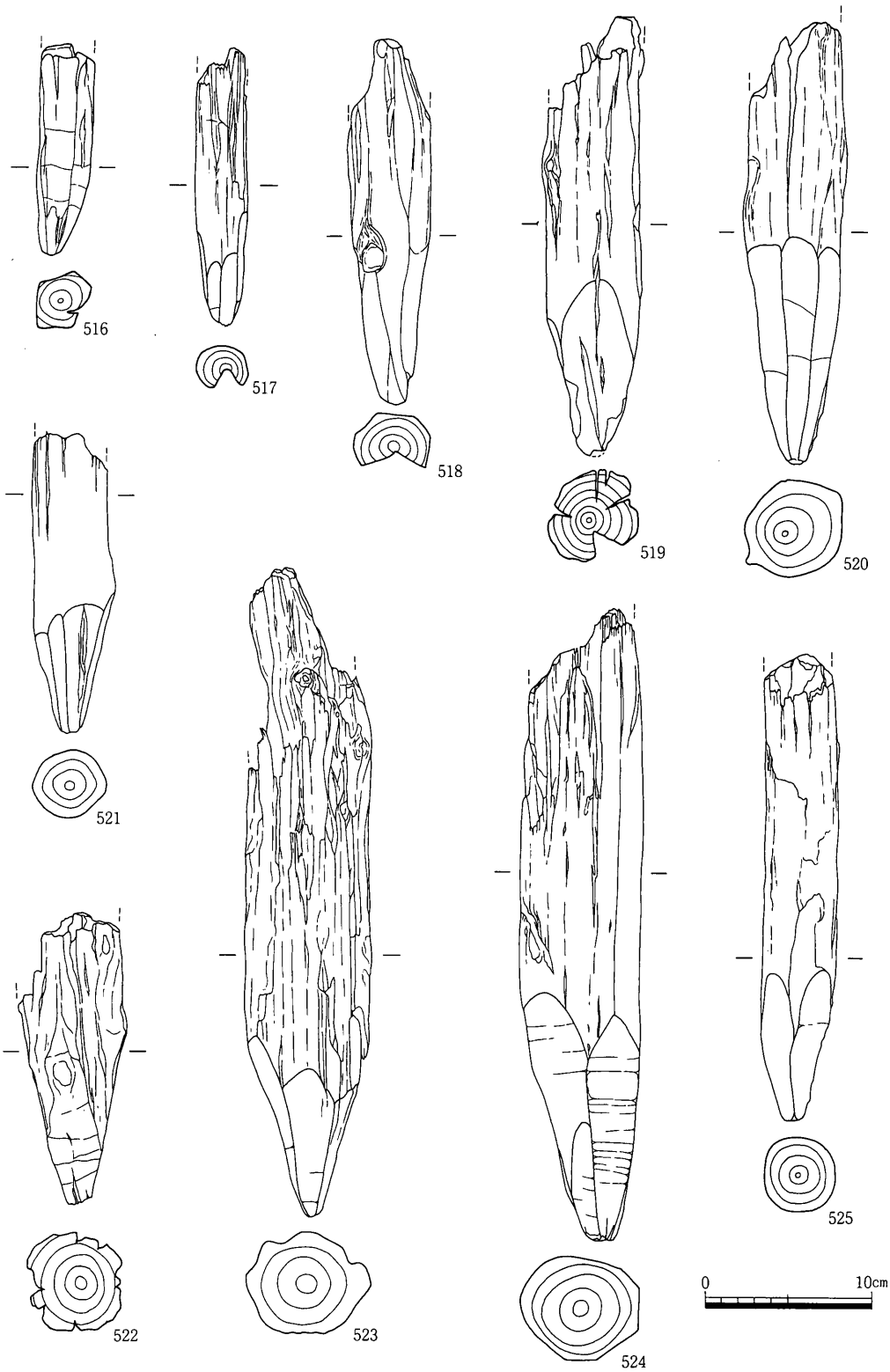
510～515は石器で，510～512は打製石庖丁である。510は側縁部のみで，抉りは入れていないが調整を加えている。刃部と背部は直線になるものと思われる。上下とも若干潰れており楔形石器の可能性もある。511は刃部は外湾で，背部は山形となっている。側縁部には大きな剥離で粗い調整を加えている。刃部は使用のため潰れて摩滅している。512は刃部は緩く外湾しており，背部はほぼ直線である。側縁部には両側に抉りを入れている。刃部と背部は両側から調整を施している。513はスクレイパーで，下部と側縁には弱い摩滅状の潰れが認められる。514は片側の側縁部が欠損している。刃部は外湾しており，調整剥離も少なく全体に雑な作りである。515は砥石で下部は欠損しているものの長方形の板状のものである。上部１面と側面４面の合計５面を使用している。

516～533は木製品で，このうち525・533以外は井堰を構築していた部材である。後の欠損等で形や大きさが当初に比べて異ってしまったものもある。516～525・527・528・532はいずれも芯持の丸太材を使用し，先端を鉛筆の芯先のように鋭利に尖らせて杭としたも

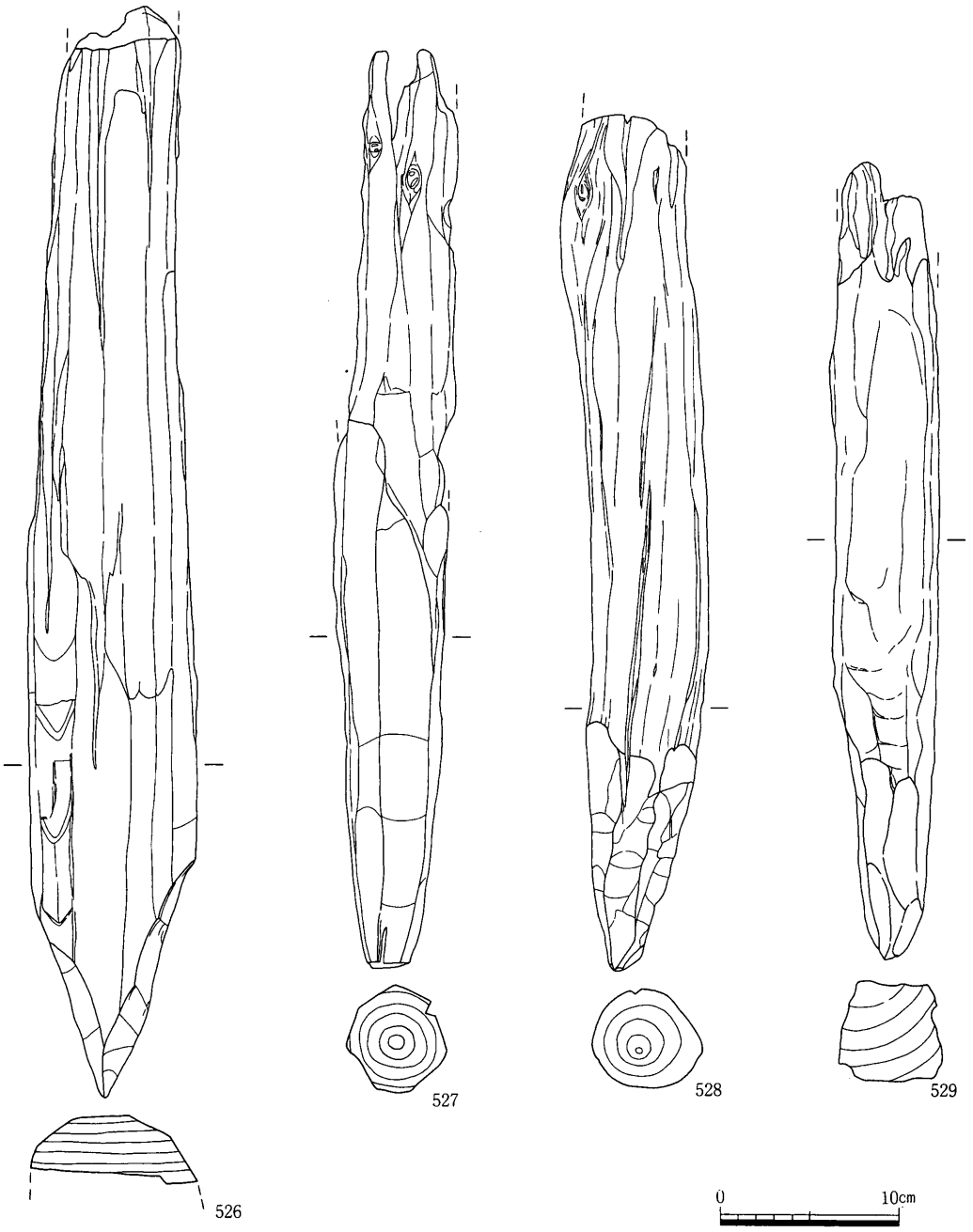


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
510	打製石庖丁	3.5	5.2	1.4	26.1	サヌカイト		
511	打製石庖丁	7.1	4.3	0.5	23.0	サヌカイト	刃部の摩滅著しい	
512	打製石庖丁	7.6	4.9	1.3	52.6	サヌカイト		
513	スクレイパー	5.9	2.2	1.3	12.5	サヌカイト		
514	スクレイパー	7.7	5.1	1.1	36.3	サヌカイト		
515	砥石	5.8	4.7	1.4	53.2	流紋岩？	5面使用	

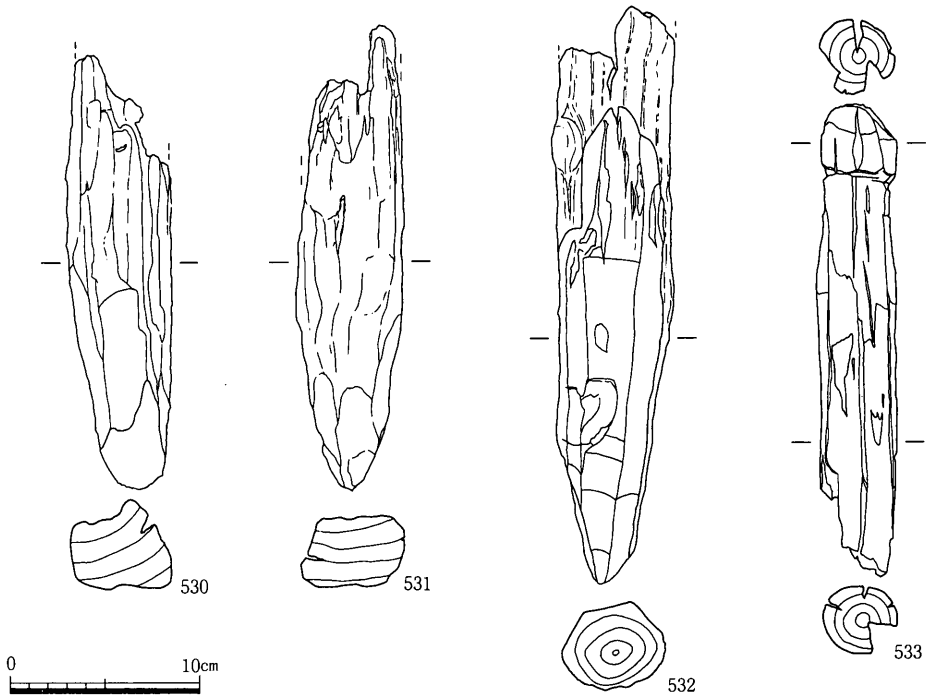
第108図　3区ＳＲ01出土遺物12（1／2）



第109図　3区ＳＲ01出土遺物13（１／４）



第110図　3区ＳＲ01出土遺物14（１／４）



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
516	杭	12.1	3.2	3.3	芯持		
517	杭	16.3	3.1	2.5	芯持		
518	杭	21.5	5.0	4.5	芯持		
519	杭	25.7	5.9	5.1	芯持		
520	杭	25.8	5.9	5.7	芯持		
521	杭	17.8	4.7	4.0	芯持		
522	杭	17.1	5.2	5.7	芯持		
523	杭	38.6	7.5	6.0	芯持		
524	杭	37.5	7.2	6.2	芯持		
525	杭	27.5	4.5	4.4	芯持		
526	杭	59.6	9.0	3.9	板目	板目材を半截したものを使用	
527	杭	49.9	6.2	5.6	芯持		
528	杭	46.7	6.4	5.6	芯持		
529	杭	43.5	6.0	5.7	板目		
530	杭	25.0	5.5	4.5	板目		
531	杭	24.2	5.6	3.7	板目		
532	杭	29.8	6.2	4.3	芯持		
533	杭	24.6	4.2	3.8	芯持	先端部を球状に作り出す	

第111図　3区ＳＲ01出土遺物15（1／4）

のである。526は板目材を半切して蒲鉾状にしたものの先端を鋭利に尖らせて杭としたものである。529～531は板目材を方形に加工したものの先端を鋭利に尖らせて杭としたものである。533は丸太材を使用し，先端部にくびれを入れて球状に作り出している。井堰の西側で浮遊した状態で出土したものである。現存長で24.6cmあり陽物にしては長くなっているので，布巻具あるいは経巻具といった機織り具の可能性がある。

以上ＳＲ01出土の遺物を見てきたが，先に述べたようにＳＲ01は西側でＳＤ01とＳＤ02

を切っているため両者の遺物が混入しているが，本来の遺物の多さから考えると大多数はＳＤ02のものの可能性が高い。421・459が時期的に弥生時代終末ごろまで下ると考えられるが，この遺物をもってＳＲ01の年代を決めるのは困難である。従ってＳＲ01は弥生時代後期初頭のＳＤ02以降で，弥生時代終末までの時期幅で考えておきたい。

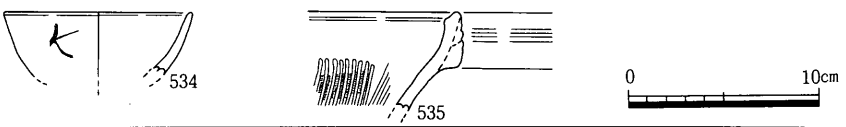
ＳＲ01では水路が２つに分岐する部分を検出し，その内北側の部分では取水部分に井堰を設けていることが判明した。弥生時代後期段階における人々の水への働きかけを知ることが出来た貴重な資料と言える。

（２）近世の遺構・遺物

ＳＲ02（第112・113図）

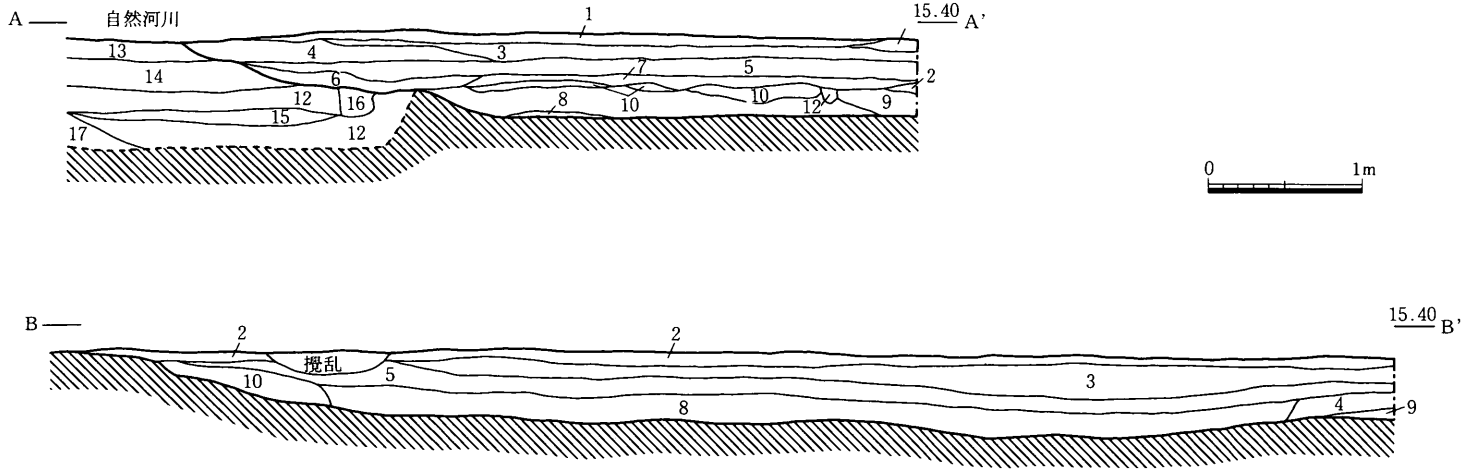
３区の西部で検出した現在の古川にほぼ沿った南西－北東方向の旧河道である。検出した部分の中央付近で，ＳＤ03とＳＤ04を切っている。旧河道は南側のラインを検出したのみである。最大幅は調査区内で11.5ｍで，深さは0.5ｍほどである。埋土は砂層が中心で，その間に粘質土が堆積している。また埋土にはマンガンや鉄分が沈着している部分が多く，埋土の色も褐色系と灰色系の明るい色が多い。またＳＲ02の東側でＳＤ03との間の部分は遺物を全く含まない黒色系と茶色系の粘土が主に堆積している旧河道があり，この旧河道をＳＲ02とＳＤ03が切っている。現在の古川の近世段階の旧河道と考えられるものである。

遺物は近世の遺物が少量出土したにとどまる。534は磁器碗で，灰白色の精緻な胎土で文様が一部見られる。535は備前焼の摺り鉢で，口縁部外面に粘土を継ぎ足して肥厚させ，外面に沈線を巡らす。口縁部端部内面は段になっており，体部内面にはハケ目の後におろし目を施している。



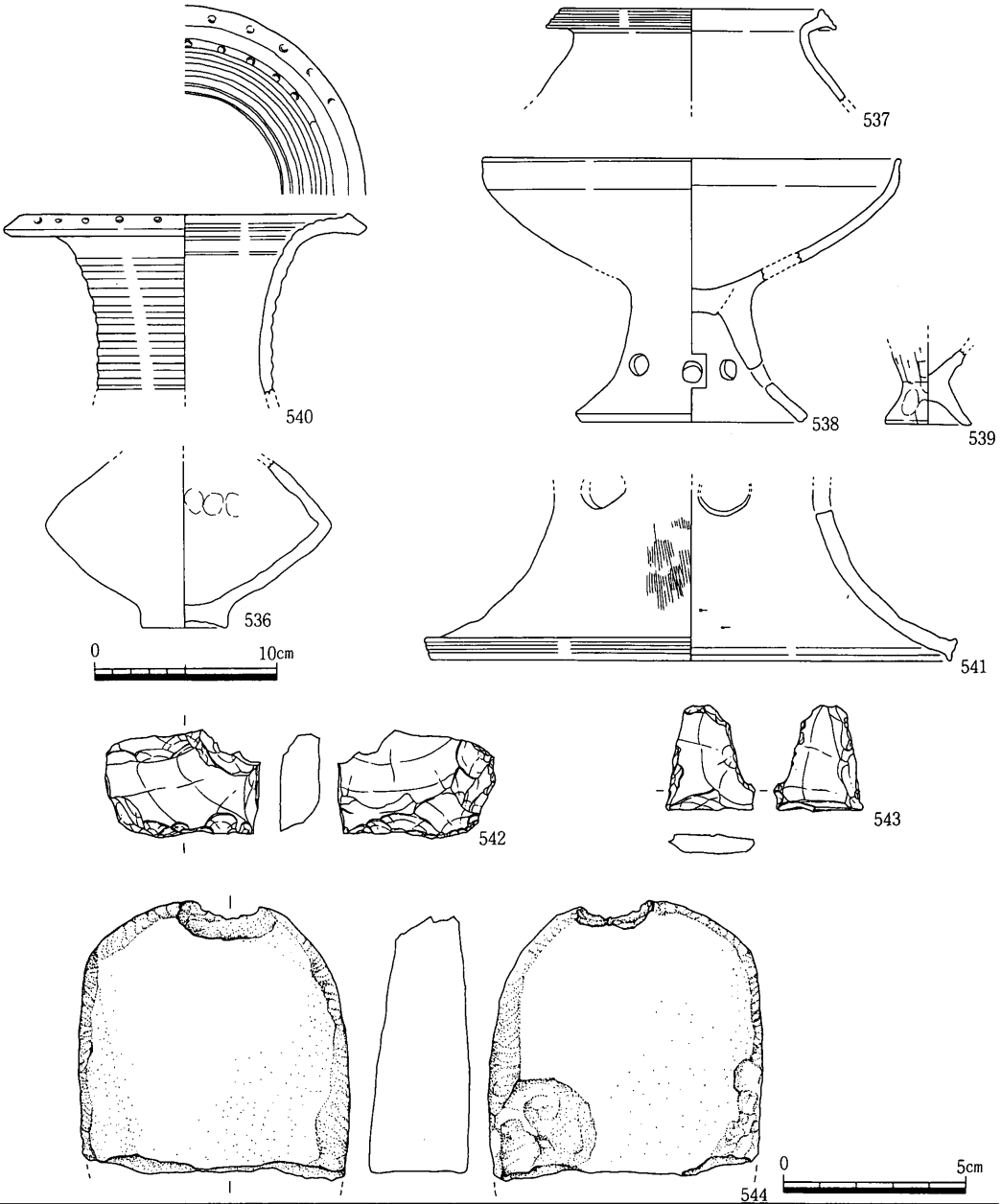
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
534	碗・碗	9.8			精緻	灰白	全体にナデ	口径1/8	
535	備・すり鉢				細・普	橙、赤灰・橙	外面ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ・ﾊｹ目→おろし目	口縁細片	

第112図　３区ＳＲ02出土遺物（１／４）



1．耕土
2．黄褐色砂(鉄分少々含む)
3．明茶褐色砂(マンガン含む)
4．褐色砂
5．黄褐色粘質土(鉄分含む)
6．褐色粘質土
7．暗黄褐色粘質土(マンガン・粘土ブロック含む)
8．明灰色砂
9．灰色砂(鉄分含む)
10．淡黄色粘質土(マンガン含む)
11．暗灰色砂礫土(2～4cm大の礫含む)
12．黒色粘土
13．茶褐色粘土(鉄分含む)
14．暗茶褐色砂混り粘土
15．黒褐色砂混り粘質土
16．茶色粘土
17．灰褐色砂

第113図　3区SR02断面図（1／50）



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態・手法の特徴	残存率	備考
536	弥・壷			4.6	中・多	橙、にぶい橙	外面マメツ、内面ナデ・指押え	底部完存	角閃石
537	弥・甕	14.3			中・普	にぶい黄橙、明赤褐	外面マメツ、内面ナデ	口径1/5	
538	弥・高杯	23.0	13.8	12.0	中・多、粗・少	明褐	全体にマメツ、円盤充填	全体1/3	角閃石・雲母
539	弥・鉢			4.7	細・普	にぶい黄褐・黒褐	外面ケズリ・指押え、内面ナデ	底径3/4	角閃石・雲母
540	弥・器台	18.0			中・少、細・普	にぶい褐、明褐	外面ナデ、内面ナデ	口径1/4	角閃石・雲母
541	弥・器台			28.5	中・多	黄褐・にぶい黄橙	外面ハケ目、内面ケズリ→ナデ	底径1/3	角閃石・雲母

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
542	楔形石器	2.8	4.3	1.1	19.1	サヌカイト		
543	二次加工のある剥片	2.9	2.4	0.5	5.7	サヌカイト		
544	石錘	7.4	7.4	2.7	251.9	砂岩		

第114図　3区包含層出土遺物（1／2・1／4）

（3）包含層出土遺物（第114図）

536～544は3区の包含層出土の遺物である。536は壷で体部は中央部が鋭く屈曲し，算盤玉形をしている。底部は突出し高台状に上げ底となっている。537は甕で口縁部端部を上下に拡張する。538は高坏で，口縁部は丸みをもって立ち上がり外面を強くナデている。脚部は透かし穴部分で緩く屈曲して開き，端部は方形に収める。円形の透かし穴が現存で3個ある。円盤充填である。全体に摩滅している。539は脚部は短く直線的に開き，接地面は安定している。体部は下部のみであるが外面にヘラケズリを施している。製塩土器の可能性もあるが火を受けた痕跡もなく器壁も厚いことから鉢とした。540は器台で口縁部を方形に仕上げる。口縁部の内・外面に竹管文を施し，内面には細い凹線を施す。体部外面には凹線が巡り，あるいは壷の可能性もある。541は器台の脚部で端部を上下に拡張している。外面にはハケ目を施し，内面はヘラケズリの後にナデている。円形の大きな透かし穴が現存で2個ある。542は楔形石器で下部と側縁の一部には潰れ痕がある。截断面が認められる。543は側縁部に部分的に調整が施されている。544は石錘で欠損しているが，楕円形のものと思われる。上部を打ち欠いて抉りを入れている。

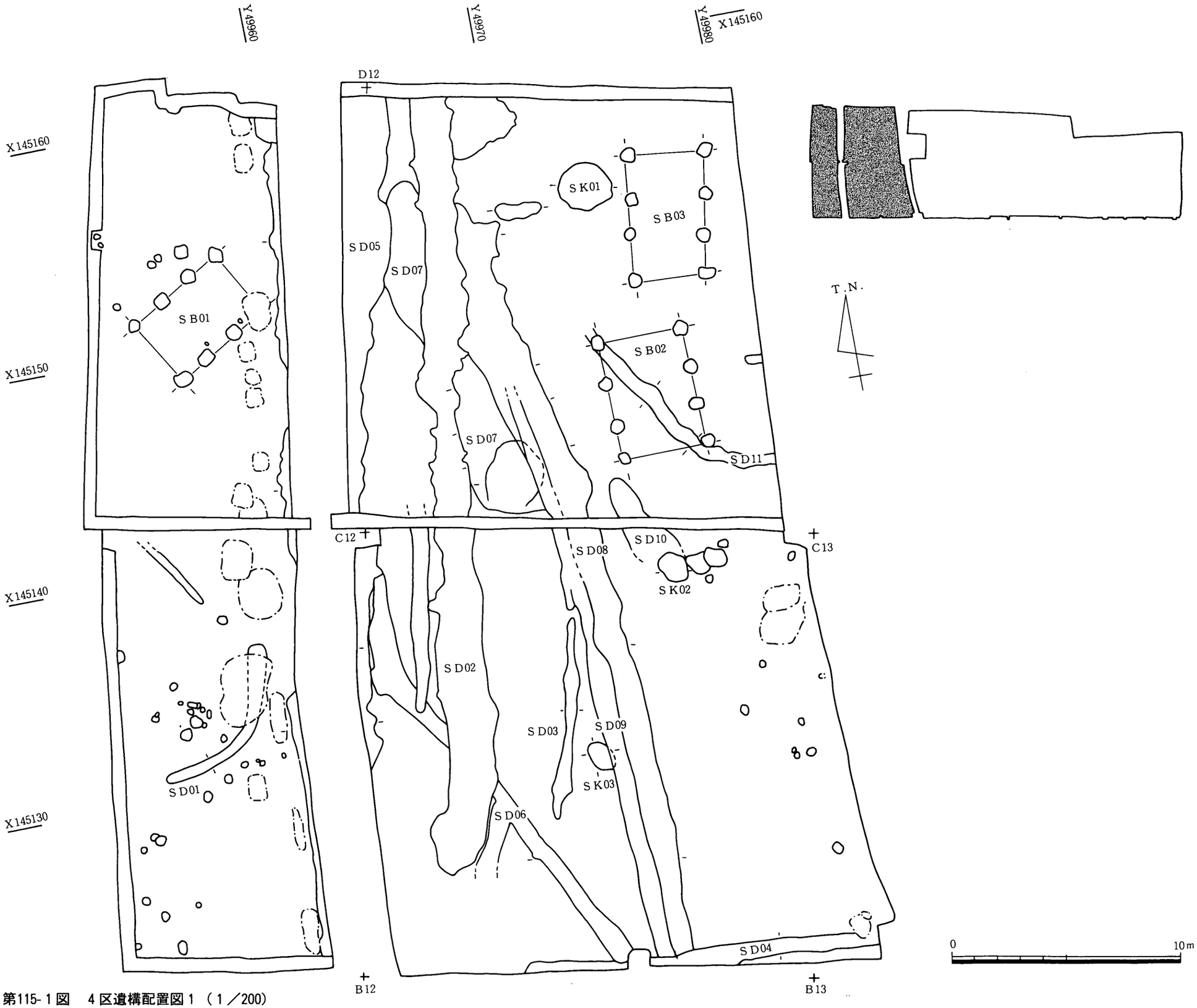
3．小結

3区は地形的には4区から続く微高地の縁辺部にあたり，現在の古川に向かって下って行く。後述する4区で見られる集落の周辺部に相当し，調査区の南半分で掘立柱建物が5棟検出され，北半分では溝・旧河道以外は検出されなかったことから，集落の中心は調査区の南側と東側に広がるものと考えられる。掘立柱建物は2棟が重複しているものの，全体に散在しており主軸方位などをみても規則的な配置は見られない。その他には溝・土坑・旧河道を検出したが，全体に遺構は少ない。しかしＳＲ01では井堰を検出し，当時の人々が積極的に水に働きかけ，水利を自分たちのものにして生産力を高めて行こうとした努力が伺われ，貴重な資料と言えよう。

遺物は溝を中心に多量に出土した。特にＳＤ02からは原形を留める状態で出土し，ＳＲ01との交点部分では若干の混入があったが，全体的には良好な一括資料と考えられる。時期的にも弥生時代後期初頭頃と考えられ，香川県ではこの時期の資料が少なかっただけに注目すべきものと言える。またＳＫ01の資料も層位的に安定しており混入も考えられないため，良好な資料になるものと思われる。土器では他地域からの搬入品や模倣品が一定量見られ，他地域の土器との並行関係を考える上でも重要である。また内面に赤色顔料が付

着したものが多く，把手付広片口皿などが出土したことなど，上天神遺跡の性格を考える手掛かりとなるようなものも出土している。

時期的には弥生時代中期中葉（ＳＤ01），弥生時代後期初頭～前半，近世の遺構・遺物が検出された。遺構などは４区の遺構とまとめて評価するべきで，このことにより上天神遺跡の全体像が理解出来るものと思われる。



第115-1図　4区遺構配置図1（1／200）

Y49990 Y50000 Y50010 Y50020 Y50030

D13 D14 D15

S B04 S K04 S H07 S B10 S D11 S B09 S K05 S K06 S H03 S H08 S H09 S H10 S B07 S H06 S K07 S K11 C14 C15 S D12 S B06 S K08 S K16 S B08 S B11 S D15 S K12 S D16 S B05 S H01 S D14 S D13 S H11 S K18 S H04 S K15 S K09 S K10 S H02 S K14 S K17 S H05 S K19 S K20 S D15 S D04

B14 B15

T.N.

0 10m

第115-2図　4区遺構配置図2（1／200）

Y49990 X145110 Y50000 Y50010 Y50020

第115-3図　4区遺構配置図3（1／200）

第4節　4区の調査

1．基本層序

4区は古川の東岸（古川より約50m東方）で，三条池に北接する南北40m前後，東西約130mに及ぶ調査区である。当該地区は現況で4筆の水田に区画されている。地勢はわずかながら北および西に下り，東西方向で最大0.45m，南北方向では0.35mの比高がある。因みに三条池東西縁および北縁は，香川郡条里を反映するとされる1町方格地割線にほぼ合致している。

調査時にCラインに接して東西方向に土層観察トレンチを設定し，ほぼ地表下1m，遺構検出面下0.5～0.7m（標高14.6m前後）までの堆積状況の確認を行なった。不十分なデータながらこのトレンチの所見から本区の基本層序を整理する。

本地区の基本層序は第116・117図に示している。なお，人為的な堆積あるいは撹拌を予想できる④以高と，その形跡が確認できない⑤以下を区別して，便宜的に後者を地山層と表現している。

①現耕作土

概ね黒灰色の砂礫混じりシルトからなり層厚0.1～0.2mとあまり厚くない。本層中には近世以降の遺物少量が混入するが，それ以前のものは極めて少ない。

②旧耕作土（近世以降）

淡黄色～燈褐色シルト薄層の連続的な水平堆積層群である。現耕作土層に先行する段階の耕作土残部の連続的堆積層と理解している。もっとも本層序が良好に観察できたC12区では厚さ0.3mで6層からなるが，この枚数，色調は地点によって差異がある。本層位の存在は複数回の耕作面の更新（＝上昇）を反映するであろうが，全般的な層厚の薄さは当該時期の本地区における土砂流入の乏しさを示すものであろう。包含される遺物には弥生時代に遡るものも多いが，明らかに近世以降に下る資料を含んでおり，堆積時期をこの段階に想定する。なお近世以降の遺構とした資料はいずれもこれら層群と同質の埋土を基調とし，そのいくつかについては本層群中からの掘り込みを確認している。

③遺物包含層（古墳時代～中世・当該時期の耕作土層の可能性あり）

暗灰色～淡灰色の粘質土・細砂層で，最大でも0.1m弱の層厚を持つにすぎない。地点

によって微妙に色調・土質に差異を認めるが明確に一線を画することは困難であった。本層上面はかなり平坦であるが，地点によって下面がひどく乱れ，細かい凹凸が顕著となる点が特徴のひとつである。一部の地点でこうした下面の凹凸を平面的に追求したところ，蹄趾状のくぼみが錯綜している状態が確認できた。

古墳時代後期～鎌倉時代の遺物を少量包含するが，各時期資料の出土量に際立った差異はない。本層はこの期間の形成と理解したい。なお方格地割り坪界線の溝（ＳＤ02・16・17）と床束を持つ掘立柱建物ＳＢ14の埋土は本層序と同質の堆積物を基調とする。また弥生時代後期以前の遺物を多量に混入するが，それらは本来的には本層形成前に包含された資料を多量に混入しているものであり，このこと自体本層序の性格を反映するものと考えている。

④縄文晩期～弥生後期遺構

土質は主に，周辺地山堆積層の違いに対応して差異がある。また当然，遺構の性格によって混入物も異なるが，概ね黒褐色～暗褐色を呈し古墳時代以降のそれとは一見して区別できる。なお縄文晩期遺構と弥生時代後期遺構埋土は色調・土質共に識別しがたい。また当該時期の包含層は残存していないとともに，両者は同一面で検出している。遅くとも③遺物包含層形成時期までに当該時期地表面の最初の削平ないしは表層部分の撹拌が行なわれたと見てよいであろう。

⑤地山上層１

暗褐色粘質土層。下位の地山上層２に比べ，土質に根本的な差はないが，わずかながら堆積物の粒度が小さくなる傾向が窺える。全般的な色調が上層２より黒化している点から区別した。この色調は本来的に本層上位に存在したであろう旧表土層の影響によるものと考えられる。したがって本層の残存部分は相対的に削平などの度合いが小さい部分といえよう。

⑥地山上層２

黄褐色～淡黄色シルト層。地山上層１に見られた旧表土層の影響による黒化が本層位にまで及んでいないことを除けばその差異は小さくまた漸移的である。なお本層位は西に向かって，すなわち古川に近付くにつれて，微妙に堆積物が粗粒化する傾向が窺える。

⑦地山中層（黒色帯）

主に，次に述べる地山下層の上面凹部に，その起伏に沿って局部的に認められる黒褐色粘質土からなる層厚0.1m内外の薄層である。有機質を多量に含むと思われるが，肉眼視

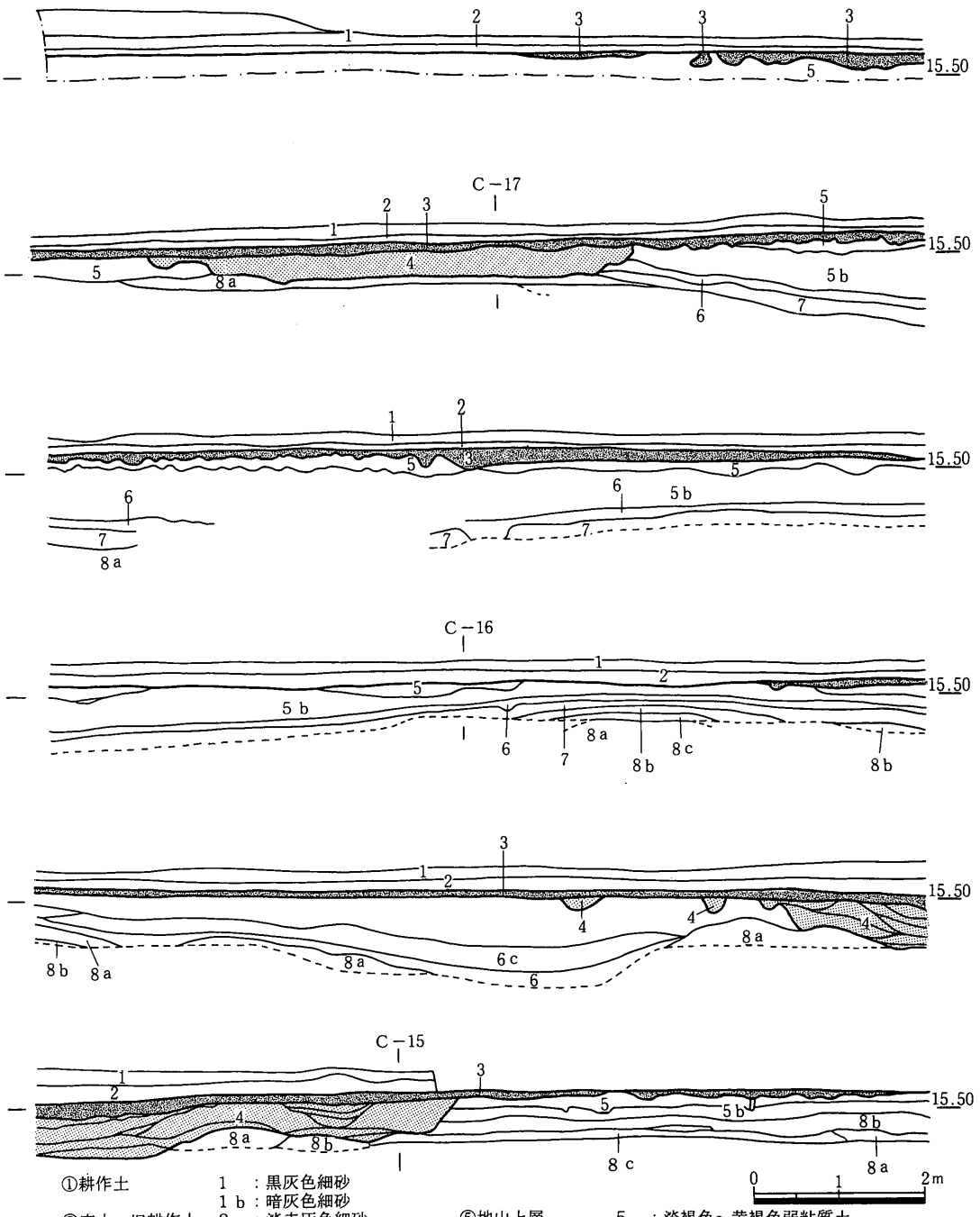
できる程度の植物遺体などは認められない。

⑧地山下層

淡灰色～青灰色の砂礫層で，その上面は確認したかぎりでは0.7m前後の比高で緩やかに起伏している。14区付近で，東西30m前後と，幅広い隆起が観察できる。本層位のレベルにおいても現状では湧水を認めないが，井戸状遺構がいずれも本層まで掘り下げられていることは注意すべきであろう。

遺構・遺物包含層の残存状況から判断して，当該地区全域は一定程度の削平を想定できる。特にC13～C15区北半部においてその度合いが著しい。また西端のBC－11・12区は以東の地点よりも大きい。このことは同地点において地山下層砂礫層が遺構検出面に露呈していることからも想定できる。

なお弥生時代以前の遺構・包含層に対する最初の削平は古墳時代後期前半まで遡る可能性がある。③遺物包含層が堆積する地点においても下位の弥生時代遺構の残存状況は良好ではないからである。同層は弥生時代以前のそれを削平ないしは撹拌して形成されたものと考えられる。さらに同層の形状からこの行為は当該地区全体の耕地化にともなう可能性を考えている。そして同層の形成開始は最大古墳時代後期前半に遡る可能性をもつ。



①耕作土　1　：黒灰色細砂
1b：暗灰色細砂

②床土・旧耕作土　2　：淡赤灰色細砂
2a：灰色細砂＋褐色粒
2b：褐色細砂＋褐色粒
2c：赤黄色細砂
2d：黄白色細砂
2e：淡黄褐色細砂
2f：黄色細砂

③遺物包含層（古墳時代～中世）　3　：暗灰色弱粘質土

④遺構埋土（縄文時代晩期～弥生時代後期）　4　：黒褐色～暗褐色粘質土

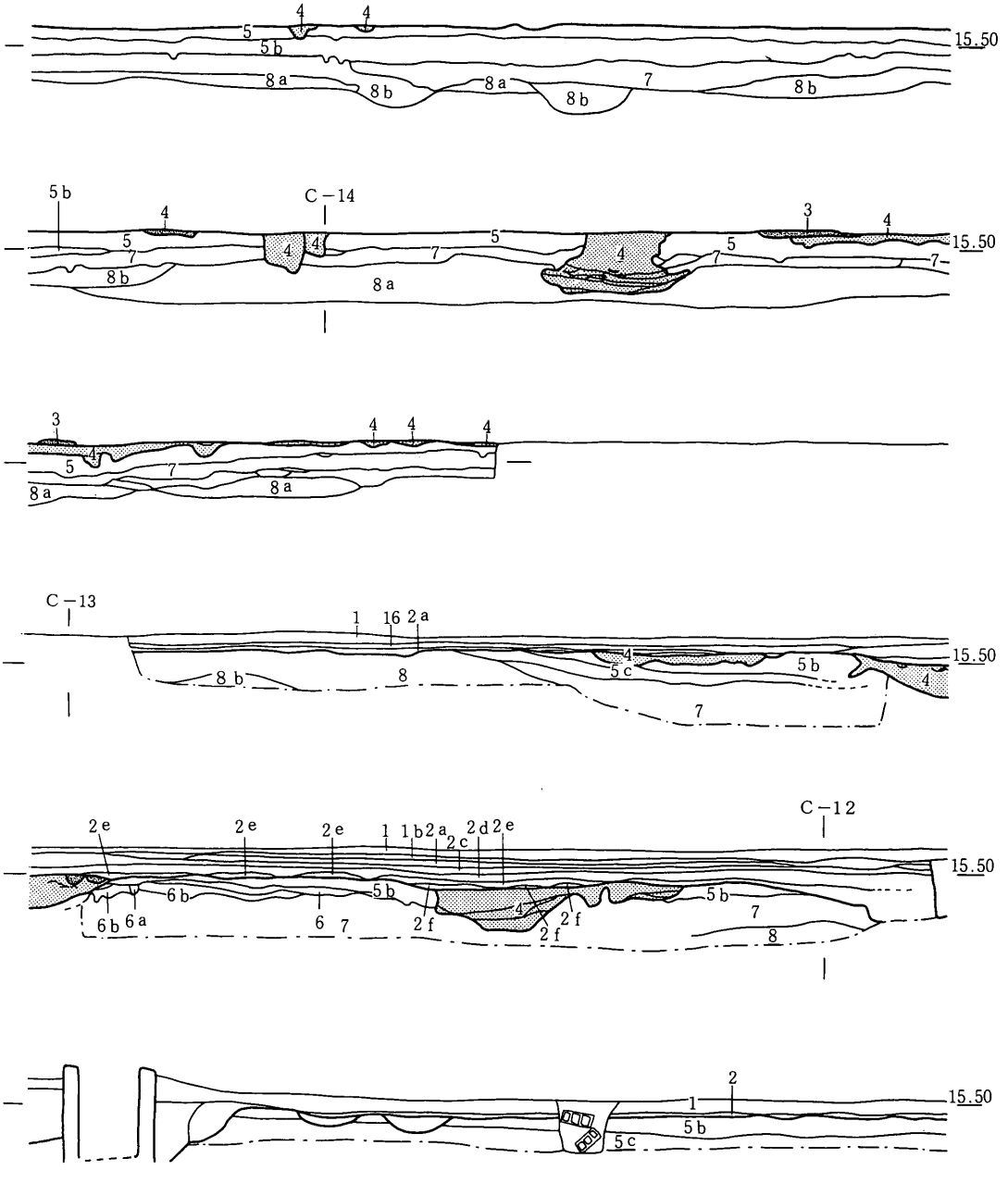
⑤地山上層　5　：淡褐色～黄褐色弱粘質土
5b：暗黄褐色弱粘質土
5c：黄褐色弱粘質土

⑥地山中層　6　：黒褐色粘質土
6b：黒褐色粘質土(白色粒含む)
6c：暗褐色粘質土

⑦地山下層1　7　：灰黄色シルト(やや粗粒)
7b：淡黄褐色細砂

⑧地山下層2　8a：灰色砂礫層
8b：黄灰色砂礫層
8c：灰色砂層

第116図　4区基本層序1（1／80）



①耕作土
②床土・旧耕作土
③遺物包含層（古墳時代～中世）
④遺構埋土（縄文時代晩期～弥生時代後期）

1 ：黒灰色細砂
1 b：暗灰色細砂
2 ：淡赤灰色細砂
2 a：灰色細砂＋褐色粒
2 b：褐色細砂＋褐色粒
2 c：赤黄色細砂
2 d：黄白色細砂
2 e：淡黄褐色細砂
2 f ：黄色細砂
3 ：暗灰色弱粘質土
4 ：黒褐色～暗褐色粘質土

⑤地山上層
⑥地山中層
⑦地山下層１
⑧地山下層２

5 ：淡褐色～黄褐色弱粘質土
5 b：暗黄褐色弱粘質土
5 c：黄褐色弱粘質土
6 ：黒褐色粘質土
6 b：黒褐色粘質土(白色粒含む)
6 c：暗褐色粘質土
7 ：灰黄色シルト(やや粗粒)
7 b：淡黄褐色細砂
8 a：灰色砂礫層
8 b：黄灰色砂礫層
8 c：灰色砂層

第117図　４区基本層序２（１／80）

2．調査の成果

（1）縄文・弥生時代の遺構・遺物

SH01（第118～120図）

4区中央部の竪穴住居群の北西部に位置する。竪穴住居SH03と重複関係にあり，北東には井戸状遺構SK06・07が近接する。また中世の掘立柱建物SB06も重複している。

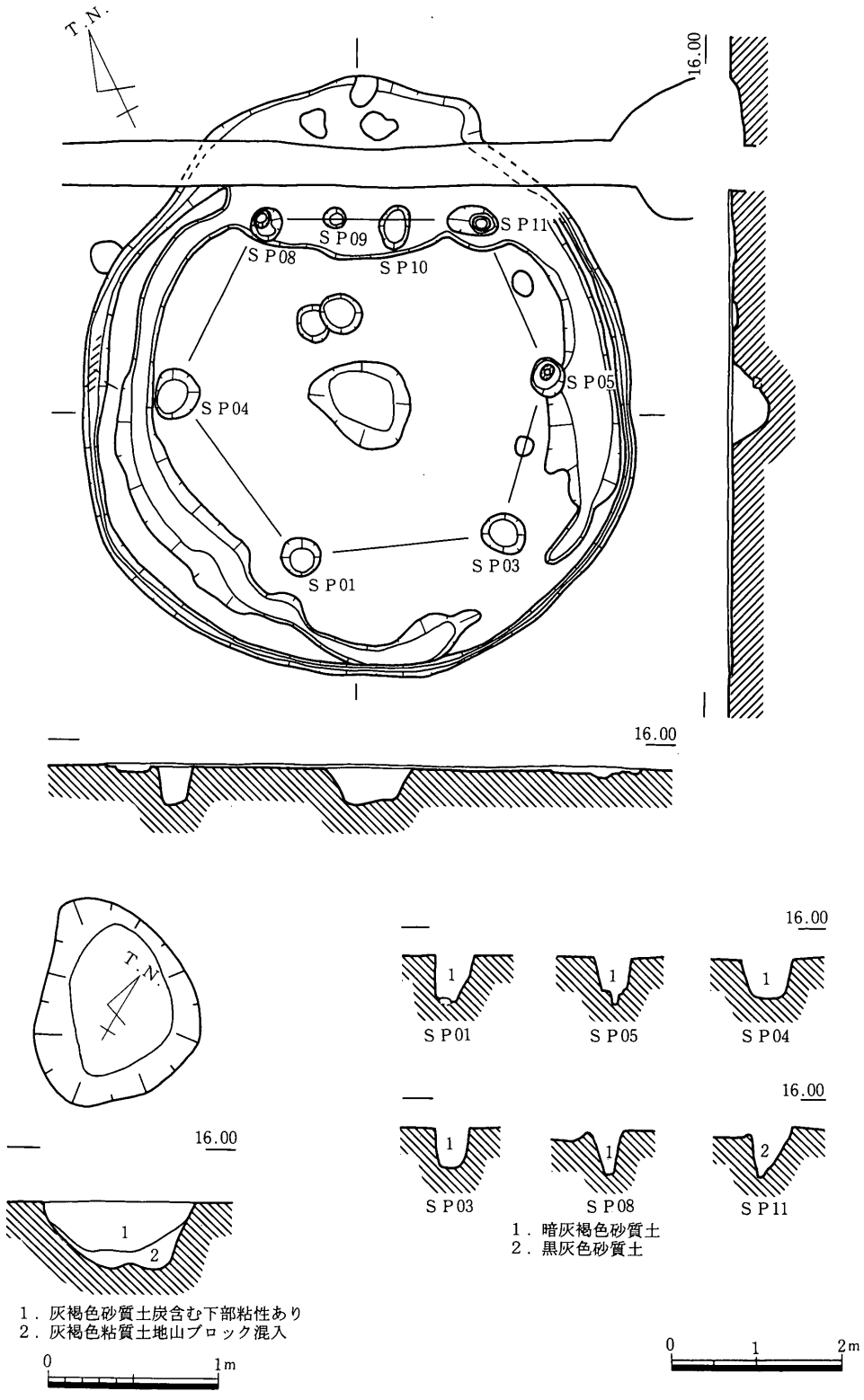
本住居は東西6.4m，南北6mのほぼ円形を呈し，ほぼ床面レベルまで削平を受けているが，竪穴の形状を把握できた唯一の例である。竪穴北側に幅約3m，奥行0.7m程度の張出部をもつ。この部分を含め床面積は約34.6㎡となる。張出部分だけC13区に属するため，当初竪穴住居付帯設備と認識せずに調査を進め，十分にその形状を把握できなかった。

主柱は6本からなり，概ね住居壁の内側約1mに並び，間隔は1.9～2.6mを測る。主柱掘り方の深さは0.4～0.5m程度である。主柱穴や中央穴に切り合いはないが，壁溝は二重に巡る。壁に接した幅0.1m程度の小溝とそれより0.2～0.5m程度内側を巡る溝とがある。後者は部位によって溝幅が極端に異なり，部分的にこれの底面にピット状の浅いくぼみが連続する。

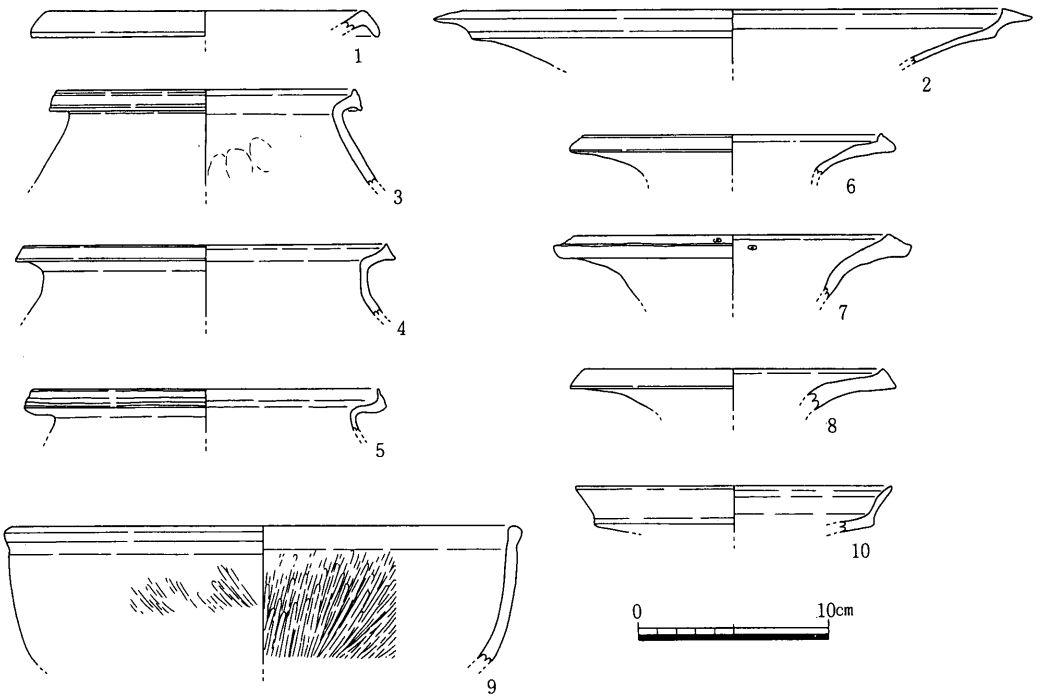
床面中央部には長軸1.2m，短軸1.0mの卵形を呈する土坑がある。深さ0.2mを測り，埋土中に少量の炭片を含む。

本住居に伴う遺物は多くない。床面・中央穴・主柱穴から少量の遺物を分散的に認めたに過ぎない。（1）～（10）は床面・中央穴出土。（1）は小形の広口壷。小さい垂下口縁形態の下端がやや開き気味になる。甕（3）～（5）は口縁部の強い折り返しと痕跡的な頸部に後期初頭の特徴を示すが，口縁部端部の摘み出しが弱い。また（5）は上方に摘み上げるだけで下方への突出を完全に省く。拡張口縁形態の高坏（2）は上半部の外傾が極端に強い。小形器台とした（6）～（9）は外反の強い発達した口縁部を持つ直口壷の可能性もある。外反が強くいずれも端面を強く内傾する。外反口縁の高坏（10）は後期初頭の形態。大形鉢（9）は口縁部を鈍く肥厚して直下に鈍い凹線を施す形態。（11）～（14）は主柱穴出土。拡張口縁形態の高坏（11）は中位の屈曲が鈍い。大形甕（12）は口縁部を強く肥厚するものの端部を弱く摘み上げる。「く」字口縁の甕（13）は口縁部は薄く伸びており，やや後出的な形態の可能性がある。脚（14）は脚端部の外反が小さく後期初頭の形態を示す。

他に床面からガラス小玉（16）を検出した。径4㎜，長2㎜で，濃青色を呈する。（15）は短冊型のスクレイパー。刃部の調整は粗雑である。石庖丁の可能性もあるが，背部の調



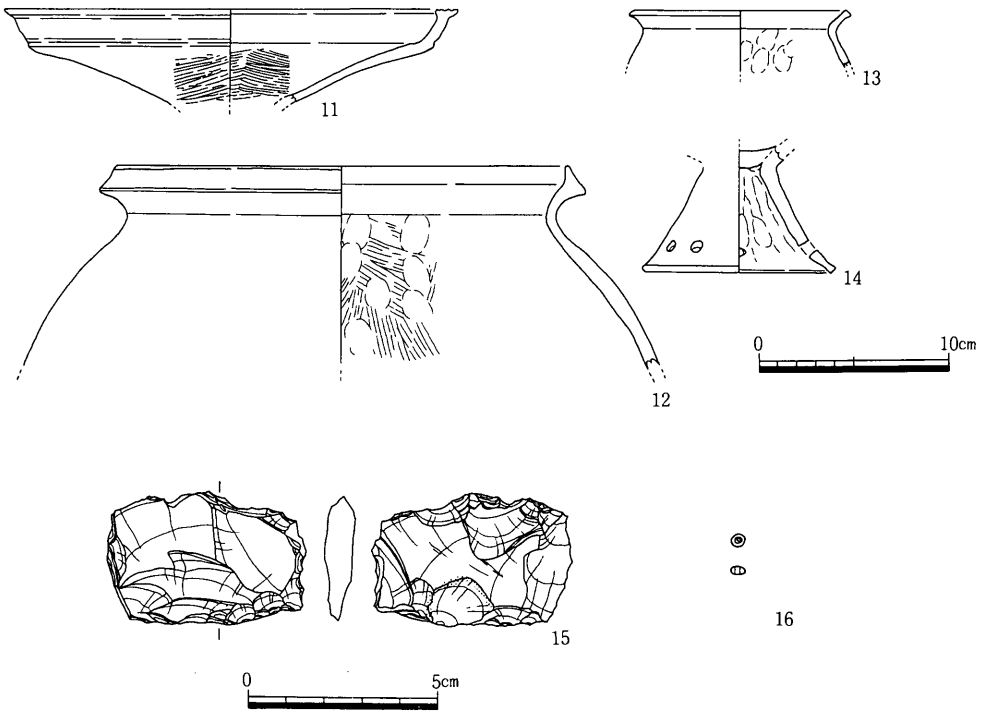
第118図　4区ＳＨ01平・断面図（1／80・1／40）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1	広口壺	16.4			細・極多、中・多	にぶい黄橙色	口縁部は緩やかに開き、端部は粘土帯を付して板状垂下口縁。	1/8	角閃石極多（含粗粒）
2	高坏	28.4			細・極多	橙色	浅い坏部。中位で強く屈曲して段。上半部強く外傾して端部は外方に大きく引き出すと共に内方も張り出す。	1/16	角閃石極多、石英等・赤色粒少
3	甕	15.6			細・極多	橙色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚して上下に摘み出す。端面凹線。肩部内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、雲母
4	甕	19.0			細・極多	明褐色	内傾する不明瞭な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚して上下に摘み出す。内面の強い横ﾅﾃﾞにより折り返し部に鈍い稜。	1/10	角閃石極多、雲母
5	甕	18.2			細・極多	にぶい橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚して上方に強く摘み出す。端面沈線２条。	1/12	角閃石極多
6	小形器台？	15.6			細・極多	橙色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は外方に摘みつつ上方も突出する。	1/10	角閃石極多
7	小形器台	16.5			細・極多	明赤褐色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は外方に引き出して四角く納め、上方も突出する。端面・口縁部内面円形刺突文。	1/16	角閃石極多、雲母
8	小形器台	15.8			細・極多	橙色	口縁部は強く外反して開く。端部は外方に摘み出すと共に上方も突出する。	1/12	角閃石極多
9	大形鉢	26.4			細・極多、中・普	明黄褐色	やや内湾気味に立ち上がり端部は肥厚気味に丸く納める。外面口縁直下に鈍い凹線１条。外面内外面縦ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、石英等
10	高坏	16.6			細・極多	暗褐色　黒褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外反気味に短く開く。端部は尖る。口縁部内面凹線２条。	1/8	角閃石極多、雲母多

第119図　４区ＳＨ01出土遺物１（１／４）

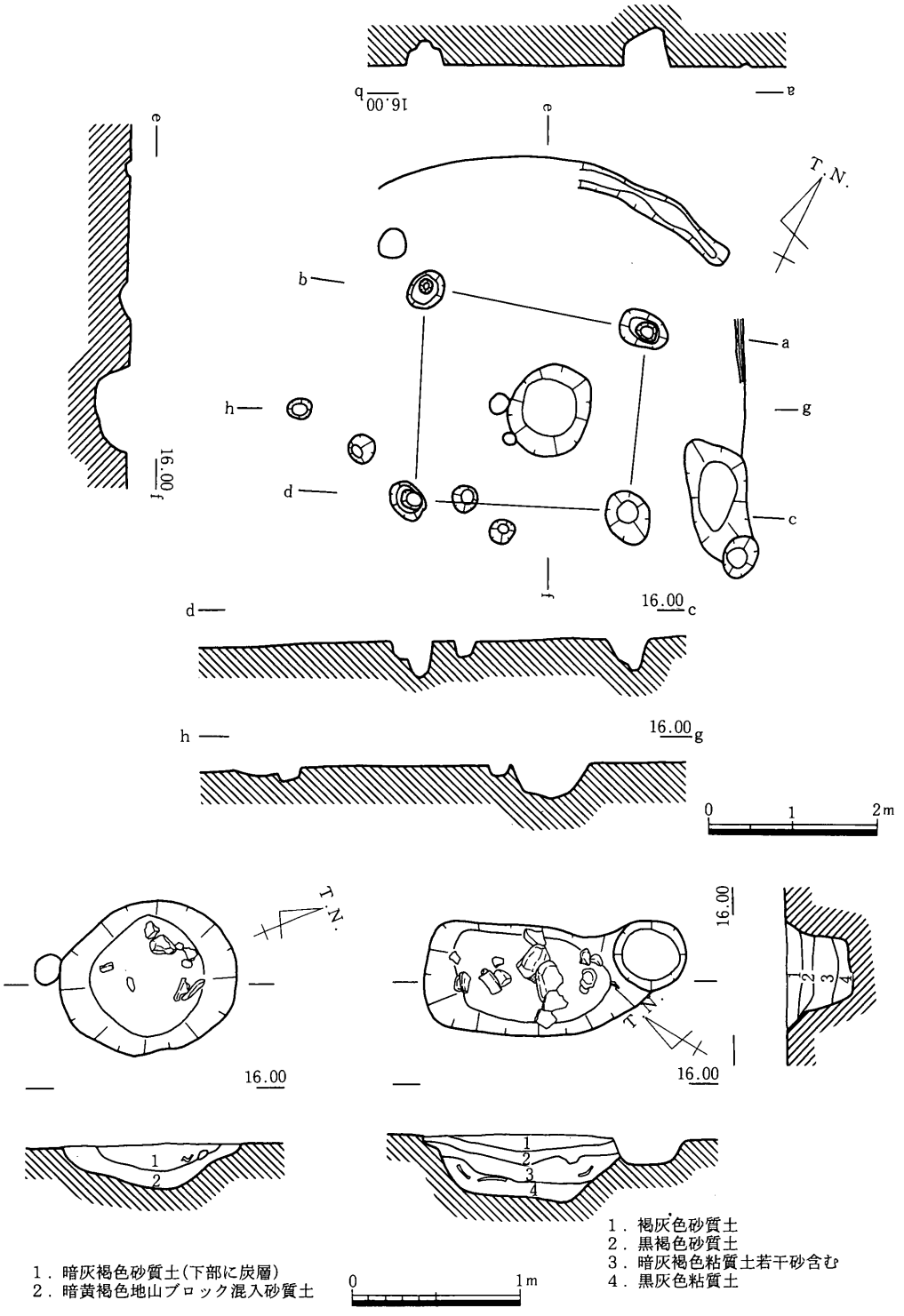
整や短辺の抉りが不明瞭なので，スクレイパーに分類した。本住居は後期初頭に比定できる。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
11	高坏	24.0			細・極多	明赤褐色	中位で屈曲して細い凹線。上半部外傾して端部は内外に小さく摘む。頂部平坦面櫛描沈線？上半部横ﾅﾃﾞ、下半部内外面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等・雲母
12	大形甕	23.6			細・極多、中・多	橙色	痕跡的な頸部から緩やかに折り返して口縁部は短い。端部は肥厚して上方に強く摘み出すと共に下方もやや張る。肩部内面ﾊｹ後指押さえ。	1/6	角閃石極多（含粗粒）、石英等多、雲母
13	甕	9.0			細・極多、中・少	黒褐色	口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は外方に張り気味に四角く納める。肩部内面指押さえ。	1/6	角閃石極多、雲母多、石英等少
14	脚			9.8	細・極多	明黄褐色	脚部は緩やかに開き脚端で小さくやや反って四角く納める。2孔1対の中形円形透かし。内面指押さえで絞り目残す。円盤充塡	全周	角閃石極多、石英等

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
15	スクレイパー	5.2	3.5	0.7	16.6	ｻﾇｶｲﾄ	右面縁部摩耗微弱	
16	小玉		0.4	0.2	0.04	ガラス	濃青色　切断後丁寧に研磨・整形	

第120図　4区SH01出土遺物2（1／4・1／2）

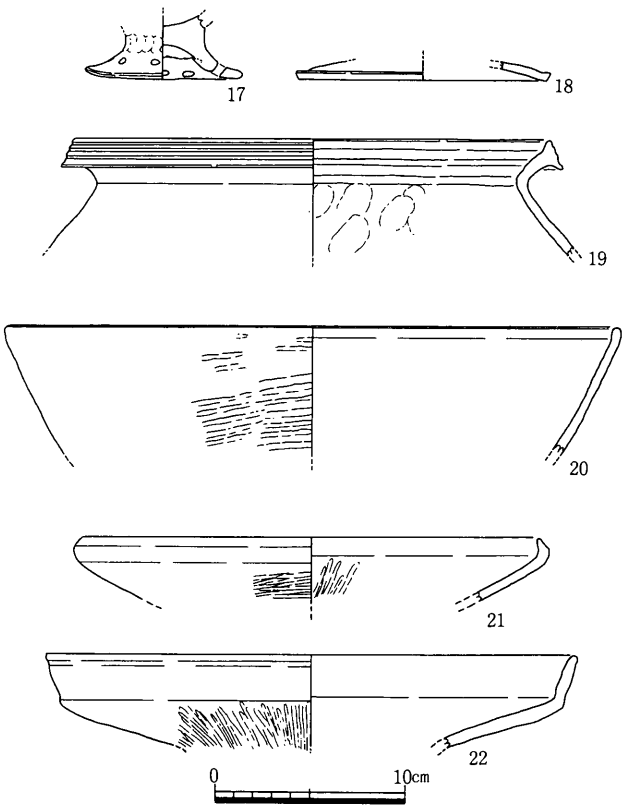


第121図　4区SH02・SK14平・断面図（1／80・1／40）

ＳＨ02（第121・122図）

４区中央部の竪穴住居群西端に位置する。床面レベル以下まで削平が及ぶものの，かろうじて北端部に局部的に幅0.2ｍの浅い壁溝が残存する。これによって径５ｍ前後の円形もしくは隅丸方形を呈する竪穴住居と復元することができる。

主柱は４本からなり，ほぼ壁溝の１ｍ内側に位置するとみられる。柱間隔は2.1～2.7ｍを測り，掘り方の深さは0.3～0.5ｍとなる。床面中央部には楕円形を呈する長軸1.1ｍ，短



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
17	脚			8.4	細・極多、中・多	橙色	低い脚部は強く外反して開く。端部丸く納める。２孔１対の円形透かし４方。やや粗雑。	全周	角閃石極多、赤色粒多
18	脚			12.9	細・極多	褐色	脚裾部は強く開き端部は小さく摘み上げる。	1/8	角閃石極多、石英等・雲母
19	大形甕	25.0			細・極多	橙色	口縁部強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚して上下に摘み出す。端面沈線３条。口縁部内面横ﾅﾃﾞで凹線。肩部内面指押さえ。	1/5	角閃石極多、雲母少、赤色粒
20	大形鉢	31.8			細・極多、中・普	黒褐色　にぶい黄橙色	口縁端部は丸く納める。叩き目残す。	1/4	角閃石極多、石英等
21	高坏	24.0			細・極多、中・多	赤褐色　黒褐色	中位で屈曲して口縁部は小さく内傾する。端部は丸く納める。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ﾐｶﾞｷ、内面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多、石英等多
22	高坏	27.6			細・極多	黒褐色	中位で屈曲して上半部はやや外傾する。端部は丸く納め、外面口縁部直下と屈曲部に鈍い凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多、石英等多

第122図　４区ＳＨ02出土遺物（１／４）

軸0.9mの土坑がある。埋土中には若干の炭片を交え，土器片を含む。

なお推定壁際に，長楕円形土坑ＳＫ14がある。他住居例と共に竪穴住居付帯土坑の可能性がある。

出土遺物量は多くない。(17)(18)は主柱穴出土。(17)は倒坏形の低脚台。通有の高坏脚部に比べ，仕上げはかなり粗雑であるが，小円形透かし２孔１対はここでも守られている。(18)は柱状軸形態の高坏裾部であろうが，脚端部の摘み出しは弱い。(19)(20)は中央穴出土。大形甕(19)は口縁端部の摘み出しが顕著で，内面は強い横ナデの連続によって鈍い凹面が連続する。(20)のように肥厚しない単純な口縁部形態は大形鉢に多くない。また外面口縁部付近まで叩き目を残す点も同様である。(21・22)は付帯土坑ＳＫ14出土の高坏。共に本地方では主流となる形態ではない。ミガキ調整の手法も異なっている。

本住居も後期初頭に位置づけることができる。

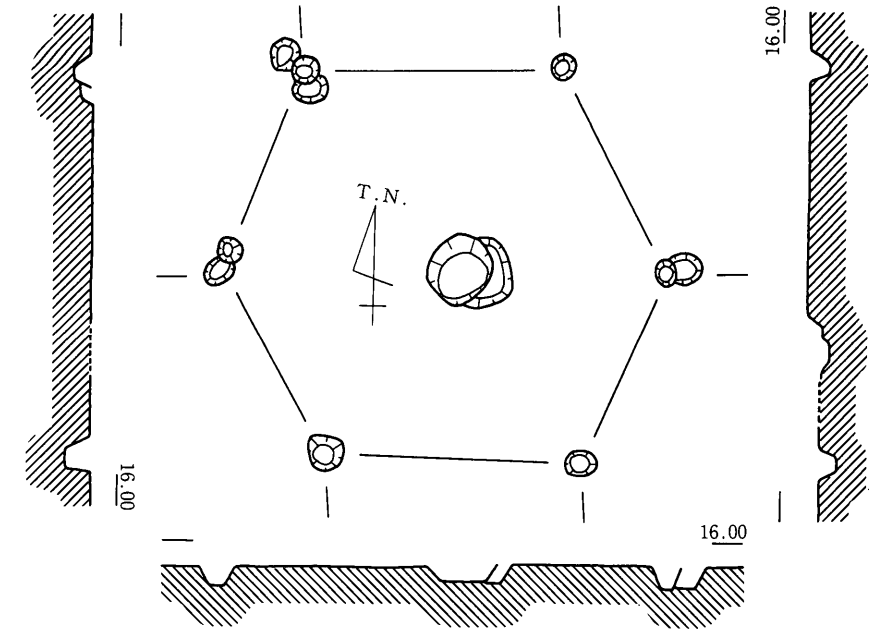
ＳＫ14（第121図）

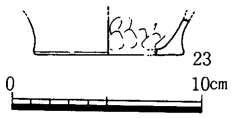
Ｂ13区北端で検出した土坑である。竪穴住居ＳＨ02主柱穴をはじめ，多くの柱穴が密集する地点に位置し，本土坑南端は一柱穴と重複する。検出位置から竪穴住居ＳＨ02の付帯土坑の可能性がある。南北方向の長方形土坑で，東西壁の立ち上がりはかなり急であるが，南北端は緩やかに立ち上がる。長軸1.4m程度，短軸0.65m，深さ0.4mを測る。埋土は４層からなり，下部２層は黒灰色系統の粘質土，上半部２層は黒褐色系統の砂質土である。下層より拳～小児頭大の川原石と共に高坏等若干が出土している。

ＳＨ03（第123図）

４区中央部の竪穴住居群中にあり，ＳＨ04とは一部重複する。本資料も調査時に想定できずに，のちに図上から復元した資料である。本住居も著しい削平により竪穴本体は失っており，柱穴列などから復元した資料である。主柱は６本からなり，ほぼ径５mの円弧上を巡る。径７m前後の円形住居が想定できるであろう。柱間隔は2.2m～2.7mで柱穴は深さ0.2m程度残存している。南端２基を除く４箇所では同規模の柱穴２基が重複あるいは隣接している。また柱穴列中央に径約0.6mの浅い皿状土坑２基がやはり重複している。これらは位置関係から本住居の中央土坑と考えられ，主柱穴の重複とあわせて立て替えを想定できる。

底部小片(23)は薄作りの底部で縁辺部はやや張り気味となる。後期初頭に多い形態である。





挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
23	甕？			7.6	細・極多	橙色　黒褐色	薄作りの底部。内面ｹｽﾞﾘ後底面指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等少

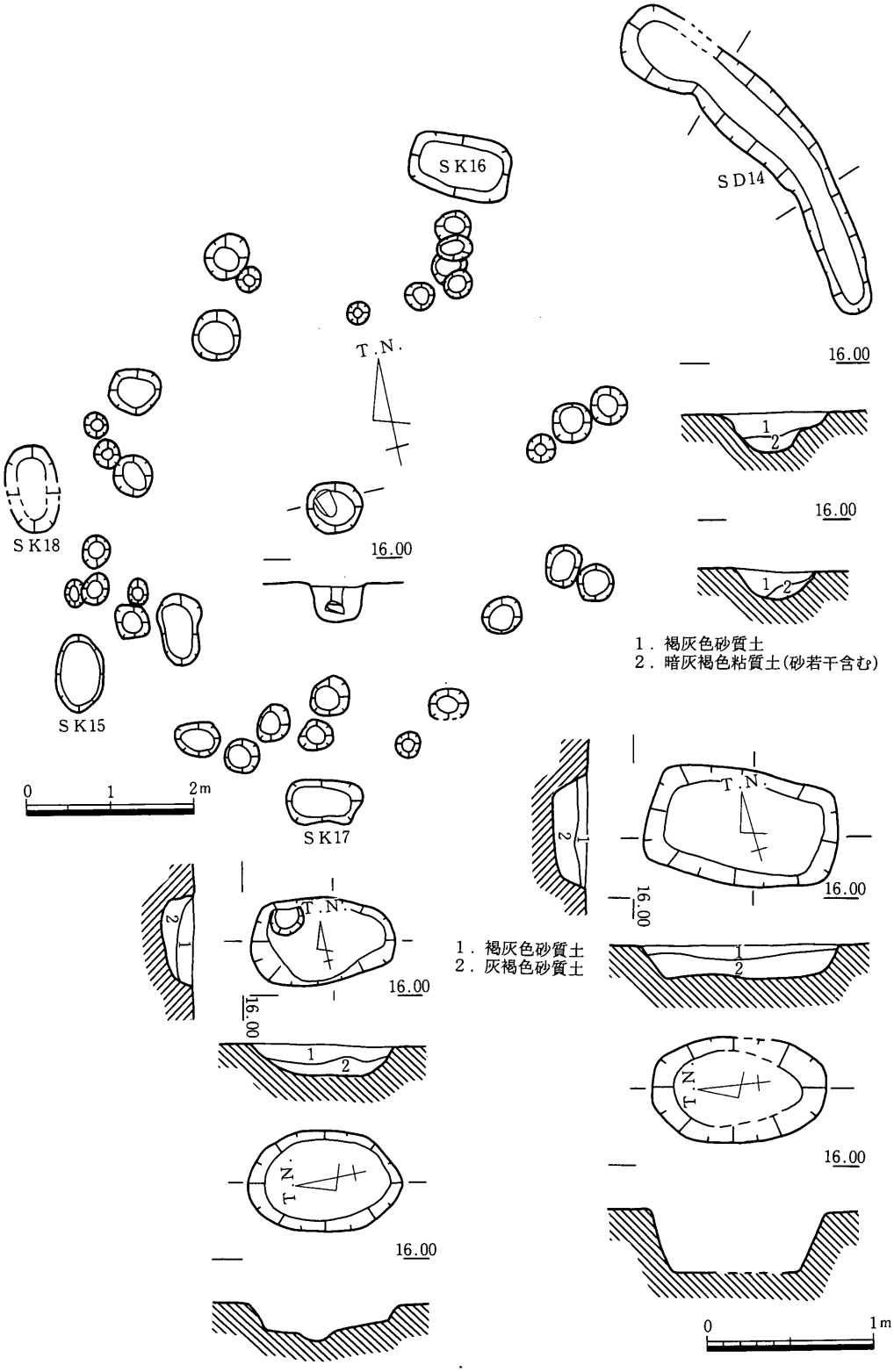
第123図　４区ＳＨ03平・断面図（１／80）および出土遺物（１／４）

ＳＨ04（第124～128図）

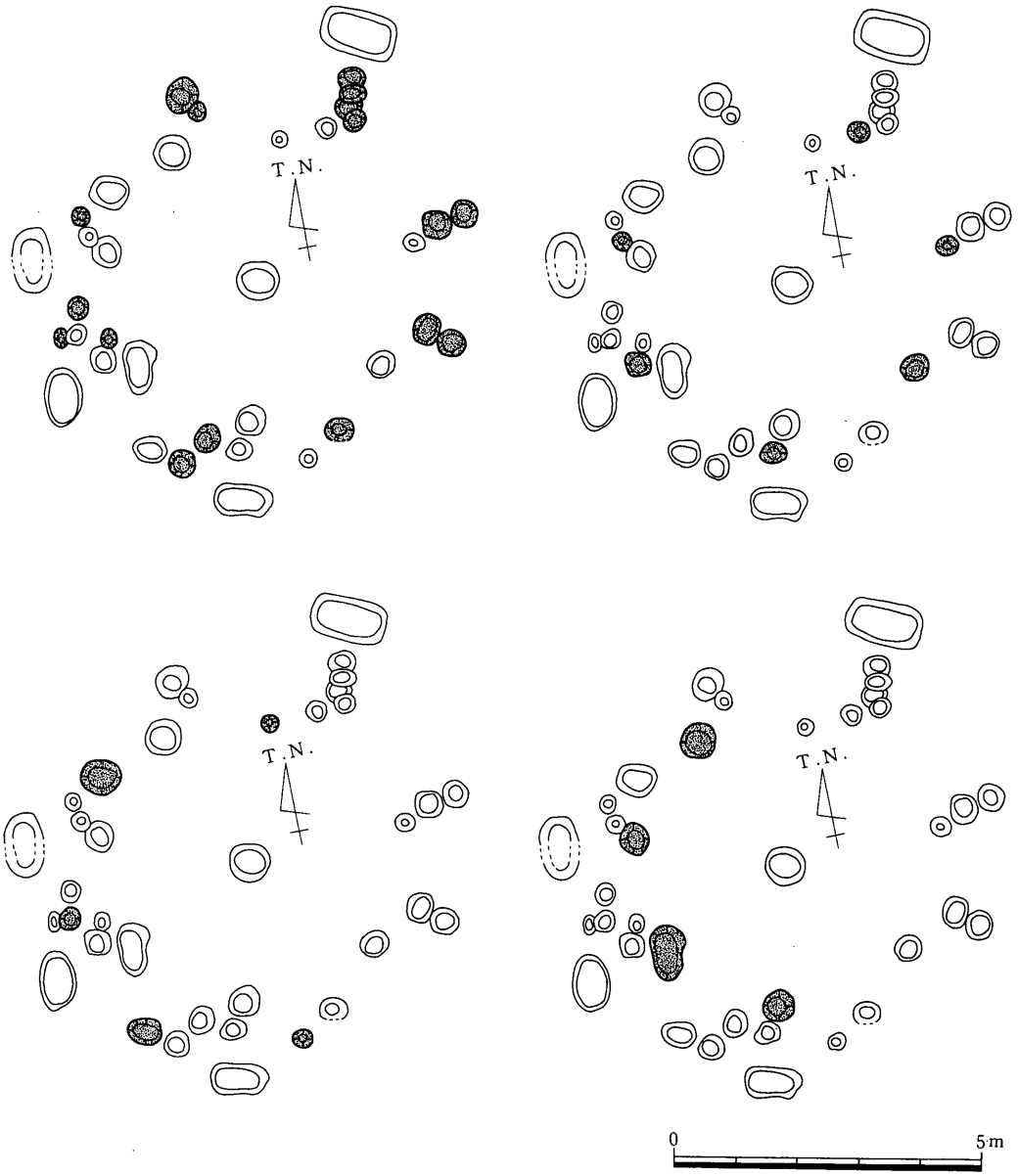
４区中央部の竪穴住居群中にあり，本住居を復元すると北西側のＳＨ01および南側のＳＨ05とは確実に重複するであろう。

本住居は著しい削平によって竪穴本体は一切残存せず，規則的な柱穴列と中央土坑から竪穴住居と推定した資料である。主柱は７ないしは８本が想定できる。東西5.5m，南北4.5mの楕円形に並ぶ。柱間間隔は1.9～3.0mとややばらつき，柱穴は0.3～0.4mの深さで残存している。これから径８m内外のやや大形の円形住居を想定して良いであろう。また各柱穴とも２～４基が重複ないし近接しており，変遷順序は明らかにしがたいが，第125図に示したように最低４次にわたる主柱の改変が想定できる。ただし現状では中央土坑の移動あるいは改変は確認できない。

中央土坑は径0.6mの円柱状で中央にやや浮いた状態で完形の大形砥石を検出している。また主柱穴列を取りまくようにほぼ同形同大の４基の長方形ないしは楕円形の小土坑（Ｓ



第124図　4区SH04・SK15・16・17・18・SD14平・断面図（1／80・1／40）

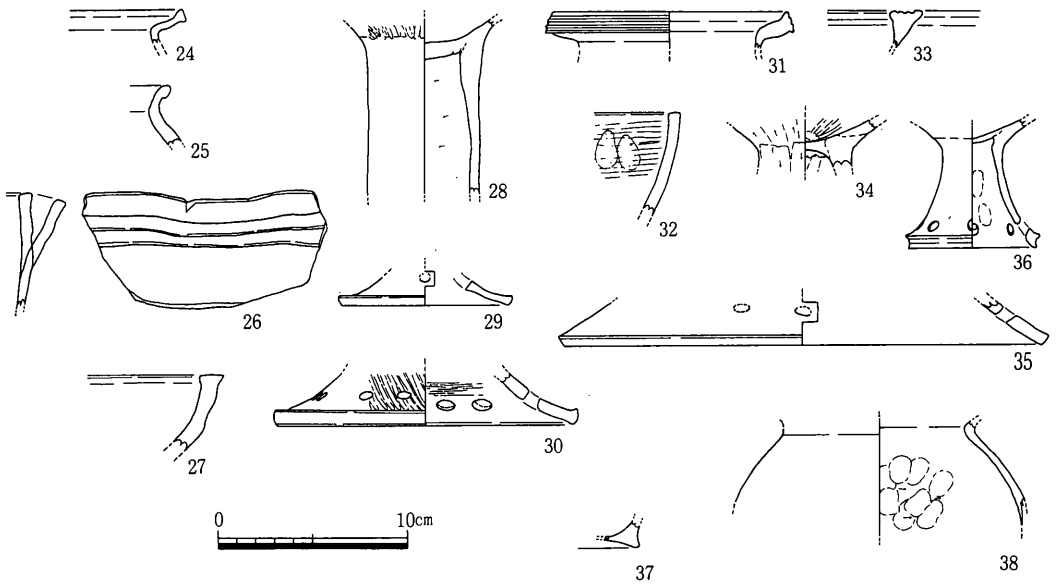


第125図　4区SH04変遷想定図（1／120）

K15・16・17・18）が認められる。これらは位置関係から本住居付帯施設の可能性があるが，必ずしも全てが同時併存と考える必要はない。さらに主柱穴列外の北東には約3mの間隔をおいて溝状遺構が位置する。

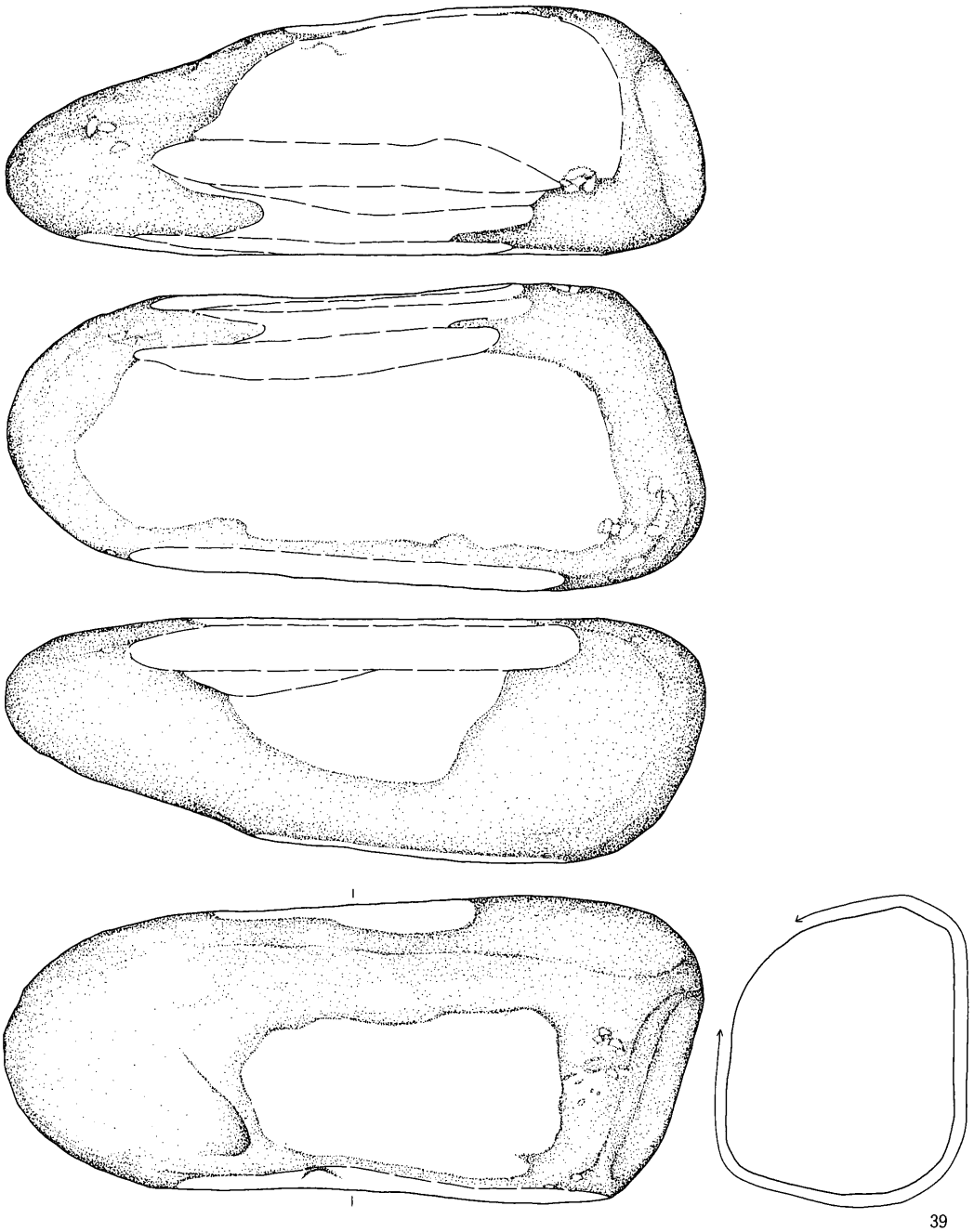
SK15

南西部の主柱穴列外側に位置する楕円形土坑である。長1.1m，幅0.6m，深さ0.15mを測る。遺物は伴わない。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
24	甕				細・極多	明赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく上下に摘む。横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多
25	甕				細・極多	明赤褐色	口縁部は緩やかに折り返して短く外反。端部は鈍い玉縁状に肥厚する。横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多
26	大形鉢				細・極多	橙色	口縁端部は外方に張り気味に四角く納める。口縁部下に鈍い凹線。片口。		角閃石極多、石英等少　赤色顔料
27	大形鉢				細・極多	黄橙色	口縁部は緩やかに内湾して端部は小さく内外に摘み頂部平坦面。外面鈍い凹線。		角閃石極多、赤色粒
28	脚				細・極多	橙色　黒褐色	円柱状軸部で、脚頂部円盤充塡。坏部外面放射状ﾐｶﾞｷ、軸部内面横ｹｽﾞﾘ。	全周	角閃石極多、石英等
29	脚			9.0	細・極多	にぶい黄褐色	脚裾部は外反して強く開き、端部は張り気味に四角く納める。円形透かし	1/4	角閃石極多
30	脚			15.4	細・極多、中・普	黒褐色	脚裾部は外反して強く開き、端部は鈍く摘み上げる。外面暗文風の縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾊｹ・横ﾅﾃﾞ。２孔１対の大形円形透かし４方。	1/10	角閃石極多、石英等・雲母
31	甕	12.2			細・極多	橙色	強く折り返した口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に小さく摘み出す。端面に凹線	1/4	角閃石極多、石英等多
32	把手付広片口皿				細・極多	黒色	体側縁部。端部は四角く納める。内面ﾊｹ。		角閃石極多　赤色顔料
33	高坏？				細・極多、中・普、粗・少	橙色	口縁部はほぼ直立し、短部は肥厚しつつ内外に摘む。頂部に沈線３条。		角閃石極多、石英等多
34	脚				細・極多	褐色	脚頂部は円盤充塡。外面縦ｹｽﾞﾘ、坏部内面放射ﾐｶﾞｷ	1/2	角閃石極多、雲母多、石英等
35	脚			24.8	細・極多	黄橙色	脚裾部はよく開き端部は四角く納める。２孔１対の円形透かし	1/18	角閃石極多、石英等・雲母
36	脚			6.5	細・極多、中・多	橙色	脚裾の開きは小さい。端部は鈍く肥厚して端面に凹線２条。脚頂部は円盤充塡。据部にやや大形の円形透かし。	1/2	角閃石極多、石英等多
37	甕？				細・極多	明赤褐色	薄作りの底部。縁辺部は張り出して弱い窪み底状。		角閃石極多
38	甕				細・極多、中・普	にぶい褐色	口縁部は強く折り返す。内面最大径部まで横ｹｽﾞﾘ後、上半部指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等

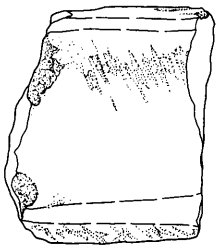
第126図　４区ＳＨ04出土遺物１（１／４）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
39	大形砥石	39.5	17.3	12.9	13600	砂岩	両端面以外使用顕著で多角柱状	

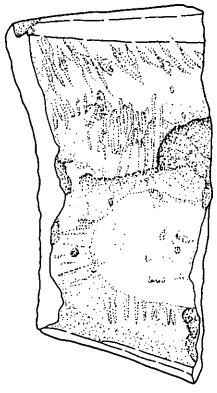
第127図　4区ＳＨ04出土遺物２（１／４）

ＳＫ16



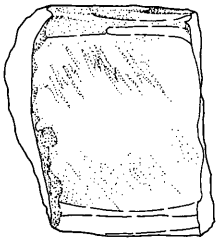
主柱穴列の北側で検出した。ほぼ東西に主軸を持つ長方形土坑で，断面形は箱形を呈する。長軸1.15m，短軸0.7m，深さ0.2mを測る。埋土は２層で，上層は灰褐色，下層は黒褐色の砂質土からなる。埋土上面付近に少量の土器小片と大形砥石が伴う。

ＳＫ17



主柱穴列の南側で検出した小土坑である。東西方向に主軸を持つ長楕円形の浅い土坑である。東西壁の立ち上がりは比較的急であるが，南北端は緩やかに立ち上がる。長軸0.85m，短軸0.5m，深さ0.2mを測る。床面はほぼ平坦で，埋土は灰褐色系の砂質土からなる。ごく微量の土器片を見るにすぎない。

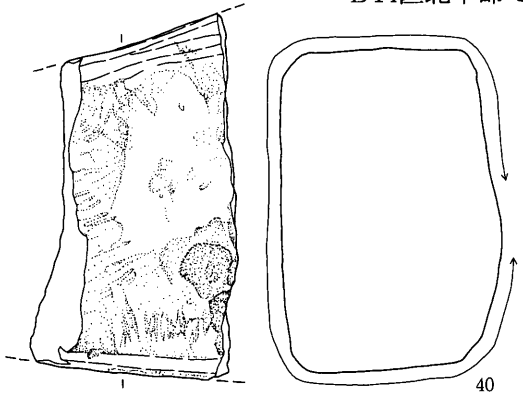
ＳＫ18

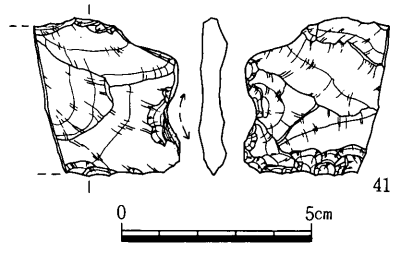


西部の主柱穴列外側に位置する楕円形土坑である。長0.8m，幅0.6m，深さ0.2mを測る。埋土は灰褐色砂質土で遺物は伴わない。

ＳＤ14

Ｂ14区北半部で検出した小溝である。４区中央部の竪穴住





挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
40	大形砥石	10.4	19.2	11.6	3800.0	砂岩	全面使用顕著で平滑、多角柱状　擦痕顕著	折損
41	打製石包丁	3.7	4.1	0.6	15.2	安山岩	縁辺部片面調整　抉り部摩耗微弱	折損

第128図　４区ＳＨ01出土遺物３（１／４・１／２）

居群中，ＳＨ02主柱穴列の北東に位置する。緩やかに南西に弧を描き，延長4.5ｍ分を確認している。断面形は半円形で幅0.5～0.7ｍ，深さ0.15～0.2ｍを測る。埋土は灰褐色土で下層はやや粘性に富む。両端は比較的急激に立ち上がる形状を示すが，位置関係から竪穴住居外周溝の残骸の可能性を指摘しておきたい。遺物は検出していない。

本住居に関連して中央土坑と柱穴から少量の遺物を検出しているが，付帯土坑ではわずかにＳＫ17から大形砥石（40）が出土しただけである。甕（24）は小片だが，口縁部がやや伸び，端部の肥厚も弱いことから後期初頭でも新しい様相といえる。（25）の玉縁状に肥厚した口縁部形態は他に例がない。（29）は小形でやや短い円柱状軸部を持つ形態の脚裾部であろう。大形鉢（27）は拡張口縁形態だが，肥厚・拡張及び口縁部直下の屈曲がかなり鈍い。把手付広片口皿側縁部（32）の内面ハケ調整は本器種では少ない調整である。小形脚（36）は鈍い端部肥厚があるが，内面横ケズリは施されず裾部の透かし孔はやや大きい点で，脚端部を肥厚する形態と円錐状脚部形態の中間的な様相を持つ。以上の資料は後期初頭でも新しい様相が強いものである。

また本住居では大形砥石２点が出土した点は注意される。完形の砥石（39）は中央土坑出土。方柱状の砂岩の全側面を使用しており，特に稜部に狭い使用面が並ぶ。使用面はおおむね平坦である。

（40）はより明瞭な方柱状を呈する大形砥石であるが，両端を折損し，中央部が残るにすぎない。やはり全面を使用し稜部は面取り状に狭い面が並ぶ。また各面とも横位の太い擦痕が顕著である。（41）は安山岩系統の打製石庖丁。抉り部を除き，縁辺は粗雑な片面調整で仕上げる。

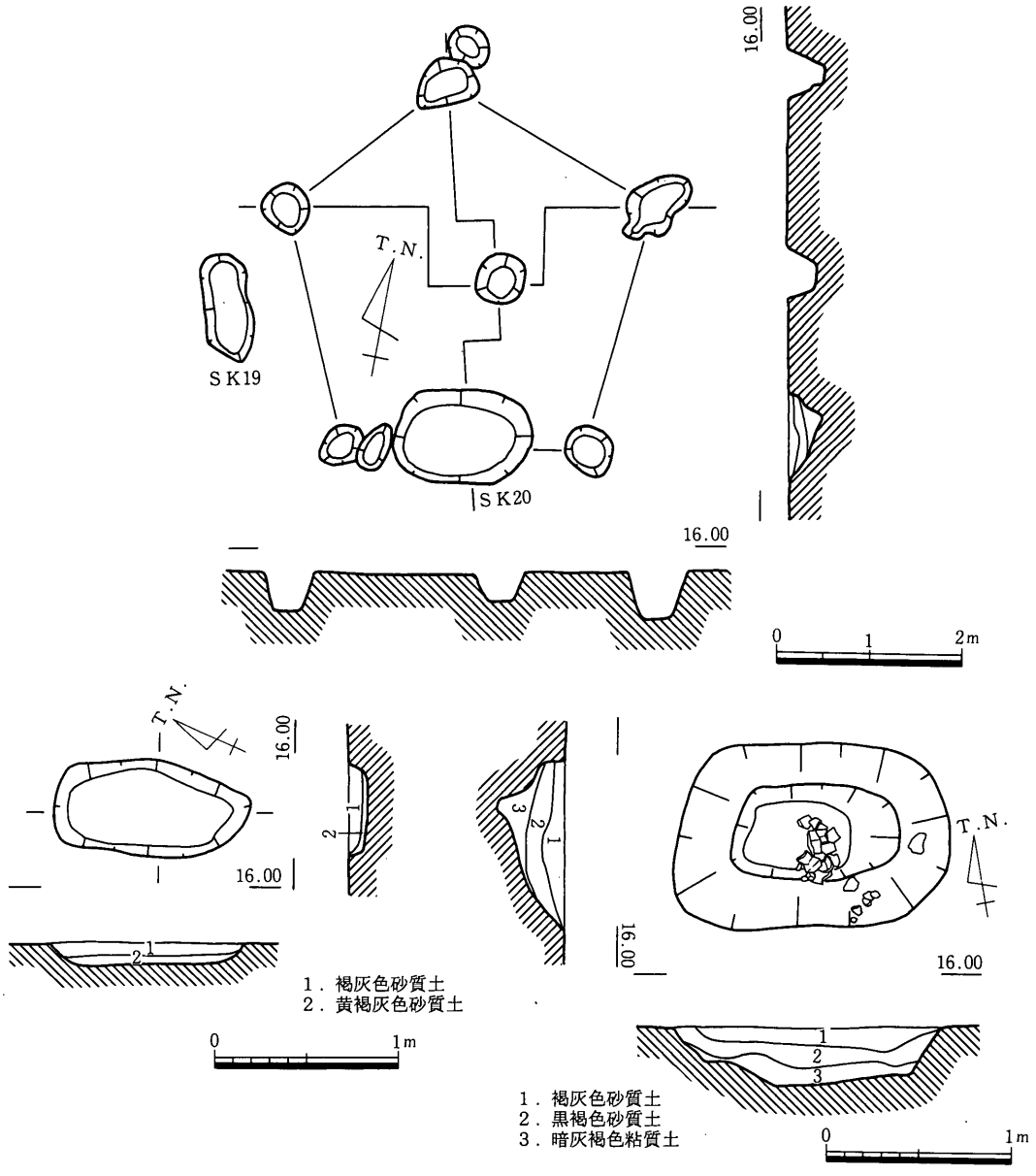
ＳＨ05（第129・130図）

４区中央部の竪穴住居群中にあり，北接するＳＨ04とは重複する。本資料は調査時に想定できずに，のちに図上から復元した資料である。本住居も著しい削平により竪穴本体は失っており，柱穴列などから復元した資料である。主柱は５本からなり，ほぼ径４ｍの円弧上に巡る。柱間隔は2.2ｍ～2.7ｍで柱穴は深さ0.5ｍ程度残存している。柱穴列中央よりやや東に偏した位置に径0.5ｍの浅い円柱状の掘込みがある。ＳＨ04と同様の中央土坑の可能性がある。また南端２主柱間に位置する長方形土坑ＳＫ20は位置関係から本住居付帯施設の可能性がある。径５ｍ強の竪穴住居を復元できるであろう。

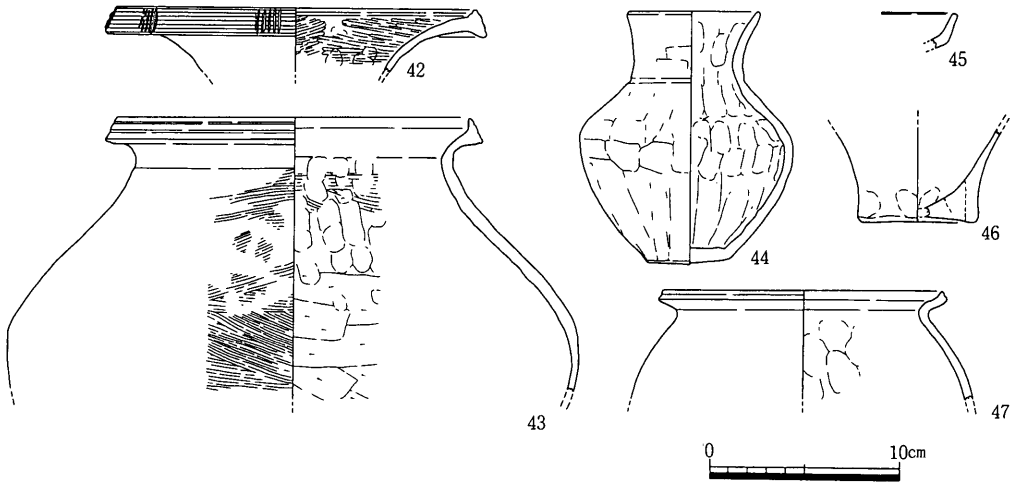
遺物は主柱穴から少量出土している。小形器台（42）は鈍く肥厚した口縁端部を小さく

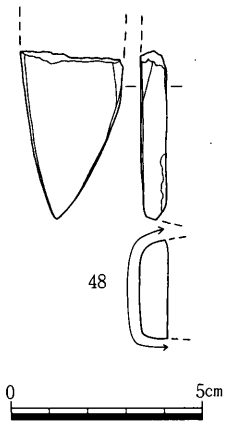
上下に摘み出し，端面には短刻線文を施し，内面の分割横ミガキをよく留めている。大形甕（43）は口縁部を鈍く肥厚し，端部を強く摘み上げる形態。小形の直口壷（44）は外面板状工具によるナデ調整でやや粗雑。甕（47）は口縁部の肥厚・拡張が弱い点や丸みを帯びた肩部の形状等からやや違和感のある形態。底部（46）と共に，片岩粒を含む胎土で明らかな搬入品である。（48）は柱状片刃石斧片。側面まで丁寧な研磨が及ぶ。

本住居は後期初頭に属する。



第129図　4区SH05・SK19・20平・断面図（1／80・1／40）





挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
42	小形器台	18.8			細・極多、中・少	明赤褐色	口縁部は強く外反して開く。端部は外方に摘み出すと共に上方も突出する。端面は凹線後ﾊｹ原体刺突の６条１単位の短刻線。内面分割横ﾐｶﾞｷ	2/5	角閃石極多、石英等多
43	大形甕	18.0			細・極多、中・普	明褐色	短く内傾する頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に摘み出すと共に下方もやや張る。端面に凹線。肩部外面横ﾊｹ、内面上半部横ﾊｹ後指押さえ。最大径以下横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多（含粗粒）、石英等・赤色粒
44	直口壺	6.7	12.3	4.0	細・極多、中・普	橙色	体部は強く張り、外傾する口頸部は短い。端部は丸く納める。頸基部に鈍い凹線１条。外面ﾅﾃﾞ調整だが凹凸やや顕著。内面下半部ﾅﾃﾞ上げ、上半部指押さえ。	完存	角閃石極多、石英等
45	高坏				細・極多	橙色	中位で鈍く屈曲して上半部は短くやや外傾する。端部は丸く納める。		角閃石極多、石英等少
46	甕？			6.2	粗・普	明褐灰色	底部縁辺が張り出してわずかに窪み底状。外面下端に指押さえ。	1/2	片岩　搬入品
47	甕	14.6			中・普	浅黄橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は摘み上げて、狭い端面に凹線１条、内面指押さえ。	1/5	片岩・赤色粒　搬入品

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
48	柱状片刃石斧	4.4	0.7	2.7	16.7	片岩	側面も研磨顕著	先端部片

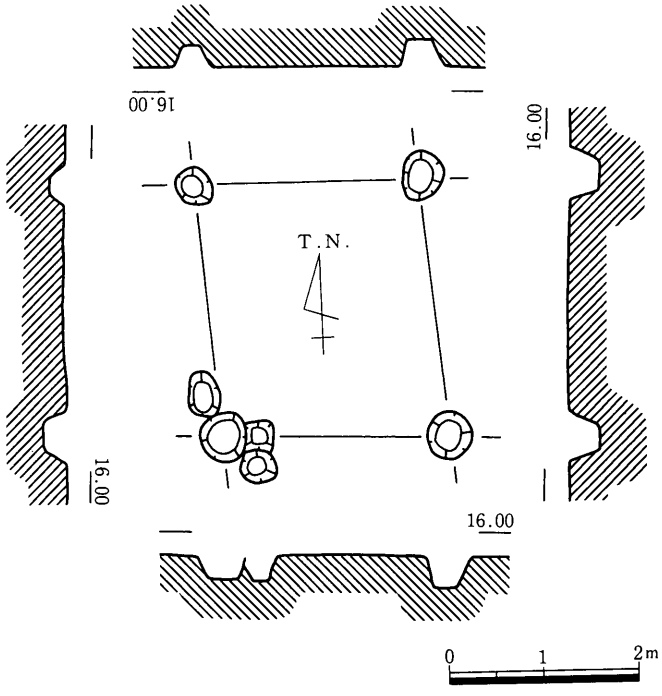
第130図　４区ＳＨ05出土遺物（１／４・１／２）

SK19

B13区の竪穴住居SH05主柱穴列の南西側で検出した土坑である。本土坑は検出位置から見てSH05付帯施設の可能性がある。南北方向に主軸を持つ長楕円形の浅い土坑である。長軸1.1m，短軸0.5m，深さ0.1mを測る。床面はほぼ平坦で埋土は単層である。ごく微量の土器片を見るにすぎない。

SK20

B13区の竪穴住居SH05主柱穴列の南側で検出した土坑である。東西方向に主軸を持つ長楕円形の土坑である。本土坑は検出位置から見てSH05付帯施設の可能性がある。壁の立ち上がりは四周共に比較的緩やかで，床面はほぼ平坦である。長軸1.5m，短軸1.0m，深さ0.32mを測る。埋土は大別して2層に区分できる。上層は灰褐色～黒褐色の砂質土からなり，下層は暗灰褐色の粘質土である。土坑中央部の下層中に上記した土器片の集中を見る。



第131図　4区SH06平・断面図（1／80）

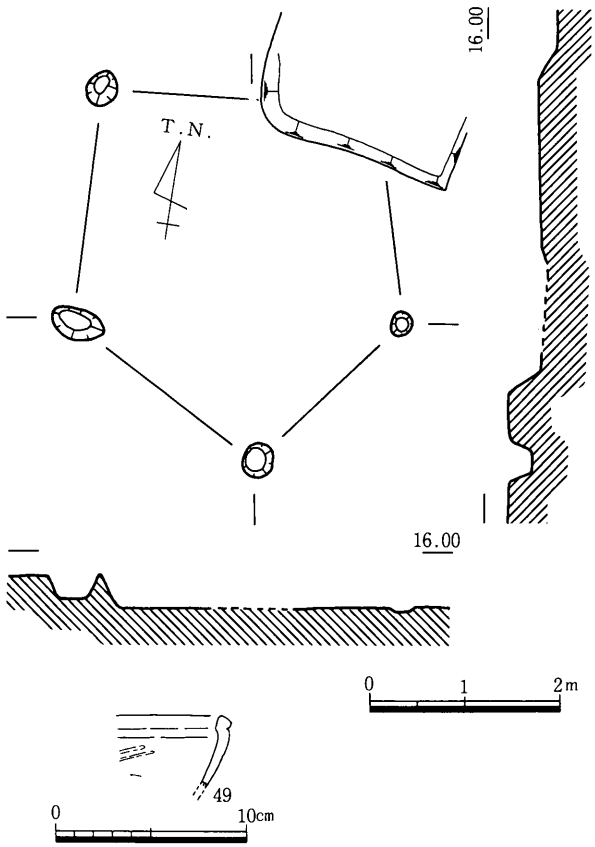
ＳＨ06（第131図）

４区中央部の竪穴住居・柱穴集中域中の，矩形に配された４柱穴を主柱として図上から想定した参考資料である。深さ0.3～0.4ｍの４穴は南北2.6～2.7ｍ，東西2.4ｍの矩形に並ぶ。柱穴列内に小穴はあるが，規模形状などから中央土坑としては特定しがたい。その外の付帯施設も確認できず，甚だ不安定な資料であるが，可能性として提示しておく。遺物は伴っていない。

ＳＨ07（第132図）

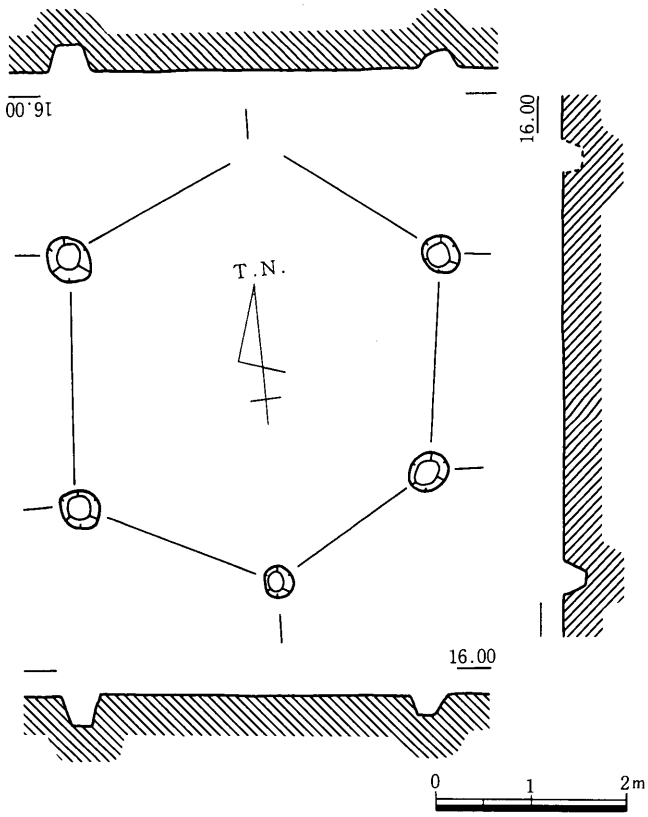
本例も後に図上復元した参考資料である。４区中央部の竪穴住居群の北端にあり，掘立柱建物ＳＢ10と重複する位置になる。近世以降の撹乱により北東隅の１穴を欠くが，本来的には径４ｍ強の円弧上に並ぶ５本の主柱からなる竪穴住居と想定している。柱間隔は2.1～2.5ｍで，各柱穴の残りは0.2～0.3ｍ程度と良くない。中央穴その他は一切確認できていない。柱配置から想定すれば径５ｍ強の円形住居となるであろう。

少量の土器小片を柱穴から検出している。大形鉢（49）は口縁部直下外面に凹線１条を施した後に口縁端部を強く横ナデしたために，凹線文はつぶれてややいびつになっている。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
49	鉢				細・極多	にぶい黄橙色　灰黄色	内湾気味に開き、口縁端部は肥厚気味に丸く納める。外面直下に沈線２条。内面横ミガキ。		角閃石極多、石英等少　赤色顔料

第132図　４区ＳＨ07平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）



第133図　4区ＳＨ08平・断面図（１／80）

ＳＨ08（第133図）

４区中央部の竪穴住居群北部にあり，復元上径４ｍ強の円弧上に配列された比較的整った５柱穴から図上で想定した資料である。

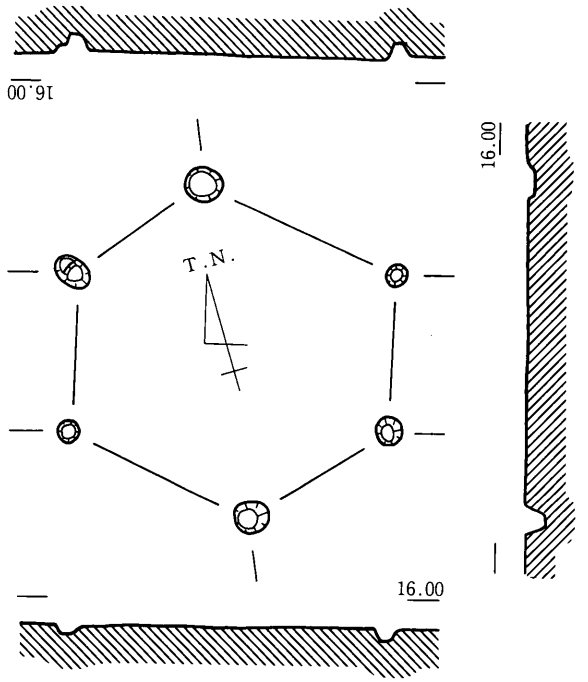
北端１穴は未検出であるが，主柱は本来６本からなるものと想定している。柱間隔は2.0～2.5ｍで各柱穴の残りは0.2～0.3ｍ程度と良くない。中央穴その他は一切確認できていない。柱配置から想定すれば径６ｍ弱の円形住居となるであろう。遺物は伴わない。

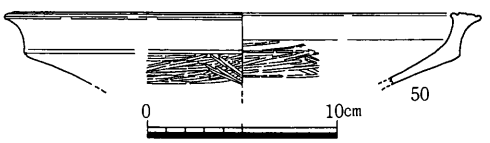
ＳＨ09（第134図）

本例も後に図上復元した参考資料である。４区中央部の竪穴住居群の北東部にある。径４ｍ弱の円弧上に並ぶ６本の主柱からなる竪穴住居と想定している。柱間隔は1.6～2.1ｍで，ややばらつく。各柱穴の残りは0.1～0.2ｍ程度と良くない。柱穴列の中央北側に小穴

があるが，規模から中央穴とは見做しがたい。その他の付帯施設も一切確認できていない。柱配置から想定すれば径５ｍ強の円形住居となるであろう。

柱穴から出土した高坏（50）は，中位の屈曲が顕著で，上半部の外傾及び口縁端部の外方拡張が極端ではない点から，後期初頭の古い様相とみなしうる。





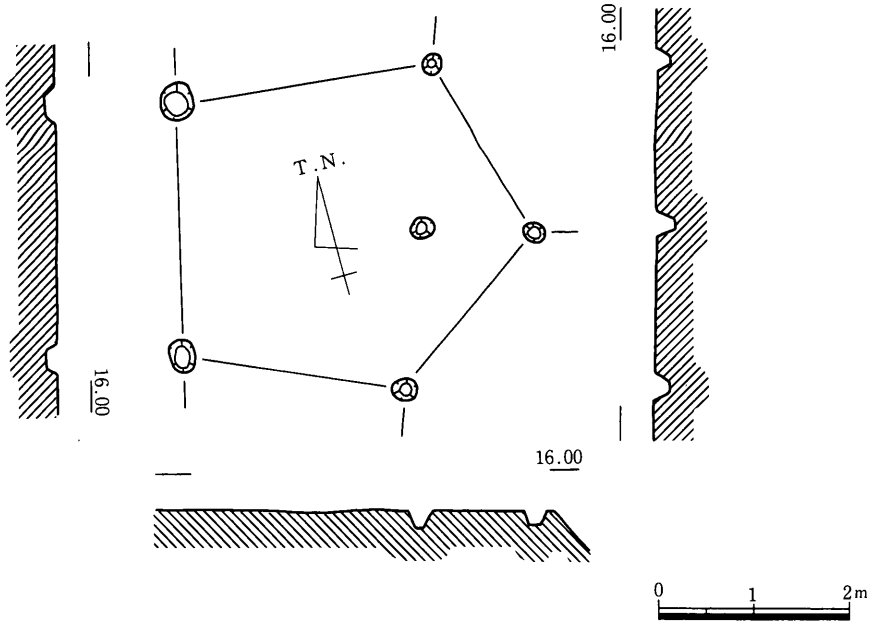
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
50	高坏	22.0			細・極多	橙色	中位で強く屈曲して上半部短く直立。端部は外方に摘み出すと共に内方も突出。頂部平坦面沈線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部内外面横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等多

第134図　４区ＳＨ09平・断面図（１／80）および出土遺物（１／４）

ＳＨ10（第135図）

本例も後に図上復元した参考資料である。４区中央部の竪穴住居群の東端にあり，大型灌漑水路ＳＤ16に近接しており，これとの共存は難しい。東西にやや長い長径４ｍ弱の楕円弧上に並ぶ５本の主柱からなる竪穴住居と想定している。柱間隔は2.0～2.7ｍで，ややばらつくが，これら柱穴列は他の柱穴群より離れた位置にまとまっておりこの他の組合せの想定はかなり困難な一群である。各柱穴の残りは0.2ｍ程度と良くない。中央穴その他

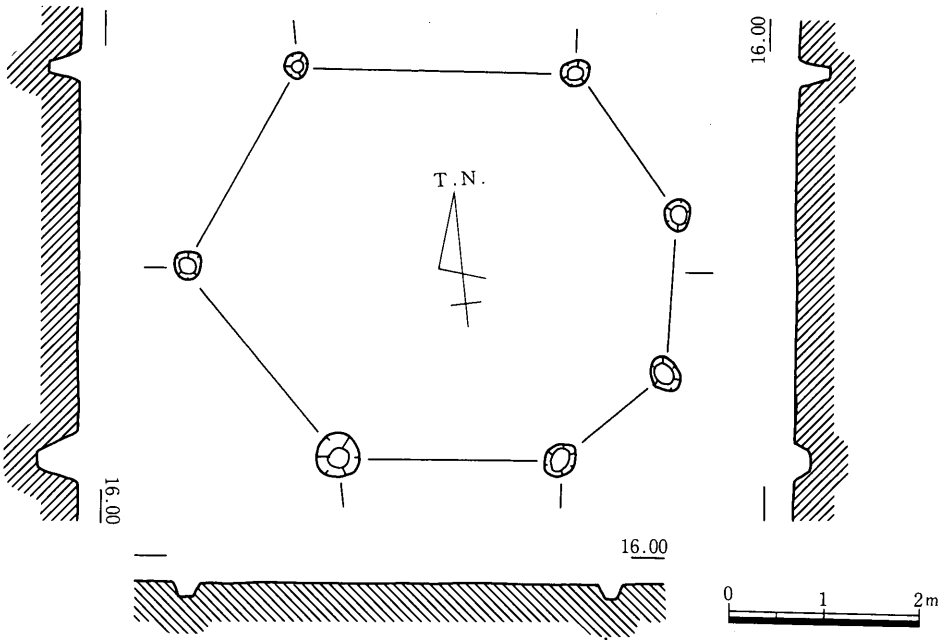
は一切確認できていない。柱配置から想定すれば径６ｍ弱の円形住居となるであろう。遺物は伴わないが，ＳＤ16が後期末葉まで機能することを考えると，本住居は同溝開削以前に位置づけるべきであろう。



第135図　４区ＳＨ10平・断面図（１／80）

ＳＨ11（第136図）

４区中央部の竪穴住居群の東端にあり，径５ｍ強のやや東西に長い楕円弧上に並ぶ７柱穴から図上で想定した資料である。柱間隔は1.4～2.9ｍでややバラツキが大きい。各柱穴の残りは0.2～0.4ｍ程度と良くない。中央穴その他は一切確認できていない。柱配置から想定すれば径７ｍ弱の円形住居となるであろう。遺物は伴わない。



第136図　4区ＳＨ11平・断面図（１／80）

ＳＢ01（第137図）

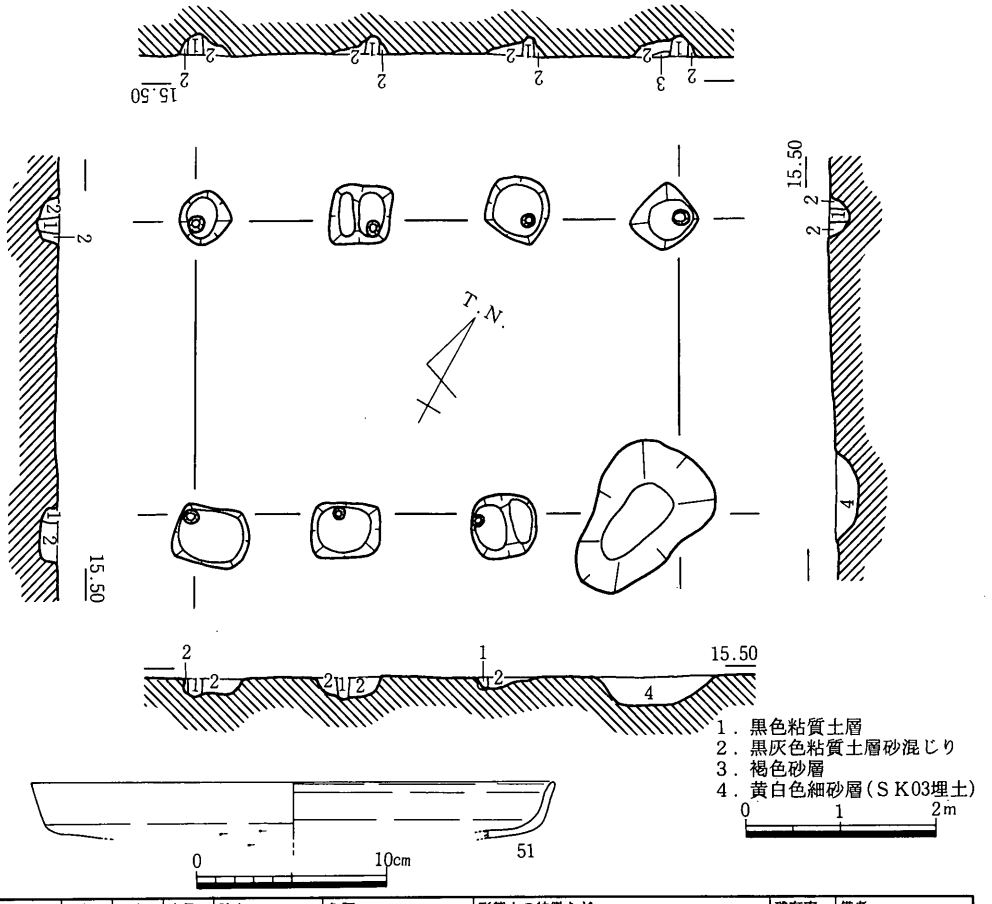
４区西端，Ｃ11区で検出した掘立柱建物である。４区中央の遺構集中区域の西限を画する南北溝ＳＤ08より約10m東方に位置する。周囲に同時期の遺構は希薄であるが，３区東端にも同様の主軸方位をもつ掘立柱建物群が連続するが，周囲に他種遺構は希薄である。

本建物は桁行３間（5.1m），梁間１間（3.0m）の側柱建物で，主軸方位はＮ30°Ｅ，床面積15.3㎡を測る。なお北東隅柱穴は近世土坑と重複し残存しない。

柱穴掘り方は概ね0.5m角の方形を呈するが，辺は必ずしも建物軸と一致しない。残存深は0.2m程度に過ぎない。残存する柱穴全て径0.1m前後の掘り方規模に比して著しく小振りな柱痕を確認した。それらの下端レベルは標高15.2m前後でほぼ揃う。

なお柱痕位置から，建物両側とも桁方向の柱通りはかなり整い，梁間間隔もほぼ等しいことが確認できるが，桁方向の柱間間隔は1.5～1.9mとばらつきが大きく，両側があまり対応していない。桁に直交した梁の架構は困難であろう。

高坏（51）は浅い坏部で，わずかに外傾して立ち上がる形態。端部は拡張・肥厚せずに丸く納める。主流となる形態ではないが，後期初頭に属する。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
51	高坏	27.4			細・極多、中・普	にぶい黄橙色	浅い坏部。わずかに外傾して立ち上がり端部は尖る。坏外底面横ケズリ、他横ナデ。	1/4	角閃石極多、石英等

第137図　4区SB01平・断面図（1／80）および出土遺物（1／4）

SB02（第138・139図）

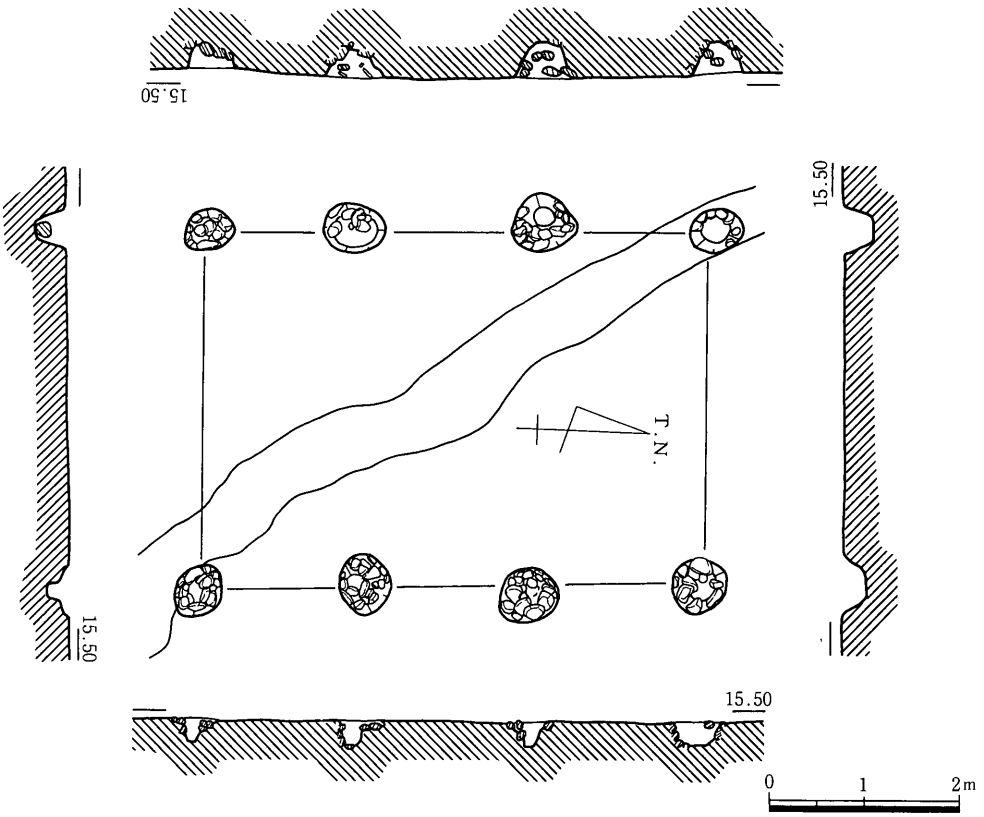
4区西部，C12区で検出した南北棟建物である。SD08・16によって東西を画された4区中央の遺構集中区域の西北隅に位置する。すぐ北に同様の規模・形状・主軸方位をもつSB03があり，本建物柱穴が小規模溝SD11の西端部を切っている。

本建物は桁行3間（5.4m），梁間1間（2.7～2.8m）の側柱建物で，主軸方位はN3°E，床面積14.9㎡を測る。柱穴掘り方は径0.6m前後の略円形を呈し，残存深は0.2～0.3mを測る。柱穴掘り方内に拳大の円礫多数を包含しており，掘り方埋め戻しに円礫を多用した可能性があるが，本建物周辺は地山下層の砂礫層が微隆起し，遺構面にも拳大の円礫多数が露出しているので断定はできない。柱痕は埋土の差異としては把握できなかったが，多くの柱穴で中央部に径0.1m内外の円柱状に礫の空隙部が認められるので，この部分を

柱位置と想定した。それらの下端レベルは標高15.1m前後でほぼ揃う。

また建物両側とも桁方向の柱通りは比較的整い，梁間間隔もほぼ等しい。桁方向の柱間間隔は1.6～2.0mとばらつきが大きいが，両側はよく対応している。

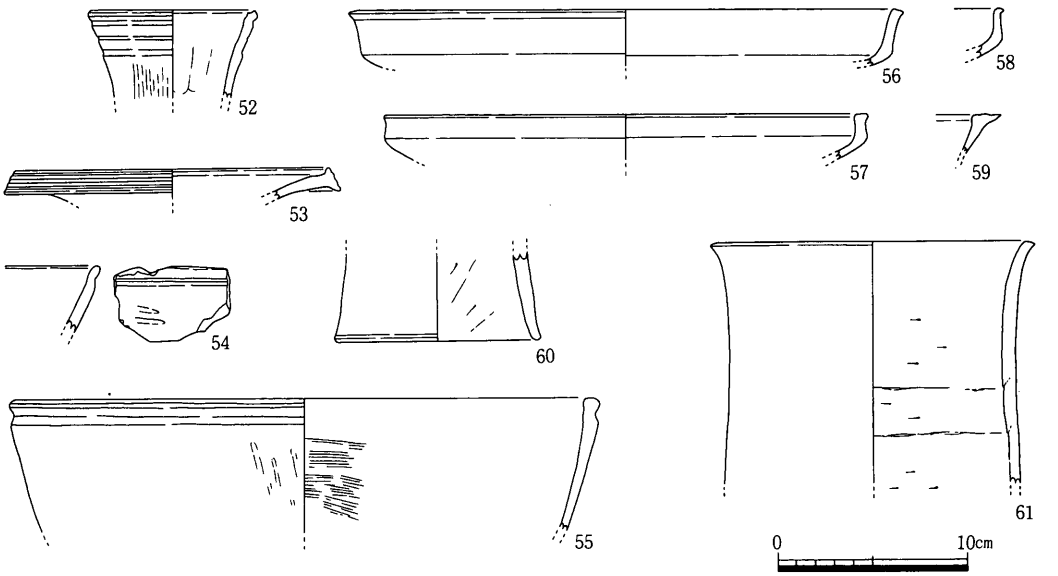
掘立柱建物としては珍しく，西側南第2穴等から何れも小片ではあるが比較的まとまった遺物の出土を確認した。直口壷（52）は口縁部にのみ不明瞭な凹線文を見る。大形鉢（54）は口縁部直下に不明瞭な凹線1条。（55）は拡張口縁形態だが，端部の摘み出しは弱く，上半部の本来の屈曲も口縁直下の幅広い凹線に変化している。（56～58）は浅い直立口縁系統の高坏だが，端部の摘み出しや屈曲部が強調されている点で本来の形態が変化しつつある。小片だが拡張口縁形態の（59）も口縁部の鈍化が認められる。また（60）は調整も考慮してとりあえず，開きの弱い形態の小形器台脚部と見做したが，端部形状などか



第138図　4区ＳＢ02平・断面図（1／80）

らやや不安が残る。直口壷口縁部の可能性もある。大形の円筒形を呈する（61）は器種不明。内面横ケズリから小形器台の可能性もあるが，端部形状に違和感がある。

以上の資料の多くは後期初頭でもより新しい様相が見て取れる。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
52	直口壷	8.8			細・極多	橙色	口頸部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く納める。口頸部縦ﾊｹ後、上半部凹線。	1/6	角閃石極多
53	小形器台	16.5			細・極多	にぶい黄褐色	口縁部は強く外反して開く。端部は上下に摘み出して端面に凹線。内外面横ﾅﾃﾞ	1/8	角閃石極多、石英等少
54	鉢				細・極多	明黄褐色　黒褐色	口縁端部は丸く納め、外面直下に凹線１条。叩き目残す。		角閃石極多
55	鉢	30.6			細・極多	黄褐色	やや内湾気味に立ち上がり端部は四角く納める。口縁部直下に凹線１条。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾊｹ。	1/12	角閃石極多、石英等多　赤色顔料
56	高坏	31.2			細・極多	黒色　灰黄色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は短く外傾。端部は外方に張り気味に四角く納める。内外面ﾅﾃﾞ。口縁端部は丸く納め、外面直下に凹線１条。叩き目残す。	1/16	角閃石極多
57	高坏	25.4			細・極多	明黄褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は短く直立。端部は外方に小さく摘み出す。	1/16	角閃石極多、石英等
58	高坏				細・極多	にぶい黄色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部短く直立。端部は外方に小さく摘み出す。横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、石英等多
59	高坏				細・極多	橙色	上半部短く外傾。端部は外方に引き出すと共に内方も鈍く突出。頂部平坦面凹線３条。		角閃石極多、石英等・雲母
60	小形器台？			10.5	細・極多	橙色　黒色	やや反り気味に伸び、端部尖る。内面ｹｽﾞﾘ。	1/5	角閃石極多
61	？	17.0			細・極多	明赤褐色	太めの口頸部。頸部は直立し口縁部鈍く外反。端部は外方に張り気味に四角く納める。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/6	角閃石極多、石英等

第139図　４区ＳＢ02出土遺物（１／４）

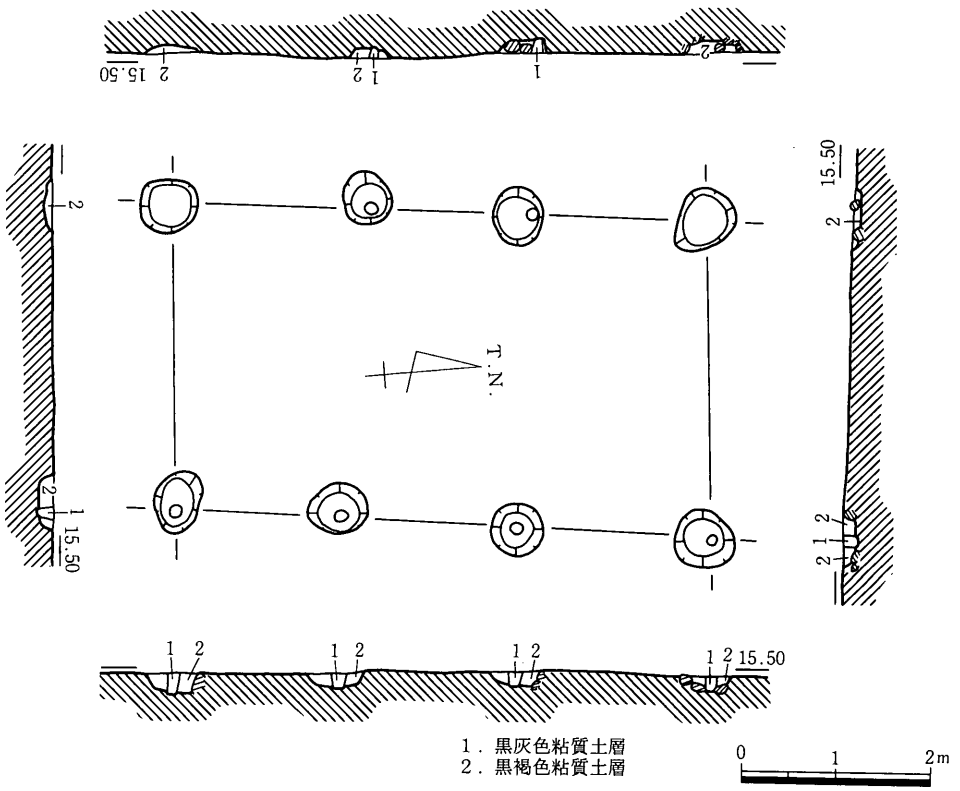
ＳＢ03（第140図）

４区西部，Ｃ12区で検出した南北棟建物である。ＳＤ08およびＳＤ16によって東西を画された４区中央の遺構集中区域の西北隅に位置する。南側に同様の規模・形状・主軸方位

をもつＳＢ02がある。

本建物は桁行３間（5.7～８m），梁間１間（3.3～3.4m）の側柱建物で，主軸方位はＮ６° Ｗ，床面積19.3㎡を測る。柱穴掘り方は径0.5～0.7m前後で，形態は一定しない。残存深は0.1～0.2mと，残存状態はよくない。西側２穴を除く柱穴で，径0.1m前後の，掘り方規模に比して著しく小振りな柱痕を確認した。それらの下端レベルは標高15.4m前後で比較的揃う。

建物両側とも桁方向の柱通りは比較的整う。梁間間隔は北に向かってわずかに広がる。桁方向の柱間間隔は1.7～2.12mとばらつきが大きく，両側があまり対応していない。桁に直交した梁の架構は困難であろう。遺物は出土していない。



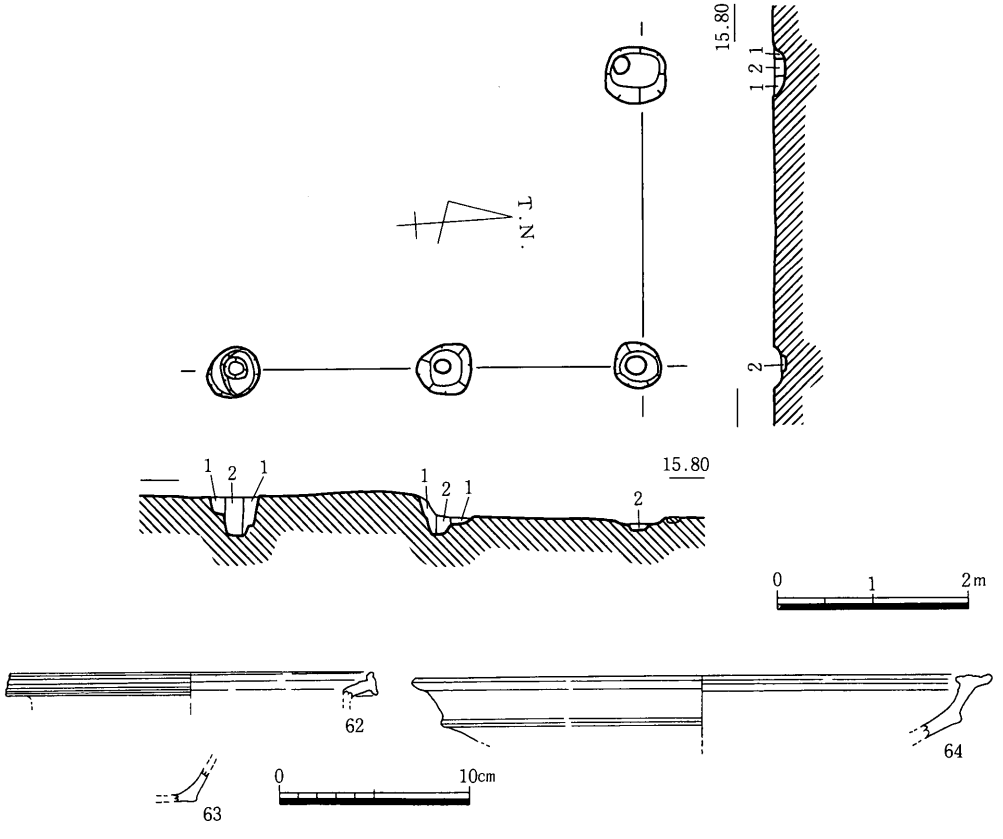
第140図　４区ＳＢ03平・断面図（１／80）

ＳＢ04（第141図）

Ｃ13区で検出した南北棟建物である。野井戸が現存し建物全体を検出することができていない。北辺の２穴および東辺の３穴を確認したにとどまる。また北辺はＣ13区北半地下

げ部分にあり，柱穴底面がわずかに遺存するに過ぎない。本建物は４区中央部の遺構集中区域の北西部にあり，西側には南北棟建物ＳＢ02・03が縦列し，南には東西小規模溝ＳＤ11が走る。

本建物は現状では桁行２間（4.3m），梁間１間（3.1m）で主軸方位Ｎ４°Ｅの側柱建物を想定できるが，ＳＤ11が東側柱穴列の南延長方向にあって，これによって柱穴が破壊されている可能性，つまり桁行３間以上の建物となる可能性も考慮しておくほうがよい。柱穴掘り方は径0.5～0.6m前後で略円形ないしは略方形を呈する。残存深は0.1～0.3mで下端レベルは15.25m前後で揃っている。検出した４穴で他建物よりも一回り大形の径0.15～0.2



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
62	甕	19.1			細・極多	明赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に摘み出しつつ下方も突出。端面沈線３条	1/10	角閃石極多
63	甕？				細・極多	黒褐色　橙色	薄作りの底部。内面ｹｽﾞﾘ。		角閃石極多
64	高坏	30.0			細・少、中・多	橙色	中位で強く屈曲して段。上半部短く外傾。端部は外方に引き出すと共に内方も突出。頂部平坦面凹線３条。	1/16	石英等多、角閃石少　搬入品

第141図　４区ＳＢ04平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）

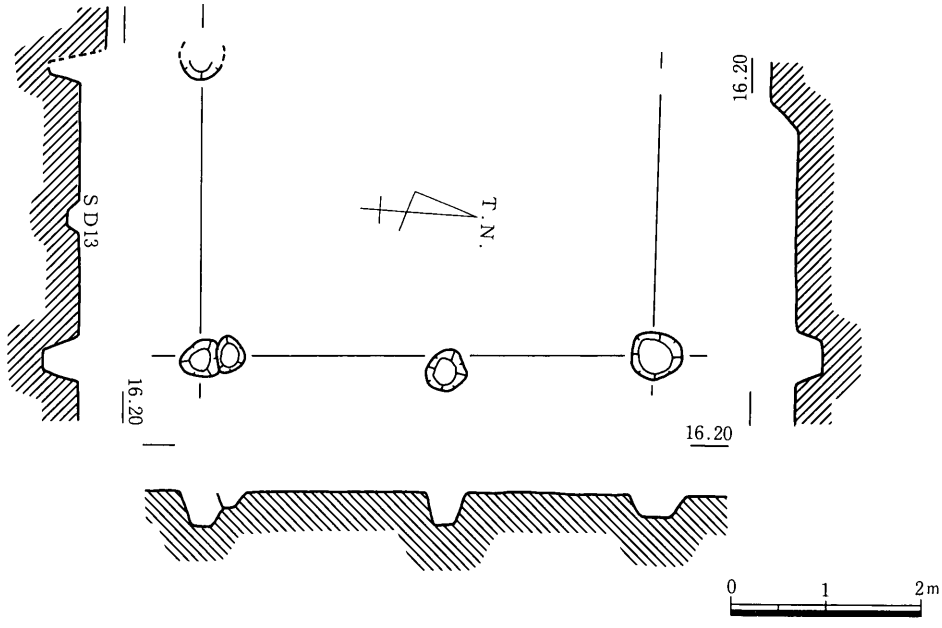
mの柱痕を確認した。桁方向の柱間間隔は2.1～2.2mを測る。

甕口縁部（62）は肥厚せずに上下の摘み出しによって口縁部端面を作り出すどちらかといえば古い様相を示す。高坏（64）は肥厚せずに内外に明瞭に摘み出して拡張口縁とする。これらは後期初頭でも古い様相である。

ＳＢ05（第142図）

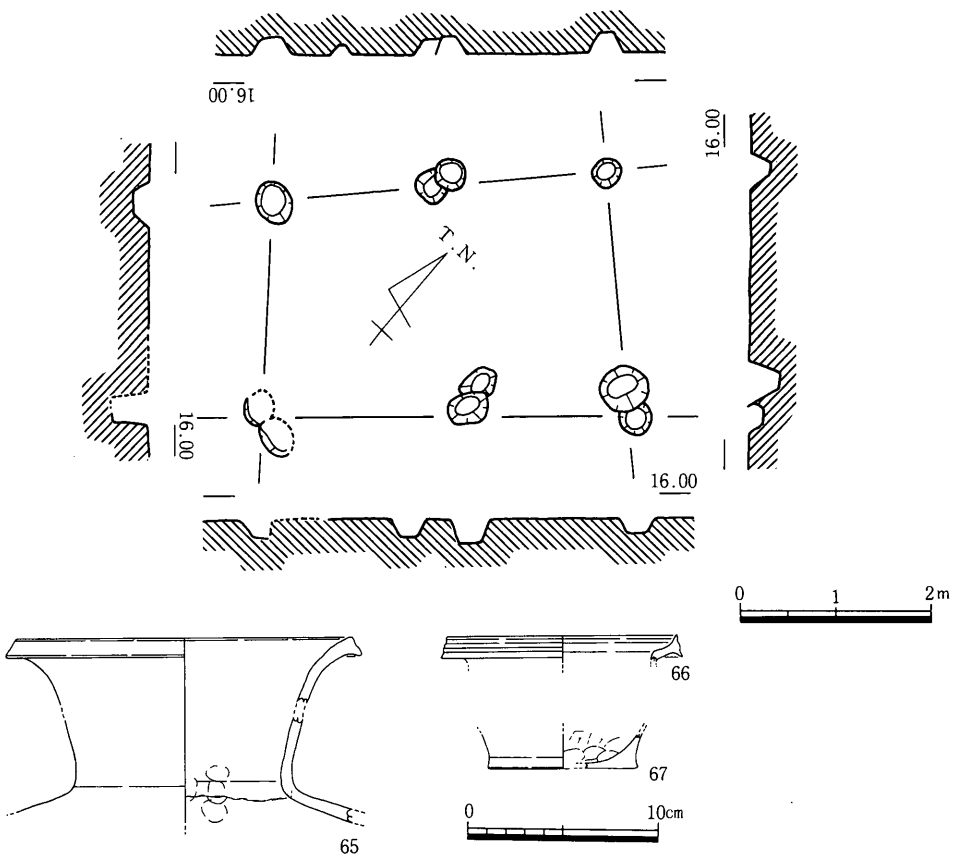
４区西部のＢ13区西端で検出した南北棟建物である。南北溝ＳＤ13と重複関係にあり，北側のＳＢ04および北東方向のＳＢ02・03とほぼ主軸方向を等しくする。つまりこれら４棟の南北棟建物は４区中央部の竪穴住居密集区域の北東方向に群集していることになる。

現行水路によって西列２穴は検出できていないが，桁行２間（4.8m），梁間１間（3.1m）の側柱建物を想定してよいであろう。主軸方位はＮ４°Ｗ，床面積14.9㎡を測る。柱穴掘り方は径0.5m前後の略円形を呈し，残存深は0.2m前後とあまり残りはよくない。桁行方向の柱間間隔は2.2～2.6mとやや差がある。東列南端柱穴が重複しているが，本建物の改修を示すものか確定できない。本建物に伴う遺物は確認していないが埋土と周辺遺構の関係から弥生後期と推定できる。



第142図　４区ＳＢ05平・断面図（１／80）

なお上記した4棟の南北棟建物はほぼ同形・同大の南北2棟が東西2列に並び形を取る。本建物を含む東列は桁行2間のやや小振りな建物であるのに対して，西列2棟は共に桁行き3間のやや大形の建物からなる。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
65	広口壺	17.5			細・極多、中・多	橙色	やや外傾する頸部から口縁部は弱く外反。端部は鈍く肥厚しつつ外方に摘み出し、狭い端面。	1/8	角閃石極多（含粗粒）、石英等多
66	甕	12.0			細・極多	明赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に摘み出して端面に櫛描沈線3条。口縁部内面の強い横ナデで折り返し部に稜。	1/8	角閃石極多、石英等多
67	甕？			7.7	細・極多	橙色	薄作りの底部。内面ケズリ後底面指押さえ。	1/4	角閃石極多

第143図　4区ＳＢ07平・断面図（1／80）および出土遺物（1／4）

ＳＢ07（第143図）

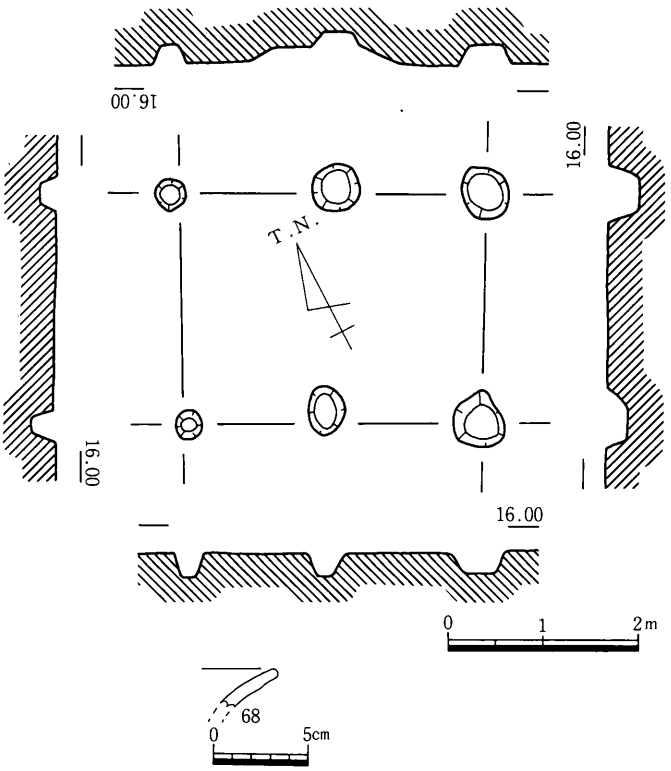
4区中央部，C13・14区南端部で検出した南北棟建物である。4区中央部の竪穴住居・掘立柱建物等の集中区域にあって掘立柱建物ＳＢ08が北接し，井戸状遺構ＳＫ05・06・07

がすぐ西側に並ぶ。また周辺に柱穴が錯綜し，本遺構は調査時には想定できなかった。整理段階に図上で復元したものである。

それによれば本建物は桁行２間（3.5m），梁間１間（2.2～2.5m）の側柱建物で，主軸方位はN47° E，床面積8.2㎡となる。柱穴掘り方は径0.3m前後の略円形を呈し，残存深は0.2～0.3mを測り，下端レベルは標高15.6m前後でほぼ揃う。

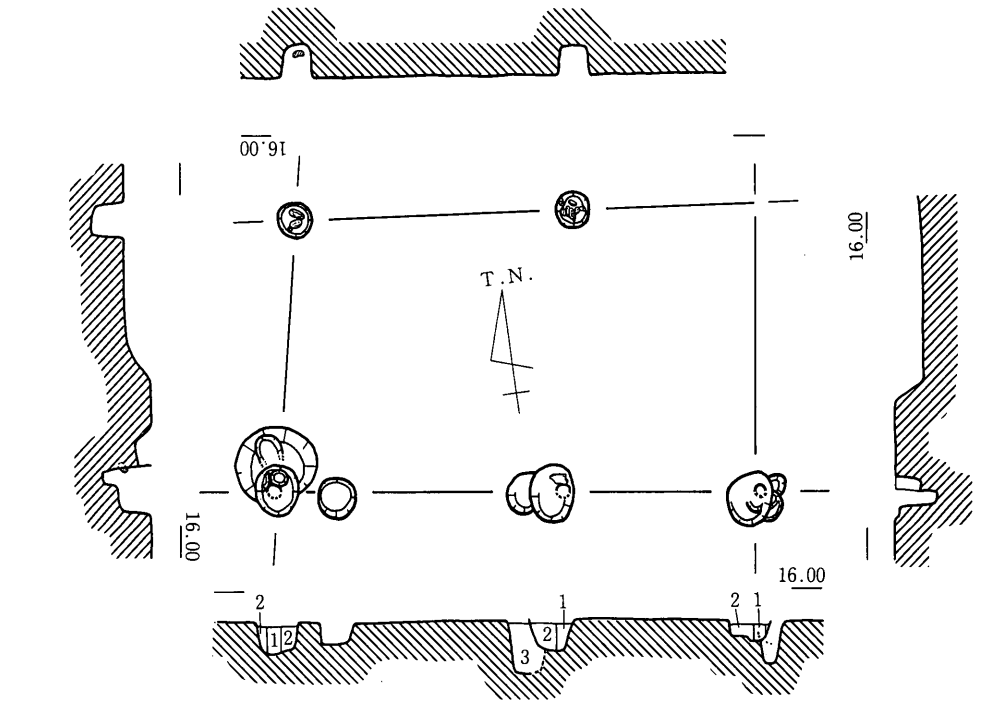
この想定では桁方向の柱間間隔は1.7～1.8mとほぼ揃うが，柱通りは必ずしも整っていない。以上の点から本建物は可能性としての提示に留めたい。

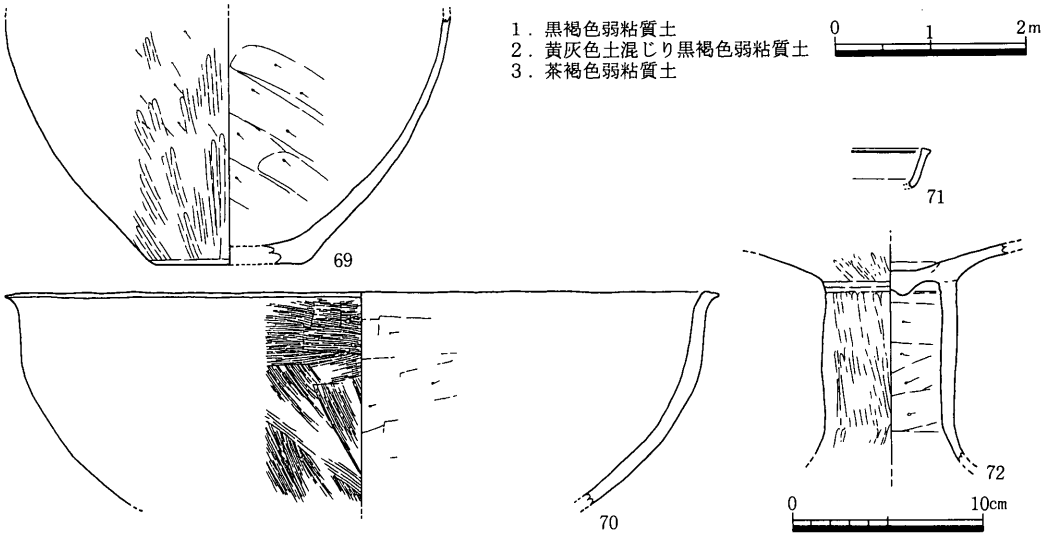
遺物は北西隅柱穴から少量検出されている。広口壷（65）は，鈍く肥厚しつつ端部を摘み出す。この形態の広口壷は垂下口縁が多いが，これは典型的なそれではない。甕（66）は肥厚せずに端部を上下に摘み出す形態。後期初頭でもより古い様相である。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
68	壺？				細・極多、中・多	暗褐色	口縁部は外反して開き端部は丸く納める。横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多（含粗粒）、雲母

第144図　４区ＳＢ08平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）





挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
69	壺？			7.5	細・極多、中・多	橙色	比較的薄作りの底部。外面縦ｹｽﾞﾘ後縦ﾐｶﾞｷ、内面螺旋状ｹｽﾞﾘ。	3/8	角閃石極多（含粗粒）、石英等多
70	大形鉢	35.9			細・極多、中・多	黄橙色	内湾気味に開き口縁部はほぼ直立し、端部は小さく摘み出す。外面口縁部横ﾊｹ以下縦ﾊｹ、内面横ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ。	1/7	角閃石極多（含粗粒）、石英等
71	高坏				細・極多	橙色　黒色	浅い坏部。わずかに外傾して立ち上がり端部は小さく外方に摘む。		角閃石極多
72	脚				細・極多、中・多	明赤褐色	円柱状軸部で、裾部は強く折り返して開く。脚頂部円盤充填。坏部外面放射状ｹｽﾞﾘ後ﾐｶﾞｷ、軸部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｹｽﾞﾘ。	全周	角閃石極多、石英等・雲母多

第145図　４区ＳＢ09平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）

SB08（第144図）

4区中央部，B14区で検出した建物である。4区中央部の竪穴住居・掘立柱建物等の集中区域にあって，本建物西南部は竪穴住居SH04の復元範囲と重複する関係にある。本遺構も調査時に想定できず，整理段階に図上で復元したものである。

本建物は桁行2間（3.0m），梁間1間（2.1m）の小形の側柱建物として想定できる。主軸方位はN61° W，床面積6.3㎡を測る。柱穴掘り方は略円形を呈し径0.3～0.5m前後とバラツキが大きい。また残存深は0.2～0.3mで，残りはよくない。

桁方向の柱間間隔は1.8～1.9mで，柱通りも比較的良く，梁間間隔も大きく違わない。(68）は強く外反した直口壷口縁部片であろう。後期初頭に位置づけられる。

SB09（第145図）

4区中央部，C14区で検出した東西棟建物である。小規模東西溝SD11に沿ってその南側にあり，東側には東西棟建物SB10がある。

なお本建物は北東隅柱穴を未確認であるが，他柱穴の配列状況から，桁行2間（5.1m），梁間1間（2.6m）の側柱建物を想定した。主軸方位はN83° W，床面積13.3㎡を測る。柱穴掘り方は径0.5m前後で，形態は一定しない。南側列では3穴とも1～2基の他柱穴と重複する。北側列2穴ではいずれも掘り方内に拳大の円礫を見る。

また南側列ではいずれも径0.1m強の柱痕を確認した。これらの柱通りに問題はないが，桁行間隔は揃わず梁間も東に向かって広がる傾向にある。

南側列の中央柱穴からやや大形の土器片を検出している。(70）は口縁部が小さく外反する大鉢で，全体形状から見て後出する形態と思われる。(72）脚は円柱状軸部がやや短く，軸頂部に鈍い凹線1条を施し内面には横ケズリが認められる。装飾高坏脚部の可能性もある。

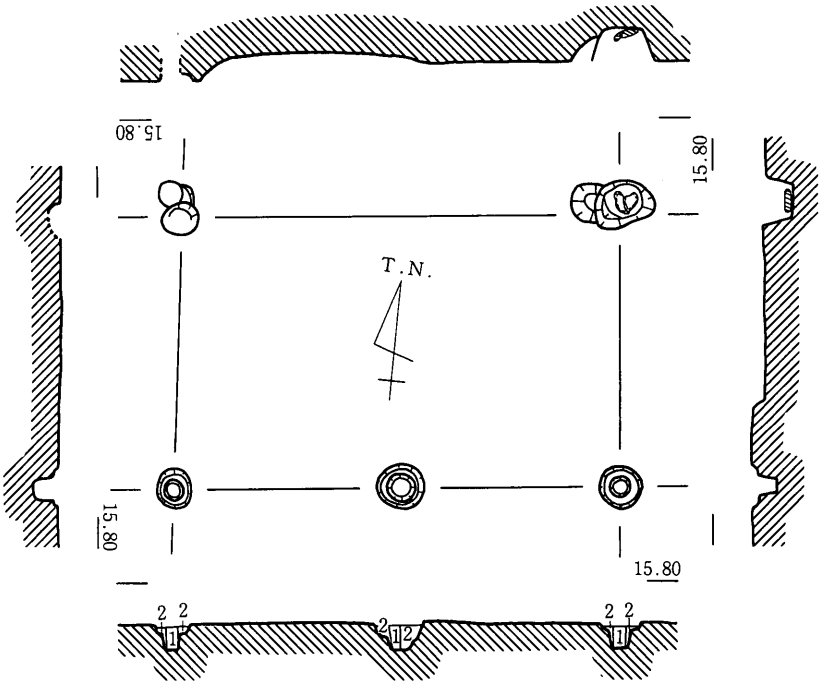
SB10（第146図）

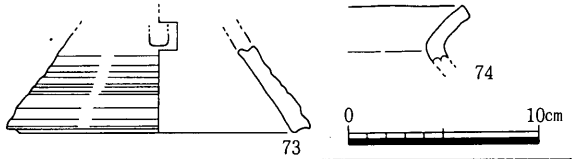
4区中央部の，C14区北東で検出した東西棟建物である。小規模東西溝SD11と一部重複する位置にあり，西側には東西棟建物SB09がある。北側柱穴列は，地下げと近世以降土坑によりかなり損なわれている。北側中央穴はまったく残存しない。

本建物は桁行2間（4.7m），梁間1間（2.8～2.9m）の側柱建物で，主軸方位はN84° E，床面積13.4㎡を測る。柱穴掘り方は径0.5m前後の略円形を呈し，残存深は0.3m前後

を測る。南側列３穴では径0.1m強の柱痕を確認している。それらの下端レベルは標高15.1m前後でほぼ揃い，柱通りも良い。また北東隅柱穴では底面に平石２枚を敷く。

小形器台（73）はわずかに脚端部を肥厚して外面に鈍い凹線文を連続させる。甕（74）はいわゆる「く」字口縁を呈するが，口縁部は伸びていないので必ずしも後出的とみなす必要はない。





挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
73	小形器台			14.0	細・極多、中・多	橙色	脚裾部の開き弱い。脚端上部を強く摘み出して、裾部外面と端面に凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。中位に方形透かし。	1/5	角閃石極多（含粗粒）、石英等多
74	甕				細・極多、中・多	明褐色	口縁部は弱く折り返して端部は上方に張り気味に四角く納める。横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多（含粗粒）、石英等多

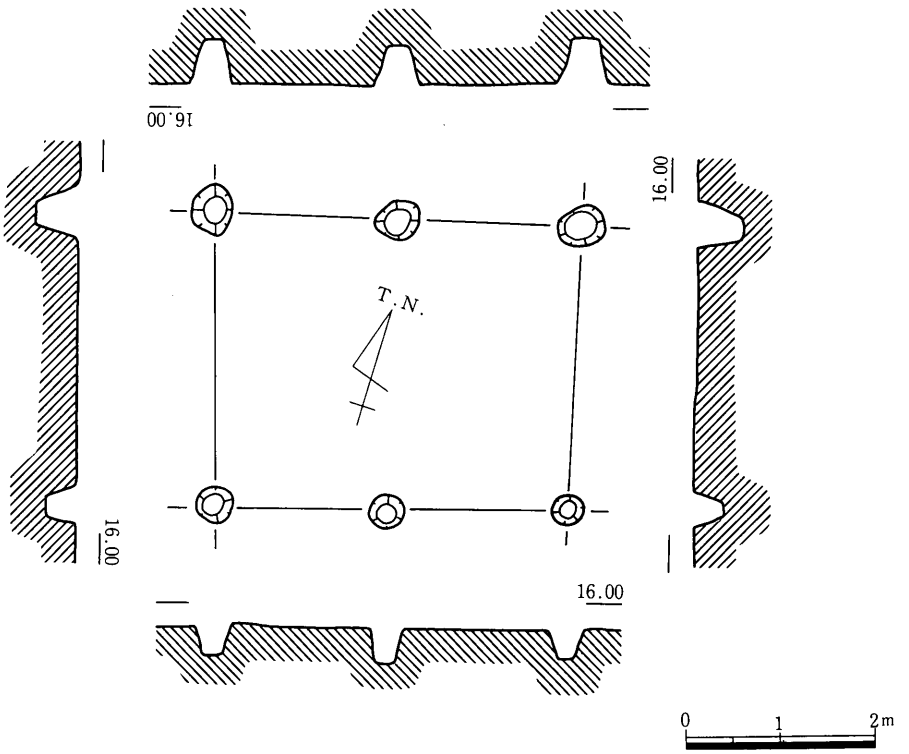
第146図　４区ＳＢ10平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）

ＳＢ11（第147図）

４区中央部，Ｂ14区北端で検出した建物である。４区中央部の竪穴住居・掘立柱建物等の集中区域にあって掘立柱建物ＳＢ05が北接する。本遺構も調査時に想定できず，整理段階に図上で復元したものである。

本建物は桁行２間（3.9m），梁間１間（3.0～3.1m）の側柱建物で梁間が相対的に広い。主軸方位はＮ75° Ｅ，床面積11.7㎡を測る。柱穴掘り方は径0.4m前後の略円形を呈し，残存深は0.3～0.5mを測る。

桁方向の柱間間隔は1.8～2.0mで，柱通りも比較的良く，梁間間隔も大きく違わない。本建物に伴う遺物はない。



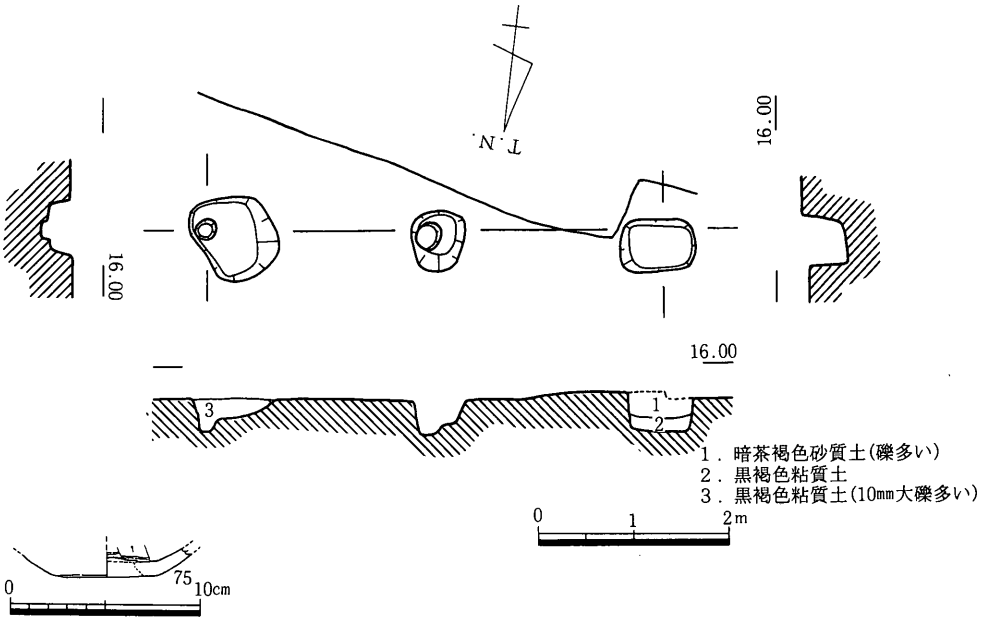
第147図　４区ＳＢ11平・断面図（１／80）

ＳＢ12（第148図）

４区東端，Ｂ16・17区で検出した掘立柱建物である。本建物はＳＤ17東方の掘立柱建物群の一部である。建物南半部は調査区外に続くため北西側柱穴列３穴のみを確認したにすぎない。

主軸方位N83° Eの桁行2間（4.2m）以上の建物を想定することが可能である。確認部分の柱間間隔は2.4m，2.5mとなる。柱穴掘り方は径0.6～0.9mの隅丸方形もしくは長方形を呈し，残存深は0.3m前後を測る。東側2穴では掘り方底面に径0.2m弱の円形の凹部を検出している。柱基部を反映する可能性がある。

伴出遺物は，わずかに底部小片（75）を検出したに過ぎず，時期決定が困難である。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
75	壺？			5.6	細・極多	にぶい黄色	薄作りの底部で体部の張り強い。内面ﾅｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多

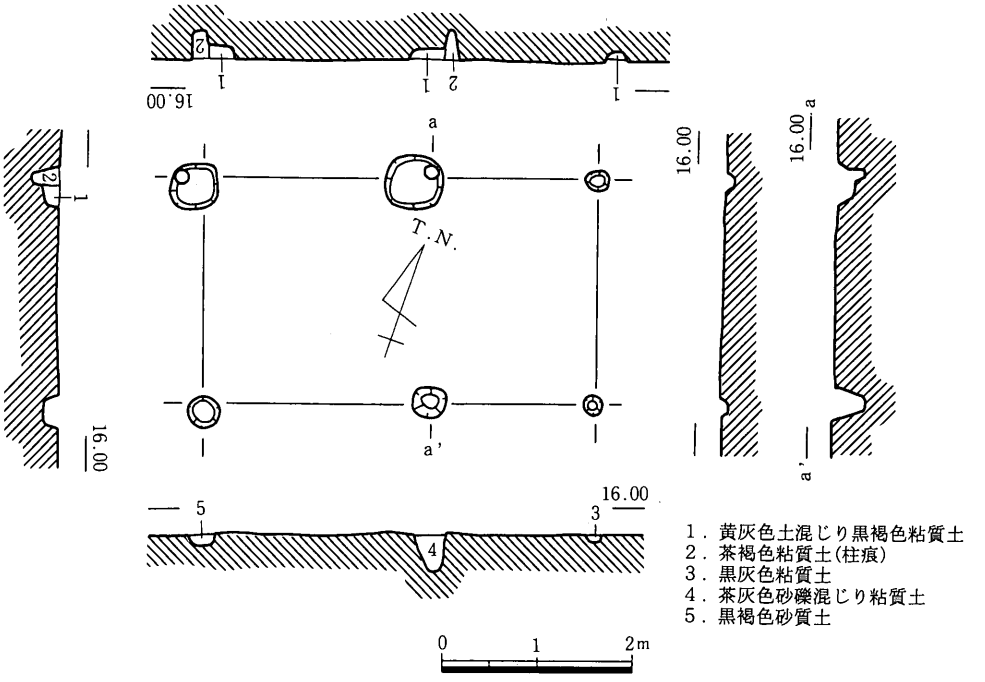
第148図　4区ＳＢ12平・断面図（１／80）および出土遺物（1／４）

ＳＢ13（第149図）

4区東端，Ｂ17区で検出した掘立柱建物である。本建物はＳＤ17東方の掘立柱建物群の一部である。

柱穴掘り方の配列が一定程度規則的であることや周辺の柱穴遺構の分布状態からみても本遺構を，桁行2間（4.1～4.4m），梁間1間（2.3～４m）で主軸方位N71° E，床面積11.0㎡の側柱建物と復元できる可能性は高いが，掘り方寸法，形状や柱間間隔の格差が他建物に比べ大きい。北西の2穴は径0.4～0.5mの隅丸方形を呈するが，他は一回り以上小さい径0.2～0.3m程度の略円形を呈する。また桁行方向でも柱間間隔は1.7～2.4mのバラツキがある。大形の2穴以外は掘り方底面に突出した柱基部の凹部と見ることも可能であるが，それの下端レベルが揃っていない点が気に掛かる。

したがって本遺構の復元案は参考資料としての提示に留めたい。



第149図　4区ＳＢ13平・断面図（１／80）

ＳＢ14（第150図）

４区東端，Ｂ17区で検出した南北棟建物である。本建物はＳＤ17東方の掘立柱建物群の一部で，同群中のＳＢ15の１穴と本建物の北東隅柱穴が重複する。

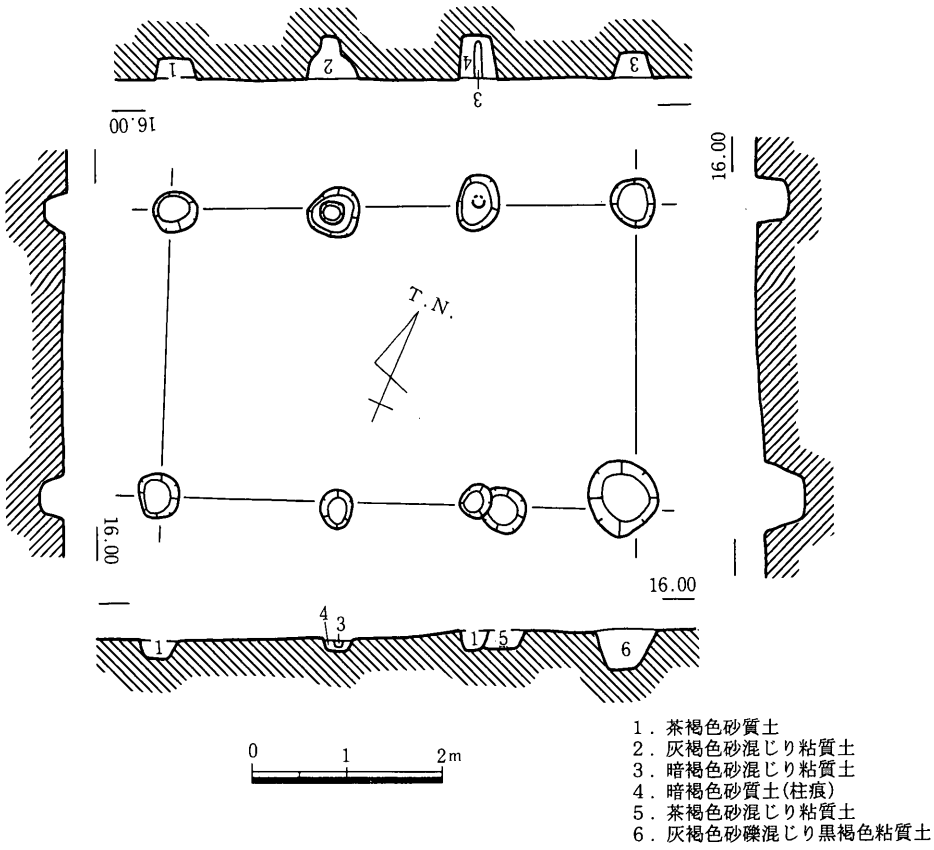
本建物は桁行３間（4.9m），梁間１間（2.9m）の側柱建物で，主軸方位はＮ67°Ｅ，床面積14.2㎡を測る。柱穴掘り方は径0.4m前後の略円形ないしは楕円形を呈し，形態は一定しない。残存深も0.2～0.4mと一定していない。

桁行方向の柱間は1.5～1.9mとばらつくが，両側とも中間が最も狭くなる特徴を持つ。本建物に伴う遺物は検出していない。

ＳＢ15（第151図）

４区東端，Ｂ17区で検出した南北棟建物である。本建物はＳＤ17東方の掘立柱建物群の一部で，同群中のＳＢ14北東隅柱穴と本建物の西側列の１穴が重複する。

本建物は桁行２間（3.8m），梁間１間（2.7～3.3m）の側柱建物で，主軸方位はＮ40°Ｅ，床面積11.4㎡を測る。柱穴掘り方は径0.7～0.8m前後の隅丸方形を呈し，残存深は0.4



第150図　4区ＳＢ14平・断面図（1／80）

～0.5m前後を測る。東側列等で掘り方に比べ著しく小振りの径0.1m強の柱痕を確認している。桁行方向の柱間間隔は1.7～2.1mとばらつくが柱通りは比較的良い。梁間間隔は南端で2.7mだが，北端では3.3mと開く。

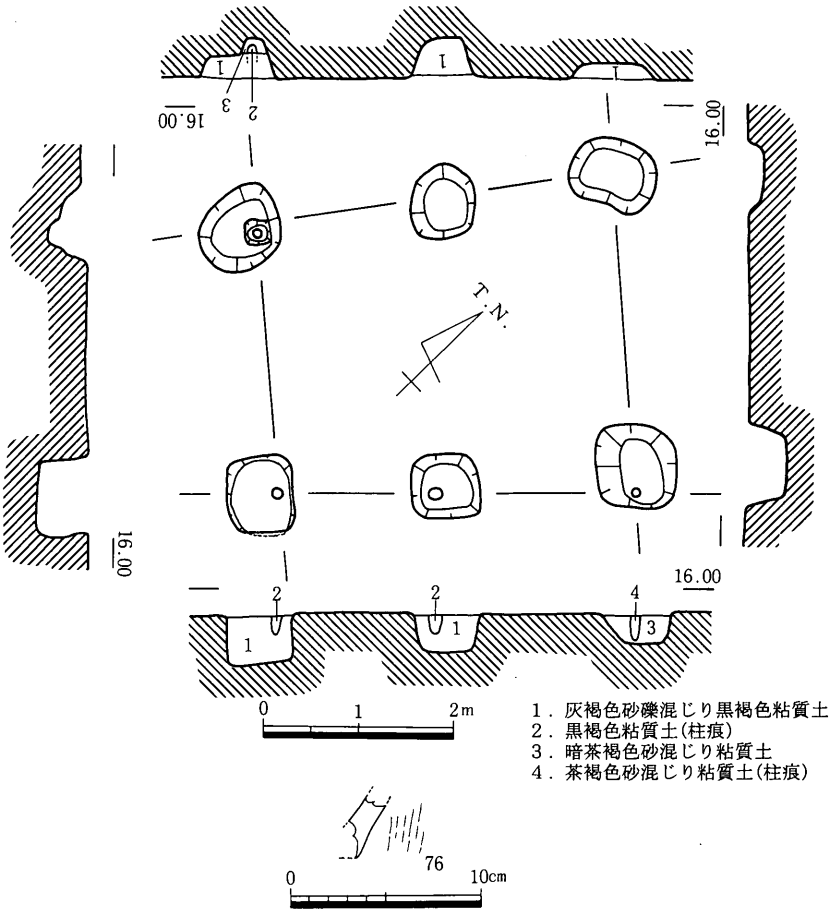
伴出遺物は，わずかに底部縁辺部小片（76）を伴うに過ぎない。

ＳＢ16（第152図）

4区東端，Ｂ・Ｃ17区で検出した南北棟建物である。本建物はＳＤ17東方の掘立柱建物群の一部である。建物東半部は現有道路下に続くため西側柱穴列3穴のみを確認したにすぎない。

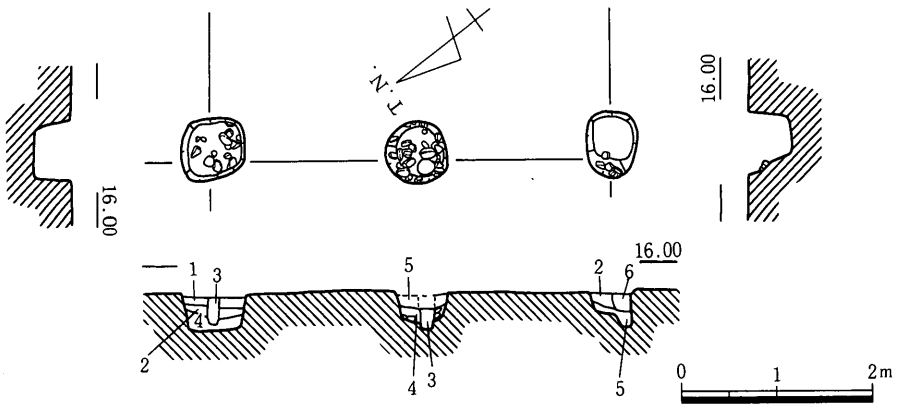
主軸方位Ｎ37°Ｅの桁行2間（4.2m），梁間2.5m以上の掘立柱建物が想定できる。柱間間隔は2.0m，2.2mとなる。柱穴掘り方は径0.5～0.6mの隅丸方形もしくは略円形を呈し，

残存深は0.3m前後を測る。確認しえた柱痕はいずれも径0.1m前後と掘り方に比べ著しく小振りである。掘り方埋土には拳大以下の円礫を多く含む。前後で，形態は一定しない。南側列では3穴とも1～2基の他柱穴と重複する。北側列2穴ではいずれも掘り方内に拳大の円礫を見る。本建物に伴う遺物は検出していない。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
76	?				細・極多	橙色	底部縁辺。外面粗い縦ﾊｹ。		角閃石極多、石英等

第151図　4区ＳＢ15平・断面図（1／80）および出土遺物（1／4）

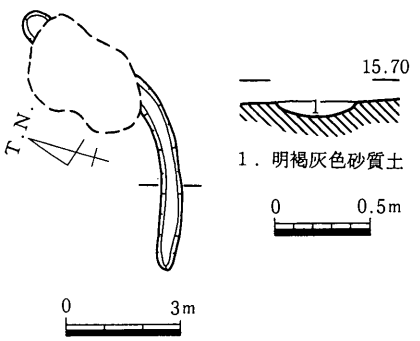


1．暗褐灰色粘質土
2．暗黄褐色粘質土
3．暗灰色粘土(柱痕)
4．暗褐灰色粘質土混じり黄褐色粘質土
5．暗黄灰色粘質土
6．暗褐色粘質土(砂混じり)

第152図　4区ＳＢ16平・断面図（１／80）

ＳＤ01（第153・154図）

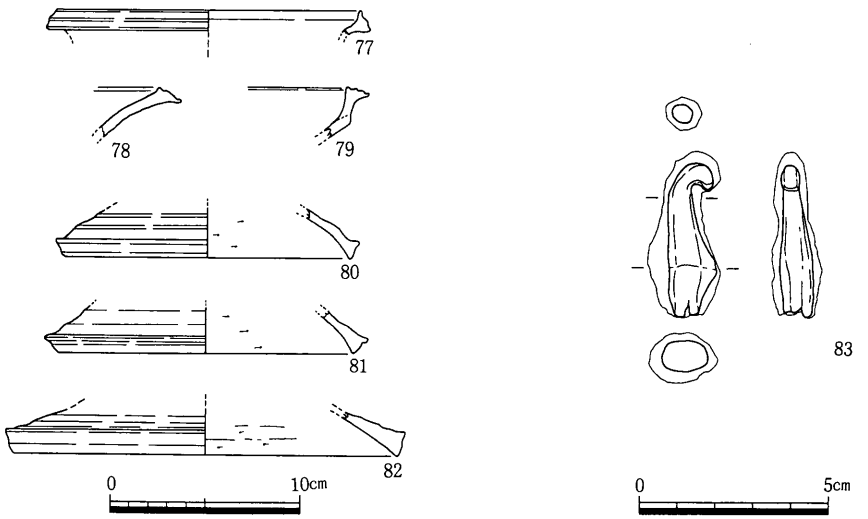
Ｂ11区中央で検出した小溝である。周辺には同時期の小規模な柱穴が散在する程度で，比較的遺構分布は希薄である。幅0.4m，断面皿状で深さ0.1ｍを測る。緩やかに弧を描いて伸び，延長５ｍ程を確認している。壁溝状の小溝であるが，周辺の柱穴との関係から竪穴住居を想定することは困難である。出土遺物は鉄器１の他は少量の土器細片である。



第153図　4区ＳＤ01平・断面図（1／200・1／40）

甕（77）は短い口縁部の端部を強く肥厚して小さく摘み出す。（78）は小形器台口縁部か。外方に強く引き出す。拡張口縁形態の高坏（79）は中位の屈曲がやや鈍い。（81・82）は小形器台脚。脚端の肥厚は鈍いが端上部を小さく摘み出す。鈍く脚端を肥厚しつつ摘み出す（80）はかなり小形であるが裾部凹線からすれば小形器台かも知れない。以上の資料は後期初頭に位置づけられる。

鉄器（83）は現存長4.1㎝を測り，身部は断面矩形の棒状を呈する。一端は強く折り曲げて肥厚気味に丸く納める。他端は欠損している。刀子基部とも考えられるが，当該時期にこのような形態が存在するか疑問がある。今のところ器種不明としておく。



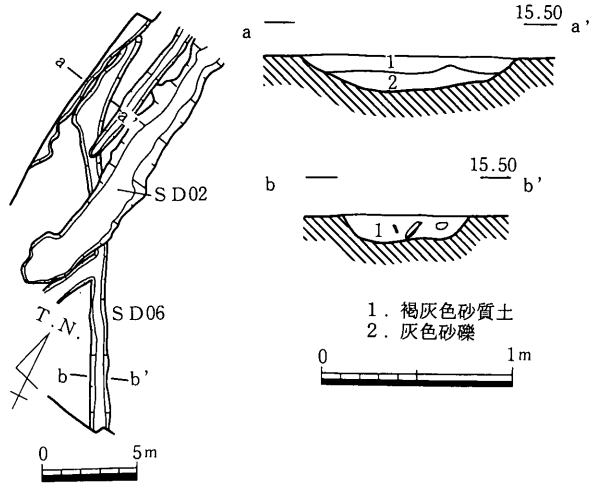
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
77	甕	15.9			細・極多	明黄褐色	強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上方に摘み出すと共に下方も張り出す。端面凹線。	1/10	角閃石極多
78	小形器台？				細・極多	黄褐色	口縁部は強く外反して開く。端部は外方に大きく引き出すと共に上方も突出する。端面凹線。		角閃石極多、雲母
79	高坏				細・極多	明赤褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は短く直立して端部は外方に摘み出し、頂部に凹線		角閃石極多
80	小形器台？			14.8	細・極多	明黄褐色	脚裾部は内湾気味によく開き、端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上方も小さく突出する。裾部・端面に凹線。内面横ｹｽﾞり。	1/9	角閃石極多
81	小形器台？			15.6	細・極多	明黄褐色	脚裾部はやや内湾気味によく開き、端部は鈍く肥厚しつつ上下に張り出し、裾部・端面に鈍い凹線。内面横ｹｽﾞり。	1/8	角閃石極多、雲母
82	小形器台			20.1	細・極多	明褐色	脚裾部は強く開き、端部は鈍く肥厚し上下に張り出す。外面鈍い凹線、内面横ｹｽﾞり。	1/8	角閃石極多

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	形態	備考
83	?	4.1	1.8	1.3	11.7	鉄	基部は折り曲げて、端部を丸く納める。	刀子基部か？

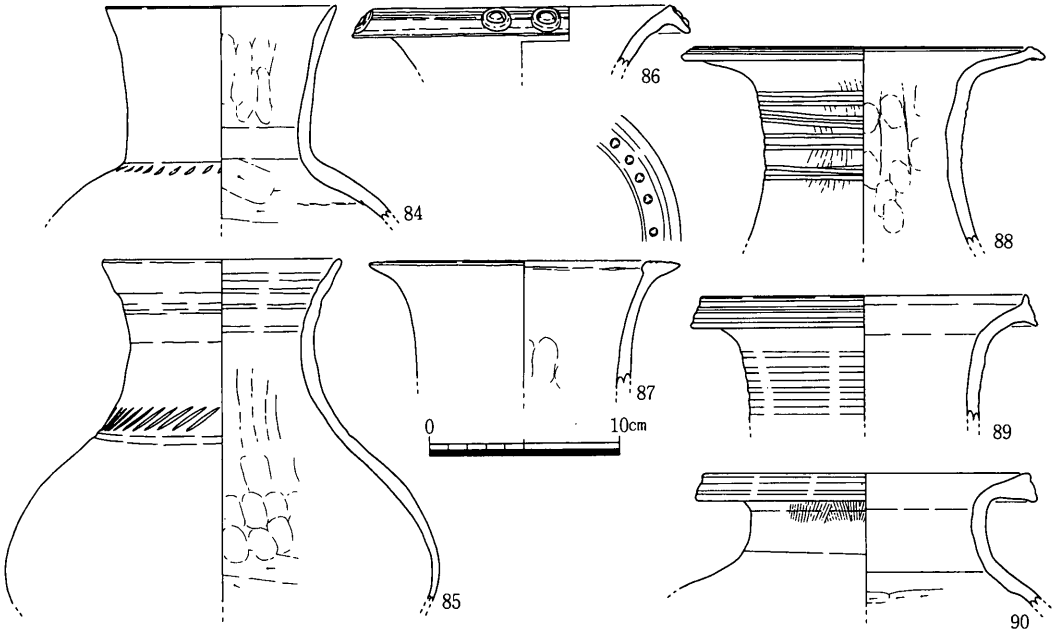
第154図　4区ＳＤ01出土遺物（1／4・1／2）

ＳＤ06（第155～162図）

Ｂ12区で検出した北西－南東方向に伸びる溝状遺構である。中央部で，南折して２条に分岐するが西流は３ｍ程で消滅している。ＳＤ08東側に位置し，中世溝ＳＤ02・04に切られる。また北半部はゆるく屈曲し，近世溝ＳＤ05に接しつつ途切れている。断面皿状で，溝幅0.75～1.1ｍ，深さ0.15～0.2ｍを測る。床面レベルは標高15.2ｍ前後で，



第155図　4区ＳＤ06平・断面図（1／400・1／40）

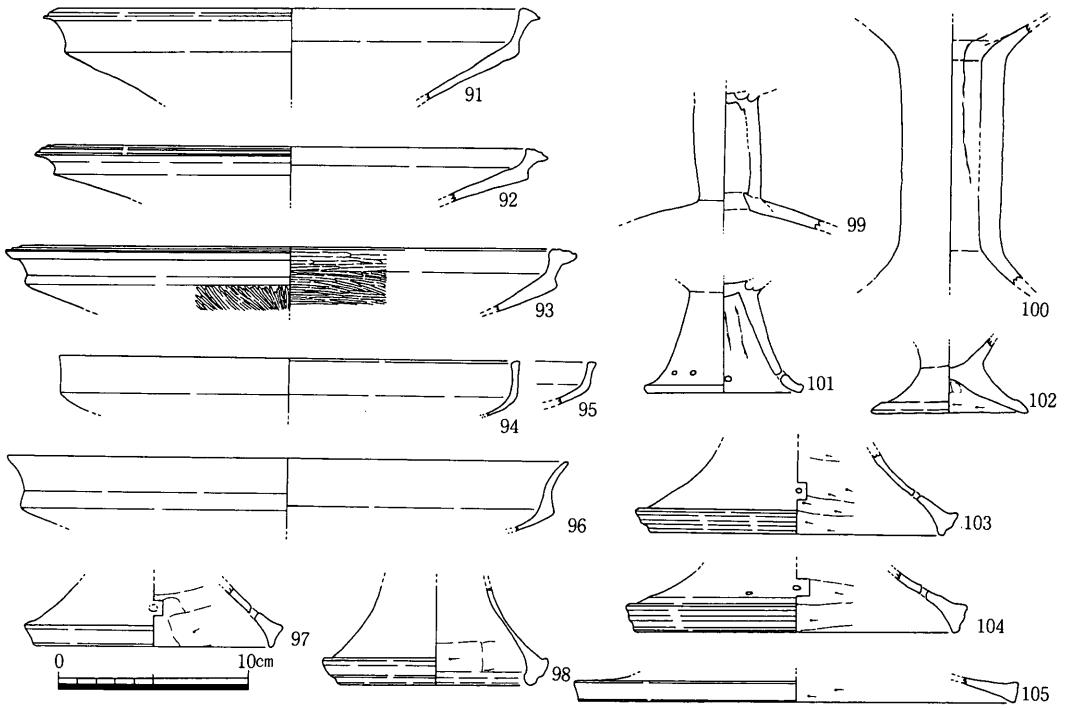


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
84	直口壺	12.0			細・極多	橙色～にぶい橙色	口頸部はわずかに外反して立ち上がり、端部尖る。肩上部に刺突文。頸部内面指押さえ、肩部上端まで横ケズリ。	全周	角閃石極多、石英等
85	直口壺	12.6			細・極多、粗・少	にぶい黄橙色	張りの強い体部から口頸部は緩やかに外反して立ち上がる。端部は丸く納める。口頸部上半内外面凹線、頸基部に斜線文。体部最大径以下横ケズリ後上半部指押さえ。	1/6	角閃石極多、石得よく粒・石英等少
86	広口壺	15.6			細・極多	明黄褐色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は粘土帯を付して板状の垂下口縁。端面沈線３条後２個１対の円形浮文。	1/8	角閃石極多
87	直口壺	16.4			中・多	橙色　浅黄色	口頸部はやや外反気味に立ち上がり端部は外方に強く摘み出すと共に内方も突出して頂部に凹線と円形刺突文。	1/6	石英等多　搬入品
88	広口壺	17.4			細・極多	にぶい黄橙色	ほぼ直立する頸部から口縁部は強く折り返し大きく開く。端部は外方に引き出すと共に上方も小さく突出する。端面沈線３条。頸部縦ハケ後沈線、内面指押さえ。小形器台の可能性	1/6	角閃石極多、雲母・石英等
89	広口壺	16.9			細・極多、中・多	にぶい橙色	やや外傾する頸部から緩やかに折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に摘み出して端面凹線。頸部外面凹線。	1/4	角閃石極多、石英等多
90	広口壺	16.8			細・極多、中・多	にぶい黄橙色	短く直立する頸部から口縁部は強く折り返して水平に短く開く。端部は肥厚して外方にやや張る。端面沈線２条。頸部外面縦ハケ後横ナデ。肩部外面横ナデ、内面横ケズリ。	全周	角閃石極多、石英等多

第156図　４区ＳＤ06出土遺物１（１／４）

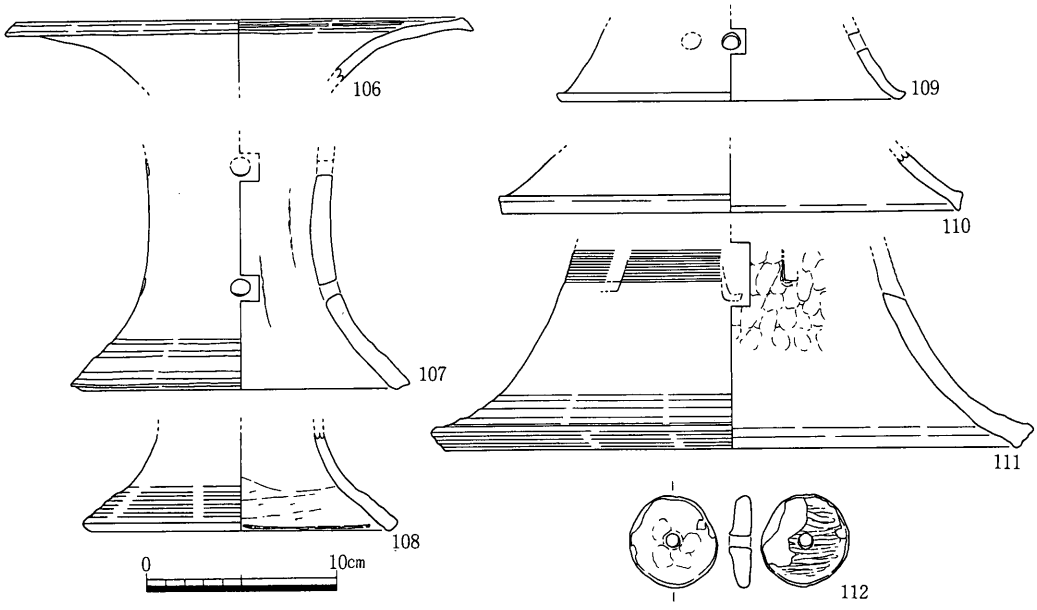
微妙な床面比高から判断すると北流する可能性が高い。埋土は褐灰色砂質土で，検出遺物量は比較的多い。

直口壷（84）は口頸部無文で，肩上端に刺突文を巡らす。（85）は上半部の凹線文・頸基部斜線文のもっとも主流的な形態の直口壷。小形の広口壷（86）は垂下口縁形態に多い円形浮文が見られるが，口縁部下端がかなり開き，一般的なそれの形態とは異なる。直口



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
91	高坏	24.3			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部短くやや外傾して端部は外方に摘み出し頂部凹線。	1/8	角閃石極多
92	高坏	24.8			細・極多	明黄褐色	浅い坏部。中位で強く屈曲して段。上半部短く外傾して端部は外方に引き出すと共に内方も突出する。頂部凹線。	1/5	角閃石極多
93	高坏	27.6			細・極多、中・少	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して段。上半部短く外傾し端部は外方に摘み出して頂部に沈線３条。上半部外面横ﾅﾃﾞ、内面横ﾐｶﾞｷ、下半部外面放射状ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等少
94	高坏	24.2			細・極多	明黄褐色	中位で屈曲して上半部は短く直立する。端部は外方に張り気味に四角く納める。横ﾅﾃﾞ。	1/12	角閃石極多
95	高坏				細・極多	明黄褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は短く直立する。端部は外方に張り気味に四角く納める。		角閃石極多
96	高坏	29.2			細・極多	にぶい黄色	中位で強く屈曲して稜。上半部は外反して短く立ち上がる。	1/8	角閃石極多、赤色粒・石英等少
97	脚			12.3	細・極多	明黄褐色	脚裾部は強く開き端部は鈍く肥厚し下方に摘み上方もやや張る。内面横ｸｽﾞﾘ。円形透かし	1/4	角閃石極多
98	脚			10.0	細・極多	黄褐色	脚裾部はやや内湾気味に開き、端部は肥厚しつつ下方に引き出すと共に上方も鈍く突出。端面凹線、内面横ｸｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
99	脚				細・極多	明黄褐色	中膨らみの円柱状軸部から強く折り返して裾部は大きく開く。	全周	角閃石極多
100	脚				細・極多、粗・普	明黄褐色	円柱状の軸部で裾部は強く折り返して開く。頂部に円盤充塡剝落痕。軸部内面に縦位の粘土接合痕あり。	全周	角閃石極多、石英等・赤色粒
101	脚			8.0	細・極多、粗・普	橙色	脚裾部は緩やかに開き端部は小さく反り四角く納める。２孔１対の円形透かし。円盤充塡	1/4	角閃石極多、石英等
102	脚			8.0	細・極多、中・普	にぶい黄橙色	低脚台。強く開いて端部は肥厚気味に丸く納める。外面横ﾅﾃﾞ。内面横ｸｽﾞﾘ。	1/2	角閃石極多、石英等・赤色粒
103	脚			15.3	細・極多	黄褐色	脚裾部はやや内湾気味に強く開き、端部は肥厚しつつ上下に摘み出す。端面凹線、内面横ｸｽﾞﾘ。円形透かし。	1/8	角閃石極多
104	脚			16.5	細・極多	橙色	脚裾部はやや内湾気味に強く開き、端部は肥厚して下方に摘み出し上方も鈍く突出。端面凹線、内面横ｸｽﾞﾘ。２孔１対の円形透かし。	1/4	角閃石極多
105	脚			22.8	細・極多、中・普	明褐色	脚裾部は強く開き端部は鈍く肥厚して上下に張る。内面横ｸｽﾞﾘ。	1/10	角閃石極多、石英等・赤色粒

第157図　４区ＳＤ06出土遺物２（１／４）

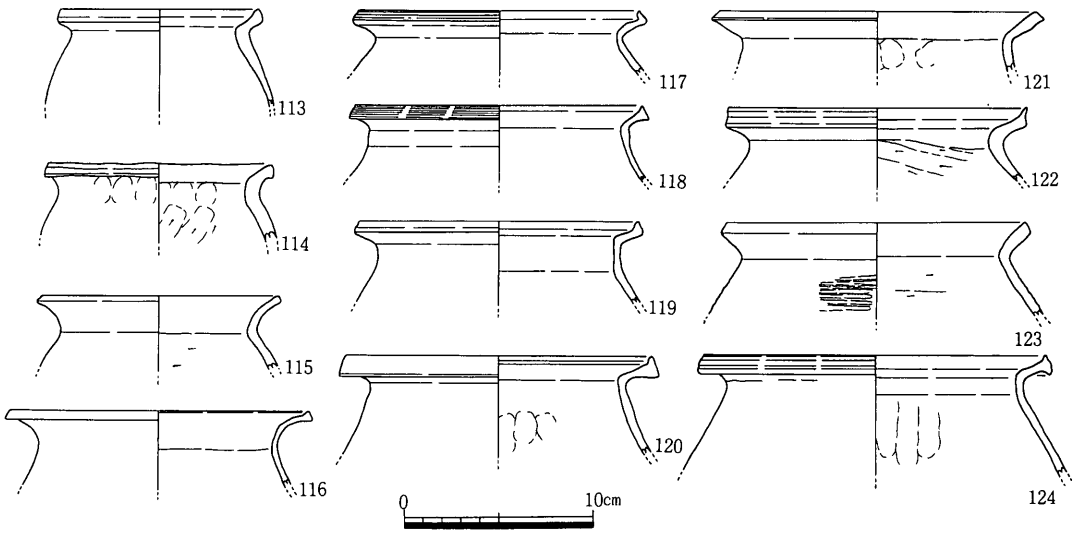


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
106	小形器台	23.4			細・極多	明黄褐色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は外方に摘み出しつつ上方も鈍く突出する。口縁部内面凹線。	1/10	角閃石極多
107	小形器台			16.4	細・極多、粗・多	浅黄橙色	円筒状の軸部から緩やかに開いて端部は四角く納める。裾部。端面に凹線。軸部に中形円形透かし２段。	1/4	角閃石極多、石英等多
108	小形器台			15.8	細・極多	明黄褐色	脚裾部は外反して大きく開き、端部は四角く納める。裾部に凹線。内面横ﾅｽﾞﾘ。	1/8	角閃石極多、雲母・石英等
109	器台			18.2	細・極多、中・多	灰黄色	脚裾部は緩やかに開き端部は小さく反って丸く納める。２孔１対の大形円形透かし。	1/8	角閃石極多、石英等多
110	器台？			24.0	細・極多、粗・多	明黄褐色	脚裾部は大きく開き端部は下方に小さく摘み出す。	1/8	角閃石極多、石英等多
111	大形器台			29.5	細・極多	明黄褐色	脚裾部は外反して大きく開き、端部は鈍く肥厚して四角く納める。端面・裾部に凹線。中位に長方形透かしと沈線、内面中位に指押さえ顕著。	1/5	角閃石極多、雲母
112	土製紡垂車	4.7	1.2		細・極多	にぶい黄色	片面のみ軸孔縁辺が鈍く隆起する。裏面ﾐｶﾞｷ	完形	角閃石極多、雲母

第158図　４区ＳＤ06出土遺物３（１／４）

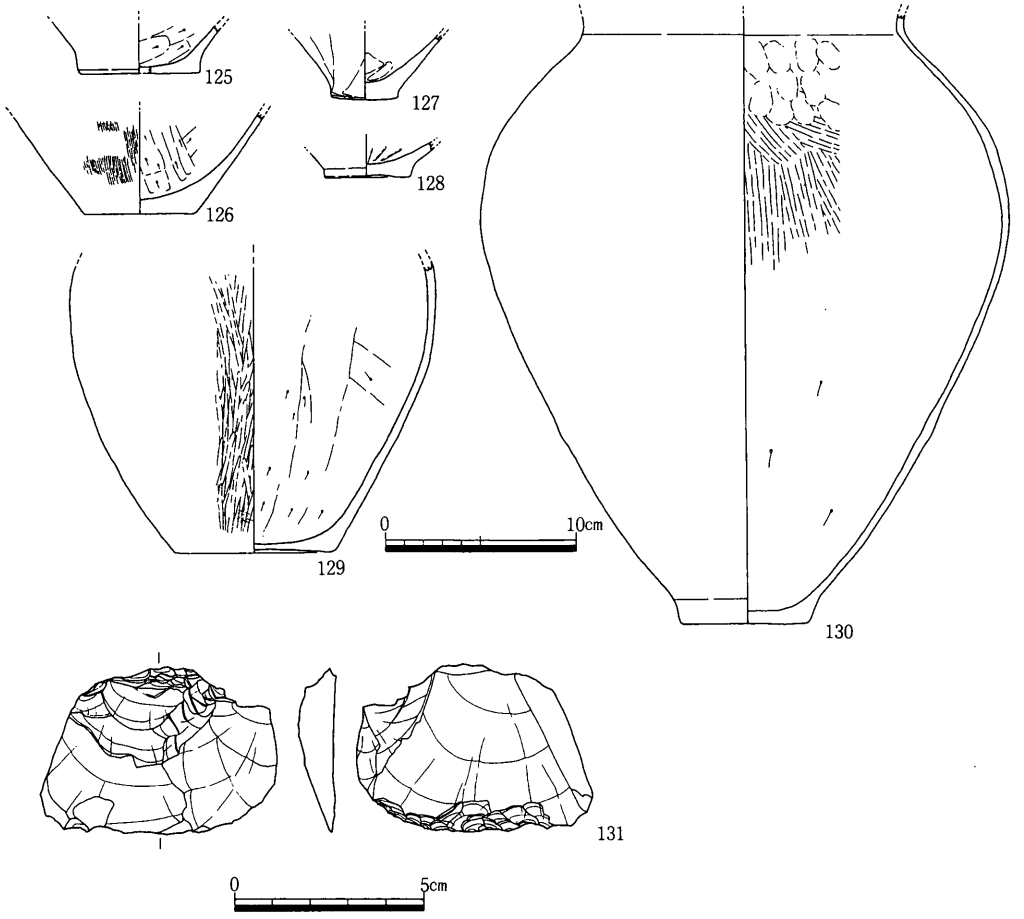
壷（87）は小形器台の一部や拡張口縁形態高坏の口縁部形状に類似した口縁端部の拡張を持つ。頂部に円形刺突文を配する。（88）は上半部を強く外反させる直口壷の系統上に位置づけられる。この地方で後期中葉に盛興する薄手でやや長頸形態の広口壷の祖形の一つである。頸部の凹線文が沈線文に置き替わっている。頸部が外傾する形態の広口壷（89）も緩やかに折り返した先の口縁部がやや発達する点で新しい様相を示す。短頸形態の広口壷（90）は端部の拡張が微弱で後出的な形態である。拡張口縁形態の高坏（91～93）は中位の屈曲も強く後期初頭の古い様相を持つ。直立口縁形態高坏（94・95）は上半部の外傾や端部の摘み出しもまだ弱い形態である。しかし（96）のように外反口縁の発達した明かな後出形態も混じっている。脚端部を肥厚する系統の脚部では下方への摘み出しが強い

(97・98) と上下に摘み出す (103・104) の形態がみられる。(101) は脚端部の反り返りが小さく，この系統では古い様相を示す。低脚台 (102) は恐らく鉢か小形壷に付随する



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
113	甕	10.4			細・極多	明黄褐色	口縁部は強く折り返して短い。端部は鈍く肥厚しつつ上方にやや張り出し四角く納める。	1/4	角閃石極多
114	甕	11.6			細・極多	にぶい褐色	口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は下方に小さく摘む。外面口縁部直下指押さえ、体部内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
115	甕	12.4			細・極多	暗灰黄色	口縁部は外反して開き、端部四角く納める。内面肩上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/8	角閃石極多
116	甕	17.7			細・極多、粗・普	橙色	口縁部は緩やかに折り返して外反する。端部は小さく摘み上げる。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多、石英等
117	甕	14.8			細・極多	明黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に摘み出して端面凹線。	1/4	角閃石極多
118	甕	15.0			細・極多	明黄褐色	内傾する不明瞭な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は肥厚しつつ上方に小さく摘み出すと共に下方も張り出す。端面凹線。口縁・頸部内面の横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。	1/8	角閃石極多
119	甕	14.6			細・極多	にぶい黄橙色	内傾する不明瞭な頸部から強く折り返し口縁部は短く開く。端部は上方に摘み出す。口縁・頸部内面の横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。	1/6	角閃石極多、赤色粒・石英等
120	甕	16.0			細・極多	明黄褐色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は肥厚しつつ上方に摘み出し下方もやや張る。口縁・頸部内面の横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、雲母少
121	甕	16.5			細・極多	にぶい橙色	口縁部は強く折り返し開く。端部は鈍く肥厚しつつ下方にやや張る。体部内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等
122	甕	15.6			細・極多	にぶい黄色	口縁部は強く折り返し短く開く。端部は上方に摘み出し端面直立。内面肩上端まで横ｹｽﾞﾘ	1/8	角閃石極多
123	甕	15.5			細・極多、中・多	橙色　明褐灰色	口縁部は強く折り返し短く開く。端部は肥厚しつつ上方にやや張り出し四角く納める。体部外面叩き目残す、内面肩上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/6	角閃石極多、石英等多
124	甕	17.9			細・極多	明黄褐色　にぶい黄橙色	内傾する不明瞭な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は肥厚しつつ上方に小さく摘み出すと共に下方も張り出す。端面凹線。口縁・頸部内面の横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。肩部内面指押さえ。	1/6	角閃石極多

第159図　4区ＳＤ06出土遺物４（１／４）

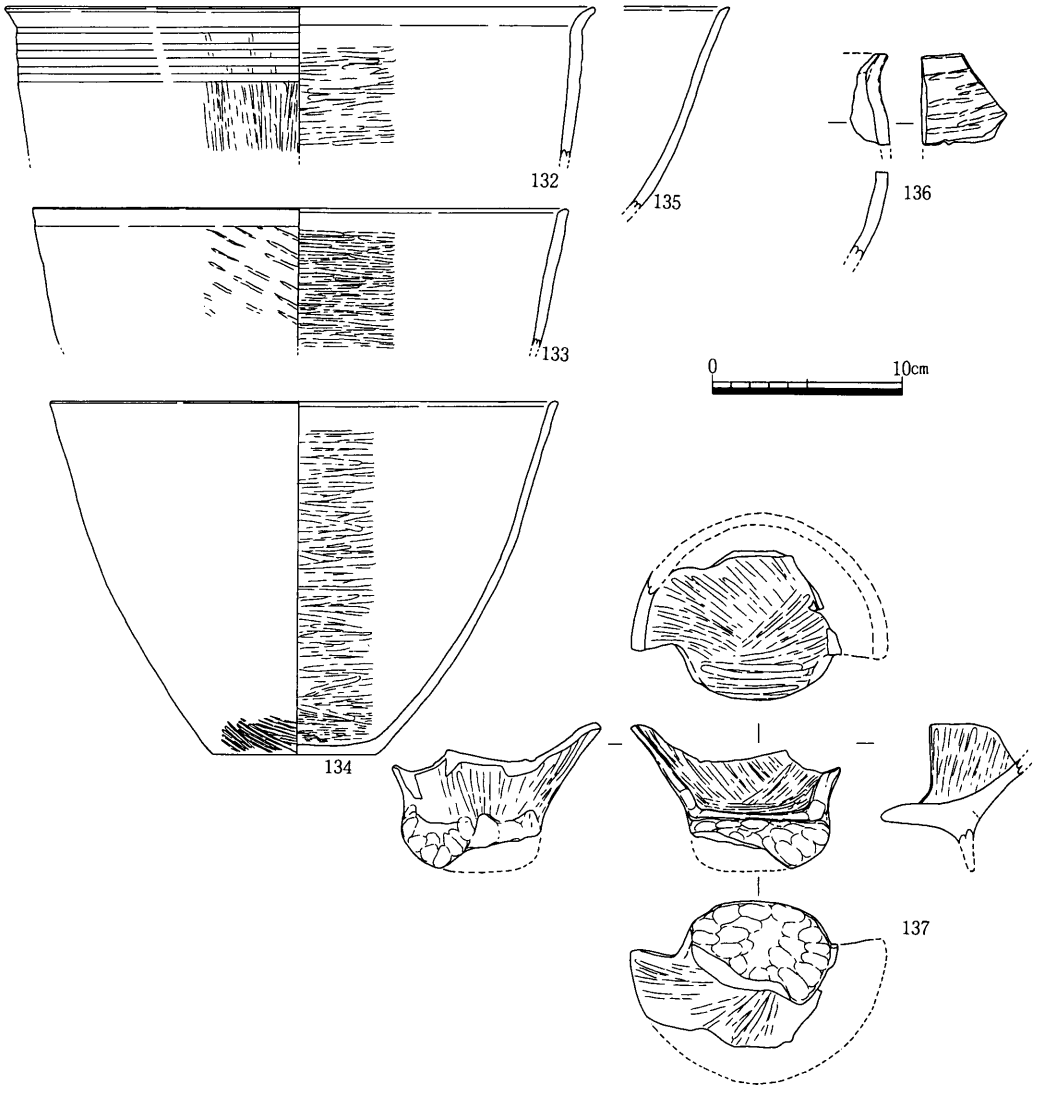


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
125	甕？			6.2	細・極多、中・多	橙色	薄作りの底部。内面削り。	1/2	角閃石極多（含粗粒）、雲母・赤色粒・石英等
126	？			5.8	細・極多	明黄褐色　黒褐色	外面縦ﾊｹ、内面縦ｹｽﾞﾘ。	1/3	角閃石極多、石英等多
127	？			3.5	細・極多	明黄褐色	やや突出気味の小形平底。外面板ﾅﾃﾞ、内面指押さえとﾅﾃﾞ。	全周	角閃石極多
128	？			6.2	細・極多	にぶい黄色　黒色	小さく円盤状に突出した底部で、体部の張り強い。内面板ﾅﾃﾞ。	全周	角閃石極多、雲母多
129	？			8.5	細・極多	明黄褐色　黒色	張りの弱い体部で、薄作りの底部。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面削り。	1/2	角閃石極多、雲母多
130	甕？			6.8	細・極多、中・普	明黄褐色	最大径は体上部で、痕跡的な頸部を持つ。内面下半縦ｹｽﾞﾘ、最大径部以上縦ﾊｹ後肩上部指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等・赤色粒

挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
131	スクレイパー	6.1	4.3	1.1	28.2	ｻﾇｶｲﾄ	刃部片面調整　微弱	折損

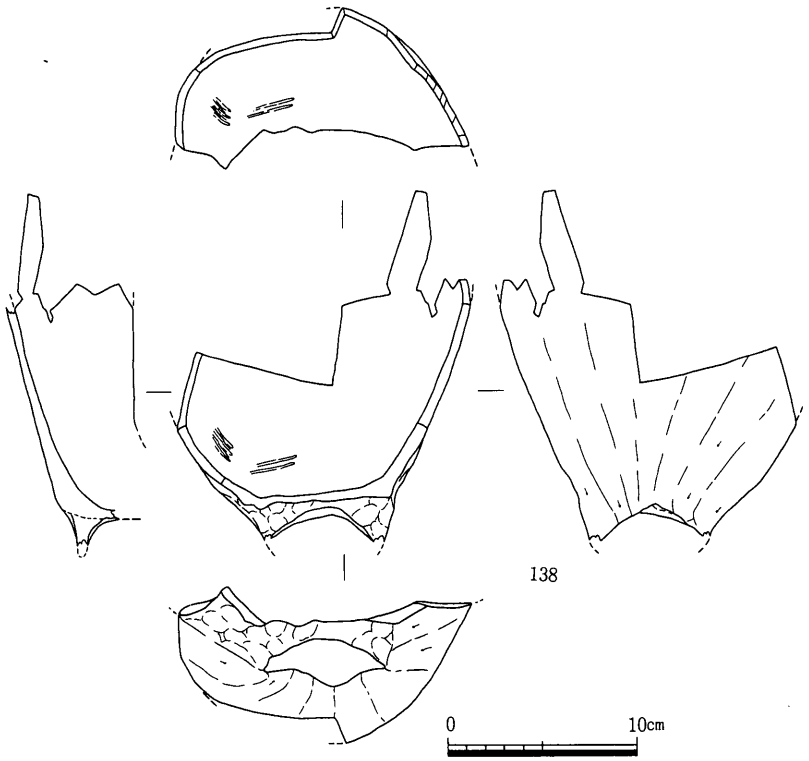
第160図　４区ＳＤ06出土遺物５（１／４・１／２）

ものであろう。中膨らみの強い柱状脚（99）は装飾高坏の可能性が高い。柱状脚（100）は軸部下端の屈曲がかなり鈍い。（105）は柱状脚裾部で，端部は鈍く肥厚する。小形器台（106）は口縁部は強く外反して発達するが，端部の肥厚・拡張は小さい。（107）はこの種の小形器台には珍しく中位が柱状に長く発達する。（108）は端部を肥厚しないが裾部に凹



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
132	大形鉢	31.0			細・極多	にぶい橙色	口縁部は小さく反って尖る。口縁部下に凹線4条。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/6	角閃石極多　赤色顔料
133	大形鉢	27.6			細・極多	にぶい橙色　明褐色	口縁端部は上方に張り気味に四角く納める。外面叩き目残る。内面横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、雲母赤色顔料
134	大形鉢	26.8	18.2	8.4	細・極多、中・昔	灰褐色	やや内湾気味に開き口縁端部は上方に張り気味に四角く納める。底部薄い。外面下端に叩き目残る。内面横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、石英等赤色顔料
135	鉢				細・極多	黄褐色	緩く外傾して立ち上がり、端部は外方を張り出して四角く納める。		角閃石極多、雲母多、石英等　赤色顔料
136	把手付広片口皿				細・極多、中・昔	にぶい橙色	片口部。口縁部は鈍く屈曲して開き、端部は四角く納める。側縁端は四角く納める。体部外面叩き目残る。		角閃石極多、赤色粒　赤色顔料
137	把手付広片口皿				細・極多	浅黄色	把手部。立ち上がり部下端に耳朶状の把手部を貼り足す。台形状に高く突出した立ち上がり部はほぼ直立して丸く納める側縁端は四角く納める。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、体部分割縦ﾐｶﾞｷ。外面体部縦ﾐｶﾞｷ、把手部・立ち上がり部指押さえ 。		角閃石極多、雲母多　赤色顔料

第161図　4区ＳＤ06出土遺物６（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
138	把手付広片口皿				細・極多、中・多	橙色	把手部。側縁端に貼り足した立ち上がり部上半・把手部剝落。側縁端は四角く納める。体部外面縦ｹｽﾞﾘ。把手部指押さえ。体部内面の側縁部縦ﾐｶﾞｷ、端部横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多(含粗粒)

第162図　4区ＳＤ06出土遺物７（１／４）

線が連続する。(109) はやや大形すぎるが (101) と同系統の高坏脚でも通用する形態である。(112) は土製紡錘車。片面だけ丹念に磨く。「く」字口縁甕のうち，(113•114) は緩やかに折り返した口縁部は短く端部の張り出しも認められるので，後期初頭段階の小形甕でよいだろう。しかし口縁部が発達し，強く反り返るか直線的に伸びる (115•116•121•123) は明らかに後出的な形態である。また (117・118・119・124) のやや矮小化した端部形状は後期初頭でも新しい様相である。(122) は口縁端部を直上に薄く摘み上げる形態と上端まで達する横ケズリが特徴的である。(132〜134) はバケツ形を呈するやや深目の鉢。何れも内面は緻密な横ミガキが見られるが，外面は対照的に粗雑な仕上げ方となる点で，把手付広片口皿に類似することは注意したい。この系統の鉢では (134〜135) の口縁部形態が一般的で，(132) のような口縁部形態と凹線文施文の形態は少ない。把手付広片口皿 (137) は舌状に発達した把手部を持つ。また (138) は檸檬形の平面形を比較的よく

留める資料である。欠損しているが把手部が舌状に発達した形態であることがわかる。

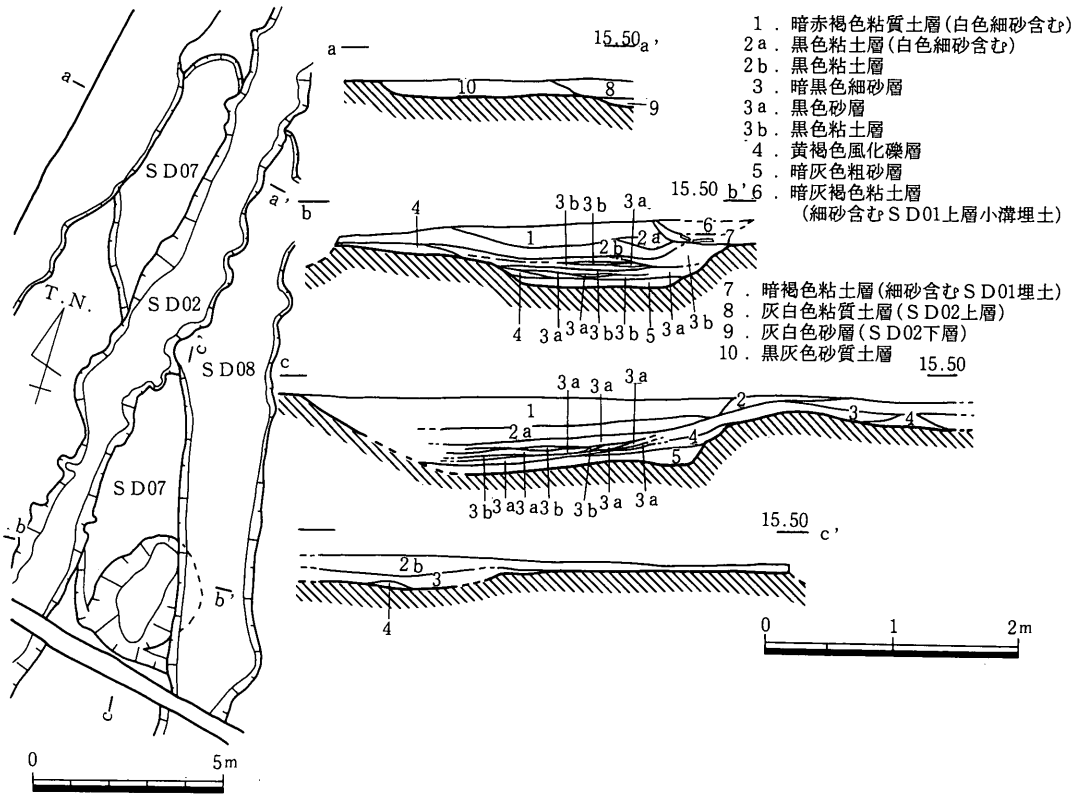
（131）は小形の横長剥片に粗雑な片面二次調整を加えたスクレイパー。

以上示したように本溝資料は後期初頭より新しい様相を中心に一定量の後出形態と少数の初頭段階古相のものが混ざっている。

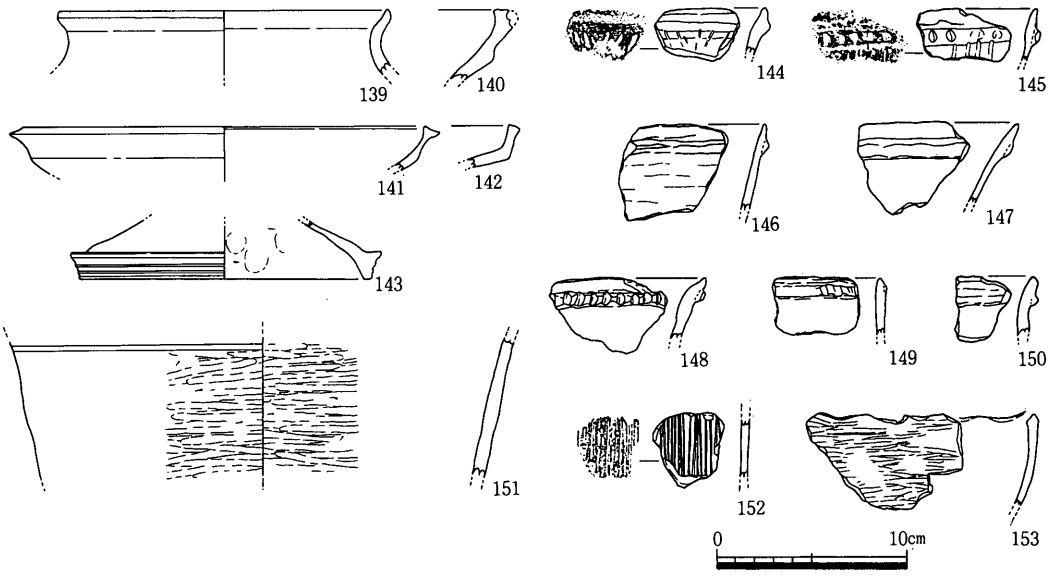
ＳＤ07（第163～167図）

Ｃ12区で検出した不定形落ち込みである。ＳＤ02・ＳＤ08間にあって両溝に切られる。全体形状は溝状に南北方向に細長い落ち込みで，南北方向は16m，東西は他遺構との重複で不詳だが，概ね３～3.5m程度と考えられる。南端部の南北3.5m，東西2.5mが平面楕円形に土坑状に一際深くなる。深さは南端部の落ち込み部分で，0.5m，以北の浅い部分で0.05～0.25mを測る。南端落ち込み部分では床面は地山下層砂礫層上面に達しており，この付近に限ってこのレベル（標高約15m）で若干の湧水がある。

埋土は大別２層に区分できる。上層は暗赤褐色～黒色粘土で，弥生後期初頭の遺物を主



第163図　４区ＳＤ07平・断面図（１／200・1／60）

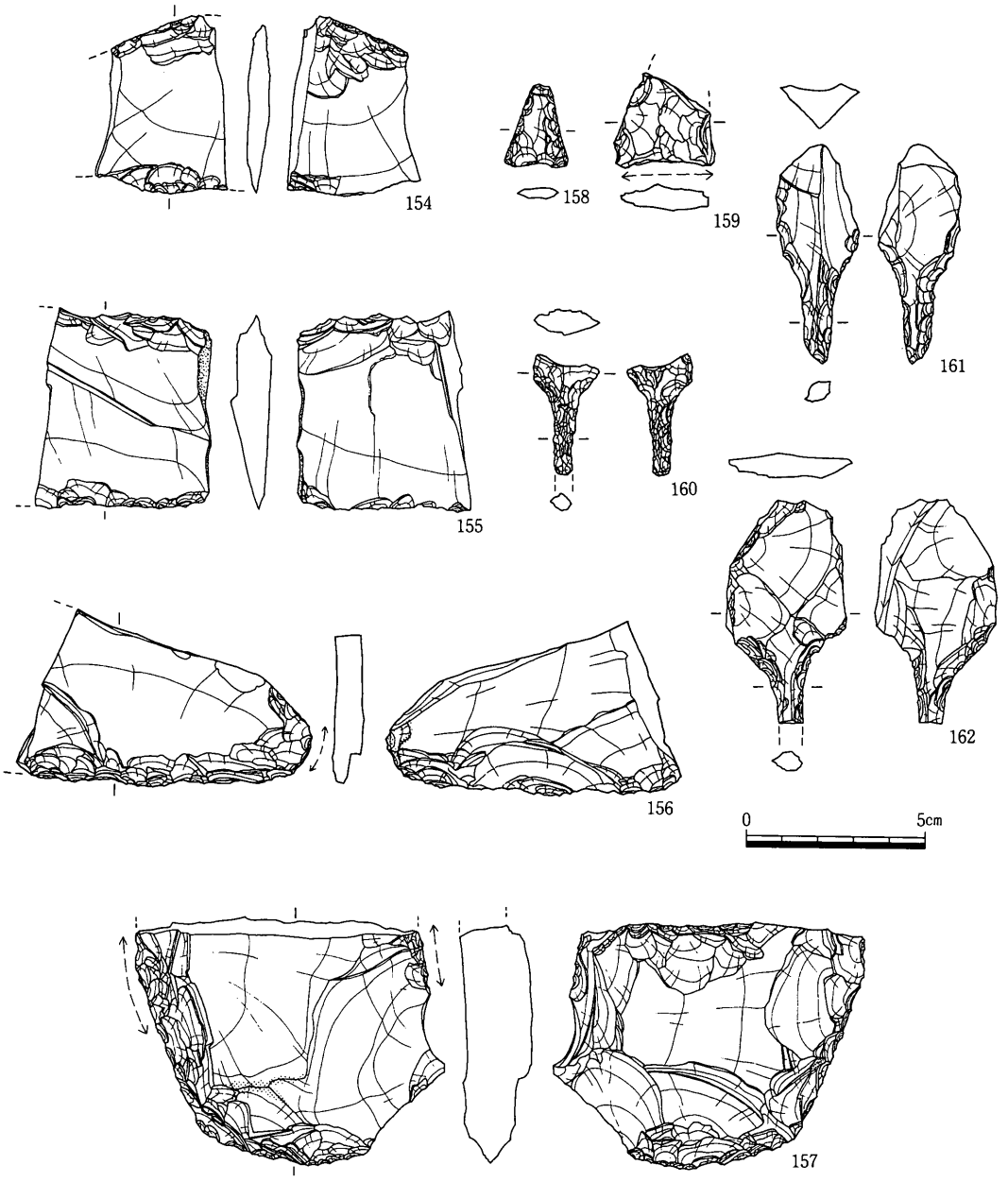


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
139	甕	17.1			細・極多	にぶい黄橙色	内傾する不明瞭な頸部から口縁部は小さく折り返して端部は摘み上げる。	1/8	角閃石極多、雲母・石英等
140	大形鉢？				細・極多	明褐色　にぶい黄褐色	中位で屈曲して鈍い段。上半部はやや外傾して外方に摘み出すと共に内方も張り出し、頂部凹線。		角閃石極多、雲母
141	高坏	20.9			細・極多	橙色	中位で鈍く屈曲して上半部は外傾。端部は外方に摘み出すと共に内方も突出。	1/10	角閃石極多
142	高坏				細・極多、中・多	明黄褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部はやや外傾して端部は外方に張り気味に四角く納める。		角閃石極多、石英等多
143	脚			14.6	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部はやや内湾気味によく開き、端部は肥厚しつつ下方に引き出し上方も強く突出する。端面沈線３条。内面横ｸｽﾞﾘ。	1/12	角閃石極多
144	突帯文土器				中・普	にぶい黄橙色	端部は尖り、口縁部に接して断面三角形の低い突帯。直下に縦位の３条１組の沈線		石英等
145	突帯文土器				中・普	にぶい黄橙色	端部は尖り、口縁部直下に断面台形の低い刻み目突帯。突帯下に篦描垂下沈線		石英等
146	突帯文土器				粗・多	浅黄橙色	端部は薄く尖る。口縁直下に低い断面三角形の突帯。		石英等多
147	突帯文土器				中・多	褐灰色　灰白色	外反して開き端部は尖る。口縁直下に偏平な突帯。		石英等多
148	突帯文土器				中・普	黄褐色　にぶい黄色	口縁部はやや外反して端部は尖る。口縁部直下に断面台形の刻み目突帯。		石英等
149	突帯文土器				中・多	にぶい橙色	端部は尖り、口縁部に接して偏平な刻み目突帯。		石英等多
150	突帯文土器				粗・普	にぶい黄色	端部は四角く納め、口縁直下に断面蒲鉾形の低い突帯を付し、口縁部外面は強い横ﾅﾃﾞ。		石英等
151	縄文晩期鉢？	26.5			中・多	褐灰色　黒褐色	内外面横ｸｽﾞﾘ後横ﾐｶﾞｷ。上部に沈線１条。	1/10	石英等多
152	突帯文土器				中・多	にぶい黄橙色　灰白色	外面縦位の篦描並行沈線		石英等多
153	縄文晩期鉢				中・普	浅黄色	やや内湾気味に立ち上がり、緩い波状口縁。端部四角く納める。外面横ﾐｶﾞｷ、内面横ﾅﾃﾞ。		石英等

第164図　４区ＳＤ07出土遺物１（１／４）

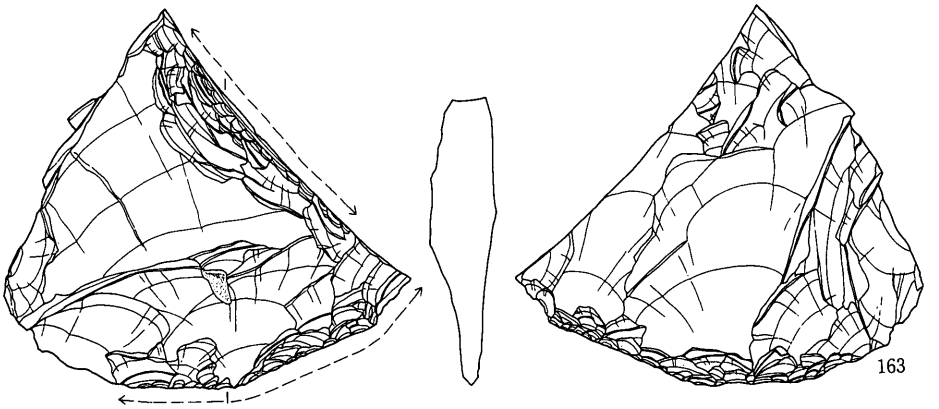
体とする。下層は黒色砂層で，南端部ではこの部分が黒色細砂層・黒色粘土層薄層の互層状連続層となる。南端部を中心に下層は縄文時代晩期後半の遺物が主体で小量弥生後期資料が混じる。したがって本落ち込みは縄文時代晩期に遡るが，完全埋没は弥生時代後期に

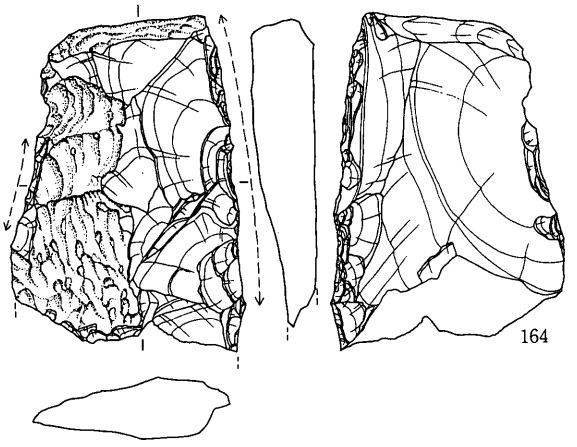
下るとみるべきであろう。

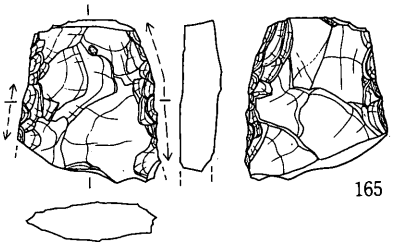


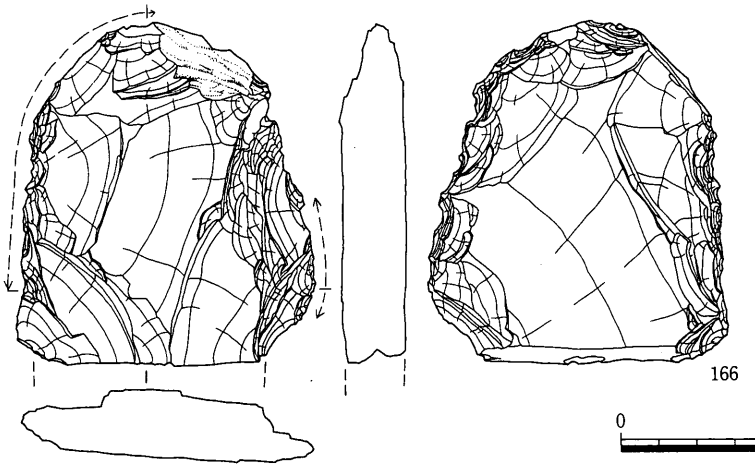
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
154	スクレイパー	3.7	4.8	0.7	15.1	サヌカイト		折損
155	打製石庖丁	4.9	5.6	1.2	37.6	サヌカイト	刃部調整粗雑	折損
156	スクレイパー	8.0	4.8	0.8	40.7	サヌカイト	背部折り取り面　右面端部摩耗少	折損
157	石鍬	6.7	8.1	1.8	144.6	サヌカイト	左面摩耗微弱	基部折損
158	石鏃	2.2	1.7	0.3	1.0	サヌカイト	平基	
159	石鏃	2.5	2.8	0.6	5.0	サヌカイト	平基	先端部折損
160	石錐	3.0	1.9	0.7	2.4	サヌカイト		基部折損
161	石錐	5.9	2.3	1.1	10.6	サヌカイト	基部側縁折り取り面	基部の一部折損
162	石錐	6.2	3.4	0.7	13.2	サヌカイト		先端部折損

第165図　４区ＳＤ07出土遺物２（１／２）



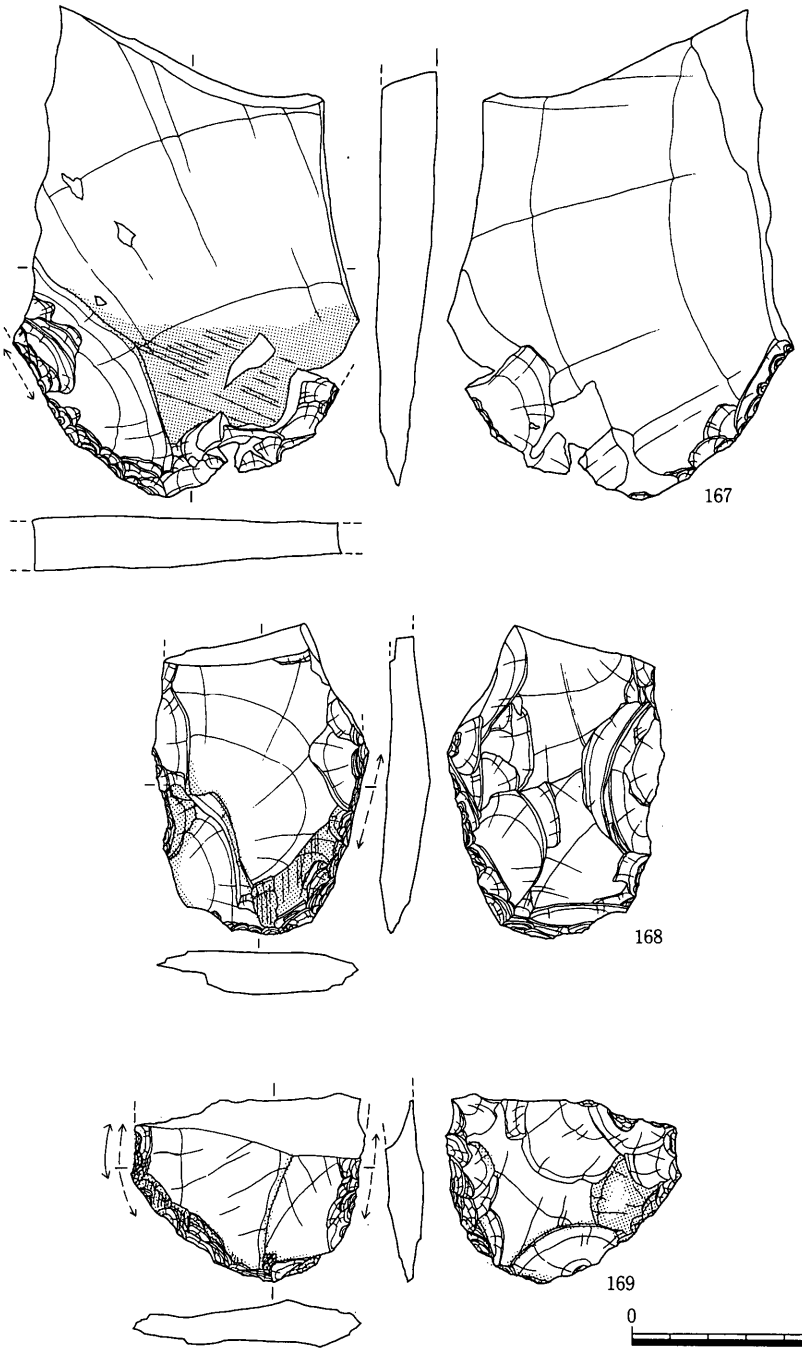






挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
163	?	10.8	9.7	1.9	164.2	サヌカイト	大形剥片打割　刃部以外折り取り面残す	
164	石鏃	8.4	6.1	1.8	104.0	サヌカイト	一側縁折り取り面．両側縁潰し	先端部折損
165	石鏃	4.2	3.7	1.0	21.5	サヌカイト	基部折り取り面	先端部折損
166	石鏃	9.9	7.8	1.8	172.1	サヌカイト	側縁潰し	先端部折損

第166図　４区ＳＤ07出土遺物３（１／２）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
167	石鏃	11.3	8.8	1.6	212.1	サヌカイト	左面先端部摩耗・擦痕顕著	基部折損
168	石鏃	7.9	5.6	1.1	65.4	サヌカイト	左面摩耗顕著・刃部擦痕	基部折損
169	石鏃	4.9	6.2	1.3	33.9	サヌカイト	摩耗顕著　右面刃部擦痕　側縁潰し	基部折損

第167図　4区ＳＤ07出土遺物４（１／２）

（139）～（143）は上層の弥生後期資料。甕（139）は緩やかに折り返した口縁部はあ

まり開かず端部は肥厚拡張せずに小さく摘み上げる形態。高坏（141）は中位の屈曲および口縁部の拡張が鈍化しており後期初頭でも新しい様相である。（142）は中位の屈曲部に稜を持ち上半部がやや開く形態。同様にやや新しい様相を示す。（143）は脚端部を肥厚する形態の脚だが，肥厚部上端の摘み出しがやや目立つ。

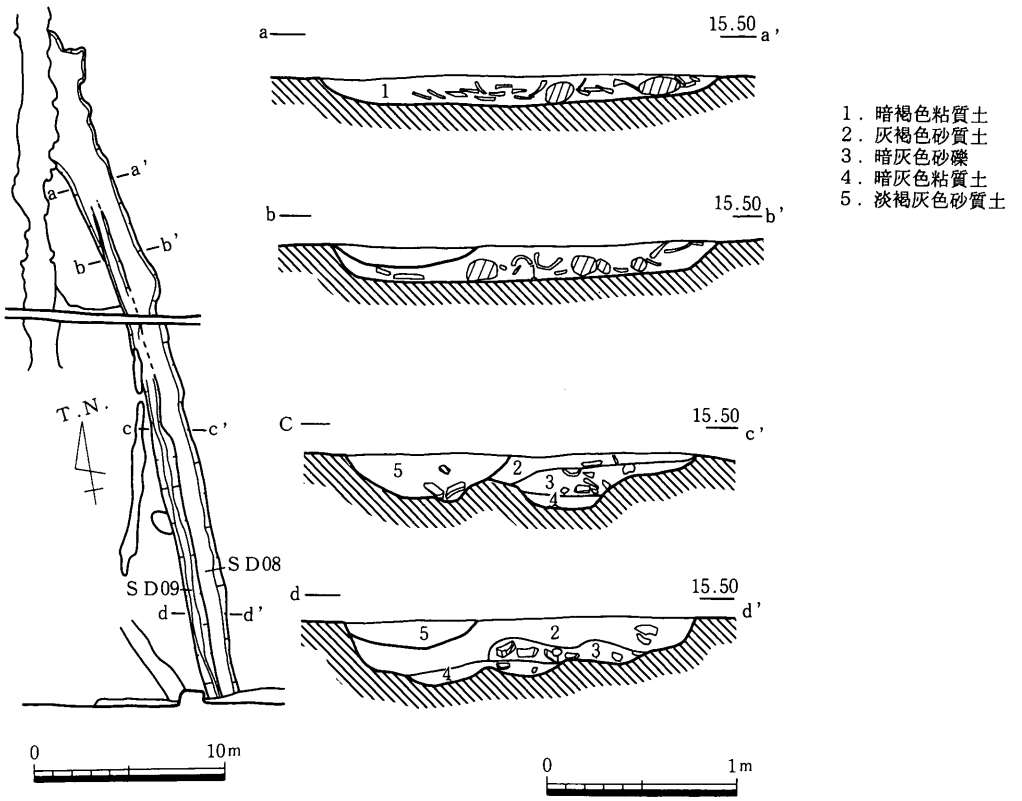
突帯文土器では断面台形のややしっかりした突帯（148•145）と断面蒲鉾形の低い突帯（144•146•152•149•150）が見られる。何れも突帯は口縁部直下にあり，口縁端部に刻み目はない。また（144•145）には突帯直下に縦位の並行沈線を施す。前者は山形の構成をもつ。（152）も同様の沈線文であろう。体部片（151）はケズリ後に内外面を緻密に横ミガキする。破片上端で屈曲しその部分に浅い沈線をみる。鉢形を呈する（153）は断続的に口縁端部に押圧を加え，細かい波状口縁をなす。

（154）は刃部調整はほとんど片面加工で粗雑。（156）は石鎌状のスクレイパーで，背部は折り取り面のまま。（155）は明確に背部と刃部の作り分けが認められるので石庖丁とした。石鏃（157）は一方の側縁の調整が際だって粗雑。破損後再生か。石鏃（158）は小形平基式。縁辺部の調整剥離は浅い。（159）は先端部を折損するが大形石鏃。平基式。（161・162）は石錐。（163）は打割した大形剥片の縁辺に潰し状の調整を重ねる。石鏃（164・165）は大形剥片を打割して素材としたもので，基部あるいは側縁部に明瞭な折り取り面を残している。基部片（166）は側縁の潰し状の調整が丹念に及ぶ。（167）は刃部を含め縁辺部の調整剥離が浅く，際だって粗雑である。（168・169）も同様である。

ＳＤ08（第168～213図）

掘立柱建物群のすぐ西側に位置し，Ｂ・Ｃ11区以西の別の掘立柱建物群とこれを隔てている。本溝はＣ12区北部で消滅するが，これは後世の削平によるものと考えたい。この現状の北端部付近で中世溝ＳＤ02・03，近世溝ＳＤ05に切られる外，Ｃ12区南端付近では不明遺構ＳＤ07を切る。またＢ12区～Ｃ12区南半部分では本溝埋没後，西縁部に重複して小溝（ＳＤ09）が開削されている。また井戸状遺構の可能性のあるＳＫ03はＢ12区中央部で重複している。

本溝の残存状況は全般的に良好ではない。当該地点に著しい削平が及んでいるためである。北端部の溝幅が最も広く2.1mに達するが深さは0.15mにすぎない。以南では少しづつ幅を減じながらも1.5～1.7m程度を保ち調査区南端では推定1.4m程度となる。溝深は逆に大きくなりＢ12区南部では0.35mを測る。また溝床面レベルは周辺地勢とは逆に，南に向

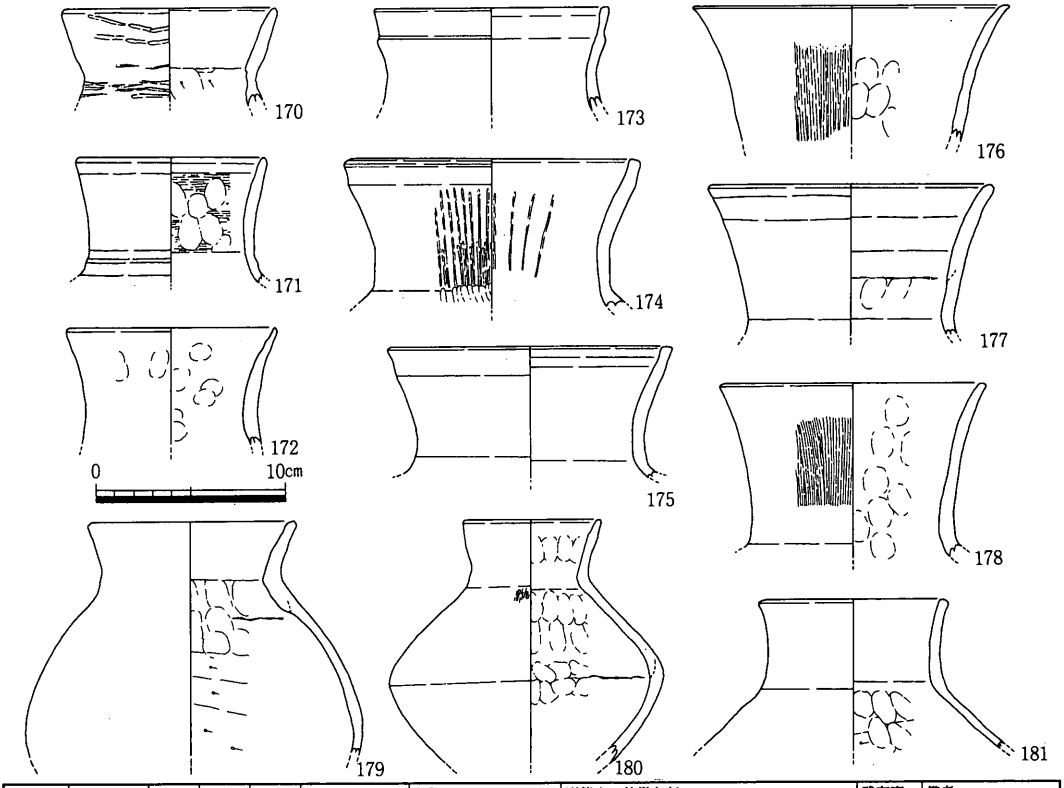


第168図　4区ＳＤ08・09平・断面図（1／400・1／40）

かってわずかに下り，計測した範囲では南北端で約0.1mの比高を持つ。

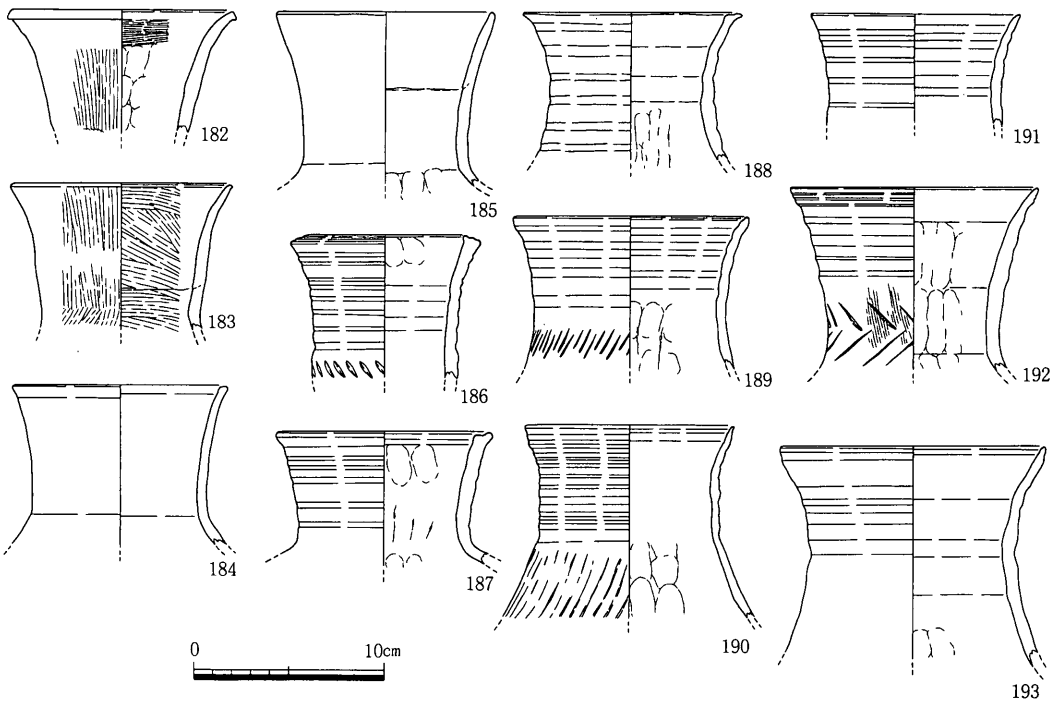
溝埋土の土質は周辺地山層のそれに応じて微妙に異なるが，概ね灰褐色～暗褐色を呈し，粘性はあまり強くない。ほぼ単層で隙間ないほどに多量の弥生土器片等が投棄されている。検出遺物量は極めて多いが，何れもかなり細片化しており完形に復元し得る資料はほとんどない。これらはすでに本溝への投棄段階で，かなり破砕が進んでいた可能性が高い。南半部（B12区）では溝最下層に薄く暗灰色粘質土層を認めるがこの部分の遺物包含量は微量である。

（170～176）は短頸系統の直口壷で，端部は丸く納め，外面無文で調整はやや粗雑である。特に（170）は口頸部外面に叩き目すらとどめる。（180）は同系統の小形直口壷。体部は中位で強く張り鈍い稜すら認められる。（173～175）は鈍い受口状口縁部を留める形態の直口壷で口縁部外面は横ナデで端部は四角く納め，鈍い凹面をなす。（174）は頸部の内外面に細い縦ミガキをやや疎らに施す。類例に乏しい調整法である。（176～184）は同様にやや短頸の形態であるが口頸部はやや長く緩やかに外反する。やはり凹線文などの加飾は



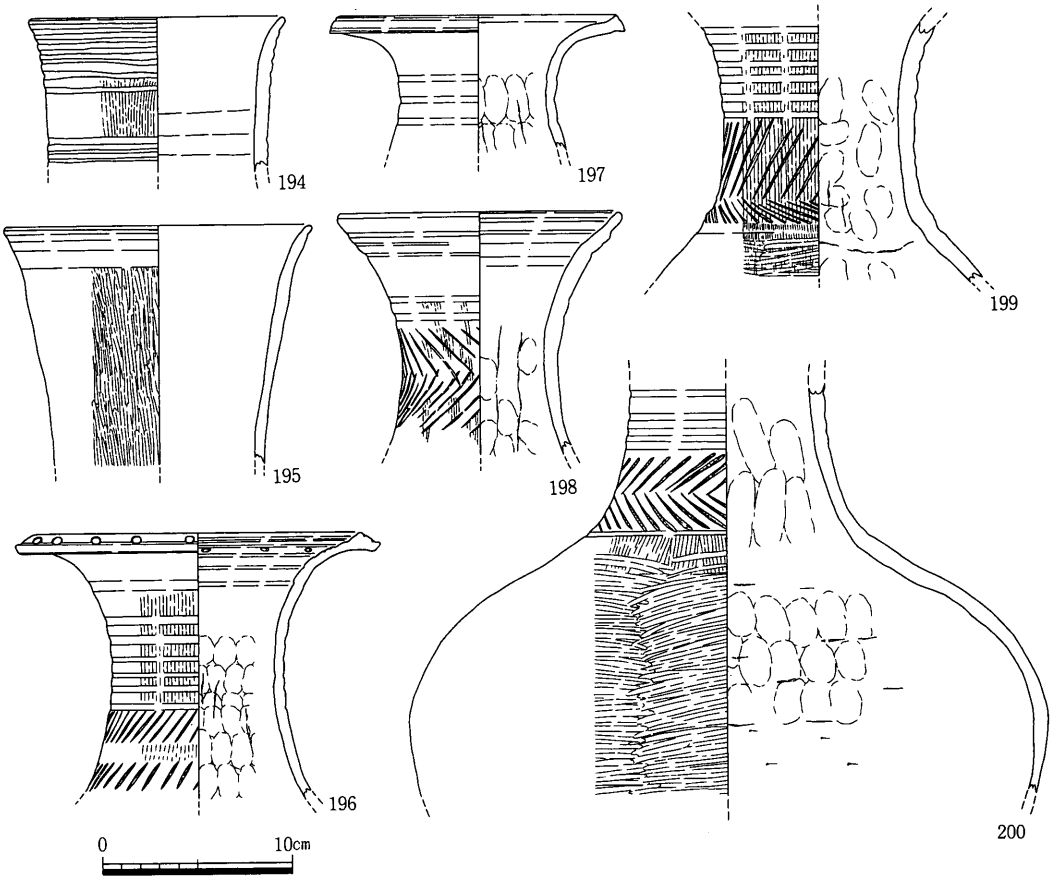
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
170	直口壺	11.0			細・極多、中・多	にぶい黄橙色	短い口頸部は鈍く開く。端部は丸く納める。外面口頸部まで叩き目残す。口頸部内面横ﾅﾃﾞ、体上端部まで縦ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、石英等多
171	直口壺	9.4			細・極多	灰黄色	短い口頸部は僅かに開き気味に立ち上がる。端部は丸く納める。頸基部に凹線２条。口頸部内面横ﾊｹ後指押さえ。	1/2	角閃石極多
172	直口壺	10.7			細・極多、中・普	灰黄色	短い口頸部はやや外反して立ち上がり、端部は尖る。散漫な指押さえ。	1/5	角閃石極多（含粗粒）
173	直口壺	12.2			細・極多	にぶい黄橙色	太めの短い口頸部はやや開いて立ち上がり、口縁部は弱く屈曲して直立する。端部は丸く納める。屈曲部に鈍い段。横ﾅﾃﾞ。	1/2	角閃石極多
174	直口壺	14.8			細・極多	灰黄色	短い口頸部は緩く開いて立ち上がり、上半部で弱く内湾する。端部は四角く納める。外面縦ﾐｶﾞｷ、頸部と肩部で単位幅異なる。内面疎らな縦ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多
175	直口壺	14.2			細・極多、中・普	にぶい黄色	短い口頸部は緩く外反して立ち上がり、口縁部で弱く屈曲する。端部は外方に張り気味に四角く納める。横ﾅﾃﾞ。	1/3	角閃石極多、石英等
176	直口壺	16.1			細・極多	灰黄褐色	口頸部はやや外反して立ち上がり端部は尖る。外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/5	角閃石極多
177	直口壺	14.7			細・極多、中・普	にぶい黄橙色	口頸部は緩く開き、端部は丸く納める。	1/6	角閃石極多、石英等
178	直口壺	13.4			細・極多	灰黄褐色	口頸部は弱く外反して立ち上がり、端部は四角く納める。外面縦ﾊｹ後上下端横ﾅﾃﾞ、内面やや散漫な指押さえ。	1/6	角閃石極多
179	直口壺	10.6			細・極多、中・多	にぶい黄橙色	体部最大径は低い。口頸部は短く直線的に弱く開く。端部は丸く納める。口頸部横ﾅﾃﾞ、内面肩部中位まで横ｹｽﾞﾘ、以上は指押さえ。	1/2	角閃石極多、石英等多
180	直口壺	7.1			細・極多、粗・普	橙色　にぶい黄色	体中位で強く張り、最大径部に鈍い凹線。短い口径部はやや開いて立ち上がり、端部は丸く納める。体部外面縦ﾊｹ、内面体中位以上指押さえ顕著。	1/3	角閃石極多（含粗粒）
181	直口壺	9.2			細・極多	灰黄色	短い口頸部はほぼ直立して端部は四角く納める。肩部内面横ｹｽﾞﾘ後指押さえ。	1/3	角閃石極多、雲母多、石英等

第169図　４区ＳＤ08出土遺物１（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
182	直口壺	11.5			細・極多	にぶい黄橙色	口頸部は緩やかに外反して立ち上がり、端部は内外に小さく摘む。外面頸部縦ﾊｹ後口縁部横ﾅﾃﾞ、内面頸部指押さえ後口縁部横ﾊｹ。	1/5	角閃石極多、雲母多
183	直口壺	11.1			細・極多	にぶい黄色	口頸部は緩やかに外反して立ち上がり、端部は四角く納める。外面縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ。	1/2	角閃石極多、赤色粒・石英等
184	直口壺	10.8			細・極多	明褐色	口頸部はやや反り気味に立ち上がり、端部は外方に張り気味に四角く納める。	1/6	角閃石極多
185	直口壺	10.2			細・極多	浅黄色	口頸部はやや反り気味に立ち上がり、端部は丸く納める。内面肩部上端に指押さえ。	1/5	角閃石極多、石英等
186	直口壺	8.2			細・極多	暗灰黄色	口頸部は僅かに開き気味に立ち上がる。端部は鈍く肥厚して内外に小さく摘む。端面凹線。外面凹線、頸基部に刺突文。	1/2	雲母極多、角閃石多 搬入品？
187	直口壺	11.2			細・少	灰白色	短い口頸部はやや開き気味に立ち上がる。端部は外方に鈍く摘み出し、内方も突出。端部・外面凹線、内面指押さえ。	1/6	石英等少 搬入品
188	直口壺	11.0			細・極多	灰黄色	口頸部は緩やかに反り返って立ち上がる。端部は強く外方に摘み出し内方も鈍く突出。頂部凹線。外面鈍い凹線、内面上半部横ﾅﾃﾞ、下半部指押さえ。	1/5	角閃石極多
189	直口壺	12.2			細・極多	明褐色	口頸部は緩やかに外反して立ち上がり、端部は尖る。口頸部上半は内外面共に鈍い凹線。下半部外面斜線文、内面指押さえ。	1/7	角閃石極多
190	直口壺	11.0			細・極多	にぶい黄橙色	口頸部は緩やかに反って立ち上がり、端部は尖る。口縁部内面と口頸部外面上半は不明瞭な凹線が連続する。頸基部斜線文。内面上半部横ﾅﾃﾞ、下半部指押さえ。	1/4	角閃石極多、雲母
191	直口壺	11.0			細・極多	にぶい黄色	口頸部はやや反り気味に立ち上がり、端部は尖る。内外面鈍い凹線。	1/6	角閃石極多
192	直口壺	13.0			細・極多	明褐色	口頸部は緩やかに外反して立ち上がり、端部は尖る。外面縦ﾊｹ後上半部鈍い凹線、下半部ﾊｹ原体刺突の斜線文２段、内面指押さえ。	1/2	角閃石極多
193	直口壺	13.9			細・極多	にぶい黄橙色	口頸部は緩やかに外反して立ち上がり、端部は丸く納める。外面上半部鈍い凹線。	1/6	角閃石極多、石英等・雲母少

第170図　４区ＳＤ08出土遺物２（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
194	直口壺	13.0			細・極多	にぶい黄橙色	太めの口頸部はほぼ直立し、上端部で弱く反って丸く納める。外面縦ﾊｹ後並行沈線。	1/6	角閃石極多
195	直口壺	16.0			細・極多	にぶい黄橙色	太めの口頸部は緩やかに開いて立ち上がり、端部は丸く納める。外面縦ﾐｶﾞｷ後口縁部鈍い凹線、内面ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、石英等・赤色粒
196	直口壺	16.9			細・極多	にぶい黄橙色	頸部から緩やかに外反して口縁部は大きく開く。端部は鈍く肥厚して外方に引き出し上部も鈍く突出。端面円形刺突文、口縁部内面凹線後円形刺突文。頸部外面縦ﾊｹ後凹線、基部に斜線文２段。頸部内面指押さえ顕著。	2/3	角閃石極多
197	直口壺	14.6			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して大きく開く。端部は小さく上方に摘み出し下部も強く張り出す。端面鈍い凹線。頸部凹線。頸部内面指押さえ	1/6	角閃石極多、石英等多
198	直口壺	14.6			細・極多	にぶい黄橙色	口頸部は外反して立ち上がり、端部は丸く納める。外面縦ﾊｹ後、上半部内外面鈍い凹線。下半部外面斜線文２段、内面指押さえ。	1/2	角閃石極多
199	直口壺				細・極多	灰黄褐色	頸部はやや開き気味に立ち上がる。縦ﾊｹ後下半不ﾊｹ原体刺突の斜線文２段、上半部凹線、体部分割横ﾐｶﾞｷ、内面指押さえ。	1/2	角閃石極多、雲母
200	直口壺				細・極多	にぶい黄橙色	最大径が高く、肩部が強く張った体部から頸部は細く伸びる。頸下半部にﾊｹ原体刺突の斜線文２段、中位と基部に凹線。体部外面縦ﾊｹ後上半部分割横ﾐｶﾞｷ。内面最大頸部横ﾐｶﾞｷ後、肩部・頸部指押さえ。	1/4	角閃石極多、雲母

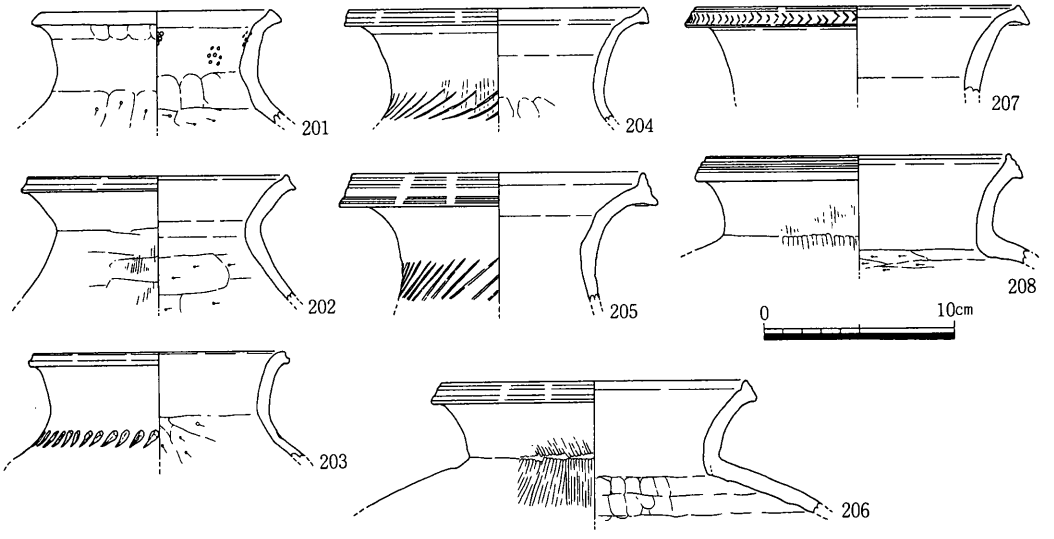
第171図　４区ＳＤ08出土遺物３（１／４）

見ない。(182～185) は口頸部が長く伸びるが無文となるもの。この形態で加飾を見ない例は多くない。外反のやや強い (182・183) は口頸部内外面をハケ調整で仕上げる。(186～188) は口縁端部を肥厚気味に摘み出し，口頸部に凹線文を施す。この形態では凹線文がより形骸的なことが多く，頸下半部にハケ原体押圧の斜線文を持たない。せいぜい (186) のように基部に刺突文を巡らすだけである。(189) ～ (193) は後期初頭にもっとも主流的な直口壷の系統で，緩やかに外反して下半部に1ないし2段の斜線文を巡らせ，口縁端部は尖る。(194) は僅かに外反する直口形態だが，凹線文に代えて沈線文を巡らせるもので，少なくとも本遺跡では類例がない。(195) はやや太頸の直口形態で口縁部下に限って鈍い凹線文を見る。外面を緻密な縦ミガキで仕上げる点も通有の形態とは異なるところである。(196) (197) は上半部で強く外反し，口縁部が大きく発達する形態である。口縁端部の肥厚・拡張もきわめて顕著で，形状・施文共に小形器台のそれに酷似する。実は，後期中葉に盛興する薄作りの特徴的な広口壷は，後期初頭の広口壷諸形態からは成立し得ず，このように上半部の外反を極端に強めた形態の，直口壷の系統から発生することがこの資料からよくわかる。後期中葉のその系統の広口壷にしばしば認められる頸部の加飾や口縁端部の形状は素直にこれらから引き継がれている。

(201～206) は比較的口縁部が開く短頸壷の諸形態。口縁部の開きの弱い (201) は搬入品で，頸部内面に刺突文を配する。頸下半部に斜線文を持つ (204) (205) は口縁部が大きく開き，頸部に斜線文を配する形態。(205) の形態は中期末までは一定量認められるが，後期に入ってはほとんど続かないものである。(207) は下方に摘み出した狭い口縁端面に横位の「ハ」字状短刻線を配す。(209) ～ (213) は太めの短く直立した頸部を持つ広口壷で，強く折り返した口縁部は短く，肥厚しつつ端部は小さく摘み出す。頸部の凹線施文を基本とし，(210) (211) のように口縁部内面・端面に円形刺突文等を加えることも珍しくない。(214～216) はやや外傾する頸部から口縁部を短く折り返す形態で，口縁端部は鈍く肥厚するが摘み出しは弱く，頸部には並行沈線文が連続する。(218～225) は垂下口縁形態の広口壷。(218～220) の小形品とそれ以外の大型品がある。この形態では凹線文が発達せずに円形浮文・刺突文が多用される点が特徴である。また (224・225) のように頸部に縦ミガキを施すことも他系統の壷にない特徴といえる。(221) は頸基部に低い突帯を付し，肩部に櫛描波状文を巡らす。本系統では時折このように加飾の発達したものも見られる。口縁部の外反がやや強い (219) (222) はやや新しい様相といえる。大形壷の大部分は垂下口縁形態を採用し，むしろ中期末段階から継続するような (226) (227)

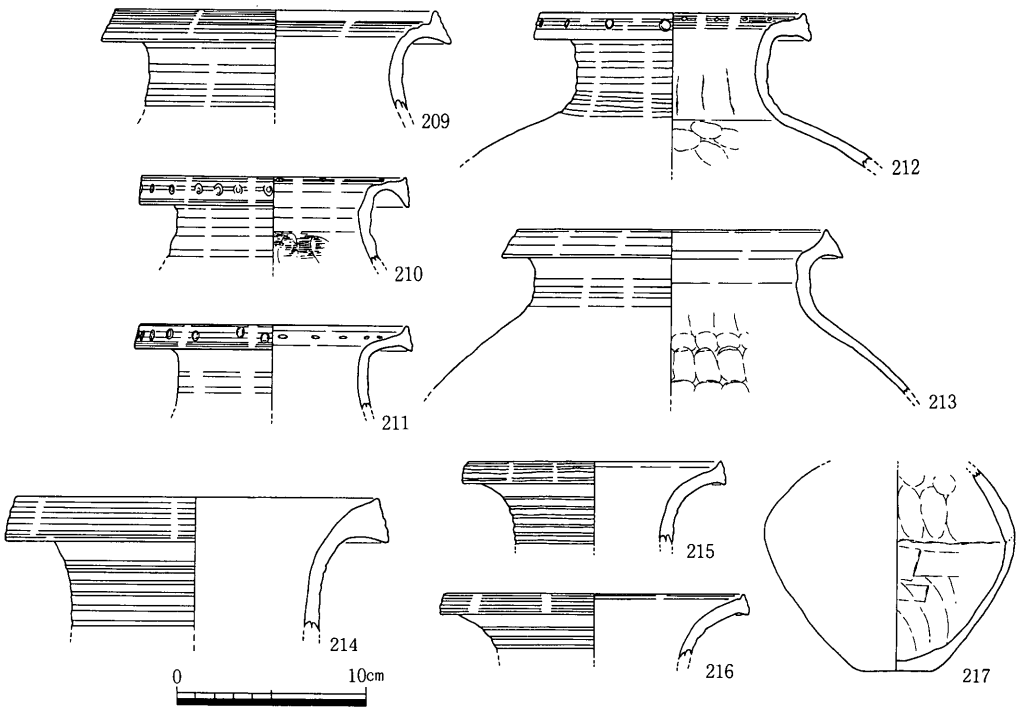
の口頸部形態は多くない。

(228) の特異な複合口縁形態は，この段階では本地方を含めた中部瀬戸内諸地方以東では一般化しない。瀬戸内西部地方ないしは九州東部地方に求めるべき形態であろう。ただし本例は搬入品ではない。また (229) は明らかな搬入品で本地方では見ない形態であ



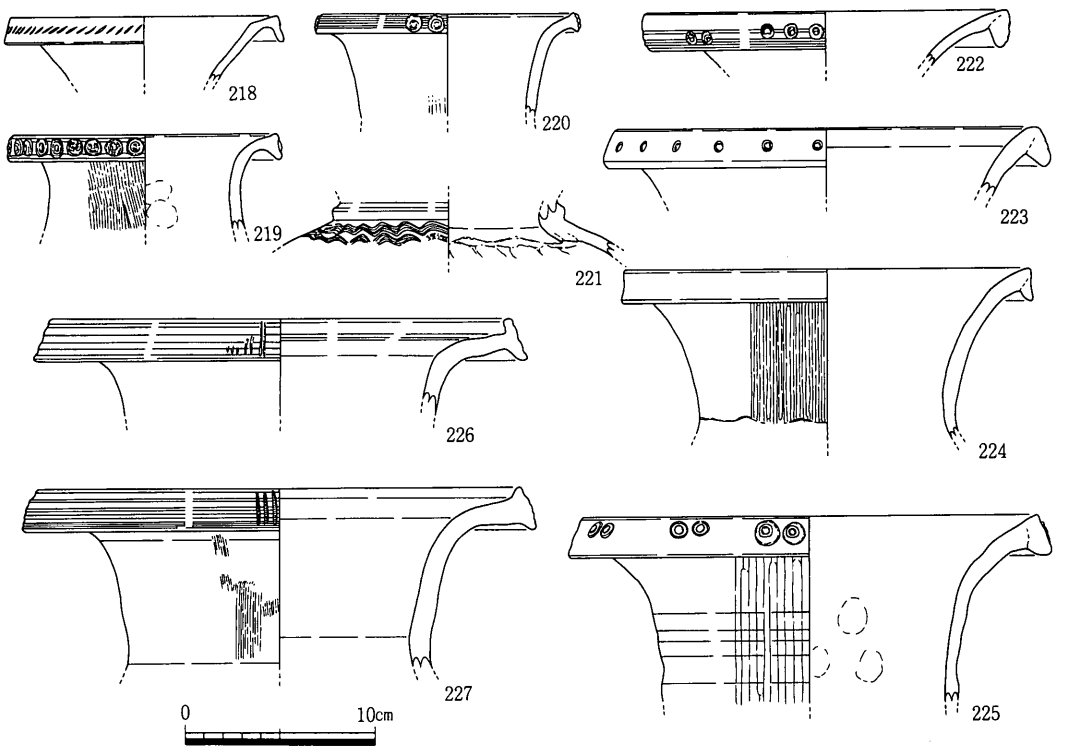
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
201	短頸壺	12.0			中・普	黄灰色	短い口頸部は緩やかに外反して立ち上がり、端部は内外に張り出す。頸部内面に７個１対の小刺突文。体部外面縦ｹｽﾞﾘ、内面上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/4	石英等　搬入品
202	短頸壺	13.0			細・極多	にぶい黄橙色	緩やかに折り返した口頸部は直線的に短く開く。端部は内外に小さく摘み出す。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞで叩き目残る。内面体上端部まで横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、石英等多
203	短頸壺	12.9			細・極多	明褐色	口頸部は僅かに外反して立ち上がる。端部は小さく下方に摘んで端面凹線。頸基部に刺突文。内面体上端部までｹｽﾞﾘ。	1/3	角閃石極多
204	短頸壺	15.5			細・極多	にぶい黄褐色	短い口頸部は緩やかに外反して開き、端部は鈍く肥厚し上下に小さく摘み出す。端面鈍い凹線。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、頸基部ﾊｹ原体刺突の斜線文。肩上部指押さえ。	1/8	角閃石極多、雲母多
205	短頸壺	15.3			細・多、中・多	にぶい黄橙色	口縁部は緩やかに折り返して開き、端部は僅かに肥厚し上方に摘み出し、下方も強く張り出す。端面鈍い凹線。頸基部に斜線文。横ﾅﾃﾞ。	1/4	石英等多、角閃石多　搬入品？
206	短頸壺	15.7			細・極多、中・多	明黄褐色	強く張った肩部から、短い口頸部は外反して開く。端部は小さく上下に摘み出して端面凹線。、頸部外面縦ﾊｹ後口頸部横ﾅﾃﾞ、肩部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/3	角閃石極多、石英等多
207	短頸壺	16.9			細・中	浅黄橙色	短い口頸部は緩く開いて立ち上がり、端部は下方に摘み出し、上部も小さく突出。端面横位の「ハ」字状刺突文。横ﾅﾃﾞ。	1/12	石英等・赤色粒　搬入品
208	短頸壺	15.7			細・極多、中・普	にぶい橙色	強く張った肩部から、短い口頸部は外反気味に開く。端部は小さく上下に摘み出して端面凹線。、頸部外面縦ﾊｹ後口頸部横ﾅﾃﾞ、肩部外面縦ﾊｹ、内面上端まで横削り。	1/4	角閃石極多、石英等

第172図　４区ＳＤ08出土遺物４（１／４）



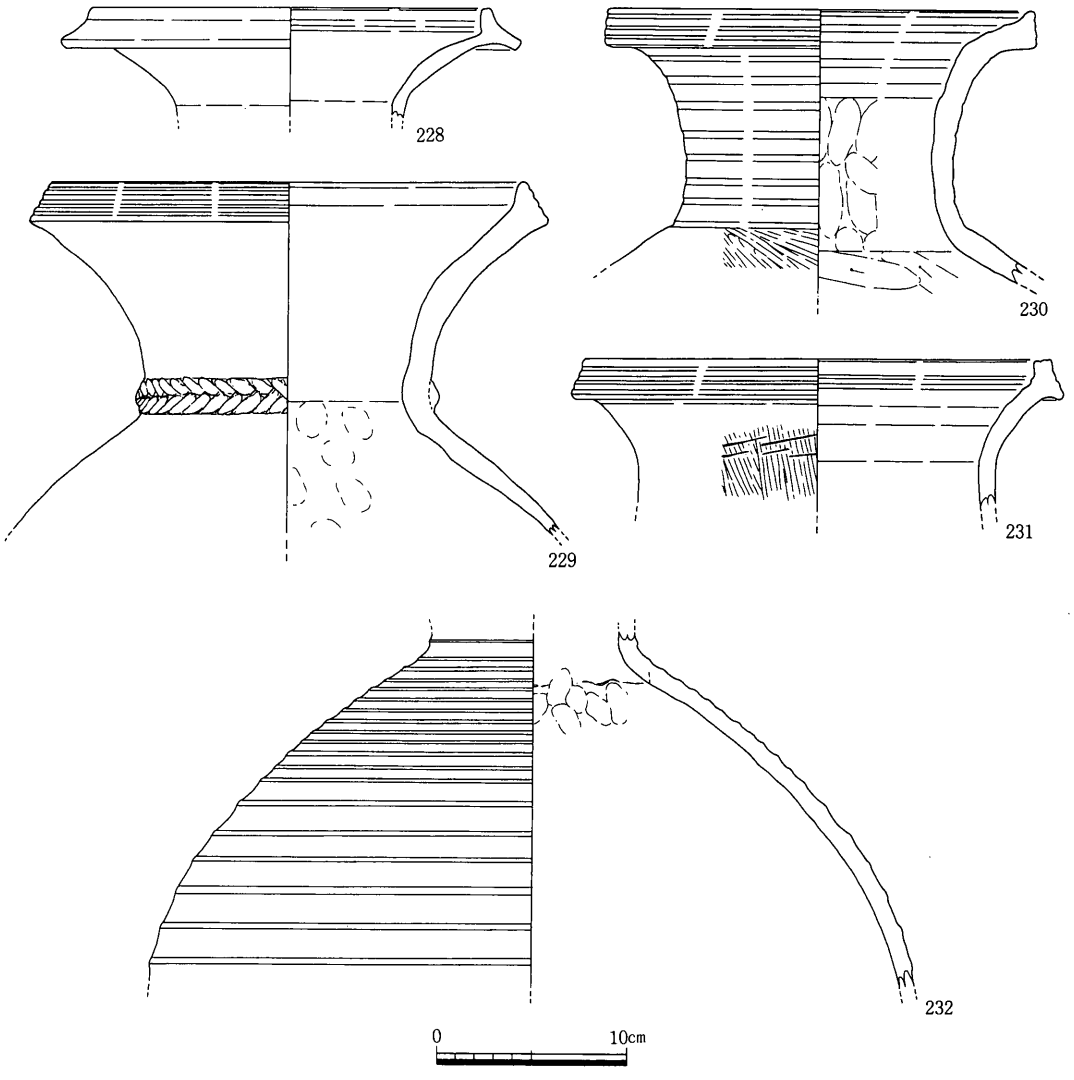
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
209	広口壺	16.8			細・極多	にぶい黄色	太めのやや短い頸部から強く折り返して口縁部は短いが水平に開く。端部は鈍く肥厚し上方に摘み出し下方も強く張る。端面・口縁部内面鈍い凹線。頸部凹線。	1/3	角閃石極多
210	広口壺	13.9			細・極多	にぶい黄橙色	太めの短い頸部から口縁部は強く折り返して短いが水平に開く。端部は肥厚し下方に強く摘み出し上部も突出。端面鈍い凹線。頸部外面、口縁部頸上部内面凹線、端面・口縁部内面円形刺突文。頸基部内面横ﾊｹ後指押さえ。	1/4	角閃石極多、雲母多
211	広口壺	14.0			細・極多	にぶい黄橙色	太めの短い頸部から口縁部は強く折り返して水平に開く。端部は鈍く肥厚し上下に摘み出す。端面鈍い凹線後端面・口縁部内面円形刺突文。頸部凹線。	1/3	角閃石極多、雲母多
212	広口壺	13.9			細・極多	灰黄色	肩部は強く張り、太めのほぼ直立する頸部から強く折り返して口縁部は短いが水平に開く。端部は鈍く肥厚し上下に摘み出す。端面・口縁部内面鈍い凹線後円形刺突文。頸部凹線	3/4	角閃石極多、雲母
213	広口壺	16.2			細・極多	橙色	太めの短い頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出し、端面鈍い凹線。頸部鈍い凹線、肩部内面指押さえ。	1/7	角閃石極多
214	広口壺	19.0			中・多	灰白色	やや開き気味の頸部から緩く折り返して短い口縁部をなす。端部は肥厚して上下に張り出す。端面鈍い凹線、頸部外面並行沈線。外面横ﾅﾃﾞ。	全周	石英等多　搬入品
215	広口壺	13.2			細・極多	褐色	やや外傾する頸部から緩やかに折り返し口縁部は短く開く。端部は小さく上下に摘み出す。端面鈍い凹線。頸部凹線。	3/7	角閃石極多
216	広口壺	15.6			細・極多	灰黄褐色	口縁部は強く外反して開き、端部は上下に小さく摘み出す。端面鈍い凹線、頸部凹線、横ﾅﾃﾞ。	1/3	角閃石極多、雲母多
217	壺			3.6	細・極多	灰黄色	体中位でよく張り、最大径部で鈍い稜。内面下半螺旋状のﾅﾃﾞ、中位横ﾅﾃﾞ、上半部指押さえ。	全周	角閃石極多、雲母多、石英等・赤色粒少

第173図　４区ＳＤ08出土遺物５（１／４）



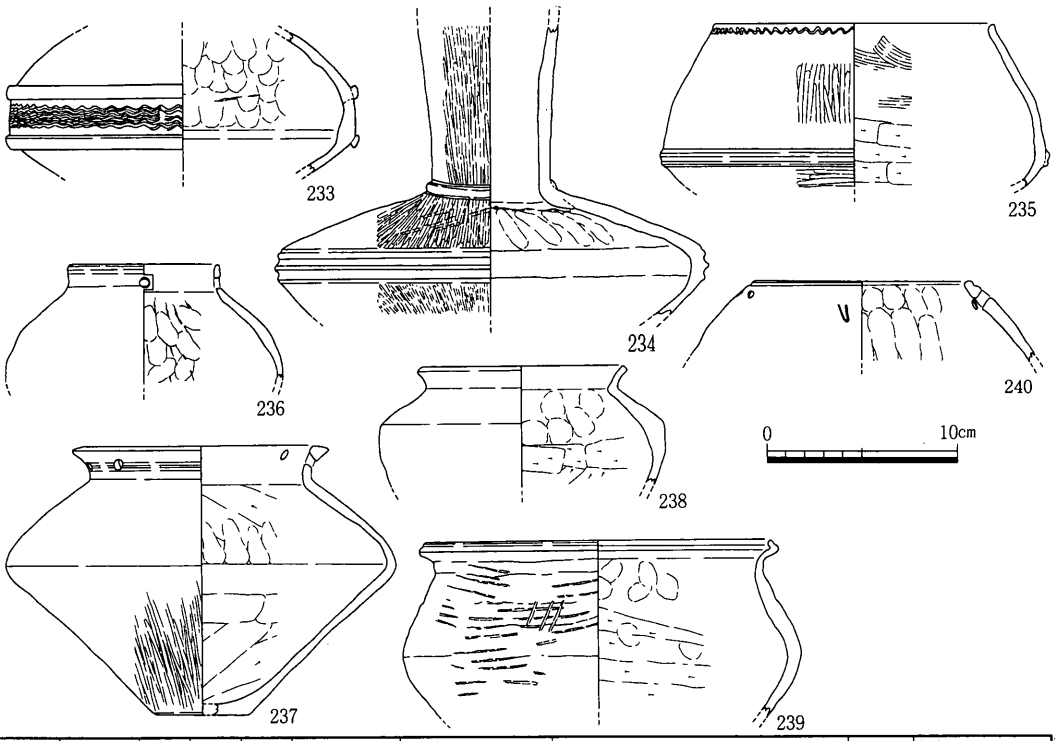
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
218	広口壺	14.0			細・極多	橙色	短い口頸部は強く開き、端部は板状の粘土帯を付して垂下口縁をなす。端面刺突文。	1/4	角閃石極多、石英等
219	広口壺	13.6			細・極多	にぶい橙色	太めの頸部から口縁部は強く折り返して短いが水平に開く。端部は鈍く肥厚し下方に強く摘み出し上部も突出。端面鈍い凹線後円形浮文。頸部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/6	角閃石極多
220	広口壺	13.2			細・極多	にぶい黄褐色	頸部はやや開き気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反して短く開く。端部は小さく上下に摘み出す。端面鈍い凹線後２個１対の円形浮文。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、雲母多
221	広口壺				細・極多	にぶい黄橙色	強く張った体部で頸基部に低い突帯１条。肩上部に櫛描波状文。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、赤色粒少
222	広口壺	18.8			細・極多	橙色	口頸部は外反して開き、端部に板状の粘土帯を付し垂下口縁をなす。端面不明瞭な凹線後３個１対の円形刺突文。	1/4	角閃石極多、雲母・石英等
223	広口壺	22.0			細・極多、中・普	灰黄褐色	口頸部は緩やかに開き、端部は断面三角形の粘土帯を付して垂下口縁をなす。端面円形刺突文。	1/5	角閃石極多（含粗粒）
224	広口壺	11.2			細・極多	暗褐色	口頸部は緩やかに外反して端部に断面三角形の粘土帯を付し垂下口縁をなす。口縁部横ﾅﾃﾞ、頸部外面縦ﾐｶﾞｷ。	1/6	角閃石極多
225	広口壺	23.9			細・極多	橙色	口頸部は緩やかに外反して開き、端部に断面三角形の粘土帯を付し垂下口縁をなす。端面２個１対の円形浮文、頸部鈍い凹線後縦ﾐｶﾞｷ	1/4	角閃石極多
226	広口壺	24.0			細・極多	にぶい黄橙色	強く折り返して口縁部は短いが水平に開く。端部は大きく上下に摘み出す。端面鈍い凹線後８条程度１対の短刻線。横ﾅﾃﾞ。	1/3	角閃石極多、雲母
227	広口壺	25.2			細・極多	にぶい黄橙色	緩く外傾する頸部から強く折り返して口縁部は短いが水平に開く。端部は鈍く肥厚し上下に摘み出す。端面鈍い凹線後ﾊｹ原体刺突文。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面横ﾅﾃﾞ。	1/6	角閃石極多、雲母・石英等

第174図　４区ＳＤ08出土遺物６（１／４）



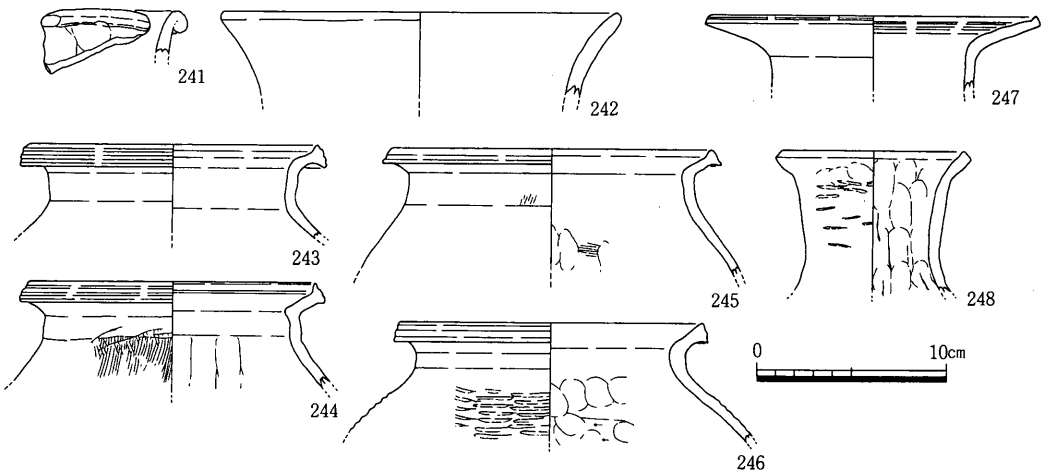
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
228	壺	20.7			細・極多	灰黄色	口頸部は強く外反して大きく開く。口縁上部に粘土帯を付して、強く内傾する幅広の端面を作り出す。横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多
229	壺	24.7			中・多	灰白色	よく張った体部から口頸部はやや外反気味に大きく開き、端部は鈍く肥厚して上方に大きく摘み出す。端面凹線、頸基部に頂部に横位の「ハ」字状押圧を加えた突帯1条。体部内面散漫な指押さえ。	1/3	石英等多　搬入品
230	壺	22.2			細・極多	にぶい黄橙色　褐灰色	やや外傾する頸部から緩やかに外反して口縁部は短い。端部は鈍く肥厚し上方に摘み出す。端面・口縁部内面・頸部外面凹線。肩部外面ﾐｶﾞｷ、内面肩上部までﾊｹﾒ後頸部指押さえ	1/2	角閃石極多、雲母多
231	壺	24.4			中・多	灰白色	太めの短い口頸部は緩やかに外反して開きやや肥厚した口縁部で小さく屈曲して直立する。上端は四角く納め、屈曲部は下方に摘み出す。端面凹線、外面縦ﾊｹ後ﾊｹ原体刺突。内面横ﾅﾃﾞ。	1/3	石英等多　搬入品
232	壺				細・極多	黄橙色	長胴形の体部で最大径は低い。体上半部には低い突帯を連続的に付しその間を強くなでる。内面ﾅﾃﾞ調整で上端部に指押さえ。	1/4	雲母・石英等極多　搬入品

第175図　４区ＳＤ08出土遺物７（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
233	細頸壺				細・極多	にぶい黄色	扁平な算盤玉形の体部。最大径部の上下に低い矩形の突帯２条。突帯間に櫛描波状文。内面下半横ﾅﾃﾞ、中位以上指押さえ顕著。	5/12	角閃石極多、石英等多、雲母少
234	細頸壺				細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く張った扁平球状の体部に僅かに開き気味に伸びる細い口頸部。最大径部には小形の突帯３条を持ち、その間を強くなでる。頸基部に低い突帯１条。外面縦ﾐｶﾞｷ、上半部に叩き目残る。内面最大径以下横ﾅﾃﾞ、以上指押さえ。頸部内面ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、雲母
235	鉢	14.6			細・極多	灰黄褐色	体下部の最大径で緩やかに湾曲して内傾する。端部は小さく反り気味に四角く納める。外面直下波状文１条。最大径部に低い突帯。外面上半縦ﾐｶﾞｷ、下半部横ﾐｶﾞｷ。内面下半部横ｹｽﾞﾘ、上半部横ﾊｹﾒ。台付鉢の可能性。	1/8	角閃石極多
236	無頸壺	7.7			細・極多	にぶい黄橙色	強く張った体部から口頸部は短く直立して端部は丸く納める。頸部に紐通し孔。肩部内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
237	無頸壺	12.0	13.8	4.8	細・極多	灰黄褐色	やや扁平な強く張った体部。中位の最大径部に鈍い稜。短い口頸部はやや開き端部は外方に摘み出す。頸部の相対する２方に２孔１対の紐通孔。頸部凹線。体部外面下半縦ﾐｶﾞｷ、内面下半縦ｹｽﾞﾘ、中位以上横ｹｽﾞﾘ後、最大径部指押さえ。	1/3	角閃石極多、雲母、赤色粒少
238	無頸壺	10.6			細・極多	橙色	やや扁平な体部で中位で強く張る。最大径部に鈍い稜。口縁部は強く折り返して短い。端部は僅かに肥厚気味に四角く納める。内面下半部縦ｹｽﾞﾘ後、中位横ｹｽﾞﾘ。上半部指押さえ	1/4	角閃石極多、石英等多
239	鉢	18.0			細・極多、中・多	灰黄色	やや扁平な体部で中位で強く張り、最大径部に鈍い稜。口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は小さく上方に折り曲げて丸く納める。外面叩き目顕著に残る。内面中位まで横ｹｽﾞﾘ後上半部散漫な指押さえ。	3/8	角閃石極多、石英等多
240	無頸壺	11.1			細・極多	にぶい黄橙色	肩部は強く張り、その上端部は折り曲げずに鈍く肥厚してそのまま丸く納め口縁部となす。肩上部の相対する２方に２孔１対の紐通孔。肩部外面に「Ｖ」字の篦描記号文。内面指押さえ。	1/3	角閃石極多、雲母多

第176図　４区ＳＤ08出土遺物８（１／４）

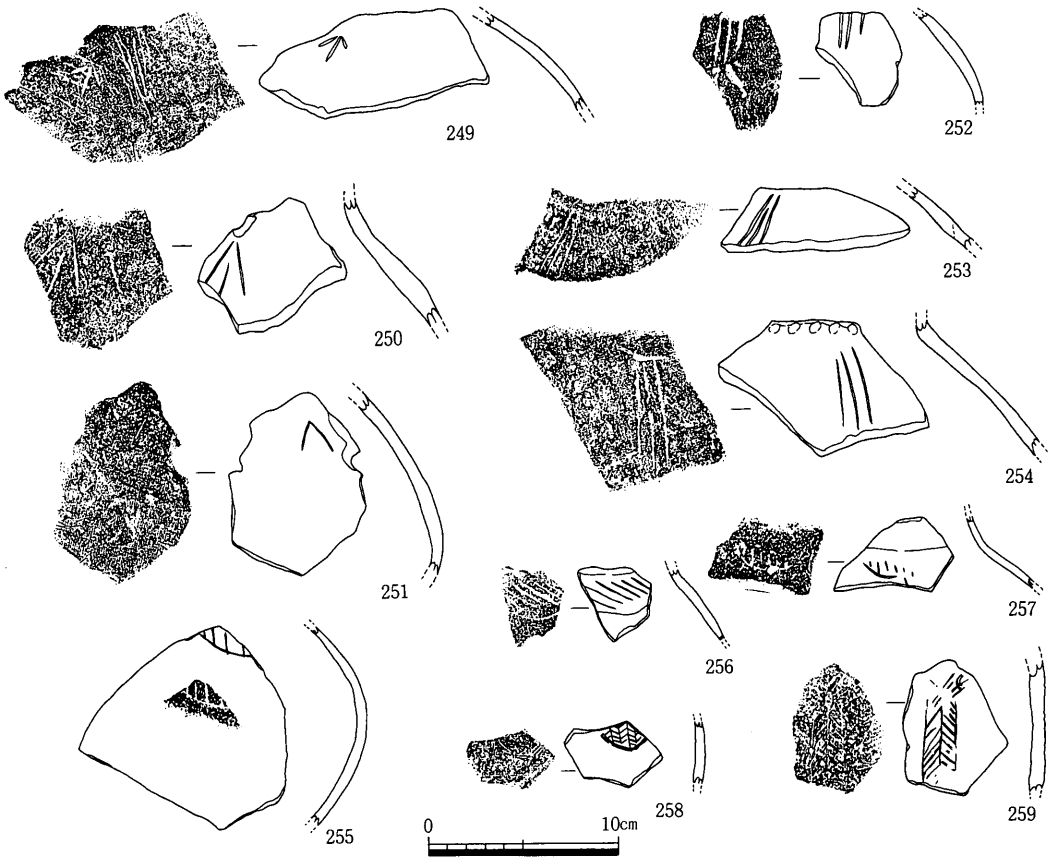


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
241	朝鮮系無文土器？				中・普	浅黄橙色	口縁端部は粘土帯を付して断面隅丸方形に肥厚する。外面わずかに指押さえ。		石英等　搬入品　朝鮮系無文土器？
242	壺	20.7			細・少、中・普	橙色	口頸部は緩やかに外反して開き、端部は丸く納める。	1/8	石英等、角閃石少　搬入品
243	広口壺	15.0			細・極多	灰黄色	太めの短い頸部から強く折り返して口縁部は短いが水平に開く。端部は鈍く肥厚し上下に小さく摘み出す。端面鈍い凹線。横ﾅﾃﾞ。	1/5	角閃石極多、石英等・雲母
244	広口壺？	15.0			細・極多	灰黄色	やや不明瞭な短い頸部から強く折り返し口縁部は短く開く。端部は上方に摘み出し下方も突出。頸部横ﾅﾃﾞ、肩部縦ﾊｹ、内面指腹押さえ。	1/4	角閃石極多
245	広口壺？	16.6			細・極多	灰黄褐色	太めの短い頸部から強く折り返して口縁部は短い。端部は下方に摘み出し、上端も突出。頸部外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、肩部内面横ﾊｹ後指押さえ。	1/4	角閃石極多、雲母
246	広口壺？	15.8			細・極多	灰黄褐色	太めの短い頸部から強く折り返して口縁部は短い。端部は鈍く肥厚して上下に張る。端面凹線。外面叩き目顕著に残る。内面肩部中位まで横ｹｽﾞﾘ後指押さえ。	1/2	角閃石極多、赤色粒少
247	広口壺	17.1			細・極多	明褐色	直立する頸部から強く折り返して口縁部は大きく水平に開く。端部は小さく上方に摘み出し、口縁部内面凹線。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多、石英等・赤色粒
248	壺	9.6			細・極多、中・普	橙色	口頸部は緩やかに外反して立ち上がり、端部は上方に張り気味に四角く納める。頸部外面叩き目残す。内面指押さえ顕著。	1/4	角閃石極多、石英等・赤色粒

第177図　4区ＳＤ08出土遺物９（１／４）

ある。西部瀬戸内地方に類例がある。(230) は (214) ～ (216) の形態に近い大形壷だが，口縁端部形態はやはり瀬戸内西部に多い形態である。搬入品大形壷 (231) の口縁部形態も同様である。(232) は卵形を呈する体上半部に小突帯を貼付した後にその間を強く横ナデし，微隆起線が連続する特異な形状をもつ。やや長胴化した卵形の壷体部に小突帯を連続させること自体は当該時期前後の東部九州地方に類例を見るが，本例と同一の形態はないようである。やはり搬入品である。

(233) は細頸壷で扁平な体中位の２条の突帯間がやや広く，その部分に櫛描波状文を施す。(234) と共に内面上半部に顕著な指押さえを残すことは本器種に多い。(235) は低

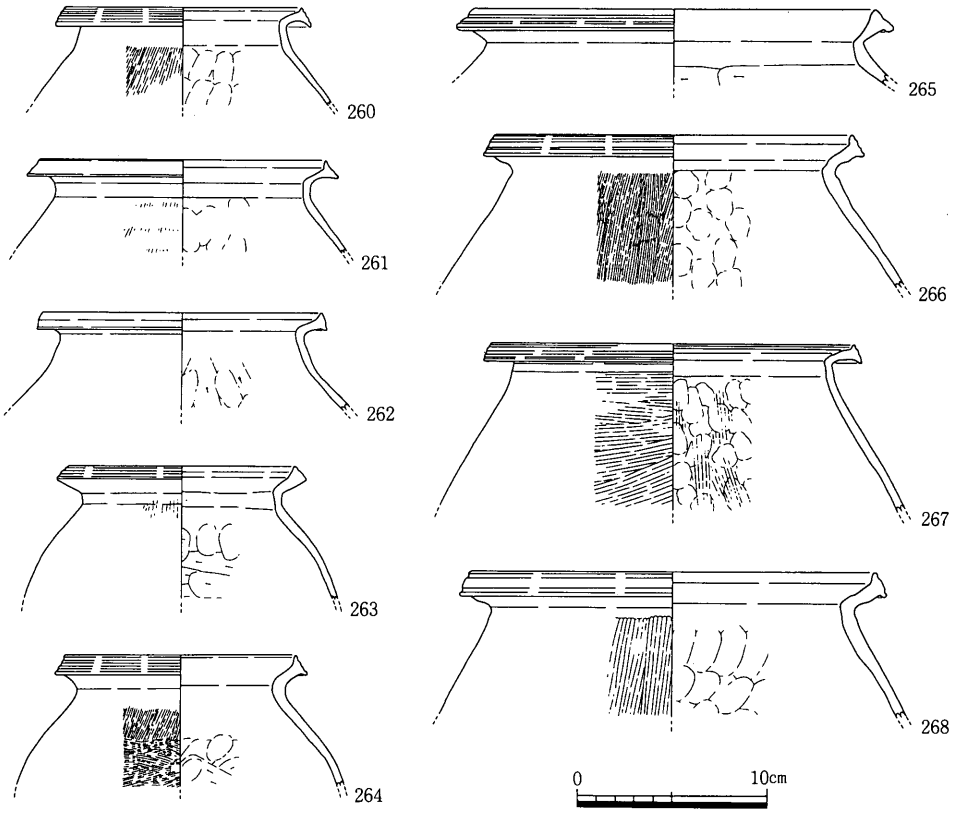


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
249	甕				細・極多	明褐色	甕肩部。篦描沈線による矢印状の記号文。内面下半横ケズリ、上半部指押さえ。		角閃石極多
250	壺				細・極多	にぶい黄橙色	壺肩部。篦描沈線による矢印状の記号文。外面ナデ。内面下半横ケズリ、上半部指押さえ。		角閃石極多、石英等
251	壺				細・極多	橙色	壺肩部。篦描沈線による「V」字状の記号文。内面最大径部まで横ケズリ以上指押さえ。		角閃石極多
252	壺				細・極多	にぶい黄褐色	壺肩部。並行する篦描沈線3条の記号文。内面横ケズリ。		角閃石極多
253	壺				細・極多	黒褐色	壺肩部。並行する篦描沈線3条の記号文。		角閃石極多、石英等多
254	壺				細・極多	黄橙色	壺肩部。並行する篦描沈線3条の記号文。外面縦ミガキで肩上端部を押圧、内面指押さえ。		角閃石極多
255	壺				細・極多	にぶい黄褐色	壺肩部。篦描沈線による弧線と短刻線を組み合わせた記号文。外面最大径以下縦ミガキ、内面上半部指押さえ、最大径以下横ケズリ。		角閃石極多
256	壺				細・極多	にぶい黄褐色	壺肩部。篦描沈線による弧線と短刻線を組み合わせた記号文。		角閃石極多
257	壺				細・極多	にぶい黄橙色	壺肩上部。篦描沈線による弧線と短刻線を組み合わせた記号文。外面頸基部に鈍い凹線。		角閃石極多、雲母
258	壺				細・極多	灰黄褐色	壺肩部。櫛描沈線の弧線と細密な綾杉文を組み合わせた文様構成。		角閃石極多
259	壺				細・極多	灰黄色	壺肩部。縦位の細密な綾杉状の構成を持つ。上端は複数の沈線が放射状に広がり、右方に重複した弧線2条（円形刺突文の可能性もある。）がある。小片で、上下端も摩滅しているため全体構成不詳。絵画の一部の可能性もある。外面ミガキ、内面ケズリ。		角閃石極多、雲母多

第178図　4区ＳＤ08出土遺物10（1／4）

い最大径部に低い突帯を付し，口縁部には波状文を見る。ブランデーグラス形の鉢でおそらく脚台が付く。無頸壷（236～240）はやや扁平な強く張った体部を持つ。本器種に箱形ないしは円盤状の蓋が伴うと考えられる。（235）は本地方ではほとんど見ない形態。

（241）は口縁端部を巻き込んで，玉縁状に肥厚させる。朝鮮「系」無文土器の可能性があり，注意を要する。本例と前期壷口縁部（242）は重複するＳＤ07からの混入と考えたい。朝鮮「系」無文土器と本溝資料との年代的隔絶が大きい。（247）は後期中葉以降に下る薄作りの広口壷。やや粗雑な（248）も後出形態で後期中葉までは下るであろう。（243）～（246）はごく短く直立する頸部を持つ。広口壷頸部としては貧弱であるが，一般の甕「頸部」とは様相を異にする。頸部凹線文その他の加飾はなく，口縁部の拡張は鈍い。肩部に叩き目を明瞭に残す（246）は後出形態であろう。（249～257）は壷肩部の記号文。



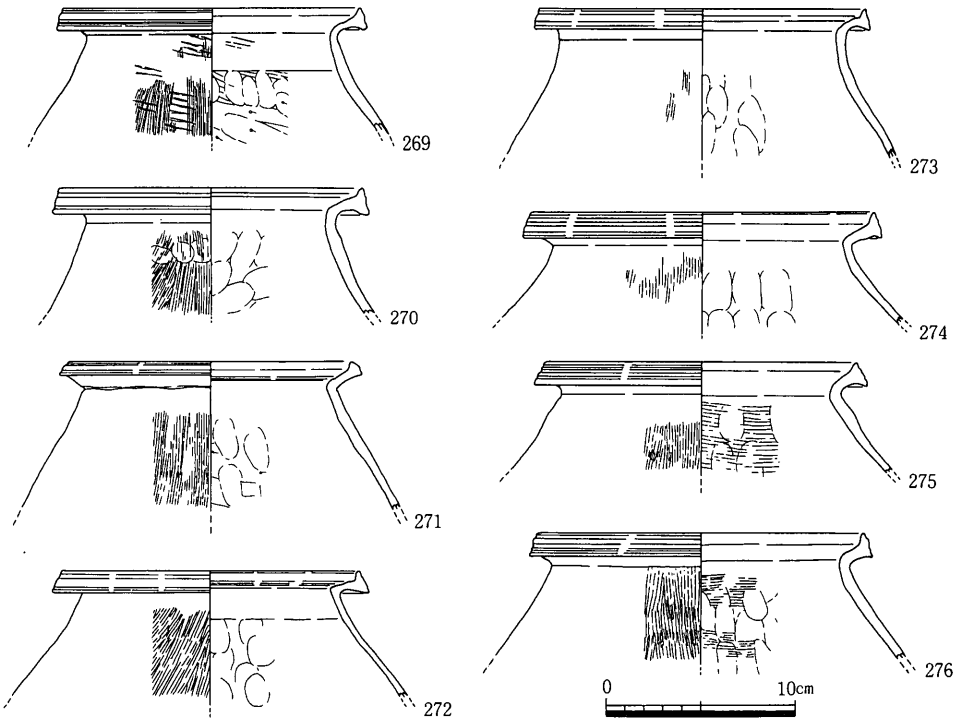
第179図　４区ＳＤ08出土遺物11（１／４）

挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
260	甕	12.3			細・極多	暗灰黄色	不明瞭な短い頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚し下方に大きく摘み出して上方も小さく突出。端面鈍い凹線。肩部外面縦ﾊｹ、内面肩部指押さえ、頸部横ﾅﾃﾞ。	1/3	角閃石極多、雲母
261	甕	15.0			細・極多	にぶい橙色	不明瞭な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上方に摘み出し下方も強く張り出して端面は強く内傾。肩部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
262	甕	14.6			細・極多	褐色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚し上方に摘み出して下端も突出。端面鈍い凹線。肩部内面縦ｹｽﾞﾘ後指押さえ、頸部横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多
263	甕	11.6			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な短い頸部から折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚し上方にやや張る。端面鈍い凹線。肩部外面縦ﾊｹ、肩部内面下半横ｹｽﾞﾘ後上半部指押さえ。	1/4	角閃石極多
264	甕	12.0			細・極多	明褐色	口縁部は強く折り返して短い。端部は上下に摘み出し端面凹線。肩部外面縦ﾊｹ後横ﾊｹ、内面肩部下半横ｹｽﾞﾘ後指押さえ。	3/5	角閃石極多
265	甕	21.0			細・極多	橙色　にぶい黄橙色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返し、端部は鈍く肥厚して上下に摘み出す。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜。端面凹線、肩部内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
266	甕	18.6			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に摘み出し下方も小さく突出。端面凹線。肩部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/6	角閃石極多、雲母多
267	甕	18.4			細・極多	にぶい黄橙色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜と頸部内面凹面。端部は鈍く肥厚して小さく上下に摘み出す。端面鈍い凹線。外面横ﾊｹ、内面肩部縦ﾊｹ後指押さえ。頸部横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多
268	甕	21.2			細・極多	橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に摘み出して端面鈍い凹線。肩部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、雲母少

第179図　観察表

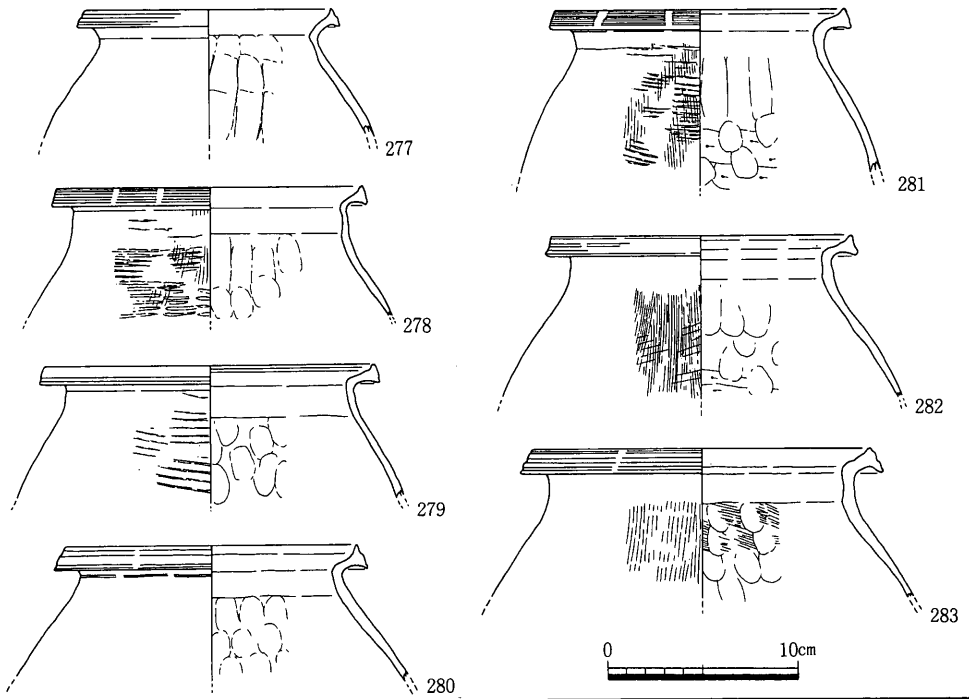
「矢印状」,「並行短線」,「弧線＋短刻線」の種類がある。より複雑な表現を示す（258）（259）は上記した記号文とは異なり，より大きな図構成の一部であろう。

甕では（260～283）が最も主流的な形態。痕跡的な頸部から口縁部を強く折り返す。内面ケズリ調整は肩下半部までしか達しない。肩部内面は指押さえもしくはナデでやや大型品を中心にハケ調整もある。口縁端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出し，上方拡張が相対的に強い形態（276等）が多いが，（283）のように強く下方に摘み出す形態もある。体部外面に叩き目を残すものも少なくないが，原則的にハケ調整その他で消そうとしている。（284～294）は折り返しが緩やかで「頸部」を認めない。また口縁部の拡張は弱く，「く」字状に近いか下方拡張が目立つ。（289）（290）等は内面ケズリも肩上端まで達している。（284・285・289）は搬入品である。これらは吉備南部地方の当該時期の甕形態に近い。（291）～（294）は「く」字状を呈する口縁部も発達しつつあり，明らかに後出形態である。（293）は搬入品。（295～299）は上記した主流的な形態を引き継ぐが，口縁部がやや伸びると共に端部拡張が退化しており，後期初頭の新しい様相を示す。（300～303）は発



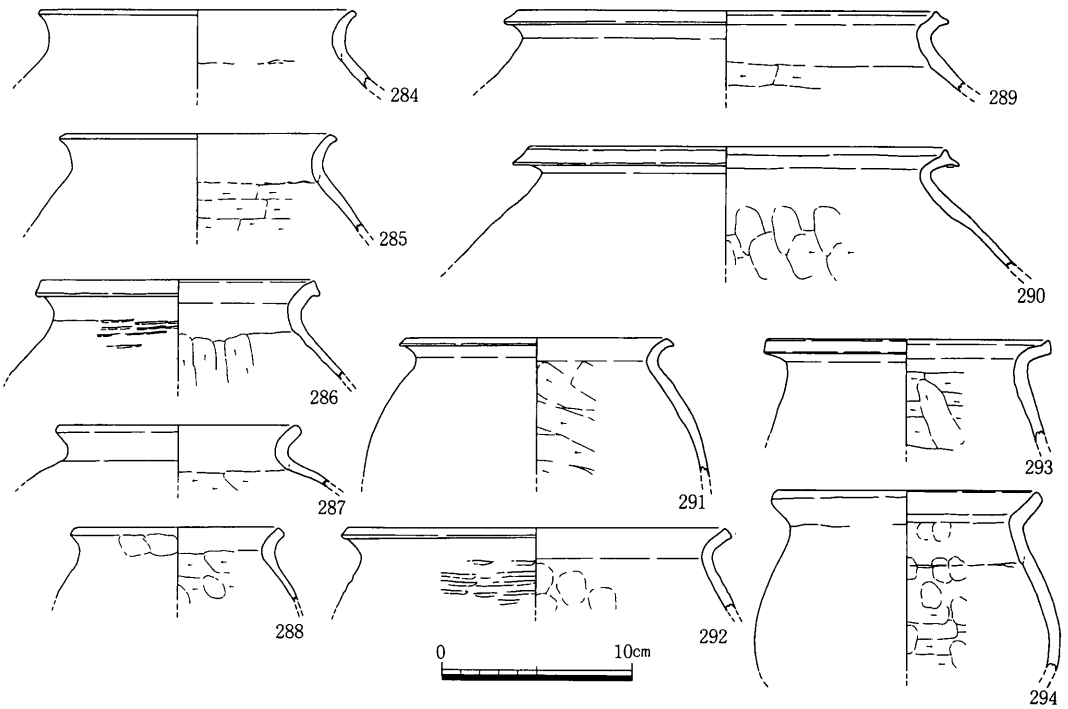
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
269	甕	15.6			細・極多	橙色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は上方に小さく摘み出し下方も突出。端面鈍い凹線。外面縦ﾊｹで叩き目残す。内面肩部下半まで横ｹｽﾞﾘ後上半部横ﾊｹ後に指押さえ。頸部横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多
270	甕	15.4			細・極多	暗灰黄色	口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚し上下に小さく摘み出す。外面縦ﾊｹ後部分的に指押さえ。内面指押さえ。	1/6	角閃石極多、石英等多
271	甕	15.0			細・極多	にぶい黄色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚して小さく上下に摘み出す。端面鈍い凹線。外面縦ﾊｹ後上端横ﾅﾃﾞ、内面肩部中位まで横ｹｽﾞﾘ後指押さえ。	1/6	角閃石極多、雲母多
272	甕	15.6			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚し上方に摘み出し下方も張り出す。端面鈍い凹線。肩部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/6	角閃石極多
273	甕	17.0			細・極多	灰黄色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚し上方に小さく摘み出し下方も張り出す。端面鈍い凹線。肩部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、雲母多
274	甕	18.0			細・極多	にぶい黄色	不明瞭な内傾する頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚し上方に摘み出して下方も小さく突出。端面鈍い凹線。肩部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、雲母
275	甕	16.2			細・極多	にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚し上下を小さく摘み出して端面凹線。肩部外面縦ﾊｹ後上端部横ﾅﾃﾞ、内面横ﾊｹ後指押さえ。	1/2	角閃石極多
276	甕	17.2			細・極多	明褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚し上方に摘み出し下方も小さく突出。端面凹線。肩部外面縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ・指押さえ。	1/6	角閃石極多、石英等

第180図　4区ＳＤ08出土遺物12（１／４）



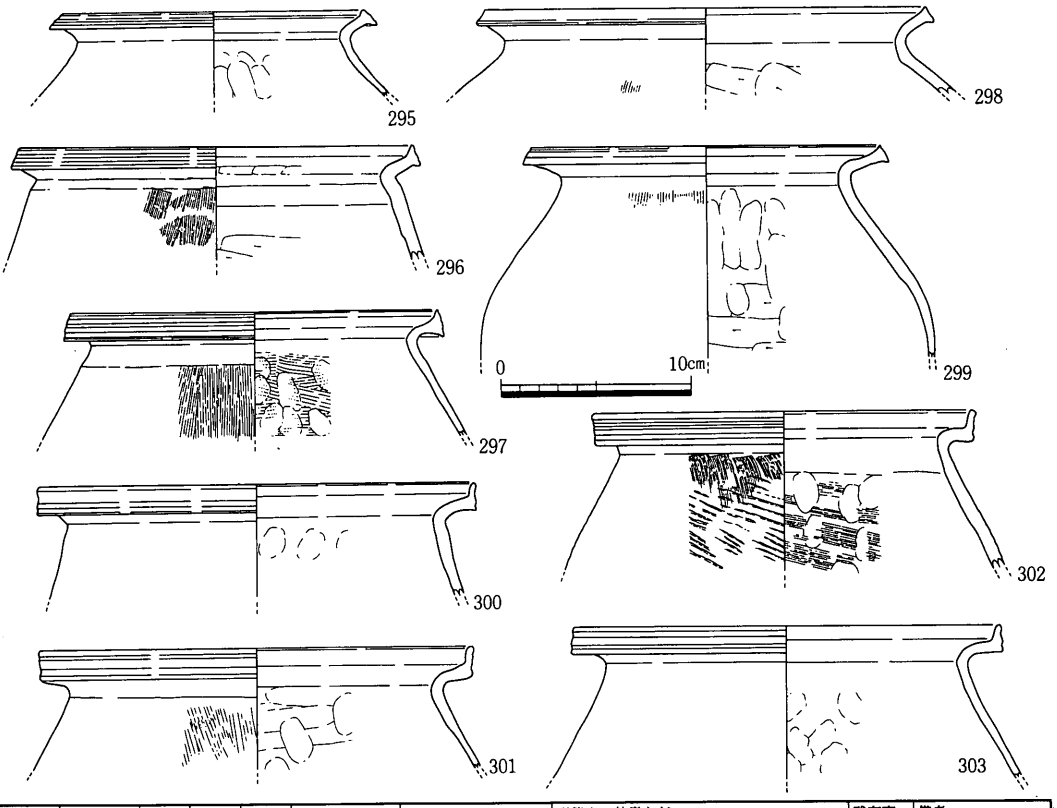
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
277	甕	12.8			細・極多	赤褐色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで頸部内面は凹面をなして折り返し部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚し上下に小さく摘み出す。端面鈍い凹線。肩部内面指腹押さえ、上端部横ﾅﾃﾞ。	1/3	角閃石極多
278	甕	16.0			細・極多	明褐色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで頸部内面は凹面をなして折り返し部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚し上下に小さく摘み出す。端面鈍い凹線。外面縦ﾊｹで頸部まで叩き目残る。肩部内面指腹押さえで、下端部指頭押さえ、頸部横ﾅﾃﾞ。	1/3	角閃石極多
279	甕	17.3			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚し上下に小さく摘み出す。外面叩き目残す。肩部内面指腹押さえ、上端部横ﾅﾃﾞ。	1/6	角閃石極多、石英等・雲母
280	甕	15.2			細・極多	灰黄褐色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚して上下に摘み出す。端面鈍い凹線。内面肩部指押さえ。頸部横ﾅﾃﾞ。	1/6	角閃石極多
281	甕	15.0			細・極多	浅黄色　灰黄色	不明瞭な短い頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚して小さく上下に摘み出す。端面鈍い凹線。外面縦ﾊｹで叩き目残す。内面肩部下半まで横ｹｽﾞﾘ後指押さえ、上半部指腹押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等多
282	甕	15.8			細・極多	黒褐色　褐灰色	不明瞭な短い頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は肥厚し上下に小さく摘み出す。端面鈍い凹線。肩部外面縦ﾊｹで、叩き目残る。、内面肩部下半まで横ｹｽﾞﾘ後指押さえ、頸部横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多、雲母少
283	甕	17.6			細・極多	にぶい橙色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚し下方に強く摘み出し上方もやや突出。端面鈍い凹線。肩部外面縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ後指押さえ。頸部強い横ﾅﾃﾞで凹面。	1/6	角閃石極多

第181図　４区ＳＤ08出土遺物13（１／４）



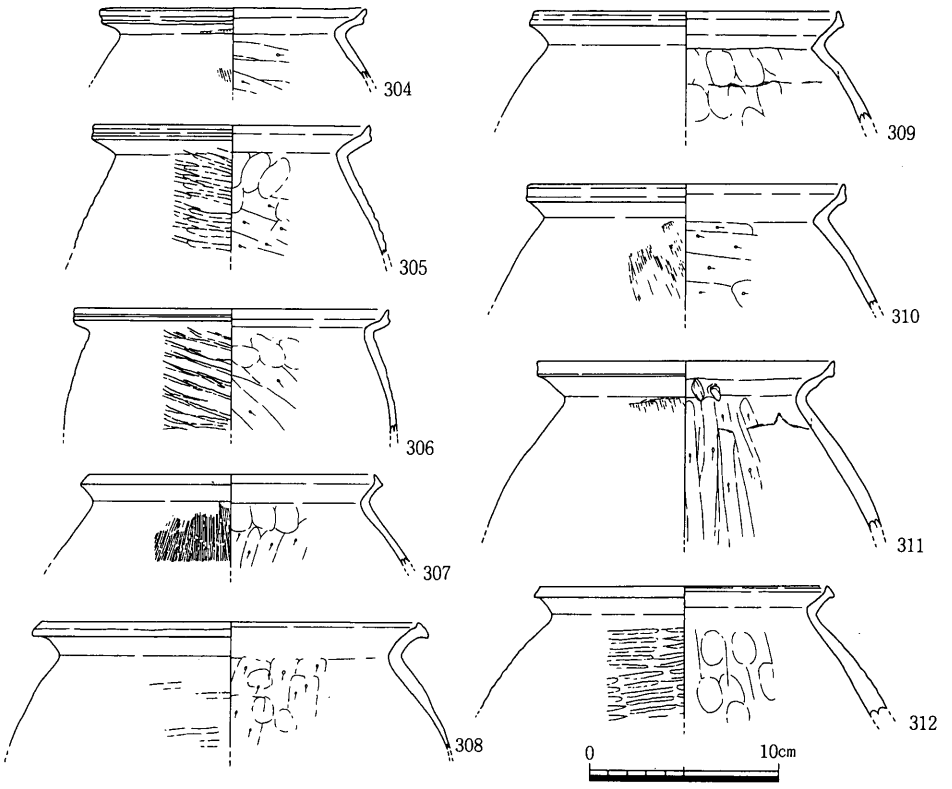
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
284	甕	16.3			細・少、粗・普	灰白色	緩やかに折り返した口縁部は短く端部は四角く納める。	1/8	石英等、赤色粒少　搬入品
285	甕	13.8			細・多、中・普	灰白色	緩やかに折り返した口縁部は短く端部は四角く納める。内面上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/6	赤色粒多、石英等　搬入品
286	甕	14.2			細・極多、中・普	灰黄褐色	緩やかに折り返した口縁部は短い。端部は上下に小さく摘む。外面上端部叩き目残る。内面上端まで縦ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、石英等
287	甕	12.5			細・極多	灰黄褐色	よく張った肩部から口縁部は強く折り返し開く。端部は鈍く肥厚気味に丸く納める。外面横ﾅﾃﾞ、内面上端まで横ｹｽﾞﾘ。	2/5	角閃石極多
288	甕	10.6			細・極多	黄灰色	緩やかに折り返した口縁部は短く、端部は四角く納める。内面体部上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
289	甕	21.8			粗・多	灰白色	強く張った肩部から口縁部は緩やかに折り返し、端部は外方に摘み出しつつ上方も突出。内面肩部上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/10	石英等多　搬入品
290	甕	22.8			細・極多、中・多	明赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚して下方に大きく摘み出し、上部も突出。肩部内面横ｹｽﾞﾘ後上半部指押さえ。	1/6	角閃石極多、石英等多、雲母多
291	甕	13.6			細・極多、中・少	橙色　黄灰色	口縁部は強く折り返して短く外反して開く。端部は下方に張り出す。内面上端まで横ｹｽﾞﾘ	1/4	角閃石極多、赤色粒少
292	甕	19.8			細・極多	にぶい黄橙色	緩やかに折り返した口縁部は短く開く。端部は上下に張り気味に四角く納める。体部外面叩き目残る。内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等
293	甕	14.8			細・少	灰白色	張りの弱い体部から強く折り返した口縁部は短いが水平に開く。端部は小さく上方に摘み出す。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/8	石英等少　搬入品
294	甕	13.2			細・極多	にぶい黄橙色	張りの弱い体部から緩やかに折り返した口縁部は短い。端部は上方に張り気味に四角く納める。外面ﾅﾃﾞ、内面中位まで横ｹｽﾞﾘ後上半部散漫な指押さえ。	1/2	角閃石極多

第182図　４区ＳＤ08出土遺物14（１／４）



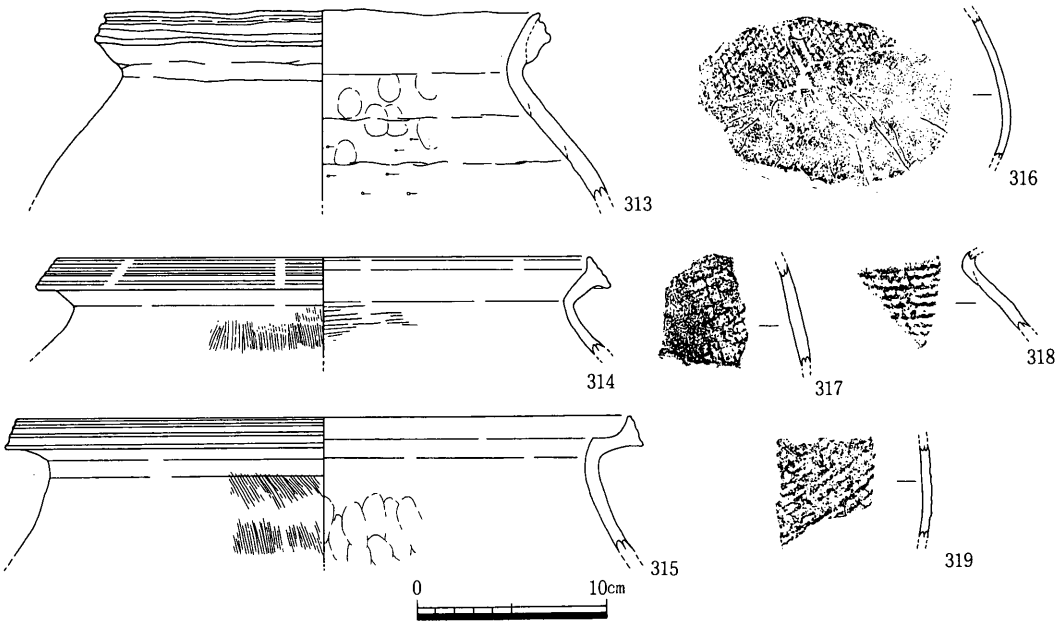
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
295	甕	15.6			細・極多	にぶい黄橙色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は下方に摘み出して上方も突出。端面鈍い凹線。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
296	甕	20.5			細・極多	にぶい橙色	強く折り返して口縁部は短く開く。端部は上方に摘み出し下端も突出。端面凹線。外面縦ﾊｹ、内面肩部下半まで横ｹｽﾞﾘ、上端部横ﾅﾃﾞ	1/8	角閃石極多
297	甕	19.2			細・極多	明赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚し上下を小さく摘み出す。端面凹線。肩部外面縦ﾊｹ後上端部横ﾅﾃﾞ、内面横ﾊｹ後指押さえ。	1/12	角閃石極多
298	甕	23.0			細・極多、粗・中	にぶい黄色	強く張った肩部から口縁部は強く折り返して端部は上下に小さく摘み出す。外面縦ﾊｹ、内面肩部上半まで横ｹｽﾞﾘ。	1/6	角閃石極多（含粗粒）
299	甕	17.7			細・極多	黄褐色	口縁部は痕跡的な頸部から強く折り返して開く。端部は鈍く肥厚して上下に張り出す。端面鈍い凹線。外面縦ﾊｹ、内面肩部下半まで横ｹｽﾞﾘ後指押さえ。	1/8	角閃石極多
300	甕	22.8			細・極多	橙色	二重口縁。張りの弱い体部から口縁部強く折り返し水平に開く。ほぼ直立する短い立上り部の上端は丸く納め、端面鈍い凹線。内面指押さえ。	1/5	角閃石極多
301	甕	22.6			細・極多、中・普、粗・普	にぶい黄橙色	二重口縁。張りの弱い口縁部強く折り返し水平に開く。ほぼ直立する短い立上り部の上端は丸く納め、端面凹線２条。肩部外面縦ﾊｹ。内面指押さえ・横ﾅﾃﾞ。	1/5	角閃石極多（含粗粒）、石英等多（含粗粒）
302	甕	19.8			細・極多	にぶい黄色	二重口縁。張りの弱い口縁部強く折り返し水平に開く。ほぼ直立する短い立上り部の上端は丸く納め、端面凹線３条。肩部外面縦ﾊｹで叩き目顕著に残る。内面指押さえ後横ﾊｹ。	1/4	角閃石極多、石英等多
303	甕	22.3			細・極多	にぶい黄橙色	二重口縁。張りの弱い体部から口縁部強く折り返し水平に開く。ほぼ直立する短い立上り部の上端は丸く納め、端面凹線２条。内面指押さえ。	1/6	角閃石極多

第183図　４区ＳＤ08出土遺物15（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
304	甕	14.0			細・極多	黒褐色　明褐灰色	口縁部は強く折り返して開く。端部は薄く摘み上げ尖る。外面縦ﾊｹ、内面上端まで横ｹｽﾞﾘ	1/4	角閃石極多、雲母多
305	甕	14.4			細・極多	暗褐色　浅黄色	最大径の低い体部から口縁部は強く折り返して開く。端部は薄く上方に摘み上げ尖る。外面叩き目顕著に残る。内面横ｹｽﾞﾘ後上端部指押さえ。	1/6	角閃石極多、石英等・雲母
306	甕	16.4			細・極多	にぶい黄色	張りの弱い体部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は薄く上方に摘み上げ尖る。外面叩き目顕著に残る。内面縦ｹｽﾞﾘ後上端部指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等・赤色粒多
307	甕	14.9			細・極多	灰黄褐色	口縁部は強く折り返し、端部は薄く摘み上げ尖る。外面縦ﾊｹ、内面縦ｹｽﾞﾘ後上端部指押さえ。	1/5	角閃石極多、石英等多
308	甕	19.8			細・極多	灰黄褐色	口縁部は強く折り返して開く。端部は上下に小さく摘み出す。体部外面叩き目残る。内面上端まで縦ｹｽﾞﾘ後上半部指押さえ。	1/5	角閃石極多、赤色粒
309	甕	15.8			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返し、端部は薄く摘み上げて尖る。端面鈍い凹線。口縁部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に明瞭な稜。肩部内面指押さえ。	1/8	角閃石極多
310	甕	16.6			細・極多	明褐色	口縁部は強く折り返し、端部は薄く摘み上げて尖る。端面鈍い凹線。口縁部内面の強い横ﾅﾃﾞと体部のﾊｹﾒﾘで折り返し部に明瞭な稜。外面縦ﾊｹ、内面上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、石英等
311	甕	15.5			細・極多	褐色	最大径の低い体部から口縁部は強く折り返して開く。端部は薄く上方に摘み上げ尖る。外面縦ﾊｹ、内面上端まで粗い縦ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、石英等多
312	甕	15.0			細・極多	にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は小さく上方に摘み出し下端もやや突出。外面叩き目顕著に残る。内面縦ﾅﾃﾞ後指押さえ。	1/5	角閃石極多

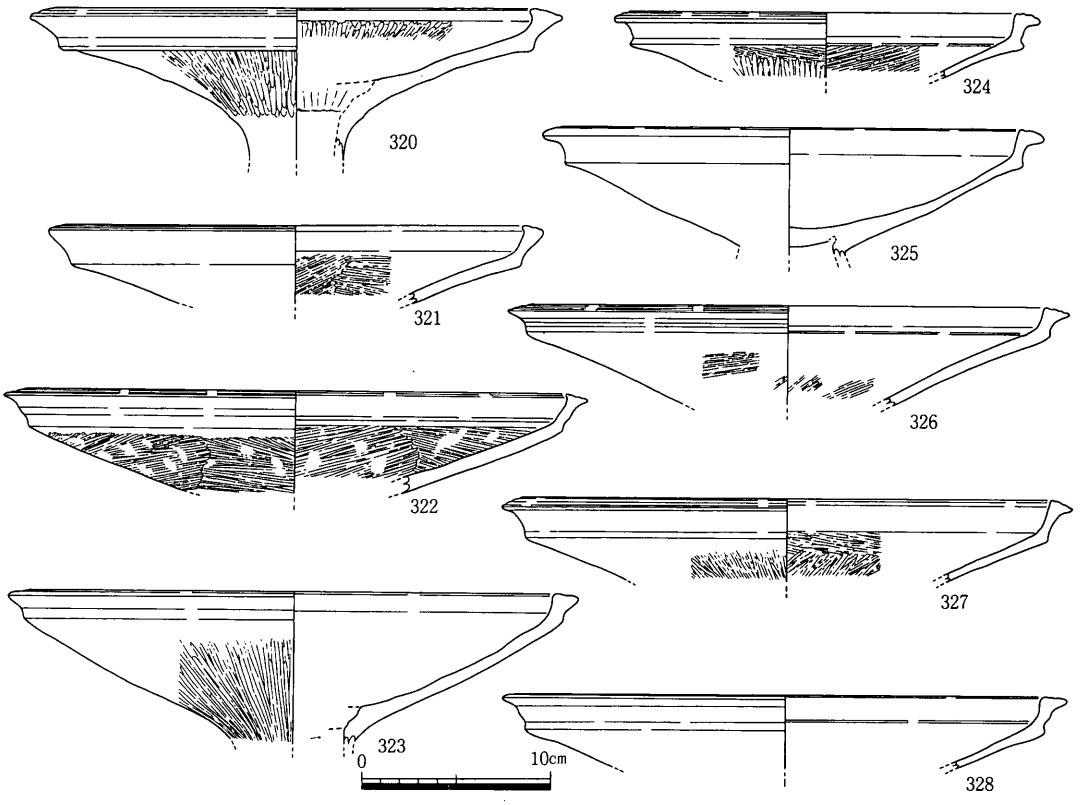
第184図　４区ＳＤ08出土遺物16（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
313	大形甕	22.8			細・極多	にぶい黄橙色	緩やかに折り返した口縁部は粘土帯を付して鈍く肥厚。端面沈線２条。片部内面横ｶｽﾞﾘ後上端部指押さえ。	1/2	角閃石極多
314	大形甕	28.0			細・少、中・多	灰黄色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返し、端部は大きく上下に摘み出す。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜。端面凹線、肩部外面縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ。	1/8	石英等多、角閃石・雲母少　搬入品
315	大形甕	32.2			細・極多、粗・少	にぶい橙色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返し、端部は大きく上方に摘み出し、下端も張る。口縁部内面は強い横ﾅﾃﾞで凹面をなし折り返し部も稜。端面凹線、肩部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/3	角閃石多、赤色粒、石英等少
316	甕？				細・極多	灰黄褐色	外面顕著な格子目叩き、内面ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、雲母、石英等少
317	甕？				細・極多、中・少	灰黄褐色 にぶい黄褐色	外面顕著な格子目叩き、内面ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、雲母多、石英等・赤色粒少
318	甕？				細・極多、粗・少	にぶい黄色	口縁部は強く折り返して開き、肩上部内面に接合痕。外面顕著な格子目叩き。		角閃石極多（含粗粒）、雲母多
319	甕？				細・極多、中・少	灰黄褐色	外面顕著な格子目叩き、内面ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、赤色粒、石英等・雲母少

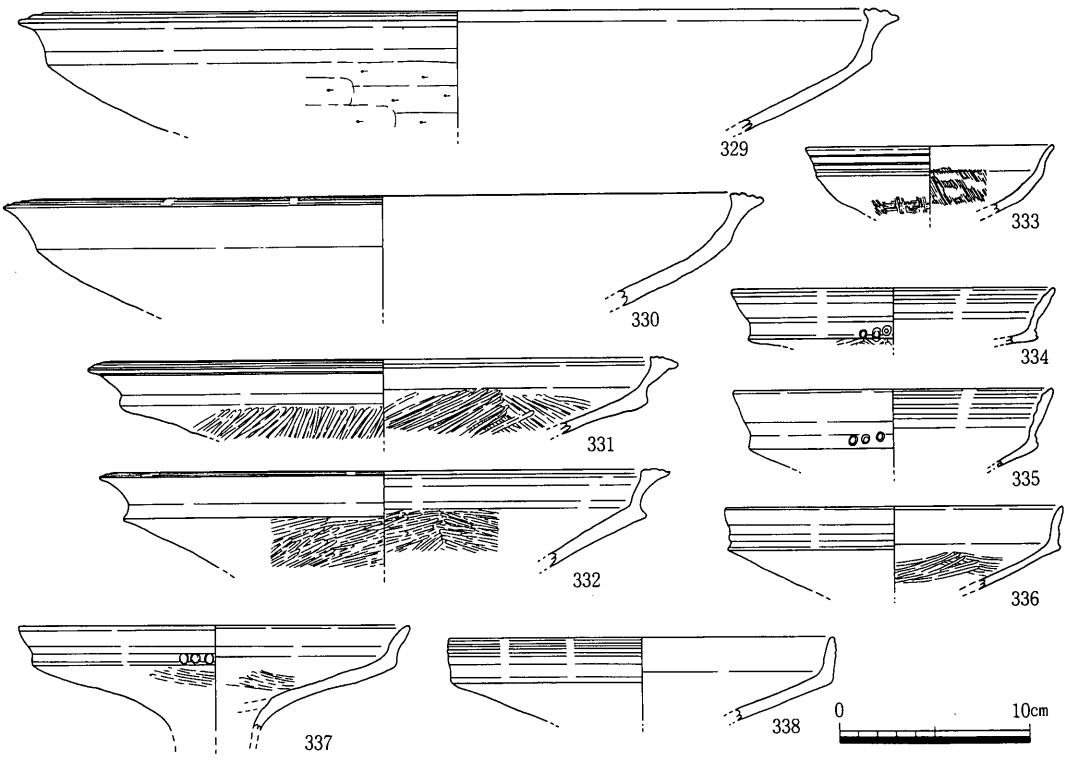
第185図　４区ＳＤ08出土遺物17（１／４）

達した受口状口縁を持ち，直立する立ち上がり部外面には鈍い凹線を見る。最大径の低い体部形状とケズリを欠いた内面調整も併せて特異な系統といえる。(304～307)，(309～311)は明瞭な受口状は呈さないものの口縁端部を薄く上方に摘み出す形態。内面肩上部まで削り上げて外面に叩き目を顕著に残す点や，体部形状の点でやはり特異な一群である。以上２系統は本地方の伝統的な甕形態から導き出すことが困難な形態であり，より東方諸地方との関係を考慮すべきであろう。ただし，この系統の搬入品を確認しないことは注意を要する。(308・312) はこれらと一見類似するが，後出形態である。



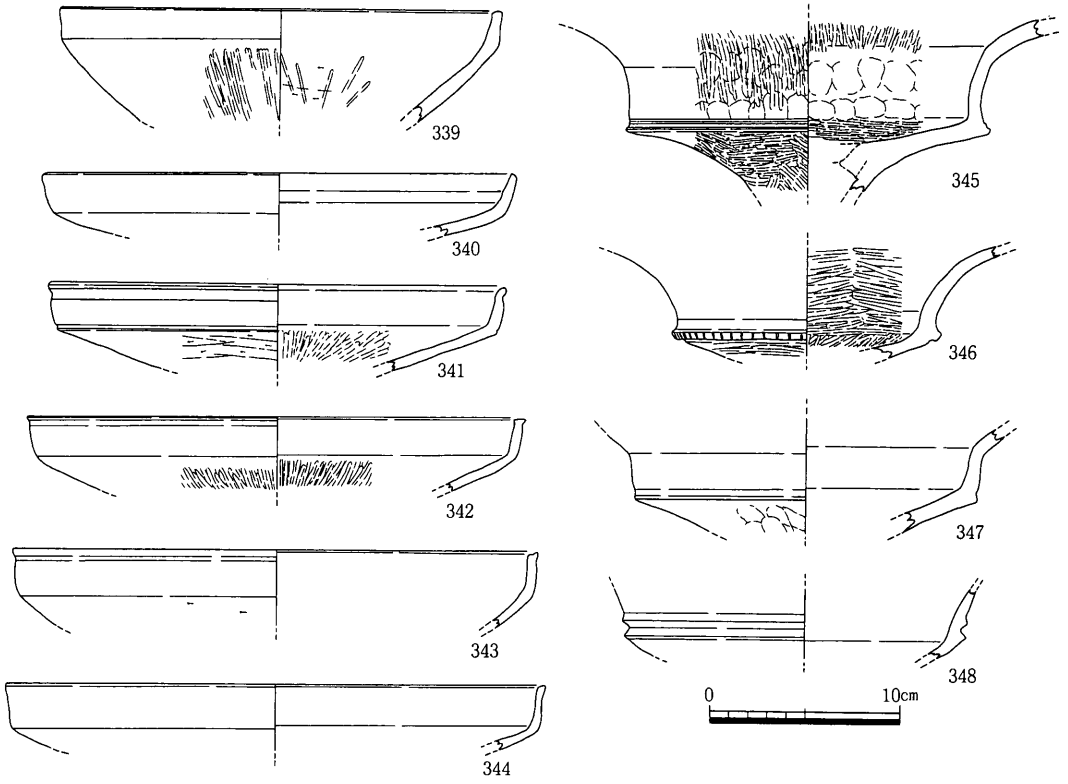
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
320	高坏	25.0			細・極多	にぶい黄褐色	中位で屈曲して鈍い段。上半部は短く外傾。端部は外方に摘み出し内方も強く突出。頂部凹線。外面上半部横ﾅﾃﾞ、下半部放射状ﾐｶﾞｷ、内面放射状ﾐｶﾞｷ。円盤充塡。	1/3	角閃石極多
321	高坏	24.0			細・極多	明褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾。端部は鈍く肥厚して内方に突出し、外方も張り出す。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ﾊｽﾞﾘ、内面分割横ﾐｶﾞｷ	1/10	角閃石極多
322	高坏	28.4			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾。端部は強く外方に摘み出し内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。	1/5	角閃石極多、雲母多
323	高坏	27.4			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は緩く屈曲してやや外傾。屈曲部に鈍い段。端部は鈍く肥厚し外方に摘み出す。口縁部横ﾅﾃﾞ。下半部外面放射状ﾐｶﾞｷ、円盤充塡。	1/5	角閃石極多
324	高坏	20.7			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して明瞭な段。上半部は短くほぼ直立。端部は鈍く肥厚して強く外方に摘み出す。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ﾐｶﾞｷ後放射状ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/6	角閃石極多、雲母
325	高坏	24.0			細・極多、中・普	にぶい明褐色	中位で屈曲して鈍い段。上半部はやや外傾。端部は強く外方に摘み出し頂部凹線。円盤充塡。	1/2	角閃石極多、石英等赤色粒少
326	高坏	26.9			細・極多	にぶい褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は短く外傾。端部は鈍く肥厚して外方に摘み出す。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多
327	高坏	27.8			細・極多	灰黄褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾。端部は鈍く肥厚して強く外方に摘み出し内方も僅かに突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面放射状ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ後縦ﾐｶﾞｷ。	1/6	角閃石極多
328	高坏	26.8			細・極多	明褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾。端部は鈍く肥厚して外方に強く摘み出す。頂部凹線。	1/4	角閃石極多

第186図　４区ＳＤ08出土遺物18（１／４）



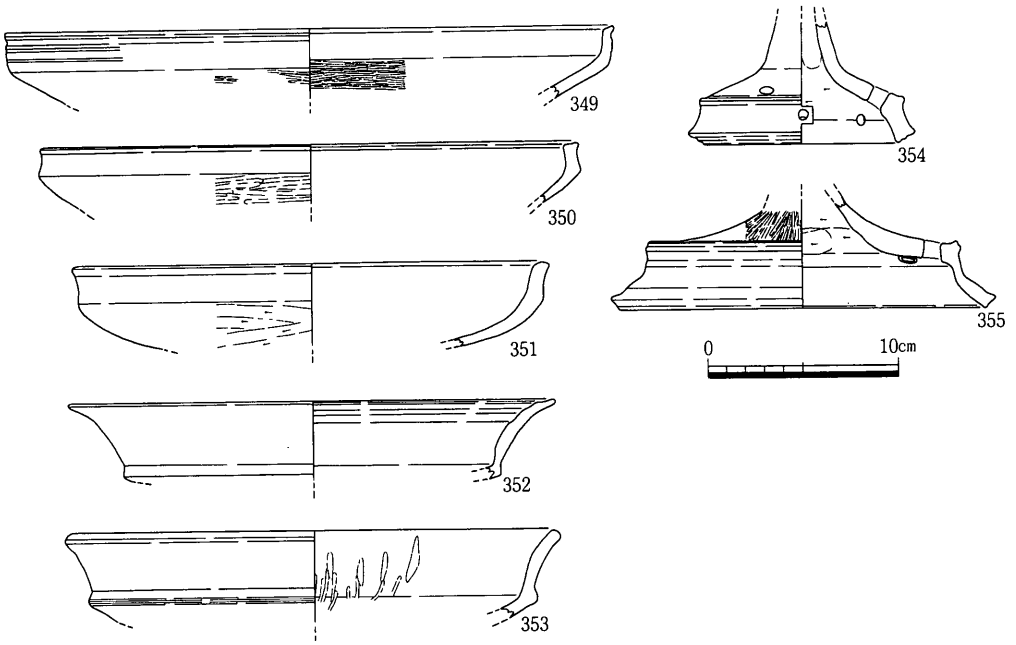
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
329	高坏	42.6			細・極多	明褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾。端部は鈍く肥厚して内外に強く摘み出す。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ。	1/16	角閃石極多
330	高坏	36.8			細・極多	にぶい黄橙色	中位で緩く屈曲して鈍い段。上半部は外傾。端部は鈍く肥厚し外方に摘み出し内方もやや突出。頂部凹線。内面横ﾅﾃﾞ。	1/10	角閃石極多、雲母多
331	高坏	28.0			細・極多	にぶい黄褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾。端部は鈍く肥厚して外方に摘み出し、内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、雲母多
332	高坏	27.8			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して明瞭な段。上半部はやや外傾。端部は鈍く肥厚して強く外方に摘み出し内方も僅かに突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ﾐｶﾞｷ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/6	角閃石極多、雲母多
333	高坏	13.0			細・極多	灰黄色	中位で緩く屈曲して上半部は短く外反。端部は丸く納める。上半部横ﾅﾃﾞで外面鈍い凹線。下半部外面横ﾊｹ後縦ﾊｹ、内面縦ﾊｹ。	1/4	角閃石極多
334	高坏	16.8			細・極多	明褐色	中位で強く屈曲して鈍い段に3個1対の円形刺突文。上半部は緩く外反して開き端部は尖る。上半部横ﾅﾃﾞで内外面鈍い凹線。下半部外面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/6	角閃石極多、雲母多
335	高坏	16.6			細・極多	にぶい褐色	中位で強く屈曲して鈍い段に3個1対の円形刺突文。上半部はやや外反して開き端部は丸く納める。上半部横ﾅﾃﾞで内面凹線。	1/4	角閃石極多、石英等
336	高坏	17.8			細・極多	にぶい黄橙色	中位で屈曲して鈍い段。上半部はやや外反して端部は尖る。上半部横ﾅﾃﾞで外面鈍い凹線。下半部内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多、赤色粒少
337	高坏	20.5			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段に3個1対の円形刺突文。上半部は短く外反して開き、端部は尖る。上反部横ﾅﾃﾞ、下半部横ﾐｶﾞｷ。	1/5	角閃石極多、雲母
338	高坏	20.1			細・極多	にぶい黄橙色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は直立して端部は鈍く尖る。上半部外面不明瞭な凹線。	1/6	角閃石極多、雲母

第187図　4区ＳＤ08出土遺物19（1／4）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
339	高坏	23.0			細・極多	橙色	中位で緩く屈曲して上半部は短く直立。端部は四角く納める。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面放射状ﾐｶﾞｷ、内面横ｸｽﾞﾘ後疎らな放射状ﾐｶﾞｷ	1/4	角閃石極多
340	高坏	24.3			細・極多	にぶい橙色	中位で緩く屈曲して上半部は短くやや外傾。端部は四角く納める。	1/8	角閃石極多
341	高坏	23.8			細・極多	にぶい橙色	中位で屈曲して狭い凹線。上半部はやや外傾し端部は小さく反って丸く納める。口縁部直下凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｸｽﾞﾘ、内面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/3	角閃石極多
342	高坏	24.9			細・極多	灰黄褐色	中位で屈曲して上半部やや外傾。端部は外方に小さく摘みつつ四角く納める。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部放射状ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多、石英等・赤色粒少　赤色顔料？
343	高坏	26.5			細・極多	橙色	中位で緩やかに屈曲して上半部直立。端部は外方に小さく摘み出す。外面下半部横ｸｽﾞﾘ。	2/5	角閃石極多、石英等・赤色粒少
344	高坏	28.4			細・極多	にぶい黄橙色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部はやや外傾し端部は外方にやや張り出す。	1/16	角閃石極多
345	装飾高坏				細・極多、中・少	褐灰色	中位で強く屈曲して明瞭な段部に沈線２条。上半部は外反し口縁部は強く開く。外面上半部縦ﾐｶﾞｷ、下半部横ﾐｶﾞｷ、内面口縁部縦ﾐｶﾞｷ、上半部下部ﾅﾃﾞ、下半部横ﾐｶﾞｷ。円盤充塡。	2/3	角閃石極多、雲母多、石英等
346	装飾高坏				細・極多、中・少、粗・少	灰黄色	中位で強く屈曲して断面矩形の突帯１条。上面に刻み目。上半部は強く外反して開く。外面上半部横ﾅﾃﾞ、下半部横ﾐｶﾞｷ。内面上半部分割横ﾐｶﾞｷ、下半部横ﾐｶﾞｷ。	1/2	角閃石極多（含粗粒）、雲母、石英等少
347	装飾高坏				細・極多	明黄褐色	中位で強く屈曲して強い稜。上半部は中程で緩やかに湾曲して開く。外面下半指ﾅﾃﾞ。	1/3	角閃石極多、雲母多
348	装飾高坏				細・極多	灰黄褐色	中位の鈍い屈曲部に断面三角形の突帯２条。外面横ﾅﾃﾞ。	1/6	角閃石極多、赤色粒少　赤色顔料

第188図　４区ＳＤ08出土遺物20（１／４）

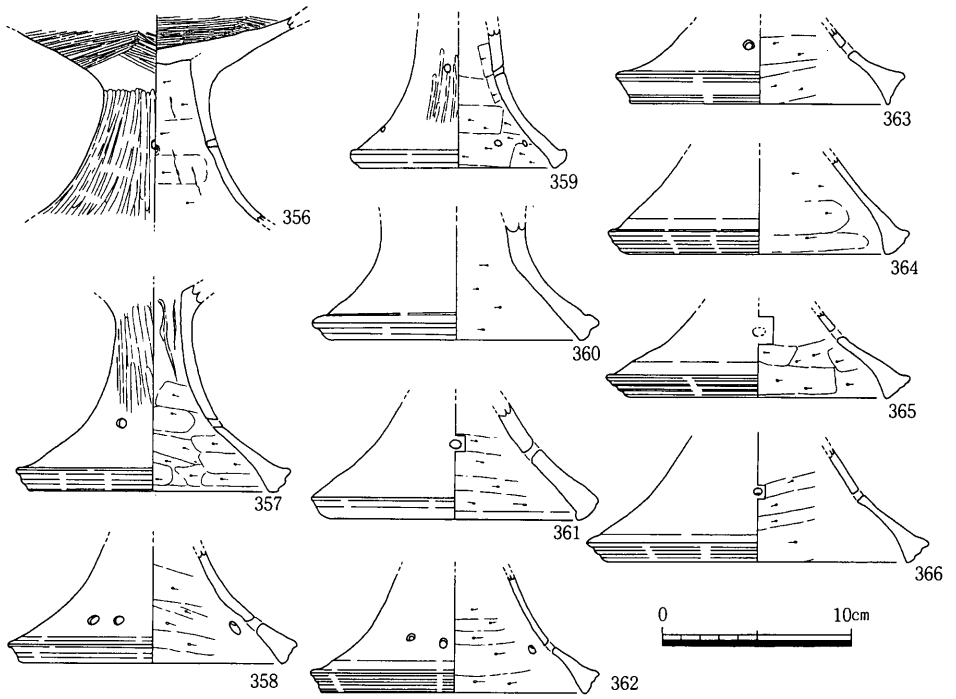


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
349	高坏	31.8			細・極多	にぶい黄褐色 灰黄褐色	中位で緩く屈曲して上半部は短く直立。端部は小さく外方に摘み出して頂部狭い平坦面。上半部横ﾅﾃﾞで外面鈍い凹線。下半部横ﾐｶﾞｷ	1/8	角閃石極多
350	高坏	28.2			細・極多、中・少	黒褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部はやや外傾し端部は小さく外方に摘みつつ四角く納める。外面下半部横ﾐｶﾞｷ、他横ﾅﾃﾞ。	1/10	角閃石極多、石英等少
351	高坏	24.4			細・極多、中・多	にぶい黄橙色	中位で緩く屈曲して鈍い稜。上半部は短くやや外傾して端部は外方に張り出す。下半部外面横ｸｽﾞﾘ。	1/8	角閃石極多、石英等多
352	高坏	25.4			細・極多	にぶい黄橙色	中位で屈曲して鈍い段。上半部は強く外反して開き、端部は尖る。上半部横ﾅﾃﾞで内面上部凹線。下半部外面横ｸｽﾞﾘ。	1/6	角閃石極多
353	高坏	25.3			細・極多	灰黄褐色	中位で屈曲して鈍い段で、突出部に狭い凹線。上半部は外反して開き端部は四角く納める。上半部内面横ﾅﾃﾞ後疎らな縦ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等
354	装飾高坏			10.1	細・極多	灰黄色	脚裾部有段。屈曲部に小型の断面矩形の突帯。脚端部はやや外反して、外方に張り気味に四角く納める。端面鈍い凹線。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｸｽﾞﾘ。下段２孔１対の円形透かし３方、上段円形透かし３方。	1/2	角閃石極多
355	装飾高坏			19.2	細・極多	にぶい黄褐色	脚裾部有段。屈曲部に断面矩形の突帯。脚端部は強く外反して肥厚気味に四角く納める。裾上段部に円形透かし。上半部外面放射状ﾐｶﾞｷ、内面横ｸｽﾞﾘ、下半部横ﾅﾃﾞ。	5/8	角閃石極多

第189図　４区ＳＤ08出土遺物21（１／４）

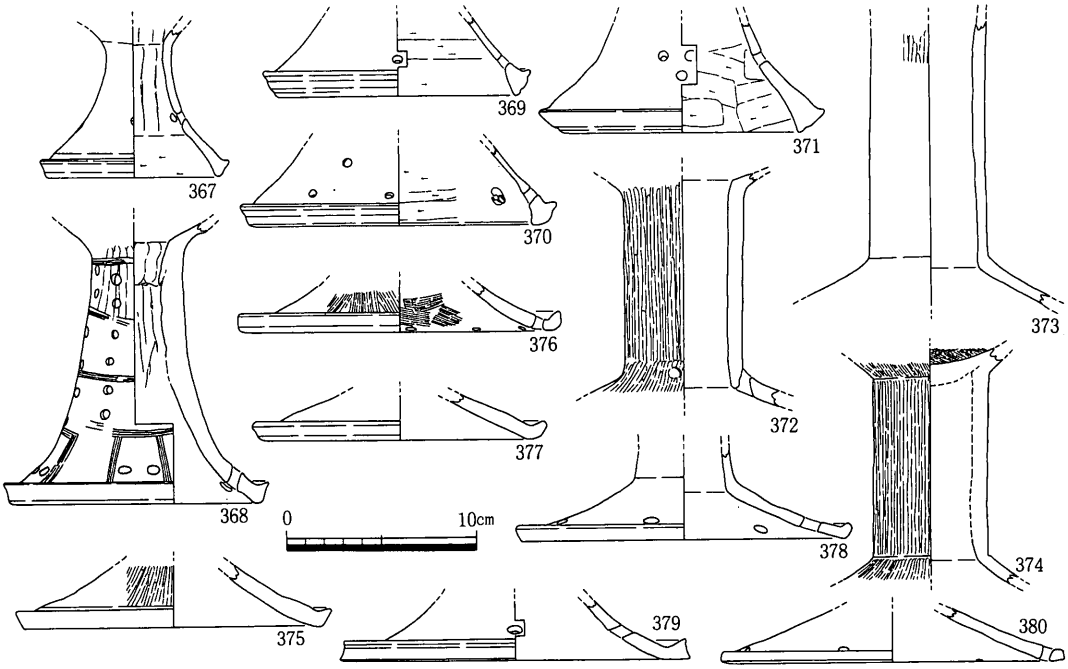
大形甕の基本形状は（314・315）のように当該時期の甕のもっとも主流的な形態を引き継ぎ，端部形状などをやや強調したものが一般的である。その点で（313）の口縁部形態は特異なものである。（316～319）は格子目状の叩き目例。圧倒的大多数は並行叩きであるが，少数例格子目叩きが混ざる。

口縁部拡張形態の高坏では中位で強く屈曲して上半部はやや外傾する形態が多い。端部は鈍く肥厚しつつ外方に摘み出し，少なからず内方にも突出するものが多い。（330）は中



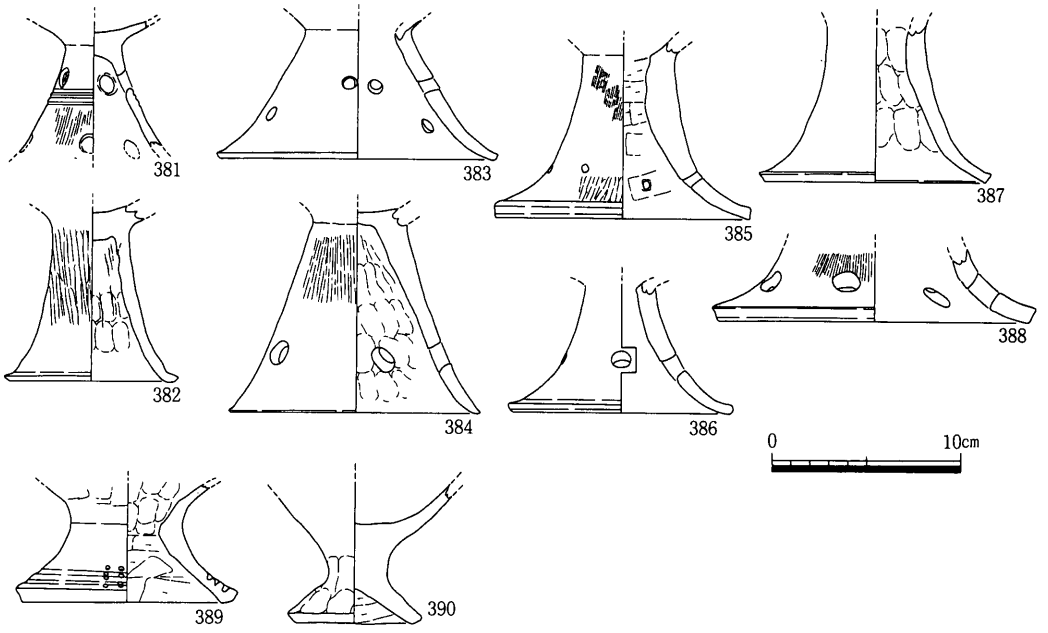
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
356	脚				細・極多	灰黄褐色	脚部は緩やかに外反して開く。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｹｽﾞﾘ、中位に小形円形透かし。坏部分割横ﾐｶﾞｷ。円盤充塡。	7/8	角閃石極多、石英等
357	脚			13.0	細・極多	にぶい黄褐色	脚裾部は強く外反して開き、端部は肥厚して上部を小さく摘み出す。端面凹線。外面軸部縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｹｽﾞﾘ、円形透かし。	1/4	角閃石極多、石英等少
358	脚			13.6	細・極多	灰黄褐色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚しつつ下方に摘み出し、上端も外方に鈍く突出。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。2孔1対の小形円形透かし。	1/3	角閃石極多
359	脚			10.2	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は鈍く肥厚しつつ上下に張り出す。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｹｽﾞﾘ、2孔1対の円形透かし。	1/2	角閃石極多
360	脚			13.4	細・極多	灰黄褐色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は鈍く外反して上部は外方に突出。端面鈍い凹線1条。内面横ｹｽﾞﾘ。	7/8	角閃石極多
361	脚			13.0	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚しつつ下方に小さく突出。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。小形の円形透かし。	1/3	角閃石極多、雲母
362	脚			13.2	細・極多	にぶい黄褐色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚しつつ下方に摘み出し、上端も外方に突出。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。2孔1対の小形円形透かし。	1/4	角閃石極多、雲母多
363	脚			15.4	細・多、中・多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚しつつ下方に摘み出し、上端も外方に突出。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。小形の円形透かし。	1/6	石英等多、角閃石多 搬入品？
364	脚			13.4	細・極多	にぶい黄褐色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚しつつ下方に摘み出し、上端も外方に突出。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/7	角閃石極多
365	脚			13.6	細・極多	にぶい橙色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚しつつ内外に摘み出す。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。小形円形透かし。	1/6	角閃石極多
366	脚			15.7	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚しつつ下方に摘み出し、上端も外方に鈍く突出。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。小形の円形透かし。	1/6	角閃石極多、雲母

第190図　4区ＳＤ08出土遺物22（1／4）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
367	脚			8.9	細・極多	灰黄褐色	脚裾部は外反して緩やか開き、端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出し上部も強く突出。内面下半横ｹｽﾞﾘ、中位に円形透かし。円盤充塡部剝落。	全周	角閃石極多、雲母・赤色粒
368	脚			12.4	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は強く外反して開き、端部は強く上方に摘み出す。外面縦ﾐｶﾞｷ。櫛描並行沈線４段・櫛描垂下沈線と裾部に２孔１対の円形透かし。軸部に縦列６孔の円形透かし２列。内面絞り目顕著、円盤充塡部剝落。	5/8	角閃石極多
369	脚			12.5	細・極多	にぶい黄褐色	脚裾部は緩やかに開き、端部は肥厚して下方に摘み出し上部も強く突出。端面凹線、内面横ｹｽﾞﾘ、円形透かし。	3/8	角閃石極多、雲母
370	脚			14.2	細・極多	明褐色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚しつつ上端を外方に強く突出。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。小形の円形透かし２段。	1/6	角閃石極多
371	脚			12.4	細・極多	にぶい赤褐色	脚裾部は緩やかに外反して開き、端部は肥厚しつつ内外に小さく摘み出す。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。外面３孔１対の円形透かし。	1/6	角閃石極多
372	脚				細・極多	褐灰色	柱状軸部から強く折り返して裾部は強く開く。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞで、裾部円形透かし	1/2	角閃石極多
373	脚				細・極多、中・多	灰黄色	柱状軸部から強く折り返して裾部は強く開く。軸部外面縦ﾐｶﾞｷ。	全周	角閃石極多、石英等多、雲母
374	脚				細・極多	にぶい黄橙色	柱状軸部から強く折り返して裾部は強く開く。外面縦ﾐｶﾞｷ。内面ﾅﾃﾞ、杯部内面分割横ﾐｶﾞｷ。頂部円盤充塡。	全周	角閃石極多、石英等・雲母少
375	脚			15.6	細・極多	灰黄色	脚裾部は外反して強く開き、端部は上方に摘み出す。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾅﾃﾞ。	1/6	角閃石極多
376	脚			16.5	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は強く開き端部は小さく反って摘み上げる。外面縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ。脚端部付近に小形の円形透かし	1/6	角閃石極多
377	脚			13.7	細・極多	褐灰色	脚裾部は強く開き、端部は小さく反って丸く納める。	3/8	角閃石極多、雲母、赤色粒少
378	脚			17.0	細・極多	灰黄色	円柱状の軸部から折り返して脚裾部は強く開き端部は小さく反って摘み上げる。裾部に中形の円形透かし。	1/4	角閃石極多、雲母
379	脚			17.0	細・極多	にぶい黄褐色	脚裾部は強く外反して開き、端部は鈍く肥厚しつつ上下端を摘み出す。円形透かし。	1/8	角閃石極多、雲母多
380	脚			16.4	細・極多	灰褐色	脚裾部は強く開き端部は小さく反って四角く納める。円形透かし。	2/9	角閃石極多

第191図　４区ＳＤ08出土遺物23（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
381	脚				細・極多	灰黄褐色	強く絞りこまれた脚上部から緩やかに開く。外面縦ﾊｹ後櫛描並行沈線３条と中型円形透かし２段。	1/2	角閃石極多
382	脚			8.6	細・極多、中・多	にぶい黄橙色	脚部は緩く開き、端部は小さく反って尖る。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面指押さえ。	3/8	角閃石極多、雲母多、赤色粒
383	脚			14.2	細・極多、中・少	褐色	脚部はよく開き、端部はやや反って四角く納める。中型円形透かし２段４方。	1/2	角閃石極多、石英等・赤色粒少
384	脚			13.0	細・極多、中・多	にぶい橙色	脚部は緩く開き、端部は小さく反って丸く納める。外面上半部縦ﾊｹ、内面指押さえ顕著。裾部大形円形透かし。	1/3	角閃石極多、石英等多
385	脚			13.2	細・極多	灰黄褐色	脚裾部で強く外反して開き、端部は四角く納める。外面上部縦ﾊｹ、裾部縦ﾐｶﾞｷ、内面上部横ｹｽﾞﾘ。裾部に２孔１対の円形透かし。	5/6	角閃石極多、雲母・赤色粒
386	脚			11.4	細・極多	灰黄色	脚部は強く外反して開き、端部は小さく反り気味に丸く納める。中位に中型円形透かし４方。	全周	角閃石極多、雲母少
387	脚			11.5	細・極多	灰黄褐色	脚裾部は緩やかに外反して小さく開き、端部は小さく内外に摘み気味に四角く納める。外面横ﾅﾃﾞ、内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、雲母多
388	脚			16.2	細・極多	灰黄褐色	脚裾部で緩やかに屈曲して開き、端部は四角く納める。外面縦ﾊｹ、大形の円形透かし。	1/8	角閃石極多
389	脚			10.4	細・極多	灰黄色	低脚台。強く開き端部は鈍く肥厚して丸く納める。裾部凹線。２列に配した８個１単位の刺突文４方。貫通しない。内面横ｹｽﾞﾘ、円盤充填部剝落。	1/2	角閃石極多
390	脚			6.1	細・極多	灰黄色	倒杯形の低脚台。体部は強く開く。脚部は強く開いて丸く納める。外面指押さえ、内面横ｹｽﾞﾘ。	全周	角閃石極多、赤色粒多

第192図　４区ＳＤ08出土遺物24（１／４）

位の屈曲が極端に弱いが，これは新しい様相ではなく後期初頭の例外的な資料であろう。同様に端部の摘み出しがやや鈍い（321）なども全体的な形状からすれば新しい様相とは言い切れない。また本形態では，坏部上半部は横ナデし，下半部内外面を分割横ミガキで仕上げる（外面には先行して横ケズリ調整がある。）ことを基本とし，（320）（323）のよ

うに放射状ミガキは多くない。

(334～338) の外反口縁高坏は後出的なものではない。(334) 等の屈曲部の円形刺突文や上半部内面の凹線文は本形態では一般的な加飾である。(333) は上半部凹線文は同様であるが，屈曲部がかなり鈍い違和感のある形態である。(338) はおそらく本形態のもっとも古い様相を示すもので，ほとんど後期初頭段階までは残存しないものである。口縁端部を尖り気味に丸く納める点は中期末のこの系統の本来の形態にはほとんど認められない様相である。この資料を介することによって本形態は中期末段階の高坏からの連続がうまく理解できるのである。

(339～344) は直立口縁系統の高坏。口縁端部を明瞭に四角く納める形態 (340) 等と，張り出し気味に丸く納める (341) 等がある。いずれも坏下半部内面は放射状ミガキが基本である。また (341・343) のように口縁部直下や屈曲部に細く弱い凹線文を施すのは本形態の古い様相らしい。

(345～348) は装飾高坏坏部。屈曲部は強い稜を成すか突帯を付して強調し，上半部は強く外反して開く。断面三角形の小突帯2条を付す (348) の屈曲部形状は類例が少ない。

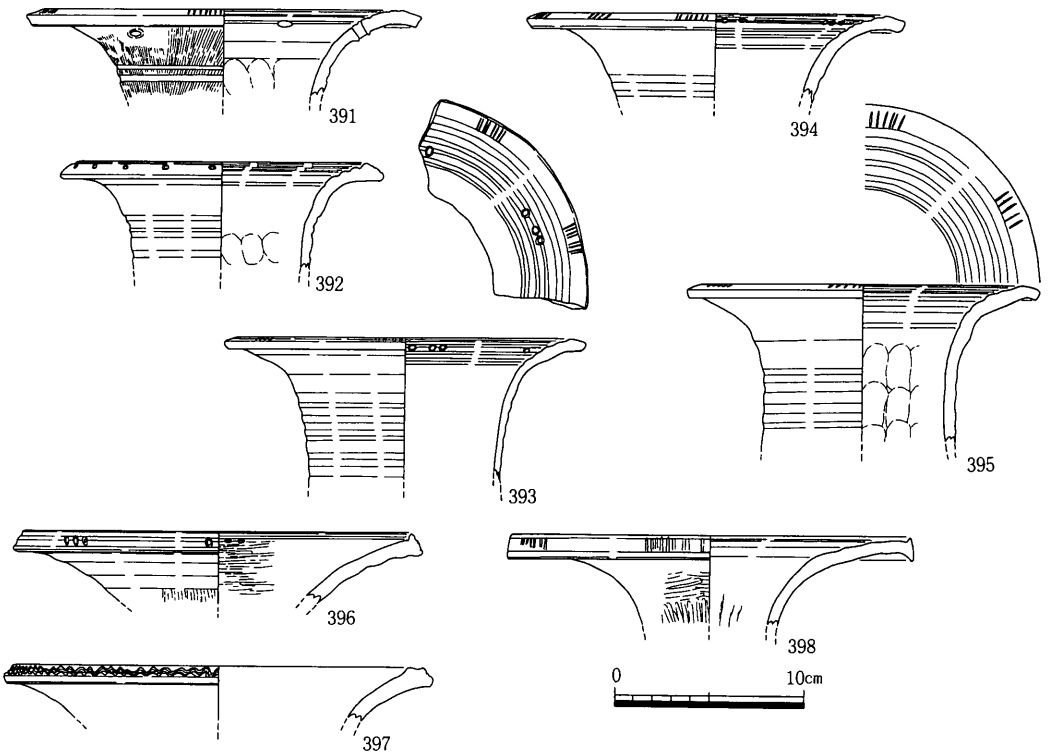
(349～351) も直立口縁系統の高坏だが，端部の摘み出しが強く，やや外傾する新しい様相といえる。(352) (353) は発達した外反口縁で明らかな後出形態である。前者は典型的な下川津B類高坏で強く発達した口縁部形態から後期後葉に下ると思われる。(354) (355) は装飾高坏脚部。(355) は裾部が強く外反して開きつつあり新しい様相である。

(356) ～ (370) は脚端部を肥厚させる形態。肥厚して端部を上下にやや摘み出すことが多い。端部の肥厚が鈍い (359) はやや新しい様相であろう。(363) の形状は違和感がないが，胎土からみて搬入品である。脚端上部を強く摘み出す形態 (367～370) は本地方では発達しない。吉備南部地方の特徴である。(368) は搬入品ではないが，櫛描沈線と縦列配置の円形透かしおよび上端部を摘み出した脚端部形状は明らかに吉備南部地方の様相である。

(375～380) は柱状軸部を持つ形態。裾部は強く開いて端部を小さく摘み上げることが多い。脚端部を肥厚する系統では内面横ケズリを原則とするが，本系統では原則的にそれを見ない。

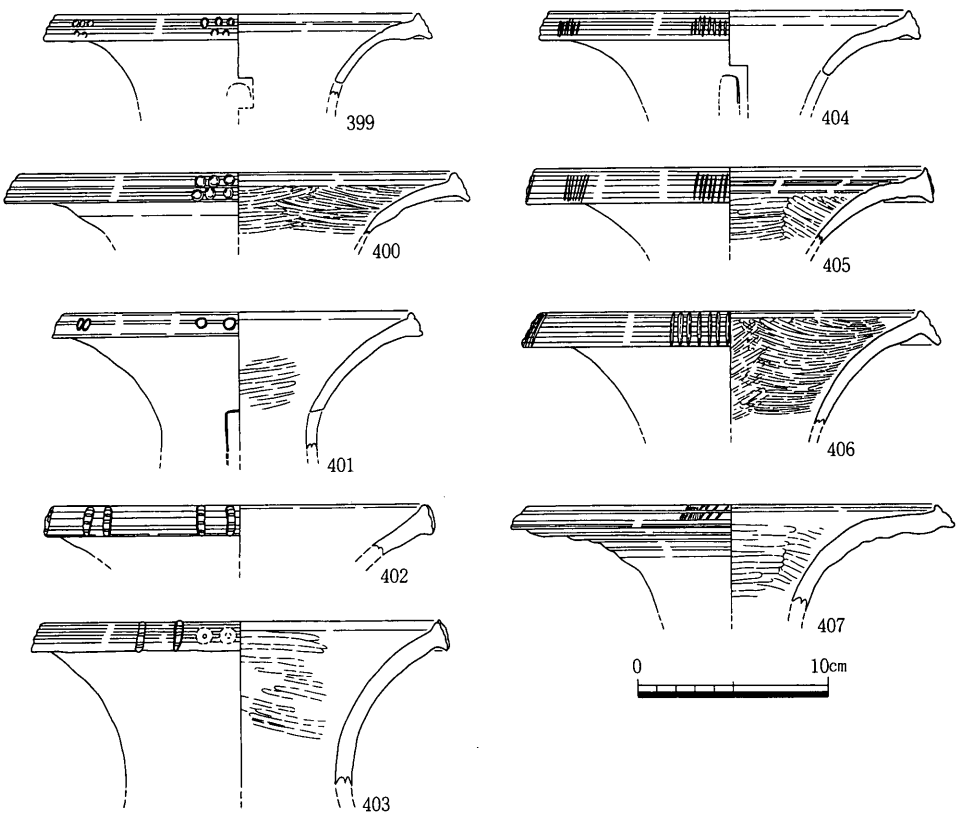
(381～384) は円錐形脚部形態。やや大形の円形透かしが多い。(381) のような沈線文はこの形態でも少ない。やはり内面横ケズリは発達しない。(385～388) は円錐形脚の裾部が発達したもので後出的な形態である。低脚台 (389) (390) は鉢もしくは小形壷に対

応すると思われる。



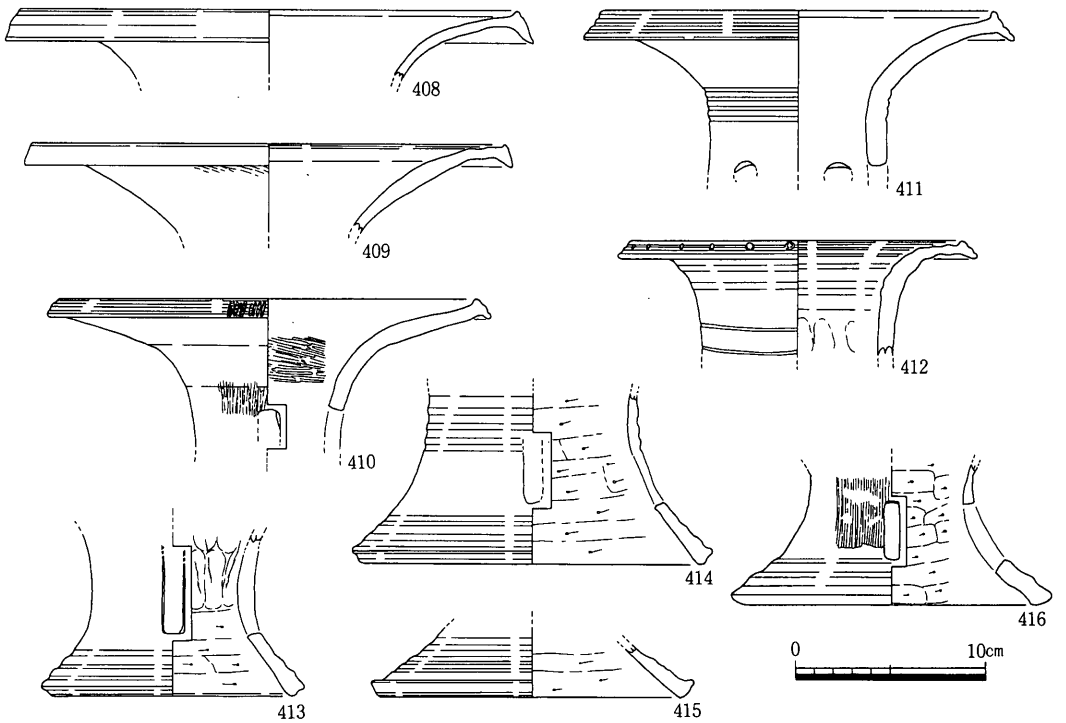
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
391	小形器台	20.8			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して開く。端部は外方に引き出して四角く納める。端面短刻線。口縁部内面凹線。軸部縦ﾊｹ後上部に沈線２条。口縁部に小型の円形透かし。	1/3	角閃石極多、雲母少
392	小形器台	15.1			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部で強く外反して開く。端部は鈍く肥厚して外方に摘み出し、上部も鈍く突出。端面円形刺突文、口縁部内面・軸部外面凹線。	5/9	角閃石極多、雲母多
393	小形器台	17.4			細・極多	褐色	口縁部で強く外反して開く。端部は外方に引き出して四角く納める。端面短刻線。口縁部内面凹線後円形刺突文・軸部凹線。	1/4	角閃石極多
394	小形器台	18.0			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して開く。端部は外方に引き出して四角く納める。端面短刻線。口縁部内面凹線後円形刺突文。軸部凹線。	1/3	角閃石極多、赤色粒・石英等
395	小形器台？	16.2			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部で強く外反して開く。端部は四角く納める。口縁部内面・軸部凹線、端上部短刻線。内面指押さえ。	3/4	角閃石極多、赤色粒
396	小形器台	20.4			細・極多	灰黄褐色	口頸部は強く外反して大きく開き、端部は上方に小さく摘み出し、下部も張り出す。端面鈍い凹線後３個１対の円形刺突文、口縁部内面２個１対の円形刺突文。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等
397	小形器台	19.8			細・極多	黄褐色	口縁部は強く外反して開く。端部は鈍く肥厚して端面に櫛描波状文。頂部凹線。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多
398	小形器台	21.0			細・極多	灰黄褐色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は小さく上下に摘み出し端面８条１対の端刻線。口縁部外面分割横ﾐｶﾞｷ後軸部縦ﾐｶﾞｷ。内面横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、雲母多

第193図　４区ＳＤ08出土遺物25（１／４）



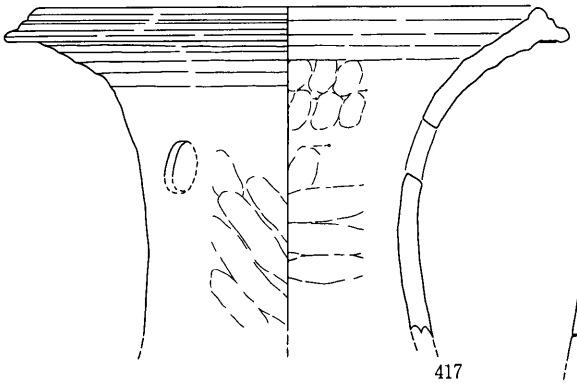
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
399	小形器台	19.0			細・極多	にぶい橙色	口縁部は強く外反して開く。端部は肥厚し上下に摘み出す。端面鈍い凹線後２段に配した６個１対の円形刺突文。中位に大形の円形透かし。	1/4	角閃石極多
400	小形器台	22.8			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して大きく開き、端部は強く上下に摘み出す。端面凹線後２段に配した６個１対の円形刺突文。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/5	角閃石極多
401	小形器台	18.4			細・極多	にぶい褐色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は上方に突出して下方もよく張り出す。端面鈍い凹線・２個１対の円形刺突文。内面上半部横ﾐｶﾞｷ、中位に長方形透かし。	1/3	角閃石極多、雲母少
402	小形器台？	19.8			細・極多	にぶい黄褐色	口縁部は強く開き、端部は下部が鈍く突出。端面鈍い凹線後２条１対の棒状浮文。横ﾅﾃﾞ	1/6	角閃石極多、雲母多
403	小形器台	20.8			細・極多、中・多	にぶい黄橙色	口頸部は緩やかに外反して開き、端部は小さく上下に摘み出す。端面鈍い凹線後棒状浮文・円形浮文。内面横ﾐｶﾞｷ。	1/6	角閃石極多、石英等多
404	小形器台	18.8			細・極多	にぶい黄褐色	口縁部は強く外反して開く。端部は鈍く肥厚し上下に摘み出し端面８条１対の端刻線。軸部長方形透かし。	1/4	角閃石極多、雲母多
405	小形器台	20.6			細・極多	にぶい橙色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は鈍く肥厚し上下に摘み出し端面７条１対の篦描端刻線。外面横ﾅﾃﾞ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。	2/5	角閃石極多
406	小形器台	20.0			細・極多	にぶい黄橙色	口頸部は緩やかに外反して開き、端部は下方に大きく摘み出し上部も突出。端面鈍い凹線後７条１対の短刻線。内面分割横ﾐｶﾞｷ、外面横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、石英等・雲母
407	小形器台	20.4			細・極多	橙色	口頸部は強く外反して大きく開き、端部は上方に摘み出し下部もやや突出。端面鈍い凹線後ﾊｹ原体刺突文。外面不明瞭な凹線、内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多・雲母多

第194図　４区ＳＤ08出土遺物26（１／４）

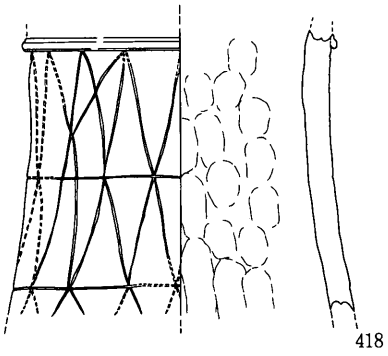


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
408	小形器台	26.2			細・極多、粗・少	灰黄褐色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は大きく外方に引き出し、上部も鈍く突出。端面鈍い凹線。	3/7	角閃石極多、雲母多、石英等少
409	小形器台	25.6			細・極多	にぶい黄橙色	口頸部は強く外反して大きく開く。端部は鈍く肥厚し下方に大きく摘み出し上部も突出。口縁部内面凹線。横ﾅﾃﾞ。	1/6	角閃石極多、石英等
410	小形器台	21.8			細・極多	にぶい黄橙色	円柱状の軸部から折り返して口縁部は大きく開く。端部は下方に摘み出し、上部も突出。端面鈍い凹線後８条１対のﾊｹ原体刺突文。外面軸部縦ﾊｹ後口縁部横ﾅﾃﾞ、内面横ﾐｶﾞｷ。中位に長方形透かし。	1/8	角閃石極多、雲母
411	小形器台	20.5			細・極多、中・多	明赤褐色	円柱状の軸部から口縁部は強く折り返して大きく開く。端部は大きく上下に摘み出す。端面凹線、軸上部に並行沈線、中位に大形円形透かし。	3/4	角閃石極多、石英等多
412	小形器台？	17.4			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して大きく開き、端部は外方に大きく摘み出し、上部も突出。端面鈍い凹線後円形刺突文。口縁部内外面不明瞭な凹線。軸部に沈線２条。	1/4	角閃石極多、雲母・石英等
413	小形器台			12.6	細・極多	明褐色	太い柱状の軸部から緩く外反して脚裾部の開きは弱い。端部は鈍く肥厚して四角く納める。端面・裾部凹線。中位に長方形透かし。裾部内面横ｹｽﾞﾘ、中位指押さえ顕著。	3/8	角閃石極多
414	小形器台			17.6	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ外方に鈍く突出。端面・裾部・中位に凹線。内面横ｹｽﾞﾘ、長方形透かし。	1/5	角閃石極多
415	小形器台			15.8	細・極多、中・多	明褐色	脚裾部は外反して強く開く。端部は鈍く肥厚し外方に強く摘み出す。裾部鈍い凹線、内面横ｹｽﾞﾘ。	3/4	角閃石極多、赤色粒多、石英等・雲母少
416	小形器台			15.0	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は強く外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ外方に張り出す。外面縦ﾊｹ後裾部凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。長方形透かし。	1/4	角閃石極多、石英等・赤色粒

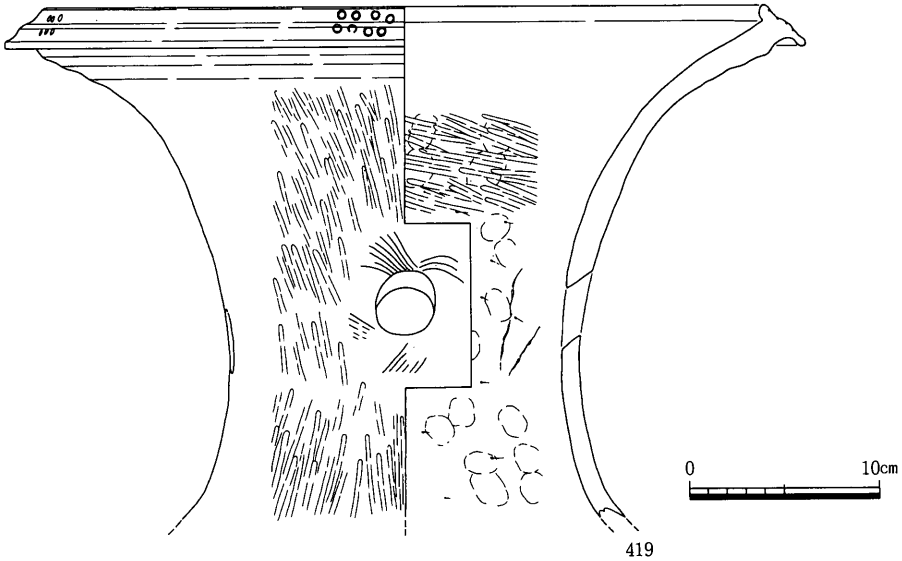
第195図　４区ＳＤ08出土遺物27（１／４）



417



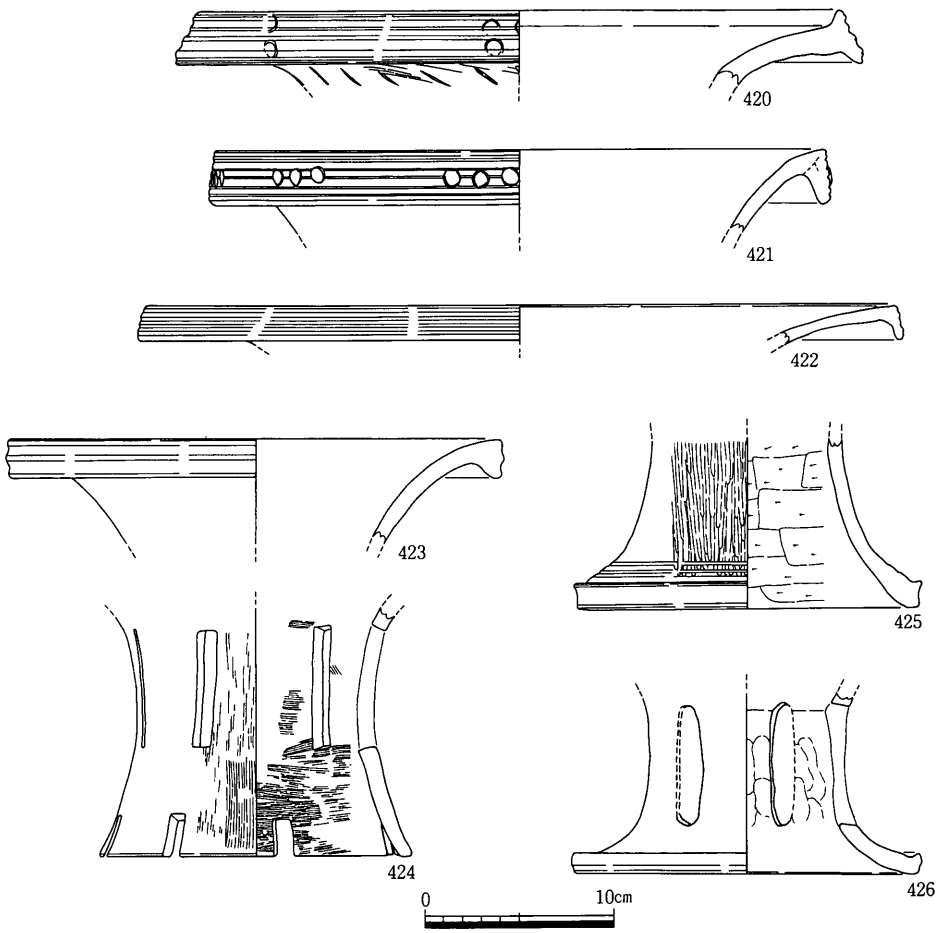
418



419

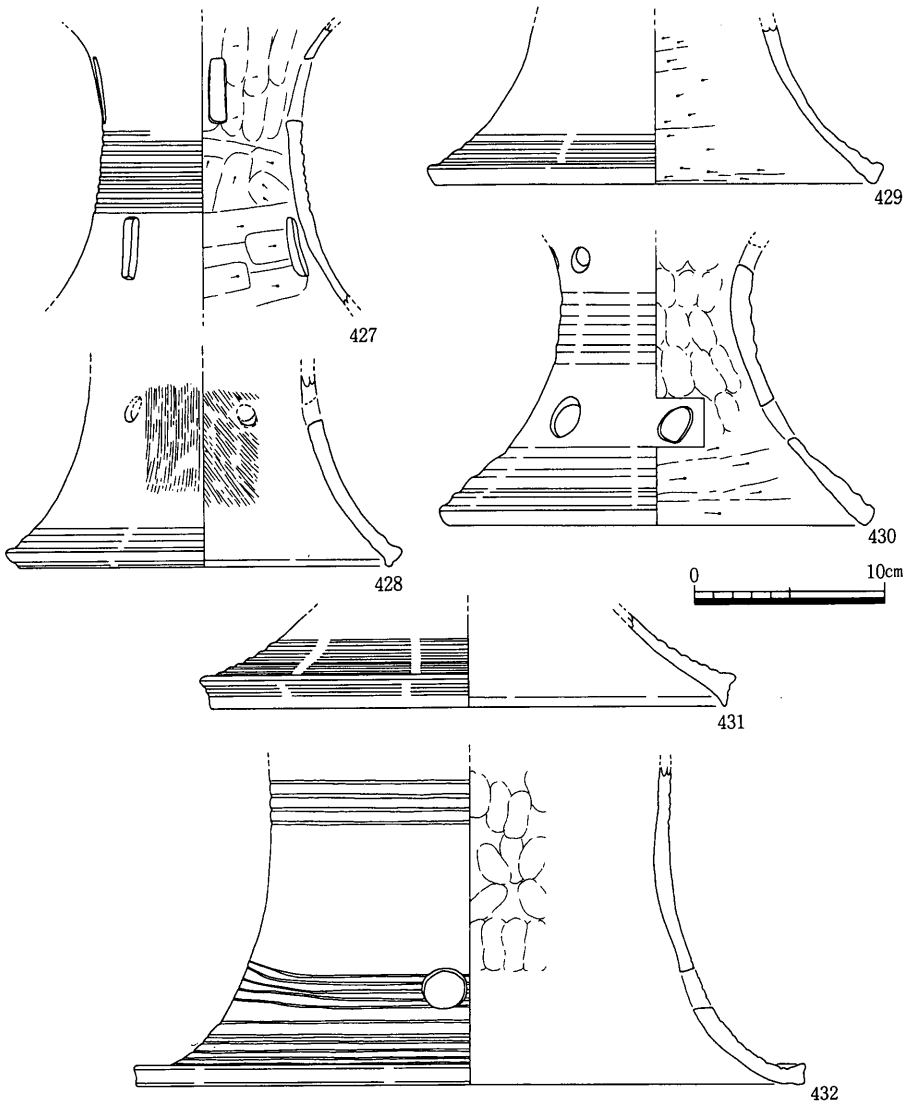
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
417	大形器台	26.3			細・極多	にぶい黄色　明褐灰色	口縁部は大きく外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ外方に大きく引き出して上部も突出。端面・口縁部外面凹線。軸上部に大形円形透かし。外面指ﾅﾃﾞ、口縁部内面鈍い凹線、上半部横ｹｽﾞﾘ後指押さえ。中位横ﾅﾃﾞ。	全周	角閃石極多、石英等・雲母　赤色顔料
418	大形器台？				中・多	浅黄橙色	小型の断面矩形の突帯を付す。突帯下に山形文・並行沈線を組み合わせた網目状の文様をめぐらす。内面指押さえ。	1/4	石英等、赤色粒多　搬入品
419	大形器台	37.4			細・極多、中・多	褐色	口縁部は外反して大きく開く。端部は強く上下に摘み出す。端面鈍い凹線・８個１対２段の円形刺突文。口縁部外面鈍い凹線。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｹｽﾞﾘ後上部横ﾐｶﾞｷ、中位以下指押さえ。中位に大形円形透かし。透かしを８条１単位の沈線文が螺旋状に取り巻く。	1/3	角閃石極多、石英等多　赤色顔料

第196図　４区ＳＤ08出土遺物28（１／４）



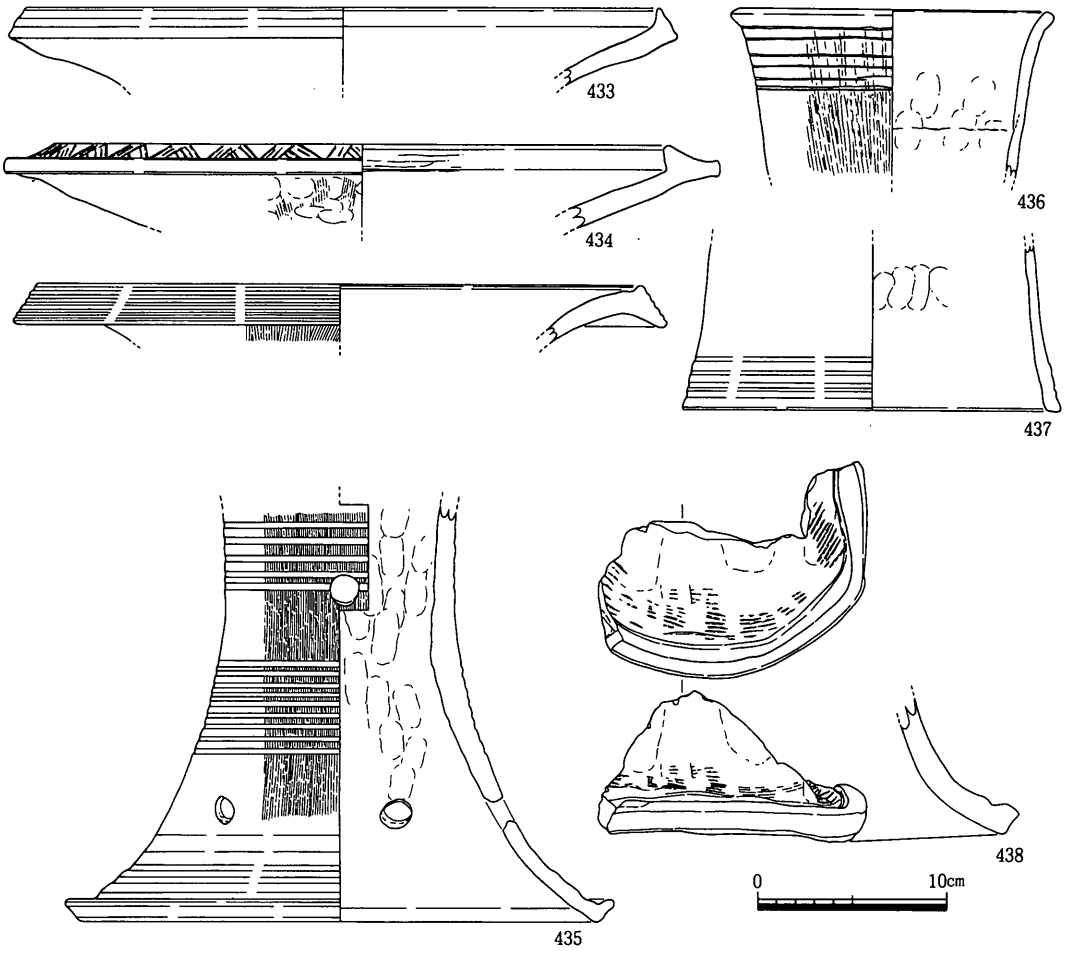
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
420	大形器台？	33.5			細・中、粗・多	灰黄色	口縁部は大きく水平に開き、端部は強く上下に摘み出す。端面鈍い凹線後２段に配した円形刺突文。口縁部外面短刻線。	1/8	石英等多、角閃石少　搬入品
421	大形器台	32.0			細・極多、中・普	にぶい黄色	口縁部は外反して開き、端部は板状の粘土帯を付して垂下口縁をなす。端面凹線後３個１対の素文の円形浮文。	1/4	角閃石極多（含粗粒）
422	大形器台	39.4			細・極多	にぶい橙色	口縁部は大きく水平に開き、端部は板状の粘土帯を付して垂下口縁をなす。端面凹線、横ﾅﾃﾞ。	1/11	角閃石極多、蛋母
423	器台？	25.6			細・極多、中・少、粗・少	にぶい橙色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部に粘土帯を付して鈍い垂下口縁。端面凹線２条。横ﾅﾃﾞ。	1/10	角閃石極多（含粗粒）、石英等少
424	小形器台			16.2	細・極多	灰黄褐色	脚裾部は鈍く外反してやや開く。外面縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ。脚端部に長方形刳り込み８方、中位に長方形透かし。	1/6	角閃石極多、蛋母多、赤色粒
425	器台			16.6	細・極多、中・普	灰黄褐色	脚裾部は緩く外反して開き、端部は肥厚して上部を小さく摘み出す。外面縦ﾐｶﾞｷ後裾部凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	5/8	角閃石極多、石英等
426	器台			17.8	細・極多・中・多	にぶい褐色	円柱状の軸部から強く外反して裾部は短く開く。端部は小さく摘み上げる。軸部に大形の隅丸長方形透かし、内面指押さえ顕著	1/8	角閃石極多、石英等多

第197図　４区ＳＤ08出土遺物29（１／４）



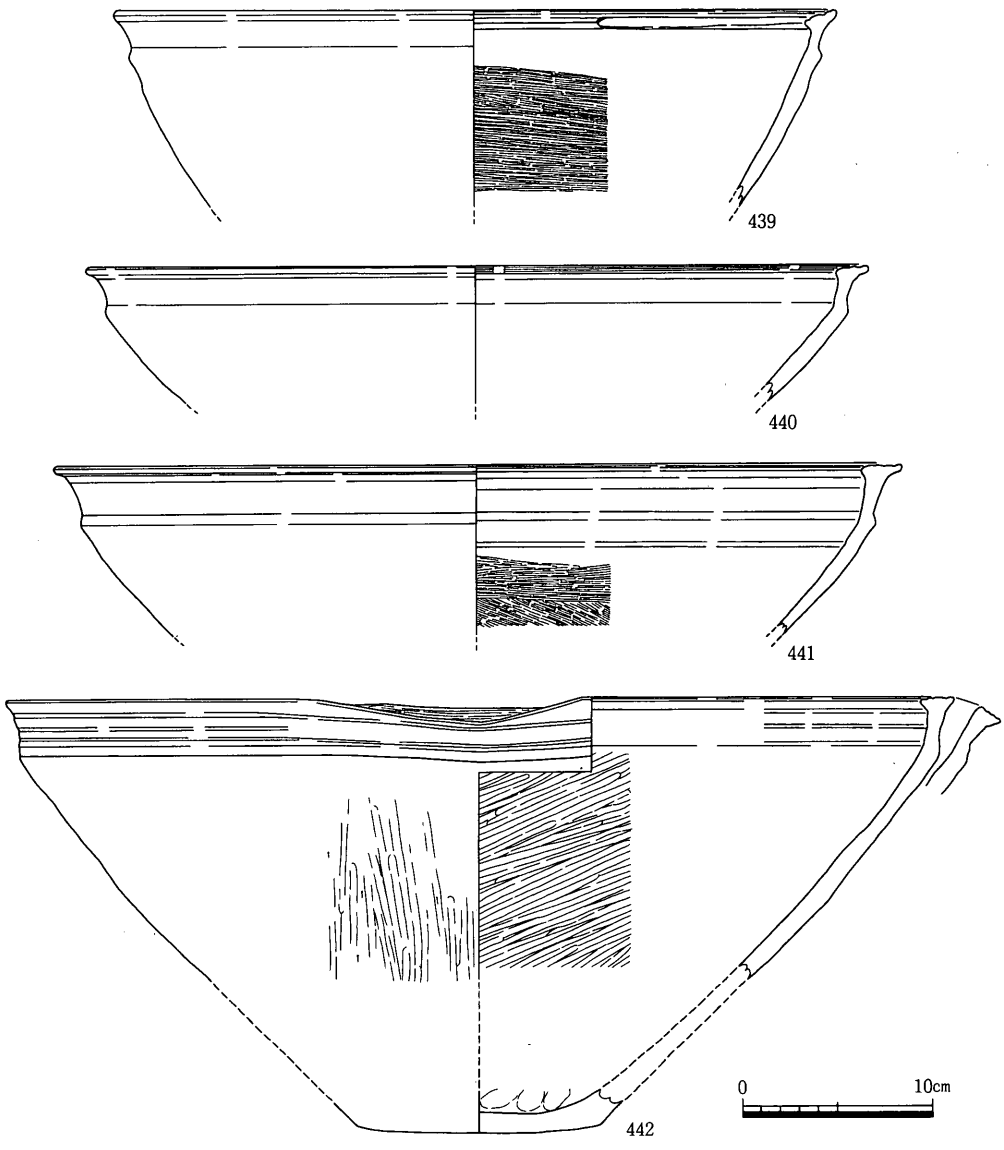
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
427	小形器台				細・極多、中・少	にぶい黄橙色	緩やかに外反して上下に開く。中位に篦描沈線９条、上下に長方形透かし。内面横ｹｽﾞﾘ後、上半部縦ﾅﾃﾞ。	1/2	角閃石極多、雲母、石英等・赤色粒少
428	小形器台	19.6			細・極多	灰黄色	脚裾部で緩やかに開き、端部は鈍く内外に摘み出す。端面・裾部凹線。外面縦ﾊｹ、内面斜ﾊｹ。中型円形透かし６方。	1/6	角閃石極多
429	器台			23.0	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は強く外反して大きく開く。端部は肥厚し鈍く上方に摘む。裾部下半凹線、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、雲母多、石英等
430	小形器台			22.0	細・極多、中・多	にぶい黄褐色	脚裾部は強く外反して大きく開く。端部はやや肥厚して四角く納める。脚裾部・中位に鈍い凹線。内面下半横ｹｽﾞﾘ、中位指押さえ顕著。円形透かし２段、下段は大形。	3/4	角閃石極多、石英等多、赤色粒
431	大形器台			29.0	細・極多、中・普	にぶい黄褐色	脚裾部は外反して大きく開く。端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出し上部も外方に突出。端面・裾部凹線。	1/6	角閃石極多、石英等
432	大形器台	34.8			細・極多	にぶい褐色	脚裾部で強く外反して開き、端部は強く上方に摘み出す。中位と裾部に篦描並行沈線。裾部に大型円形透かし。中位内面指押さえ顕著	1/12	角閃石極多、雲母少

第198図　４区ＳＤ08出土遺物30（１／４）



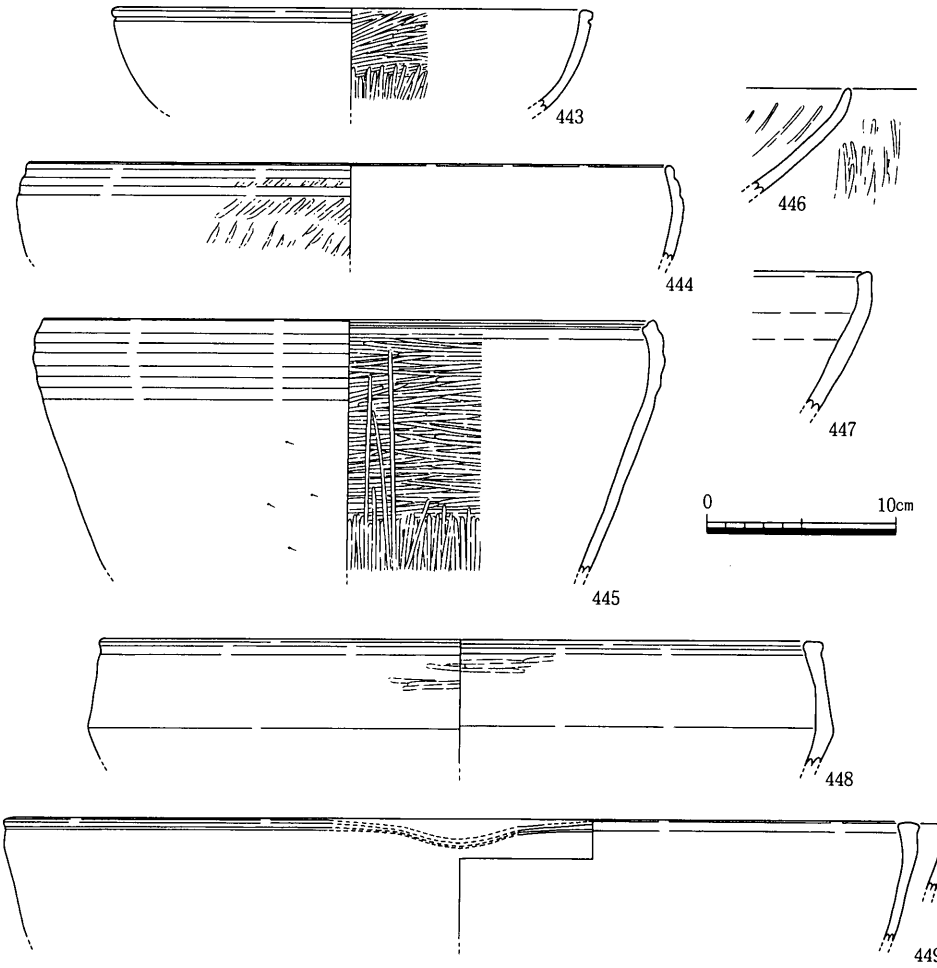
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
433	大形器台	33.2			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は大きく開き、端部は鈍く肥厚しつつ上方に強く摘み出す。端面鈍い凹線。	3/7	角閃石極多、石英等・赤色粒
434	大形器台	32.2			細・極多	褐色　灰黄色	口頸部は強く開き、口縁上部に断面三角形に粘土帯を付して強く内傾する幅広の端面を作り出す。端面に篦描複線山形文。内面横ﾅﾃﾞ、内面縦ﾊｹと指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等多
435	大形器台	31.8		27.0	中・多	灰白色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は強く外方に引き出し、上部も突出。端面凹線、外面縦ﾊｹ。脚裾部は緩やかに外反して開き、脚端部は小さく折り返して外方にのびる。裾部凹線。中位外面縦ﾊｹ後篦描並行沈線２段、中型円形透かし２段。内面指押さえ。	1/3	石英等多、赤色粒搬入品
436	？	16.2			細・極多	にぶい黄褐色	口縁部はやや外反して開き、端部は四角く納める。外面縦ﾐｶﾞｷ後口縁部下に沈線６条。	1/4	角閃石極多、雲母多
437	器台			19.0	細・普、中・多	浅黄橙色	脚部の開ききわめて弱い。端部はやや肥厚し外方に張り気味に四角く納める。裾部下端凹線。内面中位指押さえ。	1/2	石英等多、赤色粒搬入品
438	器台				細・極多、中・多	明黄褐色 灰黄褐色	中位で強く屈曲して、上半部は強く外反して開く。屈曲部の段に沈線２条。外面上半部縦ﾐｶﾞｷ、下半部横ﾐｶﾞｷ、内面上部縦ﾐｶﾞｷ、下半部横ﾐｶﾞｷ。円盤充塡。		角閃石極多、雲母・石英等多

第199図　４区ＳＤ08出土遺物31（１／４）



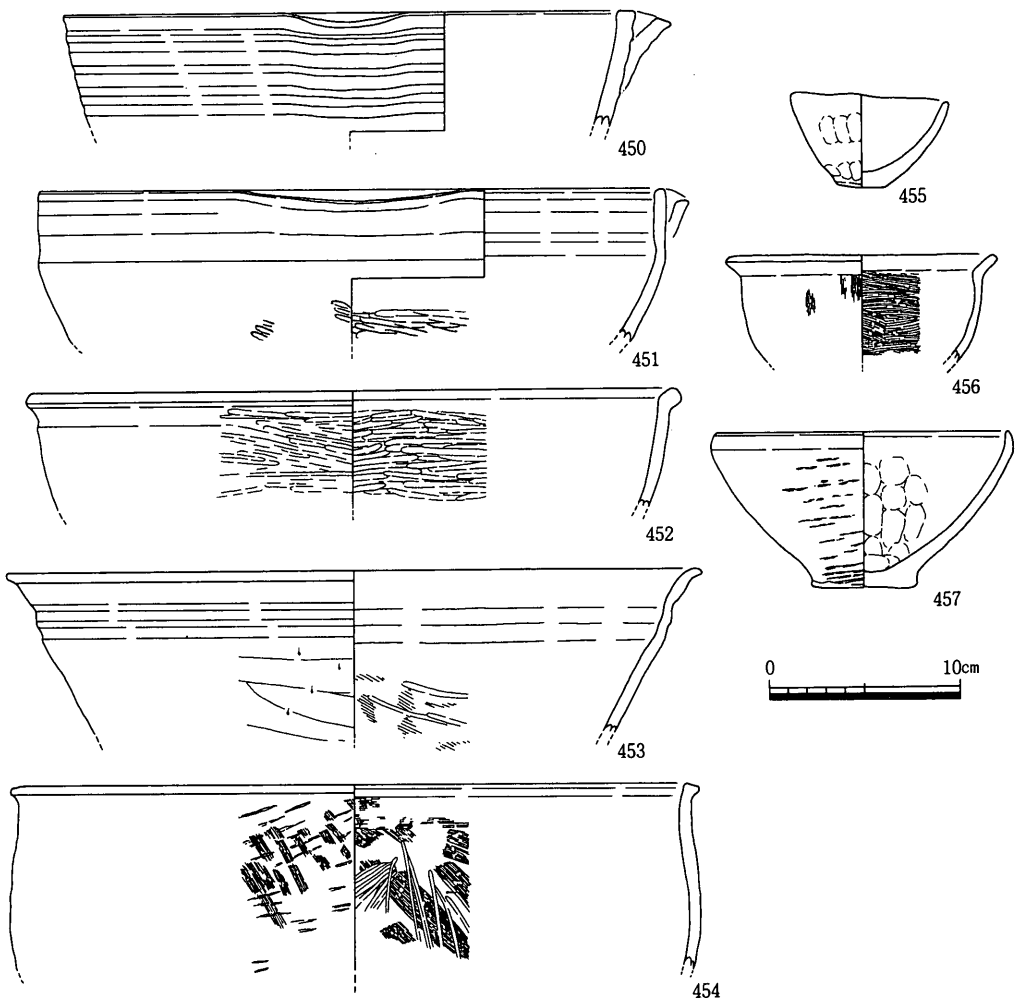
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
439	大形鉢	37.4			細・極多	黒色 灰黄褐色	鈍く湾曲して口縁部は短くやや外傾。湾曲部に痕跡的な段。端部は強く外方に摘み出し内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、内面下半部横ﾊｹ。	1/8	角閃石極多
440	大形鉢	40.8			細・極多	にぶい黄褐色	鈍く屈曲して口縁部は短くやや外傾。端部は強く外方に引き出し、内方も鈍く突出。頂部凹線。	1/9	角閃石極多、雲母多、赤色粒少
441	大形鉢	44.3			細・極多	にぶい黄褐色	鈍く湾曲して口縁部は短く外傾。湾曲部に鈍い段。端部は強く外方に引き出し内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、内面下半部横・斜ﾊｹ。	1/12	角閃石極多、雲母・赤色粒少
442	大形鉢	50.0		12.8	細・極多、粗・普	明赤褐色	底部は比較的薄作り。鈍く屈曲して口縁部はほぼ直立。端部は内外に摘み出して頂部凹線。口縁部横ﾅﾃﾞで、内面鈍い凹線、外面縦ﾊｹﾒﾘ後縦ﾐｶﾞｷ、内面斜ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多（含粗粒）赤色顔料

第200図　４区ＳＤ08出土遺物32（１／４）



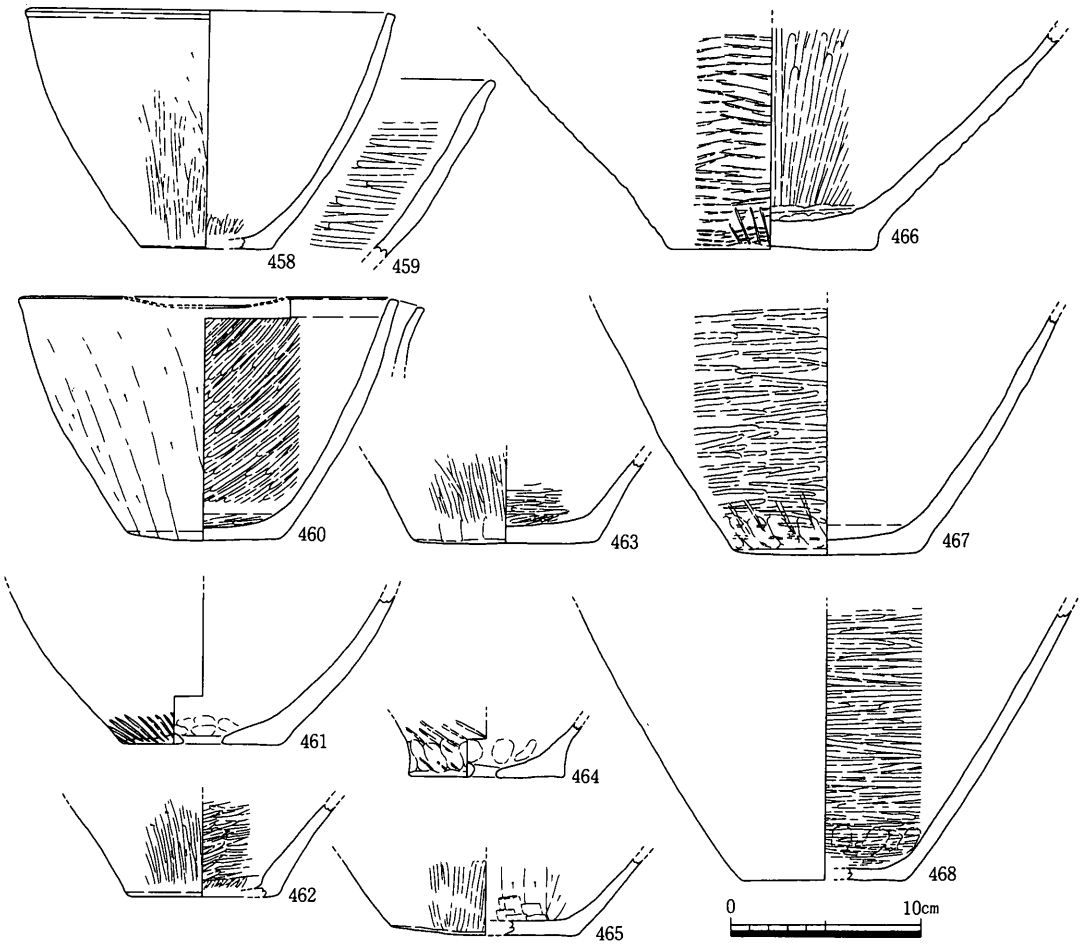
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
443	鉢	24.2			細・極多	褐色	口縁部は緩やかに内湾して開き、端部は四角く納める。外面口縁部直下沈線1条。内面横ﾐｶﾞｷ後下半部放射状ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多　赤色顔料
444	大形鉢	33.8			細・極多	明褐色	口縁部は緩やかに内湾して端部は丸く納める。外面口縁部凹線、叩き目残る。	1/16	角閃石極多、石英等多　赤色顔料
445	大形鉢	32.0			細・極多、中・多	にぶい黄橙色	口縁部は緩やかに内湾し、端部は肥厚気味に四角く納める。端面・口縁部外面に鈍い凹線。外面横ｹｽﾞﾘ、内面上半部横ﾐｶﾞｷ後下半部縦ﾐｶﾞｷ。	1/2	角閃石極多、石英等多、赤色粒
446	鉢				細・極多	灰黄色	口縁部で緩く屈曲して端部は丸く納める。縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多　赤色顔料
447	鉢				細・極多	にぶい黄橙色	体側縁部。端部は強く内湾して四角く納める。外面縦ｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ、一部縦ﾐｶﾞｷ。内面ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、雲母　赤色顔料
448	大形鉢	37.5			細・極多	浅黄色	中位で鈍く屈曲して上半部はやや内傾。端部は内外に張り気味に四角く納める。上半部横ﾐｶﾞｷ。	1/16	角閃石極多、石英等　赤色顔料
449	大形鉢	48.0			細・極多	橙色　にぶい褐色	口縁部は鈍く肥厚しつつ内外に張り出す。片口。	1/16	角閃石極多　赤色顔料

第201図　4区ＳＤ08出土遺物33（1／4）



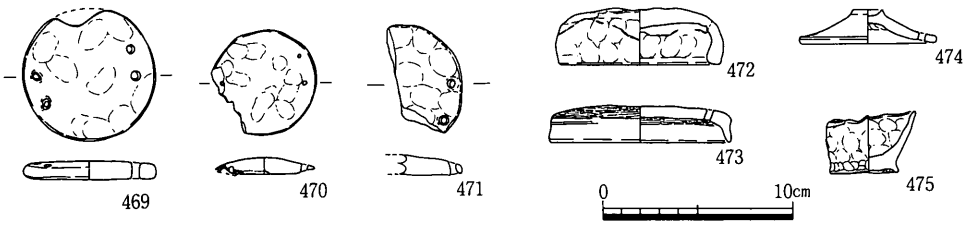
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
450	大形鉢	28.3			細・極多	浅黄色	やや内湾気味に開き端部は四角く納める。弱い片口。外面凹線、内面縦ﾐｶﾞｷ、片口部は横ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多、雲母多 赤色顔料
451	大形鉢	32.8			細・極多	灰黄褐色	中位で鈍く屈曲して上半部は直立。口縁端部は外方に張り気味に四角く納める。上半部横ﾅﾃﾞで、内外に鈍い凹線。下半部外面叩き目残す。内面横ﾐｶﾞｷ。	1/5	角閃石極多、雲母
452	大形鉢	33.6			細・極多	灰黄褐色	口縁部は小さく折り返して外反。端部は四角く納める。横ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多、雲母、石英等少 赤色顔料
453	大形鉢	36.4			細・極多	灰黄色	口縁部は緩く外反して端部は丸く納める。口縁部直下凹線。外面縦ｸｽﾞﾘ後横ﾅﾃﾞ。内面横ﾊｹ後横ﾐｶﾞｷ。	1/16	角閃石極多、雲母多 赤色顔料
454	大形鉢	34.7			細・極多	にぶい黄橙色	緩やかに湾曲して立ち上がり、端部は外方に鈍く摘み出すと共に内方も張る。外面縦ﾊｹで、叩き目残る。内面ﾊｹ後粗雑な縦ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多 赤色顔料
455	小形鉢	8.1	5.8	2.6	細・極多	灰黄褐色	内湾気味に開き端部は丸く納める。外面指押さえ、内面横ﾅﾃﾞ。	1/2	角閃石極多、赤色粒少
456	小形鉢	13.8			細・極多	暗赤褐色 明黄褐色	半球形の体部で、口縁部は屈曲して短く開く。端部は四角く納める。体部外面縦ﾊｹ、内面緻密な横ﾊｹ。	1/5	角閃石極多、雲母多
457	小形鉢	15.4	8.0	5.3	細・極多	にぶい黄橙色	鈍い突出底から内湾気味に強く開き、口縁端部は丸く納める。外面叩き目残す。内面指押さえ。	全周	角閃石極多、雲母少

第202図　4区ＳＤ08出土遺物34（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
458	鉢	18.6	12.2	7.0	細・極多	にぶい黄色　灰黄色	わずかに内湾気味に立ち上がり、端部は外方に鈍く突出。大形の底部は薄い。外面縦ｹｽﾞﾘ後縦ﾐｶﾞｷ。内面ﾐｶﾞｷ。	1/6	角閃石極多　赤色顔料
459	鉢				細・極多、中・普	灰黄褐色	緩やかに開き、端部は丸く納める。内面横ﾐｶﾞｷ、鈍い片口。		角閃石極多、石英等、赤色粒少　赤色顔料
460	鉢	19.2	12.6	8.0	細・極多、中・多	明褐色～灰黄色　灰黄色	わずかに内湾気味に開き、底部は薄い。口縁端部は四角く納める。外面縦ｹｽﾞﾘ、内面螺旋状ﾐｶﾞｷ。	1/2	角閃石極多（含粗粒）赤色顔料
461	？			8.2	細・極多	灰黄褐色	底部縁辺に叩き目残す。底部中央に焼成後穿孔。	1/2	角閃石極多、雲母
462	大形鉢			8.0	細・極多、中・普	暗褐色	薄作りの底部で外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多、石英等　赤色顔料
463	大形鉢			8.4	細・極多	褐色	底部はやや薄い。外面縁辺部指押さえ、体部縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/2	角閃石極多　赤色顔料
464	？			7.3	細・極多	黒褐色 にぶい黄橙色	やや突出気味の底部で外縁部は鈍く張る。外面叩き目残し、下端部指押さえ。底部中央に焼成後穿孔。	1/2	角閃石極多
465	？			9.5	細・極多、中・普	にぶい黄橙色	薄い底部。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面縦ｹｽﾞﾘ。	ほぼ全周	角閃石極多、石英等　赤色顔料
466	大形鉢			10.5	細・極多、中・多	暗褐色	底部は鈍く突出して分厚い。外面叩き目顕著に残る。内面縦ﾐｶﾞｷ。	ほぼ全周	角閃石極多（含粗粒）　赤色顔料
467	大形鉢			10.0	細・極多、粗・普	灰黄褐色	比較的薄作りの底部。外面叩き目顕著に残す。底部外縁部は斜位の叩き目後指押さえ。底部外面も叩き目。	全周	角閃石極多（含粗粒）
468	大形鉢			8.4	細・極多	灰黄褐色	体部は直線的に開き底部はかなり薄い。内面横ﾐｶﾞｷ。	1/2	角閃石極多、雲母　赤色顔料

第203図　４区ＳＤ08出土遺物35（１／４）

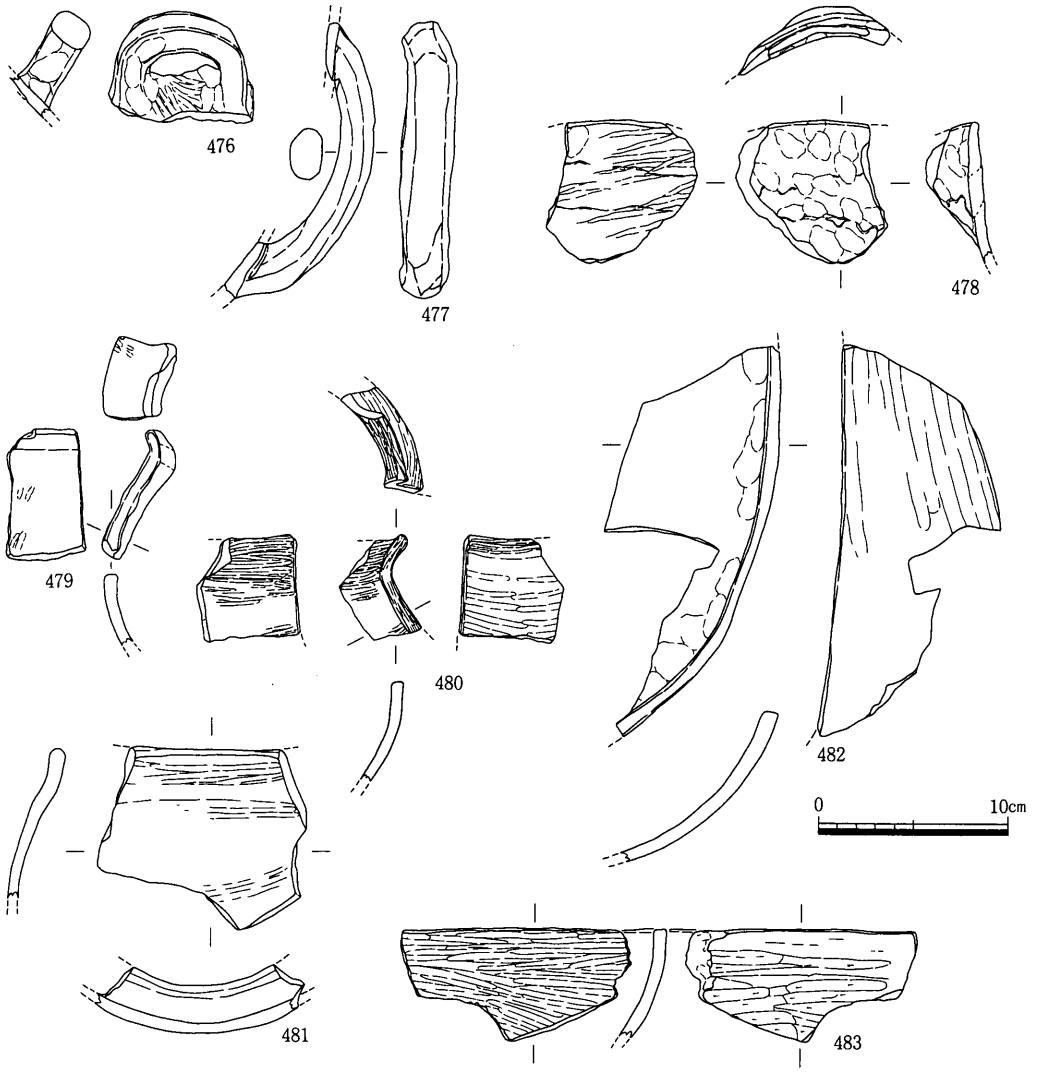


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
469	蓋	7.0	1.0		細・極多	にぶい黄褐色	円盤状を呈し、縁辺部の相対する2方に2孔1対の紐通孔。指押さえ。	9/10	角閃石極多、石英等多
470	蓋	5.3	0.8		細・極多	明灰黄色	円盤状を呈し、中心部がやや厚い。端部は尖り、外縁部の相対する2方に2孔1対の紐通孔。指押さえ。	7/8	角閃石極多
471	蓋		1.0		細・極多	暗褐色	円盤状を呈し、中心部がやや厚い。端部は丸く納め、外縁部に2孔1対の紐通孔。指押さえ。	1/2	角閃石極多
472	蓋	8.2	2.8		細・極多	灰黄色	箱形を呈し、端部は鈍く肥厚。内外面指押さえ顕著でやや粗雑。	1/4	角閃石極多
473	蓋	9.5	1.8		細・極多、中・普	灰黄色	円盤状を呈し、縁辺部は短く摘み出して垂下。頂部の相対する2方に2孔1対の紐通孔。端部横ﾅﾃﾞ、頂部ﾐｶﾞｷ。	7/8	角閃石極多、石英等多、雲母極多
474	蓋	7.0	1.7		細・極多	明褐色	頂部が鈍く隆起して低い栽頭円錐形。頂部縁辺は薄く摘み出す。端部は丸く納め、縁辺部の相対する2方に2孔1対の紐通孔。	1/3	角閃石極多、雲母多
475	ミニチュア土器	4.5	3.9	4.0	細・極多	黄褐色	いわゆる手づくね成形で粗雑。底部縁辺・口縁端部は乱雑に摘み出す。	ほぼ完形	角閃石極多、雲母多

第204図　4区ＳＤ08出土遺物36（1／4）

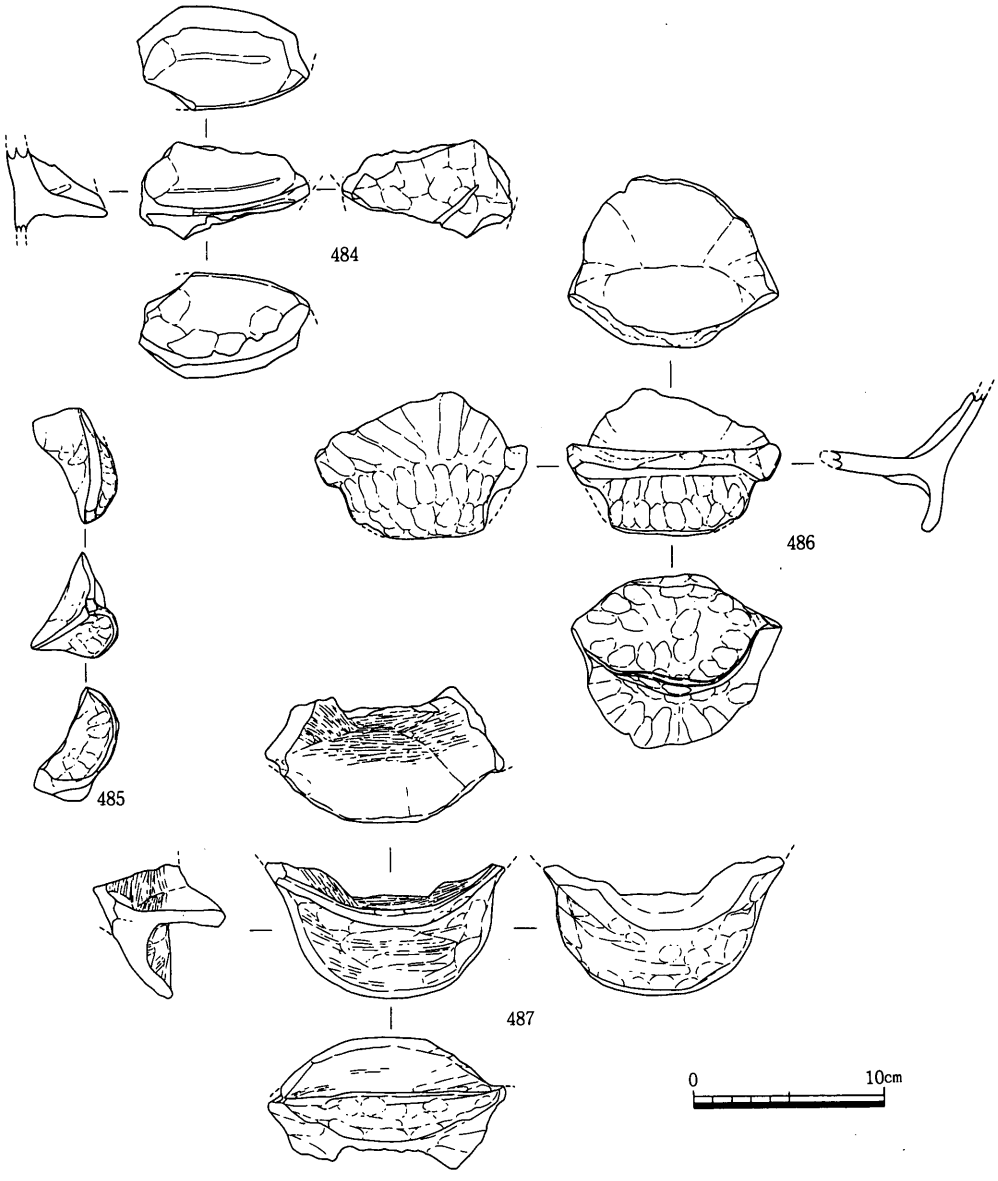
（391）～（416）は小形器台。（391～395）は外反は強いがあまり大きく開かない形態で，本来の鈍く肥厚しつつ強く外方に引き出した口縁端部形状が簡略化されている。この形態では端面短刻線と内面円形刺突文の組み合わせが多い。（396～407）は口縁端部を鈍く肥厚しつつ小さく上下に摘み出す。端面に3～6個1対の円形刺突文か短刻線文を施し，口縁部内面は凹線文を含めてあまり施文しない。（397）は端面に櫛描波状文を施し，口縁端部形状も違和感のある形態である。また（402・403）のように棒状浮文を加える例も多くない。（408～412）は鈍く肥厚した口縁端部を外方に強く摘み出すが，（391～395）ほど端部が簡略化しないもの。やはり内面への施文はない。小形器台脚部の場合，端部の拡張は弱く，鈍く肥厚させる程度で目立って摘み出すことは少ない。外面は裾部に凹線文を連続させることが多い（413～416）。

小形器台脚部（424）（437）は開きの弱い円筒形の脚部形態を持つもので，類例は多くない。前者は脚端に方形の切り込みを配する。また後者は搬入品である。大形器台では形態上の変化もより大きい。（421）（422）は顕著な垂下口縁をなす。（433）（434）は口縁部形態だけから見れば西部瀬戸内的な様相といえる。（418）は中位に矩形の小突帯を付して器表を網目状に配した細い篦描文で飾る。（419）は器台中位の大形円形透かしの周辺に弧



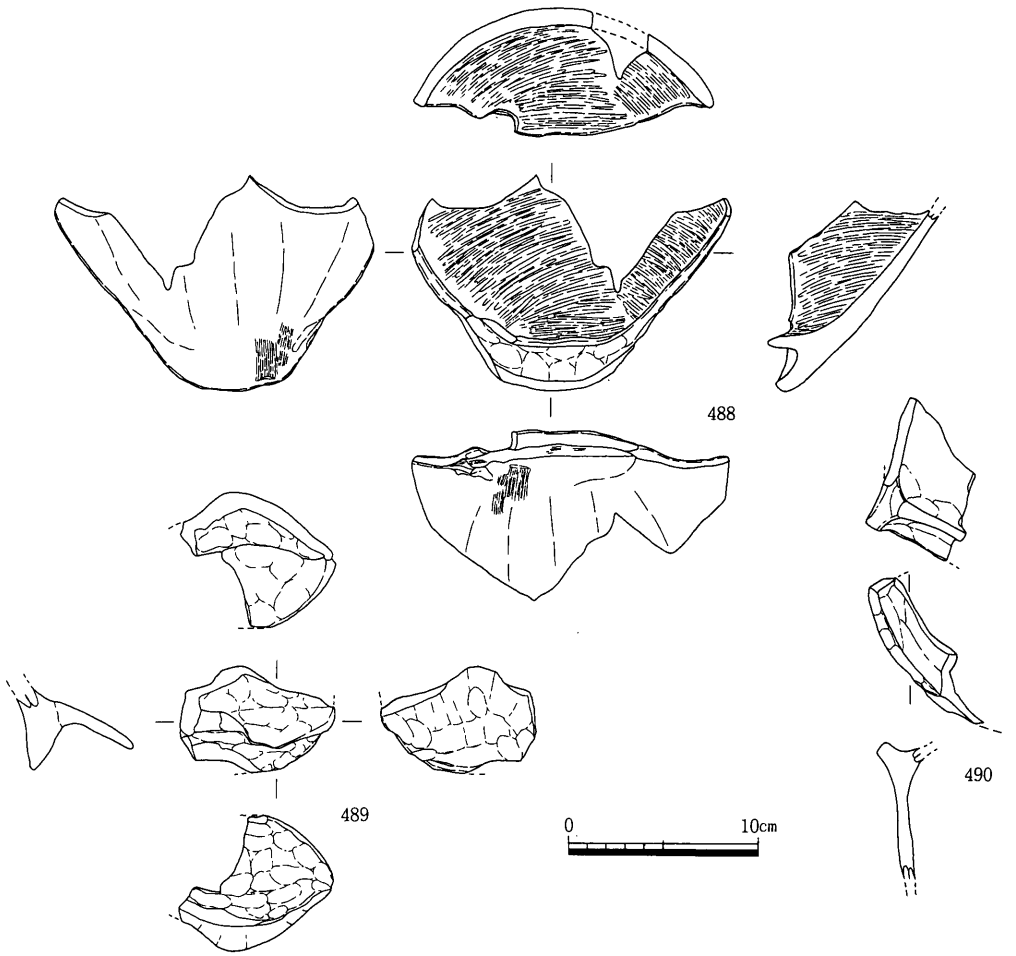
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
476	直口壺？				細・多、中・多	にぶい黄橙色	横位の環状把手、断面隅丸方形状、把手は体部に差し込み固定する。直口形態の壺肩部か		雲母・石英等多　搬入品
477	大形鉢				細・極多、中・多	灰黄褐色	縦位の環状把手、断面楕円形、大形鉢把手か		角閃石極多（含粗粒）、石英等多
478	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄橙色　灰黄褐色	片口部。口縁部は緩く反りかえって伸び、端部は四角く納める。外面叩き目残る。内面指押さえ。		角閃石極多、雲母多、石英等・赤色粒　赤色顔料
479	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄色	片口部。口縁部は強く反りかえって短い。端部丸く納める。側縁端部は内外に張り気味に四角く納める。外面叩き目残る。内面ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母少　赤色顔料
480	把手付広片口皿				細・極多	灰黄褐色	片口部。口縁部は強く反りかえって短く開き、端部は肥厚気味に丸く納める。側縁端部四角く納める。外面叩き目残る。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多　赤色顔料
481	把手付広片口皿				細・極多	褐色	片口部。口縁部は緩く屈曲して伸びる。端部は肥厚気味に四角く納める。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多　赤色顔料
482	把手付広片口皿				細・極多	橙色	体側縁部。端部は四角く納める。外面縦ﾅﾃﾞ		角閃石極多、石英等多　赤色顔料
483	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄橙色	体側縁部。端部は四角く納める。外面縦ｹｽﾞﾘ、内面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多　赤色顔料

第205図　４区ＳＤ08出土遺物37（１／４）



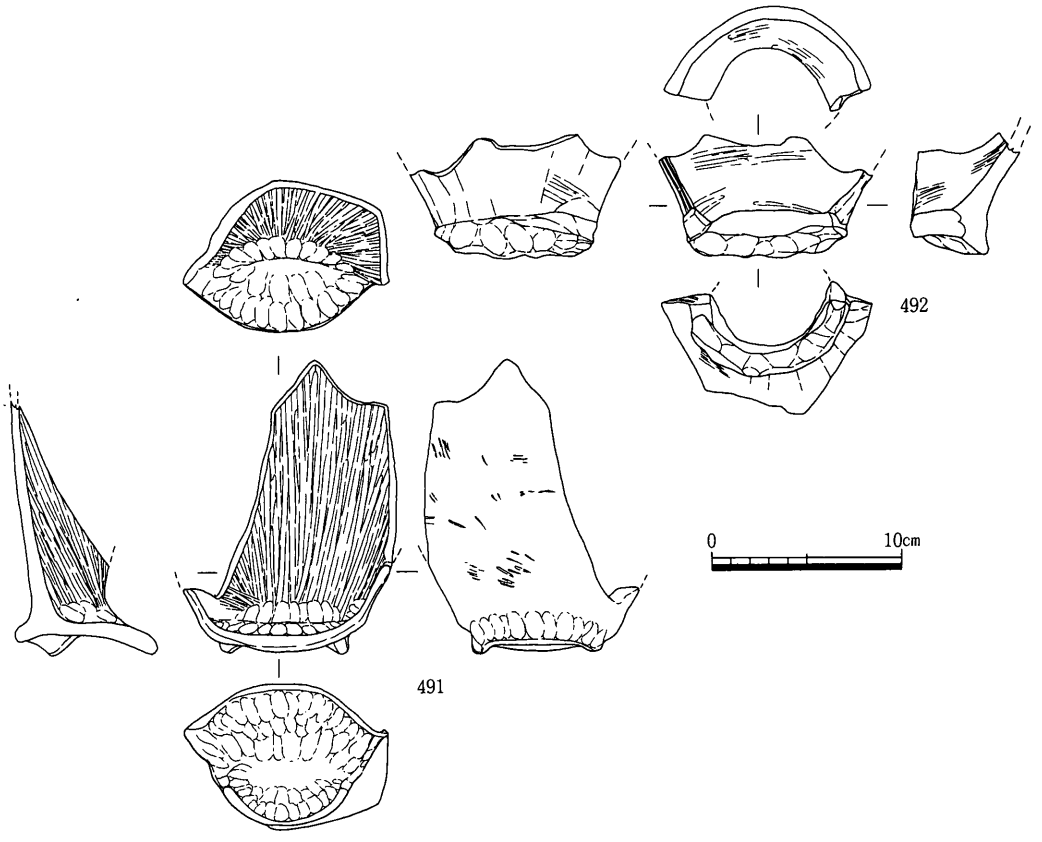
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
484	把手付広片口皿				細・極多、中・多	にぶい黄橙色	把手部。低い半円形に突出した立ち上がり部下縁から舌状の把手部が薄く伸びる。		角閃石極多、石英等多　赤色顔料
485	把手付広片口皿				細・極多	灰黄褐色	把手部。半円形に突出した立ち上がり部下縁から耳朶状の把手部が伸びる。指押さえ。		角閃石極多、雲母　赤色顔料
486	把手付広片口皿				細・極多、中・少	灰黄色	把手部。耳朶状に発達した把手部はやや内湾する。低く半円形に突出した立ち上がり部はほぼ直立する。外面縦ﾅﾃﾞで把手部指押さえ。内面ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、石英等少　赤色顔料
487	把手付広片口皿				細・極多、中・普	灰黄色	把手部。耳朶状に発達した把手部は強く内湾する。半円形に突出した立ち上がり部はほぼ直立して肥厚気味に丸く納める。把手部指押さえ、同内面部分的に横ﾐｶﾞｷ、内面底面・立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、側面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、石英等

第206図　４区ＳＤ08出土遺物38（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
488	把手付広片口皿				細・極多、	黄灰色	把手部。耳朶状の短い把手部はやや内湾して四角く納める。わずかに突出した低い立ち上がり部は直立して端部を丸く納める。側縁部は四角く納める。外面縦ﾅﾃﾞ。内面横ﾐｶﾞｷ。端面ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、赤色顔料
489	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄橙色	把手部。体部端を緩く折り返して耳朶状に発達した把手部は分厚い。把手基部から貼り足した立ち上がり部は半円形に突出して外反して伸び、端部は尖る。体部外面縦ﾅﾃﾞ。把手部、立ち上がり部指押さえ。		角閃石極多　赤色顔料
490	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄橙色	把手部。把手部は立ち上がり部下縁から短く伸びて端部は四角く納める。立ち上がり部剝落。		角閃石極多、翠母・石英等多　赤色顔料

第207図　４区ＳＤ08出土遺物39（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
491	把手付広片口皿				細・極多、中・少	灰褐色	把手部。立ち上がり部下端を外方に引き出して痕跡的な把手部となす。半円形に突出した立ち上がり部はやや外反して伸び、肥厚気味に丸く納める。外面体部叩き目残る。把手部・立ち上がり部指押さえ。内面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、石英等少、赤色顔料
492	把手付広片口皿				細・極多	黄橙色	把手部。体部端を緩く折り返した把手部は分厚く短い。把手基部から貼り足した立ち上がり部は剝落。体部外面縦ﾅﾃﾞ。内面横ﾐｶﾞｷ。把手部指押さえ。		角閃石極多　赤色顔料

第208図　4区ＳＤ08出土遺物40（１／４）

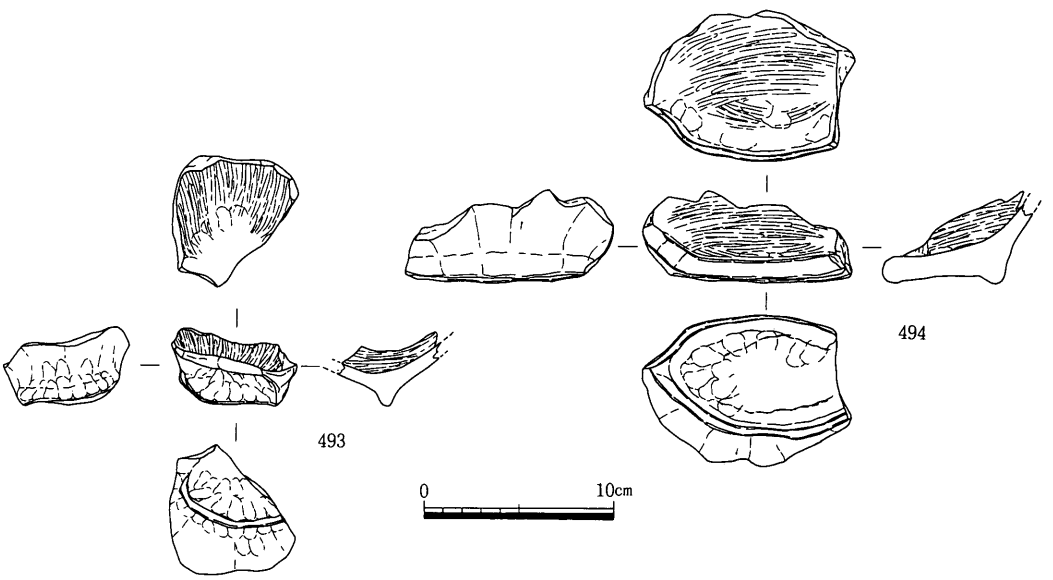
状の繊細な並行沈線を螺旋状に組む文様が認められるが，器表の剥落が著しく文様構成の全貌は知り得ない。(438) は脚裾部の上面観がややいびつな多角形を呈する。叩き目をとどめる点でも粗雑な作りである。

大形鉢 (439) ～ (442) は拡張口縁高坏と同様の口縁部形態をもつ。(442) では僅かに屈曲が鈍くなっているが，口縁端部の拡張はいずれも顕著で，後期初頭の古い様相を守っている。(443) はやや小振りで口縁部に１条沈線文を見る。(444～447) は鈍く内湾して外面に不明瞭な凹線を見る。(448・451) は鈍い屈曲部がある。(452～454) は口縁部を小さく外反させる形態。端部を薄く尖らす (453) と四角く納める (452) がある。小形鉢

(455～457) はいずれも後期中葉以降に下る後出的な形態ばかりである。

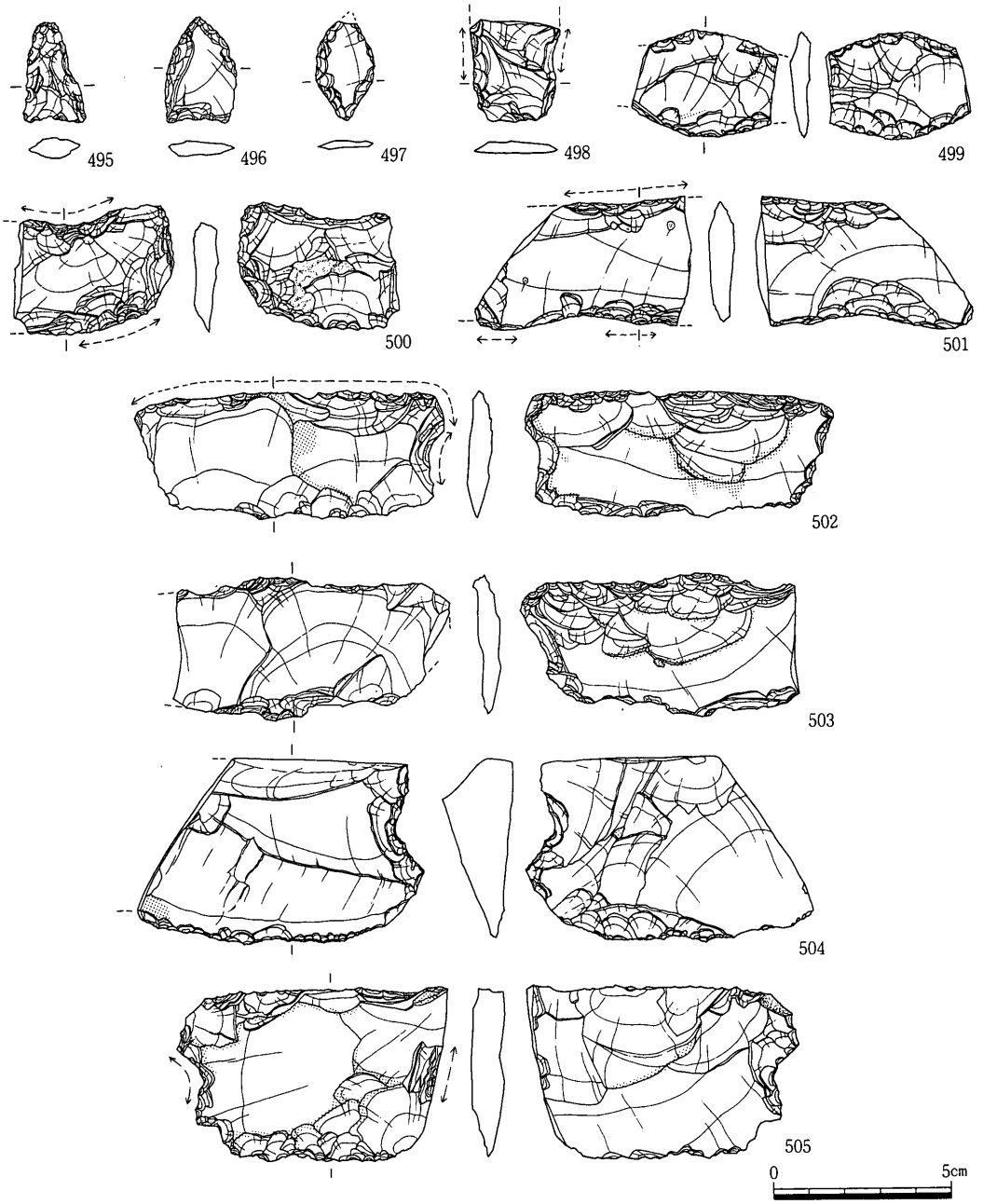
(458～468) はバケツ形を呈するやや深目の鉢。この種の形態では (458～460) のように単純な口縁部形態をとることが一般的である。また内面は緻密に磨くが外面はケズリ仕上げ (460) や，叩き目の顕著な残存 (467) は珍しくない。また体部同様に底部を薄く仕上げることも特徴である。

(469～471) は円盤状を呈する蓋。縁辺部に2孔1対の紐通孔がある。(472) は紐通孔もなくやや粗雑であるが形状から箱形の蓋と分類した。(474) は低い笠形の蓋。頂部は緩く窪む。(475) は椀形の粗雑なミニチュア土器である。内外面に指押さえを顕著に残す。(476) は横位の環状把手。直口壷もしくは無頸壷肩部に付くものか。(477) は縦位の環状把手。大形の把手付鉢であろう。(478～481) は把手付広片口皿片口部。(479・480) は短いが強く屈曲する。(482・483) は同側縁部片。端部は単純に四角く納める。把手部 (484～487) は耳朶状に大きく発達した形態。立ち上がり部は半月形に緩やかに直立する。



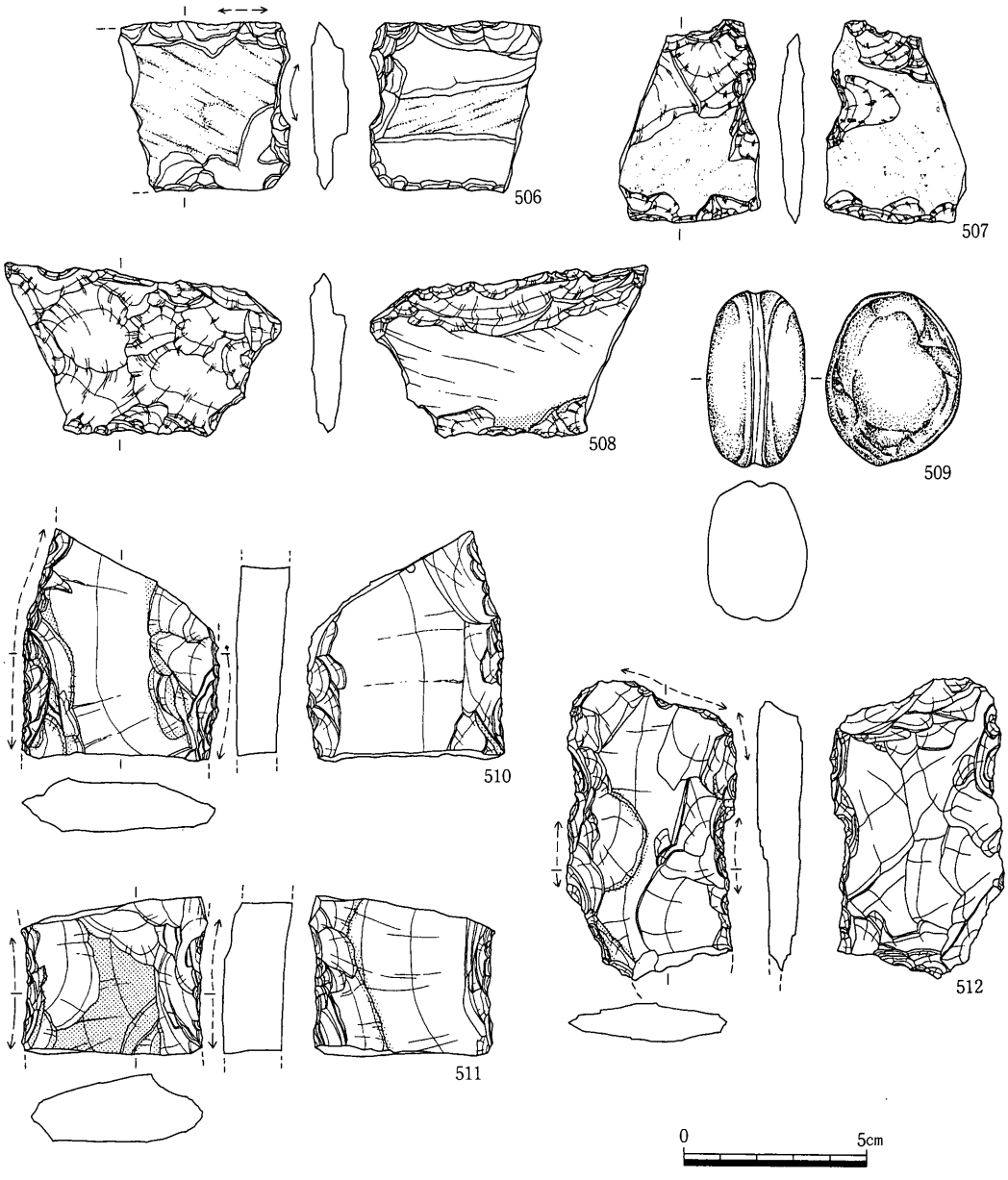
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
493	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄褐色	把手部。把手部は半円形に突出した立ち上がり部下縁を鈍く摘み出すのみ。把手部指押さえ。体部外面縦ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多　赤色顔料
494	把手付広片口皿				細・極多、中・多	にぶい黄褐色	把手部。把手部は低い台形状に発達した立ち上がり部の下端を縁取る鈍い突起にすぎない。立ち上がり部はわずかに外傾して肥厚気味に丸く納める。外面立ち上がり部指押さえ、体部縦ﾊｽﾞﾘ、内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母・石英等多　赤色顔料

第209図　4区ＳＤ08出土遺物41（1／4）



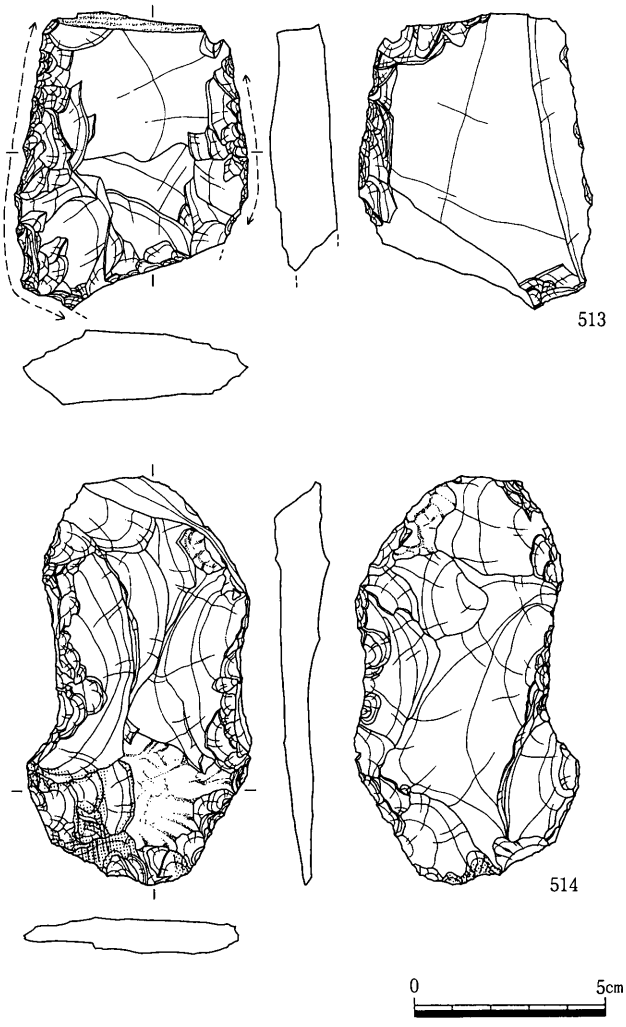
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
495	石鏃	2.2	1.9	0.6	1.9	サヌカイト	平基	
496	石鏃	2.7	2.0	0.4	2.5	サヌカイト	平基	
497	石鏃	2.7	1.7	0.3	1.0	サヌカイト	凸基	先端部折損
498	石鏃	2.8	2.5	0.8	5.9	サヌカイト	平基	先端部折損
499	？	3.9	2.9	0.6	8.9	サヌカイト	左面稜部摩耗微弱　大形石鏃の可能性？	折損
500	打製石庖丁	4.5	3.0	0.7	17.5	サヌカイト	背部潰し　短辺抉りなし	折損
501	スクレイパー	5.8	3.4	0.8	21.6	サヌカイト	刃部やや内湾	両端折損
502	打製石庖丁	8.8	3.4	0.7	28.4	サヌカイト	背部・抉り部潰し、刃部調整粗雑	
503	打製石庖丁	7.8	3.9	0.7	24.3	サヌカイト	刃部調整粗雑　右面稜部摩耗微弱	両端折損
504	打製石庖丁	7.9	5.3	1.9	81.1	サヌカイト	背部折り取り面　短辺抉り　左面刃部摩耗微弱	折損
505	打製石庖丁	7.7	4.9	0.9	47.4	サヌカイト	折損後再利用？　刃部片面調整　左面稜部摩耗微弱	

第210図　４区ＳＤ08出土遺物42（１／２）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
506	打製石庖丁	4.8	4.5	0.9	31.4	片岩		折損
507	打製石庖丁	3.8	5.4	0.7	19.8	安山岩系		折損
508	打製石庖丁	7.0	4.5	0.9	40.4	安山岩系	縁辺部調整粗雑　右面刃部一部摩耗少	折損
509	有溝石錘	4.9	2.7	3.7	67.2	砂岩	短面に擦り切りの溝	
510	石鏃	6.1	5.3	1.4	68.6	ｻﾇｶｲﾄ	両側縁潰し　左面稜部摩耗	両端折損
511	石鏃	4.4	4.9	1.7	61.9	ｻﾇｶｲﾄ	両側縁潰し	両端折損
512	石鏃	8.2	4.6	1.3	59.8	ｻﾇｶｲﾄ	側縁・基部潰し　左面稜部摩耗微弱	先端一部折損

第211図　４区ＳＤ08出土遺物43（１／２）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
513	石鏃	7.5	6.2	1.8	99.3	ｻﾇｶｲﾄ	両側縁潰し	先端部折損
514	石鏃	10.6	5.9	1.4	83.5	ｻﾇｶｲﾄ	基部折り取り面　先端部両面摩耗・擦痕	

第212図　4区ＳＤ08出土遺物44（１／２）

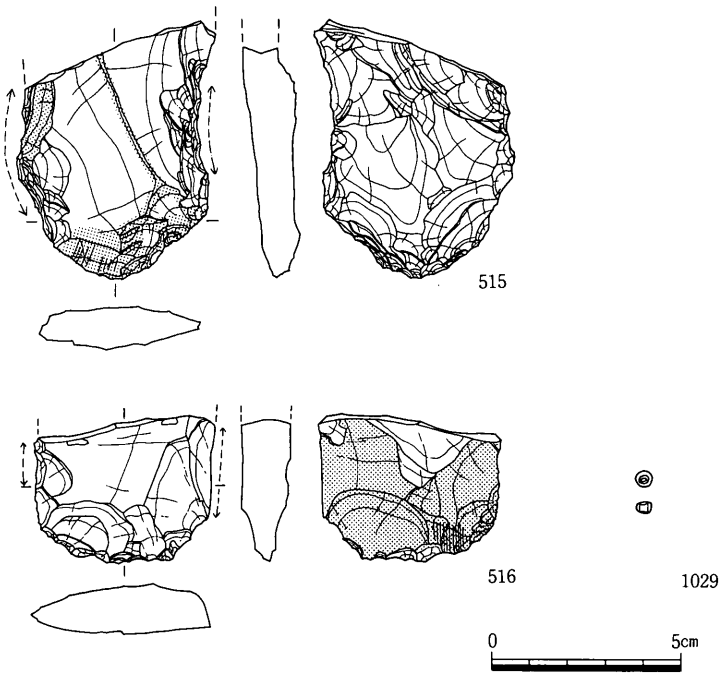
(488～490) は把手部がやや小さい形態。また (488) では内面の緻密な分割横ミガキがよくわかる。(491) ～ (494) では把手部は立ち上がり部下縁の鈍い隆起にすぎない。

以上示したＳＤ08の土器資料では後期初頭の資料を中心とするが，ごく少量後期中葉に下る後出形態を含む。これは本溝埋没後に設けられた小溝ＳＤ09資料が混入したものであろう。なお本溝の後期初頭資料はそれの古い様相を中心とするが少量より新しい特徴を備えた資料を交えている。

検出した石器類の大多数は土器資料が示すように後期初頭に属するであろうが，縄文晩

期～弥生前期のＳＤ07と一部重複しており，実際ごく少量であるがそれに所属するであろう土器が混在することはすでに示したとおりである。出土状況から分別は困難であるが石器についても同様のことを考慮しなければならないであろう。

（495）は小形の平基式石鏃。調整剥離は深く，比較的整っている。（496）は同様に小形平基式だが，調整剥離は浅く縁辺部全体に及んでいない。未製品の可能性がある。（497）は扁平な凸基式。やはり調整は浅い。（498）は先端部欠損の大形石鏃。平基式である。（499）は小剥片に浅い調整を加え木葉形を呈する。石鏃としては大形すぎるのでとりあえずスクレイパーとした。（501）は石鎌状のスクレイパーか。背部と刃部の作り分けはあまり明瞭ではない。（500）は小形品で抉りも見られないが，明瞭な背潰し調整を見るので石庖丁とした。（502・503）は粗雑だが抉り部を作り出し，背部の調整も比較的丁寧。ただし刃部は粗雑な作りである。（504）は打割した大形剥片を素材としてかなり分厚い。背部は折り取り面のまま。（505）は折損後，再加工を企てているが十分ではない。（506）は板状の片岩自然礫を素材とし，縁辺部を成形して打製石庖丁とする。（507・508）は安山岩



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
515	石鏃	5.2	5.1	1.3	54.8	ｻﾇｶｲﾄ	左面先端側縁摩耗顕著・刃部擦痕　側縁部潰し	基部折損
516	石鏃	3.8	4.8	1.3	31.9	ｻﾇｶｲﾄ	右面摩耗顕著・刃部擦痕	先端部片
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	色調・形態	備考
1029	小玉		0.4	0.25	0.06	ガラス	淡育色　ややいびつに切断。研磨	

第213図　４区ＳＤ08出土遺物45（１／２）

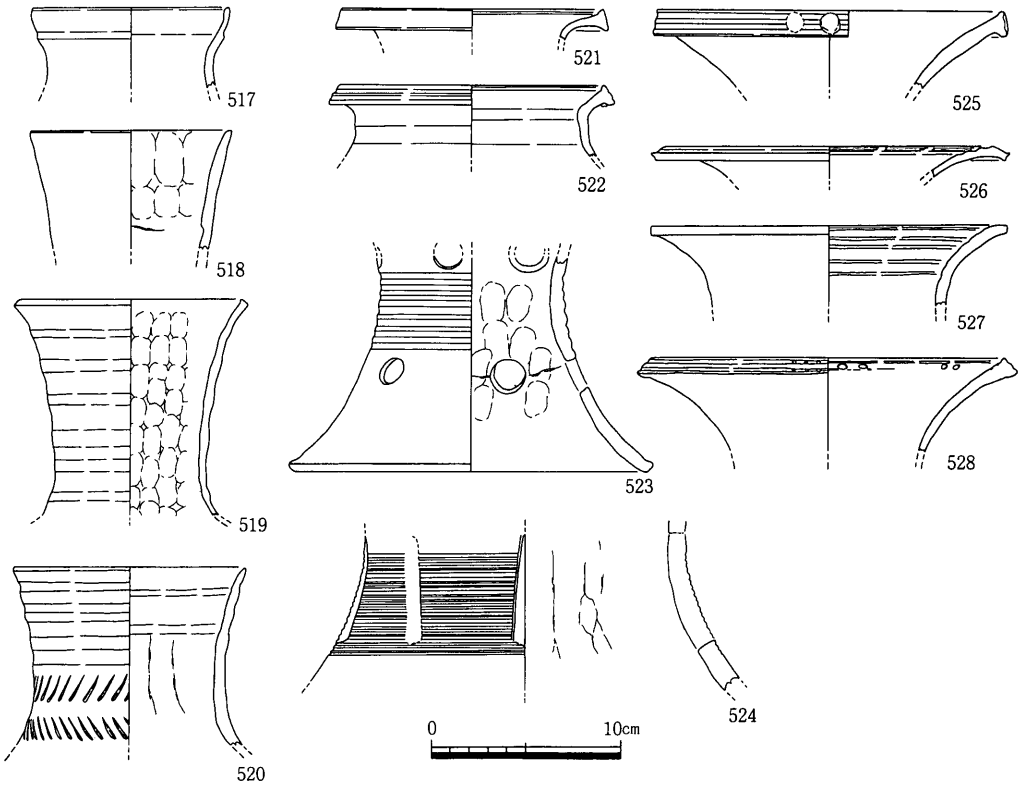
系の石材を使用する。(507) は片岩製打製石庖丁と同様に板状自然礫の縁辺部の若干の成形で仕上げるが，(508) は珍しく，丁寧な加工が深くまで及ぶ。(509) は砂岩製有溝石錘。石鍬 (510・511) は側縁部の潰し調整が丁寧。(512) は小形品で形態も整わないが，左面に微弱な磨耗を認める。(513) は打割した大形剥片を素材とし，調整剥離は深く及ばない。(514) は中位のくびれた鈍い分銅形を呈する。

この他にガラス小玉 (1029) を検出した。径 4 ㎜，長 2.5㎜で淡青色を呈する。

ＳＤ09 (第214～216図)

ＳＤ08西縁部の上面で確認した小溝。幅0.7ｍ，深さ0.2ｍをはかる。断面形は皿状を呈して，埋土は単層で淡褐灰色砂質土からなる。ＳＤ08埋没後にその位置をほぼ踏襲して設けられた小規模溝である。より削平の著しい調査区北部では確認できない。遺物の出土量はあまり多くない。

(517) は鈍い受口状形態をもつ直口壷，口頸部は短く明瞭な凹線文は見ない。直口壷 (518) はわずかに外反して伸びる形態だが，凹線文を見ない。(519) は緩く外反して比較的長く伸びる口頸部形態には珍しく端部を四角く納める。内面に顕著な指押さえを上端部までとどめる点も多くの直口壷とは異なる。(520) は下半部に短い斜線文を 2 段に配して口縁端部は薄く尖る。(521) は小片だが，比較的口縁部が開くので甕よりも広口壷と見るべきだろう。小形器台 (523) は中位に並行沈線文を配し上下に大形円形透かしを穿つが，脚裾部は無文で端部の肥厚・拡張もない。主流的な形態ではない。(525) は拡張の弱い口縁端部に円形浮文貼付の痕跡が残る。小形器台への浮文の採用は多くない。(526・527) は口縁部は強く外反して大きく開くが，端部の肥厚・拡張は簡略化した形態になっている。(528) は内外面に円形刺突文を配するが，口縁部は肥厚するものの摘み出しは弱い。「く」字口縁の甕 (529) (532) は口縁部が直線的に伸びる形状を示し，少なくとも後期中葉以降の後出する形態である。(530) は端部の拡張が鈍化しているが，後期初頭の新しい様相で把握できるであろう。大形甕 (531) も肥厚した口縁端部の摘み出しと端面の凹線文の略化に新しい様相を見ることができる。(533) は直立口縁高坏の系統に位置するが上半部の外傾と端部の摘み出しは後期初頭でもかなり新しい様相である。同様に拡張口縁形態の (536) (537) での屈曲部の退化と上半部外傾傾向も新しい様相を示す。(534) は後期初頭段階の外反口縁形態高坏である。(538) はかなり深めとなるので大形鉢の可能性も残る。脚 (539) は後期中葉以降の形態であろう。(540) は柱状脚形態の裾部。脚端部は鈍く肥

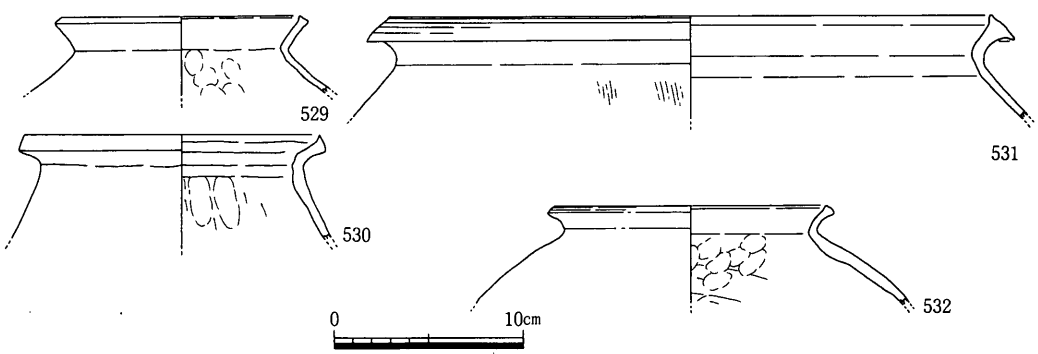


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
517	直口壺	10.1			細・極多	明褐色	やや外反する短い頸部から鈍く屈曲して口縁部は弱く内湾。端部丸く納める。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多
518	直口壺	10.4			細・極多	灰黄色	口頸部はわずかに反って立ち上がり端部は丸く納める。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
519	直口壺	11.6			細・極多	橙色	口頸部は外反気味に立ち上がり端部は内方に張り気味に四角く納める。外面凹線、内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等多
520	直口壺	12.2			細・極多	橙色	口頸部はわずかに外反気味に立ち上がり、端部は尖る。外面上半部凹線、下半部に斜線文2段。内面上半部鈍い凹線	1/6	角閃石極多
521	広口壺	13.6			細・極多	橙色	口縁部は強く折り返して短く水平に開く。端部は肥厚しつつ上下に摘み出す。	1/5	角閃石極多、雲母
522	広口壺	13.8			細・極多	にぶい黄橙色	短く内傾する頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。端面凹線。	1/8	角閃石極多
523	小形器台			18.7	細・極多	にぶい黄色	脚裾部は緩やかに外反して開き端部は四角く納める。中位に並行沈線、上下に大形円形透かし各5方、6方。内面中位指押さえ顕著。	1/3	角閃石極多
524	大形器台				細・極多	明黄褐色	中位に櫛描並行沈線と大形の長方形透かし。内面絞り目残る。	1/12	角閃石極多、石英等・雲母
525	小形器台	18.2			細・極多、粗・普	にぶい黄橙色　橙色	口縁部は外反して開き、端部は上下に小さく摘む。端面沈線2条と2個1対の円形浮文。	1/5	角閃石極多、雲母多、石英等
526	小形器台	19.0			細・極多	明黄褐色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は上下に張り気味に四角く納める。口縁部内面凹線。	1/12	角閃石極多、雲母多
527	小形器台	18.7			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して開く。端部は四角く納める。口縁部内面凹線。	1/12	角閃石極多
528	小形器台	18.6			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して開く。端部は鈍く肥厚して上方に小さく摘む。端面凹線と2段に配した6個1対の刺突文。口縁部内面2個1対の円形刺突文。	1/6	角閃石極多

第214図　4区ＳＤ09出土遺物１（１／４）

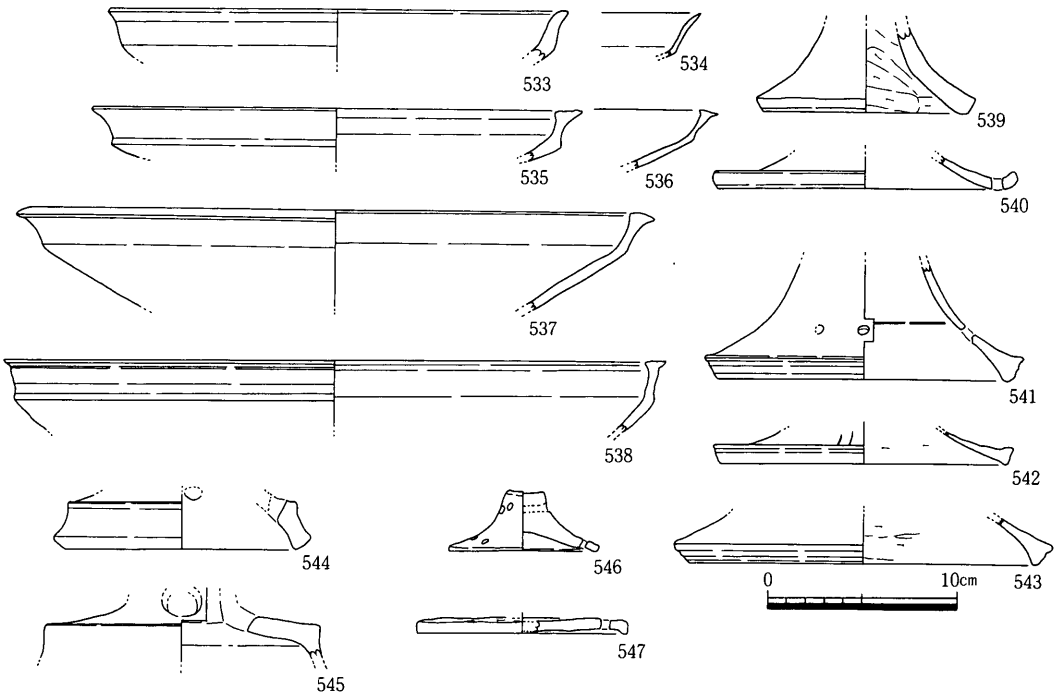
厚しつつ小さく摘み上げる。脚端部を肥厚する形態（541～543）はいずれも脚端部の肥厚・拡張が鈍化しつつある新しい様相を示す。また（542）は裾部に垂下沈線を持ち，僅かながら脚端上部の突出を強調した吉備南部地方に連絡する様相を持つ。（544・545）は装飾高坏脚部。本器種は変化が激しいが，後期初頭段階では総じて脚裾部が大きく発達していない。蓋（546）は小形の笠状を呈し頂部と縁辺部に紐通孔を穿つ。

以上示したＳＤ09資料は後期初頭でも新しい様相を中心とし，一定量，後期中葉以降に後出する形態を交えている。量的には後者が少ないが本溝の時期を示すと考えることが合理的である。廃絶時に多量の遺物を投棄された後期初頭段階のＳＤ08に重複して設定された本溝にそれの遺物が多量に混入するのはむしろ当然であろう。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
529	甕	12.4			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して開く。端部は小さく内方に摘み気味に四角く納める。肩部内面指押さえ。	1/12	角閃石極多
530	甕	14.6			細・極多	明赤褐色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は摘み上げる。口縁・頸部内面は強い横ﾅﾃﾞで凹面連続。肩部内面縦ｹｽﾞﾘ後指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等・雲母
531	大形甕	31.6			細・極多	にぶい黄褐色　黒褐色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短い。端部は肥厚しつつ上下に摘み出して端部凹線。外面縦ﾊｹ	1/10	角閃石極多
532	甕	14.2			細・極多	にぶい黄橙色　明褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ内外にやや張る。肩部内面下半まで横ｹｽﾞﾘ後指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等・雲母

第215図　４区ＳＤ09出土遺物２（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
533	高坏	23.9			細・極多、中・普	明褐色	中位で鈍く屈曲して上半部はやや外傾。端部は外方に張り気味に四角く納める。横ﾅﾃﾞ	1/14	角閃石極多、石英等・雲母
534	高坏				細・極多	にぶい褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部はやや反り気味に外傾して端部は尖る。		角閃石極多、雲母
535	高坏	25.7			細・極多	にぶい黄橙色　明赤褐色	中位で強く屈曲して稜。上半部は短く立ち上がり端部は外方に摘み出すと共に内方もわずかに突出する。頂部凹線。	1/12	角閃石極多
536	高坏				細・極多	明褐色	中位で鈍く屈曲して上半部は外傾。端部は外方に摘み出すと共に内方も小さく突出する。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ、内面横ﾐｶﾞｷ		角閃石極多、雲母・赤色粒
537	高坏	31.2			細・極多	浅黄色	中位で屈曲して上半部は短く外傾。端部は外方に摘み出すと共に内方も小さく突出。	1/12	角閃石極多、石英等多
538	高坏	32.6			細・極多	橙色	中位で屈曲して鈍い段。上半部は直立して端部は外方に摘み出すと共に内方も突出して頂部沈線３条。外面下半横ｹｽﾞﾘ。	1/18	角閃石極多、石英等・赤色粒
539	脚			10.8	細・極多	橙色	脚裾部は外反して開き、端部四角く納める。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、石英等
540	脚			15.5	細・極多	明黄褐色	脚裾部は強く開き、端部は肥厚気味に小さく反って摘み上げる。脚端部に中形円形透かし１２方	1/4	角閃石極多
541	脚			15.4	細・極多	黄褐色	脚裾部は外反して開き、端部は肥厚し上下に張る。端面凹線。２孔１対の円形透かし。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、雲母
542	脚			15.0	細・極多	黒褐色　にぶい橙色	脚裾部は強く開いて端部は肥厚しつつ摘み上げる。篦描垂下沈線。内面横ｹｽﾞﾘ	1/10	角閃石極多
543	脚			18.0	細・極多	橙色	脚裾部は内湾気味に強く開き、端部は肥厚して上下にやや張る。端面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/8	角閃石極多
544	装飾高坏			12.0	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部有段。屈曲部鈍く突出して端部は四角く納める。上部に中形円形透かし。	1/8	角閃石極多
545	装飾高坏				細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部有段。屈曲部に稜。裾上端部に大形円形透かし。	1/8	角閃石極多、石英等多
546	蓋	7.8	10.1		細・極多	にぶい橙色	栽頭円錐形を呈する。頂部はやや窪み、端部は丸く納める。裾部の相対する２方に２孔１対の紐通孔、頂部に横位の貫通孔２孔。	2/3	角閃石極多、石英等・赤色粒
547	蓋	10.6			細・極多	浅黄色	円盤状を呈し端部は小さく下方に摘み出す。縁辺部の相対する２方に２孔１対の紐通孔。	1/3	角閃石極多、雲母・石英等

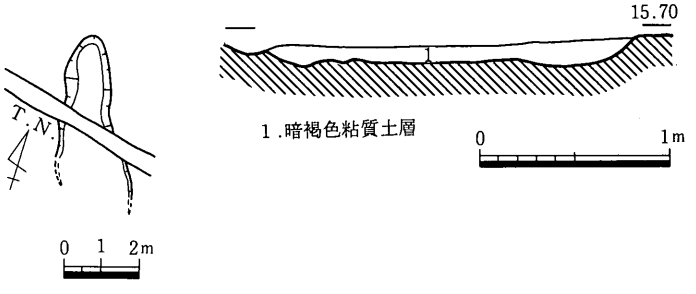
第216図　４区ＳＤ09出土遺物３（１／４）

ＳＤ10（第217・218図）

Ｂ・Ｃ－12区で検出した浅い溝状遺構。ＳＤ08の東隣に位置し，ＳＫ02と重複する関係にある。ただし周辺の削平も著しく本溝は最大幅２ｍ，深さ0.15ｍで長さ５ｍ弱程が舌状に残存するにすぎず，隣接遺構などとの前後関係は判断しがたい。

甕（548）は口縁部がやや伸びて端部の摘み出しも鈍化した後期初頭の新しい様相。（550）は小片だが，やや発達した形状の「く」字口縁甕と見られる。直立口縁形態高坏（551）は屈曲部に強い稜を持たず，口縁端部も張り出し気味に丸く納める後期初頭の古い様相を示す。脚（552）は端部肥厚・拡張が弱く柱状軸形態にしてもやや新しいものであろう。大形器台（553）は軸部から強く折り返して口縁部が大きく開く形態。口縁端部は上下に強く摘み出す。中位に長方形透かし４方を穿ち，上下に細かい凹線文が連続する。小形器台脚（554）は脚端部を鈍く肥厚しつつ四角く納め外面に凹線文が連続するもっとも主流的な形態。これに対して（555）は裾部の開きが弱く端部はほとんど肥厚せずに四角く納める。この種の形態は多くない。

これらは後期初頭に位置づけられる資料である。

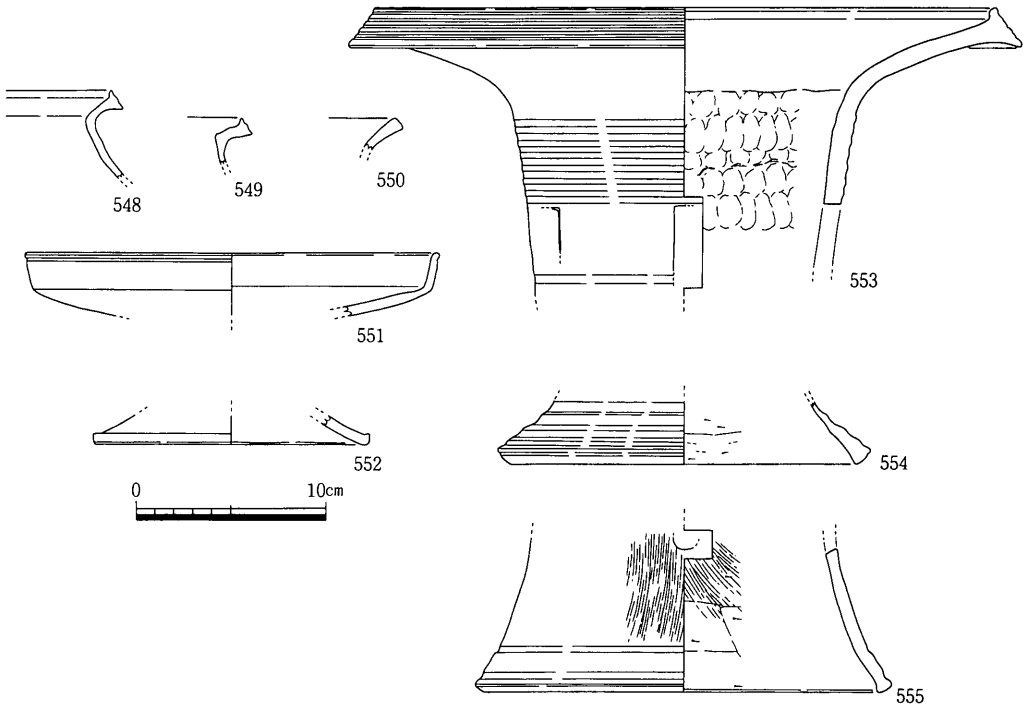


第217図　４区ＳＤ10平・断面図（１／200・１／40）

ＳＤ11（第219・220図）

Ｃ12～14区で，検出した小規模な溝状遺構である。Ｃ12区中部から南東方向に伸びたのち，同区東端付近で大きく折れて東に直線的に伸びる。延長約４５ｍ分を検出しているが両端は削平によって失われている。Ｃ12～14区の掘立柱建物間を縫って走り，Ｃ－12区ではＳＢ02と重複している。断面半円形を呈し，最も良好な部分で深さ0.3ｍを測る。東西両端で，床面レベルに0.1ｍの比高があり，それからすれば東方に流下することになる。この形状は取・排水路と見るよりも集落内の区画施設とみなすべきであろう。竪穴住居群が本溝の南側に集中することは注意した方がよい。

（556）は強く開いた短頸形態の壷口縁部。端部を鈍く肥厚させる。拡張口縁形態高坏（557）は口縁端部を強く外方に引き出すが，内方は突出しない。また中位の屈曲がやや鈍い。脚（558）は脚端上部を強く摘み出し垂下沈線文を見る。吉備南部地方に多い形態で



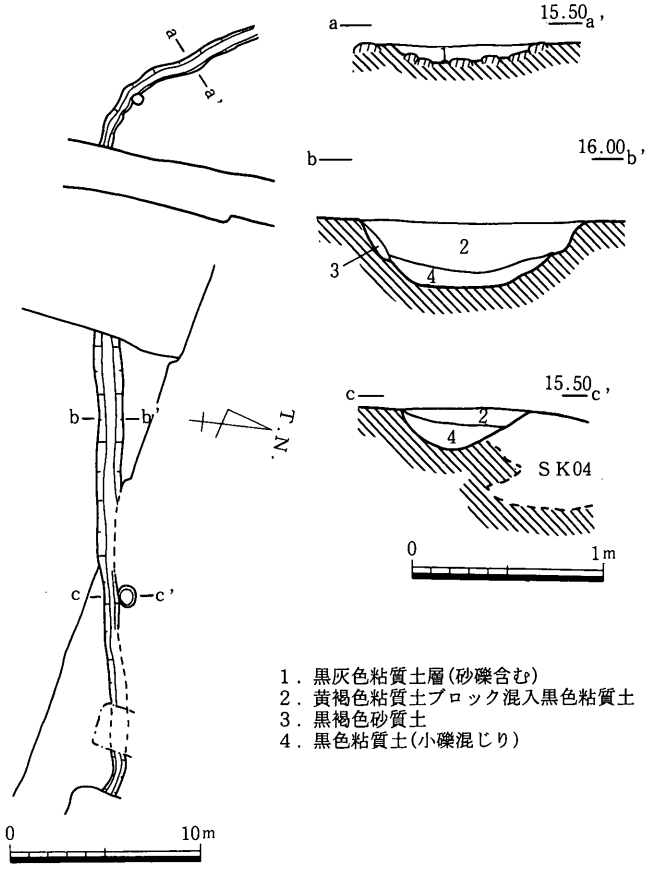
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
548	甕				細・極多	橙色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚して上下に摘み出して端面に凹線。		角閃石極多
549	甕				細・極多	橙色	強く折り返して口縁部は短く開く。端部は小さく上下に摘む。横ﾅﾃﾞにより折り返し部に鈍い稜。		角閃石極多
550	甕				細・極多	暗灰黄色	口縁部は短く開き、端部は鈍く肥厚して四角く納める。		角閃石極多
551	高坏	21.7			細・極多	黒褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部はやや外傾して端部は小さく外方に摘み出して丸く納める。口縁部直下に細い凹線１条。	1/8	角閃石極多、雲母多
552	脚			14.4	細・極多	橙色	脚裾部は強く開き端部は小さく摘み上げる。	1/8	角閃石極多、石英等・赤色粒
553	大形器台	30.6			細・極多、中・普	にぶい黄褐色	やや外傾する軸部から強く折り返して口縁部は大きく開く。端部は上下に摘み出して端面に沈線５軸部上下に凹線文、中位に長方形透かし。口縁部横ﾅﾃﾞ、軸部内面指押さえ顕著	2/5	角閃石極多、石英等・赤色粒
554	小形器台			18.1	細・極多	明褐色	脚裾は強く開いて端部は鈍く肥厚しつつ四角く納める。外面凹線、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/16	角閃石極多
555	大形器台			20.9	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部はわずかに開き端部は内外に張り気味に四角く納める。外面縦ﾊｹ後裾部に凹線２条、内面横ｹｽﾞﾘ後中位にﾊｹ。中位に大形円形透かし。	1/5	角閃石極多、石英等多

第218図　４区ＳＤ10出土遺物（１／４）

ある。(559) も脚端部を肥厚して下方に伸ばすものの端上部の突出も大きい。(561) は柱状脚形態の裾部で大形の円形透かしを見る。甕 (562・563) は肥厚した口縁端部の摘み出しがやや鈍くなっている。大形甕 (564) の薄く摘み上げて端面が直立する口縁部形態は一般的ではない。内面横ケズリは上端まで達している。鉢 (565) は口縁部を小さく折り

返す形態。(568) は同系統の鉢だが，口縁屈曲部がやや伸びており，丸みを帯びた体部形状と共に後出的な形態といえる。(566) はバケツ状を呈する深めの大形鉢口縁部片の可能性が高いが，把手付広片口皿側縁部片でもよい。(567) は把手付小形鉢。明瞭に突出しないものの底部はやや分厚い。

以上の資料は鉢（568）が後出する可能性を持つ他は後期初頭に位置づけられるものである。



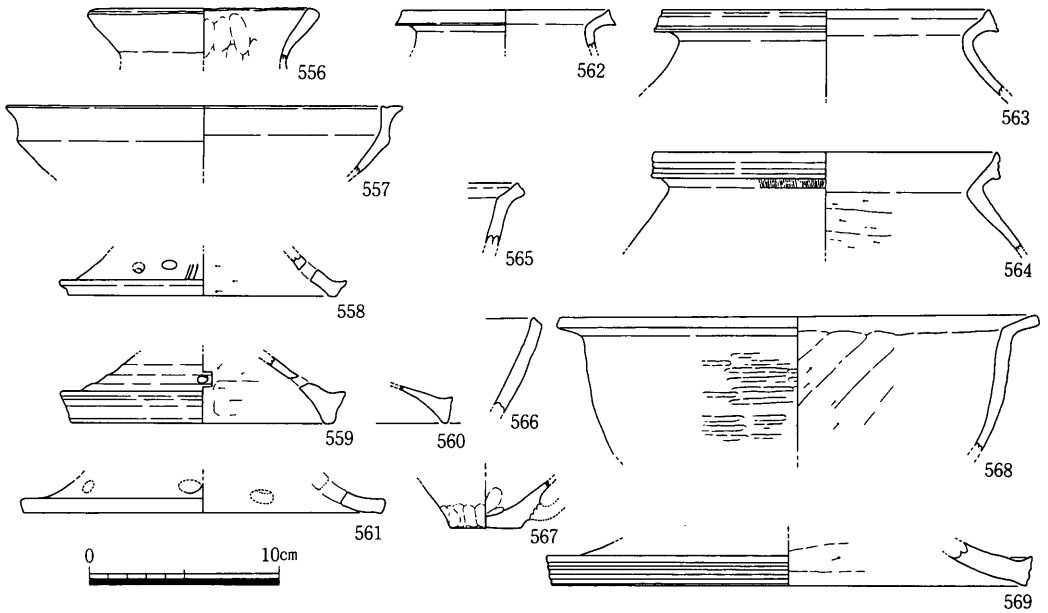
第219図　4区SD11平・断面図（1／400・1／40）

SD12（第221図）

B・C12区で，検出した長約2.5mの小規模な溝状遺構である。4区中央部の竪穴住居群・掘立柱建物群間に位置し，周囲には柱穴多数が分布する。断面形状はU字形に近く，幅0.4m，深さは約0.15mを測る。埋土は2層で褐灰色砂質土と黄褐色砂質土からなる。埋土から弥生後期の遺構と考えられるが遺物は出土していない。南北両端も比較的急な立ち上がりを示しており，むしろ長楕円形の土坑と見るべきかもしれない。

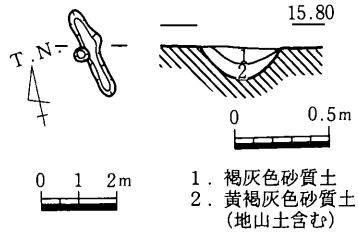
SD13（第222図）

B13区西端で検出した南北方向の小溝である。4区中央の竪穴住居群西側にあり，掘立柱建物SB05と重複する。延長4.5mを確認している。直線的に伸び北端は現行水路に切られる。断面皿形で，幅0.2m，深さ0.05mを測る小溝である。遺物は検出していない。

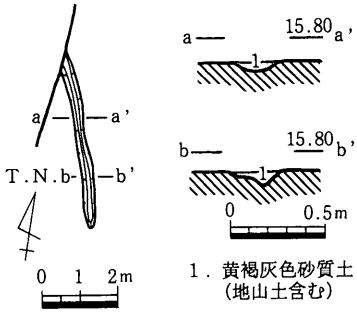


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
556	短頸壺	11.2			細・極多	明褐色	口縁部は短く開き端部は鈍く肥厚して丸く納める。内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等
557	高坏	20.8			細・極多	明赤褐色	中位で強く屈曲して上半部は短く直立する。端部は外方に摘み出し頂部に沈線２条。	1/16	角閃石極多、石英等多
558	脚			15.0	細・極多	赤褐色	脚裾部は強く開く。端部上端を強く摘み出す。内面横ｹｽﾞﾘ。２孔１対の中形円形透かしと３条１組の垂下沈線。	1/5	角閃石極多、石英等
559	脚			13.7	細・極多	明赤褐色	脚裾部は内湾気味によく開き、端部は肥厚しつつ下方に引き出し、上部もよく突出する。裾部・端面鈍い凹線、内面横ｹｽﾞﾘ。円形透かし	1/8	角閃石極多、石英等
560	脚				細・極多	明褐色	脚裾部は内湾気味に開き端部は肥厚しつつ下方に摘み出し、上方も突出する。内面横ｹｽﾞﾘ		角閃石極多
561	脚			18.8	細・極多	黄褐色	脚裾部は強く開き、端部は四角く納める。横ﾅﾃﾞ。中形円形透かし。	1/8	角閃石極多
562	甕	10.8			細・極多	明褐色	強く折り返して口縁部は短く開く。端部は小さく上下に摘む。	1/8	角閃石・石英等極多
563	甕	16.2			細・極多、中・少	橙色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚して上方に摘み出すと共に下方も張り出す。端面凹線。外面横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多、石英等・赤色粒少
564	甕	18.0			細・極多	赤褐色　黒褐色	強く折り返して口縁部は短く開く。端部は強くつまみ上げて下方も小さく突出直立する端面に櫛描沈線。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面肩上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、石英等・雲母多
565	鉢				細・極多	橙色	口縁部は短く折り返して端部は四角く納める。横ﾅﾃﾞ。内面縦ｹｽﾞﾘ後斜位のﾅﾃﾞ。		角閃石極多、赤色粒
566	鉢？				細・極多	橙色	やや内湾気味に開き、端部は上方に張り気味に四角く納める。		角閃石極多、石英等
567	把手付鉢			3.8	細・極多	明赤褐色	やや突出気味の底部で緑辺部指押さえ。縦位の環状把手剝落根	1/2	角閃石極多、石英等
568	鉢	25.0			細・極多	橙色　黒色	やや内湾気味に弱く開き、口縁部は強く折り返して開く。端部は肥厚気味に四角く納める。口縁部横ﾅﾃﾞ、体部外面叩き目残す。内面縦ｹｽﾞﾘ後斜位のﾅﾃﾞ。	1/10	角閃石極多、石英等
569	大形器台			24.8	細・極多	橙色	脚裾部は強く外反して開く。端部は上方に摘み出すと共に下方もやや張る。端面沈線３条。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/12	角閃石極多

第220図　４区ＳＤ11出土遺物（１／４）



第221図　4区ＳＤ12平・断面図（1／200・1／40）



第222図　4区ＳＤ13平・断面図（1／200・1／40）

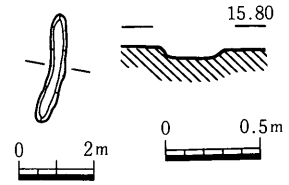
ＳＤ15（第223図）

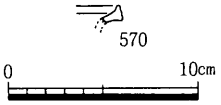
Ｂ14区東端で検出した小規模な南北溝。削平によって溝下部のみが南北に分断されて残存している。大形溝ＳＤ16の西岸にあってほぼこれと並行する。現状では幅0.3m，深さ0.1mで浅い皿状を呈する。

甕（570）は小片だが，口縁部を鈍く肥厚して上下に摘み出す形態を示す。後期初頭に位置付けられる。

ＳＤ16（第224～288図）

Ｂ・Ｃ15区で検出した2～4条の分岐・合流しつつ並走する大形南北溝群である。これらは互いに密接に関連し，後述するように少なくとも3回の改修を経て弥生時代後期初頭から古墳時代初頭にかけて機能した大形水路と考える。この点で，開削時期こそ及ばないものの1区ＳＤ01および付帯溝群と同様の性格を想定できる。



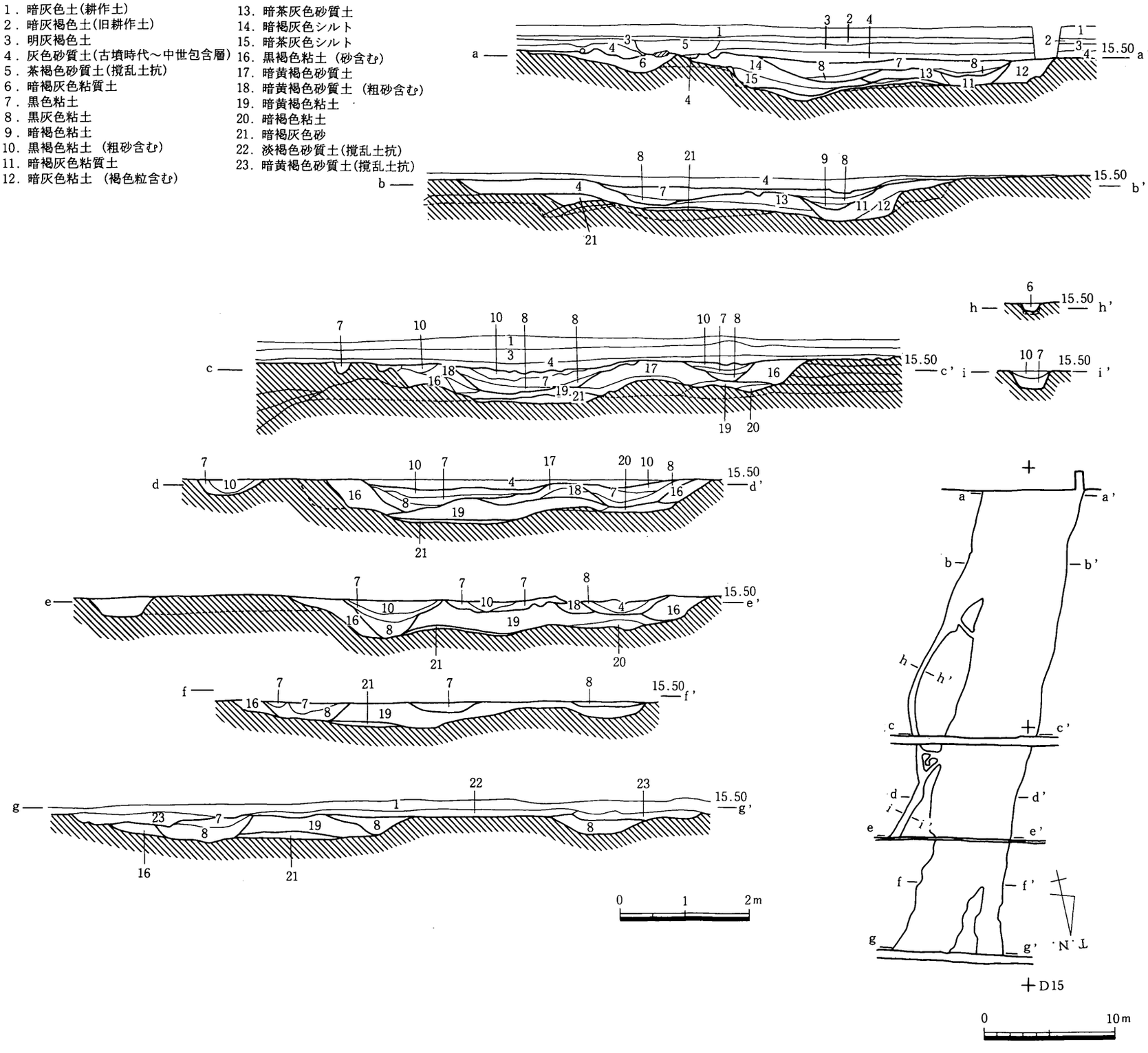


全体としては最大部分で幅7.7m，深さ0.7を測る。溝群の最終埋没面はゆるく窪み，その部分にはおおよそ平安期を下限とする灰白色包含層が薄く堆積する。またＣ区北半部は削平と後世の撹乱土坑群によって損なわれ残存状況は良好では

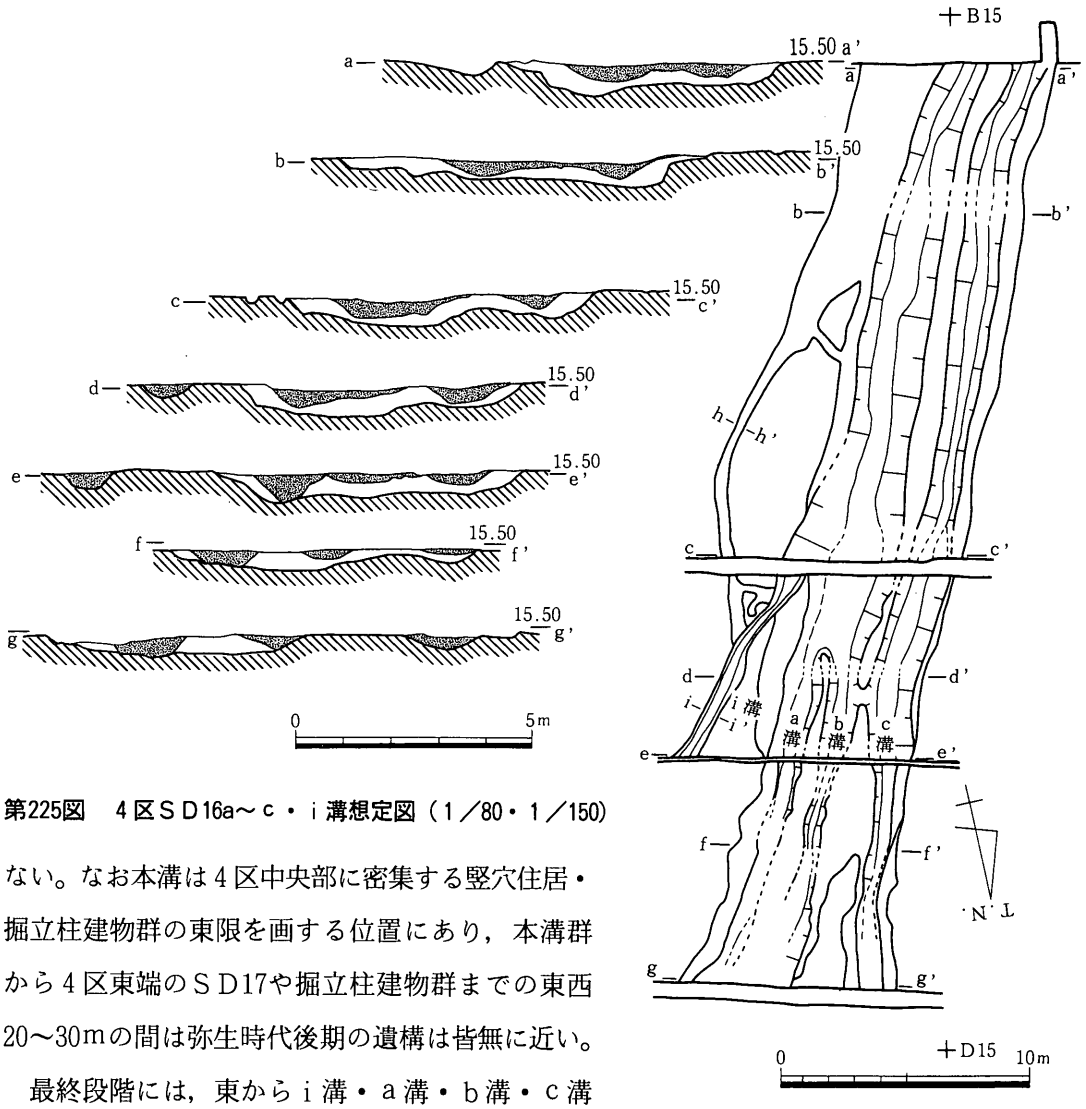
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
570	甕				細・極多	明黄褐色	強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上方に摘み出すと共に下方もやや張る。端面凹線。		角閃石極多

第223図　4区ＳＤ15平・断面図（1／200・1／40），出土遺物（1／4）

1．暗灰色土(耕作土)
2．暗灰褐色土(旧耕作土)
3．明灰褐色土
4．灰色砂質土(古墳時代～中世包含層)
5．茶褐色砂質土(撹乱土抗)
6．暗褐灰色粘質土
7．黒色粘土
8．黒灰色粘土
9．暗褐色粘土
10．黒褐色粘土 (粗砂含む)
11．暗褐灰色粘質土
12．暗灰色粘土 (褐色粒含む)
13．暗茶灰色砂質土
14．暗褐灰色シルト
15．暗茶灰色シルト
16．黒褐色粘土 (砂含む)
17．暗黄褐色砂質土
18．暗黄褐色砂質土 (粗砂含む)
19．暗黄褐色粘土
20．暗褐色粘土
21．暗褐灰色砂
22．淡褐色砂質土(撹乱土抗)
23．暗黄褐色砂質土(撹乱土抗)



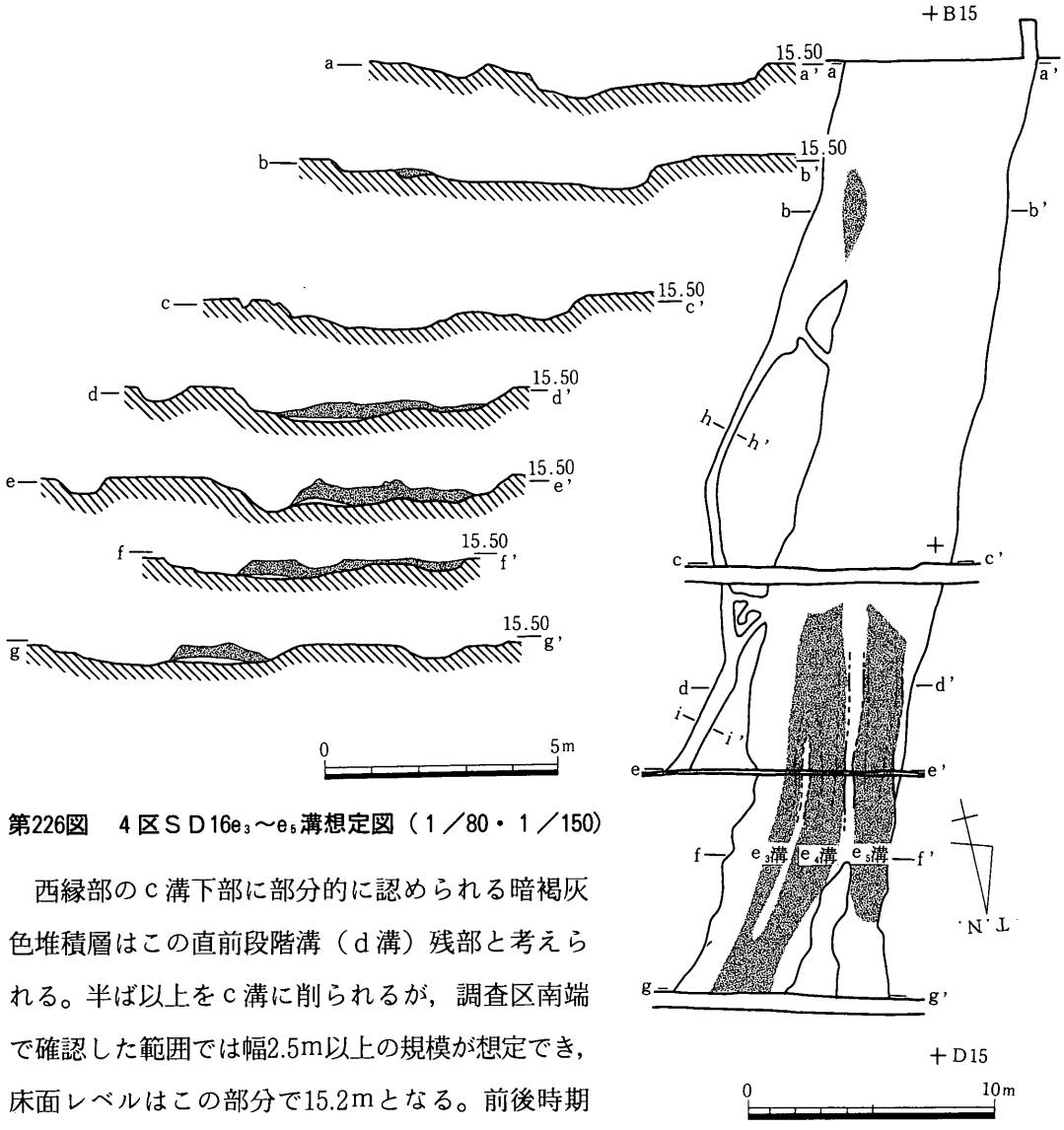
第224図　4区ＳＤ16平・断面図（1／400・1／40）



第225図　4区ＳＤ16a～ｃ・ｉ溝想定図（1／80・1／150）

ない。なお本溝は4区中央部に密集する竪穴住居・掘立柱建物群の東限を画する位置にあり，本溝群から4区東端のＳＤ17や掘立柱建物群までの東西20～30ｍの間は弥生時代後期の遺構は皆無に近い。

最終段階には，東からｉ溝・ａ溝・ｂ溝・ｃ溝の4条が併存する。断面形状は緩やかな「Ｖ」字形を呈する。ａ（幅0.75m，深さ0.25m）・ｂ（幅0.75m，深さ0.15m）溝は調査区北半部で分岐しつつ，ｃ（幅0.85m，深さ0.15m）溝と並行して北走する。またａ・ｂ溝とｃ溝の境は調査区南端で急激に緩やかになっており，調査区のすぐ南側でａ・ｂ溝とｃ溝も分岐したものと思われる。なおａ・ｂ・ｃ溝の床面レベルはわずかずつ違えており，ａ溝が最も低く，ｂ溝がこれに次ぐ。調査区中央でａ・ｂ溝から分岐するｉ溝（幅0.25m，深さ0.15m）は他3溝より小形で床面レベルも高く，東北方向に離れてゆく。これらの埋土は黒色～黒褐色粘土層で，下層とは明瞭に区別できる。なおａ・ｂ・ｃ溝からの遺物出土量は多くないが，ｉ溝ではややまとまった量の大形片を検出している。

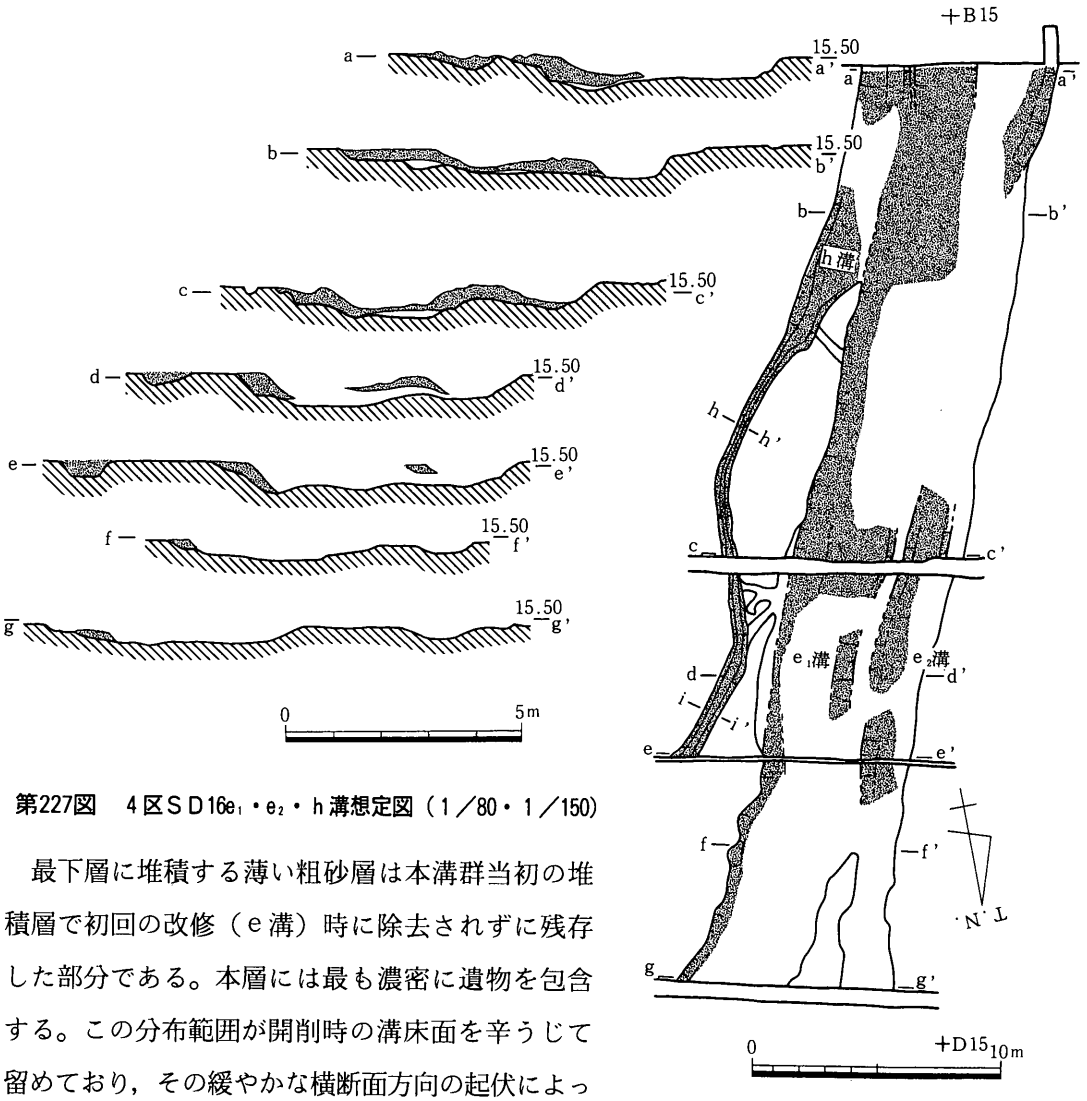


第226図　4区ＳＤ16e₃～e₅溝想定図（1／80・1／150）

西縁部のｃ溝下部に部分的に認められる暗褐灰色堆積層はこの直前段階溝（ｄ溝）残部と考えられる。半ば以上をｃ溝に削られるが，調査区南端で確認した範囲では幅2.5m以上の規模が想定でき，床面レベルはこの部分で15.2mとなる。前後時期の状況から想定して本溝も単独で存在したとは考えがたいが，最終段階溝によって破壊されて確認できない。

調査区南端と中央部で断片的に確認したに過ぎないが，これらの下部の堆積層から２ないし３条の溝群（ｅ溝）が確認できる。後出する諸溝と同程度の規模と床面のレベル差が想定できる。なお小規模なｈ溝は堆積状況からみてこの段階に伴う可能性が高く，最終段階ａ・ｂ・ｃ溝開削時に取水口を北に移動して先に見たｉ溝となったものであろう。

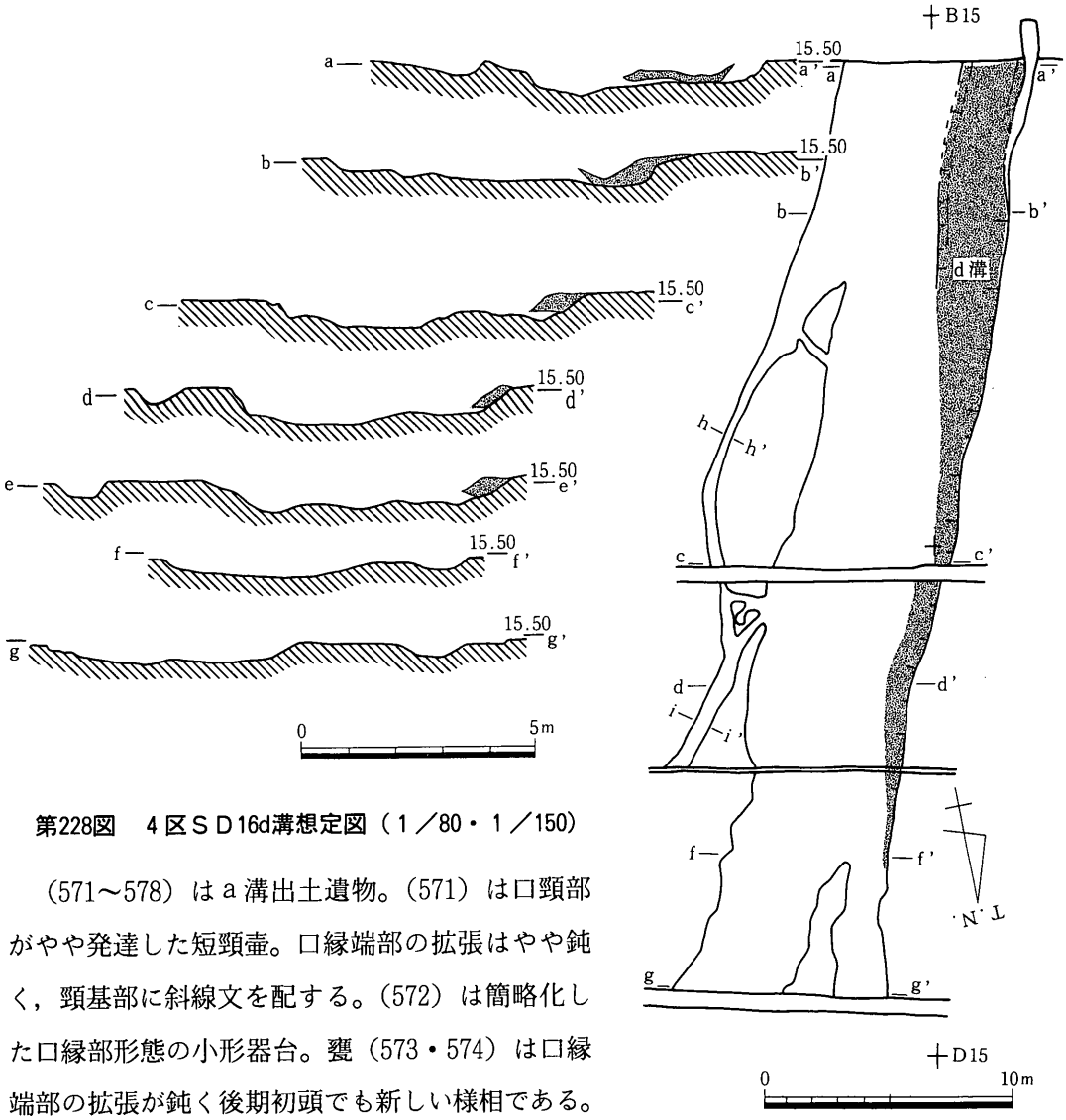
調査段階ではｄ・ｅ溝の遺物を必ずしも良好に分離できなかったが，ｄ溝の遺物量は少なく，ｅ溝北部でややまとまる傾向がある。



第227図　4区ＳＤ16e₁・e₂・ｈ溝想定図（1／80・1／150）

最下層に堆積する薄い粗砂層は本溝群当初の堆積層で初回の改修（ｅ溝）時に除去されずに残存した部分である。本層には最も濃密に遺物を包含する。この分布範囲が開削時の溝床面を辛うじて留めており，その緩やかな横断面方向の起伏によって本溝が開削当初から複条水路が並走・分岐する構造であったことが想定できる。

以上を整理すると，ｆ溝→ｅ・ｈ溝→ｄ溝→ａ・ｂ・ｃ・ｉ溝の４段階の変遷が想定できる。先行する諸段階の様相は断片的にしか知り得ないが，最終段階で示されるように大形水路が，下流に向かって徐々に分岐する構造を各段階に復元してよいであろう。分岐点で，井堰状の構造物は確認していないが，微妙な床面高低差を保持した水路の分岐は慎重な配水管理をも想定させる。

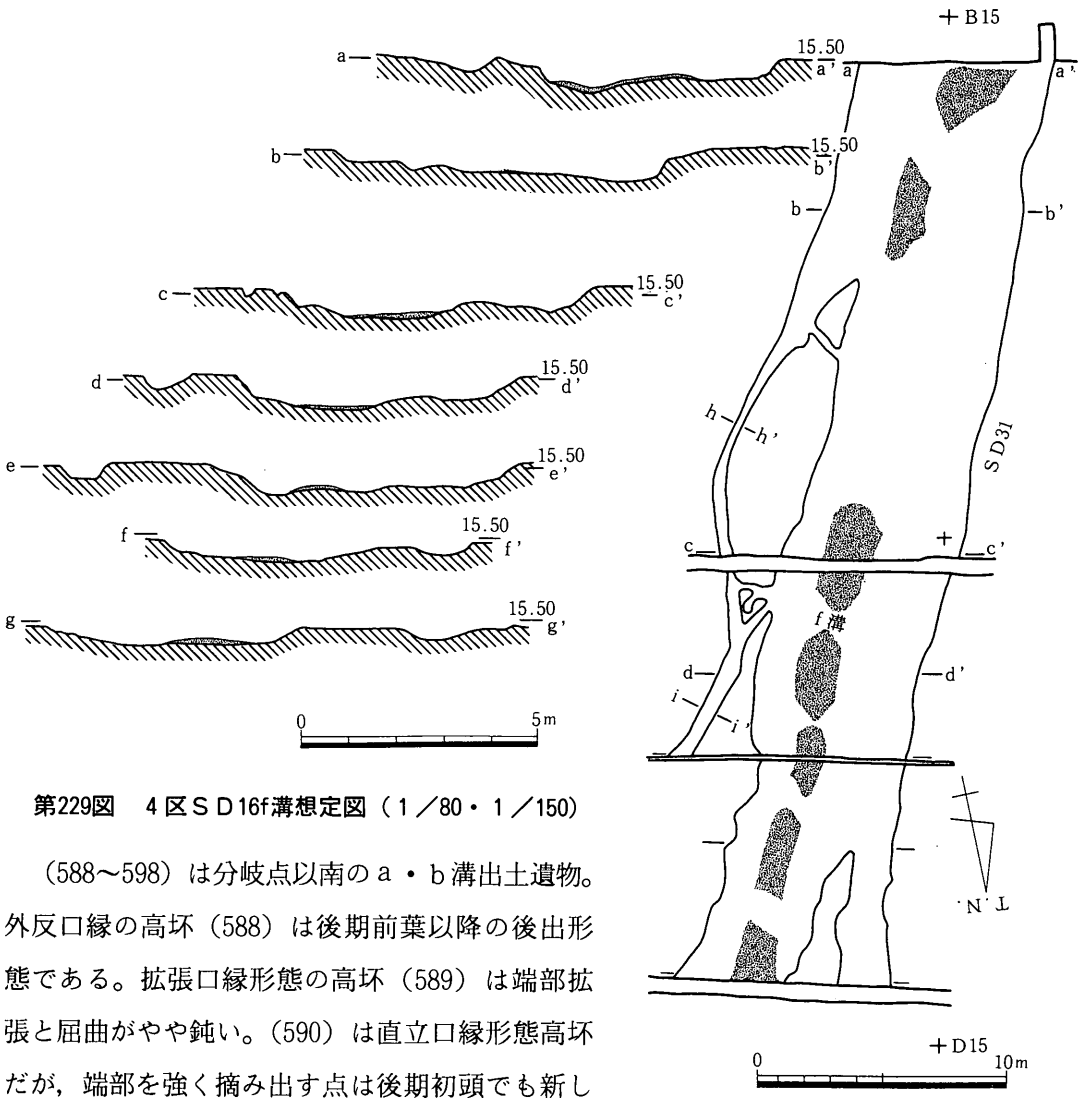


第228図　4区ＳＤ16d溝想定図（１／80・１／150）

（571～578）はａ溝出土遺物。（571）は口頸部がやや発達した短頸壷。口縁端部の拡張はやや鈍く，頸基部に斜線文を配する。（572）は簡略化した口縁部形態の小形器台。甕（573・574）は口縁端部の拡張が鈍く後期初頭でも新しい様相である。拡張口縁形態の高坏（575）は後期初頭の古い様相を保つ。（576）は大形鉢。外面はケズリ調整をとどめる。（577）は短い柱状軸部を持つ脚。裾部は短い。（578）は端部肥厚が弱く後期初頭でも新しい様相である。

（579～581）はｂ溝出土遺物。（579）は細頸壷体部で，最大径部に小突帯３条を付す。甕（580）は口縁端部を僅かに肥厚して上下に摘み出す。

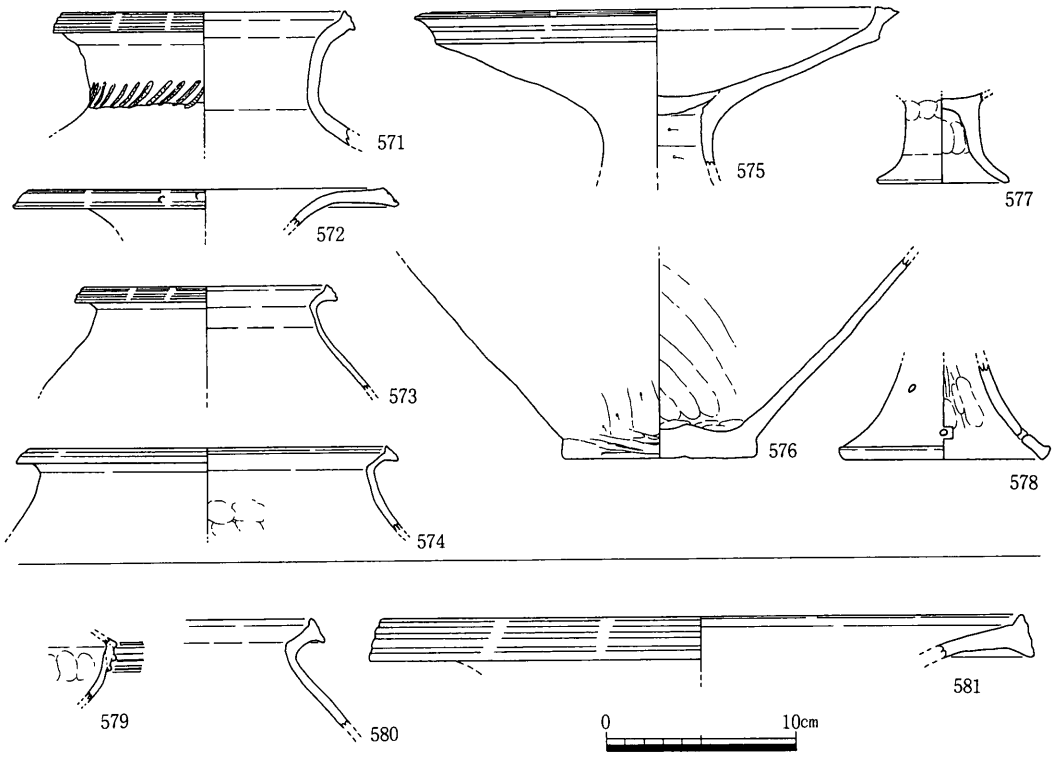
（582～587）はｃ溝出土遺物。後出形態の下川津Ｂ類甕（585）以外は後期初頭に属する。上半部が強く外傾し屈曲部がやや鈍くなった拡張口縁形態高坏（582）はその中でも新しい様相を示す。



第229図　4区ＳＤ16f溝想定図（1／80・1／150）

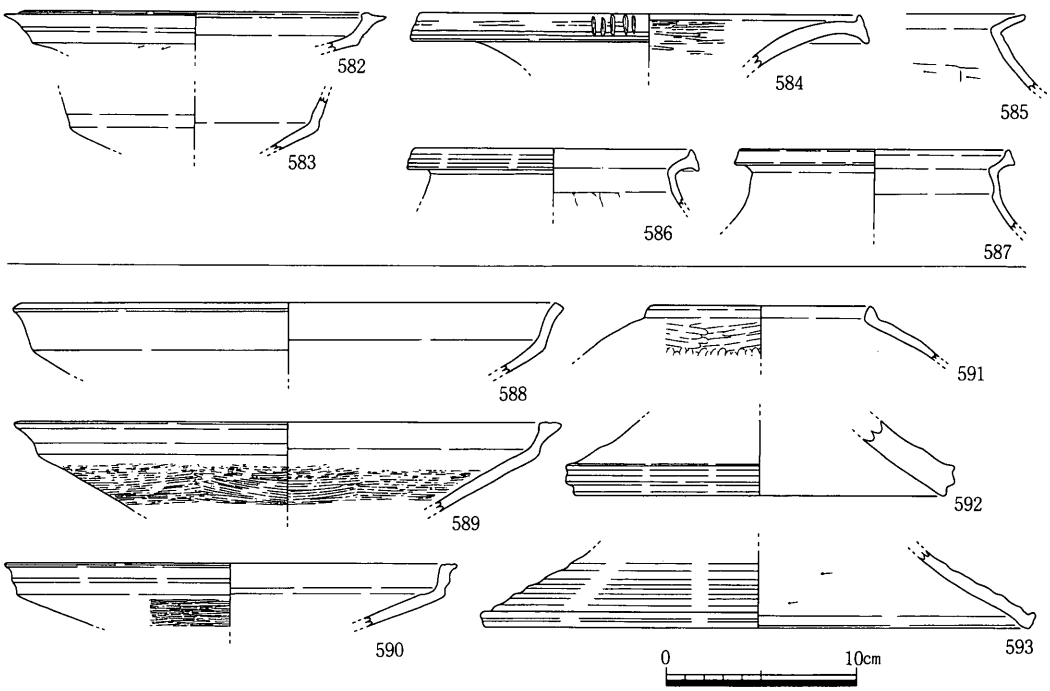
（588～598）は分岐点以南のａ・ｂ溝出土遺物。外反口縁の高坏（588）は後期前葉以降の後出形態である。拡張口縁形態の高坏（589）は端部拡張と屈曲がやや鈍い。（590）は直立口縁形態高坏だが，端部を強く摘み出す点は後期初頭でも新しい様相である。（591）は無頸壷。器台脚（592）は端部拡張が弱い。大形鉢（594）は中位で鈍く屈曲して上半部は僅かながら反り返る。後期中葉以降に盛興する下川津Ｂ類大形鉢の祖形となろう。甕（596・597）は口縁部がやや伸び，端部の拡張が鈍いことから後期初頭の新しい様相とみなしうる。底部（598）には焼成後の穿孔が認められる。このような例は本遺跡資料ではあまり多くない。

（599～606）は調査時に明確に分離し得なかったａ・ｂ・ｃ溝出土遺物。肥厚部が脱落している垂下口縁形態の広口壷（599）は口縁部の外反が発達しており，後期初頭のやや新しい様相である。（600）は中位の屈曲部が鍔状に強く突出した形態。小形の装飾高坏と考えるが，本地方では類例に乏しい。口縁部の折り返しが緩やかな「く」字口縁甕（601）



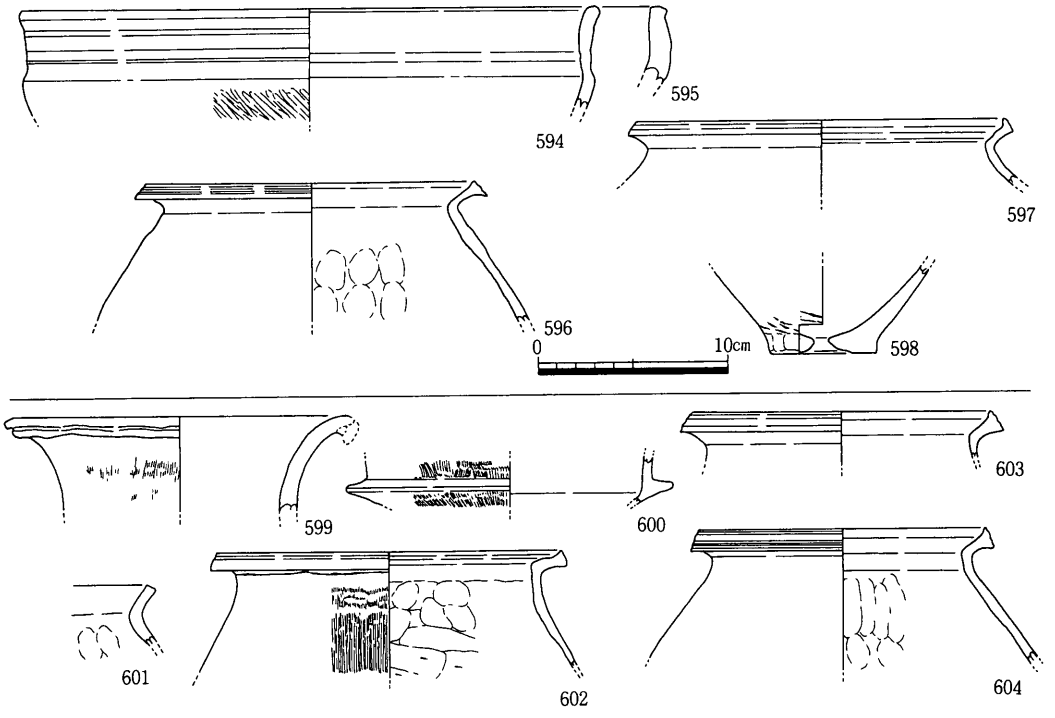
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
571	短頸壺	14.8			細・極多	浅黄色	やや外傾する頸部から緩く折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に摘み出して端面凹線。頸基部にﾊｹ原体刺突の斜線文。	1/4	角閃石極多、石英等
572	小形器台	18.6			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は下方に摘み出しつつ上部も張り出す。端面凹線・円形刺突文。	1/16	角閃石極多、雲母多
573	甕	12.7			細・極多	明赤褐色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強いﾖｺﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は肥厚しつつ上下に摘み出す。端面凹線。	1/8	角閃石極多
574	甕	18.8			細・極多	明黄褐色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は下方に摘み出しつつ上方も突出。端面鈍い凹線。内面指押さえ。	1/10	角閃石極多、雲母
575	高坏	23.0			細・極多	にぶい橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部外傾。端部は外方に摘み出しつつ内方も張り出す。頂部凹線。円盤充塡。脚部内面横ﾊｹﾒﾘ。	2/3	角閃石極多
576	大形鉢？			9.8	細・極多	明黄褐色	大形の突出底で体部はよく開く。底部縁辺に叩き目残る。体部外面縦ﾊｹﾒﾘ、内底面指押さえ、体部指ﾅﾃﾞ。	1/2	角閃石極多、雲母多
577	脚			6.6	細・極多	にぶい黄色	短い柱状軸部から折り返し裾部は短く開く。端部は丸く納める。内面横ﾅﾃﾞ。	1/2	角閃石極多、雲母多
578	脚			10.2	細・極多	明褐色	脚部は緩やかに外反して端部は鈍く肥厚しつつ四角く納める。円形透かし２段。	1/5	角閃石極多、雲母多
579	細頸壺				細・極多	明黄褐色	扁平な体部で強く張る最大径部に突帯３条。突帯間は強く横ﾅﾃﾞ。内面指押さえ顕著。		角閃石極多
580	甕				細・極多	にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強いﾖｺﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。		角閃石極多
581	大形器台	33.6			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反し大きく開く。端部は鈍く肥厚して上下に摘み出す。端面凹線。横ﾅﾃﾞ	1/16	角閃石極多

第230図　４区ＳＤ16a溝出土遺物・ｂ溝出土遺物（１／４）



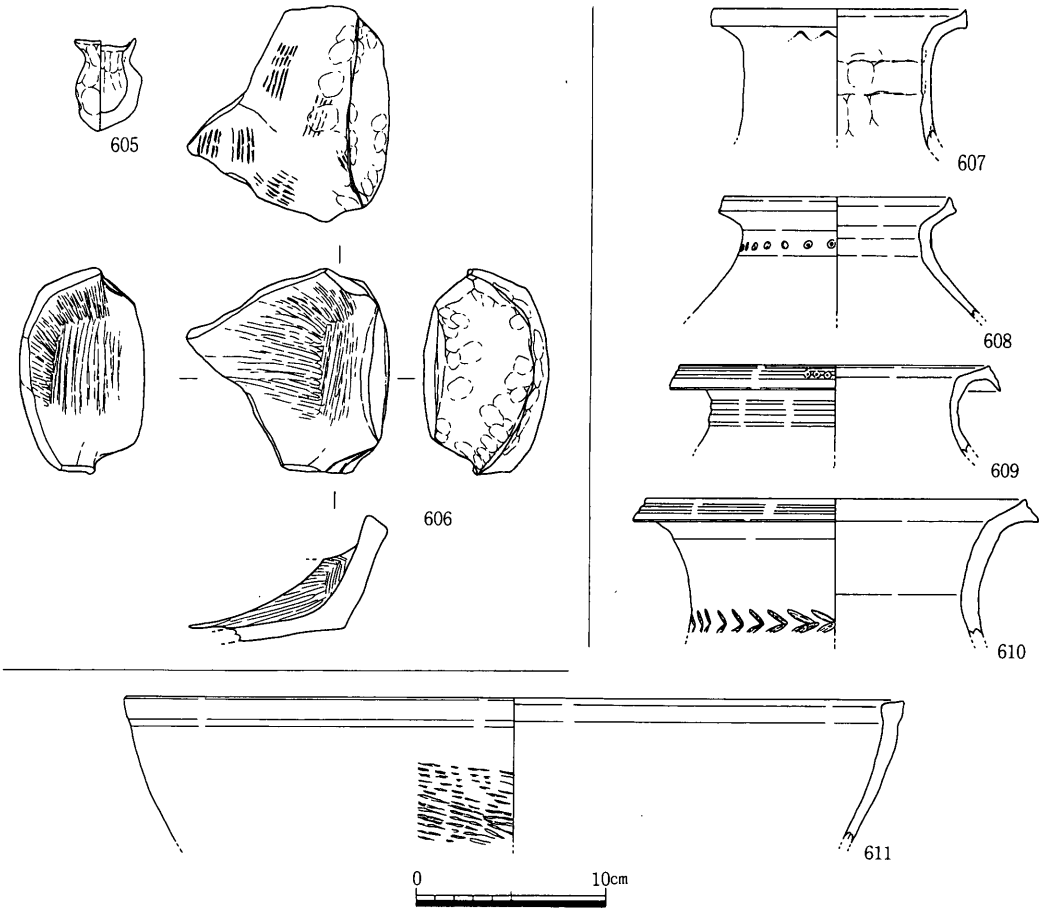
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
582	高坏	18.0			細・極多	黄褐色	中位で強く屈曲して強い稜。上半部外傾。端部は外方に摘み出しつつ内方も突出。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ。	1/10	角閃石極多、雲母多
583	高坏				細・極多	黄褐色	中位で強く屈曲して上半部外傾。屈曲部鈍い凹線。	1/12	角閃石極多
584	小形器台	23.0			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は下方に摘み出しつつ上方も強く突出。端面凹線・５条１対の短刻線。内面横ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多、雲母多
585	甕				細・極多	明褐色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返し短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は微かにつまみ上げる。内面肩部中位まで横ｹｽﾞﾘ。		角閃石極多、白色粒多　B類甕
586	甕	14.4			細・極多	明褐色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出して端面凹線。内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、雲母多
587	甕	14.0			細・極多	にぶい黄褐色	短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜・頸部内面凹面。端部は鈍く上方に摘み出し下方も張り出す。	1/12	角閃石極多
588	高坏	28.1			細・極多	明黄褐色	中位で強く屈曲して鈍い稜。上半部は短く外反し端部は外方に張り気味に四角く納める。	1/10	角閃石極多、雲母多
589	高坏	28.8			細・極多	灰黄色	中位で強く屈曲し鈍い段。上半部外傾。端部は外方に鈍く摘み出すと共に内方も張る。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多、雲母多
590	高坏	23.4			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して上半部は短くやや外傾。端部は小さく外方に摘み出す。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、雲母多
591	無頸壺	11.4			細・極多	灰黄色	強く張った体上端部を小さく折り返す。口縁端部は丸く納める。外面体上部横ﾐｶﾞｷ後以下縦ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多、雲母多
592	器台			19.6	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は強く開き、端部は四角く納める。端面凹線。横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多
593	器台			28.4	細・極多	明褐色	脚裾部は大きく開き、端部は小さく上方に突出。裾部外面凹線、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/12	角閃石極多、雲母多

第231図　４区ＳＤ16c溝出土遺物・ａｂ溝出土遺物１（１／４）



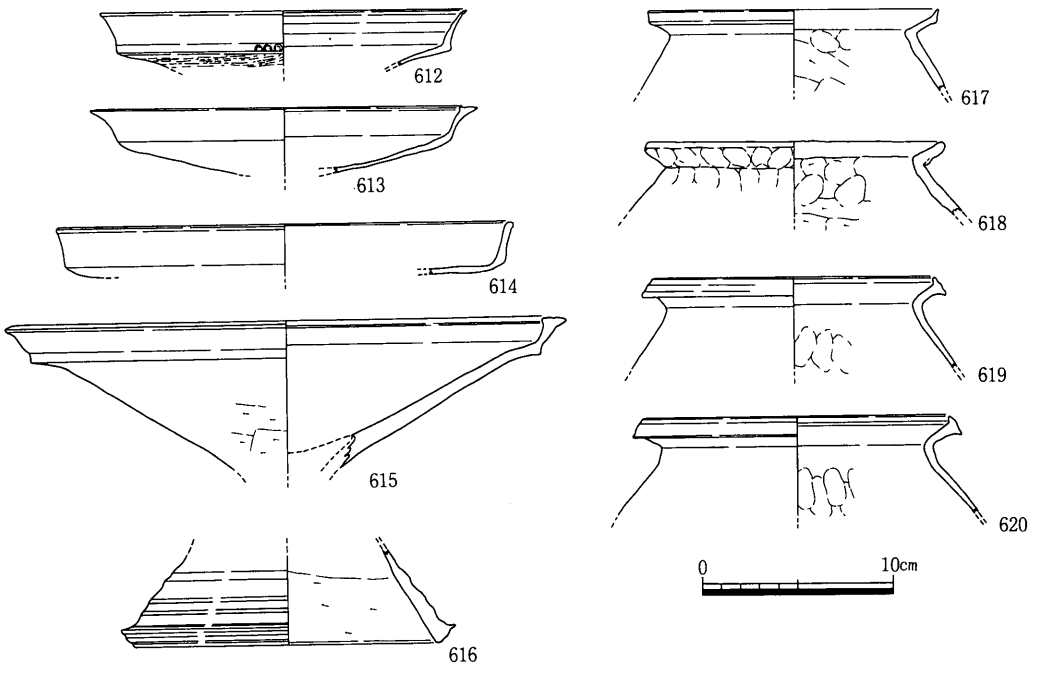
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
594	大形鉢	30.3			細・極多	にぶい黄色	緩く屈曲して鈍い段。口縁部は反り気味に立ち上がる。端部は鈍く肥厚し丸く納める。上半部横ﾅﾃﾞ外面凹線、下半部外面斜ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多、雲母多
595	大形鉢				細・極多	浅黄色	緩く屈曲し口縁部やや内傾して立ち上がる。端部は四角く納める。口縁部外面凹線３条。		角閃石極多
596	甕	17.2			細・極多	明赤褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は下方に摘み出しつつ上方も突出。端面凹線。肩部内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、雲母多
597	甕	19.2			細・極多	褐色	不明瞭な内傾する頸部から口縁部は強く折り返し短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は上方に摘み出しつつ下方も張り出す。	1/10	角閃石極多
598	？			5.7	細・極多、中・多	にぶい黄色	鈍い突出底で、体部は内湾気味に開く。外面下部に叩き目残る。底部中央に焼成後穿孔。	全周	角閃石極多、石英等多
599	広口壺	17.4			細・極多	暗褐色	口頸部は強く外反して開く。端部に貼付した粘土帯剝落。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。	1/7	角閃石極多
600	装飾高坏				細・極多	褐色	屈曲部は鍔状に強く突出して尖る。上半部直立。外面突出部横ﾅﾃﾞ、他縦ﾊｹ、内面横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多
601	甕				細・極多	にぶい褐色	口縁部は緩く折り返して短い。端部は下方に張り気味に四角く納める。		角閃石極多
602	甕	18.1			細・極多	黄褐色	短くやや内傾する頸部から口縁部は強く折り返し短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで屈曲部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚しつつ上下に張り出し、端面凹線。外面縦ﾊｹ、内面肩部下半まで横ｹｽﾞﾘ、上半部指押さえ。	1/10	角閃石極多
603	甕	15.6			細・極多	橙色	口縁部は強く折り返し短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで屈曲部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚して上下に摘み出し端面鈍い凹線。	1/5	角閃石極多
604	甕	15.0			細・極多	褐色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで屈曲部に鈍い稜・頸部凹面。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出し端面凹線。体部内面指押さえ。	1/4	角閃石極多

第232図　４区ＳＤ16ab溝出土遺物２・abc溝出土遺物１（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
605	ミニチュア土器	3.1	4.6		細・極多	明褐色	いわゆる手づくねのﾐﾆﾁｭｱ土器。摘み出して短い口頸部を作る。口縁部は整わず指押さえ顕著。	ほぼ完形	角閃石極多、石英等、雲母少
606	把手付広片口皿				細・極多、中・普	黄褐色	把手部。把手部は痕跡的に、立ち上がり部下端をわずかに張り出すのみ。台形状に低く突出した立ち上がり部は外傾して伸び、肥厚気味に四角く納める。外面把手部・立ち上がり部指押さえ。体部叩き目残る。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、体部縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、石英等、赤色粒、赤色顔料
607	広口壺	13.3			細・極多	灰黄色	直立する頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く摘み上げる。頸部上半に波状文の一部残存。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、雲母多
608	広口壺	11.8			細・極多	にぶい黄橙色	短い頸部から緩く折り返して口縁部は開く。端部は上方に摘み出して下方も張る。頸部円形刺突文。	1/3	角閃石極多
609	広口壺	16.2			細・極多	黄褐色	短い頸部から強く折り返し口縁部は短く水平に開く。端部は下方に大きく摘み出して上部も突出。端面凹線・３個１対の円形刺突文。頸部凹線。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多、雲母多
610	短頸壺	20.0			細・極多	にぶい橙色	やや外傾する頸部から緩やかに折り返して口縁部は短く開く。端部は外方に鈍く摘み出して端面凹線。頸基部に斜線文２段。	1/8	角閃石極多、石英等
611	大形鉢	40.7			細・極多	橙色	やや内湾気味に開き、口縁端部は鈍く肥厚して内方に張り出す。外面口縁部直下鈍い凹線１条。叩き目残る。	1/16	角閃石極多

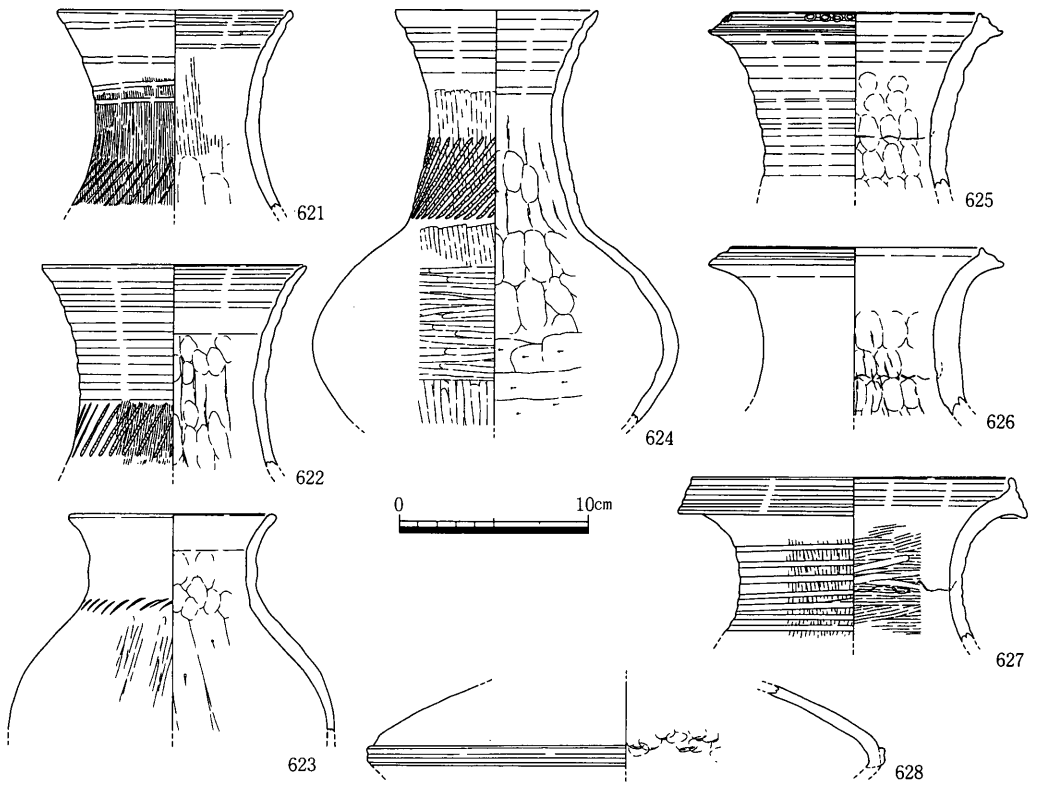
第233図　４区ＳＤ16abc溝出土遺物２・i溝出土遺物１（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
612	高坏	19.4			細・極多	黄褐色	中位で強く屈曲し鈍い段に3個1対の円形刺突文。上半部は短く外反して端部尖る。上半部横ﾅﾃﾞ、内面鈍い凹線、下半部外面横ﾐｶﾞｷ	1/8	角閃石極多、雲母多
613	高坏	20.4			細・極多	橙色	中位で強く屈曲。上半部は外傾。端部は外方に摘み出し内方も小さく突出。頂部凹線。	1/4	角閃石極多、雲母多
614	高坏	23.7			細・極多	にぶい橙色	浅い坏部。強く屈曲し上半部やや外傾。端部外方に張り気味に丸く納める。上半部横ﾅﾃﾞ	1/3	角閃石極多
615	高坏	29.6			細・極多	黄褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾。端部は外方に摘み出し内方も小さく突出。下半部外面横ｹｽﾞﾘ、他横ﾅﾃﾞ。	1/6	角閃石極多、雲母多
616	小形器台			16.2	細・極多	黄褐色	脚裾部を緩やかに開く。端部は鈍く肥厚しつつ上方に摘み出す。端面・裾部外面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、雲母多
617	甕	15.2			細・極多	明褐色	口縁部は強く折り返して開く。屈曲部に鈍い稜。端部は上方に薄く摘み出す。内面横ｹｽﾞﾘ後、体上端部指押さえ。	1/6	角閃石極多
618	甕	15.6			細・極多	明赤褐色	口縁部は強く折り返し開く。屈曲部鈍い稜。端部丸く納める。外面口縁部・体上端部指押さえ顕著、内面横ｹｽﾞﾘ後、体上端部指押さえ	1/5	角閃石極多
619	甕	14.6			細・極多	にぶい黄色	不明瞭な内傾する頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出し端面凹線。体部内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
620	甕	16.1			細・極多	にぶい黄色	不明瞭な内傾する頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出し端面凹線。体部内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、雲母多

第234図　4区ＳＤ16i溝出土遺物2（1／4）

は他の甕（602～604）と同様に後期初頭に位置づけられる。把手付広片口皿（606）は明瞭な把手部を持たず立ち上がり部の下半縁辺をわずかに張り出すにすぎない。



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
621	直口壺	12.0			細・極多	にぶい赤褐色	口頸部は外反気味に立ち上がり端部丸く納める。外面縦ﾊｹ後上位に凹線。基部に斜線文。口縁部内面凹線、頸部内面中位縦ﾊｹ、下位指押さえ。	全周	角閃石極多
622	直口壺	13.8			細・極多	黄褐色	口頸部は外反気味に立ち上がり端部尖る。外面縦ﾊｹ後中位以上凹線。基部ﾊｹ原体刺突の斜線文。口縁部内面凹線、頸部内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等多
623	直口壺	10.7			細・極多	褐色	張りの弱い体部で口頸部上半弱く開く。端部は丸く納める。頸基部に爪形状の斜線文。体部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面上端まで縦ｹｽﾞﾘ後頸部内面下半指押さえ。	3/4	角閃石極多、石英等多
624	直口壺	10.6			細・極多	浅黄色	やや扁平な強く張る体部。口頸部は反り気味に立ち上がり端部尖る。口縁部内外面凹線。頸部外面縦ﾊｹ後ﾊｹ原体刺突の斜線文。内面指押さえ。体部外面縦ﾊｹ後下半部縦ﾐｶﾞｷ、中位横ﾐｶﾞｷ、内面上半部指押さえ、中位横ｹｽﾞﾘ。	1/3	角閃石極多、雲母・石英等
625	直口壺	13.0			細・極多	明黄褐色	口頸部はやや外反して立ち上がり端部は鈍く肥厚しつつ内外に小さく摘み出す。端面凹線・4個1対の円形刺突文。外面凹線。口縁部内面凹線、頸部内面指押さえ。	2/5	角閃石極多、雲母・石英等
626	直口壺	13.2			細・極多、中・多	褐色	口頸部は上端で緩やかに外反する。端部は鈍く外方に摘み出すと共に上方も小さく突出。端面凹線。外面横ﾅﾃﾞ、内面指押さえで絞り目顕著。	1/2	角閃石極多、石英等多
627	広口壺	16.7			中・多	灰白色	やや外反気味に立ち上がる頸部から緩やかに折り返して口縁部は短く開く。端部は上方に摘み出すと共に下方も強く張り出す。端面凹線。頸部外面縦ﾊｹ後並行沈線、内面横ﾊｹ後部分的に横ﾐｶﾞｷ。	全周	石英等多、赤色粒搬入品
628	細頸壺				細・極多	にぶい黄橙色　黒褐色	強く張った扁平な体部。最大径部に幅広の低い突帯。頂部を強く横ﾅﾃﾞ。内面最大径部指押さえ顕著。上半部ﾅﾃﾞ。	1/10	角閃石極多　赤色顔料

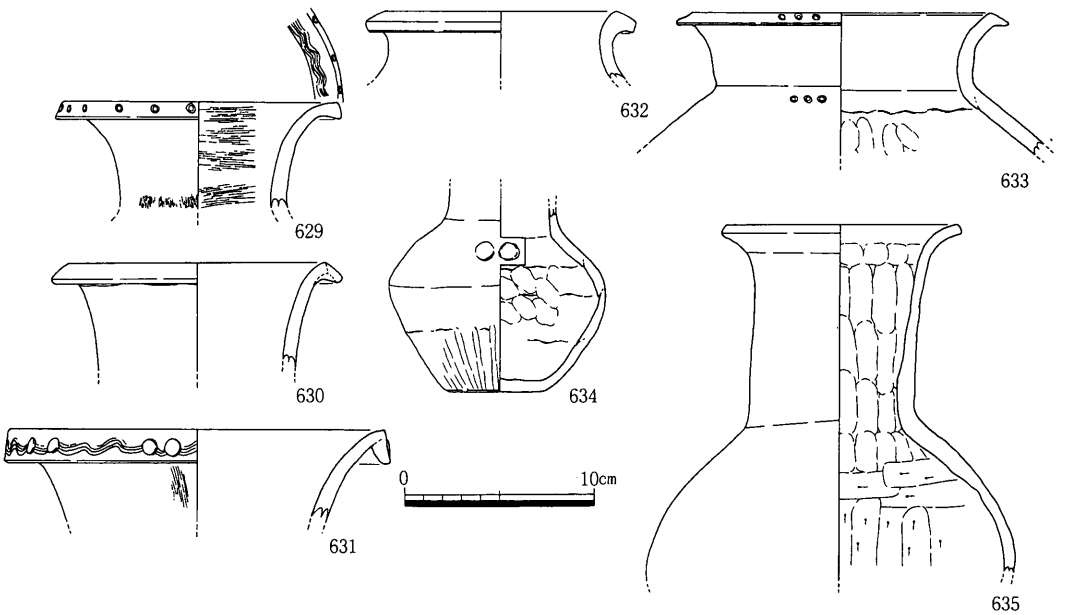
第235図　4区ＳＤ16d･e溝出土遺物１（１／４）

(607～620) はｉ溝出土遺物。広口壷 (607) は頸部が長く伸び口縁部がやや萎縮した形態。端部形態も退化している。前葉まで下る後出的な形態である。(608) は類例の乏しい形態だが，口縁端部の形状などから見て同様に後出するものであろう。広口壷 (609) は口縁端部を下方に引き延ばす。短頸壷 (610) はむしろ中期末までに盛興する形態で後期まで残存することはあまり多くない。大形鉢 (611) は口縁部を鈍く肥厚して納める形態で外面に叩き目を残す。(612) は後期初頭段階の外反口縁高坏である。拡張口縁高坏のうち (613) は後期初頭でも新しい様相である。甕 (617) は直上に薄く摘み上げて尖る口縁端部形態が特徴的で，内面ケズリも上端まで達している。一定量後期初頭に存在する系統の甕である。「く」字口縁甕 (618) は明らかに後出的な形態である。また甕 (619・620) は後期初頭に位置づけられるもののやや伸びた口縁部は新しい様相といえる。

以上示したように新段階のａ・ｂ・ｃ・ｉ溝では一定量の後期中葉以降の資料が認められることに注意したい。後期初頭段階の資料が明らかに過半以上を占めることは間違いないが，先行する溝を改修した本溝にその段階の遺物が混入することは当然である。また後期前葉以降隣接する集落が廃絶ないしは極端に縮小しているのでその時期以降の遺物量が少ないこともまた当然といえよう。むしろ少数ながらも確認できる後期中葉以降の資料が重要であり，それらが新段階溝群の時期を示すと考えられる。

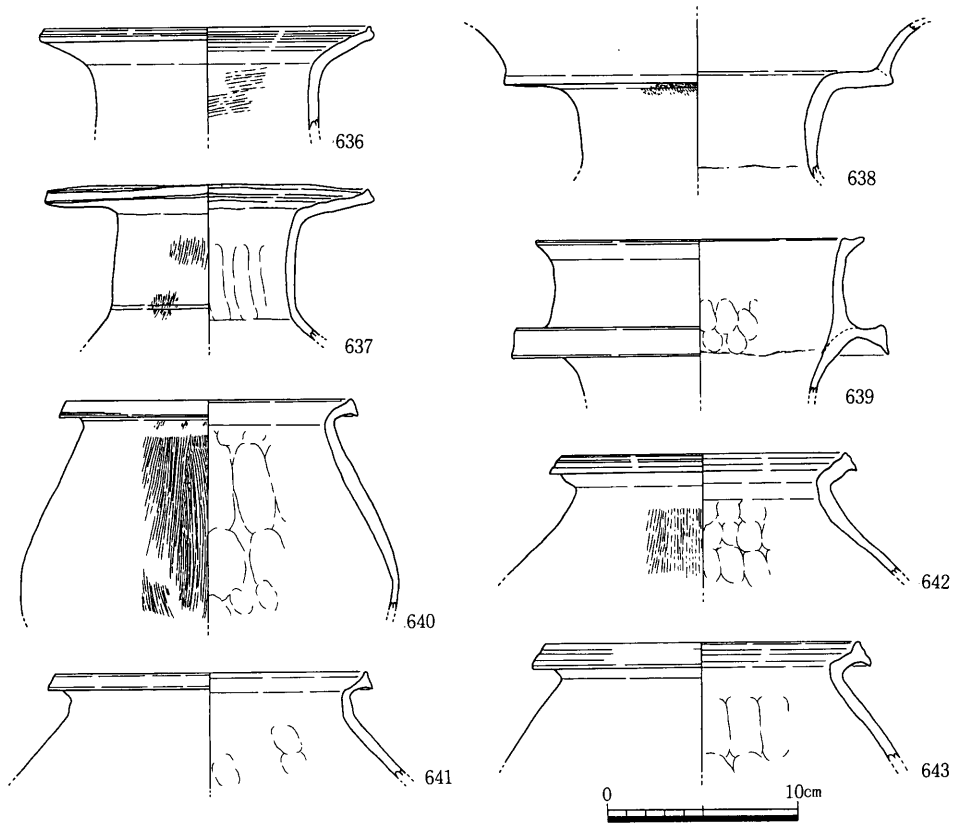
(621～703) はｄ・ｅ溝出土遺物。直口壷 (621・622・624) は口頸部の外反がやや強く頸下半部にハケ原体押圧の斜線文を配する。(623) はやや短頸形態だが外反が比較的強く，基部に爪形状の刺突文を配する。(625) は口縁端部を肥厚する形態の直口壷。端面に円形刺突文を有する。(626) は直口壷 (625) の後出形態であろうか。あまり見ないものである。(627) は外傾頸部形態の広口壷の新しい様相を示すものであろうか。頸部凹線は沈線文に転化している。搬入品である。(628) は細頸壷体部。やはり内面上半部には指押さえが顕著である。(629～633) は小形の垂下口縁形態広口壷。口縁部下端がやや開くものが多い。(633) はやや後出するかもしれない。(635) は明らかな後出形態であるが，せいぜい後期中葉までである。広口壷 (636・637) は強く屈曲して口縁部が大きく開く形態を持ち，頸部が再び短くなりつつある。後期中葉以降盛興する薄作りの広口壷の系統に属し後期後葉まで下り得る後出的な形態である。また立ち上がり部が強く外反する二重口縁壷 (638) はおそらく古墳時代初頭に下る資料であろう。(639) は広口壷と直口壷の口頸部形態を上下に組み合わせた複段口縁の壷。弥生中期後半の吉備地方の例を初源として，後期段階には讃岐地方でも散発的に認められるが決して一般的な形態ではない。下川津遺

跡や奥10号墓資料に，本例より後出する形態であるが類例がある。本例は上段の肥厚した口縁端部形態や下段の広口形態から，後期初頭に位置付けられるであろう。甕（640・641）は口縁部がやや伸びると共に端部の拡張が鈍化しており後期初頭でも新しい様相に属する。一方，甕（642～647）の発達した口縁端部形態等は後期初頭でも古い様相を示す。とくに大形甕（649）や甕（645）等の口縁部を肥厚することなく端部を大きく摘み出す形状は中期末段階に近い様相でさえある。「く」字口縁甕でも折り返しが緩やかで端部を鈍く肥厚する（648）は後期初頭に位置づけてよいだろう。しかし短い口縁部を強く外反させた(651



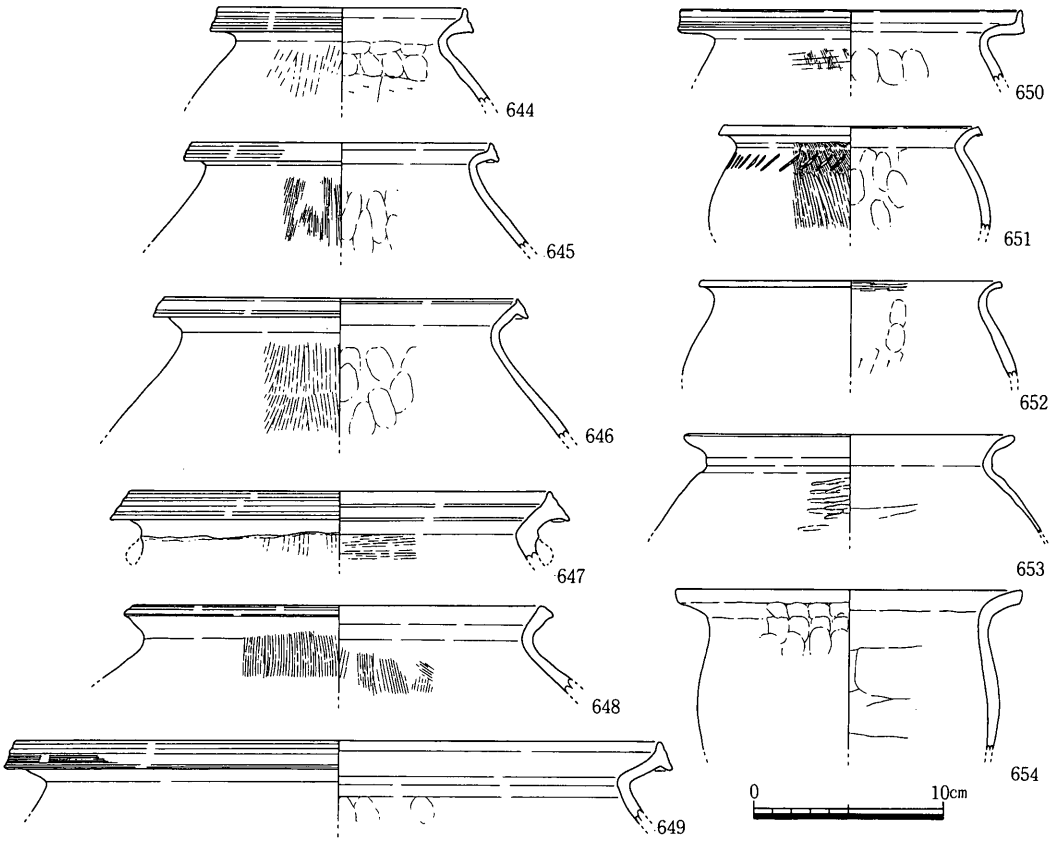
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
629	広口壺	14.3			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は緩やかに外反して短い。端部は鈍く下方に摘み出し端面円形刺突文、口縁部内面櫛描波状文。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面横ﾊｹ。	全周	角閃石極多
630	広口壺	13.4			中・多	灰白色	口頸部はやや外傾して立ち上がり、口縁端部は短く外方に折り返して丸く納める。	1/3	石英等多　搬入品
631	広口壺	19.8			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は粘土帯を付して垂下口縁。端面櫛描波状文・2個1対の円形浮文。外面縦ﾊｹ、内面横ﾅﾃﾞ。	1/2	角閃石極多、雲母・石英等
632	広口壺	13.9			細・極多	にぶい黄褐色	やや外反する短い口頸部で口縁端部は粘土帯を付して方形に強く肥厚する。横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、雲母多
633	広口壺	15.6			細・極多	にぶい黄褐色	緩やかに外反する口頸部は短い。端部は強く外方に摘み出す。端面・肩上端に3個1対の円形刺突文。体部内面指押さえ。	3/4	角閃石極多
634	広口壺			5.2	細・極多、中・普	明褐色	中位に最大径を持つ小形の体部。頸部直立。肩部2個1対の円形浮文。外面下半縦ﾐｶﾞｷ。内面指押さえ。	全周	角閃石極多、石英等・赤色粒
635	広口壺	12.1			細・極多、粗・多	橙色	よく張った体部で頸部はやや開き気味に立ち上がり、緩やかに折り返した口縁部は短い。端部四角く納める。頸部内面指押さえ。体部内面上端指押さえ後肩部横ｹｽﾞﾘ以下縦ｹｽﾞﾘ。	全周	角閃石極多、石英等多

第236図　4区ＳＤ16d・e溝出土遺物2（1／4）



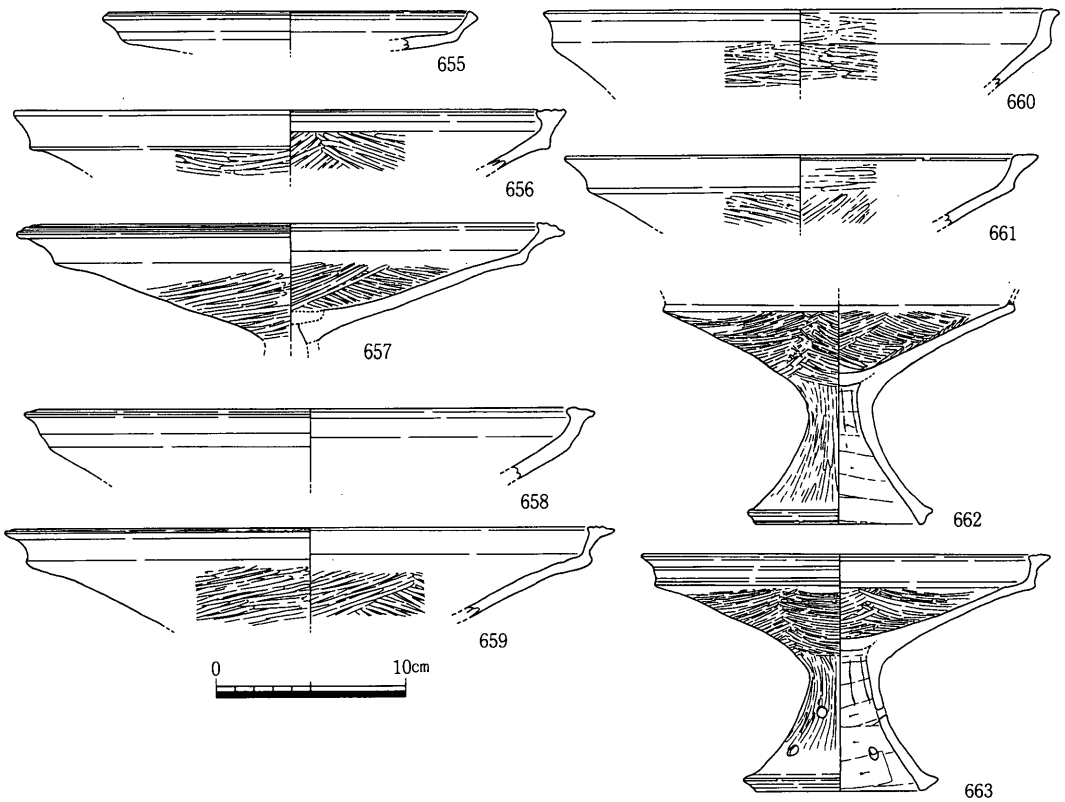
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
636	広口壺	17.0			細・極多	にぶい橙色	直立する頸部から強く折り返して口縁部は直線的に開く。端部は小さく摘み上げて口縁部内面凹線。頸部内面横ﾊｹ。	1/2	角閃石極多、石英等・雲母
637	広口壺	16.8			細・極多	にぶい橙色	直立する頸部から強く折り返し鈍い稜。口縁部は大きく開く。端部は小さく摘み上げる。口縁部内面凹線。頸部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	3/4	角閃石極多、石英等多　B類壺
638	二重口縁壺				細・極多	明黄褐色	二重口縁。短く直立する頸部から強く折り返して口縁部は短く水平に開く。立上り部は強く外反して開き下端に鈍い段。頸部外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。	全周	雲母極多、角閃石多　搬入品
639	複段口縁壺	17.0			細・少、中・多	にぶい橙色	複段口縁。外傾する頸部から強く折り返して下段の口縁部は水平に短く開く。端部は下方に摘み出すと共に上方も突出。上段口頸部は折り返し部から緩く反り気味に立ち上がり端部は外方に摘み出して頂部凹線。	1/5	石英等多、赤色粒・角閃石少　搬入品
640	甕	15.0			細・極多	黄褐色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返し短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に小さく摘み出して端面鈍い凹線。外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、雲母
641	甕	16.2			細・極多	明黄褐色	不明瞭な短く内傾する頸部から強く折り返し口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出し端面凹線。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜。内面指押さえ。	1/6	角閃石極多、雲母多
642	甕	14.8			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な短く内傾する頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に小さく摘み出し端面凹線。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部稜。外面縦ﾊｹ、内面指押さえ	1/4	角閃石極多
643	甕	16.4			細・極多	灰黄褐色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に摘み出し端面凹線。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜。外面横ﾅﾃﾞ、内面指押さえ。	1/4	角閃石極多

第237図　4区ＳＤ16d･e溝出土遺物３（１／４）



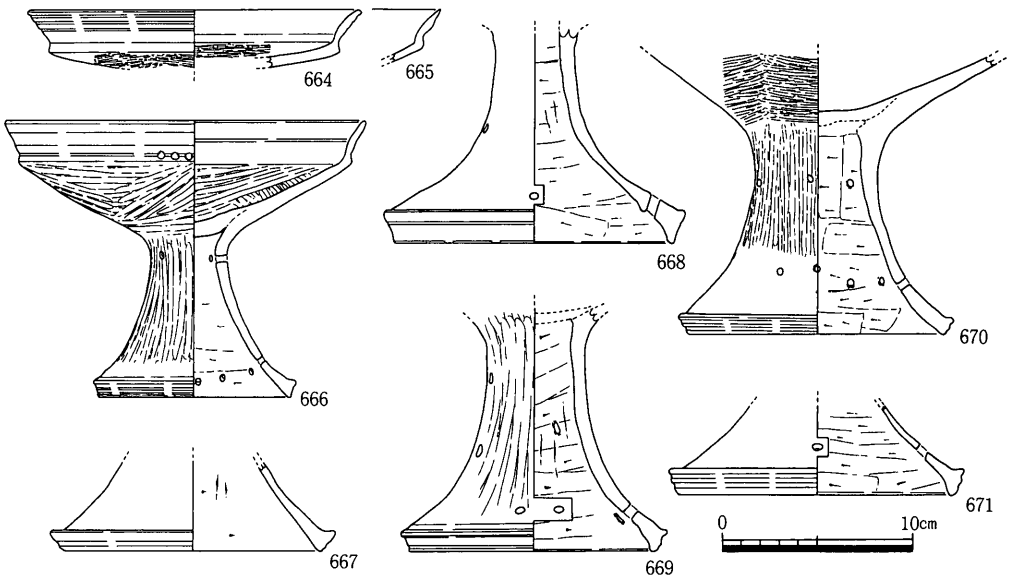
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
644	甕	12.8			細・極多	灰黄色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は肥厚しつつ上方に摘み出すと共に下方も張り出す。端面凹線。外面縦ﾊｹ、内面横ﾅｽﾞﾘ後体上端指押さえ。	1/4	角閃石極多
645	甕	15.7			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な短く内傾する頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に摘み出して端面凹線。外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
646	甕	18.5			細・極多	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	痕跡的な頸部から折り返し口縁部は短く開く。端部は下方に摘み出すと共に上方も突出。端面鈍い凹線。外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/8	角閃石極多
647	甕	22.0			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部強く折り返し短い。端部は鈍く肥厚し上下に摘み出す。体部外面縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ。	1/8	角閃石極多
648	甕	21.2			細・極多	にぶい黄褐色	口縁部は緩やかに折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚して下方に張る。縦ﾊｹ	1/8	角閃石極多
649	大形甕	27.6			細・普、粗・普	浅黄色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に強く摘み出し端面凹線。	1/8	石英等・角閃石　搬入品？
650	甕	18.0			細・極多、中・多	にぶい橙色	二重口縁。口縁部強く折り返し水平に開く。短い立上り部の上端は丸く納め、端面凹線。体部外面縦ﾊｹで叩き目残る。内面指押さえ。	1/5	角閃石極多、石英等多
651	甕	13.3			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返し短く開く。端部は下方に小さく摘み気味に四角く納める。外面縦ﾊｹ後縦ﾐｶﾞｷ、体上端に斜線文。内面指押さえ。	1/8	角閃石極多
652	甕	15.6			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して短く外反。端部は下方に張り気味に四角く納める。口縁部内面横ﾊｹ、体部内面縦ｹｽﾞﾘ。	1/10	角閃石極多
653	甕	17.0			細・極多	黄褐色	口縁部強く外反して短く開く。端部肥厚気味に丸く納める。外面叩き目残る。内面横ﾅﾃﾞ	1/10	角閃石極多
654	甕	18.0			細・極多	明赤褐色	張りの弱い体部から口縁部は強く折り返して開く。端部は四角く納める。外面口縁部直下指押さえ顕著、内面横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多

第238図　４区ＳＤ16d･e溝出土遺物４（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
655	高坏	19.0			細・極多	明赤褐色　黒色	中位で強く屈曲して上半部は外傾。端部は内外に張り出す。上半部横ﾅﾃﾞ	1/12	角閃石極多、石英等
656	高坏	28.8			細・極多	灰黄褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部はやや外傾して端部は内方に摘み出すと共に外方も張り出す。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多
657	高坏	26.0			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾。端部は外方に摘み出し内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。円盤充塡	1/8	角閃石極多、雲母・石英等
658	高坏	28.0			細・極多	浅黄色	中位で緩く屈曲して上半部は外傾。端部は内外に摘み出す。	1/8	角閃石極多
659	高坏	32.0			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部やや外傾。端部は外方に摘み出すと共に内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｸｽﾞﾘ後横ﾐｶﾞｷ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多
660	高坏	26.4			細・極多	にぶい黄色	中位で強く屈曲し上半部やや外傾。端部は外方に小さく摘み出す。上半部外面横ﾅﾃﾞ、他横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、雲母
661	高坏	24.5			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は強く外傾し端部外方に摘み出す。上半部外面横ﾅﾃﾞ、内面横ﾐｶﾞｷ、下半部外面横ｸｽﾞﾘ後横ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多
662	脚			8.6	細・極多	灰黄色	中位で強く屈曲して鈍い段、下半部は分割横ﾐｶﾞｷ。円盤充塡。脚裾部は緩やかに開き、端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上部も外方に小さく突出。端面凹線。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｸｽﾞﾘ。	1/5	角閃石極多
663	高坏	21.3	12.4	8.6	細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は短く直立。端部は外方に摘み出し内方も張る。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。円盤充塡。脚部は緩やかに開き端部は鈍く肥厚しつつ外方に鈍く摘む。端面凹線。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｸｽﾞﾘ。円形透かし２段。	全周	角閃石極多

第239図　４区ＳＤ16d･e溝出土遺物５（１／４）

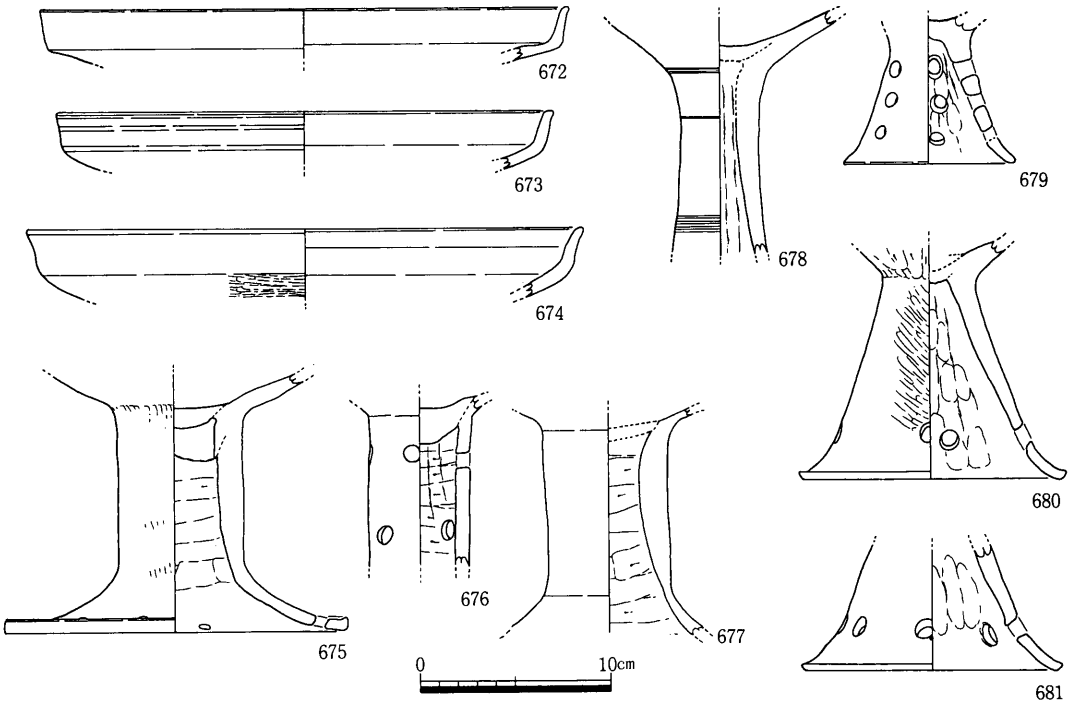


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
664	高坏	17.2			細・極多	褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は反り気味に短く開く。端部は丸く納める。上半部横ﾅﾃﾞ、外面凹線、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多
665	高坏				細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は短く外反して端部は尖る。上半部外面凹線。外面下半部横ｸｽﾞﾘ。		角閃石極多、石英等・雲母
666	高坏	18.9	14.2	10.0	細・極多	にぶい橙色	中位で強く屈曲し鈍い段に３個１対の円形刺突文。上半部外反。端部は尖る。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。円盤充填。脚裾部は緩やかに開き、端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上方も小さく突出。端面凹線。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｸｽﾞﾘ。円形透かし２段で、下段は２孔１対。	全周	角閃石極多
667	脚			13.2	中・普	黄橙色	脚裾部は緩やかに開き端部は鈍く肥厚しつつ上方に摘み出す。端面凹線。内面横ｸｽﾞﾘ。	1/4	赤色粒・石英等　搬入品
668	脚			14.6	細・極多、中・普、粗・少	灰黄色	脚裾部は外反して開き端部は肥厚して下方に摘み出す。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｸｽﾞﾘ。円形透かし２段。	2/5	角閃石極多
669	脚			12.9	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩やかに開き、端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出して上部も突出。端面凹線。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｸｽﾞﾘ。円形透かし３段、下段は２孔１対。	全周	角閃石極多
670	脚			13.3	細・極多、中・多	にぶい黄橙色	脚裾部は外反して開き端部は鈍く肥厚して上方に小さく突出。端面凹線。脚部外面上部縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｸｽﾞﾘ。坏部外面分割横ﾐｶﾞｷ。円形透かし２段、下段は２孔１対。	ほぼ全周	角閃石極多、石英等多
671	脚			14.1	細・極多	浅黄色	脚裾部は外反して開き端部は肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上方も突出。端面凹線。内面横ｸｽﾞﾘ。円形透かし２段。	1/4	角閃石極多

第240図　４区ＳＤ16d･e溝出土遺物６（１／４）

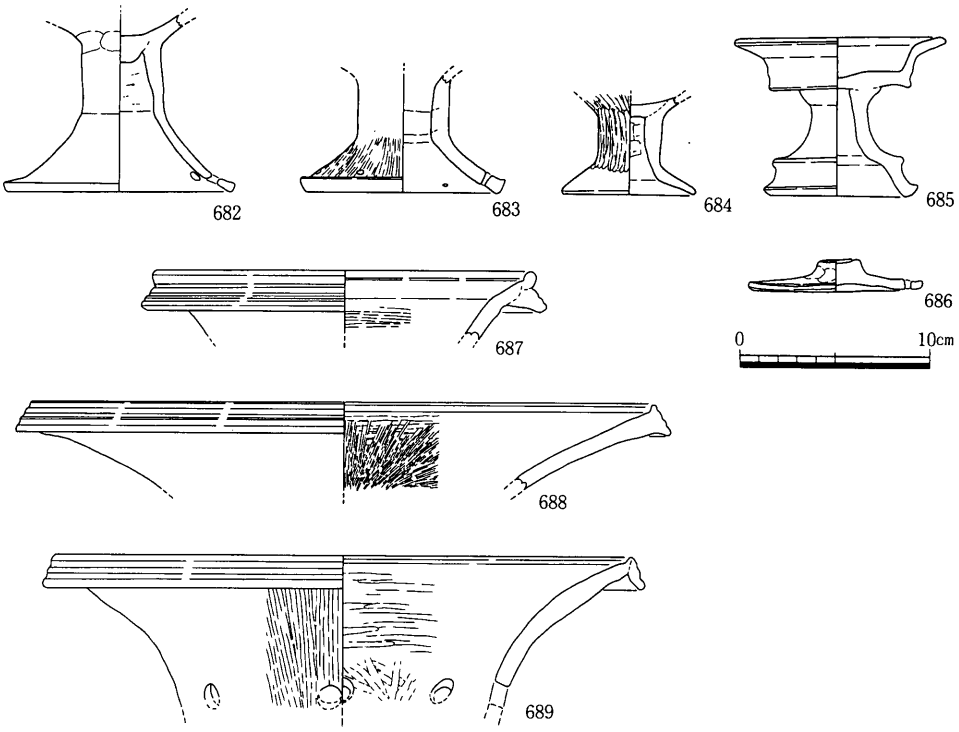
～654）は後出形態である。肩上部に刺突文を配する（651）は丸みを帯びるものの張りの弱い体部形状や肩部まで達する外面縦ミガキの点もあわせて一般的なものではない。（650）は明瞭な受口状口縁をもつ形態。この系統によく見るように外面に叩き目を残し，内面調整はケズリを欠く。

拡張口縁形態の高坏（655～663）では坏上半部が強く外傾して中位の屈曲がやや鈍いどちらかといえば後期初頭でもやや新しい様相を備えたものが多いが，何れも坏部調整は内外面分割横ミガキを原則とする。（666）はこの種の外反口縁高坏の脚部が，拡張口縁のそれと同様の形態を持つこと示す。拡張口縁および後期初頭段階の外反口縁形態坏部に対応



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
672	高坏	27.8			細・極多	褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部はやや外傾して端部は丸く納める。横ﾅﾃﾞ	1/14	角閃石極多、石英等
673	高坏	25.7			細・極多	灰黄色	中位で屈曲して上半部はやや外傾。端部は丸く納める。上半部外面鈍い凹線。横ﾅﾃﾞ	1/12	角閃石極多
674	高坏	29.2			細・極多	にぶい黄橙色	緩やかに屈曲して上半部はやや反る。端部は丸く納める。下半部外面横ﾐｶﾞｷ。他横ﾅﾃﾞ。	1/12	角閃石極多、赤色粒・雲母
675	脚			17.8	細・極多	にぶい橙色	柱状の軸部から折り返して口縁部はやや反り気味に強く開く。端部は小さく摘み上げる。軸部外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。内面横ﾅﾃﾞ。裾部２孔１対の円形透かし。円盤充填。	1/3	角閃石極多
676	脚				細・極多、中・普	灰黄色	柱状の軸部。中形円形透かし４方２段。内面横ｹｽﾞﾘ、円盤充填	全周	角閃石極多、赤色粒
677	脚？				細・極多	灰黄色	柱状軸部から緩く折り返し裾部は短く開く。内面横ｹｽﾞﾘ。頂部に円盤充填剝落痕有るが支脚の可能性も	全周	角閃石極多
678	脚				中・多、粗・少	橙色	強く絞り込んだ細身の軸部。櫛描並行沈線。円盤充填	全周	石英等多、赤色粒搬入品
679	脚			8.6	細・極多、中・普	褐色	脚部は緩く開き端部は小さく反り尖る。内面指押さえ。３段に配した中形円形透かし４方	1/8	角閃石極多、石英等
680	脚			13.2	細・極多	浅黄色	脚部は緩く開き端部は小さく反って丸く納める。外面ﾐｶﾞｷ、内面指押さえ。中形円形透かし。円盤充填。	1/2	角閃石極多、雲母・赤色粒
681	脚			13.0	細・極多	浅黄色	脚部は緩く開き端部は小さく反って尖る。中形円形透かし。	1/2	角閃石極多、雲母多

第241図　４区ＳＤ16d･e溝出土遺物７（１／４）

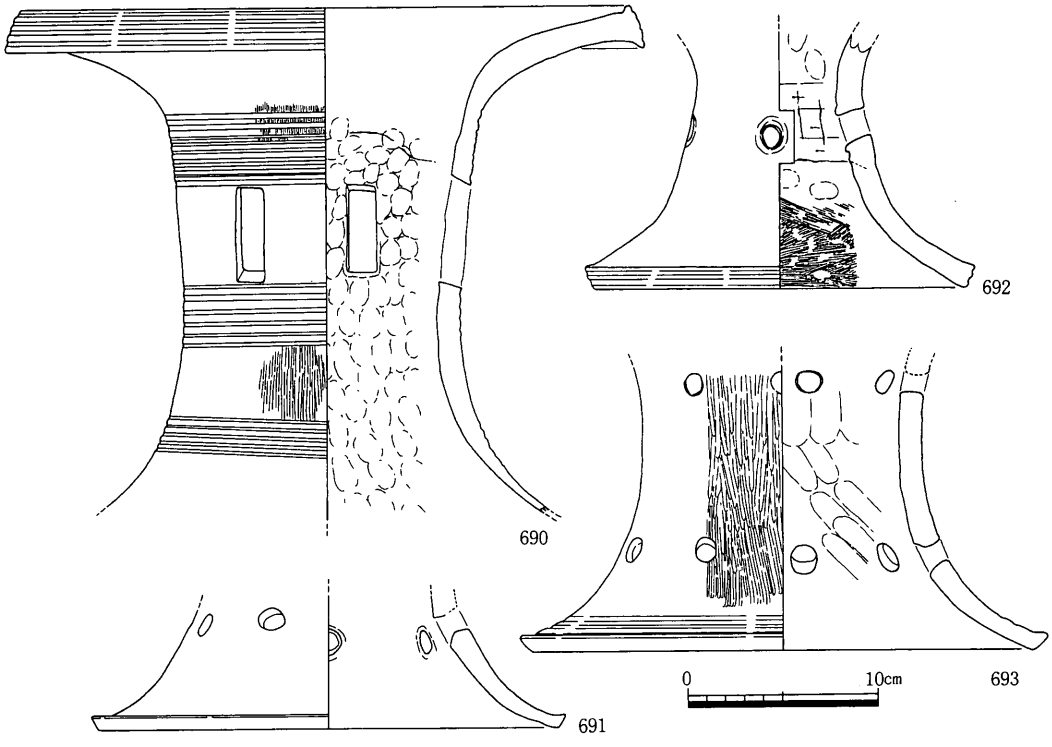


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
682	脚			11.7	細・極多	褐色	短い柱状軸部から緩く折り返し裾部は短く開く。端部は四角く納める。軸部内面横ケズリ。円盤充塡	1/6	角閃石極多、石英等多
683	脚			10.2	細・極多、中・普	灰黄色	短い柱状軸部から強く折り返し裾部は短く開く。端部は小さく摘み上がる。裾部外面縦ミガキ、他横ナデ。裾部円形透かし	1/2	角閃石極多、石英等
684	脚			6.8	細・極多	褐灰色	短い柱状軸部から強く折り返して裾部は内湾気味に短く開く。端部は丸く納める。軸部外面縦ミガキ、内面横ケズリ、裾部横ナデ。円盤充塡	1/3	角閃石極多
685	装飾高坏	11.1	8.0	7.0	細・極多	灰黄色	水平に開く坏下半部から強く屈曲してやや湾り出す。上半部は中位で折り返し口縁部は強く開く。端部丸く納める。脚裾部有段、屈曲鈍く突出。端部は小さく反って丸く納める。	全周	角閃石極多
686	蓋	2.2	2.7	9.0	細・極多	橙色	円盤状を呈し中心部が鈕状に突出。端部は上方に張り気味に四角く納める。縁辺の相対する位置に2孔1対の紐通孔	完形	角閃石極多
687	器台？	19.6			細・極多	にぶい褐色	口縁端部は強く外方に摘み出すと共に上方も突出。端面沈線。内面横ハケ後横ナデ。	1/6	角閃石極多　赤色顔料
688	大形器台	32.6			細・極多	にぶい黄褐色	口縁部は外反して大きく開き端部は上下に摘み出す。端面凹線。外面横ナデ、内面縦ハケ。	1/8	角閃石極多
689	大形器台	30.2			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は外反して開き、端部は粘土帯を付して板状垂下口縁。端面凹線。外面縦ハケ、口縁部内面横ミガキ。中位のミガキは不定方向。中位に大形円形透かし。	1/5	角閃石極多

第242図　4区ＳＤ16d･e溝出土遺物８（１／４）

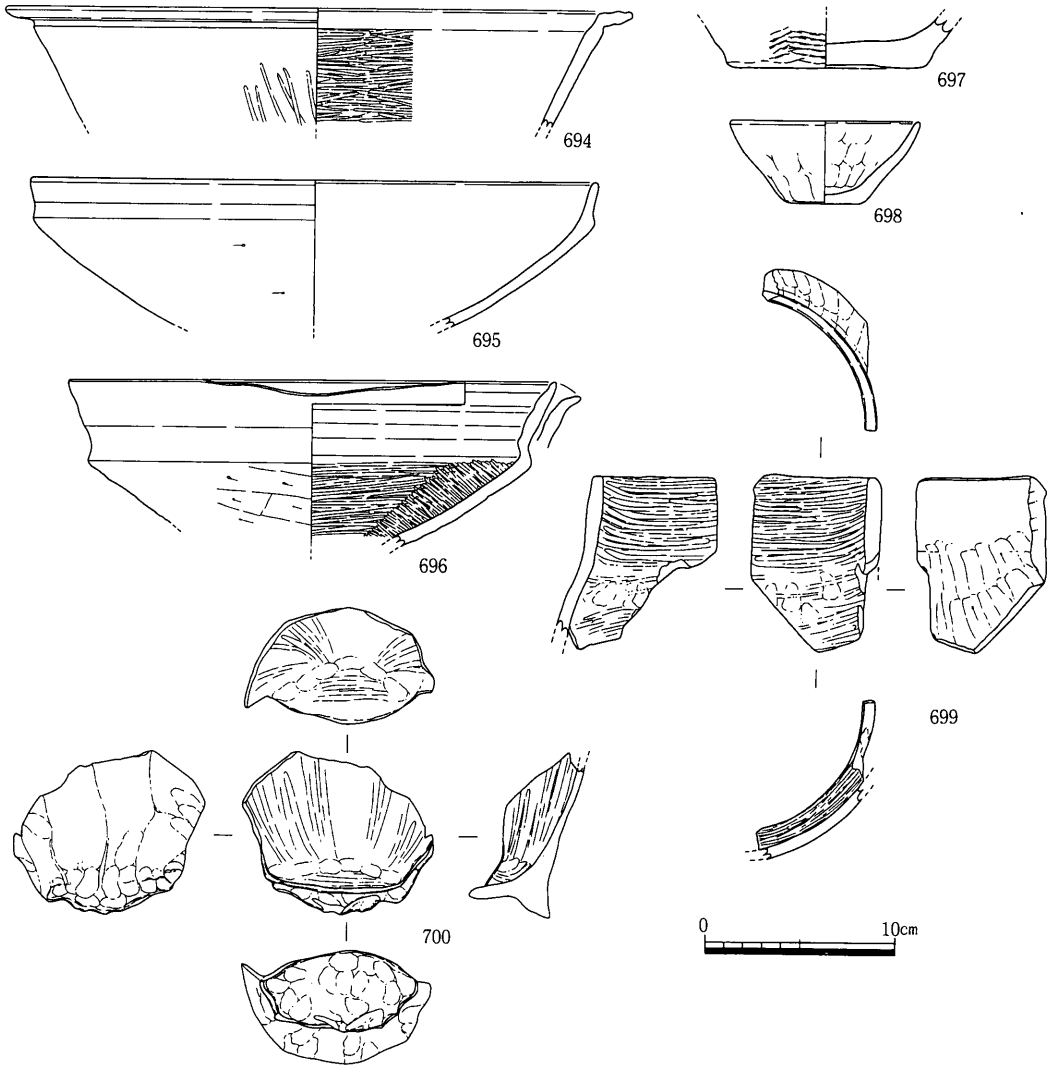
する，端部を肥厚する脚（662～671）も肥厚部が鈍化した新しい様相が多いことと一致する。この脚部形態では裾部に２孔１対の小円形透かしを穿つのが原則である。脚上部にも

同様の小円孔を加え2段構成を採ることも少ないが，(669) のように多孔とするものは少ない。端上部を強く摘み出した違和感のある形態 (667) は搬入品。(672～674) は直立口縁形態の高坏。(674) は上半部が外傾しつつ端部が外に反る新しい様相を持つ。(678) は胎土からみて明らかな搬入品である。強く絞り込んだ細身の脚部に櫛描並行沈線を施し，内面ケズリや透かし孔はない。瀬戸内西半部に多い形態であろうか。(675) は円柱状脚部だが，軸部下端の折り返しがやや鈍くなっている。(676) は軸部に円形透かしを多く配し，内面横ケズリ。装飾高坏の可能性がある。(677) は円柱状軸部を持つが，裾部が著しく矮



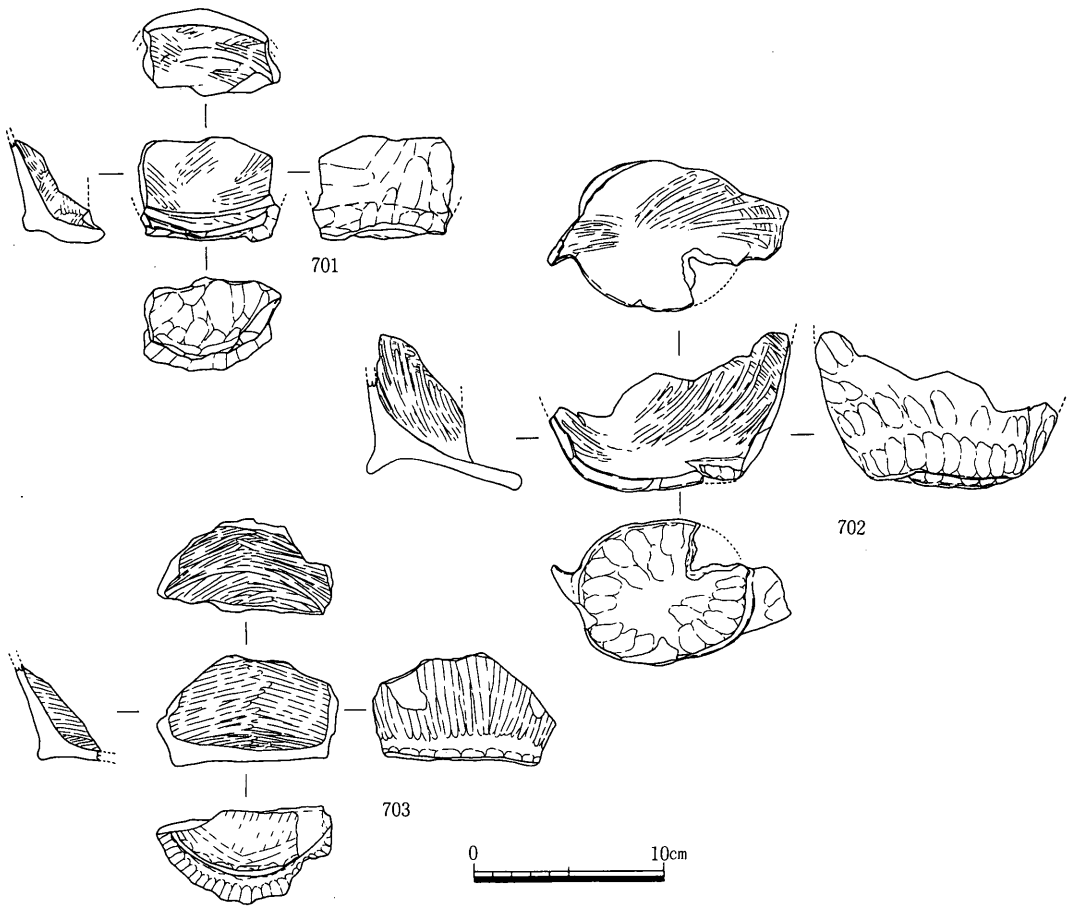
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
690	大形器台	31.7			細・極多、中・普	褐色	柱状の軸部から折り返して口縁部は大きく開く。端部は鈍く下方に摘み出し上方も突出。端面凹線。軸部は縦ﾊｹ後、篦描並行沈線3段と大形の長方形透かし。口縁部横ﾅﾃﾞ、軸部内面指押さえ顕著。	4/5	角閃石極多、石英等
691	大形器台	24.2			細・極多	明黄褐色	脚裾部は強く外反し大きく開く。端部は小さく摘み上げる。裾部大形円形透かし。横ﾅﾃﾞ	1/4	角閃石極多、雲母
692	器台			19.4	細・極多	にぶい黄橙色	やや内傾する軸部から緩やかに折り返して裾部は大きく開く。端部は上下に張り気味に四角く納める。端面凹線。内面中位横ｹｽﾞﾘ、裾部横ﾊｹ。中位に中形円形透かし4方。	3/5	角閃石極多
693	大形器台			26.0	細・極多	灰白色	脚裾部は外反して開き、端部は上方に鈍く摘み出す。外面縦ﾊｹ後縦ﾐｶﾞｷ、裾部凹線。大形円形透かし2段。	1/8	角閃石極多

第243図　4区ＳＤ16d･e溝出土遺物9（1／4）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
694	大形鉢	32.7			細・極多	にぶい黄色	口縁部は強く折り返して短く水平に開き、端部は丸く納める。屈曲部凹線。外面疎らな縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多　赤色顔料
695	鉢	29.7			細・極多、中・普、粗・少	にぶい黄橙色	中位で屈曲して上半部はやや外傾。端部は丸く納める。下半部外面横ｹｽﾞﾘ。	1/6	角閃石極多、雲母・赤色粒
696	大形鉢	25.6			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部外傾。端部は尖る。上半部横ﾅﾃﾞ、内面凹線。下半部外面横ｹｽﾞﾘ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。	5/6	角閃石極多、石英等多　B類大鉢
697	大形鉢			10.5	細・極多、中、多	暗褐色	分厚い突出気味の底部。外面叩き目残る。	ほぼ全周	角閃石極多（含粗粒）赤色顔料
698	小形鉢	9.8	4.3	3.5	細・極多	灰黄色	やや内湾して開き端部は丸く納める。口縁部横ﾅﾃﾞ、以下指押さえ。	1/4	角閃石極多
699	把手付広片口皿				細・極多	灰黄褐色	片口部。口縁部は鈍く屈曲して伸び、端部は四角く納める。側縁部は四角く納める。体部外面縦ｹｽﾞﾘ、片口部横ﾅﾃﾞ。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多　赤色顔料
700	把手付広片口皿				細・極多	灰黄褐色	把手部。把手部は短く半円形に開き、指押さえ顕著。低い半円形に突出した立ち上がり部はやや外傾して伸び、端部は丸く納める。外面指押さえ、内面横ﾐｶﾞｷで下端部指押さえ、体部外面縦ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母赤色顔料

第244図　４区ＳＤ16d･e溝出土遺物10（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
701	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄橙色	把手部。把手部は立ち上がり部下縁を鈍く摘み出すのみ。立ち上がり部はやや内湾して伸び肥厚気味に尖る。外面ﾅﾃﾞ、内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母赤色顔料
702	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄橙色	把手部。立ち上がり部下端を外方に摘み出し短い把手部。半円形に突出した立ち上がり部は外傾して伸び、肥厚気味に四角く納める。外面指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多　赤色顔料
703	鉢？				細・極多	灰黄褐色　灰黄色	器種不明。広口皿把手部か。立ち上がり部下縁を鈍く摘み出すのみ。やや外傾する立ち上がり部上半剝落。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。やや上げ底状の鉢底部の可能性も。		石英等・角閃石多赤色顔料　搬入品？

第245図　4区ＳＤ16d･e溝出土遺物11（１／４）

小化している。高坏脚部ではなく，支脚かもしれない。脚（679～681）は円錐形を呈し，脚端部を小さく外反させる形態。円形透かしはやや大形で（679）のような縦列配置の多孔透かしも見られる。(682～684）は短い円柱状軸部を持つ脚部形態。軸部下端の折り返しが緩やかで，裾部の小円孔が小さい。また脚端部の形状は長軸の形態ほど画一的ではない。(685）はミニチュアの装飾高坏。透かし孔等の加飾は認められないが，その形態をよ

く留めている。脚裾部が強く外反して開く形態は後期初頭の新相以降のものである。

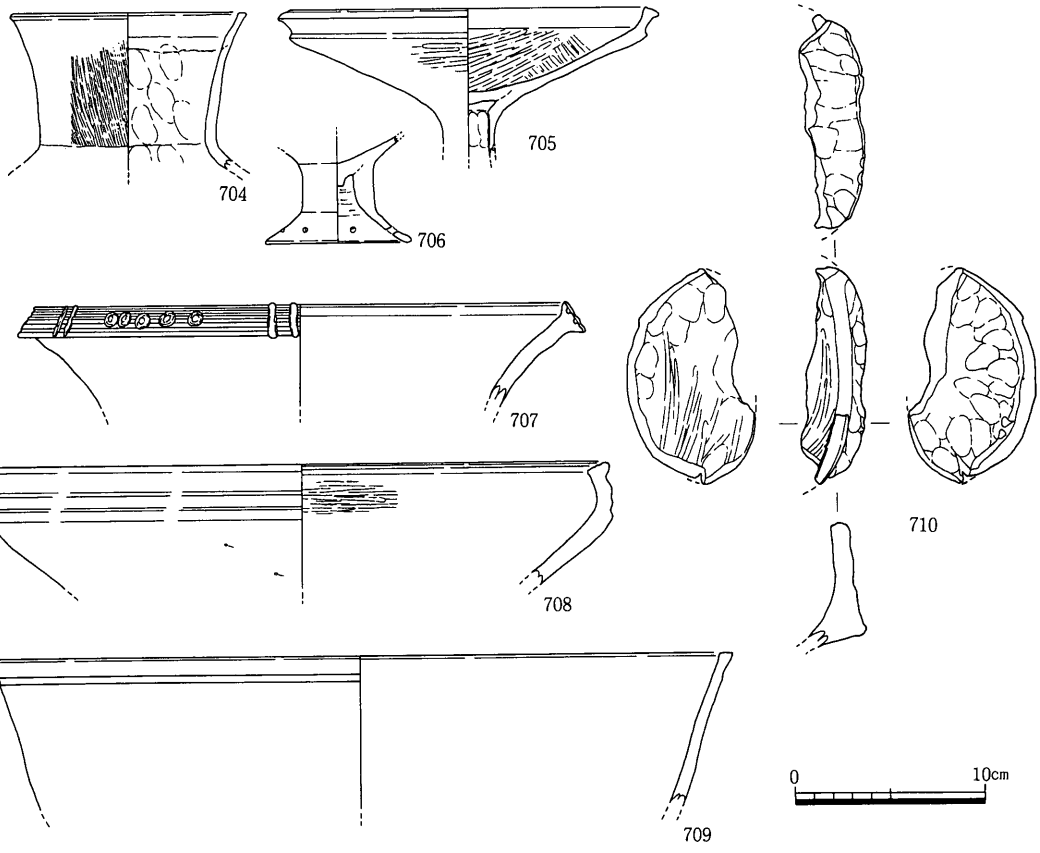
大形器台（687）は口縁端部下に粘土帯を付すが，端面に鈍い凹線を加えて凹面をなし，通有の垂下口縁形態とは異なる。（688）は大きく開くが口縁端部の拡張は弱く単純な形態にとどまる。（689）は鈍い垂下口縁形態を成すが端面には凹線文を見る。（690）は中位の円柱状軸部が長く発達した形態で，急激に折り返して口縁部は開く。口縁端部はあまり発達しない。軸部には3段の並行沈線文帯を配し，長方形透かしを穿つ。大形器台脚（691～693）はいずれも端部の肥厚拡張はほとんどない。また本溝資料では大形器台透かし孔の形状は明らかに円形が卓越している。

大形鉢（694）は口縁部の折り返しがきつい。口縁部を小さく外反させる系統のやや新しい様相か。（695）は高坏にしては深すぎるので鉢とした。多い形態ではない。（696）は典型的な下川津B類のやや後出的な形態を示す。小形鉢（698）は後期中葉以降の後出する形態である。（699）は把手付広片口皿。片口部はやや長く発達している。（700～702）の把手部はいずれもあまり大きく発達していない。（703）は搬入品。把手付広片口皿で間違いなければ同器種では唯一例となるが，この資料では側縁から立ち上がり部にかけて残存する端部がなく確証にかける。調整の点からしても底部縁辺が張り出す形態の鉢底部片とみなすことは十分可能である。

以上示したように中・古段階ｄ～ｅ溝資料も新段階溝群同様に過半以上を後期初頭段階資料が占めるがやはり一定量の後期中葉以降の資料が認められる。同段階溝の時期はやはりそれらが示すとみるべきであろう。

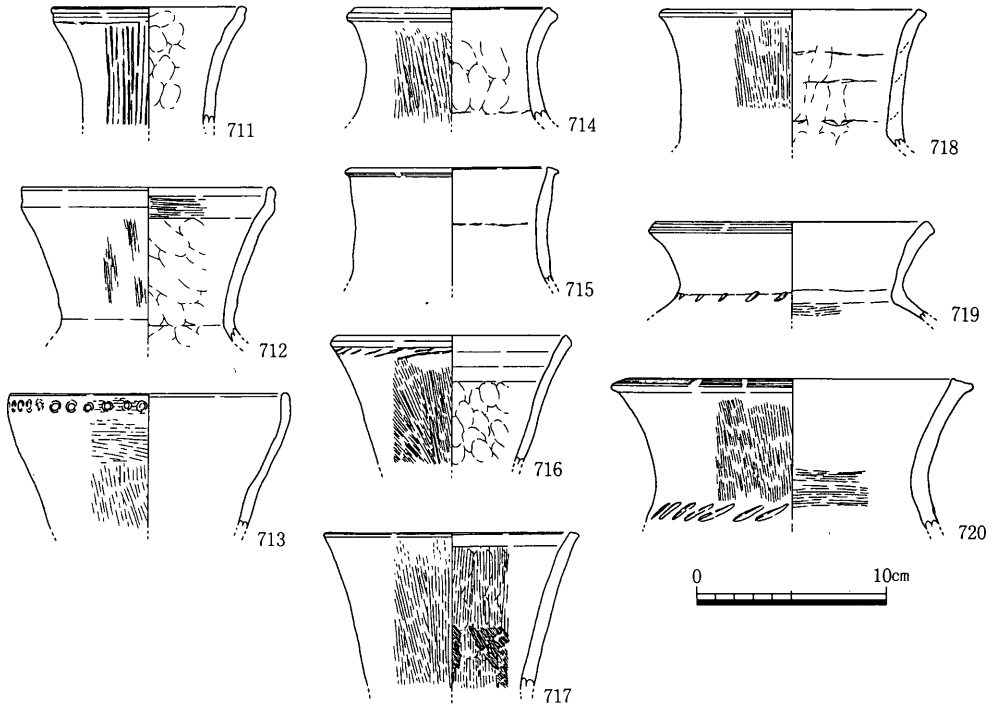
（704～710）はｈ溝出土遺物。やや短頸形態の直口壷（704）は口頸部がやや薄手で鈍く外反して端部は四角く納める。短い円柱状軸部を持つ（706）は裾部の折り返しが緩やかで短い。拡張口縁高坏（705）は端部拡張は鈍いが，中位の屈曲は十分強いので，新しい様相と見なくてもよいだろう。器台（707）は端面に棒状浮文と円形刺突文を加える。大形鉢（708）は強く内湾して端部も内外に摘み出す中期末段階の特徴をとどめるが，外面凹線の鈍さからやはり後期段階に位置づけてよい。（709）はかすかに肥厚する口縁部直下に浅い沈線1条を施す。後期初頭でも新しい様相に位置づけるべきであろう。把手付広片口皿（710）は把手部の作り出しは不明瞭で立ち上がり部下半の縁辺がわずかに突出する程度にすぎない。

（711～959）は最下層のｆ溝出土遺物。（711～713）は口縁部に退化した受口状形態を残す直口壷。（713）の円形刺突文のように口縁部に加飾する例はこの形態では他に見られ



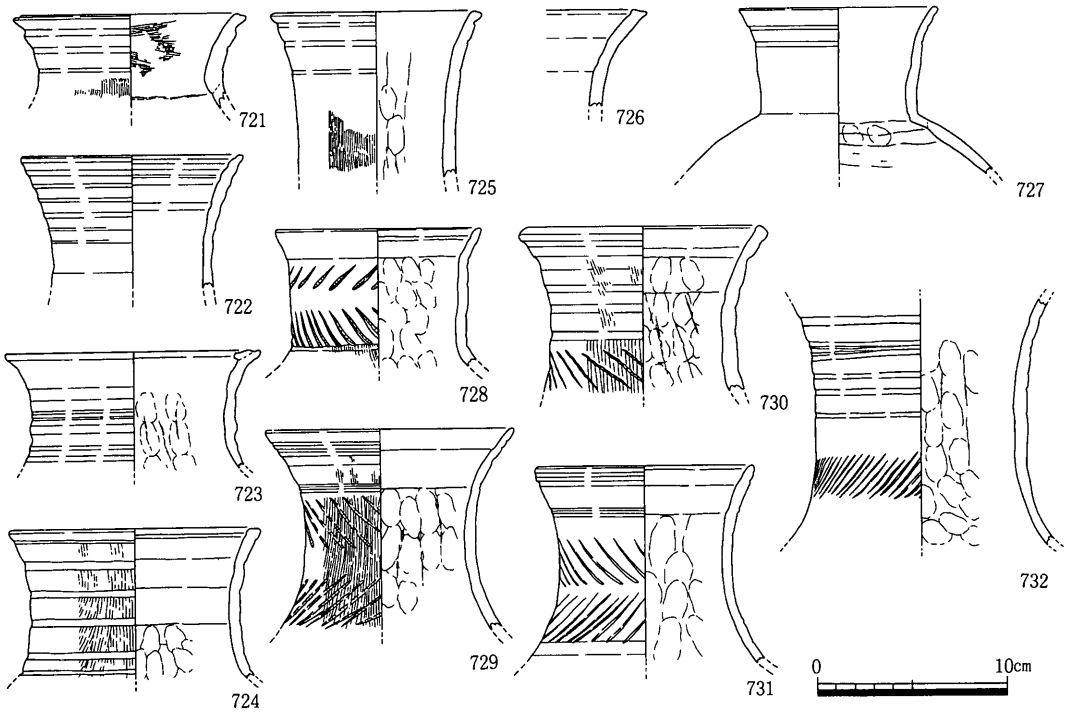
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
704	直口壺	12.3			細・極多	にぶい黄橙色	口頸部は弱く外反して立ち上がり、端部は小さく外方に摘む。外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
705	高坏	18.6			細・極多	黄褐色	中位で強く屈曲し鈍い段。上半部外傾。端部は外方に摘み出し内方も張る。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ﾐｶﾞｷ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。円盤充塡	1/4	角閃石極多
706	脚			7.6	細・極多、中・普	にぶい褐色	短い柱状軸部から強く折り返して裾部は短く開く。端部は丸く納める。軸部内面横ｹｽﾞﾘ。裾部円形透かし。円盤充塡	4/5	角閃石極多、石英等
707	大形器台？	27.8			細・極多、中・多	明黄褐色	口縁部は緩やかに開き、端部は内外に摘み出す。端面凹線・５個１対の円形浮文・２本１対の棒状浮文。横ﾅﾃﾞ。	1/6	角閃石極多、石英等多
708	大形鉢	32.0			細・極多、中・多	灰黄色	鈍く屈曲して口縁部は短くやや内傾する。端部は小さく外方に摘み出すと共に内方も張り出す。口縁部外面凹線、内面横ﾐｶﾞｷ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ。	1/12	角閃石極多、石英等多、雲母
709	大形鉢	38.3			細・極多	黄褐色	やや外傾して立ち上がり、端部は外方に張り気味に四角く納める。外面口縁部直下に沈線１条。	1/8	角閃石極多、雲母多　赤色顔料
710	把手付広片口皿				細・極多、中・普	黄褐色	把手部。把手部は痕跡的な立ち上がり部下端の突起にすぎない。低い半円形に突出する立ち上がり部は直立して伸び、端部は四角く納める。外面指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多、石英等　赤色顔料

第246図　４区ＳＤ16h溝出土遺物（１／４）



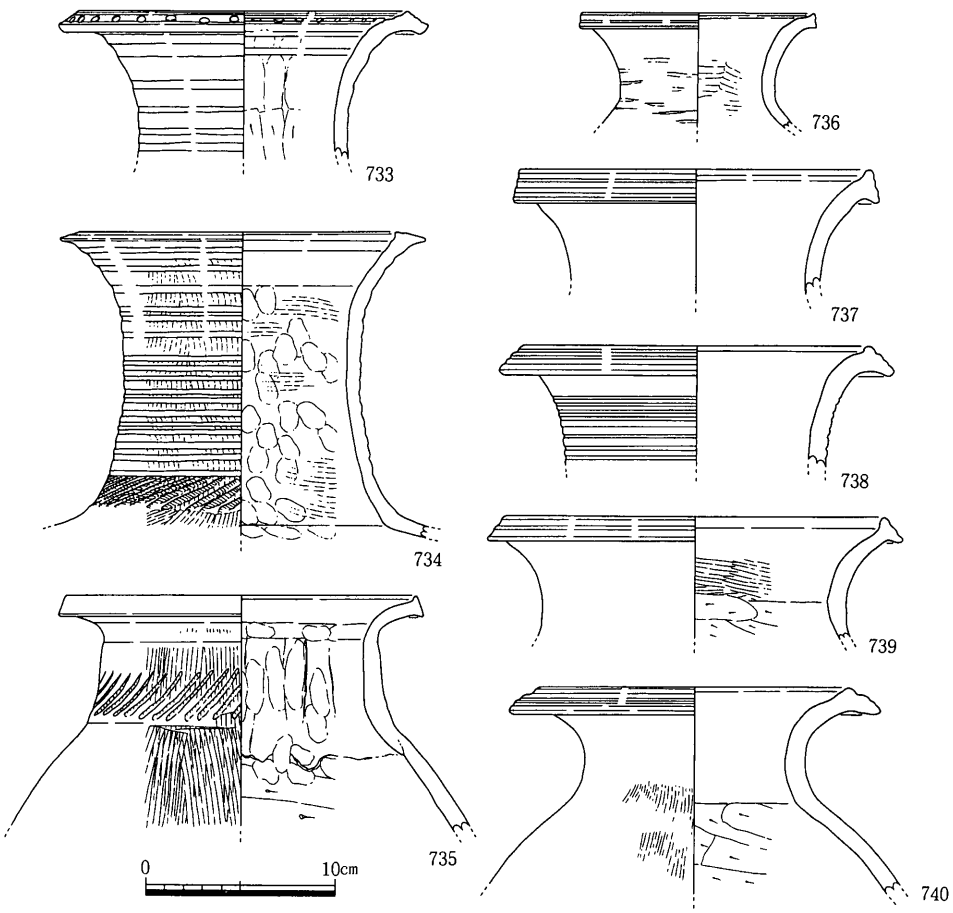
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
711	直口壷	9.5			細・極多	黒褐色　にぶい黄橙色	口頸部はやや反り気味に短く立ち上がり、鈍く屈曲して口縁部は短く直立。端部は四角く納める。口縁部外面凹線、頸部外面細かい垂下沈線、内面指押さえ顕著。	1/8	角閃石極多
712	直口壷	13.0			細・極多	にぶい黄褐色	緩く外反する頸部から鈍く屈曲して口縁部は短く直立。端部は丸く納める。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。内面口縁部横ﾊｹ、頸部指押さえ。	1/8	角閃石極多
713	直口壷	14.4			細・極多	灰黄褐色	頸部はやや外傾して立ち上がり口縁部は鈍く内湾。端部丸く納める。口縁部直下円形刺突文。口縁部外面横ﾊｹ、頸部縦ﾊｹ、内面横ﾅﾃﾞ	1/3	角閃石極多
714	直口壷	9.8			細・極多	にぶい黄橙色	やや外反気味に立ち上がる口頸部は短い。端部は外方に摘み気味に四角く納める。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面指押さえ。	1/3	角閃石極多
715	直口壷	10.4			細・極多	にぶい黄橙色	口頸部はやや反り気味に短く立ち上がる。端部は内外に小さく摘む。横ﾅﾃﾞ。	1/6	角閃石極多
716	直口壷	11.9			細・極多	灰黄色	口頸部は外傾して立ち上がり、端部は四角く納める。外面縦ﾊｹで上部に叩き目残る。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
717	直口壷	13.3			細・極多	明黄褐色	口頸部は緩く外反して立ち上がり端部は外方に張り気味に四角く納める。縦ﾊｹ。外面上部に叩き目残る。	1/8	角閃石極多
718	直口壷	13.2			細・極多	灰黄色	口頸部は短く立ち上がり端部はやや反って四角く納める。外面縦ﾊｹ、内面指押さえで接合痕顕著	1/6	角閃石極多
719	短頸壷	14.2			細・極多	暗灰黄色	口頸部は外反気味に短く立ち上がる。端部は鈍く肥厚しつつ外方にやや張る。端面凹線。肩上端刺突文。口頸部横ﾅﾃﾞ、肩部内面横ﾊｹ	1/6	角閃石極多
720	短頸壷	17.0			細・極多	にぶい橙色	口頸部はやや外傾して短く立ち上がる。端部は鈍く外方に摘み出す。端面凹線。外面縦ﾊｹ頸基部刺突文。内面横ﾊｹ。	1/6	角閃石極多、石英等多

第247図　4区ＳＤ16f溝出土遺物１（１／４）



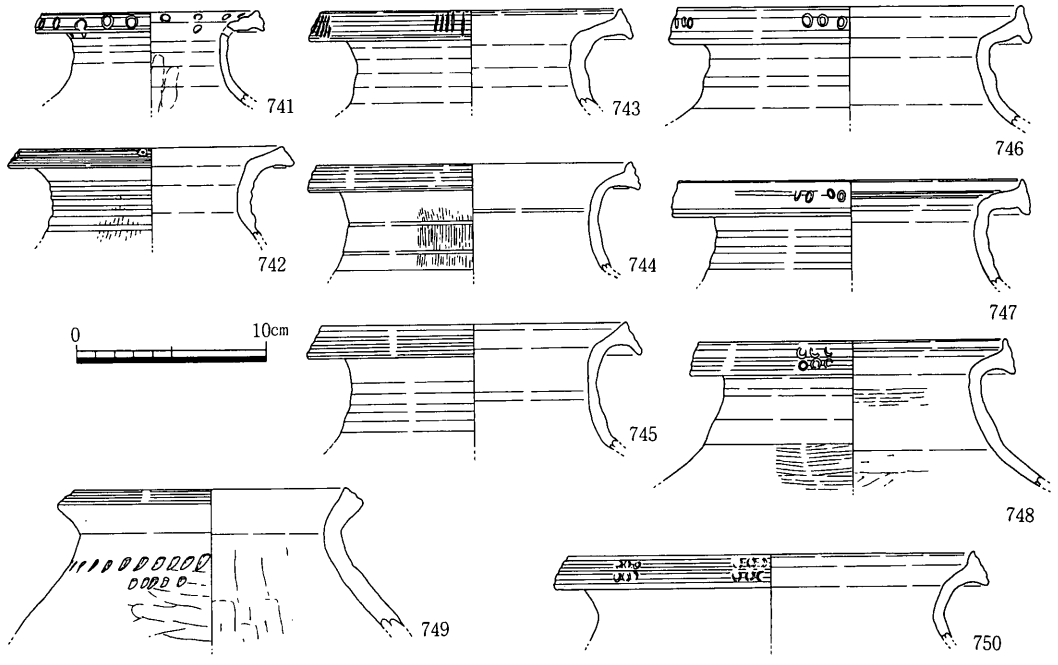
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
721	直口壺	11.2			細・極多、中・普	暗褐色	口頸部は外反気味に短く立ち上がり、端部は外方に張り気味に四角く納める。端面・外面凹線。外面頸基部縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ	1/2	角閃石極多、石英等
722	直口壺	11.4			細・極多	灰黄色	口頸部は外反して立ち上がり端部は尖る。内外面凹線。	1/4	角閃石極多
723	直口壺	11.2			細・多	浅黄色	口頸部は外反気味に立ち上がり、端部は外方に鈍く摘み出し内方も突出。外面凹線。内面下半部指押さえ。	1/8	石英等多　搬入品
724	直口壺	13.0			細・極多	にぶい黄褐色	口頸部は外反気味に立ち上がり端部は外方に張り気味に四角く納める。外面縦ﾊｹ後凹線。内面下半部指押さえ。	1/12	角閃石極多
725	直口壺	10.3			細・極多	黒褐色	口頸部はやや反り気味に立ち上がる。端部は外方に張り気味に四角く納める。口縁部外面凹線、頸部縦ﾊｹ。内面指押さえ、絞り目残る	1/4	角閃石極多
726	直口壺				細・普	灰白色	口頸部は緩く外反して立ち上がり、端部は外方に小さく摘み出すと共に内方も突出。頸部外面横ﾊｹ、他横ﾅﾃﾞ。		赤色粒・石英等　搬入品
727	直口壺	10.2			細・極多、中・普	明褐色	ほぼ直立する頸部から口縁部はやや反る。端部は丸く納める。口縁部直下沈線２条。口頸部横ﾅﾃﾞ、体部内面上端まで横ｸｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多（含粗粒）
728	直口壺	10.8			細・極多	黄褐色	ほぼ直立する頸部から口縁部はやや反る。端部は丸く納める。頸部はﾊｹ原体刺突の斜線文２段。頸部内面指押さえ。	1/8	角閃石極多
729	直口壺	12.8			細・極多	にぶい黄褐色	口頸部は緩く外反して立ち上がる。端部は尖る。外面縦ﾊｹ後口縁部鈍い凹線。頸部ﾊｹ原体刺突の斜線文２段。頸部内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、雲母
730	直口壺	12.0			細・極多	灰黄色	口頸部は外反して立ち上がり端部は内方に小さく突出し四角く納める。外面縦ﾊｹ後凹線、頸基部ﾊｹ原体刺突の斜線文。内面指押さえ。	1/6	角閃石極多
731	直口壺	11.6			細・極多	にぶい黄褐色	口頸部はやや外反して立ち上がり、端部は丸く納める。口縁部外面凹線、頸部外面斜線文２段。内面指押さえ。	1/5	角閃石極多、雲母多
732	直口壺				細・極多、中・普	灰黄色	口頸部は外反気味に立ち上がる。外面凹線、基部に斜線文。内面指押さえ。	1/6	角閃石極多、石英等

第248図　４区ＳＤ16f溝出土遺物２（１／４）



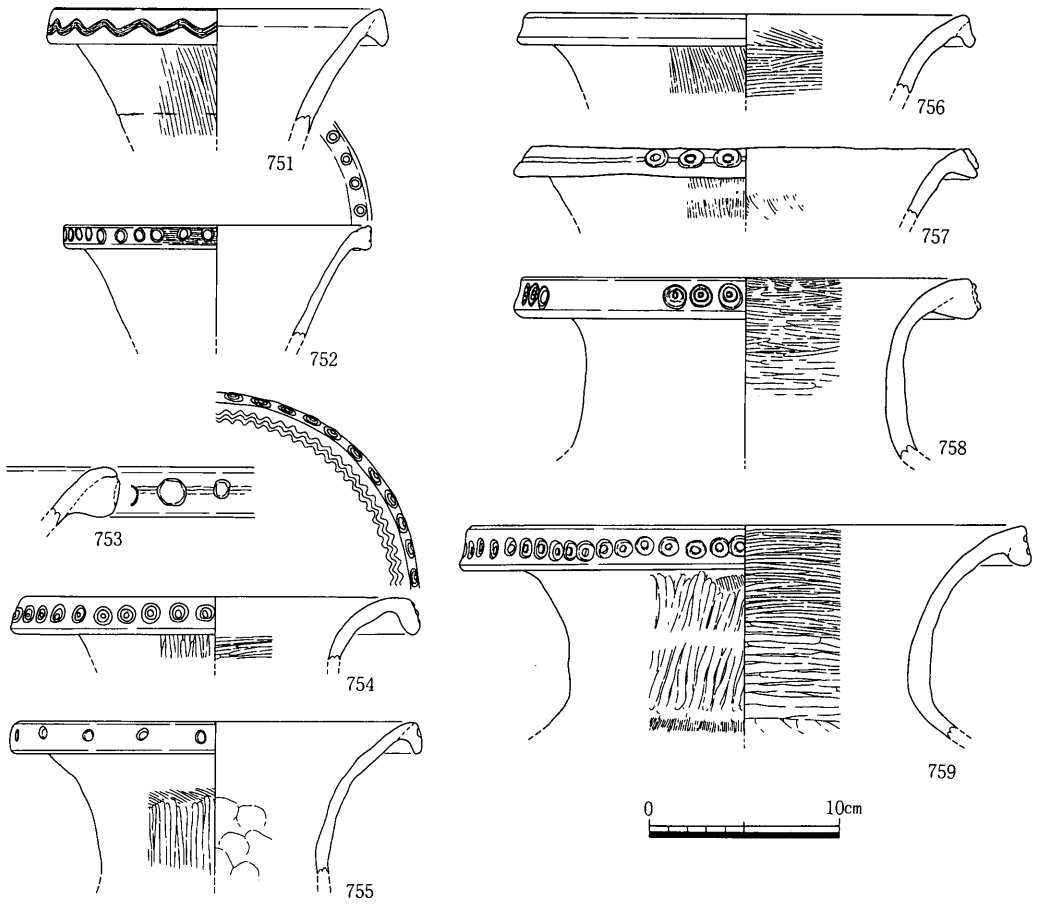
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
733	直口壺	17.2			細・極多	褐灰色	口縁部は強く外反して短く開く。端部は外方に引き出して四角く納める。上部も小さく突出。端面・口縁部内面凹線・円形刺突文。外面凹線。	1/6	角閃石極多、雲母多
734	直口壺	16.0			細・極多	灰黄褐色	口縁部は緩く外反して立ち上がる。端部は外方に摘み出しつつ内方も小さく突出。端面凹線。外面縦ﾊｹ後凹線、頸基部ﾊｹ原体刺突の斜線文。頸部内面横ﾊｹ後指押さえ。	1/2	角閃石極多
735	広口壺	18.4			細・極多	灰黄褐色	太めの短い頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に小さく摘む。外面縦ﾊｹ後頸基部にﾊｹ原体刺突の斜線文。内面肩部まで横ｹｽﾞﾘ後肩上部以上指押さえ。	1/6	角閃石極多
736	短頸壺	12.4			細・極多	灰黄色	口頸部は強く外反して短く開く。端部は小さく上下に摘み出して端面凹線。外面叩き目残る。内面粗い横ﾊｹ。	1/3	角閃石極多
737	短頸壺	18.2			細・極多	浅黄色	外反する口縁部は短い。端部は下方に摘み出すと共に上方も突出。端面沈線３条。横ﾅﾃﾞ	1/2	角閃石極多、雲母
738	広口壺	18.0			中・多	灰黄色	やや外傾する頸部から口縁部は強く折り返して短い。端部は下方に摘み出して上部も小さく突出。端面凹線。頸部外面篦描並行沈線。	1/5	石英等多　搬入品
739	短頸壺	19.8			細・極多、中・普	にぶい黄橙色	外反する口縁部は短い。端部は上下に摘み出して端面凹線。外面横ﾅﾃﾞ、内面頸基部まで横ｹｽﾞﾘ、頸部横ﾊｹ。	1/4	角閃石極多、石英等
740	壺	16.2			中・多	灰黄色	口縁部は強く外反して開く。端部は大きく外方に引き出し上方も突出。端面凹線。口頸部横ﾅﾃﾞ、体部外面縦ﾊｹ、内面上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/2	石英等多　搬入品

第249図　４区ＳＤ16f溝出土遺物３（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
741	広口壺	11.4			細・極多	にぶい黄橙色	やや内傾する頸部から強く折り返して口縁部は短く水平に開く。端部は肥厚しつつ外方に摘み出すと共に上方もやや突出。端面凹線後、端面・口縁部内面円形刺突文。頸部内外面凹線。頸上端に2孔1対の穿通孔。	1/3	角閃石極多
742	広口壺	13.8			細・極多	灰白色	短い頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は下方に摘み出して端面凹線・円形刺突文。頸部外面縦ﾊｹ後沈線。	1/4	角閃石極多
743	広口壺	15.5			細・極多	にぶい赤褐色	短くやや内傾する頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。端面凹線後6条1対の短刻線。頸部外面鈍い凹線。	1/2	角閃石極多
744	広口壺	16.6			細・極多	にぶい黄橙色	ほぼ直立する頸部から強く折り返して口縁部は短く水平に開く。端部は上方に摘み出すと共に下方も張り出す。端面凹線。頸部外面縦ﾊｹ後凹線。	1/5	角閃石極多、石英等
745	広口壺	16.0			細・極多	灰黄色	やや内傾する頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は下方に強く摘み出して上部も鈍く突出。端面凹線。頸部外面凹線。	1/4	角閃石極多
746	広口壺	17.8			細・極多	灰黄褐色	やや内傾する短い頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に摘み出し端面鈍い凹線・3個1対の円形刺突文。横ﾅﾃﾞ、頸部凹線。	1/4	角閃石極多、石英等・雲母
747	広口壺	18.0			細・極多	にぶい黄橙色	やや内傾する頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に摘み出して鈍い凹線後4個1対の円形刺突文。頸部凹線。	1/6	角閃石極多
748	広口壺	15.8			細・極多	にぶい黄橙色	内傾する頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に摘み出して端面凹線・2段に配した6個1対の円形刺突文。外面頸部横ﾅﾃﾞ、体部横ﾊｹ、内面頸部横ﾊｹ・横ﾅﾃﾞ、体上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
749	壺	14.2			細・極多、中・普、粗・少	浅黄橙色	口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は肥厚しつつ内方に小さく摘み気味に四角く納める。端面凹線。肩上部刺突文。外面ﾅﾃﾞ、内面縦ｹｽﾞﾘ。	1/3	搬入品
750	広口壺	21.2			細・極多、中・多	灰黄褐色	短く外傾する頸部から緩く折り返した口縁部は短い。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。端面凹線・2段に配した円形刺突文	1/3	角閃石極多、石英等多　搬入品？

第250図　4区ＳＤ16f溝出土遺物4（1／4）



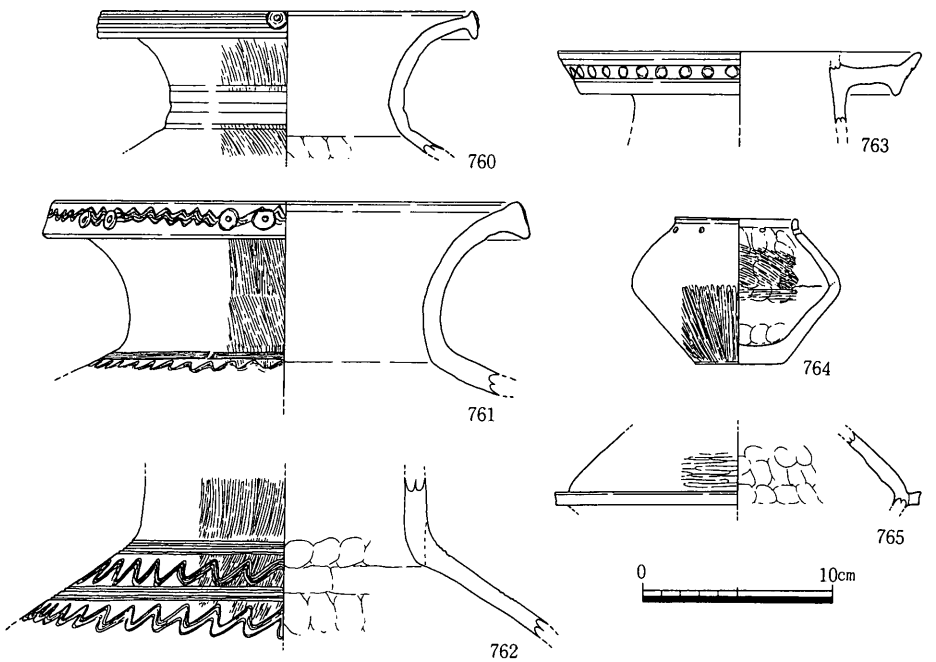
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
751	広口壺？	16.9			細・極多	にぶい黄橙色	口頸部は緩やかに開き端部は粘土帯を付して断面三角形の垂下口縁。端面櫛描波状文、外面縦ﾊｹ、内面横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多
752	広口壺？	15.8			細・極多	褐色	外傾する頸部から口縁部は小さく折り返す。端面横ﾊｹ、口縁部内面・端面円形刺突文。横ﾅﾃﾞ。	1/5	角閃石極多
753	広口壺？				細・極多	灰黄褐色	端部に粘土帯を付し断面三角形の垂下口縁。端面に紮文の円形浮文		角閃石極多
754	広口壺	20.4			細・極多	にぶい黄橙色	緩やかに外反して開き、端部は粘土帯を付して板状垂下口縁。端面円形浮文、口縁部内面櫛描波状文。頸部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/6	角閃石極多
755	広口壺	20.5			細・極多	灰黄色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は粘土帯を付し板状の垂下口縁。端面円形刺突文。頸部斜ﾊｹ後縦ﾐｶﾞｷ。内面指押さえ。	1/2	角閃石極多
756	広口壺	22.6			細・極多	浅黄色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は粘土帯を付し板状垂下口縁。外面縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ	1/8	角閃石極多
757	広口壺	22.6			細・極多	明黄褐色	外傾する口縁端部は強く外方に引き出して端面に凹線と３個１対の円形浮文。外面縦ﾊｹ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/3	角閃石極多
758	広口壺	22.6			細・極多	にぶい黄橙色	ほぼ直立する頸部から緩やかに外反して短く開く。端部は粘土帯を付して断面三角形の垂下口縁。端面３個１対の円形浮文。口縁部内面横ﾐｶﾞｷ、他横ﾅﾃﾞ。	2/3	角閃石極多
759	広口壺	28.9			細・極多	にぶい黄橙色	口頸部は緩やかに外反して開く。端部は粘土帯を付して垂下口縁。端面円形刺突文。頸部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ、肩部外面縦ﾊｹ。	全周	角閃石極多

第251図　４区ＳＤ16f溝出土遺物５（１／４）

ない。(714～718) は口頸部のやや短い形態で端部は四角く納める。凹線文が見られないだけでなく，外面は縦ハケないしは縦ミガキで仕上げ横ナデすら施されない。前記した受け口状口縁の系統も同様である。短頸壷 (719・720) は口頸部の外反はあまり強くない。端部の拡張は弱い。両例とも頸基部に刺突文を巡らす。口頸部に凹線文を巡らす形態のうち，(721・723・724・726・730) は口縁端部を四角く納めるか鈍く肥厚する。口縁端部を肥厚しつつ顕著に摘み出すが (723) は搬入品である。この系統の直口壷では外面の凹線がより退化して細いものが多い。(730) のように下半部に斜線文を巡らしながら端部を四角く納める例は少ない。通常は (729・731) のように薄く尖ることが多い。なお本溝資料ではこの系統の直口壷で，本遺跡の他資料と異なり，斜線文施文範囲が長く逆に凹線文部分が狭い例が多い。極端な例では (728) のように凹線文を失うものすらある。(733・734) は口頸部上半が強く外反して開き，口縁端部は肥厚して摘み出す形態。(733) では口縁部内外に円形刺突文を施し，小形器台のある種のものに近い。(737・738) は外傾頸部形態の広口壷で，口縁端部を強く下方に引き出し頸部に細い並行沈線文を持つ (738) は搬入品。口縁端部を強く外方に引き出し頸部が不明瞭な (740) は搬入品。瀬戸内西部地方に類似形態を見る。太めの短い頸部を持つ広口壷で (735) のようにハケ原体押圧の斜線文を巡らす例はあまりない。広口壷で斜線文をよく持つ類とは系統が異なる。この系統の広口壷では通常は (741～750) のように頸部文様は凹線文が基本となる。また口縁端面には円形刺突文や短刻線文をよく見る。肩上部に刺突文を配する (749) は搬入品で (740) 同様に瀬戸内西部にまま見る形態である。(751～762) は垂下口縁形態の広口壷。大型品と小形品とがある。口縁端面は円形浮文・刺突文で加飾することが多く，(751・761) 等のように櫛描波状文を施す場合もある。垂下口縁形態の広口壷では (759) のように頸部外面を縦ミガキで仕上げることは少なくなく，他系統の広口壷に多い横ナデ調整はあまり見ない。その点で (760) はやや特異なものである。この形態に珍しく頸基部に凹線3条を施す。(763) はｄ・ｅ溝の (639) 同様の複段口縁形態であるが，下段口縁部の形状は一般的な広口壷の口縁部形態と異なる。(764) は小形の無頸壷。(765) は小形の細頸壷で，体部高がやや大きいようである。

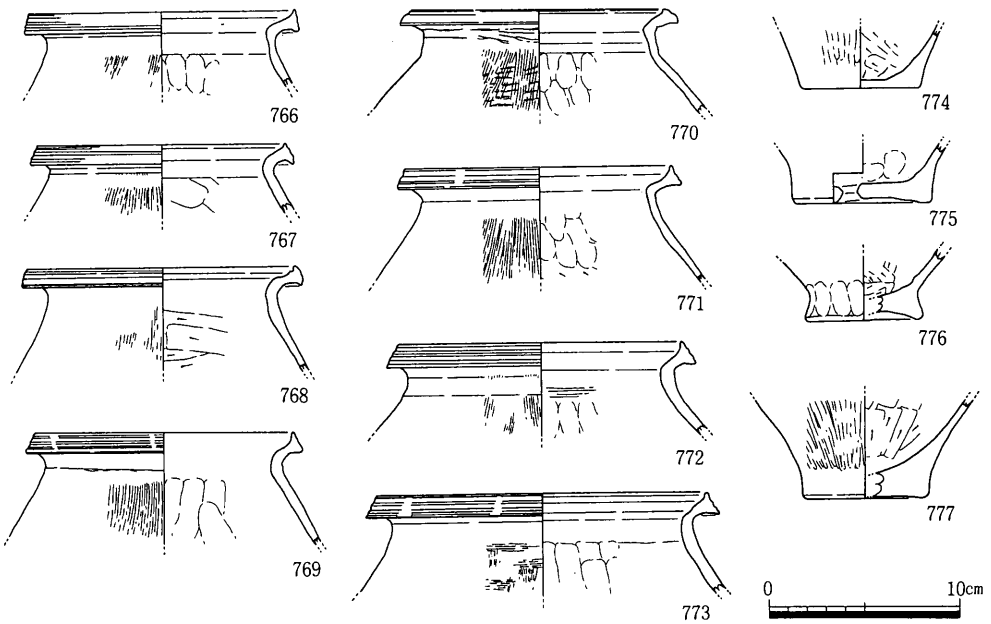
甕 (766～790) は痕跡的な頸部から口縁部を強く折り返し，鈍く肥厚した口縁端部を上下に摘み出す形態。内面ケズリは肩下半部までしか及ばないことが多い。大形甕 (787～789) も基本形状は変わらない。同様の形態をもちつつも口縁端部の拡張の弱い (779～781) は後期初頭でも新しい様相を示す。口縁部の折り返しが弱い (790・791) は，搬入品では

ないが内面肩上部まで及ぶケズリと共に，吉備南部地方の様相に近いものである。明瞭な受口状口縁を持つ（794～798）のうち，（796～798）は内面ケズリ調整を欠くなど，他の受口状口縁甕と同様の特徴を持つ。しかし（794・795）は口縁立ち上がり部や折り返しの形状，及び内面に削り調整を見る点で異なる。また（795）は搬入品である。（792・793）は基本的な形状こそ後期初頭の主流的な形態を持つが，口縁端部を直上に摘み上げて受け



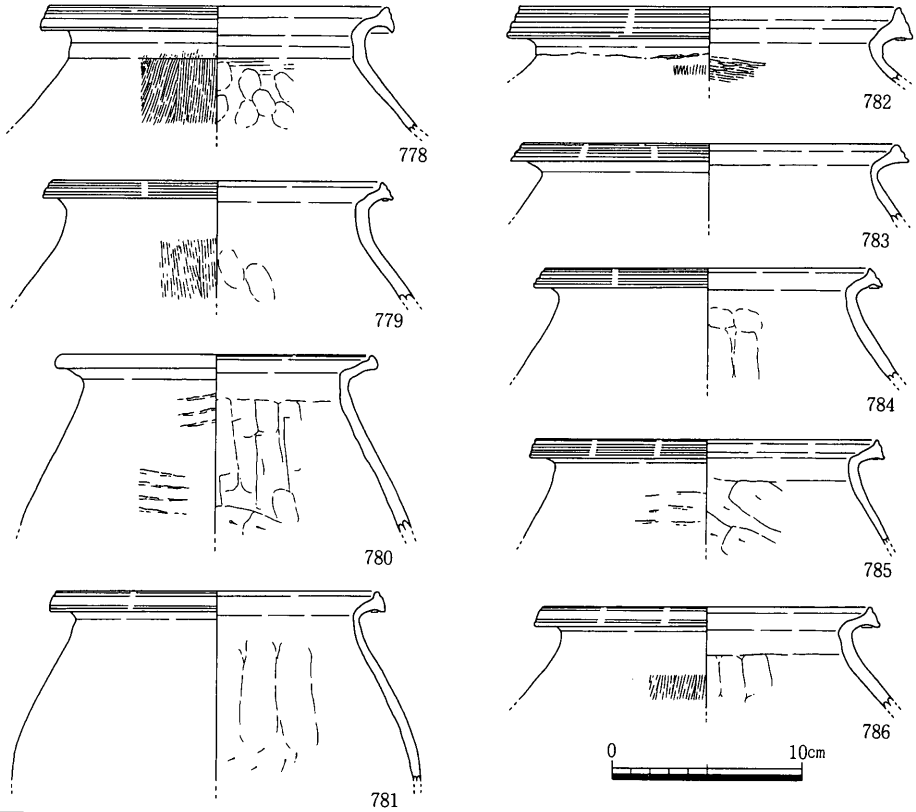
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
760	広口壺	19.5			細・極多	明黄褐色	口頸部は外反して大きく開く。端部は下方に摘み出すと共に上方も小さく突出。端面凹線・円形浮文。外面縦ﾊｹ後頸基部に凹線。内面口頸部横ﾅﾃﾞ、肩部指押さえ。	1/3	角閃石極多、石英等
761	広口壺	24.4			細・極多、中・昔	橙色	口頸部は強く外反して開き、端部に粘土帯を付して断面三角形の垂下口縁。端面櫛描波状文と２個１対の円形浮文。肩部に櫛描並行沈線・波状文。頸部外面縦ﾊｹ、内面横ﾅﾃﾞ。	1/2	角閃石極多、石英等
762	広口壺				細・極多	にぶい黄色	強く張る肩部と直立する頸部。外面縦ﾊｹ後肩部櫛描並行沈線・波状文。内面頸部横ﾅﾃﾞ、肩部指押さえ。	1/3	角閃石極多、雲母多
763	複段口縁壺	18.8			細・極多	にぶい橙色	複段口縁。やや内傾する頸部から強く折り返して口縁部は水平に開く。端部は上方に強く引き出し下方も摘む。外傾する端面に円形刺突文。折り返し部から上段口縁が取り付く。	1/3	角閃石極多
764	無頸壺	6.3	7.7	4.4	細・極多、中・昔	明褐色	やや扁平な体部は強く張って最大径部に鈍い稜。口縁部小さく折り返し丸く納める。肩上部２孔１対の紐通孔。外面下半部縦ﾐｶﾞｷ、内面下半部指押さえとﾅﾃﾞ、上半部横ﾊｹ後指押さえ。	完形	角閃石極多、石英等
765	細頸壺				細・極多	褐色	張りの強い扁平な体部。最大径部に突出度の高い断面矩形の突帯。外面横ﾐｶﾞｷ、内面指押さえ顕著。	1/9	角閃石極多、石英等・雲母

第252図　４区ＳＤ16f溝出土遺物６（１／４）



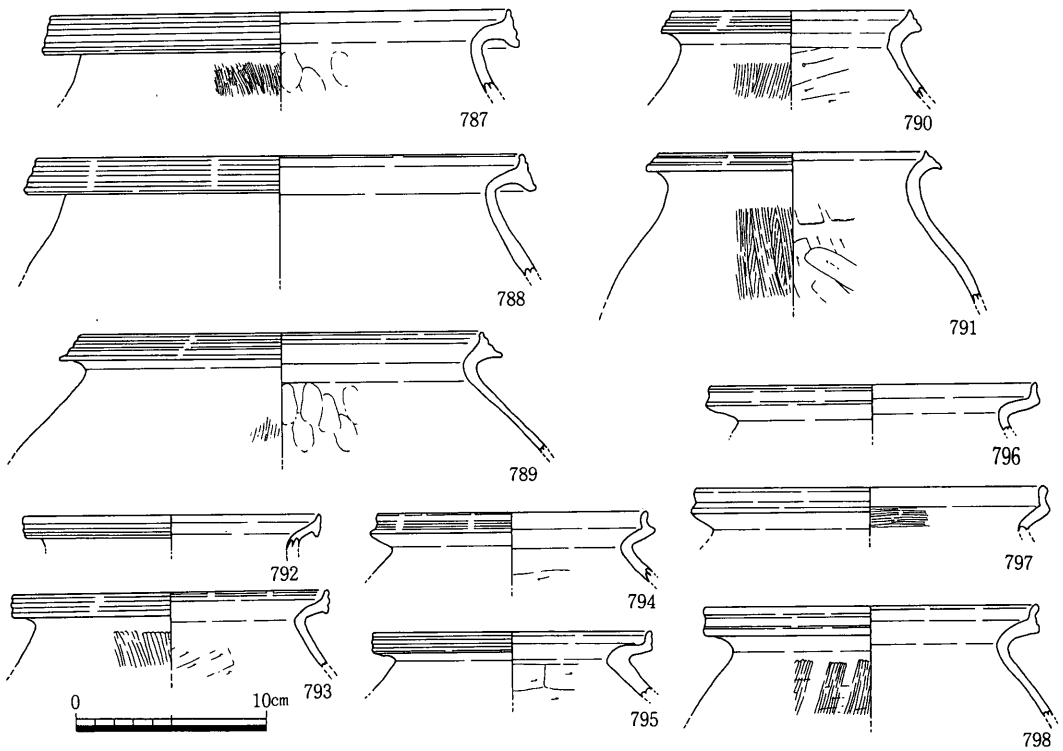
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
766	甕	14.0			細・極多	にぶい赤褐色	短い不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み端面凹線。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。体部外面縦ﾊｹ、肩部内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等
767	甕	12.9			細・極多	黒褐色　にぶい黄橙色	不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返し短く開く。端部は下方に摘み出すと共に上方も突出する。端面凹線。外面縦ﾊｹ上端部横ﾅﾃﾞ、内面指押さえ、上端部横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多
768	甕	14.0			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に摘み端面凹線。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。内面肩上部まで横ｹｽﾞﾘ。	1/6	角閃石極多
769	甕	13.6			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な頸部から口縁部は折り返し短く開き、端部は上下に摘み出す。端面凹線。外面縦ﾊｹ上端部横ﾅﾃﾞ、内面指押さえ、上端部横ﾅﾃﾞ	1/4	角閃石極多
770	甕	13.1			細・極多	にぶい黄橙色	内傾する不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返し短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に小さく摘み出す。口縁・頸部内面強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜。外面縦ﾊｹ、頸部以下叩き目残る。内面指押さえ。	1/6	角閃石極多、石英等多
771	甕	13.9			細・極多	灰黄色　黄灰色	不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に摘み出す。端面凹線。外面縦ﾊｹ上端部横ﾅﾃﾞ、内面肩部下端まで横ｹﾐﾘ後、指押さえ、上端部横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、雲母多
772	甕	14.9			細・極多	にぶい黄橙色	内傾する不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に摘み出す。端面凹線。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。内面指押さえで頸部横ﾊｹ。	1/4	角閃石極多
773	甕	17.3			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返し短く開く。端部は肥厚して上下に摘み端面凹線。外面縦ﾊｹ後横ﾊｹ。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
774	?			6.0	細・極多	にぶい黄褐色	外面縦ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘ。	2/5	角閃石極多
775	?			7.0	細・極多	黄褐色	縁辺部がやや張り気味で、若干の窪み底。中央部に焼成後穿孔	1/4	角閃石極多、雲母
776	?			5.6	細・極多	灰黄褐色　明黄褐色	縁辺部を摘み出して鈍い窪み底。縁辺部指押さえ顕著、内面ｹｽﾞﾘ。	3/4	角閃石極多、雲母
777	?			6.2	細・極多	にぶい黄褐色	小振りだが厚手の突出気味の底部。外面下端横ﾅﾃﾞ、以上縦ﾊｹ、内面縦ｹｽﾞﾘ。	1/2	角閃石極多

第253図　4区ＳＤ16f溝出土遺物７（１／４）



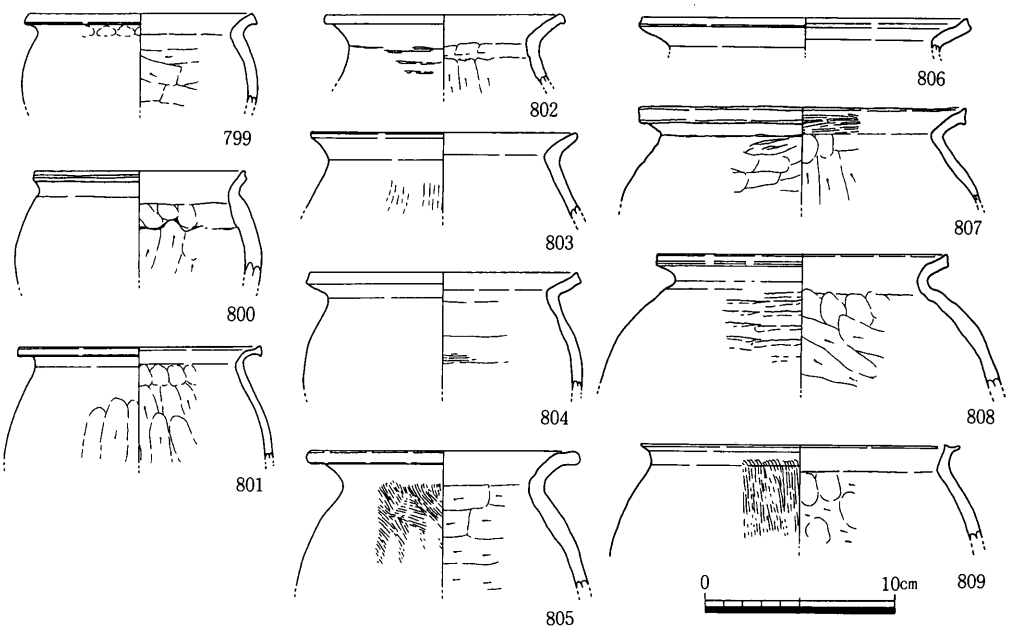
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
778	甕？	17.6			細・極多	灰黄褐色	短くやや内傾する頸部から口縁部は強く折り返し短く開く。端部は鈍く肥厚し上下に摘み出し端面凹線。体部外面縦ﾊｹ、内面頸部強い横ﾅﾃﾞで凹面。体上部横ﾊｹ後肩部指押さえ。	1/6	角閃石極多、石英等
779	甕	17.4			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返し短く開く。端部は上下に摘み端面凹線。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。体部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
780	甕	16.3			細・極多	にぶい黄褐色	不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返して開く。端部は小さく上方に摘む。外面叩き目残る。肩部下端まで横ｸｽﾞﾘ、以上指押さえ。	1/6	角閃石極多
781	甕	16.7			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返し短く開く。端部は肥厚して上下に摘み端面凹線。内面中位までｸｽﾞﾘ後指押さえ。	1/6	角閃石極多
782	甕	19.9			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は肥厚しつつ上方に摘み出すと共に下方も突出。端面凹線。外面縦ﾊｹ、内面横ﾊｹ。	1/8	角閃石極多
783	甕	19.6			細・極多	灰黄褐色	口縁部は強く折り返し短く開く。端部は鈍く肥厚し上下に摘み出す。端面凹線。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多
784	甕	17.0			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は下方に摘み出すと共に上方も突出する。口縁・頸部内面強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜。端面凹線。内面指押さえ。	1/6	角閃石極多
785	甕	17.8			細・極多	にぶい橙色	不明瞭な短く内傾する頸部から強く折り返してﾛ縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出して端面凹線。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜。外面叩き目残る。内面肩上部まで横ｸｽﾞﾘ。	1/12	角閃石極多、雲母多
786	甕	17.2			細・極多	にぶい黄橙色	不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。端面凹線。外面縦ﾊｹ上端部横ﾅﾃﾞ、内面指押さえ、上端部横ﾅﾃﾞ。	1/6	角閃石極多

第254図　4区ＳＤ16f溝出土遺物８（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
787	大形甕	24.1			細・極多	にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に摘み出す。端面凹線。外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/8	角閃石極多
788	大形甕	25.5			細・極多	灰黄褐色	口縁部は強く折り返し短く開く。端部は上下に大きく摘み出す。端面凹線。内面横ﾅﾃﾞ。	1/5	角閃石極多
789	大形甕	21.1			細・極多	褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。端面凹線。外面縦ﾊｹ。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
790	甕	12.3			細・極多	暗褐色	口縁部は緩やかに折り返し短い。端部は肥厚しつつ上方に摘み出すと共に下方も突出。端面凹線。外面縦ﾊｹ、内面体上部まで横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
791	甕	14.0			細・極多	にぶい黄色	口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は上下に摘み出して端面凹線。外面縦ﾊｹ、内面体上部まで縦ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
792	甕	15.4			細・極多	黒褐色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上下に摘み出して直立する端面凹線。	1/6	角閃石極多
793	甕	16.6			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に摘み出すと共に下方も突出する。端面沈線。内面横ｹｽﾞﾘ、上端部横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、石英等多
794	甕	14.0			細・極多	にぶい橙色	二重口縁。口縁部は強く折り返し短く開く。やや内傾する立上り部上端は丸く納め、下端も張る。端面凹線。肩部内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
795	甕	14.6			細・普、中・極多	褐灰色　灰黄色	二重口縁。強く折り返して短く水平に開く。ほぼ直立する立上り部の上端は丸く納める。端面沈線。内面横ｹｽﾞﾘ、	1/10	石英等極多、角閃石・雲母　搬入品
796	甕	17.0			細・極多	明褐色	二重口縁。口縁部は強く折り返し短く開く。短い立上り部の上端は丸く納め、下端も張る。端面凹線。	1/6	角閃石極多、雲母多
797	甕	18.0			細・極多	にぶい黄橙色	二重口縁。口縁部は強く折り返し短く開く。やや内傾する短い立上り部の上端は丸く納め下端も張る。端面凹線。口縁部内面横ﾊｹ。	1/12	角閃石極多
798	甕	15.3			細・極多	黒褐色　にぶい黄橙色	二重口縁。口縁部は強く折り返し短く開く。立上り部は反り気味で上端は丸く納め、下端は強く張る。端面凹線。外面縦ﾊｹで叩き目残る。内面ﾅﾃﾞ。	1/5	角閃石極多

第255図　4区ＳＤ16f溝出土遺物９（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
799	甕	11.6			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は下方に張り気味に四角く納める。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ﾊｹﾒﾘ。	1/6	角閃石極多
800	甕	11.0			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は緩く小さく折り返す。端部は上方に張り気味に四角く納める。端面沈線。体部内面縦ﾊｹﾒﾘ、上端部指押さえ。	1/4	角閃石極多
801	甕	12.5			細・極多	にぶい黄褐色	強く折り返した口縁部は短く外反する。端部は小さく上下に摘む。体部内外縦ﾊｹﾒﾘ後、内面上端部指押さえ	1/6	角閃石極多
802	甕	12.4			細・極多、中・多	浅黄色	口縁部は強く折り返して開く。端部は下方に突出気味に四角く納める。外面叩き目残す。体部内面縦ﾊｹﾒﾘ、上端部指押さえ。	1/5	角閃石極多、石英等多
803	甕	13.8			細・少	灰白色	口縁部は強く折り返して短い。端部は四角く納める。外面縦ﾊｹ。	1/6	片岩少　搬入品
804	甕	14.0			細・極多	灰黄色	口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に張り気味に四角く納める。横ﾅﾃﾞ、内面部分的にﾊｹ状条線	1/8	角閃石極多、石英等
805	甕	15.8			中・多	灰白色	口縁部は強く折り返し外反して開く。端部丸く納める。外面斜ﾊｹ。内面上端まで横ﾊｹﾒﾘ。	1/8	石英等多　搬入品
806	甕	17.0			細・普	淡黄色	口縁部は強く折り返して開く。端部は上方に摘み気味に四角く納める。	1/8	石英等　搬入品
807	甕	17.0			細・極多	灰黄色　明黄褐色	口縁部は強く折り返して短く反る。端部は上下に摘み気味に四角く納める。外面板ﾅﾃﾞで上端部に叩き目残る。内面口縁部横ﾊｹ、体上部まで縦ﾊｹﾒﾘ後上端部指押さえ。	1/6	角閃石極多
808	甕	15.1			細・極多、中・普	にぶい黄褐色	口縁部は強く折り返し短く開く。端部は上方に摘み気味に四角く納める。外面叩き目残る。内面肩上部まで横ﾊｹﾒﾘ。上端部指押さえ。	1/7	角閃石極多、石英等
809	甕	16.8			細・極多	にぶい黄褐色	口縁部は緩く小さく折り返す。端部は内外に摘み出す。外面縦ﾊｹで叩き目残る。体部内面横ﾊｹﾒﾘ後指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等多

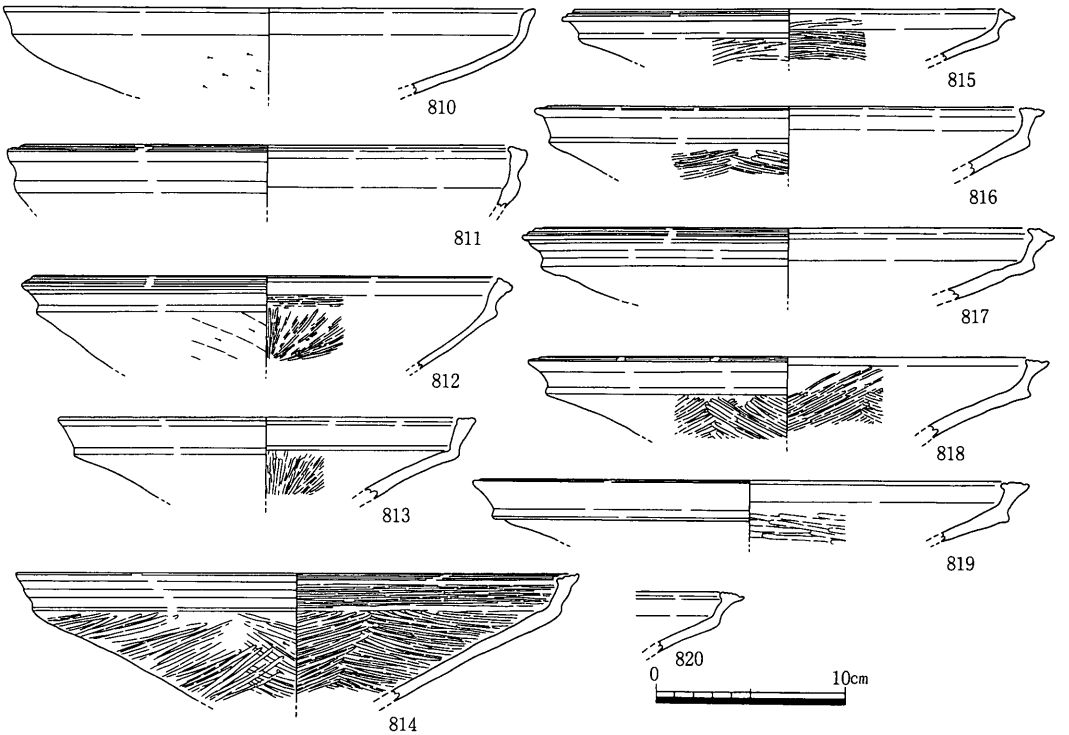
第256図　4区ＳＤ16f溝出土遺物10（１／４）

状口縁に似た形態を持つ。「く」字口縁甕のうち，口縁部が短く，折り返しも緩やかな（799・800）は後期初頭に位置づけられるが，より発達した（801・809）は後出的な形態であろう。また口縁部の短い（803）は片岩粒を含む胎土で阿波地方からの搬入品である。

この他（805・806）も胎土から搬入品と判断できる。

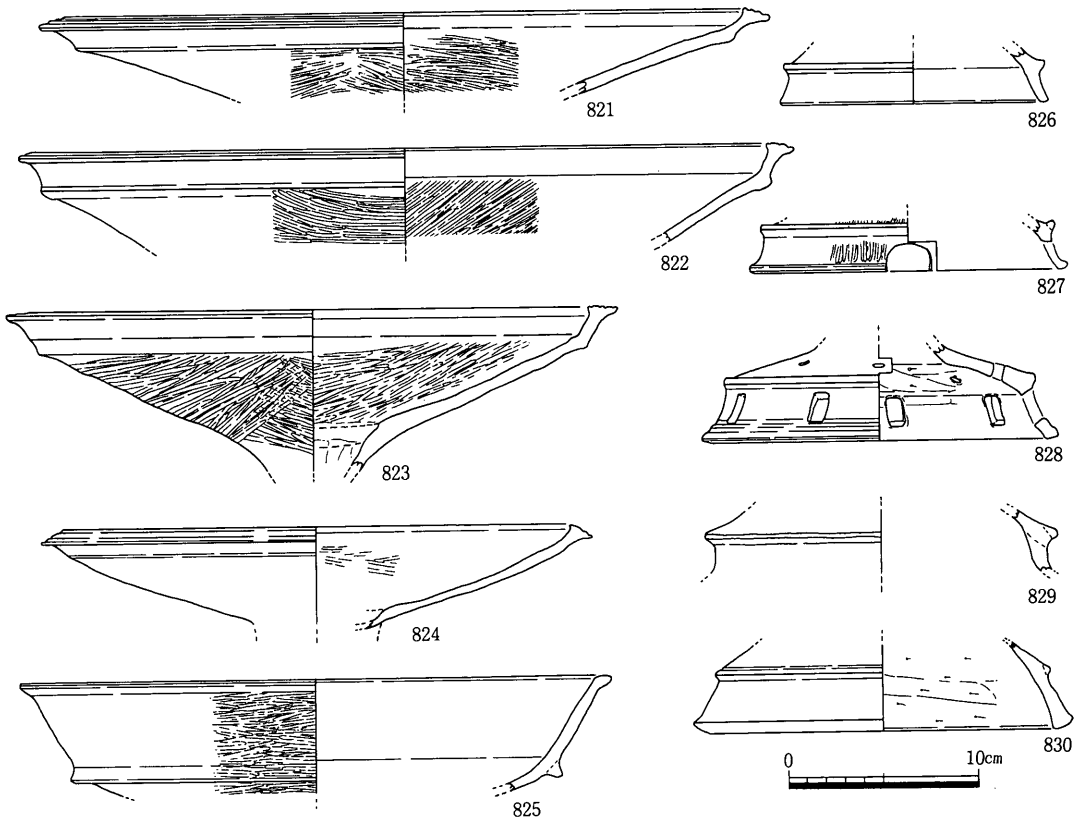
（810）は直立口縁形態高坏の系統であるが，上半部がやや開き口縁端部を外方に強く張り出すやや後出的な形態である。（811）は口縁端部を鈍く肥厚するが中位の屈曲がない特異な形態。頂部に鈍い凹線を加えることから拡張口縁形態に関係するものであろうが，例外的な器形である。（812～814）は拡張口縁形態の系統だが，端部の摘み出しがきわめて弱い。上半部の外傾が強まったり中位の屈曲がやや鈍くなっているので後期初頭でもかなり新しい様相である。（815～820）は上半部の外傾も弱く端部は鈍く肥厚しつつ内外に摘み出す形態。（821～823）は上半部が強く外傾するが中位の屈曲はしっかりしている。（824）の中位の屈曲を完全に失った形態は例外的なものである。後期初頭段階の装飾高坏は内容が画一的ではなく，大形器台と共に個体差が激しい器種であるが，それにしても（825）の形態は特異なものである。中位の屈曲と上半部の外反がきわめて弱い。装飾高坏脚（826～830）は，脚裾部は多少外反するもののまだ大きく発達していない段階のものである。（827）は脚端部に半円形の切り込みを有する。（831～838）は直立口縁形態の高坏。（831）のように口縁端部を丸く納めるものと（833）のように四角く納めるものとがある。後者では中位の屈曲がやや強く鈍い稜を持つものもある。この系統の高坏では下半部放射状ミガキを原則とする。上半部外面に鈍い凹線を持つ（837）はこの系統の祖形の一つである中期末の高坏形態の特徴をよくとどめる。上半部が外傾する（838・839）はこの系統の新しい様相である。また上半部が長く伸び緩く外反する（841）は後期前葉以降の後出的な形態である。（842～844）は後期初頭段階に属する外反口縁形態の唯一の系統。（843）のように屈曲部に3個1対の円形刺突文を有することが多い。後期前葉以降の下川津Ｂ類高坏の祖形で，屈曲部の形状と未発達な坏上半部の形状でそれと区別できる。（845）は後期初頭からせいぜい前葉まで少数見られる形態である。浅い坏部で口縁部は小さいが強く内湾する。

脚（846～854）は脚端部を肥厚させる形態。一般に脚端上部の突出は鈍い。その部分を強く外方に引き出す形態は同時期の吉備南部地方の特色である。また（851～854）のような脚部の施文も同地方に多く讃岐地方ではきわめて少ない。（851・853・854）は搬入品である。本溝資料では（846～850）に見るように脚端部の肥厚は全般的にやや鈍いものが多い。この点は後期初頭のやや新しい様相である。（855・856）は円錐状脚部形態。脚端部の小さい外反が特色である。また裾部の円形透かしもやや大形となる。裾部のやや発達した（857）はこの系統の後出的な形態である。（858）は短い柱状軸部を持つ形態に近いが，



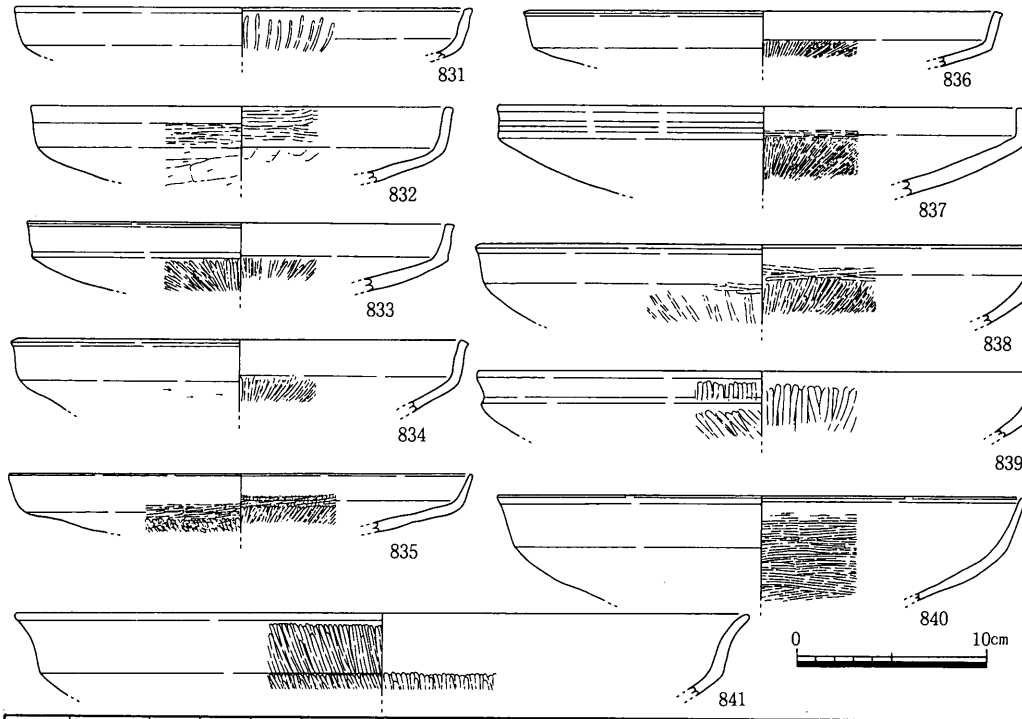
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
810	高坏	28.0			細・極多	橙色	中位で強く屈曲して上半部は短くやや外傾。端部は外方に張り出す。下半部外面横ｹｽﾞﾘ。	1/10	角閃石極多、石英等・赤色粒
811	高坏	27.3			細・極多	暗褐色	中位で緩やかに湾曲して上半部は直立。端部は鈍く肥厚して内方に張り出す。端面凹線。上半部外面太い凹線。横ﾅﾃﾞ	1/16	角閃石極多
812	高坏	24.4			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾して短い。端部は鈍く肥厚しつつ内外に小さく摘む。端面凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ、内面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多
813	高坏	10.8			細・極多	明赤褐色	中位で強く屈曲して稜。上半部はやや外傾して端部は鈍く肥厚して外方に張り気味に四角く納める。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部内面放射状ﾐｶﾞｷ	1/8	角閃石極多、石英等多
814	高坏	29.5			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部はやや外傾して端部は内方に小さく突出すると共に外方もやや張る。端面凹線、上半部外面横ﾅﾃﾞ、内面横ﾊｹ。下半部外面横ｹｽﾞﾘ後分割横ﾐｶﾞｷ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多、雲母
815	高坏	22.2			細・極多	褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾して端部は外方に摘み出すと共に内方もやや張る。端面凹線、上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ後横ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多
816	高坏	25.6			細・極多	黒色　灰黄褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部はほぼ直立して端部は内外に摘み出す。端面凹線、上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多
817	高坏	25.2			細・極多、中・普	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部外傾。端部内外に摘み出す。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ	1/10	角閃石極多、雲母多、石英等
818	高坏	25.0			細・極多	褐灰色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部はやや外傾して端部は内外に摘み出す。端面凹線、上半部横ﾅﾃﾞ、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多
819	高坏	26.2			細・極多、中・多	にぶい黄色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部はやや外傾して端部は内方に摘み出し外方も張る。頂部凹線。上半部横ﾅﾃ、下半部内面横ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多、石英等多
820	高坏				細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部外傾。端部は外方に引き出し内方も突出。端面凹線。		角閃石極多

第257図　４区ＳＤ16f溝出土遺物11（１／４）



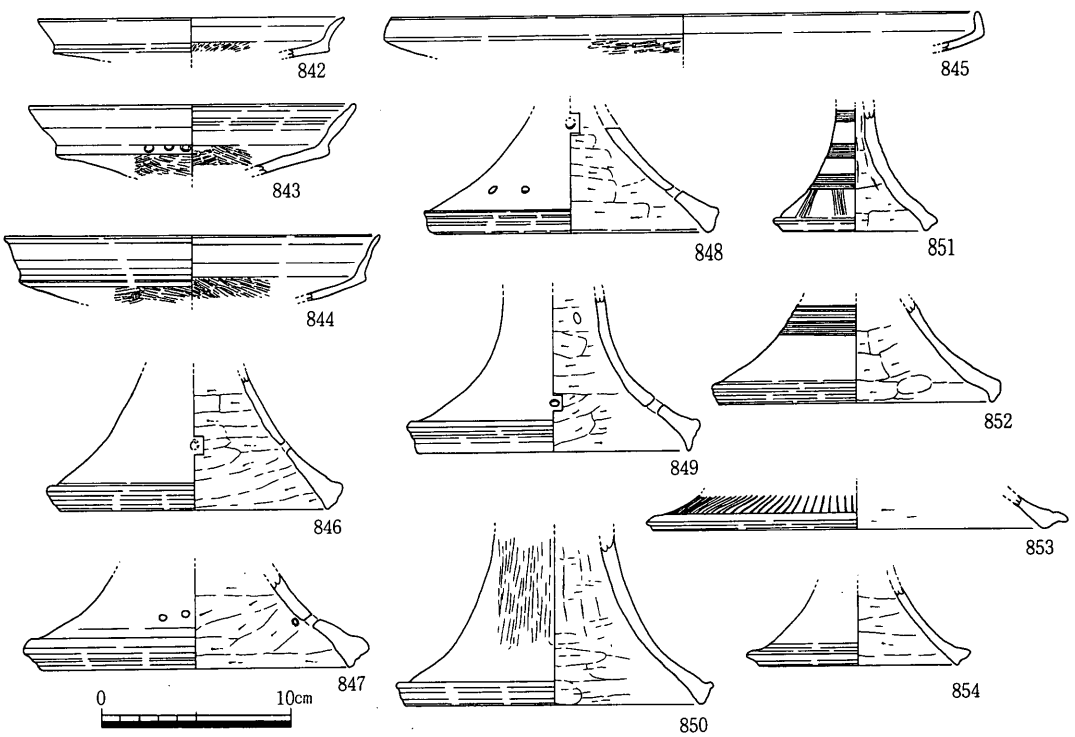
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
821	高坏	35.6			細・極多	にぶい黄橙色	浅い坏部。中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は強く外傾して端部は外方に引き出すと共に内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｹｽﾞﾘ後分割横ﾐｶﾞｷ。内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、雲母多
822	高坏	38.0			細・極多	にぶい褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部やや外傾。端部は外方に引き出し内方も突出する。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部横ﾐｶﾞｷ	1/16	角閃石極多、雲母多
823	高坏	29.0			細・極多、中・多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外傾して端部は外方に摘み出すと共に内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面分割横ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。円盤充塡	3/8	角閃石極多（含粗粒）
824	高坏	28.6			細・極多	浅黄色	浅い皿状の坏部。屈曲部は退化して鈍い凹線１条。端部は外方に摘み出すと共に内方も小さく突出。横ﾅﾃﾞ。円盤充塡	2/5	角閃石極多
825	装飾高坏	30.7			細・極多	にぶい黄褐色	中位で緩やかに屈曲して上半部外傾。端部は小さく外方に折り返して丸く納める。屈曲部に断面矩形の突帯。外面横ﾐｶﾞｷ、内面横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多
826	装飾高坏			13.5	細・極多	にぶい橙色	脚裾部有段。屈曲部に小形の突帯。脚端部は小さく反って丸く納める。横ﾅﾃﾞ	1/12	角閃石極多
827	装飾高坏			15.7	細・極多	灰黄色	脚裾部有段。屈曲部に突帯。裾部は外反して端部は丸く納める。脚端部に大形の半円形くり込み。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多
828	装飾高坏			17.5	細・極多	灰黄褐色	脚裾部有段。屈曲部に断面矩形の低い突帯。端部は外方に張り気味に四角く納める。上部に円形透かし、下部に長方形透かし。内面上部横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
829	装飾高坏				細・極多	褐色	脚裾部有段。屈曲部に突帯。裾部は外反。	1/6	角閃石極多、石英等
830	装飾高坏			18.0	細・極多	にぶい黄褐色	脚裾部はやや退化した有段。鈍い屈曲部に断面三角形の小突帯。端部は鈍く肥厚して内外に張る。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/7	角閃石極多

第258図　４区ＳＤ16f溝出土遺物12（１／４）



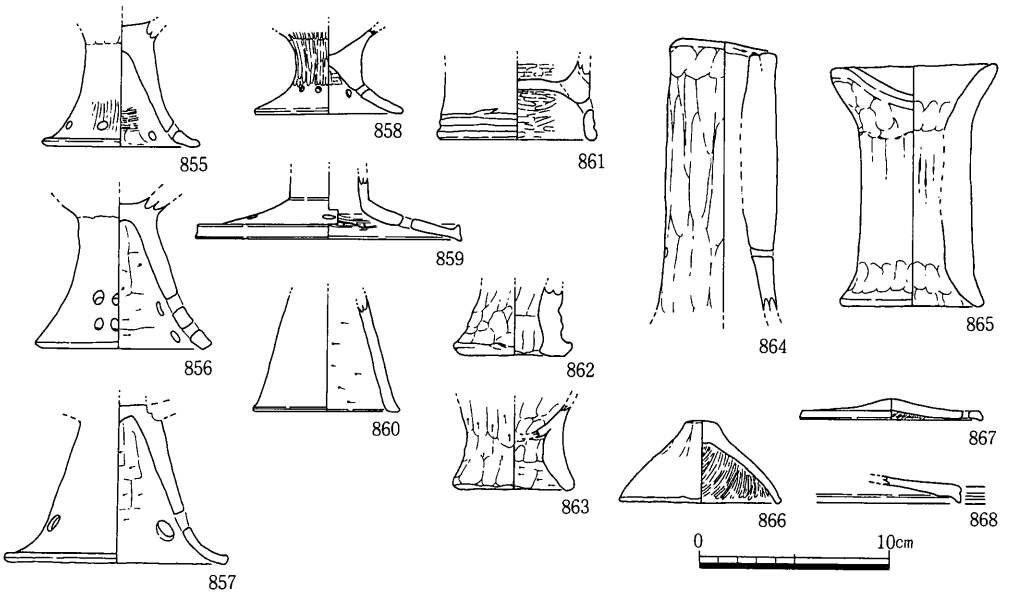
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
831	高坏	23.4			細・極多	淡橙色	中位で屈曲して上半部はほぼ直立。端部は外方に張り気味に丸く納める。外面横ﾅﾃﾞ。内面疎らな放射状ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多
832	高坏	22.2			細・極多	浅黄色	中位で緩やかに屈曲。上半部は直立して端部は外方に張り気味に四角く納める。上半部外面横ﾅﾐｶﾞｷ、内面横ﾊｹ、下半部外面横ｸｽﾞﾘ、内面横ﾅﾃﾞ。	1/12	角閃石極多
833	高坏	22.4			細・極多	暗褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は直立して端部は外方に突出気味に四角く納める。上半部横ﾅﾃﾞ。下半部放射状ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、石英等多
834	高坏	23.2			細・極多、中・多	暗褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部はほぼ直立して端部は外方に突出気味に四角く納める。上半部横ﾅﾃﾞ。下半部外面横ｸｽﾞﾘ、内面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等多
835	高坏	24.2			細・極多	黒色	中位で屈曲して上半部は短くやや外傾。端部は丸く納める。上半部横ﾅﾃﾞ後下端横ﾐｶﾞｷ、下半部外面横ｸｽﾞﾘ後内外面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多
836	高坏	24.6			細・極多	褐色　にぶい黄褐色	中位で屈曲して稜。上半部は短く直立して端部は四角く納める。上半部横ﾅﾃﾞで、外面鈍い凹線。下半部内面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等
837	高坏	27.6			細・極多	黒褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部はやや外傾して端部は外方に張り気味に四角く納める。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部内面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、石英等多
838	高坏	29.7			細・極多	にぶい黄色　にぶい褐色	中位で緩やかに屈曲。上半部はやや外傾して端部は外方に張り気味に丸く納める。上半部横ﾅﾃﾞ後下端横ﾅﾐｶﾞｷ、下半部外面横ｸｽﾞﾘ後、内外面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、赤色粒
839	高坏	29.8			細・極多	灰黄色	中位で屈曲して鈍い段。上半部は短く外反して端部は尖る。外面上半部縦ﾐｶﾞｷ、下半部斜ﾐｶﾞｷ、内面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/16	角閃石極多
840	高坏	27.8			細・極多	橙色	緩やかに湾曲して上半部は外傾。端部は外方に突出気味に丸く納める。外面横ﾅﾃﾞ。内面横ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多
841	高坏	38.4			細・極多	灰黄色	中位で緩やかに屈曲して鈍い稜。上半部は外反して端部は外方に突出気味に丸く納める。上半部外面縦ﾐｶﾞｷ。内面横ﾅﾃﾞ。下半部放射状ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、石英等・雲母多

第259図　４区ＳＤ16f溝出土遺物13（１／４）



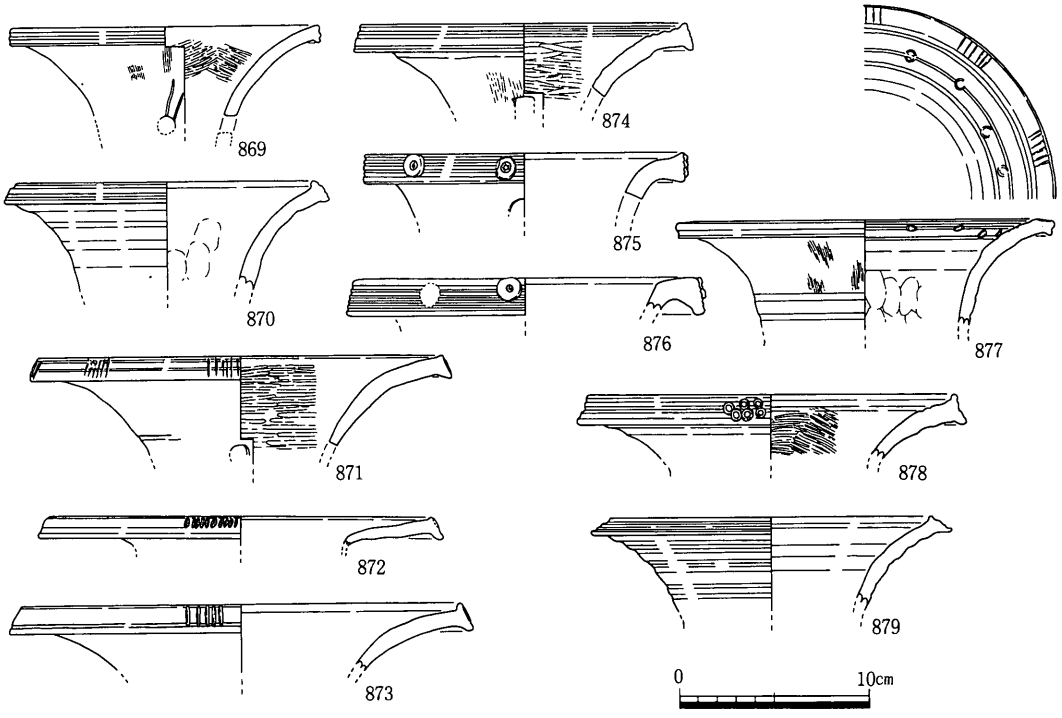
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
842	高坏	16.0			細・極多	橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は短く外反して端部は尖る。下半部内面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、石英等・赤色粒
843	高坏	17.0			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段に３個１対の円形刺突文。上半部は外反し端部は丸く納める。上半部横ﾅﾃﾞ、内面凹線。下半部外面横ｹｽﾞﾘ後分割横ﾐｶﾞｷ。内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/5	角閃石極多、石英等多
844	高坏	19.6			細・極多	にぶい褐色	中位で強く屈曲して稜。上半部は外反して端部は尖る。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部分割横ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多
845	高坏	30.6			細・極多、中・多	にぶい黄褐色	強く屈曲して上半部は短く内傾。端部は丸く納める。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ﾐｶﾞｷ。	1/16	角閃石極多、石英等多
846	脚			14.0	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩やかに開く。端部は肥厚し内外に張る。端面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。円形透かし。	1/3	角閃石極多
847	脚			16.0	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩やかに外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ下方に小さく摘む。端面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。２孔１対の円形透かし。	1/4	角閃石極多
848	脚			12.0	細・極多	褐色	脚裾部は強く開く。端部は鈍く肥厚し上部が小さく突出。端面凹線。円形透かし２段、下段２孔１対。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
849	脚			14.0	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上部も鈍く突出。端面凹線円形透かし２段。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/2	角閃石極多
850	脚			15.4	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩やかに外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ上方に突出して下方も張る。端面凹線。外面上部縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
851	脚			13.0	中・多	にぶい黄色	脚裾部は緩やかに外反して開く。端部は上下に小さく摘む。内面横ｹｽﾞﾘ。櫛描並行沈線３段と櫛描垂下沈線	1/2	石英等多、火山ガラス？搬入品
852	脚			13.9	細・極多	にぶい黄褐色	脚裾部は強く外反して開く。端部は下方に小さく摘み出す。端面凹線。裾部篦描並行沈線と垂下沈線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/6	角閃石極多
853	脚			19.6	細・普	灰白色	脚裾部を大きく開く。端部は鈍く肥厚しつつ上部を外方に強く摘み出す。外面垂下沈線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/16	石英等　搬入品
854	脚			10.2	細・普	明褐灰色	脚裾部は強く外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ上部を外方に摘み出す。裾部に円形刺突文。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/3	石英等　搬入品

第260図　４区ＳＤ16f溝出土遺物14（１／４）



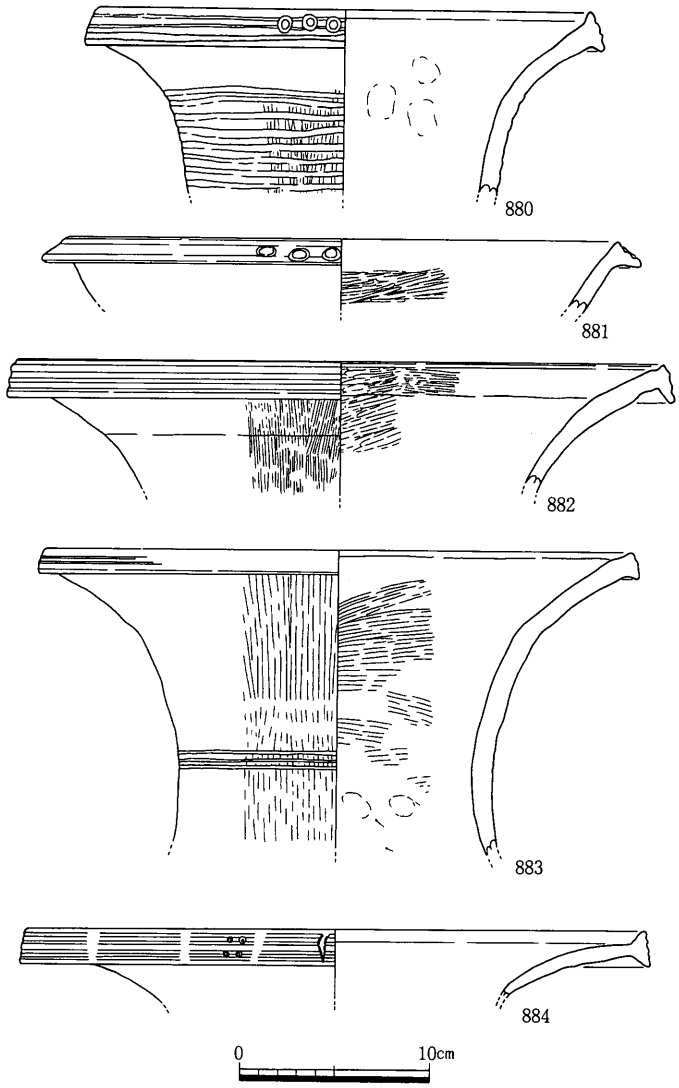
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
855	脚			8.2	細・極多	灰黄褐色	脚裾部は緩く開き、端部は小さく反って丸く納める。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面下半横ﾊｹ。２個１対の円形透かし。	1/4	角閃石極多、雲母
856	脚			8.5	細・極多	にぶい黄褐色	脚部は緩く外反して開き端部四角く納める。内面横ｹｽﾞﾘ。２段に配した４孔１対の中形円形透かし４方。	全周	角閃石極多、石英等多
857	脚			11.4	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩く開き、端部は小さく反って肥厚気味に丸く納める。内面横ｹｽﾞﾘ。中形円形透かし５方。	4/5	角閃石極多、石英等・雲母多
858	脚			7.6	細・極多	にぶい黄褐色	短い柱状軸部から緩やかに折り返して裾部は強く開く。端部は丸く納める。軸部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ｹｽﾞﾘ、裾部横ﾅﾃﾞ。２孔１対の円形透かし３方。	2/3	角閃石極多
859	脚			14.0	細・極多	にぶい赤褐色	柱状の軸部から強く折り返して裾部は大きく開く。端部は上下に小さく摘み出す。外面横ﾅﾃﾞ、内面裾部横ﾊｹ。円形透かし。	1/3	角閃石極多
860	脚？			7.5	細・極多、中・多	褐色	脚裾部の開き弱い。端部は外方に張り気味に四角く納める。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/3	角閃石極多、石英等多
861	脚			7.5	細・極多	灰黄褐色	円筒形脚台。端部丸く納める。外面沈線２条。脚上部の相対する位置に円孔。内面横ﾐｶﾞｷ	3/4	角閃石極多
862	製塩土器			5.2	細・極多、中・極多	にぶい黄橙色	円筒形の脚台部は強く押さえつけて下端がやや つぶれる。外面指押さえ、内面ﾅﾃﾞ。	全周	角閃石・石英等極多
863	製塩土器			5.6	細・極多、中・多	黄褐色　黄灰色	円筒形の脚台部は下端やや開く。外面縦ｹｽﾞﾘ後脚端部押さえ。内面指押さえ後下端部横ｹｽﾞﾘ、円盤充塡	1/4	角閃石極多、石英等多
864	筒状土製品				細・極多	灰黄褐色	厚手の円筒形を呈し一端は四角く納める。粘土帯を二重に巻いて成形。他端に向かってわずかに開き薄くなる。相対する２方に小貫通孔。外面指ﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ。	全周	角閃石極多
865	支脚	8.4	12.2	7.5	細・極多	橙色	柱状軸部の上部は鈍く開き、一方を浅く半円形にくり込む。端部は丸く納める。裾部も小さく開き端部は丸く納める。軸部ﾅﾃﾞ、上下端は指押さえ。	全周	角閃石極多
866	蓋	8.1	4.3	1.6	細・極多	にぶい黄橙色	栽頭円錐形を呈する。やや突出気味の頂部は分厚い。端部は外方に張り気味に丸く納める。外面ﾅﾃﾞ、内面螺旋状ﾐｶﾞｷ。	ほぼ完存	角閃石極多
867	蓋	9.2			細・極多	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	頂部がわずかに隆起した円盤状。端部は小さく下方に摘み出す。内面ﾐｶﾞｷ。紐通孔	1/4	角閃石極多
868	蓋				細・極多	浅黄橙色	円盤状を呈する。端部は小さく下方に摘み出し端面横ﾊｹ。外面横ﾐｶﾞｷ、内面横ﾊｹ後横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多

第261図　４区ＳＤ16f溝出土遺物15（１／４）



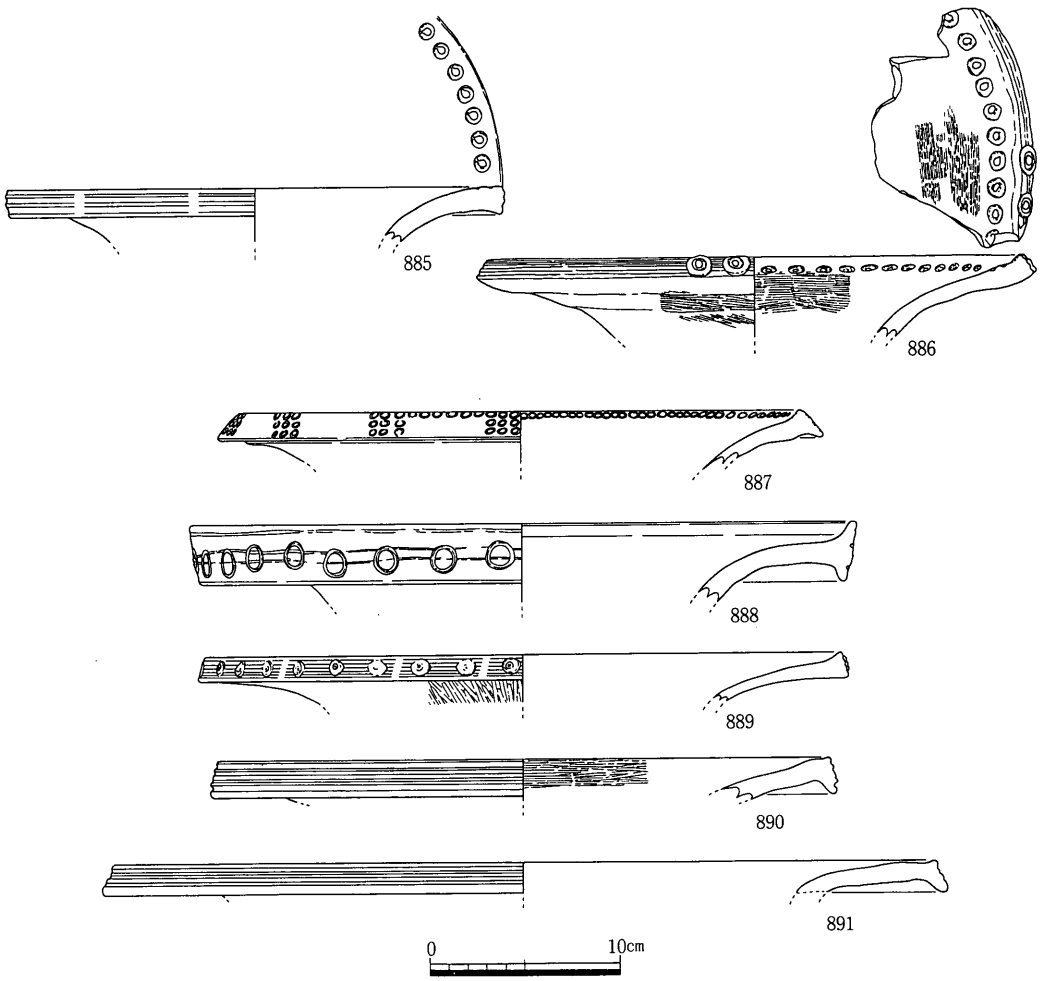
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
869	小形器台	16.0			細・極多	暗褐色	口縁部は強く外反して開く。端部下方に張り気味に四角く納める。端面凹線。外面縦ﾊｹ、口縁部内面分割横ﾐｶﾞｷ。中位に中形円形透かしと篦描垂下沈線２条	1/5	角閃石極多
870	小形器台	15.6			細・多	にぶい黄褐色	口縁部は緩やかに外反して開き、端部は内外に摘み出す。端面・外面凹線。	1/8	角閃石・石英等多 搬入品
871	小形器台	21.2			細・極多	灰褐色	口縁部は強く外反して開く。端部は下方に摘み出すと共に上方も小さく突出。端面鈍い凹線・６条１対の短刻線。外面沈線、内面分割横ﾐｶﾞｷ。中位に中形円形透かしと篦描垂下沈線２条	2/5	角閃石極多、石英等
872	小形器台	20.0			細・極多	褐色	口縁部は強く折り返して大きく水平に開く。端部は下方に引き出し上方も鈍く突出。端面ﾊｹ原体刺突文。	1/14	角閃石極多
873	小形器台	23.0			細・極多	灰黄色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は上下に摘み出して端面５条１対の短刻線。	1/8	角閃石極多
874	小形器台	17.2			細・極多	灰黄褐色	口縁部は強く外反して開く。端部は上下に小さく摘み出して端面凹線。外面縦ﾊｹ、内面横ﾐｶﾞｷ。中位に長方形透かし	1/4	角閃石極多、雲母
875	小形器台	16.8			細・極多	灰黄色	口縁部は強く折り返して短く水平に開く。端部は上下に張る。端面凹線・円形浮文。頸部に大形円形透かし。	1/6	角閃石極多、石英等多
876	小形器台	18.0			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して短く水平に開く。端部は強く下方に引き出して端面櫛描並行沈線・円形浮文	1/8	角閃石極多
877	小形器台	20.0			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して開く。端部は下方に張り気味に四角く納める。端面凹線、口縁部内面凹線・円形刺突文。外面縦ﾊｹ後沈線、内面指押さえ。中位に中形円形透かしと篦描垂下沈線２条	1/4	角閃石極多、雲母
878	小形器台	19.0			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に小さく摘み出す。端面凹線と６個１対の円形刺突文。外面横ﾅﾃﾞ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/3	角閃石極多
879	小形器台	16.8			細・極多	にぶい黄色	口縁部は外反して開き、端部は外方に摘み出し内方も小さく突出。端面・内外面凹線。	1/10	角閃石極多

第262図　４区ＳＤ16f溝出土遺物16（１／４）



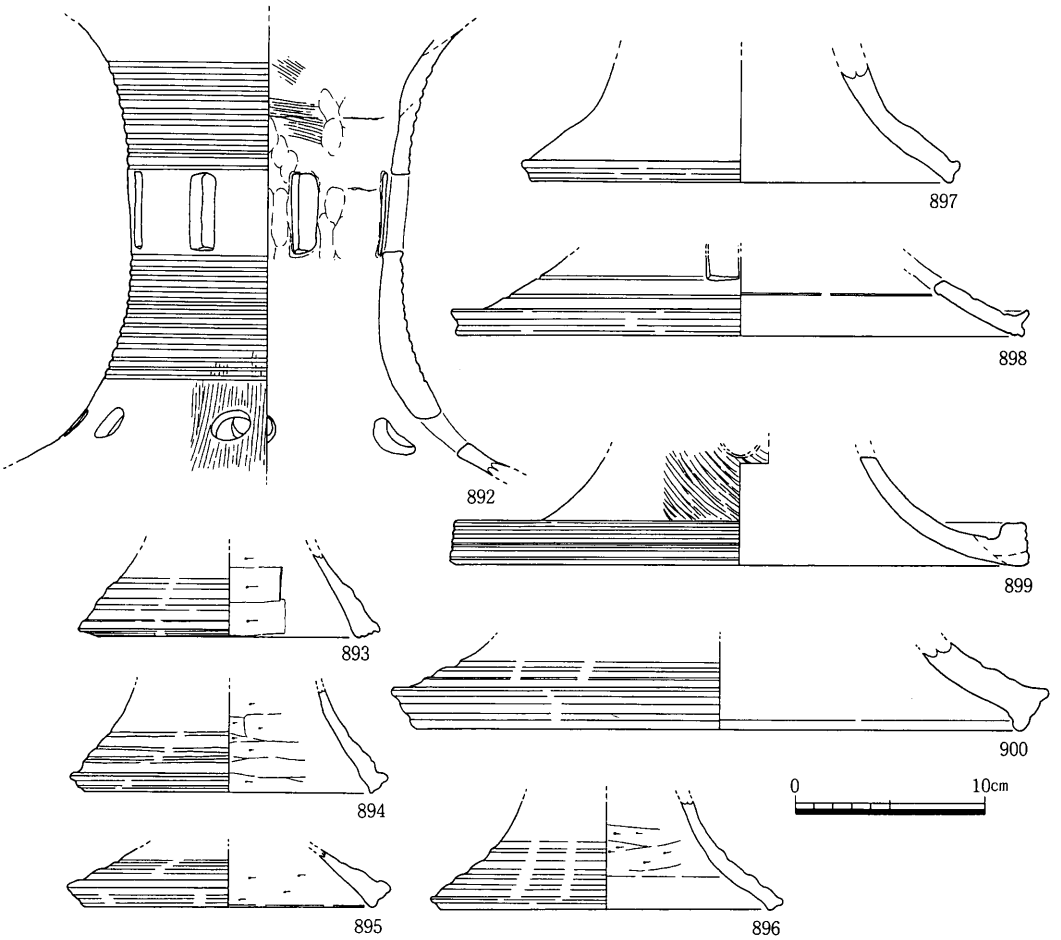
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
880	大形器台？	15.8			細・極多、中・多	灰黄褐色	やや外傾する頸部から緩く折れて口縁部は開く。端部は上下に摘み出して端面沈線３条と３個１対の円形刺突文。頸部外面縦ﾊｹ後並行沈線。内面指押さえと横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多、石英等多
881	大形器台	28.8			細・極多	灰黄褐色	外傾する口縁端部は強く外方に引き出す。端面３個１対の円形刺突文。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多
882	大形器台	34.0			細・極多、中・多	にぶい黄橙色	口縁部は外反して大きく開き端部は下方に摘み出すとともに上方も小さく突出。端面沈線。口縁部内面横ﾊｹ後分横ﾐｶﾞｷ、外面縦ﾊｹ。	1/4	角閃石極多、石英等多
883	大形器台	30.6			細・極多	浅黄色	口縁部は強く外反して開き、端部は下方に小さく摘む。端面鈍い凹線。外面縦ﾊｹ後中位に沈線３条、内面上半部横ﾊｹ、下半部横ｹｽﾞﾘ。	1/5	角閃石極多
884	大形器台	32.4			細・極多	にぶい橙色	口縁部は大きく水平に開き端部は上下に摘み出す。端面凹線後４個１対の円形刺突文と棒状浮文。	1/16	角閃石極多

第263図　４区ＳＤ16f溝出土遺物17（１／４）



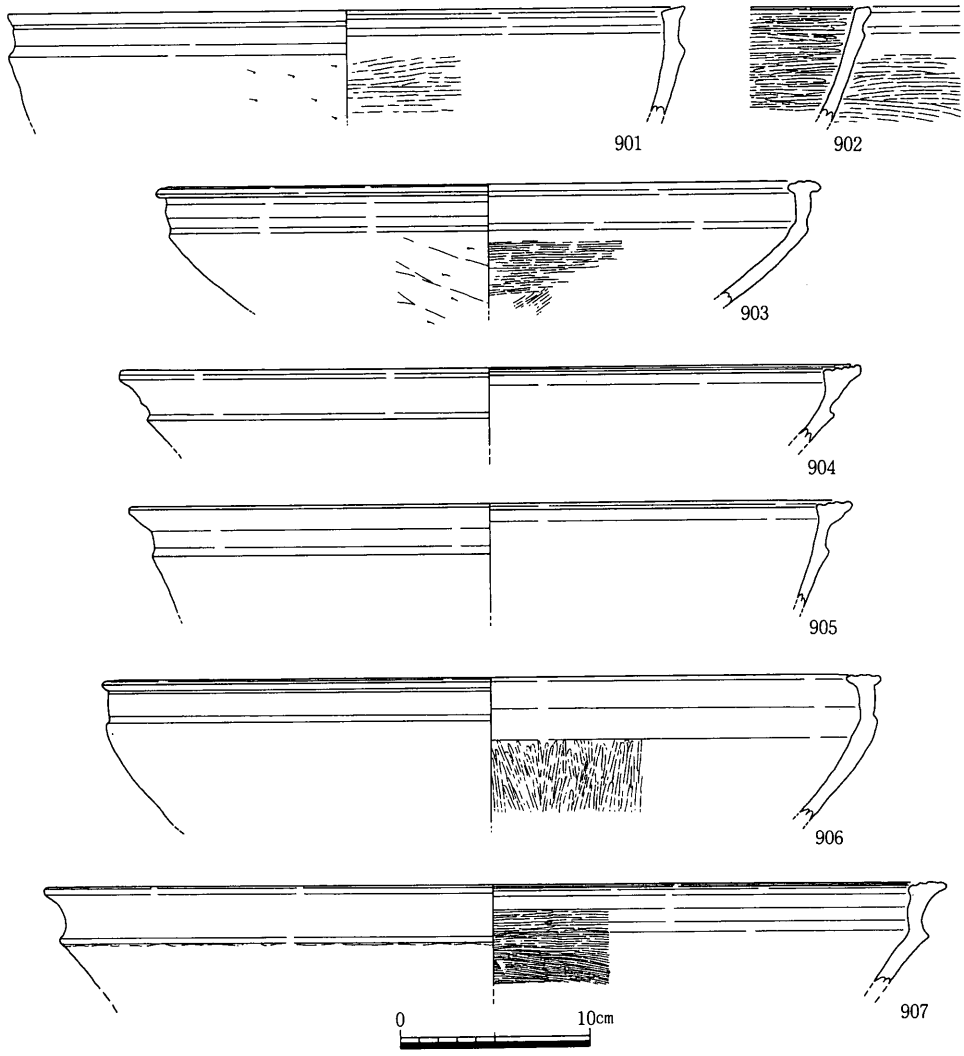
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
885	大形器台	26.0			細・極多、中・普	明褐色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は下方に張り気味に四角く納める。端面凹線、口縁部内面円形刺突文。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多、石英等多、雲母
886	大形器台	27.8			細・極多	にぶい黄色	口縁部は外反して大きく開き、端部は鈍く肥厚しつつ下方に張り上方も小さく突出。端面沈線・2個1対の円形浮文。口縁部内面円形刺突文。横ﾊｹ	1/6	角閃石極多
887	大形器台	29.6			細・極多	灰黄褐色	口縁部は外反して大きく開き、端部は外方に引き出しつつ上方もやや突出する。口縁部内面・端面に円形刺突文。横ﾅﾃﾞ。	1/2	角閃石極多、雲母
888	大形器台	34.8			細・極多	灰黄褐色	口縁部は大きく水平に開く。端部は上下に強く引き出してやや外傾する端面に円形刺突文	1/4	角閃石極多　赤色顔料？
889	大形器台	23.4			細・極多、粗・多	黒褐色～灰黄色　橙色～灰黄色	口縁部は外反して大きく開き、端部は鈍く肥厚しつつ上方に張る。端面凹線・円形浮文。外面縦ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多、石英等多
890	大形器台	32.0			細・極多	黄褐色	口縁部大きく水平に開き、端部下方に摘み出し端面沈線。口縁部内面横ﾐｶﾞｷ、外面縦ﾊｹ。	1/4	角閃石極多　赤色顔料
891	大形器台	43.0			細・極多	黄褐色	口縁部は大きく水平に開き端部は下方に引き出しつつ上方もやや突出。端面沈線3条。	1/2	角閃石極多、雲母

第264図　4区ＳＤ16f溝出土遺物18（1／4）



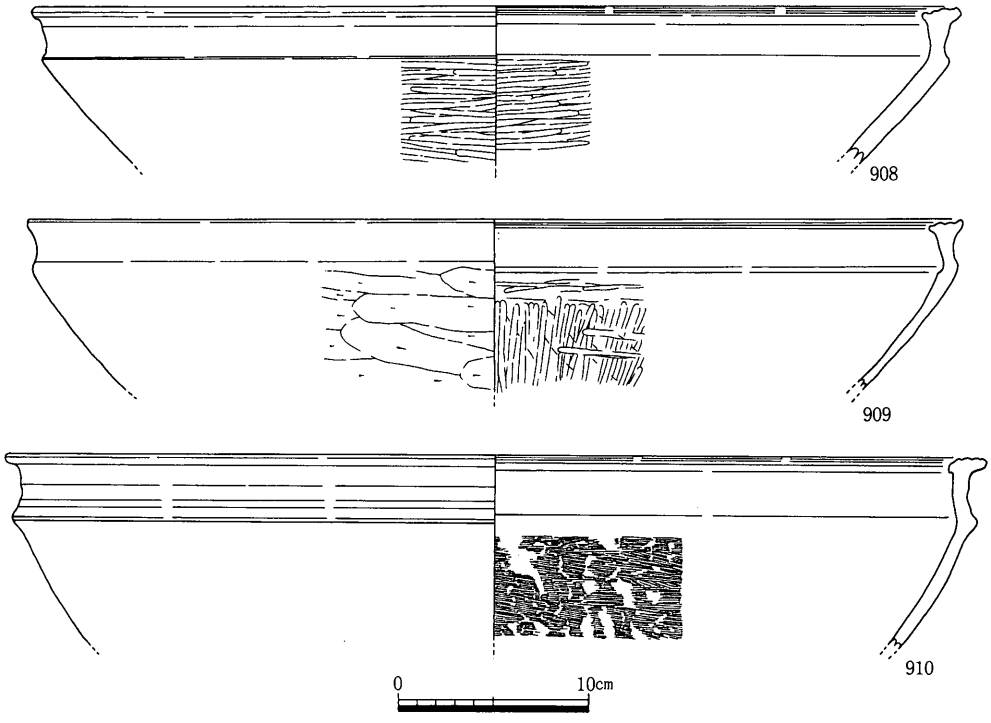
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
892	大形器台				細・極多、中・普	にぶい黄橙色　橙色	脚裾部は大きく外反して開く。中位に大形長方形透かし８方と上下に櫛描並行沈線、裾部大形円形透かし８方。外面縦ﾊｹ、内面上半部横ﾊｹ、中位に指押さえ。	1/2	角閃石極多、石英等
893	小形器台			13.6	細・極多	にぶい褐色	脚裾部は緩やかに開き、端部は肥厚して上部をやや突出。端面・裾部凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
894	小形器台			15.0	細・極多	褐色	脚裾部は緩やかに外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ外方に張り気味に四角く納める。裾部・端面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/2	角閃石極多
895	小形器台			15.0	細・極多	浅黄色	脚裾部は強く外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ上方にやや張る。裾部・端面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
896	小形器台			17.3	粗・多	赤色	脚裾部は強く外反して開く。脚端部は上部を小さく突出して四角く納める。外面・端面凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	5/8	石英等多　搬入品
897	大形器台			22.0	細・極多	灰黄褐色	脚裾部は外反して開き、端部は小さく上下に摘む。端面凹線。内面横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多
898	大形器台			30.0	細・極多、中・普	にぶい黄褐色	脚裾部は外反して大きく開く。端部は上方に強く摘み出し下部も外方に突出。端面凹線。外面沈線３条。大形長方形透かし。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多、石英等多
899	大形器台			29.7	細・極多、中・普	にぶい褐色	脚裾部は大きく外反して開く。端部は粘土帯を付して断面矩形に上方に突出する。端面沈線。外面斜ﾐｶﾞｷ。裾部大形円形透かし。口縁部の可能性も	1/4	角閃石極多、石英等
900	大形器台			31.6	細・極多、中・少	にぶい黄色	脚裾部は強く開き、端部は鈍く上下に摘み出す。端面・裾部外面凹線、横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、石英等少　赤色顔料

第265図　４区ＳＤ16f溝出土遺物19（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
901	大形鉢	35.6			細・極多、中・普	にぶい黄色　暗灰黄色	やや屈曲して鈍い段。口縁部はやや内傾して端部は内外に張り出す。口縁部横ﾅﾃﾞ、外面横ｹｽﾞﾘ、内面横ﾊｹ。	1/8	角閃石極多、石英等
902	大形鉢				細・極多	黒褐色	口縁端部は四角く納め、直下に凹線。外面横ﾊｹ、内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多
903	大形鉢	33.6			細・極多、中・普	にぶい黄色	中位で強く屈曲して上半部はわずかに内湾。端部内外に摘み出し頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、外面鈍い凹線。下半部外面横ｹｽﾞﾘ、内面横ﾊｹ	1/12	角閃石極多、石英等
904	大形鉢	35.0			細・極多	暗褐色	中位で屈曲して鈍い段。上半部はやや外傾して端部は肥厚しつつ外方に摘み出すと共に内方も張る。頂部凹線。	1/8	角閃石極多
905	大形鉢	37.6			細・極多	にぶい黄褐色	やや外傾して立ち上がり、口縁部下に屈曲部の退化した鈍い段。端部は外方に摘み出すと共に内方も突出。端面凹線。横ﾅﾃﾞ。	1/16	角閃石極多　赤色顔料
906	大形鉢	40.8			細・極多	にぶい黄色	鈍く屈曲し鈍い段。口縁部はやや内傾する。端部は内外に摘み出し、頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、過半部外面縦ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等　赤色顔料
907	大形鉢	47.4			細・極多、中・多	灰黄色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部ほぼ直立。端部は外方に引き出し内方も突出。端面凹線、外面横ﾅﾃﾞ、内面口縁部横ﾅﾃﾞ、以下横ﾊｹ	1/12	角閃石多、石英等多　搬入品？

第266図　４区ＳＤ16f溝出土遺物20（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
908	大形鉢	49.0			細・多、中・多	浅黄色	中位で強く屈曲し鈍い段。上半部短く内傾。端部は外方に引き出すと共に内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部横ﾐｶﾞｷ。	1/12	雲母・角閃石・石英等多　搬入品？
909	大形鉢	49.2			細・極多、中・普	黄褐色　灰黄色	中位で屈曲して鈍い段。上半部はやや内傾して端部は内外に摘み出す。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ｸｽﾞﾘ、内面斜方向のﾅﾃﾞ後放射状ﾐｶﾞｷ部分的に横ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多、石英等　赤色顔料
910	大形鉢	48.9			細・極多	にぶい黄褐色	強く屈曲して段。口縁部はやや内傾して端部は強く外方に引き出すと共に内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部外面横ﾅﾃﾞ、内面横ﾊｹﾒ。	1/10	角閃石極多、石英等・雲母

第267図　４区ＳＤ16f溝出土遺物21（１／４）

軸部はあまり明瞭ではない。(859) は柱状軸部を持つ形態。軸下端で強く折り返した裾部は水平に開く。(860) は内面横ケズリから脚部と推定したが，一般的な形状ではない。低い円筒形の脚台 (861) はある種の鉢ないしは壷の脚台であろう。製塩土器 (862・863) はやや大形の円筒形を呈し，後期初頭段階の特徴を持つ。

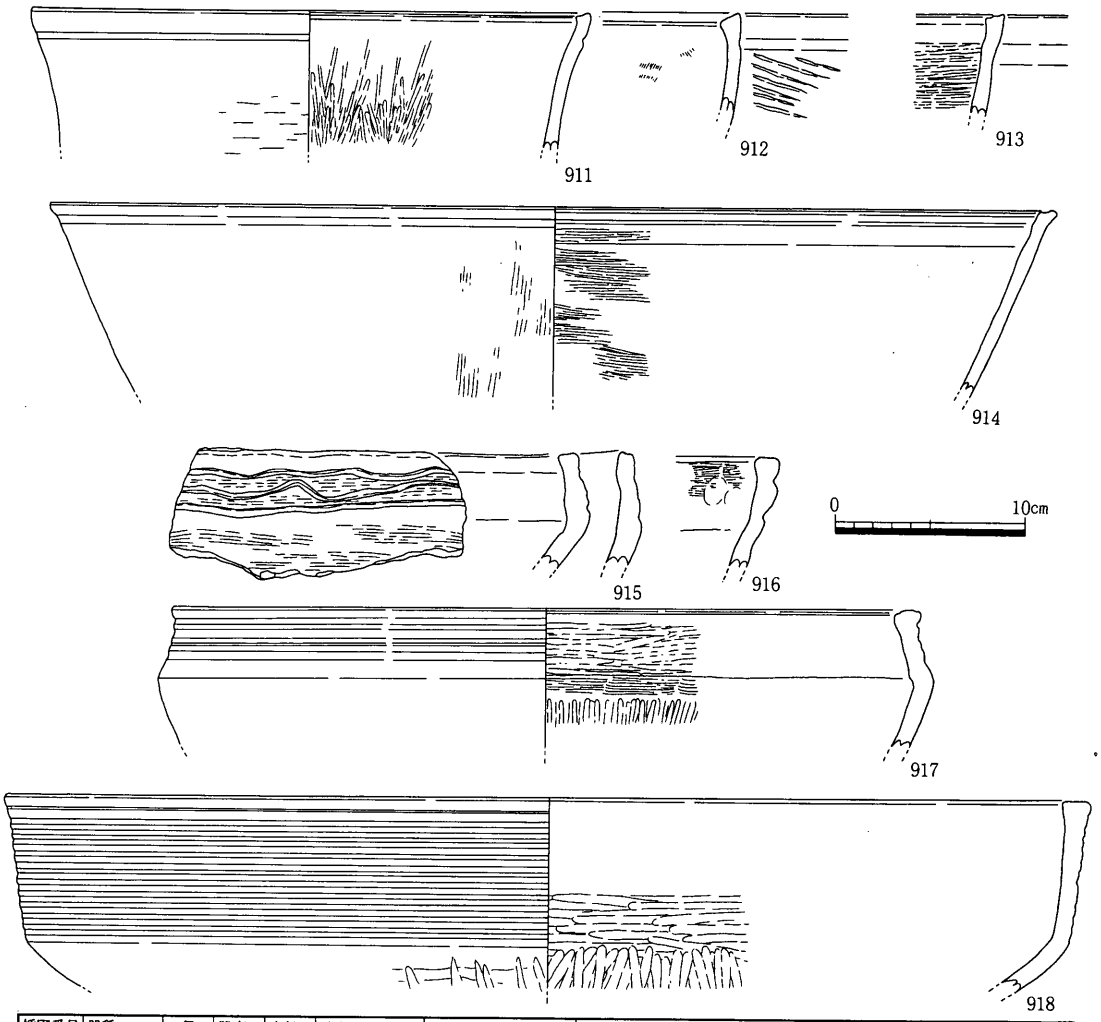
(864) は円筒形の不明土製品。外面は強い縦ナデで多面をなし，上端部は四角く納める。側面の相対する二方に小孔を穿つ。(865) は支脚。口縁部の一端を半円形に刳り込む。(866～868) は蓋。(866) は一見して小形鉢状だが，底部にしては極度に不安定な頂部形態から蓋とした。(867・868) は端部を小さく垂下させる形態だが，中心部が鈍く隆起する。

小形器台（869～879）の口縁部形態も差異が大きい。（869）では円形透かし孔に接して線刻がある。口縁部への加飾では円形浮文例（875・876）は多くなく，短刻線文（871等）や円形刺突文（878）を施すことが多い。（877）のような大きく発達して口縁端部が簡略化された形態では，口縁部内面にまで円形刺突文を加えることも少なくない。小形器台脚（893～896）は端部が鈍く肥厚する程度で目立った拡張はなく裾部外面に凹線文を加える。また裾部内面は原則的に横ケズリする。

f溝資料の大形器台（880～891）では顕著な垂下口縁形態は見られない。（880）は外傾頸部形態の広口壷に類似するが，口縁部が大きく発達することから大形器台とした。大形器台口縁部（881～884）は端部の極端な拡張もなく加飾も少ない。口縁端部の拡張・肥厚の鈍い（885～887）（889）は円形浮文・刺突文を多用する。（888）の口縁部形態は特異な複段口縁壷（763）に類似したものがあるものの，この形態は大形器台に限らず，壷にしても例外的である。大形器台脚（897～900）の形態も差異が大きい。が，脚端部を大きく拡張した形態は少ない。（899）は裾部外面のミガキ調整から脚部としたが，端部形状からすれば口縁部の可能性もある。

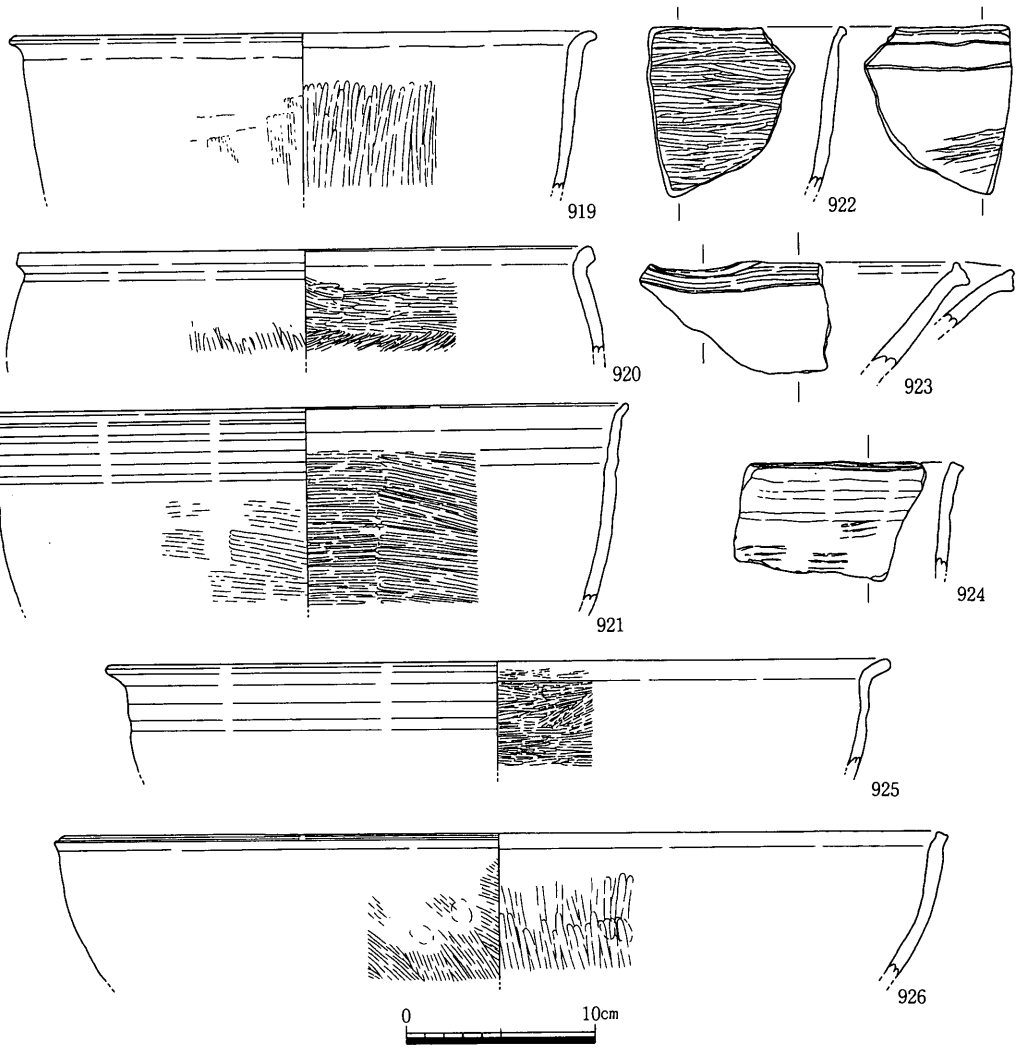
（901～910）は拡張口縁形態の大形鉢。（901・902）は口縁部がかなり退化した形態で，特に（902）では直下の屈曲が単なる凹線に転化している。（904～906）は口縁部の拡張は顕著であるが，直下の屈曲はかなり鈍い。これらは後期初頭でもやや新しい様相を示す。（903・907～910）は口縁部の拡張・屈曲ともに古い様相を示す。（911～914）は鈍く肥厚した口縁部直下に凹線1条を配する形態。（915～918）は鈍く屈曲して口縁部が内傾ないしは直立する形態。鈍く口縁部を摘み出す（917）は中期末の形態に近いが，その段階のものと比べるとやはり端部の形状は変化している。（915）の箆描波状文や（918）の多条化した並行沈線文を施す例は多くない。（917～926）は口縁部を小さく折り返す形態。やや肥厚した断面矩形の端部を小さく折り返す形態（920等）と，やや薄く丸く納めた端部を折り返す形態（925等）とがある。後者は外面に鈍い凹線文を見る。（927～930）は明瞭な屈曲部を持たずに口縁部をやや内湾させる形態。これら二系統は大形鉢としてはやや小振りとなる。小形鉢（937）は内面調整が緻密な点で，通有の後出的な小形鉢とするにはやや躊躇する。

（938～959）は把手付広片口皿。（938）は本遺跡資料では，唯一全体形状を知り得るものである。体部は浅い皿状で，平面形は檸檬形を呈する。一端を大形の片口とし，他端は鰭状の把手部をなし，把手部と体部はほぼ直立する半円形の立ち上がり部で遮断される。



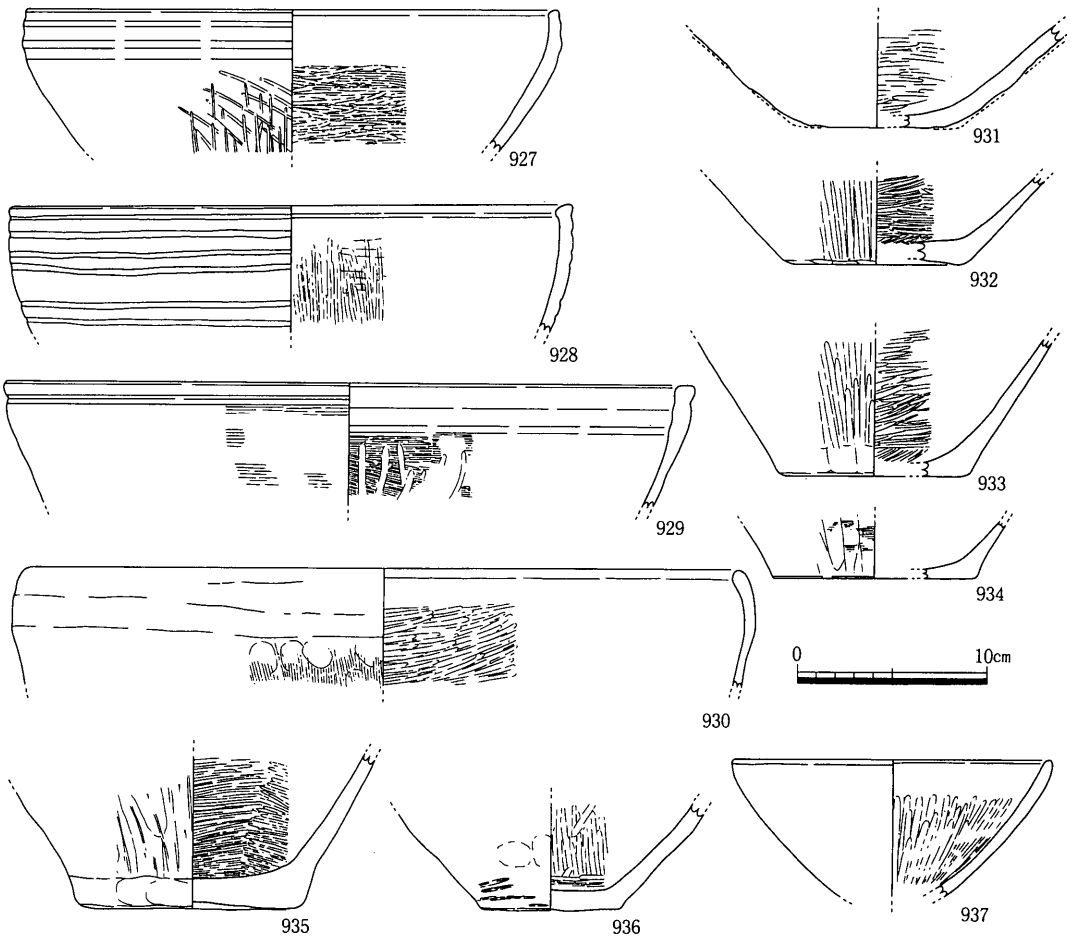
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
911	大形鉢	29.0			細・極多	にぶい黄橙色	緩く湾曲して立ち上がり、端部は内方に小さく突出。外面口縁部直下沈線１条。内面縦ﾐｶﾞｷ、外面横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多　赤色顔料
912	大形鉢				細・極多、中・少	にぶい黄褐色	口縁端部は内方に張り気味に四角く納める。口縁部直下凹線。外面叩き目残る。内面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、石英等少
913	大形鉢				細・極多、中・少	にぶい黄褐色	口縁端部は鈍く肥厚して内方に小さく突出。頂部凹線、内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、石英等少　赤色顔料
914	大形鉢	53.0			細・極多	にぶい黄色	口縁部は外傾し端部は小さく外方に摘み出す。口縁部直下鈍い凹線。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ内面横ﾊｹ	1/10	角閃石極多、雲母多　赤色顔料
915	大形鉢				細・極多	にぶい黄橙色	鈍く屈曲して口縁部は短く直立。端部は四角く納める。外面横ﾊｹ後、口縁部粗雑な篦描沈線・波状文。内面横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多　赤色顔料
916	大形鉢				細・極多	黒色　浅黄橙色	やや内湾気味に立ち上がり、端部内方に張る。口縁部外面凹線２条、内面横ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多
917	大形鉢	39.0			細・極多、中・多	明黄褐色　にぶい黄色	緩く屈曲して口縁部は内傾する。端部は鈍く外方に摘み出す。口縁部外面凹線、内面屈曲部横ﾊｹ後横ﾐｶﾞｷ、下半部放射状ﾐｶﾞｷ。	1/6	雲母極多、角閃石・石英等多　搬入品
918	大形鉢	55.6			細・極多、中・多	黒色～黄灰色　黄褐色	鈍く屈曲して口縁部は直立。端部は肥厚して四角く納める。口縁部外面篦描並行沈線。以下外面横ﾅﾃﾞ後縦ﾐｶﾞｷ。内面上半部横ﾐｶﾞｷ後下半部縦ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等多　赤色顔料

第268図　４区ＳＤ16f溝出土遺物22（１／４）



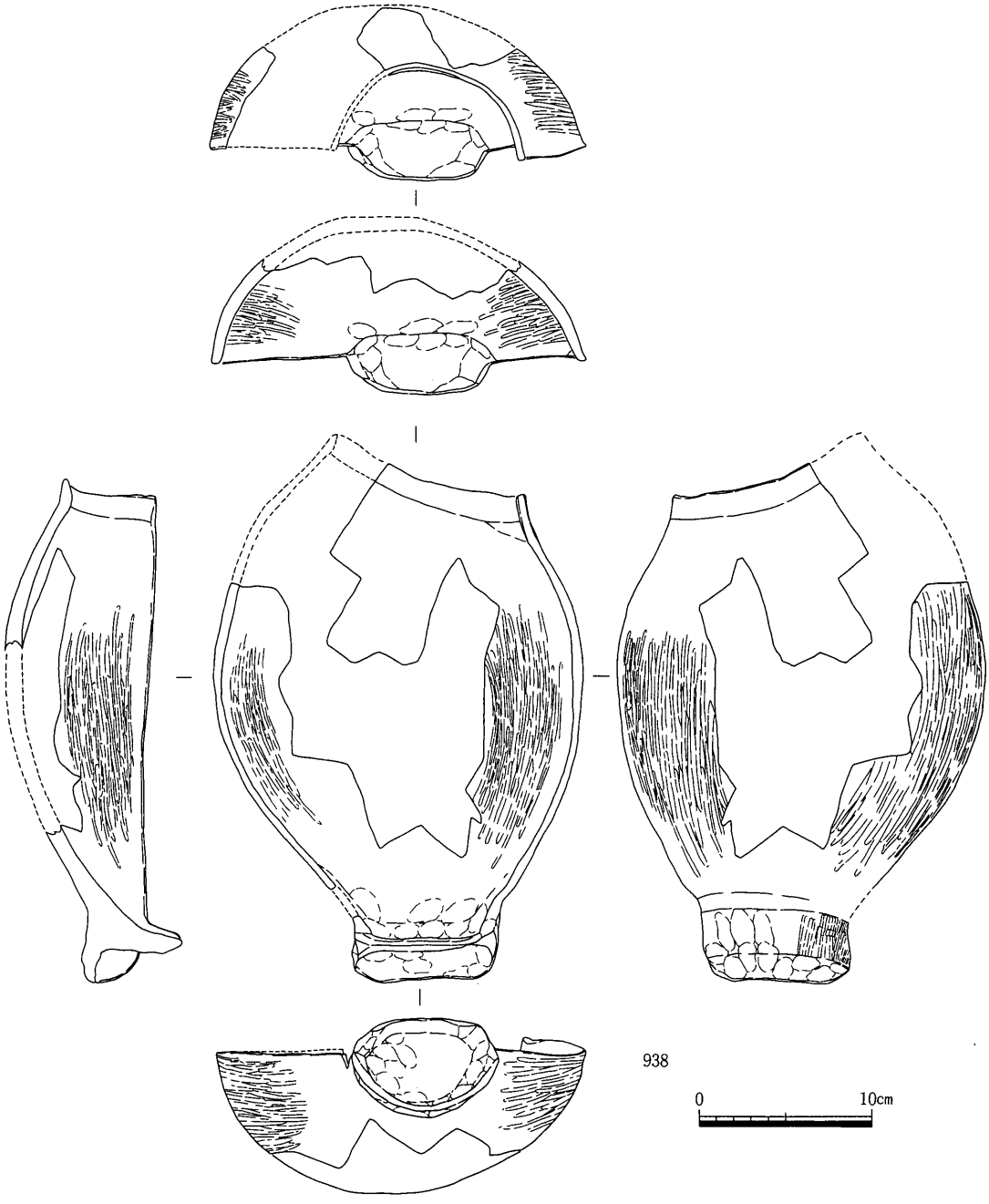
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
919	大形鉢	30.0			細・極多	褐色	口縁部は小さく外反して丸く納める。口縁部横ﾅﾃﾞ、外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多　赤色顔料
920	大形鉢	30.0			細・極多	黄褐色	やや内傾して立ち上がり口縁部は短く外反して端部は肥厚気味に四角く納める。口縁部横ﾅﾃﾞ、体部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ後下半部縦ﾐｶﾞｷ。	1/5	角閃石極多　赤色顔料
921	大形鉢	33.8			細・極多	黒色	やや外傾して立ち上がり口縁端部は小さく反って丸く納める。口縁部外面凹線、外面横ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多
922	大形鉢				細・極多	にぶい褐色	口縁部は小さく反り返って尖る。外面口縁部直下に沈線２条。叩き目残る。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多　赤色顔料
923	大形鉢				細・極多	褐灰色	口縁端部は小さく内外に摘み出し端面凹線。片口状		角閃石極多　赤色顔料
924	大形鉢				細・極多	灰黄褐色	口縁端部は小さく外方に摘み出す。外面口縁部直下鈍い凹線、叩き目残る。		角閃石極多、石英等多　赤色顔料
925	大形鉢	47.0			細・極多	にぶい黄色	口縁部は強く折り返して短い。端部は丸く納める。口縁部横ﾅﾃﾞ、外面直下鈍い凹線、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/6	角閃石極多　赤色顔料
926	大形鉢	46.0			細・極多	黄褐色	緩やかに内湾気味に開き口縁端部は小さく反って四角く納める。端面凹線。外面斜ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。	1/16	角閃石極多、雲母・石英等

第269図　４区ＳＤ16f溝出土遺物23（１／４）



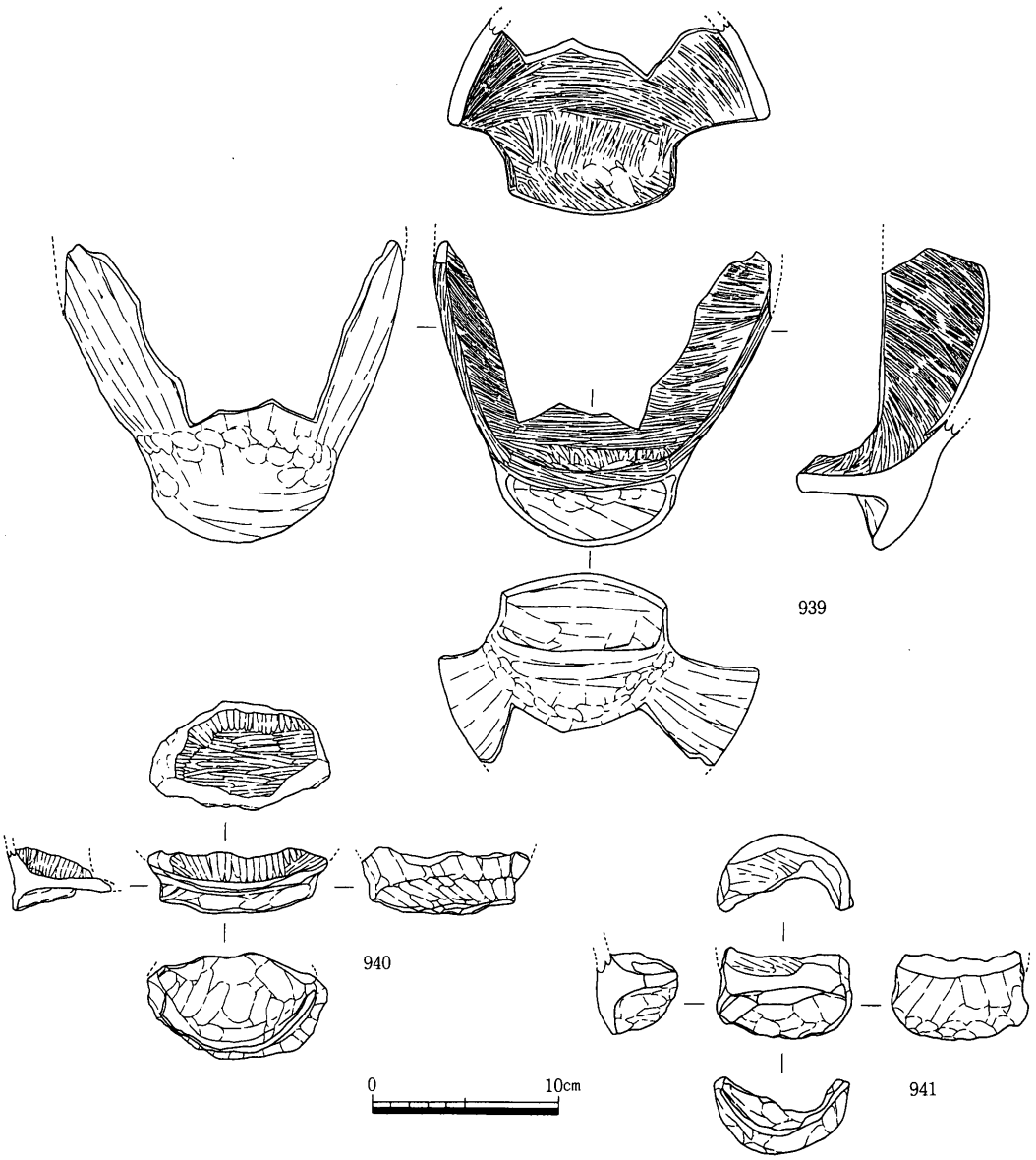
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
927	大形鉢	27.7			細・極多	にぶい黄色	やや内湾して開き、端部は四角く納める。外面口縁部直下凹線。外面磨らな縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多
928	大形鉢	28.8			細・極多	にぶい褐色	やや内湾気味に立ち上がり、端部は内外に張り丸く納める。外面篦描沈線。内面縦ﾐｶﾞｷ。	1/16	角閃石極多　赤色顔料
929	大形鉢	34.4			細・極多	黒褐色	やや内湾して開き端部は鈍く肥厚し四角く納める。口縁部直下凹線。外面横ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ。内面上半部横ﾅﾃﾞ、下半部横ﾊｹ後放射状ﾐｶﾞｷ。	1/16	角閃石極多
930	大形鉢	37.0			細・極多	灰黄褐色	口縁部内湾。端部は鈍く肥厚し丸く納める。口縁部横ﾅﾃﾞ、外面縦ﾊｹ後指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ	1/16	角閃石極多、石英等
931	大形鉢			7.7	細・極多、中・普	黒褐色　暗灰黄色	薄作りの底部から緩やかに開く。内面横ﾐｶﾞｷ	1/4	角閃石極多、石英等　赤色顔料
932	大形鉢			9.8	細・極多	にぶい黄橙色　褐色	底部はやや薄い。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾐｶﾞｷ。	1/3	角閃石極多　赤色顔料
933	大形鉢			10.0	細・極多	にぶい黄褐色　褐色	外面縁辺部指押さえ、体部縦ﾐｶﾞｷ。内面横ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多　赤色顔料
934	大形鉢			10.6	細・極多	黒褐色　明黄褐色	底部はやや薄い。外面縦ﾅﾃﾞ後横ﾊｹ。	1/8	角閃石極多　赤色顔料
935	大形鉢			11.6	細・極多	にぶい黄褐色　にぶい黄橙色	やや厚手の鈍い突出底。縁辺部指押さえ、外面縦ｸｽﾞﾘ後磨らな縦ﾐｶﾞｷ。内面分割横ﾐｶﾞｷ。	全周	角閃石極多　赤色顔料
936	大形鉢			7.5	細・極多	にぶい黄褐色	外面縁辺部叩き目残る。内底面横ﾐｶﾞｷ、体部内面縦ﾐｶﾞｷ。	1/2	角閃石極多、石英等　赤色顔料
937	鉢	16.6			細・極多	にぶい黄橙色	やや内湾気味に開き端部は丸く納める。内面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多

第270図　４区ＳＤ16f溝出土遺物24（１／４）



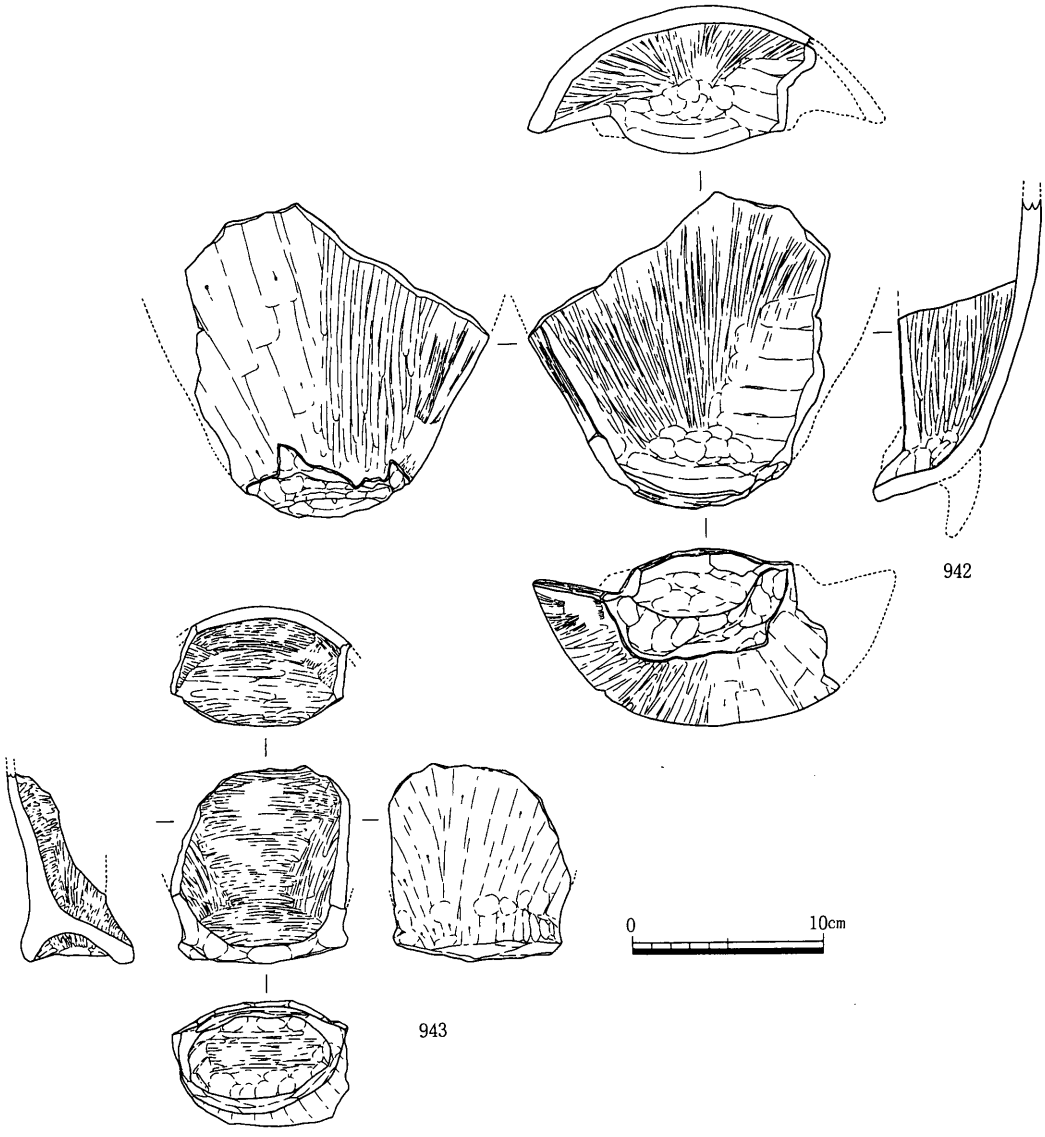
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
938	把手付広片口皿				細・極多 中・普	にぶい橙色	レモン形の平面形を呈する皿形土器。一端は大形の片口をなし、他端は立ち上がり部を介して鰭状の把手を付す。側縁部はほぼ水平で、立ち上がり部は高く台形状に突出する。側縁端は四角く納め、片口部は短く伸びて丸く納める。立ち上がり部は内湾気味に伸びて尖り、把手部は内湾気味に丸く納める。体部内外面縦ﾐｶﾞｷ、片口部横ﾅﾃﾞ、立ち上がり部・把手部は指押さえで、外面の一部に縦ﾍｹﾞ。	ほぼ完存	角閃石極多(含粗粒)、石英等、赤色粒

第271図　4区ＳＤ16f溝出土遺物25（１／４）



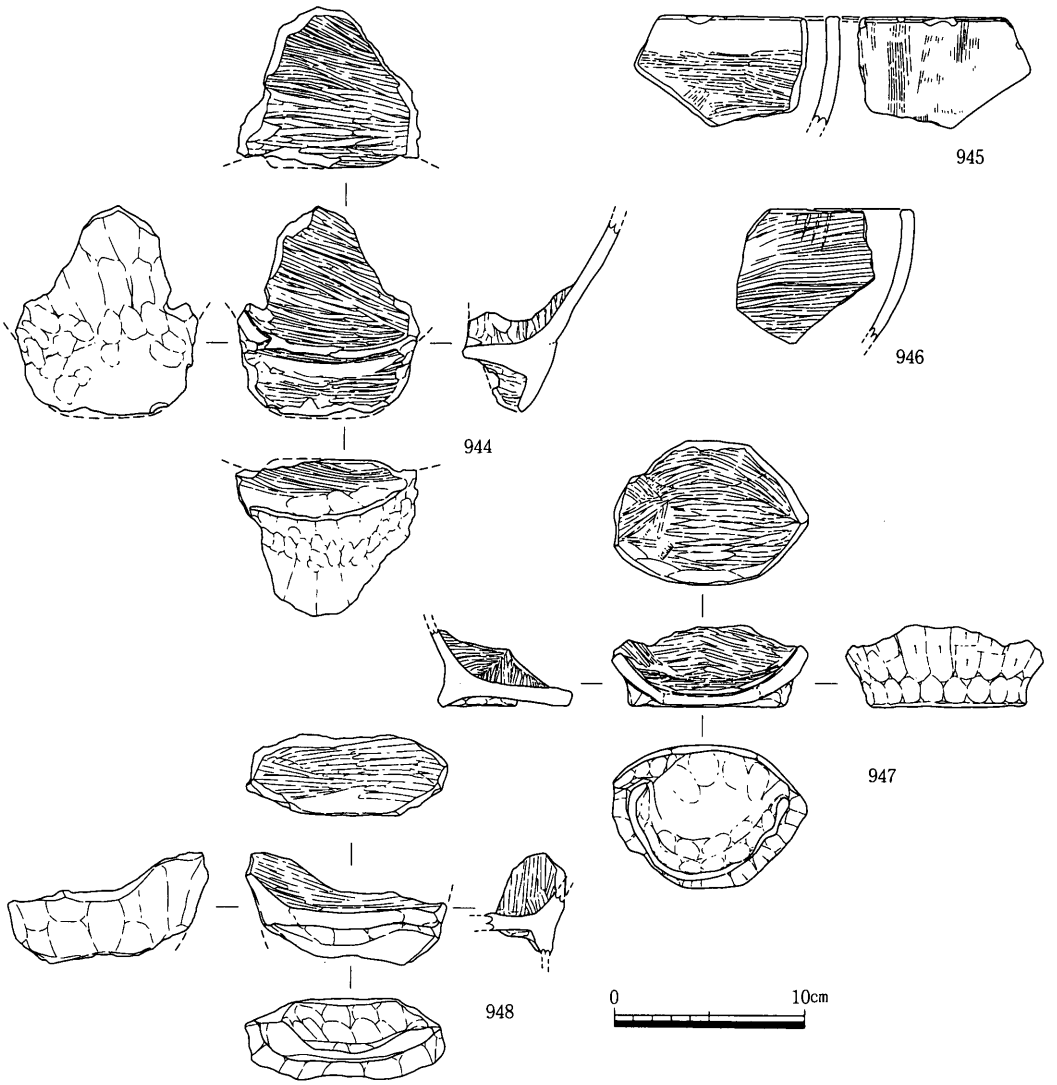
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
939	把手付広片口皿				細・極多	明褐色	把手部。耳朶状の把手部はやや内湾。台形状に突出した立ち上がり部はほぼ直立して端部を四角く納める。側縁端は四角く納める。体部外面縦ｹｽﾞﾘのち把手部基部指押さえ。内面立ち上がり部縦ﾐｶﾞｷのち体部横ﾐｶﾞｷ、把手部・立ち上がり部横ﾅﾃﾞ。端面ﾐｶﾞｷ。	1/3	角閃石極多 赤色顔料
940	把手付広片口皿				細・極多	灰黄褐色	把手部。立ち上がり部下端から引き出した把手部は短く、押さえ顕著。低い半円形に突出した立ち上がり部はやや反って伸び、肥厚気味に丸く納める。外面指押さえ、内面横ﾐｶﾞｷ、体部外面縦ﾅﾃﾞ。内面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、赤色粒・石英等　赤色顔料
941	把手付広片口皿				細・極多	灰黄褐色	把手部。耳朶状の把手部はやや内湾する。ほぼ直立する立ち上がり部上半は斜落。指押さえ。		角閃石極多、赤色粒 赤色顔料

第272図　４区ＳＤ16f溝出土遺物26（１／４）



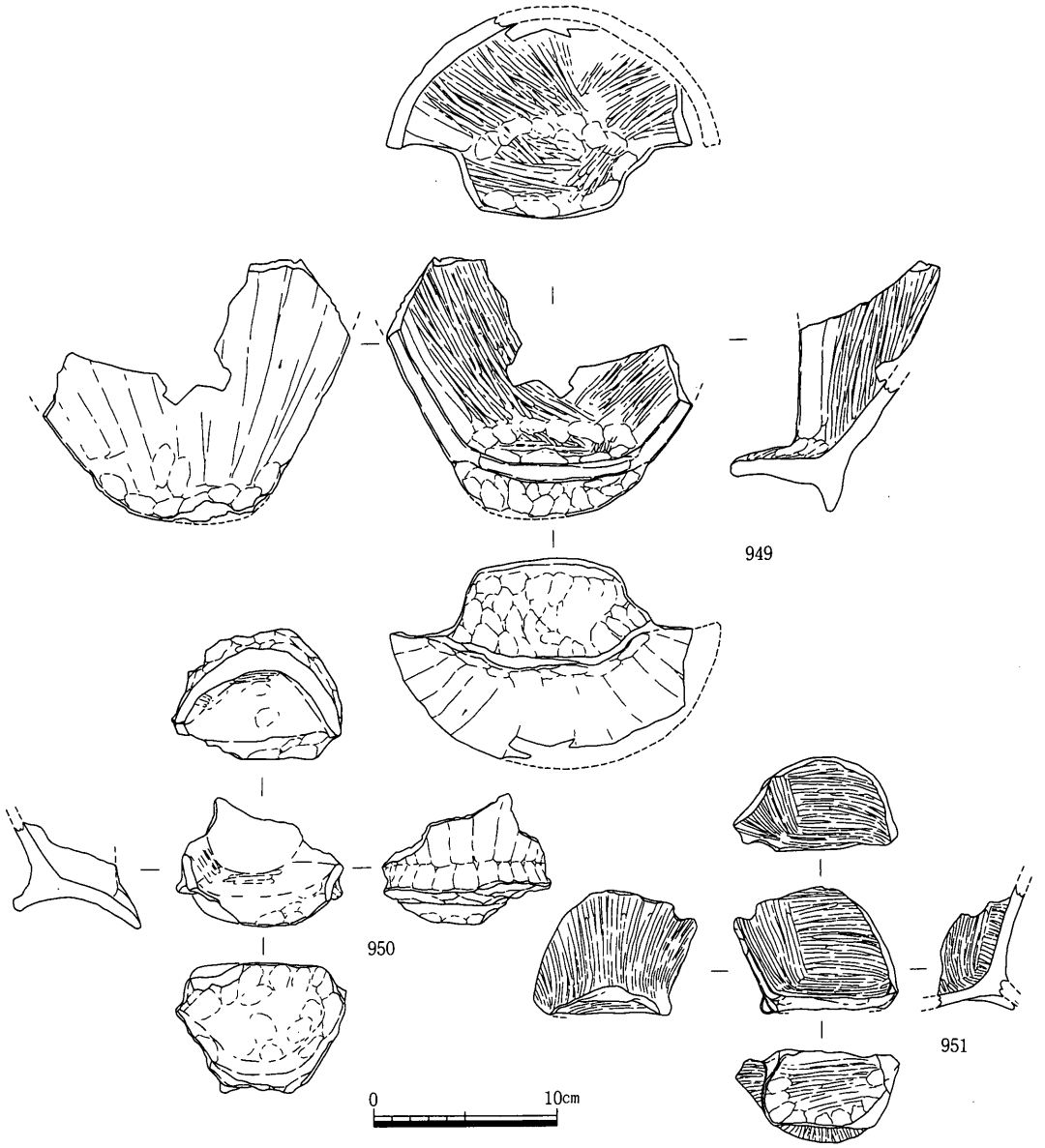
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
942	把手付広片口皿				細・極多、中・普	灰黄褐色	把手部。体部に貼り足した把手部剝落。剝落面に貼付前の指押さえ調整残る。低い台形状に突出した立ち上がり部は外反気味に伸び、側縁端は肥厚気味に四角く納める。体部外面縦ﾊｹ、縦ｸｽﾞﾘのち縦ﾐｶﾞｷ。内面立ち上がり部周辺指ﾅﾃﾞ、押さえのち縦ﾐｶﾞｷ、立ち上がり部外面指押さえ。端面ﾊｹ調整。	1/2	角閃石極多 石英等 赤色顔料
943	把手付広片口皿				細・極多	暗褐色	把手部。短い把手部はやや内湾気味に丸く納める。やや突出した立ち上がり部は強く外反して伸び肥厚気味に丸く納める。外面縦ｹｽﾞﾘのち把手部基部指押さえ。内面立ち上がり部・底面横ﾐｶﾞｷ、側面縦ﾐｶﾞｷ、立ち上がり部外面横ﾐｶﾞｷ、縁辺部指押さえ。	1/4	角閃石極多

第273図　４区ＳＤ16f溝出土遺物27（１／４）



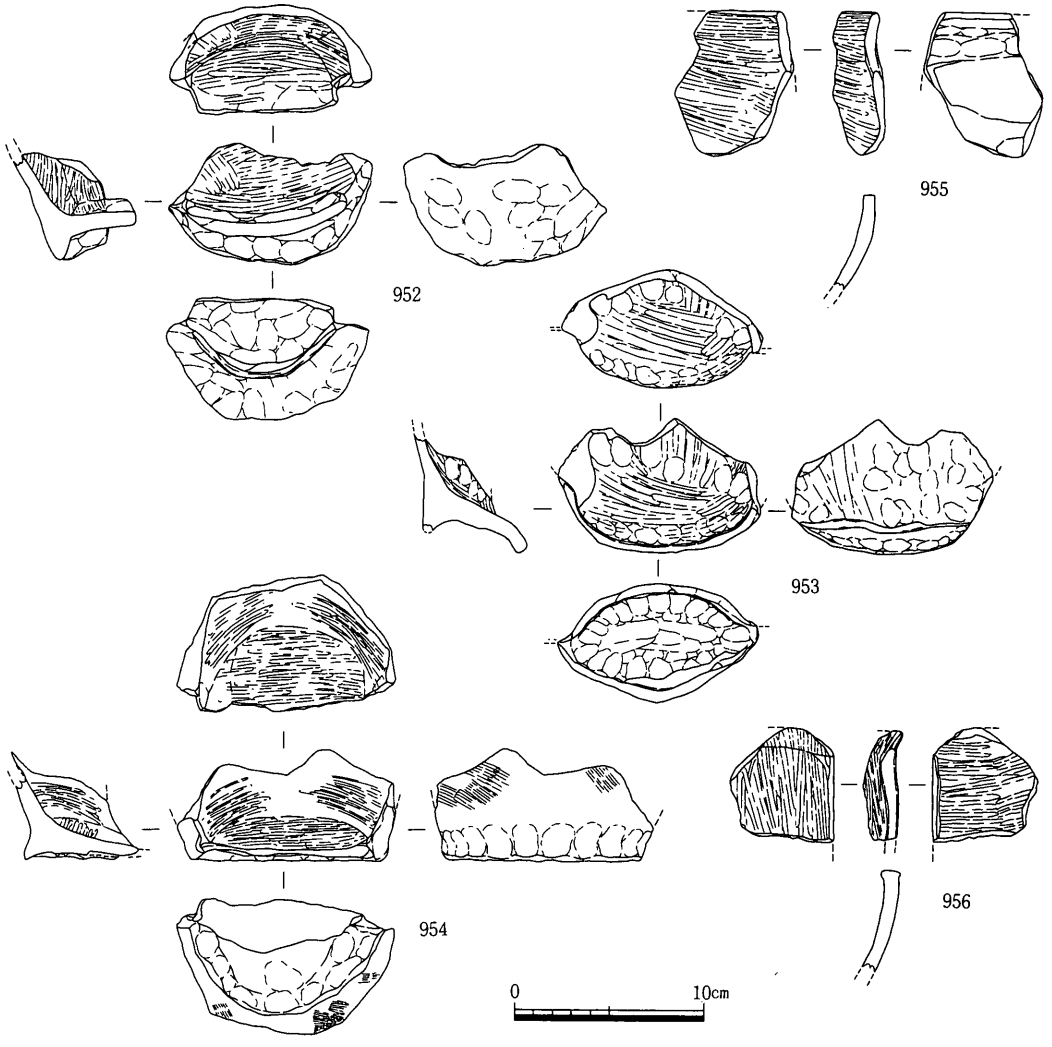
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
944	把手付広片口皿				細・極多、中・少	灰黄褐色	把手部。耳朶状に発達した把手部。側縁よりわずかに高い立ち上がり部はほぼ直立して端部を四角く納める。側縁端は四角く納める。外面縦ﾅﾃﾞで把手基部に指押さえ。内面・立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多、石英等少、赤色顔料
945	把手付広片口皿				細・極多	褐色	体側縁部。端部は外方に小さく摘みつつ四角く納める。内面縦ﾐｶﾞｷ、外面横ﾊｹ。		角閃石極多、雲母多 赤色顔料
946	把手付広片口皿				細・極多	暗灰黄色	体側縁部。端部は内方に張り気味に四角く納める。外面縦ﾊｹで叩き目残る。		角閃石極多、雲母多 外面煤 赤色顔料
947	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄褐色	把手部。立ち上がり部下端を外方に摘み出して痕跡的な把手部となす。半円形に低く突出した立ち上がり部はほぼ直立して伸び、肥厚気味に四角く納める。外面体部縦ｶｽﾞﾘ、把手部指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多 赤色顔料
948	把手付広片口皿				細・極多、中・少	にぶい黄褐色	把手部。把手部は立ち上がり部下縁から短くのびて端部は分厚く尖る。直立する立ち上がり部上半は剝落。外面体部縦ﾅﾃﾞ、立ち上がり部指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、石英等少 赤色顔料

第274図　4区ＳＤ16f溝出土遺物28（１／４）



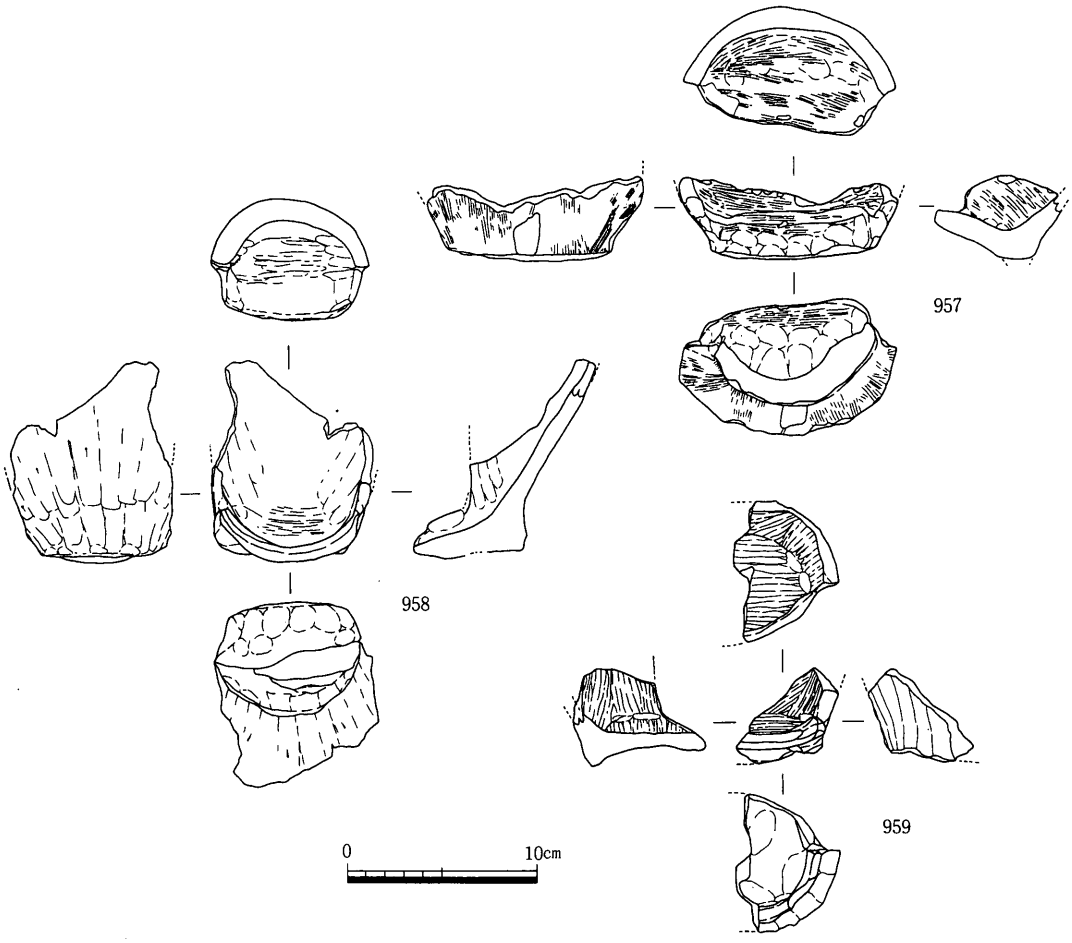
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
949	把手付広片口皿				細・極多	灰黄褐色	把手部。把手部は鈍く摘み出して指押さえ顕著。台形状に突出した立ち上がり部は直立し端部四角く納める。側縁端は四角く納める。体部外面縦ｹｽﾞﾘ。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷのち体部分割縦ﾐｶﾞｷ、端面ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、外面黒変赤色顔料
950	把手付広片口皿				細・極多、粗・少	昼色	把手部。把手部は立ち上がり部下端を外方に引き出して短い。半円形に低く突出した立ち上がり部は強く外反して端部は尖る。外面体部縦ﾅﾃﾞ、把手部・立ち上がり部指押さえ。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、側面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、石英等少赤色顔料
951	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄褐色	把手部。立ち上がり部下縁から伸びる短い把手部は剝落。やや外傾する立ち上がり部は上半部剝落。外面体部縦ﾐｶﾞｷ、立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ。内側面縦ﾐｶﾞｷ、立ち上がり部・底面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多、石英等少　赤色顔料

第275図　４区ＳＤ16f溝出土遺物29（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
952	把手付広片口皿				細・極多	灰黄褐色	把手部。把手部は短く、立ち上がり部下端を縁取る。低い台形状に突出した立ち上がり部はほぼ直立して伸び、四角く納める。外面指押さえ、内面横ﾐｶﾞｷ、体部外面ﾅﾃﾞ。内面縦横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多赤色顔料
953	把手付広片口皿				細・極多	黒褐色	把手部。把手部は短く、立ち上がり部下端を縁取り指押さえ顕著。低い半円形に突出した立ち上がり部は強く外反して伸び、端部は四角く納める。外面指押さえ、内面横ﾐｶﾞｷ、体部外面縦ｸｽﾞﾘ、内面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多赤色顔料
954	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄褐色	把手部。立ち上がり部下端を外方に鈍く摘み出して痕跡的な把手部となす。立ち上がり部上半は剝落。外面体部ﾊｹ、立ち上がり部、把手部指押さえ。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多赤色顔料
955	把手付広片口皿				細・極多	暗灰黄色	片口部。口縁部はやや反って端部は丸く納める。側縁端部は四角く納める。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母・石英等　赤色顔料
956	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄褐色	片口部。口縁部はゆるく湾曲して開き、端部は尖る。側縁端部は内外に摘み気味に四角く納める。外面叩き目顕著、内面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、石英等少　赤色顔料

第276図　４区ＳＤ16f溝出土遺物30（１／４）

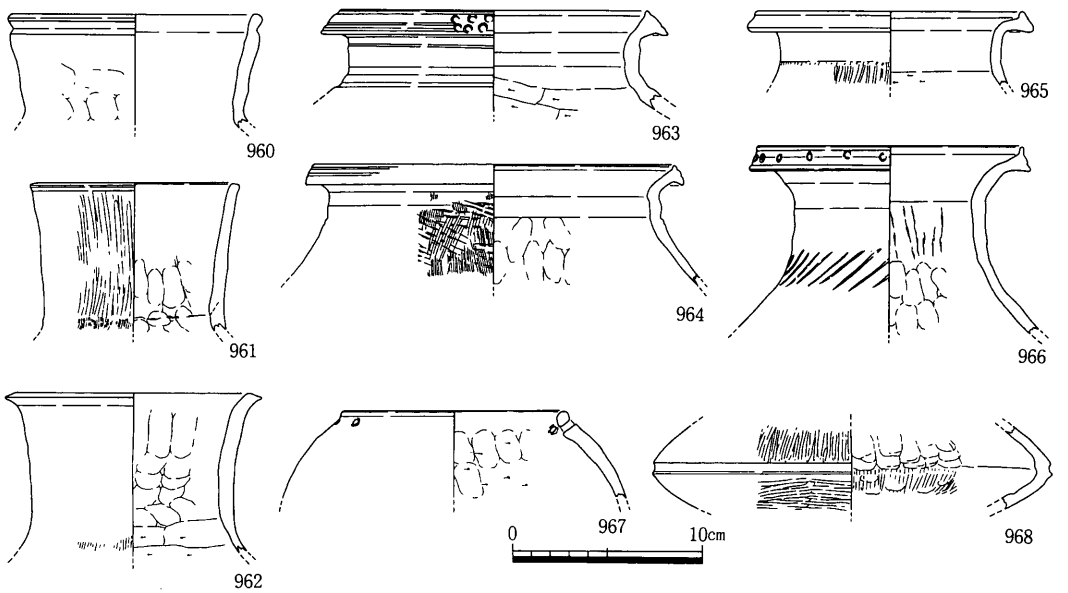


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
957	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄褐色	把手部。立ち上がり部下端に貼り足した把手部剝落。低い台形状に突出した立ち上がり部はやや内傾して伸び、端部は四角く納める。側縁端は四角く納める。外面体部縦ﾊｹ、立ち上がり部指押さえ、上端横ﾊｹ。内面立ち上がり部横ﾊｹ、体部横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母赤色顔料
958	把手付広片口皿				細・極多	暗灰黄色	把手部。立ち上がり部下端を張り出して痕跡的な把手部となす。台形状に突出した立ち上がり部は外傾して伸び、鈍く尖る。外面体部縦ｹｽﾞﾘ、立ち上がり部指押さえ。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、側面横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、赤色顔料
959	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄橙色	把手部。把手部は立ち上がり部下縁を鈍く摘み出すのみ。半円形に突出した立ち上がり部はやや外反して伸び肥厚気味に丸く納める。外面縦ﾅﾃﾞ、内面立ち上がり部・底面横ﾐｶﾞｷ、側面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多　赤色顔料

第277図　４区ＳＤ16f溝出土遺物31（１／４）

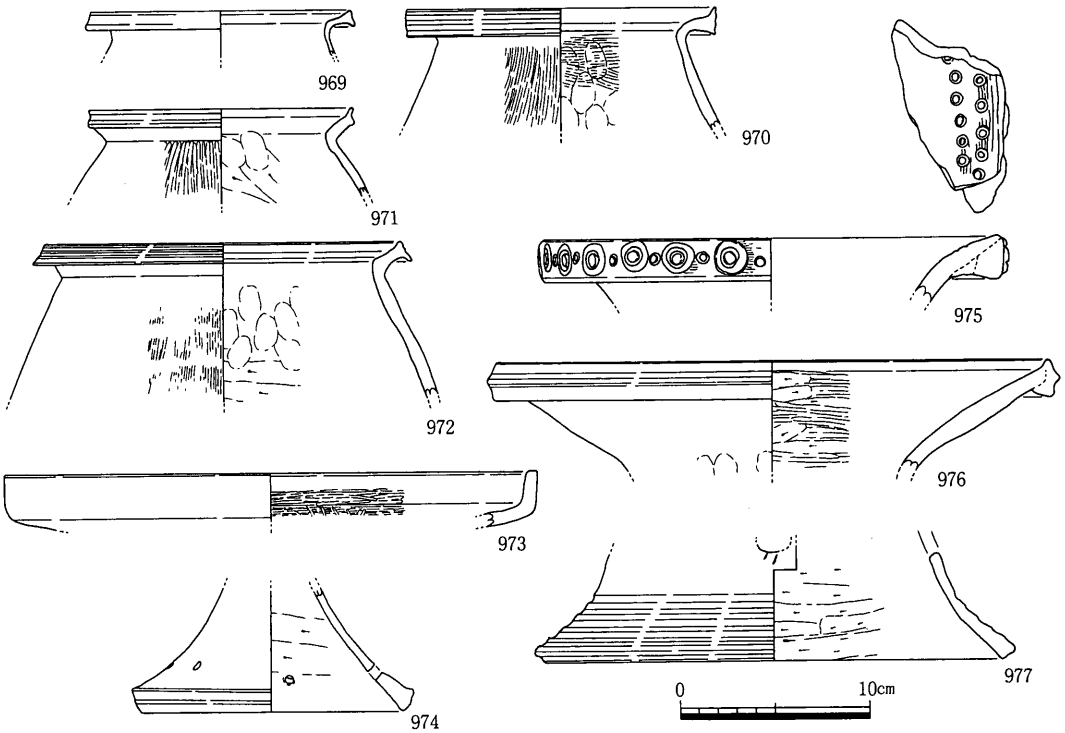
本例では，わずかに反り気味の短い片口部が長軸にやや斜交して取りつく。(939～944) は把手部が比較的強く発達した形態。(947～953) は把手部の発達がやや鈍い形態。(954～959) では把手部は立ち上がり部下縁のわずかな突出にすぎない。また立ち上がり部は側縁部よりも高く，直立ないしはやや外傾して台形もしくは半円形に突出することが多い

が，(950・953) のように強く反り返ることは少ない。(945・946) は体側縁部片。(955・956) は片口部片。体部内面は緻密なミガキ調整で仕上げ，これと対照的に体部外面はケズリ仕上げ，把手部などは指押さえの凹凸を顕著に残すなど粗い。(938) のように外面篦ミガキ例はかなり少ない。このような調整手法は鉢，特にバケツ形を呈するやや小形の大



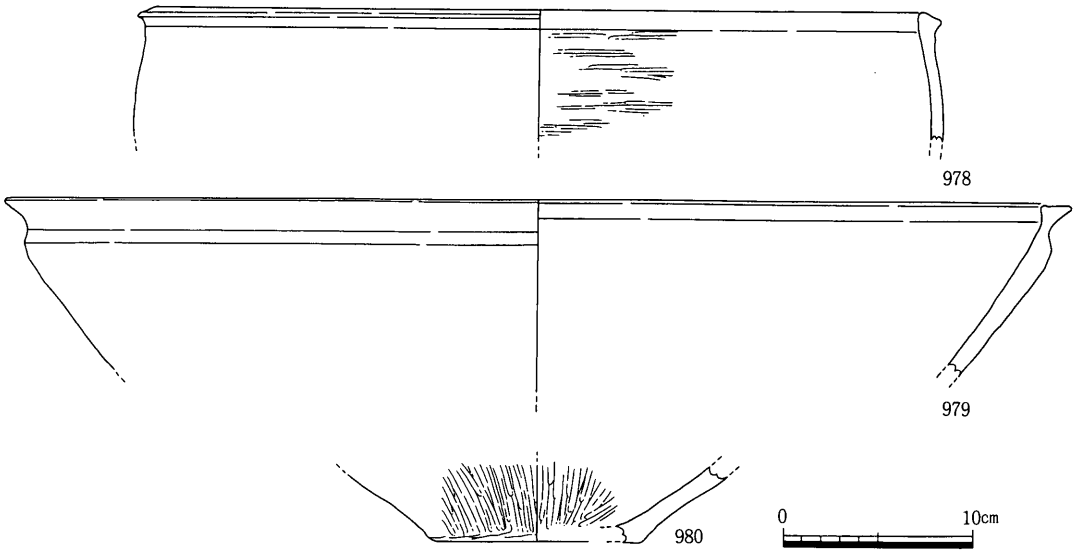
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
960	直口壺	12.4			細・極多	にぶい黄褐色	口頸部はやや外傾し短く立ち上がる。端部は丸く納め、外面直下強い凹線１条。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多
961	直口壺	10.2			細・極多	灰黄褐色	口頸部はほぼ直立し、端部は四角く納める。外面縦ﾊｹ後縦ﾐｶﾞｷ、内面下半部指押さえ。	1/4	角閃石極多、赤色粒
962	直口壺	12.0			細・極多	灰黄色	口頸部はやや反って立ち上がり、端部は鈍く外方に摘み出す。内面頸基部まで横ｹｽﾞﾘ、頸部指押さえ。	1/4	角閃石極多
963	広口壺	16.2			細・極多	にぶい褐色	短い頸部から口縁部は緩く折り返して短い。端部は鈍く下方に摘み出し上部も突出。端面凹線後６個１対２段の円形刺突文。頸部外面鈍い凹線。内面肩上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/5	角閃石極多
964	広口壺？	18.7			細・極多	にぶい橙色	不明瞭な短い頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜・頸部凹面。端部は上下に摘み出して端面凹線。外面縦ﾊｹで叩き目残る。内面指押さえ。	1/4	角閃石極多
965	広口壺	13.9			細・極多	褐色	短い頸部から強く折り返して口縁部は短く水平に開く。端部は下方に強く張り出し、上方も突出。外面頸基部小刺突文、肩部縦ﾐｶﾞｷ。体部内面上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/10	角閃石極多
966	広口壺	13.9			細・極多	にぶい橙色	ほぼ直立する頸部から緩やかに折り返して口縁部は短く開く。端部は上方に摘み出すと共に下方も強く張る。端面円形刺突文、頸基部斜線文。内面頸部絞り目、基部指押さえ。	3/4	角閃石極多
967	無頸壺	11.6			細・極多	褐色	強く内湾する肩上部から小さく反って端部は丸く納める。肩上端部の相対する位置に２孔１対の孔通孔。内面横ｹｽﾞﾘ後指押さえ。	1/4	角閃石極多
968	細頸壺				細・極多	明褐色	扁平な体部で強く張った最大径部に凹線１条で、上下端を鈍く突出。外面上半部縦ﾐｶﾞｷ、下半部横ﾐｶﾞｷ。内面上半部指押さえ。下半部指押さえ後縦ﾊｹ	1/7	角閃石極多

第278図　４区ＳＤ16出土遺物１（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
969	甕	11.6			細・極多	にぶい黄褐色	不明瞭な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで屈曲部に鈍い稜。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出し端面鈍い凹線。	1/6	角閃石極多
970	甕	16.2			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返し短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上方に摘み出し下方も張る。端面凹線。外面縦ﾊｹ、内面上部横ﾊｹ後指押さえ。	1/4	角閃石極多
971	甕	13.8			細・極多	にぶい黄色	口縁部は強く折り返して短く外反。端部は上方に摘み出して直立する端面に凹線。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面縦ﾊｹ後上端部指押さえ。	1/8	角閃石極多
972	甕	18.6			細・極多	黒褐色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。口縁・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。端部は下方に強く摘み出し上部も突出。端面凹線。外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面肩下半部まで横ｹｽﾞﾘ後指押さえ。	1/12	角閃石極多
973	高坏	28.0			細・極多	灰白色　橙色	浅い坏部。強く屈曲して上半部は短く直立。端部は四角く納める。外面横ﾅﾃﾞ、内面上半部横ﾐｶﾞｷ、下半部横ﾊｹ後疎らな放射状ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多
974	脚			13.8	細・極多	灰黄色	脚裾部は緩やかに外反して開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に張り出し端部凹線。２孔１対の円形透かし、内面横ｹｽﾞﾘ。	全周	角閃石極多
975	器台	23.8			細・極多	明褐色	口縁部は強く外反して開き、端部に粘土帯を付して断面三角形の垂下口縁。端面横ﾊｹ後円形浮文・円形刺突文、口縁部内面横ﾊｹ後円形刺突文２段。	1/6	角閃石極多、石英等・雲母
976	大形器台？	28.8			細・極多	暗褐色　にぶい黄橙色	口縁部は大きく開き、端部は粘土帯を付して上下に摘む。端面強い凹線。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｹｽﾞﾘ後横ﾐｶﾞｷ。	1/10	角閃石極多（含粗粒）
977	器台			23.8	細・極多	にぶい赤褐色	脚裾部は緩やかに開き、端部は鈍く肥厚して外方に突出。端面・裾部凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。大形円形透かしから短い垂下沈線２条	1/9	角閃石極多

第279図　４区ＳＤ16出土遺物２（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
978	大形鉢	40.0			細・極多	にぶい橙色	口縁部は緩く反って端部は鈍く肥厚しつつ外方に摘み出す。内面横ミガキ。	1/14	角閃石極多
979	大形鉢	56.0			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部下に屈曲部の退化した鈍い段。端部は外方に摘み出すと共に内方も張る。	1/8	角閃石極多、雲母多
980	大形鉢			10.6	細・極多	黒褐色　暗褐色	体部は強く開く。放射状ミガキ。	1/8	角閃石極多　赤色顔料

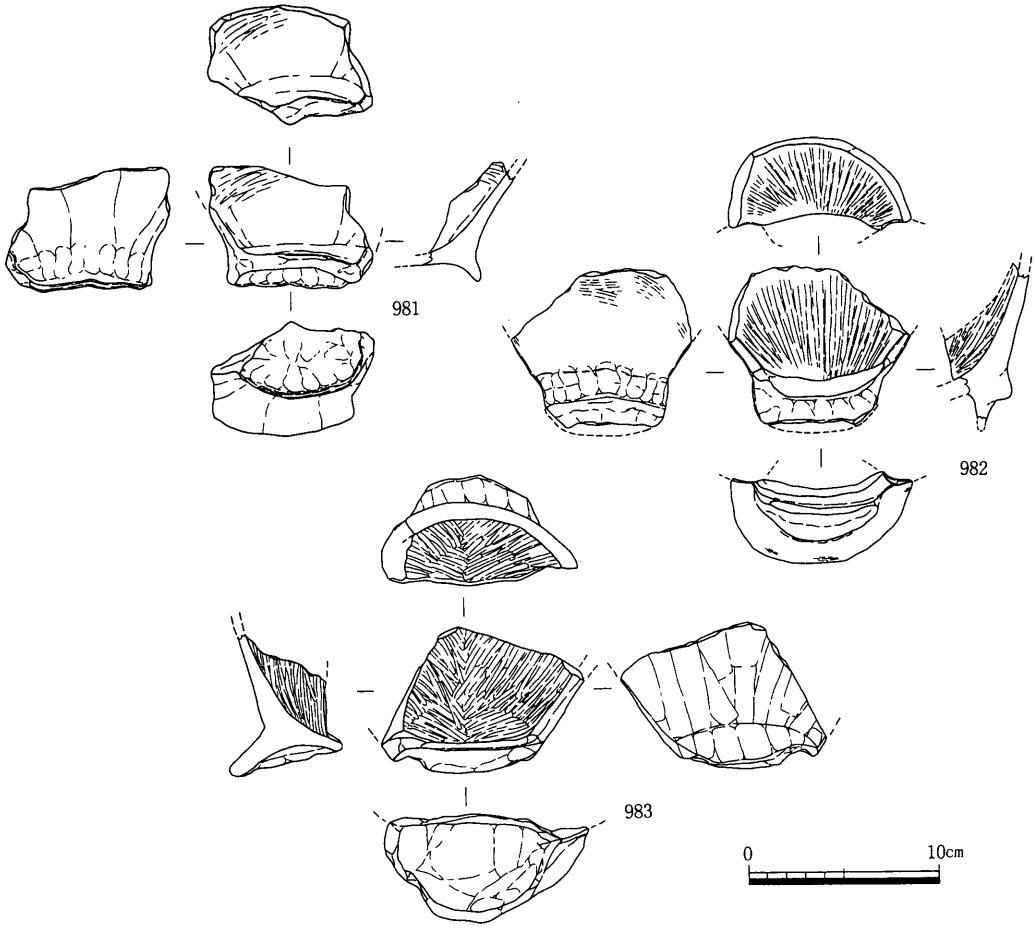
第280図　4区ＳＤ16出土遺物３（１／４）

形鉢と同様である。この種の鉢の内面調整に分割横ミガキが多用される点もそれに通じる。

また把手部の剥落した（942）は把手付広片口皿の成形法を検討する際に示唆的な資料である。この資料では剥落痕から把手部は立ち上がり部下縁に後から付設したことがわかる。把手が未発達な，立ち上がり部下縁の小突起にすぎない形態は別として，その部分がより発達した形態ではこのように貼付するものがあるのであろう。また側縁端部で，立ち上がり部に接した部分に残る接合痕から，立ち上がり部の上半部，すなわち側縁より隆起した部分が後から貼付された可能性が考えられる。とすれば，把手付広片口皿成形の少なくとも一手法として，大形鉢下半部を縦に半截した形態を作り（実際に鉢形品を半截して切断面を側縁としても不都合はない。），底部「切断面」に粘土帯を付して，隆起した立ち上がり部とし，底部縁辺にも同様に貼付して把手部を作る手順を想定できる。

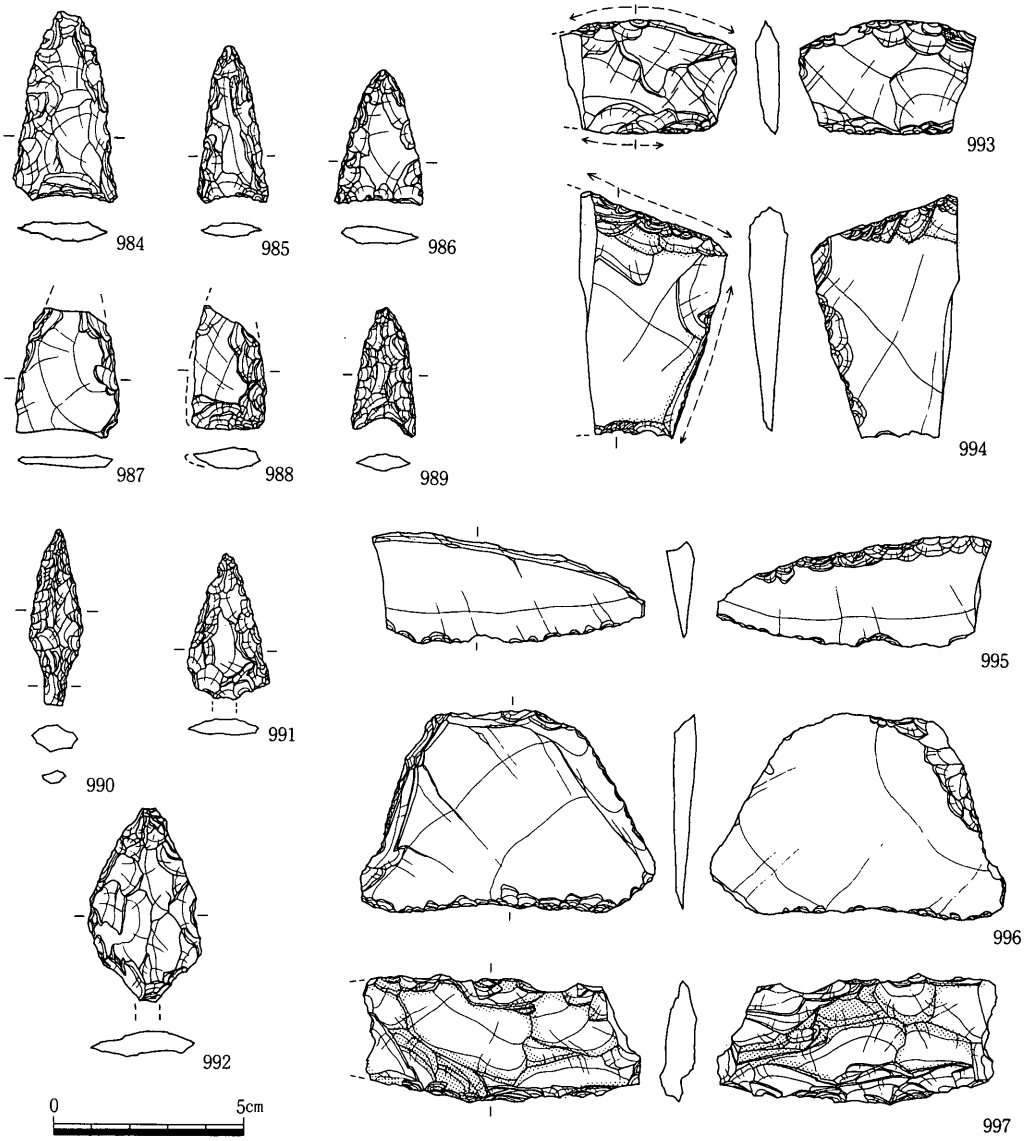
以上示したｆ溝資料は後期初頭を中心とし，その中でも新しい様相を示す資料が多い。また先に述べたように本溝は最下層に堆積する薄い粗砂層から，その存在を復元している。少数認められる後期前葉以降に下る可能性が高い資料は上層（ｅ溝以後）資料を混入させてしまったものと考えている。

(960～983) はその他のＳＤ16出土遺物である。トレンチ資料などでa～i溝のどれに帰属するか明確にしえなかったものをここで一括して報告する。(960) は直口壷で口縁部直下に凹線を１条だけ巡らす。(961・962) は長頸形態で口頸部無文。端部は四角く納める。(963・964) は短い頸部が直立する形態の広口壷。どちらも口縁部の折り返しが緩やかである。広口壷 (965) は頸下部に針穴状の細かい刺突文を巡らす。(966) は頸部がやや発



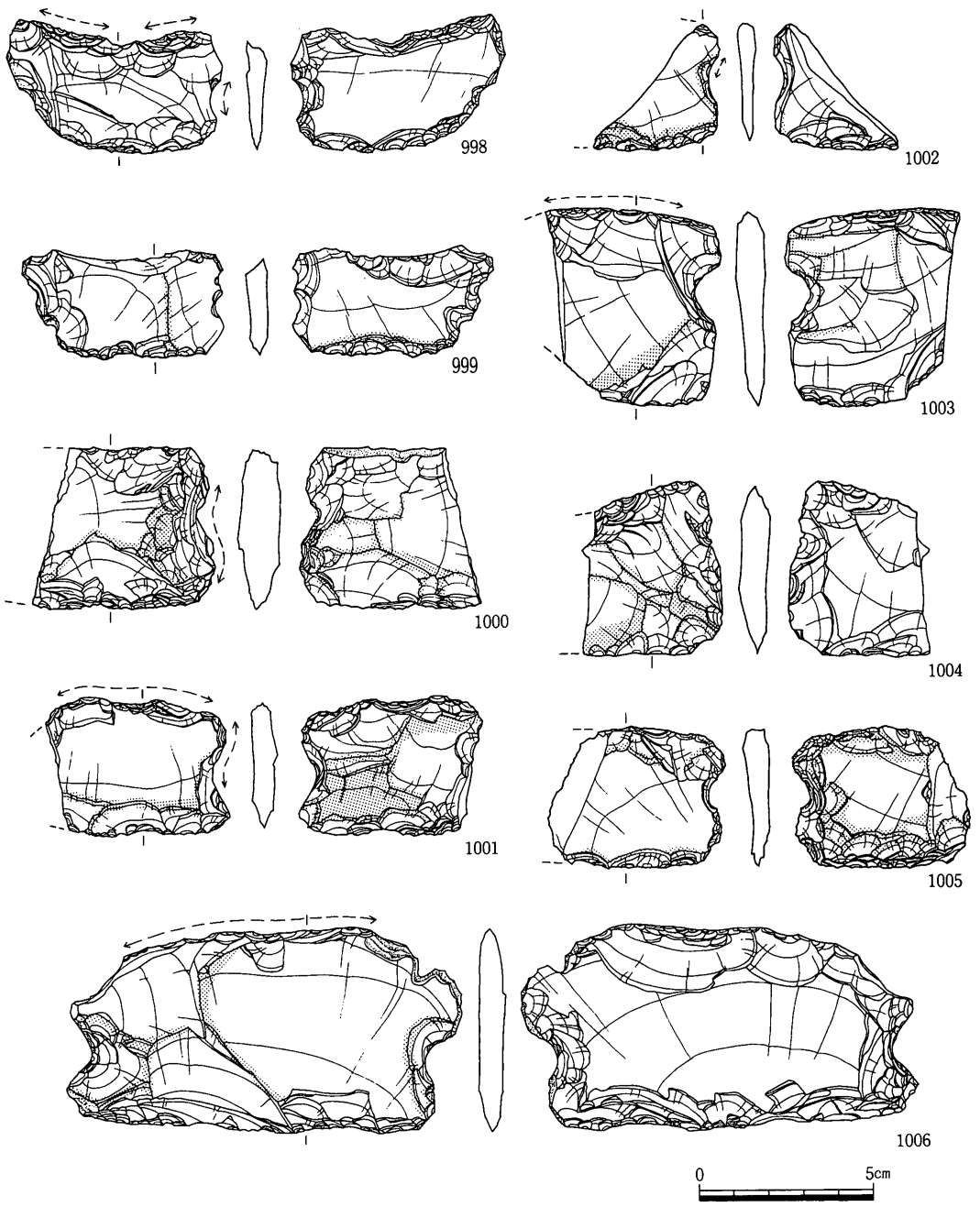
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
981	把手付広片口皿				細・極多	黒褐色	把手部。把手部は短く半円形に開き、指押さえ。立ち上がり部はやや外傾して伸びる。外面指押さえ、内面ﾅﾃﾞ。体部外面縦ﾅﾃﾞ、内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多赤色顔料
982	把手付広片口皿				細・極多、中・普	灰黄褐色	把手部。粘土帯を貼り分厚くした立ち上がり部下縁から短い舌状の把手部が伸びる。立ち上がり部剝落。体部内面縦ﾐｶﾞｷ、外面横ﾊｹ。		角閃石極多、石英等、赤色顔料
983	把手付広片口皿				細・極多	灰黄色	把手部。把手部は大きく下方に張り出して開く。わずかに突出した立ち上がり部はやや外傾して、端部は丸く納める。外面ﾅﾃﾞ、体部外面縦ﾅﾃﾞ、内面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、赤色粒赤色顔料

第281図　４区ＳＤ16出土遺物４（１／４）



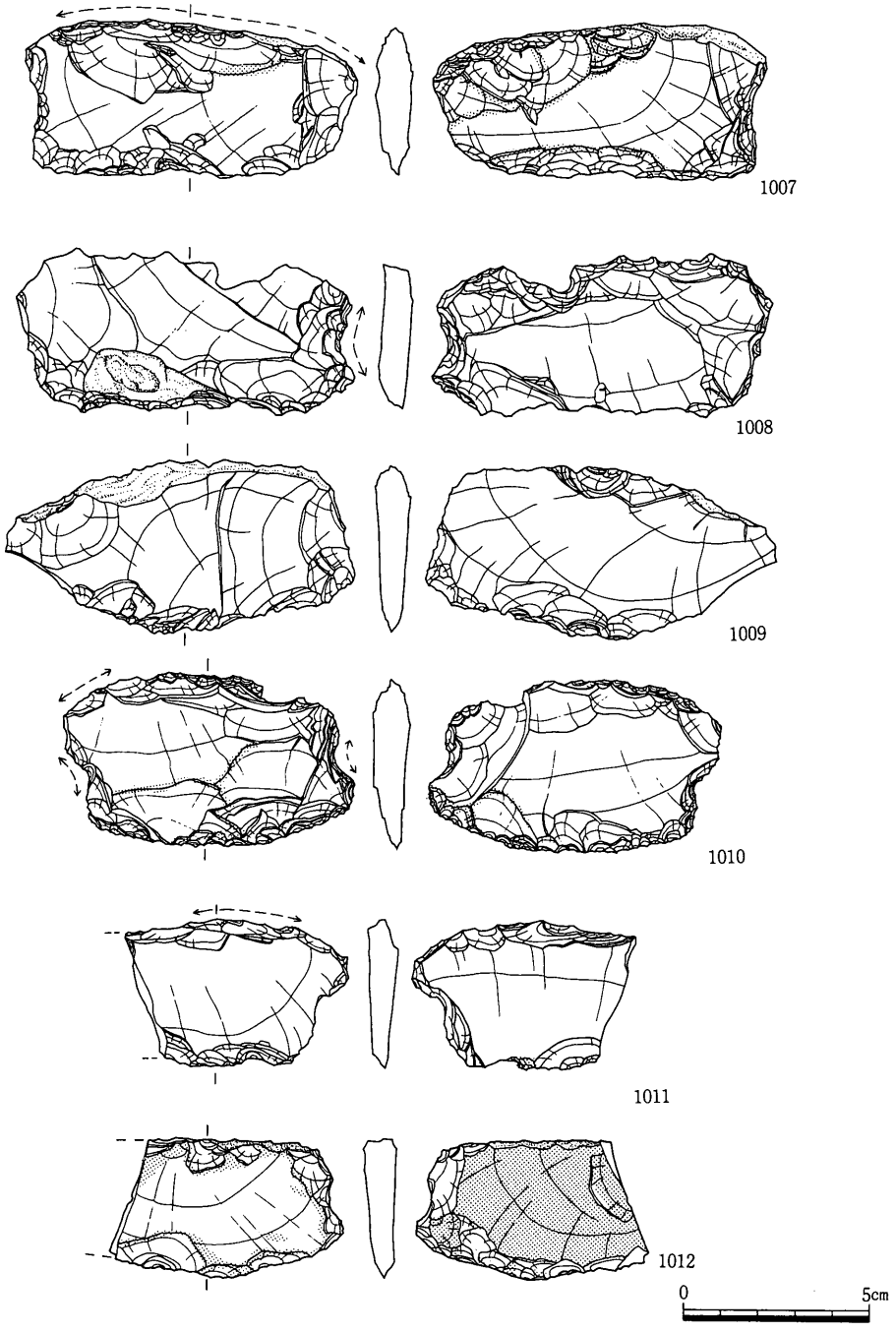
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
984	石鏃	4.7	2.7	0.5	6.6	サヌカイト	平基	
985	石鏃	3.9	1.8	0.4	2.8	サヌカイト	凹基	
986	石鏃	3.4	2.2	0.5	3.3	サヌカイト	平基	
987	石鏃	3.3	2.7	0.4	4.2	サヌカイト	平基　未製品？	先端部折損
988	石鏃	3.2	1.9	0.6	3.9	サヌカイト	平基	先端部折損
989	石鏃	2.9	1.6	0.4	1.9	サヌカイト	凹基	
990	石鏃	4.6	1.4	0.7	3.3	サヌカイト	有茎　肉厚	
991	石鏃	3.8	2.1	0.4	3.4	サヌカイト	有茎	茎部折損
992	石鏃	5.1	2.9	0.6	10.4	サヌカイト	凸基	
993	スクレイパー	4.6	2.9	0.6	12.4	サヌカイト		折損
994	打製石庖丁	3.9	6.4	1.1	24.0	サヌカイト	刃部調整粗雑　背部潰し　鋭部摩耗微弱	折損
995	スクレイパー	6.9	2.9	0.7	15.2	サヌカイト	背部片面調整　刃部二次調整微弱	折損？
996	スクレイパー	7.7	5.2	0.7	31.0	サヌカイト	背部折り取り面　刃部調整微弱	
997	？	7.3	3.2	0.8	33.5	サヌカイト	摩耗顕著	

第282図　４区ＳＤ16出土遺物５（１／２）



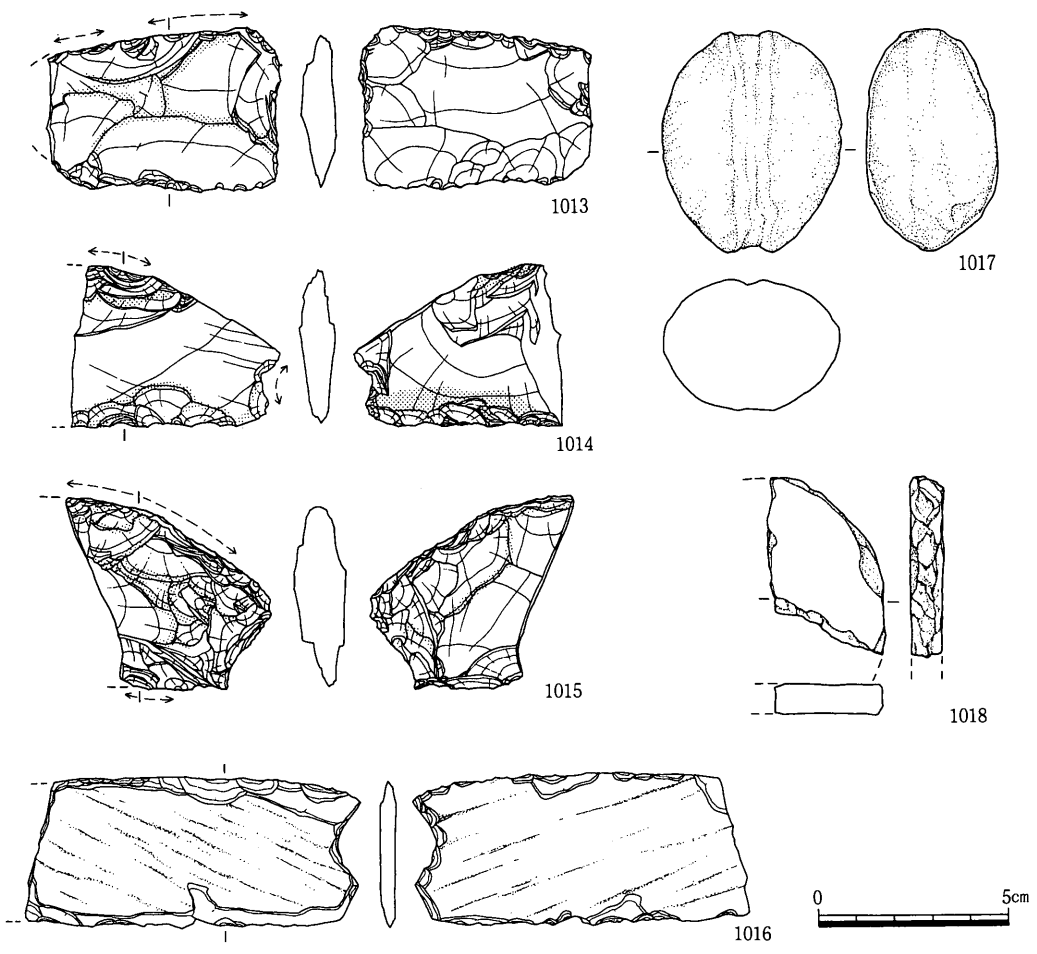
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
998	打製石庖丁	6.2	3.8	0.6	15.3	サヌカイト	背部潰し　抉り片面調整	
999	打製石庖丁	5.9	3.0	0.6	12.9	サヌカイト	背部片面調整　左面鋭部摩耗微弱	
1000	打製石庖丁	5.0	4.6	1.2	41.8	サヌカイト	抉り潰し　鋭部摩耗少	折損
1001	打製石庖丁	5.2	4.0	0.7	21.0	サヌカイト	背部潰し　右面摩耗顕著	折損
1002	打製石庖丁	3.6	3.6	0.6	5.1	サヌカイト	左面刃部摩耗	折損
1003	打製石庖丁	5.1	5.2	0.9	32.9	サヌカイト	背部潰し　鋭部摩耗微弱	折損
1004	スクレイパー	4.0	4.9	0.9	21.6	サヌカイト	左面鋭部摩耗	折損
1005	打製石庖丁	5.0	4.1	0.8	18.0	サヌカイト	鋭部摩耗	折損
1006	打製石庖丁	11.3	5.8	0.9	84.5	サヌカイト	鋭部摩耗	

第283図　4区ＳＤ16出土遺物６（１／２）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1007	打製石庖丁	8.8	4.1	0.9	49.3	サヌカイト	右面鋒部摩耗	
1008	打製石庖丁	9.0	4.4	0.8	49.0	サヌカイト	縁辺片面調整　抉り潰し	
1009	打製石庖丁	9.2	4.6	0.9	38.4	サヌカイト	刃部調整やや粗雑	
1010	打製石庖丁	7.4	4.5	0.9	40.0	サヌカイト	背部潰し　鋒部摩耗微弱	
1011	打製石庖丁	5.8	3.9	0.8	26.2	サヌカイト	抉り片面調整	折損
1012	打製石庖丁	6.1	3.6	0.9	28.2	サヌカイト	背部折り取り面　右面摩耗顕著	折損

第284図　4区ＳＤ16出土遺物７（１／２）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1013	打製石庖丁	6.1	4.1	0.9	28.3	ｻﾇｶｲﾄ	背部潰し　稜部摩耗微弱	
1014	打製石庖丁	5.5	4.1	1.0	25.3	ｻﾇｶｲﾄ	刃部調整粗雑　稜部摩耗少	折損
1015	打製石庖丁	4.4	4.7	1.5	37.4	ｻﾇｶｲﾄ	背部潰し　稜部摩耗微弱	折損
1016	打製石庖丁	8.8	4.9	0.4	27.0	片岩		折損
1017	有溝石錘	5.5	4.7	3.3	120.1	花崗岩	広面に擦り切りの溝	
1018	?	3.5	3.0	0.8	15.3	砂岩?	両面研磨　縁辺部敲打	折損

第285図　4区ＳＤ16出土遺物８（１／２）

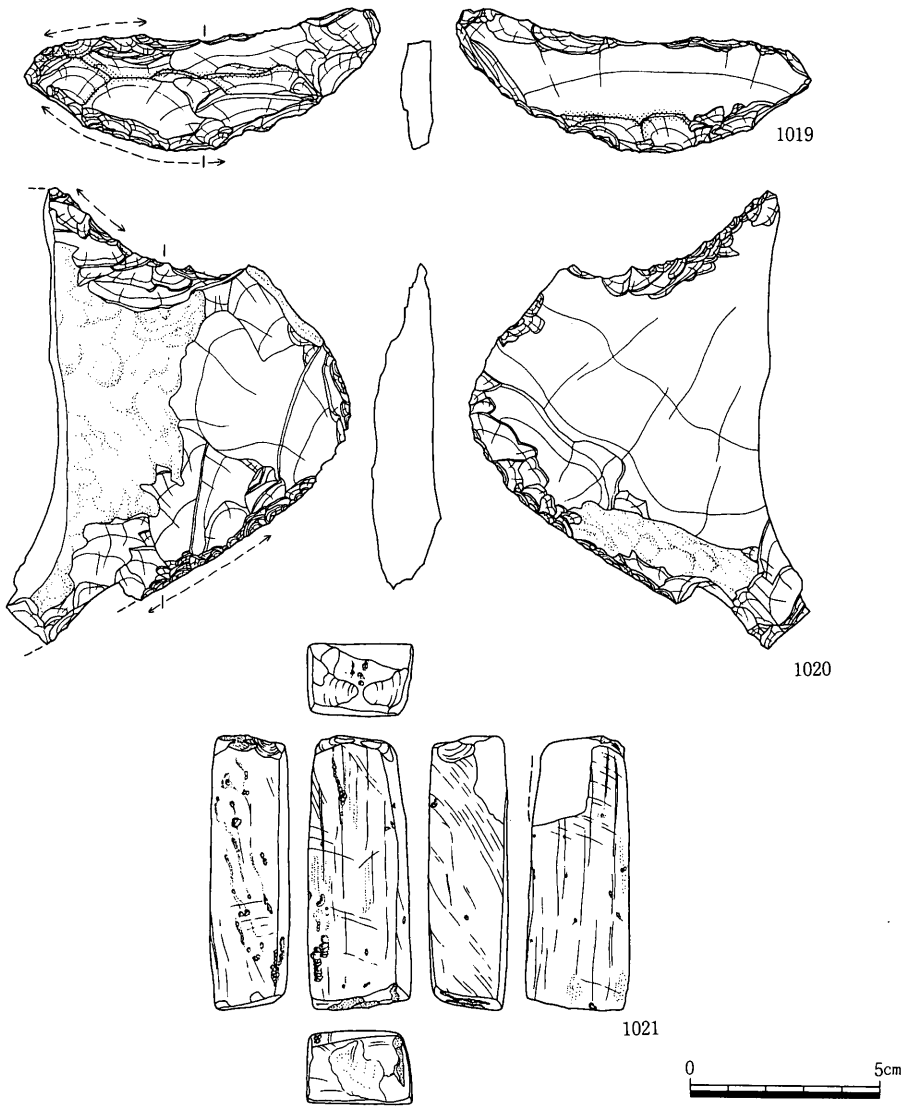
達し，下半部に斜線文を配する。甕（970・971）は口縁端部を上方に強く摘み上げる形態で，多数派ではない。逆に下方に強く引き出す（972）も同様である。高坏（973）は直立口縁形態の古い様相を示す。高坏脚（974）は端部の肥厚が弱くやや新しい様相である。鈍い垂下口縁形態の広口壷（975）は外反が強く新しい様相である。器台（976）は口縁端部の拡張が鈍い。器台脚（977）は透かし孔下に短刻線２条を見る。

大形鉢（978）は鈍く肥厚した口縁端部を小さく反る。（979）は拡張口縁形態であるが，

端部の摘み出しと直下の屈曲が共に鈍くなっており新しい様相である。把手付広片口皿（983）は把手部が下方に強く伸びた形態。（981）は把手部の発達が弱い。（982）は把手下部が段状に隆起する特異な形態。

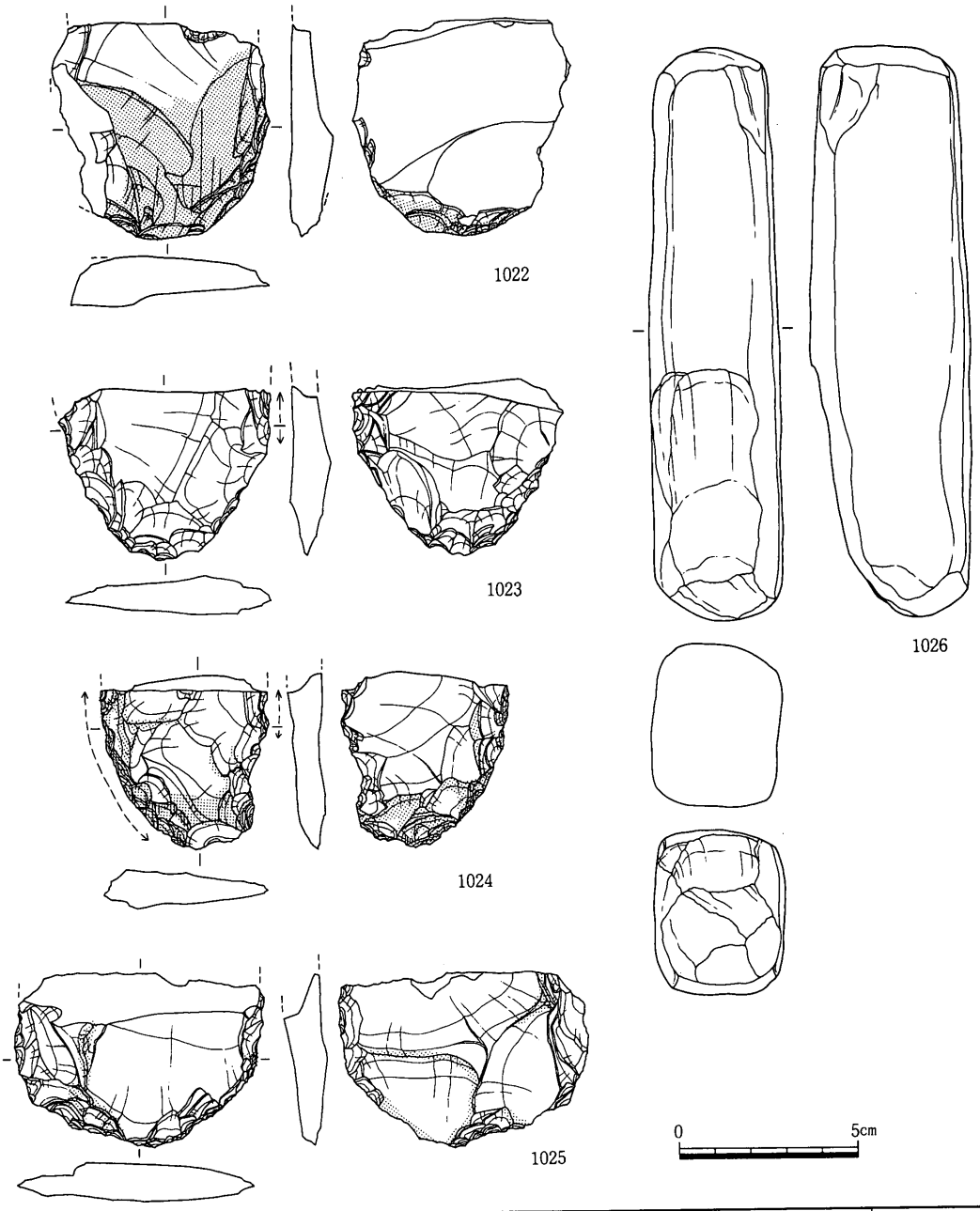
この他，ｆ溝から銅鏃（1028）を検出している。全長4.3cm，鏃身幅1.9cmを測り，逆刺があり茎は1.9cmとやや長い。鏃身は扁平で明瞭な鎬はない。茎部分に微妙な鋳型のずれが認められる。銅質は良くない。

本溝資料では特に小形の石鏃を確認していない。（984～989）は平基ないし凹基の石鏃。



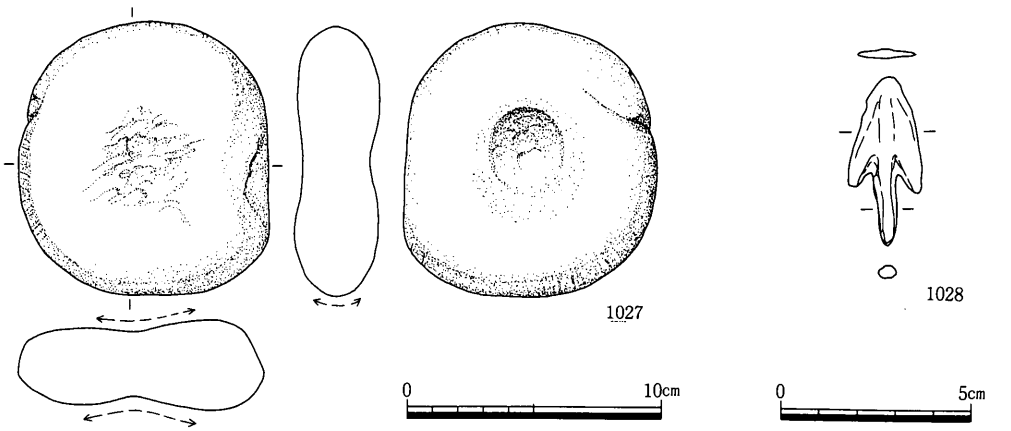
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1019	スクレイパー？	8.7	2.9	0.8	35.2	ﾀﾝｶｲﾄ	石鏃片転用？摩耗微弱	
1020	？	7.8	12.1	1.8	167.1	ﾀﾝｶｲﾄ	縁辺部潰し	折損？
1021	砥石	7.2	2.6	2.0	72.9	？	上端面に半円錐形の凹面　擦痕顕著	

第286図　４区ＳＤ16出土遺物９（１／２）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1022	石鏃	5.8	5.7	1.4	50.0	サヌカイト	先端部摩耗・擦痕顕著	先端部片
1023	石鏃	4.7	5.9	1.1	32.2	サヌカイト	側縁潰し	先端部片
1024	石鏃	4.9	4.7	1.0	26.3	サヌカイト	側縁潰し　先端部摩耗顕著・刃部擦痕	基部折損
1025	石鏃	4.9	6.9	1.2	43.8	サヌカイト	鏃部摩耗微弱	先端部片
1026	？	15.4	3.7	4.5	568.5	片岩		

第287図　４区ＳＤ16出土遺物10（１／２）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1027	凹み石	10.5	9.9	3.3	581.0	砂岩	両面中央部と縁辺の一部に敲打痕	
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	材質	形態	備考
1028	鏃	4.3	1.9	0.31	5.8	銅	有茎　鏃身は扁平で逆刺付き。鏑なし	銅質不良

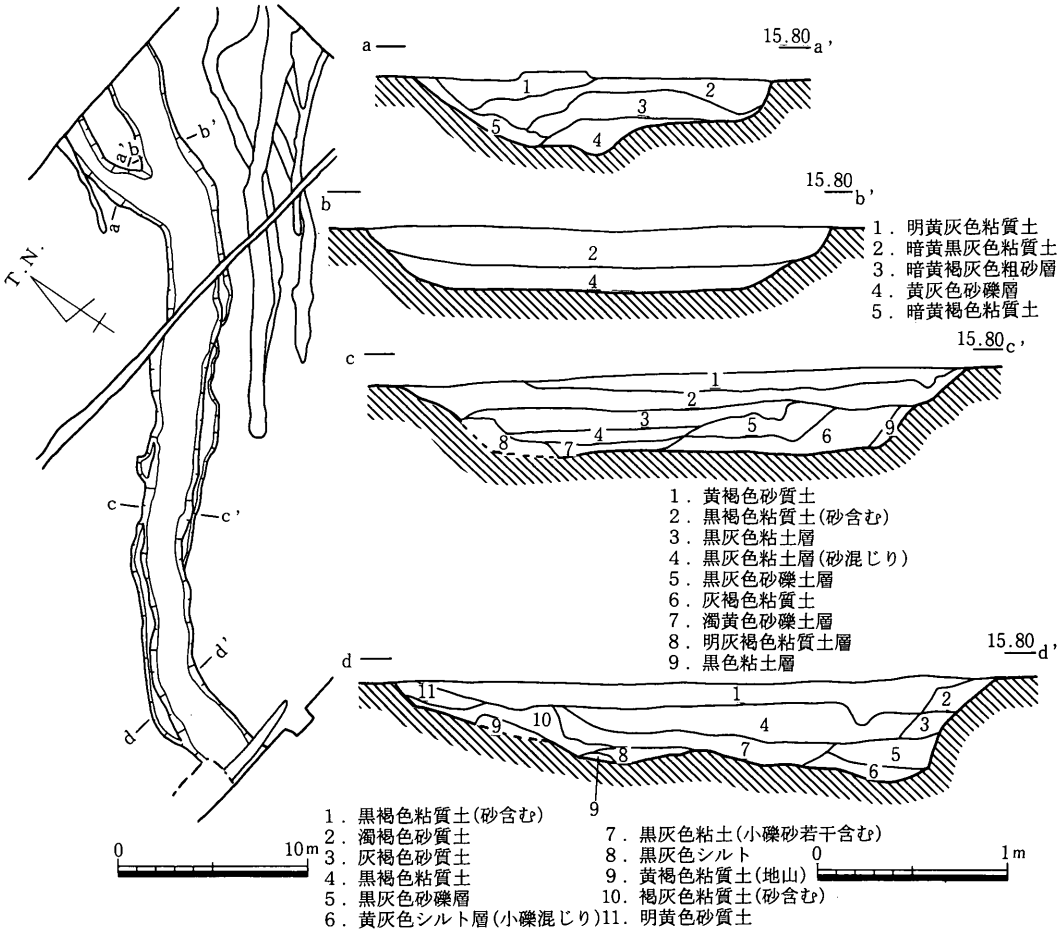
第288図　4区ＳＤ16出土遺物11（1／3・1／2）

(988) は未製品の可能性がある。(989) は調整剥離が深く整っているが，他では浅く断面形も扁平である。(990～992) は有茎式。(990) は細身で厚手の形態を持ち他とかなり異なる。(994) は明瞭な背潰し加工を認めるのでむしろ石庖丁とみなしてもよいかもしれない。(995) は背部の折り取り面に丁寧な潰し調整を加える。(997) はスクレイパーとしたが，刃部は明瞭ではない。小形の石核でもよい。4区で検出した後期段階の打製石庖丁ではサヌカイト製を主とするものの一定量の片岩及び安山岩系等の石材の使用を確認しているが，本溝に限っていえば非サヌカイト製石庖丁は片岩製 (1016) 1例にすぎない。(998・999・1001) はかなり小形であるが，短冊形を呈し，少なくとも一方の短辺に抉りを見るので石庖丁とみなした。(1007・1014・1015) は端部が狭くなる形状だが，抉りを作り出している。(1008) は縁辺部は全て片面調整。(1012) も刃部はほぼ片面調整といってよい。(1009) は背部・刃部ともにかなり粗雑な調整であるが，不明瞭ながらも抉り部を作り出している。片岩製打製石庖丁 (1016) は他の片岩製と同様に板状自然礫を素材とし，縁辺部の若干の整形で仕上げる。ただし抉り部は明瞭である。(1017) は有溝石錘。花崗岩製である。(1018) は器種不明の円盤状石製品。紡錘車未製品か。端辺は細かい調整剥離を未だとどめるが，他は丁寧に研磨している。(1019) は石鏃刃部片を再加工しているが明瞭な刃部を作り出しているわけではなく器種不明。(1020) は大形剥片の縁辺部の一部に潰し状の調整を加えたもの。(1021) は方柱状を呈する小形の砥石。肌理が細かく仕上げ

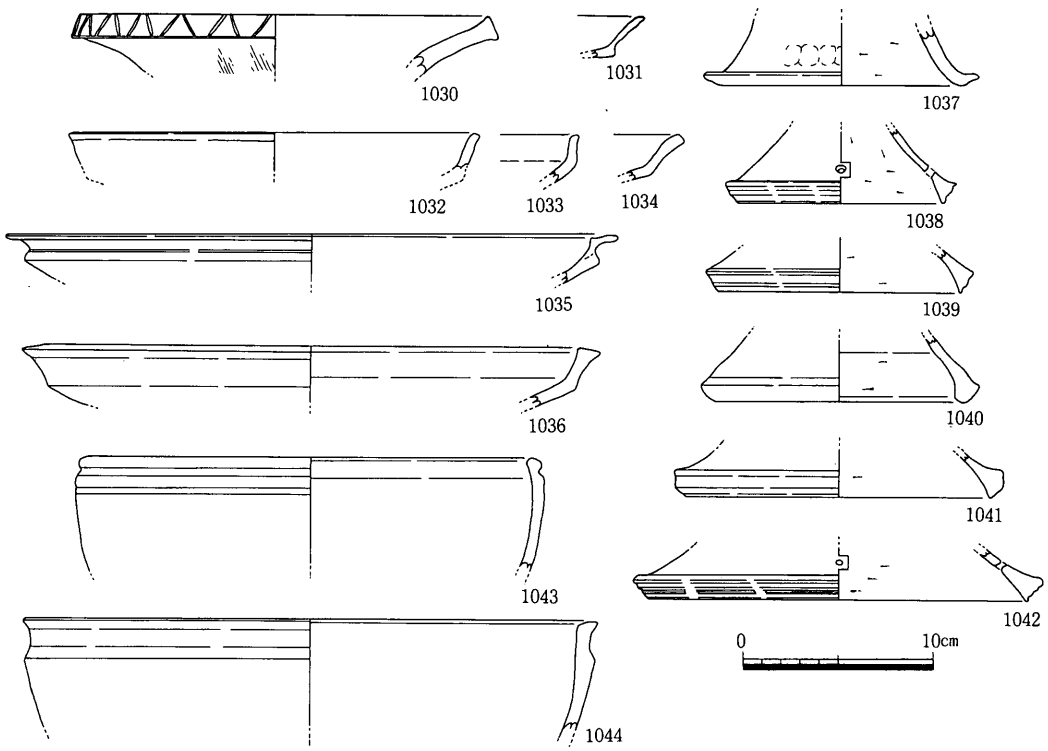
用か。一方の端面に向かい合わせに半円錐形のくぼみを持ち，その部分に横方向の擦痕が顕著に残る。他遺構に比べて石鏃の検出数も目立って少ない。(1022～1025) の4例にすぎない。いずれも刃部片で (1022・1025) は調整剥離はかなり貧弱である。(1024) は細身でかなり小振りだが先端部は顕著に磨耗している。(1026) は柱状片刃石斧転用の叩き石。先端部に使用痕が顕著に見られる。(1027) は砂岩製凹み石。両面の中央部に敲打痕が集中する。

ＳＤ17 (第289～295図)

Ｂ16～Ｃ17区で検出した溝状遺構である。東側にＳＤ18～22の小溝群がほぼ並行する。また4区東端の掘立柱建物群の西縁を画する位置にあたる。概ね南西－北東方向で蛇行し，北端部で2条に分岐する。溝断面形は概ね逆台形様を呈し，分岐部以南では溝幅2.5m～3.5



第289図　4区ＳＤ17平・断面図 (1／400・1／40)

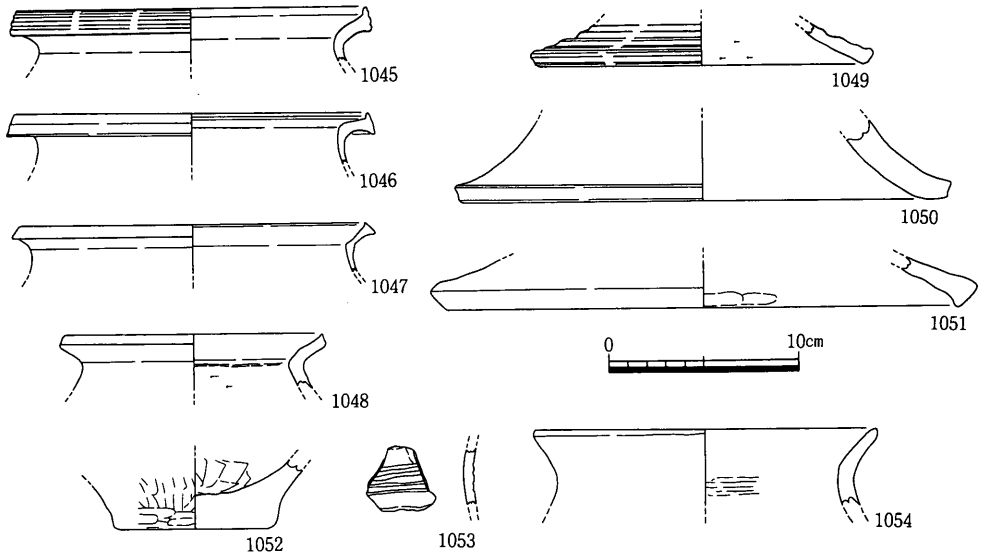


挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1030	壺	21.5			細・少、中・多	橙色	口縁部は強く開き、端部は上下に張り気味に四角く納める。端面に「ハ」字状の短刻線。外面縦ﾊｹ後ﾅﾃﾞ。	1/8	石英等多、角閃石少 且　搬入品
1031	高坏				細・極多	明黄褐色	中位で強く屈曲して段。上半部は外反して端部尖る。上半部外面凹線		角閃石極多
1032	高坏	21.0			細・極多、中・普	明黄褐色	坏上半部はやや外傾して端部は外方に小さく摘む。横ﾅﾃﾞ。	1/12	角閃石極多、石英等
1033	高坏				細・極多	明黄褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は短く直立。端部は外方にやや張り四角く納める。横ﾅﾃﾞ		角閃石極多
1034	高坏				細・極多	にぶい黄色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は短く外反して開く。端部は肥厚気味に四角く納める。		角閃石極多
1035	高坏	31.8			細・極多、中・普	黄褐色	浅い坏部。中位で強く屈曲して段。上半部短く外傾して端部は外方に大きく引き出す。	1/12	角閃石極多、石英等
1036	高坏	28.0			細・極多、中・多	明褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部外傾。端部は鈍く外方に摘み出し内方も張る。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多（含粗粒）
1037	脚			12.5	細・極多、中・多	明褐色	脚裾は緩やかに開き、端部で小さく反ってやや尖る。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多（含粗粒）
1038	脚			10.8	細・極多	明黄褐色	脚裾部はやや内湾気味に開き、端部は肥厚してつ上下に摘み出す。端面凹線。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｹｽﾞﾘ。円形透かし	1/4	角閃石極多
1039	脚			12.6	細・極多	明褐色	脚裾部はやや内湾気味に開き、端部は肥厚して下方に摘み出す。端面凹線。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/8	角閃石極多
1040	脚			13.1	細・極多	明褐色	脚裾部は内湾気味に開き、端部は肥厚しつつ下方に引き出し上方もやや張る。内面横ｹｽﾞﾘ	1/8	角閃石極多
1041	脚			15.8	細・極多	明褐色	脚端部は断面矩形に強く肥厚。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/10	角閃石極多
1042	脚			19.8	細・極多	黄褐色	脚裾部は強く開き、端部は肥厚して上方に鈍く張る。端面凹線、内面横ｹｽﾞﾘ。円形透かし	1/16	角閃石極多
1043	鉢	23.2			細・極多	明黄褐色	弱く内湾して立ち上がり端部は丸く納める。口縁部直下に沈線２条。	1/14	角閃石極多、翠母
1044	鉢	30.2			細・極多、中・普	黒褐色　明黄褐色	やや内湾気味に立ち上がり上半部で鈍く屈曲して鈍い段。口縁部はやや内傾して端部は外方に摘み出す。横ﾅﾃﾞ。	1/8	角閃石極多、翠母・石英等

第290図　４区ＳＤ17上層出土遺物１（１／４）

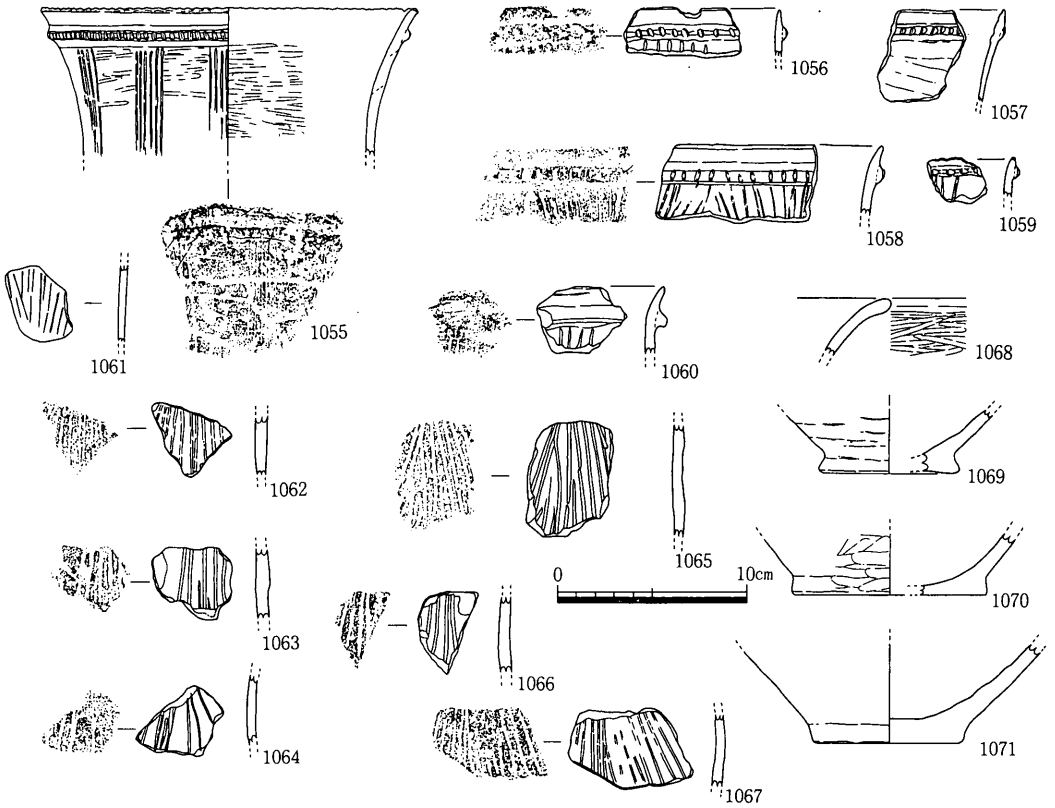
mを測る。また東分流では幅2.2m，西分流は1.5mとなる。本溝周辺は地山下層の砂礫層が緩やかに隆起しており，溝床面は同層に達している。そのため部分的に溝埋土の砂礫層と地山下層との区分が不明確な箇所もある。深さは0.2～0.45m前後となる。また上記した理由から，溝床面レベルを各地点において厳密に測定しえなかったため，地勢からみて北流する可能性が高いが流下方向も断定しがたい。ただし，床面レベルは標高15.3m前後となる。

溝埋土は大別3層に区分できる。上層は周辺部の地山表層に比較的類似した明黄灰色粘質土で，北半部C－17区部分の大部分で確認できるが，削平のためか南半部では局部的な



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1045	甕	18.3			細・極多	明黄褐色	強く折り返し口縁部は短く開く。端部は上方に摘み出し下方もやや張る。端面沈線3条。	1/12	角閃石極多、石英等
1046	甕	18.5			細・極多	明褐色	痕跡的な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に摘み出す。	1/10	角閃石極多
1047	甕	18.2			細・極多	黄褐色	痕跡的な頸部から折り返して口縁部は短い。端部は上下に張り出す。口縁部・頸部内面の強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に稜。	1/10	角閃石極多、雲母
1048	甕	13.5			細・極多	黄褐色	強く折り返して口縁部は短い。端部は上方に摘み気味に四角く納める。内面肩部上端まで横ｸｽﾞﾘ。	1/10	角閃石極多、赤色粒
1049	小形器台			16.8	細・極多	黄褐色	脚裾部は強く開き、端部はわずかに肥厚して四角く納める。外面凹線、内面横ｸｽﾞﾘ。	1/10	角閃石極多、雲母
1050	大形器台			25.3	細・極多	明褐色	脚裾部は外反して強く開き、端部は四角く納める。	1/9	角閃石極多、石英等多
1051	大形器台			26.7	中・多、粗・多	浅黄橙色	脚裾部は強く開き、端部は肥厚して下方に小さく張る。	1/12	石英等・赤色粒多 搬入品
1052	？			8.0	中・多	灰白色	突出気味の平底で、外面下端横ﾐｶﾞｷ、以上縦ﾐｶﾞｷ、内面板ﾅﾃﾞ。	全周	石英等・赤色粒多
1053	壺				中・普	暗褐色　黒褐色	壺頸部か。横位の篦描並行沈線		石英等
1054	壺	17.8			中・多	橙色	口縁部は緩やかに折り返し短い。端部は丸く納める。内面横ﾐｶﾞｷ。	1/4	石英等・赤色粒多

第291図　4区ＳＤ17上層出土遺物2（1／4）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1055	突帯文土器	19.8			中・多	黄灰色	やや外反して立ち上がり端部は丸く納め刻み目。口縁部直下に断面蒲鉾形の刻み目突帯。下部に６条１組の篦描垂下沈線	1/6	石英等多
1056	突帯文土器				中・多	灰黄色	端部は薄く尖り、口縁部直下に断面蒲鉾形の低い刻み目突帯。下部に縦位の篦描沈線		石英等多
1057	突帯文土器				中・多	浅黄橙色	口縁部は薄く尖る。直下に低い断面蒲鉾形の突帯１条。頂部に刻み目。口縁部内面沈線４条。外面横ﾅﾃﾞ。		石英等多
1058	突帯文土器				中・多	にぶい黄橙色　灰色	やや外反気味に立ち上がり端部は尖る。口縁部直下に断面蒲鉾形の刻み目突帯。下部に篦描並行沈線。山形文か		石英等多
1059	突帯文土器				細・普	黒褐色	端部は丸く納めて刻み目。口縁部直下に断面台形の低い刻み目突帯。下部に縦位の篦描並行沈線。		石英等
1060	突帯文土器				細・少、中・普	にぶい黄褐色	口縁端部は外反して尖る。断面薄鉾形の突帯を付し、下部に縦位の篦描並行沈線。		石英等、角閃石少
1061	突帯文土器				中・多	黒色	外面縦位の篦描並行沈線。山形文か		石英等多
1062	突帯文土器				中・多	黒褐色　灰黄色	外面縦位の篦描並行沈線。		石英等多
1063	突帯文土器				中・多	褐灰色	外面縦位の篦描並行沈線。山形か。		石英等多
1064	突帯文土器				細・少、中・多	にぶい黄褐色	外面縦位の篦描並行沈線。山形文か		石英等多、角閃石少
1065	突帯文土器				中・普	暗灰黄色	外面縦位の篦描並行沈線。山形か。		石英等
1066	突帯文土器				細・普	灰黄色　黒色	外面縦位の篦描並行沈線。山形文か		石英等
1067	突帯文土器				中・普	灰黄色　黒色	外面縦位の篦描並行沈線。山形文か		石英等
1068	壺				中・普	にぶい褐色	口縁部は外反気味に開き、端部は肥厚気味に丸く納める。内外面横ﾐｶﾞｷ。		石英等・赤色粒
1069	？			7.2	中・多	黒褐色	縁辺が強く張った突出底。外面横位の条痕、内面ﾅﾃﾞ。	1/3	石英等多
1070	？			10.0	中・多	にぶい黄橙色　黒褐色	やや縁辺の張り出した突出底。外面やや粗雑な横ﾐｶﾞｷ、内面ﾅﾃﾞ。	1/4	石英等多
1071	？			7.8	中・多	灰白色	鈍い突出底で体部の張り強い。内面ﾅﾃﾞ。	全周	石英等多

第292図　４区ＳＤ17下層出土遺物（１／４）

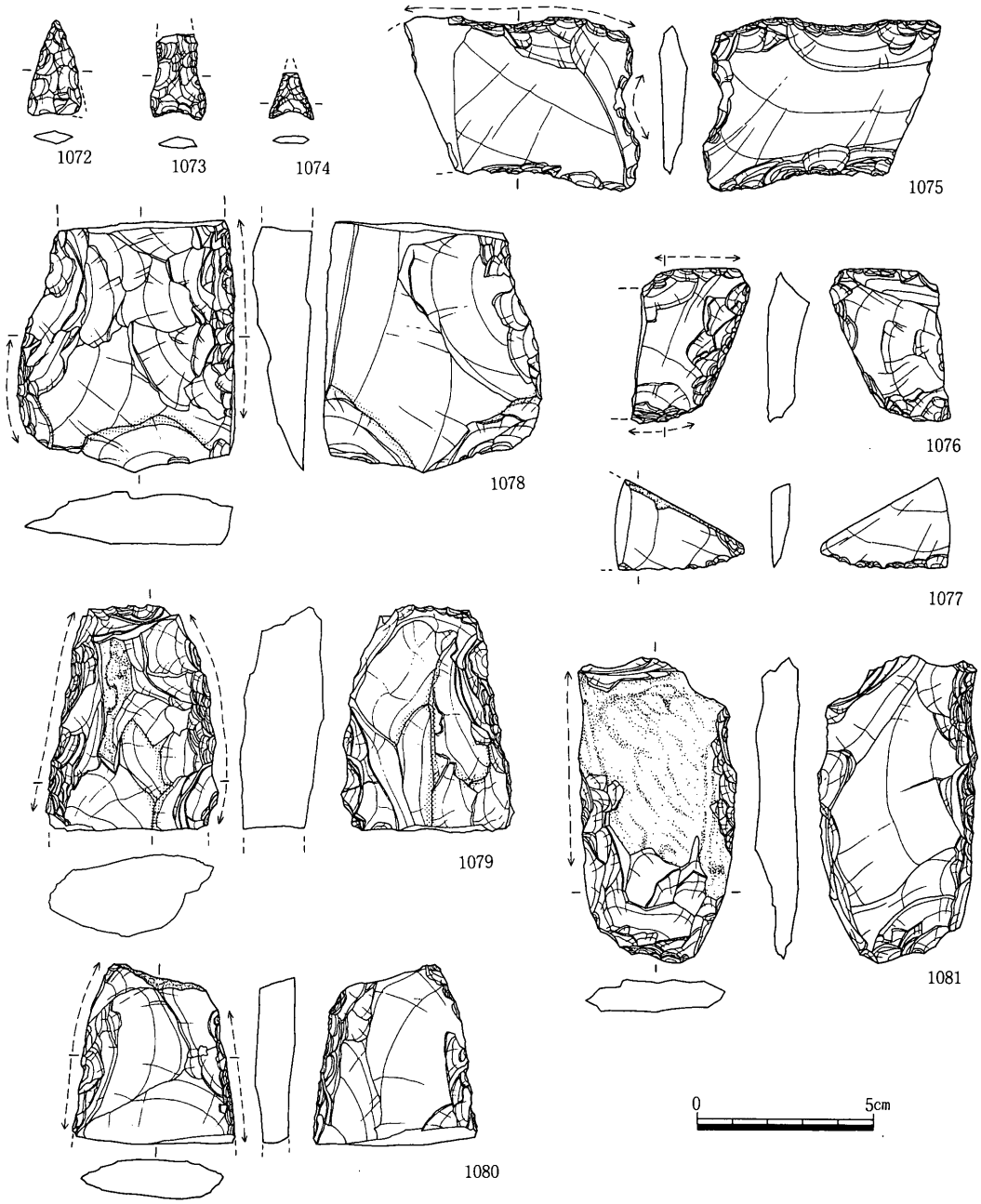
残存にすぎない。中層の黒灰～黒褐色粘土は溝全域で確認できる。下層は暗黄灰～暗灰色の粗砂もしくは砂礫層で，B17区の過半とC17区では分岐点周辺から西分流で確認できる。上層堆積層は中層上面の凹部を埋めるように薄く堆積するが，中層堆積物は下層堆積物を開削した後に堆積した状態が確認できる。なお下層堆積層は東分流では確認できない。したがって西分流が先行し，一定期間を経て，下層堆積物の除去と共に東分流を開削したものと考える。

全般的に検出資料は多くなく，また大部分が細片化している。(1030) は短いが強く開いた壷口縁部。端部は小さく上下に張り出し，狭い端面に「ハ」字状の短刻線文を配す。形態的には西部瀬戸内系統と考えたい。なお胎土から搬入品と判断できる。(1031) は後期初頭段階の外反口縁形態である。薄く尖った口縁部と強い屈曲部が特徴である。(1032・1033) は直立口縁の高坏だが，上半部がやや開くなど新しい様相を備える。外反口縁形態の (1034) は明らかにこれらの後出的な形態である。拡張口縁形態でも (1035) の極端な口縁端部引き出しや (1036) の屈曲部の鈍化は共に後期初頭でもより新しい様相といえる。(1037) は円錐状脚部で脚端部を小さく外反させる形態。(1038～1042) は脚端部を肥厚する形態だが，何れも端上部の摘み出しは弱い。(1043) は口縁部を丸く納め直下に沈線2条を巡らす。大形鉢としてはやや小振りである。口縁部拡張形態の大形鉢 (1044) は屈曲部・口縁端部の摘み出しはかなり鈍化している。甕 (1045～1049) は口縁部がやや伸び端部拡張が鈍化した新しい様相を示す。(1048) は後出する「く」字口縁甕であろう。器台脚 (1051) の脚端部形状は多くない。

(1052～1054) は弥生前期資料。(1053) は壷頸部で並行沈線4条を見る。この他図化し得なかったが少量の晩期資料も混入している。以上示したように中・上層資料では後期初頭の新相からおそらく後期中葉まで下る段階の資料を中心とし，少量，弥生前期以前の資料をまじえている。

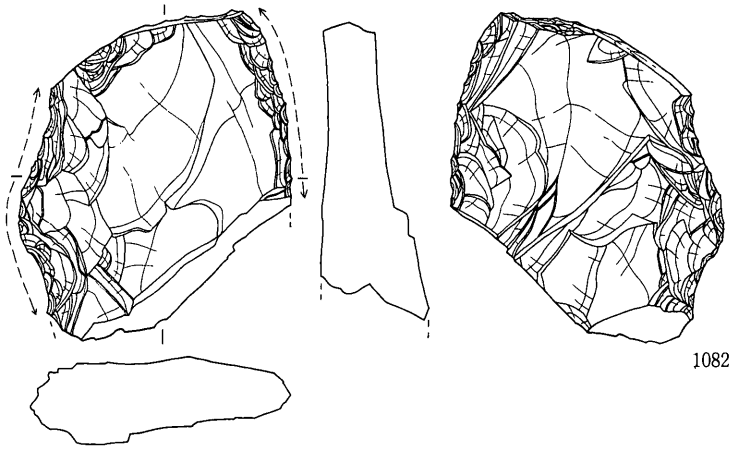
下層資料では縄文晩期を中心とする。突帯文土器は口縁部はやや外反気味に尖り，端部に刻み目を持つ例 (1055・1059) は多くない。突帯は低い断面蒲鉾形を呈する形態が多く，台形状のしっかりした形態 (1060) はすくない。また突帯下に縦位の並行沈線文を施すことが多い。その構成は垂下文 (1055) と山形意匠とがある。後者ではやや崩れた構成 (1065等) が目に付く。(1068) は壷口縁部。わずかに肥厚気味に丸く納め，丁寧に磨く。底部 (1069・1070) は窪み底とはならないが，強く突出して縁辺部がよく張り出す。

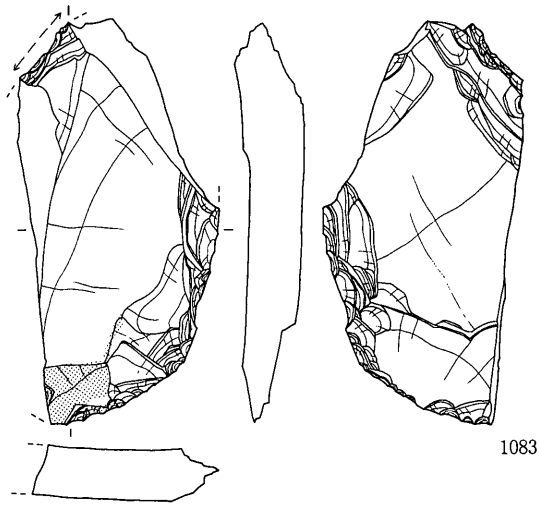
(1072) は平基の小形石鏃。(1073) は細身の凹基式石鏃だが，中位がくびれた形態を

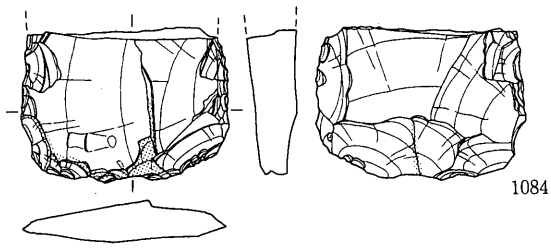


挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1072	石鏃	2.6	1.6	0.4	1.0	サヌカイト	平基	
1073	石鏃	2.3	1.6	0.3	1.3	サヌカイト	凹基	先端部折損
1074	石鏃	1.3	1.3	0.3	0.3	サヌカイト	凹基	先端部折損
1075	打製石庖丁	6.5	4.6	0.9	35.0	サヌカイト		折損
1076	打製石庖丁	4.3	3.1	1.2	17.1	サヌカイト	背部折り取り面	折損
1077	スクレイパー	3.7	2.5	0.6	4.8	サヌカイト	背部調整無し　刃部調整微弱	折損
1078	石鏃	6.9	6.3	1.6	86.6	サヌカイト	側縁折り取り面残す　先端稜部摩耗微弱	基部折損
1079	石鏃	6.4	4.9	2.2	100.7	サヌカイト	両側縁潰し　稜部摩耗	先端部折損
1080	石鏃	5.0	4.6	1.2	36.3	サヌカイト	両側縁潰し	先端部折損
1081	石鏃	8.7	4.4	1.5	71.5	サヌカイト	側縁潰し	

第293図　4区ＳＤ17出土遺物１（１／２）

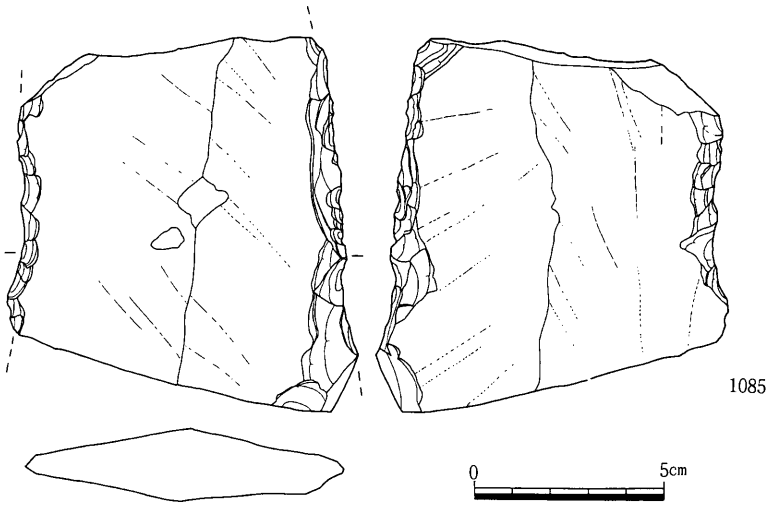


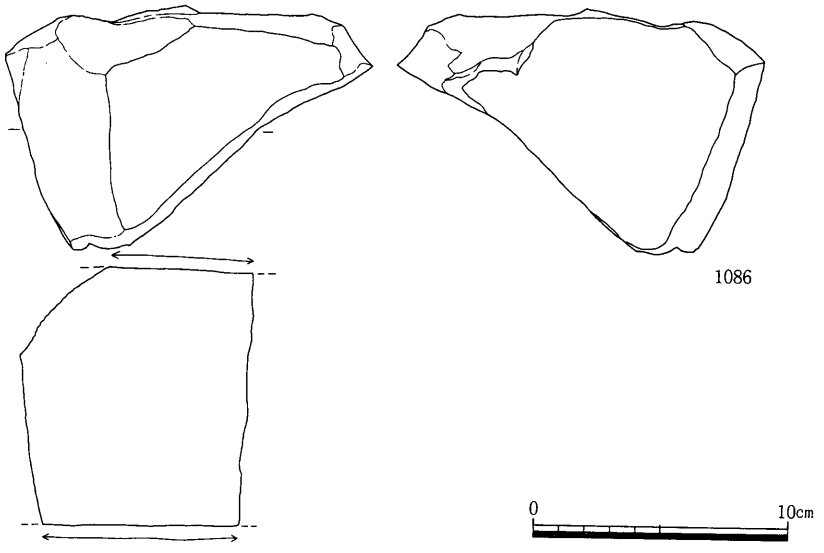




挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1082	石鏃	8.2	7.2	2.7	158.9	ｻﾇｶｲﾄ	両側縁潰し	先端部折損
1083	石鏃	10.5	5.1	1.7	103.6	ｻﾇｶｲﾄ	左面先端部摩耗顕著	折損
1084	石鏃	3.9	5.6	1.3	34.3	ｻﾇｶｲﾄ	摩耗微弱	基部折損

第294図　4区ＳＤ17出土遺物２（１／２）





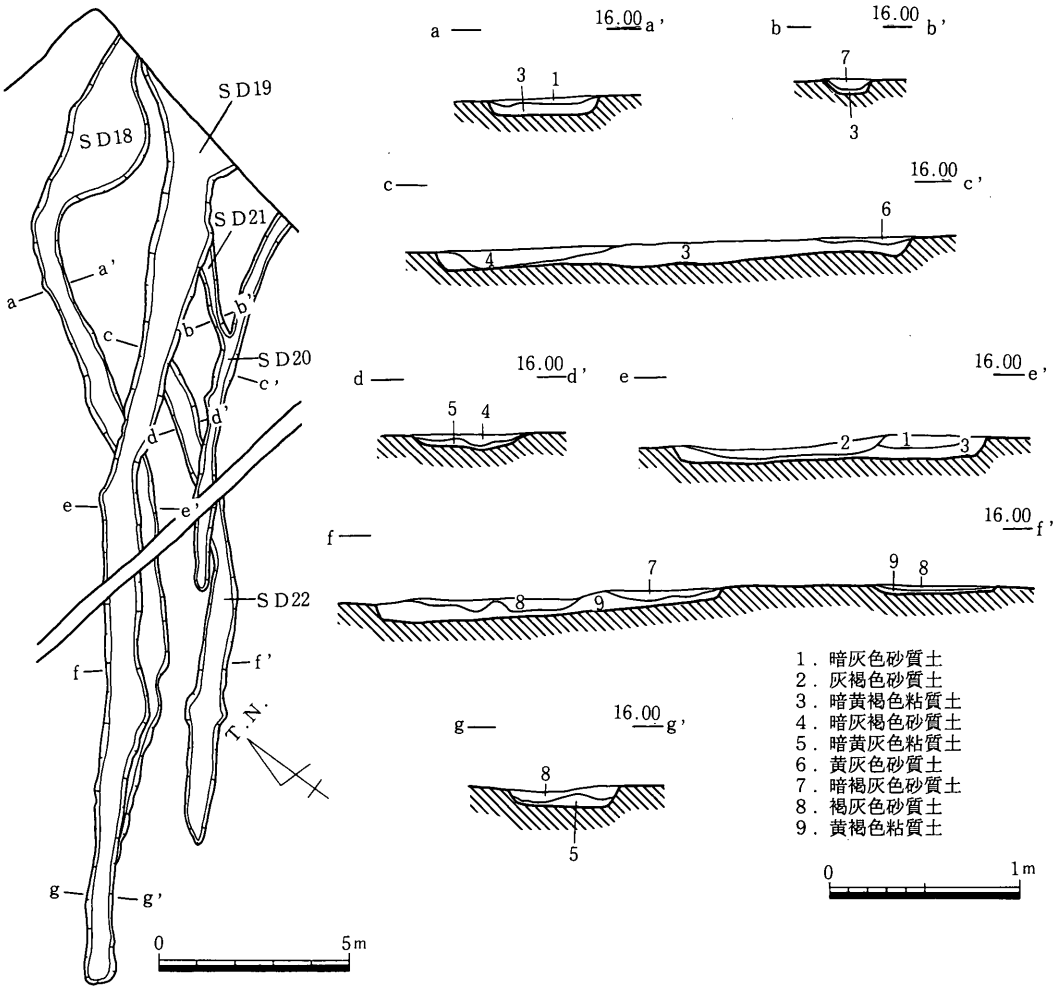
挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1085	石鏃	9.6	8.9	2.2	240.1	安山岩系		両端折損
1086	大形砥石	14.4	9.2	10.1	1558.8	?	両面平滑　使用顕著　擦痕	折損

第295図　4区ＳＤ17出土遺物３（１／２・１／３）

持つ。(1074) は凹基の小石鏃。打製石庖丁 (1075) は短辺に浅いが明瞭な抉り部をもうける。(1076) は裁断面を持つ小形の楔形石器。スクレイパー (1077) は刃部調整粗雑で背部は自然面のまま，二次調整はない。(1079・1080) は石鏃基部で側縁は丹念に潰し調整を加える。(1081) は細身の石鏃で縁辺部の調整は深く及んでいない。(1082) は形状が

整わないが，ほぼ並行する両側縁に明瞭な潰し調整が顕著なことから石鏃基部とした。(1083) はやや薄い大形剥片を素材とし側縁・刃部の調整はあまり深く及ばない。(1085) は安山岩系の板状礫の両側縁に細かい調整剥離を施す。形状から石鏃と推定した。(1086) は大形の砥石。両面を使用し研ぎ面はほぼ平坦である。

以上の資料から本溝の開削は縄文時代晩期後半に遡り，埋没の完了は弥生時代後期中葉までは下るものと考えられる。



第296図　4区ＳＤ18～22平・断面図（1／200・1／40）

ＳＤ18～22（第296～302図）

4区東端，ＳＤ17の東側で概ね延長20m前後を確認した小溝群である。Ｂ17区南半では削平によって残存していない。やや蛇行し，重複して南西－北東方向を持つ。切り合いからＳＤ22→ＳＤ20・21→ＳＤ19，ＳＤ18→19の関係が確認できる。なおＳＤ21はＳＤ20北

半で分岐する小溝である。

ＳＤ18は検出部分南半の過半をＳＤ19によって損なわれている。断面皿状で幅は0.5～２ｍと一様ではなく深さは0.05m程度に過ぎない。埋土は暗灰色～暗褐灰色の砂質土である。

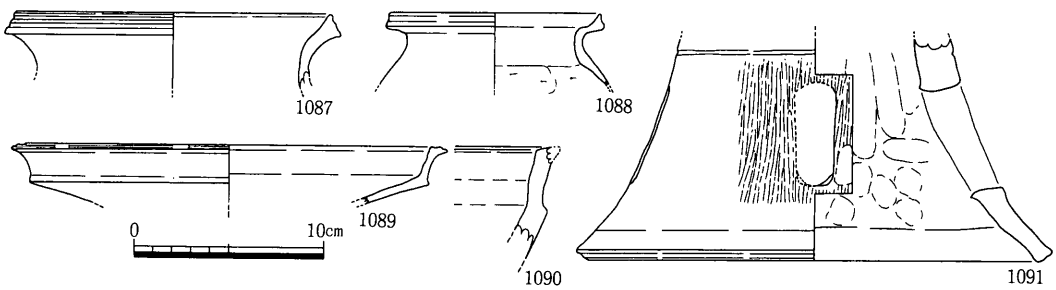
ＳＤ22は小溝群中，最新の溝で，ＳＤ21・24・25を切る。やはり断面皿状で幅0.5～1.0m，深さ0.05～0.1ｍを測る。埋土は暗灰色砂質土である。

ＳＤ20はＳＤ22を切る小溝で，本溝から分流するＳＤ21はＳＤ19に切られる。ＳＤ20・21共に，小溝群でも一際小規模で，幅0.2～0.4m，深さ0.05ｍを測るに過ぎない。埋土は黄灰～暗褐灰色砂質土である。

ＳＤ22はＳＤ19・20に切られる。幅0.6m前後，深さ0.05ｍである。埋土は褐灰色砂質土である。

なお小溝群の床面レベルは15.6m前後で，その微妙な高低差から北東に流下するものと考えられる。

（1087～1091）はＳＤ18出土資料。（1087）は大形の短頸壷。緩やかに開いて端部は鈍く摘み出す。（1088）は直立する頸部が明確すぎるが甕であろう。端部は肥厚しつつ小さく摘み上げる。拡張口縁高坏（1089）は上半部がやや伸び，口縁端部も外方にだけ摘み出



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1087	短頸壷	16.5			細・極多、中・普	橙色	口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は肥厚し小さく上下に摘む。端面凹線。横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、雲母多、石英等
1088	広口壷？	11.0			細・極多	にぶい黄褐色	内傾する不明瞭な頸部から強く折り返し口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上方に摘み出す。端面凹線。口縁部内面強い横ﾅﾃﾞで凹面。内面肩部まで横ｶｽﾞﾘ。	1/6	角閃石極多、石英等多
1089	高坏	21.0			細・極多、中・多	明黄褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部はやや外傾して端部は外方に摘み出し、頂部凹線。	1/8	角閃石極多、雲母多、石英等多
1090	大形鉢				細・極多、中・多	黄褐色	やや屈曲して鈍い段。口縁部はほぼ直立して端部は外方に摘み出す。		角閃石極多（含粗粒）、雲母多
1091	大形器台			23.7	細・極多	明黄褐色	脚裾部は緩やかに開き端部は四角く納める。端面鈍い凹線。裾部隅丸長方形の大形透かし、中位に沈線。外面縦ﾐｶﾞｷで下端部横ﾅﾃﾞ、内面指押さえ顕著。	1/4	角閃石極多、石英等多

第297図　４区ＳＤ18出土遺物（１／４）

すが中位の屈曲はまだ顕著である。大形鉢（1089）は口縁部直下屈曲部は鋭い形態。大形器台（1091）は脚裾部の開きが目立って小さい。長楕円形の透かし孔が脚裾の低い位置に穿たれる。以上の資料は後期初頭に位置づけられる。

（1092～1130）はＳＤ19出土資料。直口壷（1092）は口頸部に凹線文を加え端部が尖る後期初頭のもっとも主流的な形態である。（1093・1094）は口縁端部を鈍く肥厚し，後者では端面に円形刺突文を施す。甕（1095～1098）は強く折り返した口縁端部を鈍く肥厚して摘み出す形態で，比較的端面は幅広いものである。小形器台（1100・1101）は口縁端部を強く下方に摘み出す。小形器台脚（1102・1103）は後期初頭に多い形態。（1102）は端部の形状にやや違和感があり，直口壷口縁部の可能性も捨てきれない。拡張口縁形態の高坏（1108・1109）は上半部がやや外傾する分，屈曲が鈍くなる。脚（1110）は鈍く肥厚した端上部を摘み出す形態。主流的なものではない。大形鉢（1113）は口縁部を僅かに内湾させて外面に鈍い凹線文を配す。以上の資料は若干新古の様相に分かれうるが，いずれにせよ後期初頭に位置づけられる内容である。

これに対して（1116～1126）後期中葉以降の後出的な形態である。「く」字口縁甕（1116・1117）は口縁部が直線的に開く点に後出的な要素が示される。（1118～1120）は典型的な下川津Ｂ類甕である。高坏（1121）も下川津Ｂ類に比定できるが，内面口縁部直下の凹線文を強調する形態は同類の中でも古い様相で，後期末葉までは下らない。（1120）は器種不明。高坏とすれば後期末葉まで下る可能性が高い。（1124）は薄作りで長頸形態の，後期中葉段階の典型的な広口壷である。壷（1125・1126）は後期後半までは下らないであろうが，さすがに後期初頭に位置づけることはできない。

把手付広片口皿（1127・1128）は把手部が発達しない形態。同片口部（1129）も短くあまり反らない。この他，細片のため図示していないが本溝では須恵器片少量も検出している。

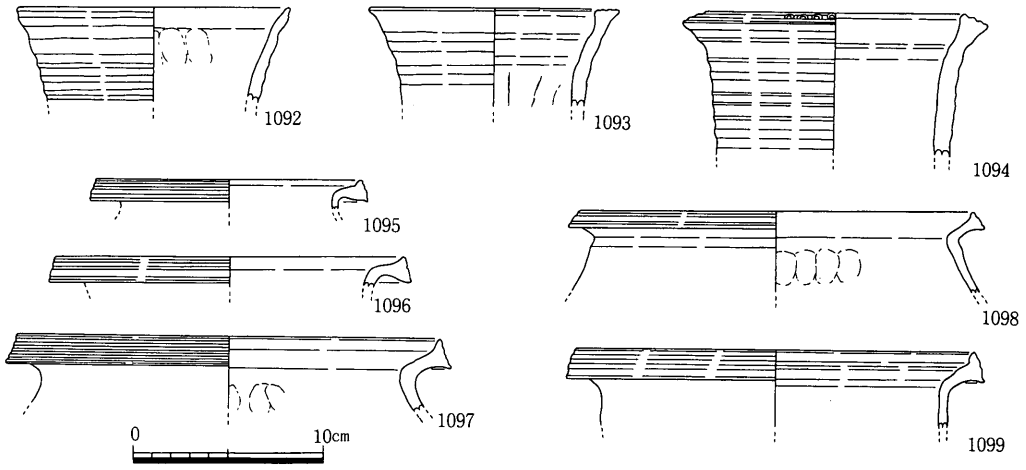
ＳＤ19は古墳時代後期以降に下る可能性を持つが，包含される弥生後期資料には後期初頭段階のものと中葉以降に下る段階のものとがある。前者は後期初頭段階でもより古相を示す。

ＳＤ20は少量の弥生後期土器を出土している。小片ばかりであるが甕（1131）は口縁端部の摘み出しが弱く，高坏（1132）は端部拡張が鈍化しているものの後期初頭に属するものである。

ＳＤ21には少量の弥生後期資料を含むが図示できるものはない。

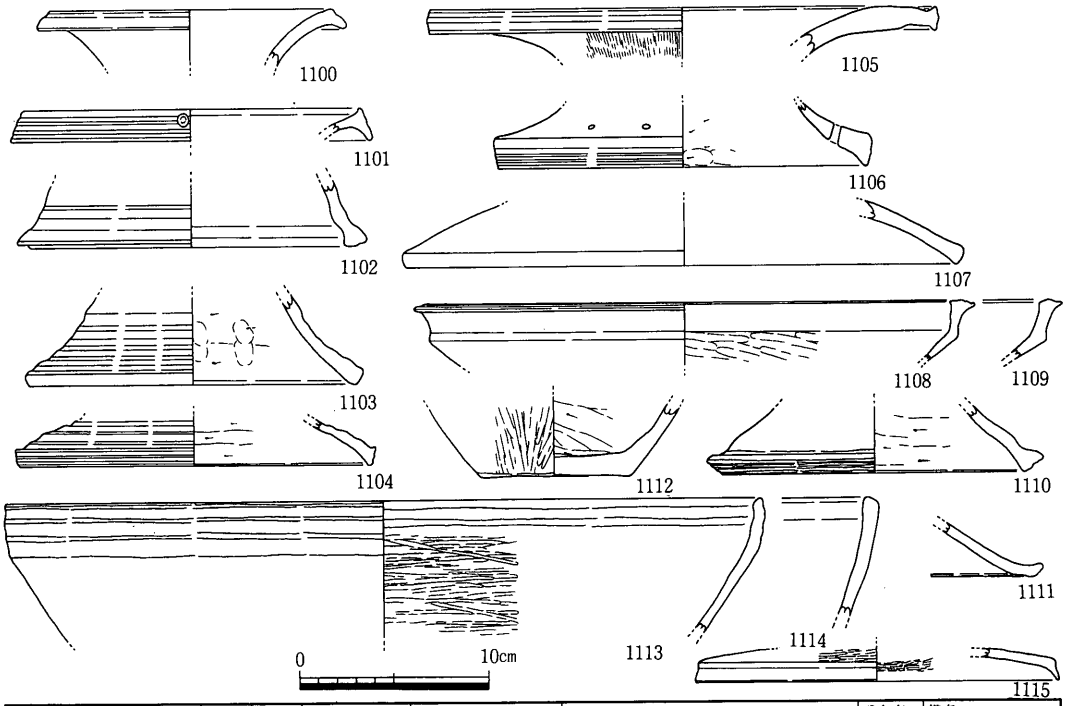
ＳＤ22は少量の弥生後期土器細片の他，須恵器片を含む。(1134) は須恵器坏か高坏片。外面下部に箆切り痕を留める。古墳時代後期に位置付けられる可能性が高い。

以上示したようにＳＤ18・20以外では須恵器片を検出している。しかし古墳時代以降の資料はいずれも小片であることや，５区の本溝群延長部分の伴出遺物や隣接する掘立柱建物群を考慮すると，やはり弥生後期に位置づけるのが妥当と考える。



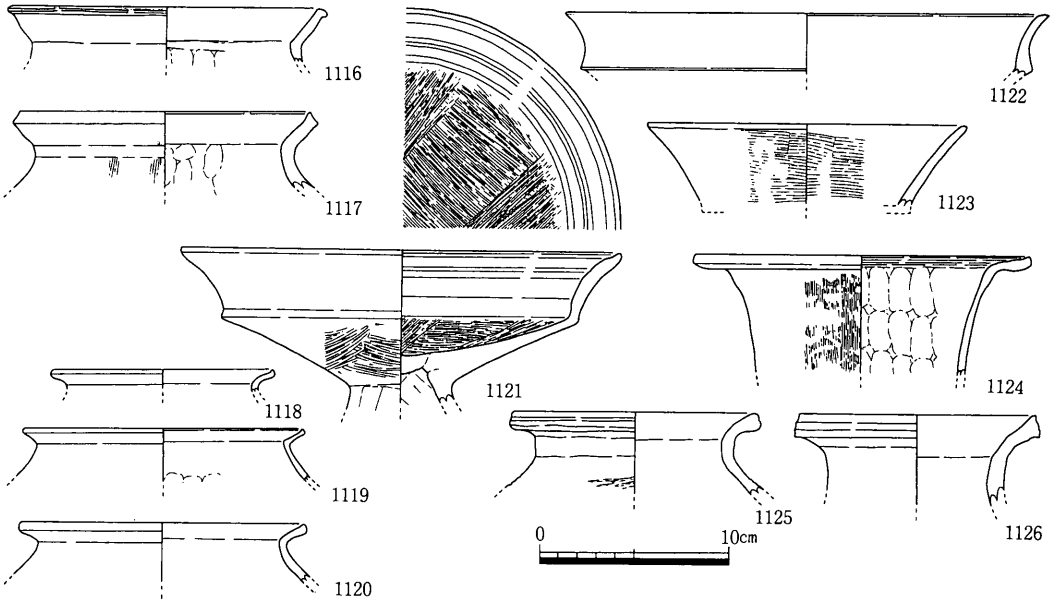
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1092	直口壺	14.2			細・極多	明褐色	口頸部はやや外反して立ち上がり、端部は尖る。外面凹線。	1/10	角閃石極多
1093	直口壺	11.2			細・極多	明褐色	口頸部はやや外反して立ち上がる。端部は鈍く肥厚しつつ外方に小さく摘むと共に内方に小さく突出。頂部沈線３条。外面鈍い凹線。	1/6	角閃石極多
1094	直口壺	13.6			細・極多、中・多	明褐色	ほぼ直立する頸部から口縁部はやや外反。端部は肥厚して内外に張り出す。端面凹線後４個１対の円形刺突文、頸部外面凹線。	1/6	角閃石極多、石英等・雲母多
1095	甕	13.8			細・極多	黒褐色	強く折り返し口縁部は短く開く。端部は肥厚しつつ上方に摘み出し下方も小さく突出。端面沈線４条。口縁部内面強い横ﾅﾃﾞで凹面。内面肩部まで横ｹｽﾞﾘ。	1/9	角閃石極多
1096	甕	18.2			細・極多	にぶい黄橙色	口縁部は強く折り返して短く水平に開く。端部は肥厚しつつ上下に摘み出して端面凹線。	1/8	角閃石極多
1097	甕	22.1			細・極多	明赤褐色　明黄褐色	内傾する不明瞭な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出す。端面沈線４条。口縁部内面強い横ﾅﾃﾞで凹面。内面肩部まで横ｹｽﾞﾘ。	1/12	角閃石極多、赤色粒多
1098	甕	12.8			細・極多、中・普	明褐色	強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出し端面凹線。肩部内面指押さえ。	1/12	角閃石極多、雲母多、石英等
1099	広口壺？	21.0			細・極多	黄褐色	短く直立する頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は肥厚しつつ上下に摘み出して端面凹線。	1/12	角閃石極多

第298図　４区ＳＤ19出土遺物１（１／４）



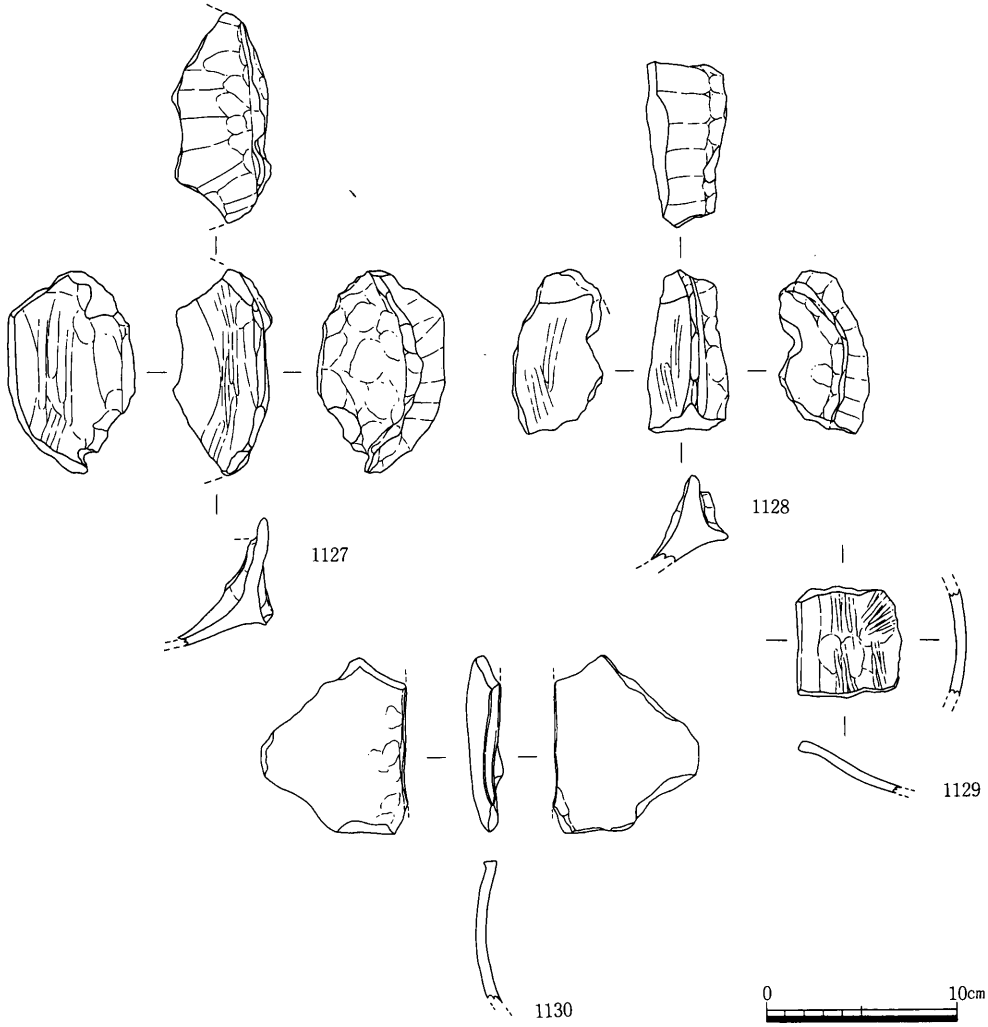
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1100	小形器台？	14.7			細・極多	明褐色	口縁部は強く外反して開く。端部は外方に摘み出しつつ上部もやや張る。端面凹線。	1/8	角閃石極多、雲母多
1101	広口壺？	17.5			細・極多	ｵﾘｰﾌﾞ褐色	口縁端部は下方に引き出しつつ上方も摘み上げ、端面沈線と円形刺突文。	1/12	角閃石極多
1102	器台			16.2	細・極多	にぶい黄橙色	脚裾部は緩く開き、端部は小さく内外に張り出す。端面凹線、内面横ﾅﾃﾞ。	1/12	角閃石極多　赤色顔料
1103	小形器台			16.5	細・極多、中・普	明赤褐色　明褐色	脚裾部はやや反り気味に開き、端部は丸く納める。裾部凹線。内面横ﾊｽﾞﾘ。	1/6	角閃石極多、石英等
1104	小形器台			18.4	細・極多	明黄褐色	脚裾部はやや内湾気味に強く開き、端部は鈍く肥厚して下方に摘み出すと共に上方も小さく突出。裾部・端面凹線。内面横ﾊｽﾞﾘ。	1/12	角閃石極多
1105	器台	26.4			細・極多	赤褐色　にぶい黄色	口縁部は強く外反して大きく開く。端部は小さく上下に摘み端面凹線。内面横ﾅﾃﾞ、外面縦ﾊｹ。脚部の可能性も。	1/12	角閃石極多
1106	脚？			19.3	細・極多、中・普	明黄褐色	脚裾部は強く開き、端部は肥厚して下方に摘み出す。端面凹線。内面横ﾊｽﾞﾘ。２孔１対の円形透かし	1/12	角閃石極多、石英等
1107	器台			28.7	細・極多	明赤褐色	脚部はやや内湾して強く開く。端部は下方に張り気味に四角く納める。	1/14	角閃石極多、石英等
1108	高坏	28.2			細・極多	にぶい黄橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は短く直立。端部は外方に摘み出して内方も突出。頂部凹線。上半部横ﾅﾃﾞ、下半部内面横ﾐｶﾞｷ。	1/14	角閃石極多
1109	高坏				細・極多	明赤褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部はやや外傾して端部は外方に摘み出すと共に内方もやや張る。頂部凹線。横ﾅﾃﾞ		角閃石極多
1110	脚			15.6	細・普、中・多	灰白色～淡橙色	脚裾部は強く開き、端部は鈍く肥厚して上方に摘み出す。端面凹線。内面横ﾊｽﾞﾘ。	1/8	石英等多、角閃石
1111	脚				細・極多、中・普	明黄褐色	脚裾部は強く開き、端部は小さく反って丸く納める。		角閃石極多、石英等
1112	壺？			7.8	細・極多	褐色　にぶい黄橙色	底部薄い。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面横ﾊｽﾞﾘ。	1/3	角閃石極多、石英等　赤色顔料
1113	大形鉢	39.7			細・極多	にぶい黄橙色	緩やかに湾曲し口縁部は短くやや内傾する。端部は丸く納める。外面口縁部直下凹線、内面上半部横ﾅﾃﾞ、以下横ﾐｶﾞｷ。	1/14	角閃石極多、雲母多　赤色顔料
1114	大形鉢				細・極多	にぶい黄褐色	体側縁部。端部は内方に張り気味に四角く納める。ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、石英等・雲母　赤色顔料
1115	蓋	19.0			細・極多	灰褐色　黒褐色	円盤状を呈し縁辺部は薄く下方に摘み出す。端面凹線。内外面横ﾐｶﾞｷ。	1/16	角閃石極多

第299図　４区ＳＤ19出土遺物２（１／４）



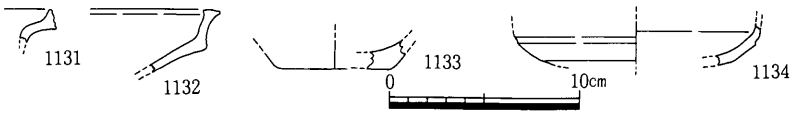
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1116	甕	15.8			細・極多	にぶい黄橙色	折り返しは緩く、口縁部は直線的に短く立ち上がる。端部は小さく外方に摘み出す。内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、雲母
1117	甕	15.2			細・極多、中・普	赤褐色	内傾する不明瞭な頸部から緩く折り返し口縁部短い。端部は小さく摘み上げると共に下方も張る。頸部以下外面縦ﾊｹ、内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等
1118	甕	11.6			細・極多	にぶい橙色	強く折り返して口縁部は短く開く。端部は小さく摘み上げる。	1/6	角閃石極多　B類甕
1119	甕	14.4			細・極多	にぶい黄色	内傾する不明瞭な頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は小さく摘み上げる。口縁・頸部内面強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜。肩部内面指押さえ。	1/12	角閃石極多　B類甕
1120	甕	14.8			細・極多	橙色	内傾する不明瞭な頸部から強く折り返し口縁部は短く開き、端部は小さく摘み上げる。口縁・頸部内面強い横ﾅﾃﾞで折り返し部に鈍い稜	1/8	角閃石極多、石英等・赤色粒　B類甕
1121	高坏	23.1			細・極多	淡赤橙色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部は外反して開き端部は丸く納める。上半部内面凹線。下半部外面横ｹｽﾞﾘ後分割横ﾐｶﾞｷ、内面分割横ﾐｶﾞｷ。脚部内面横ｹｽﾞﾘ。円盤充填	全周	角閃石極多　B類高坏
1122	高坏	24.9			細・極多	明褐色　にぶい黄色	中位で強く屈曲して稜。上半部は外反して立ち上がる。端部は強く外方に張って四角く納める。横ﾅﾃﾞ。	1/10	角閃石極多、石英等多、雲母
1123	？	16.8			細・極多	灰黄色　赤褐色	中位で強く屈曲して稜。上半部はやや反り気味に開き端部は尖る。横ﾊｹ。高坏坏部か	1/6	角閃石極多
1124	広口壺	17.6			細・極多	橙色　にぶい黄橙色	やや外傾する頸部から強く折り返し口縁部は短く水平に開く。端部は小さく摘み上げる。口縁部内面凹線。頸部外面縦ﾊｹ、内面指押さえ顕著。	1/7	角閃石極多
1125	広口壺	12.8			細・極多	浅黄色	短い頸部から口縁部は強く折り返して短い。端部は肥厚しつつ四角く納める。端面凹線。肩部外面叩き目残す。	1/6	角閃石極多
1126	広口壺	12.4			細・極多	明褐色	口縁部は緩やかに折り返して短い。端部は小さく上下に摘み出して端面凹線。横ﾅﾃﾞ	1/8	角閃石極多

第300図　４区ＳＤ19出土遺物３（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1127	把手付広片口皿				細・極多、中・普	明黄褐色	把手部。把手部は痕跡的に立ち上がり部下端から摘み出すのみ。低い半円形に突出した立ち上がり部はやや外傾して伸び丸く納める。外面指押さえ。体部外面縦ﾅﾃﾞ。内面立ち上がり部横ﾐｶﾞｷ、体側面縦ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多、赤色粒　赤色顔料
1128	把手付広片口皿				細・極多	黄褐色	把手部。立ち上がり部下端から引き出した把手部は短く、内面指押さえ顕著。低い台形状に突出した立ち上がり部はやや外傾して丸く納める。体部外面縦ﾅﾃﾞ。内面横ﾐｶﾞｷ。		角閃石極多、雲母多、石英等多　赤色顔料
1129	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄褐色	片口部。口縁部はゆるく湾曲して伸び、端部は外方に摘み気味に四角く納める。体部内面ﾐｶﾞｷ、口縁部横ﾅﾃﾞ。		角閃石極多、雲母多　赤色顔料
1130	把手付広片口皿				細・極多、中・多	黄褐色	体側縁部片。端部はやや張り気味に四角く納め、局所的に内外から押さえつけ摘み出す部分がある。外面調整不明、内面ﾐｶﾞｷ		角閃石極多、石英等多、赤色顔料

第301図　４区ＳＤ19出土遺物４（１／４）



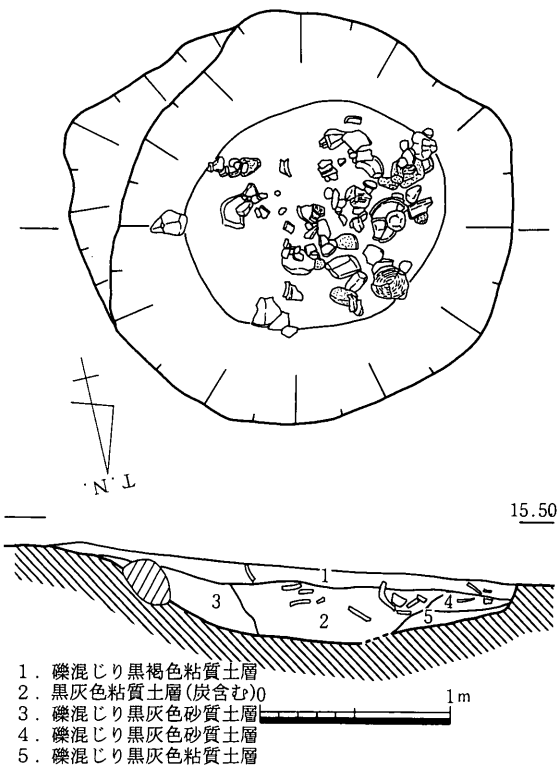
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1131	甕				細・極多	明黄褐色	強く折り返して口縁部は短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上方に摘み出すと共に下方もやや張る。端面沈線3条。		角閃石極多
1132	高坏				細・極多、中・多	明黄褐色	中位で強く屈曲して鈍い稜。上半部はやや外傾して端部は内外に小さく張り出す。下半部外面横ｹｽﾞﾘ。		角閃石極多、石英等多
1133	？			5.8	細・多、中・多	黄橙色	体部はよく開く。	1/6	石英等多、角閃石・雲母少　搬入品
1134	須恵器坏				細・少	青灰色	底部から緩やかに湾曲して体部に至る。底部篦切り後中心部回転ｹｽﾞﾘ。	1/10	石英等少

第302図　４区ＳＤ20・22出土遺物（１／４）

ＳＫ01（第303～309図）

Ｃ12区北半で検出した土坑である。掘立柱建物ＳＢ03と溝ＳＤ08の間に位置する。平面形は東西2.4m，南北2.2mの略円形を呈する。断面形は皿状を呈し，現況では中心部で深さ0.4mを測る。（土坑床面レベル　標高14.9m）下層には炭混じりの黒灰色粘質土，礫混じり黒灰色砂質土が堆積し，上層には薄く黒褐色粘質土がかぶっている。前者を中心に土器片，拳大の川原石が比較的豊富に認められる。

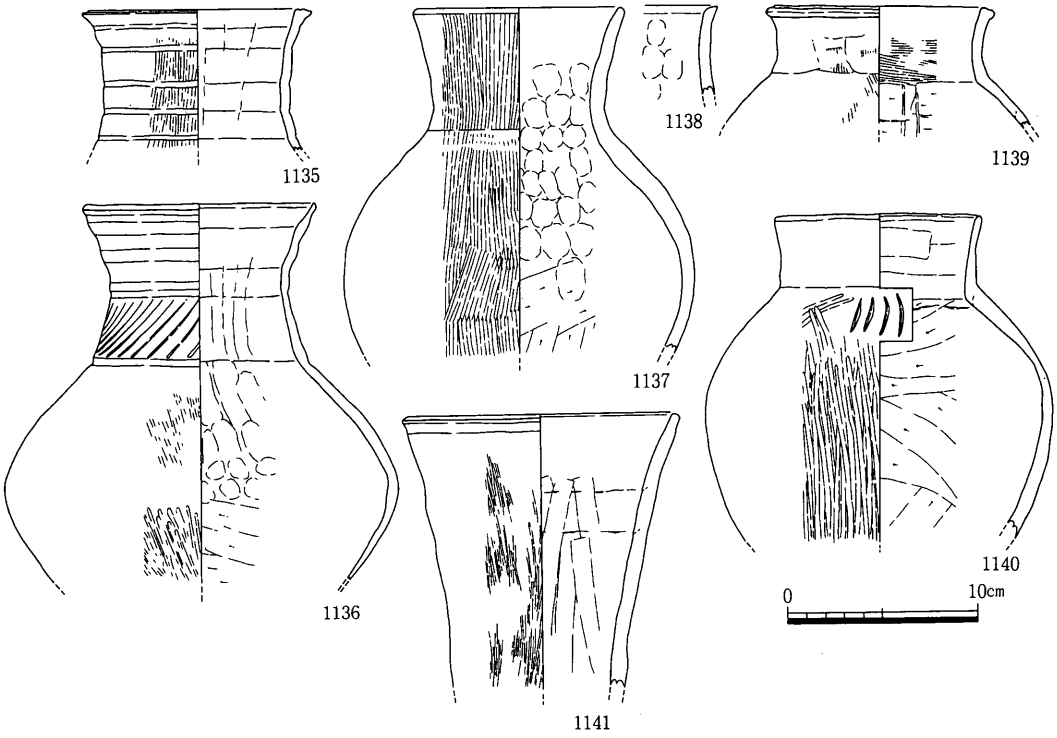
包含される土器類は比較的大形片が多く，確認器種数もかなり多いが壷類では，広口壷の諸形態が少ない。出土状況から特にこれらを二分し得る兆候は認められない。



第303図　４区ＳＫ01平・断面図（１／40）

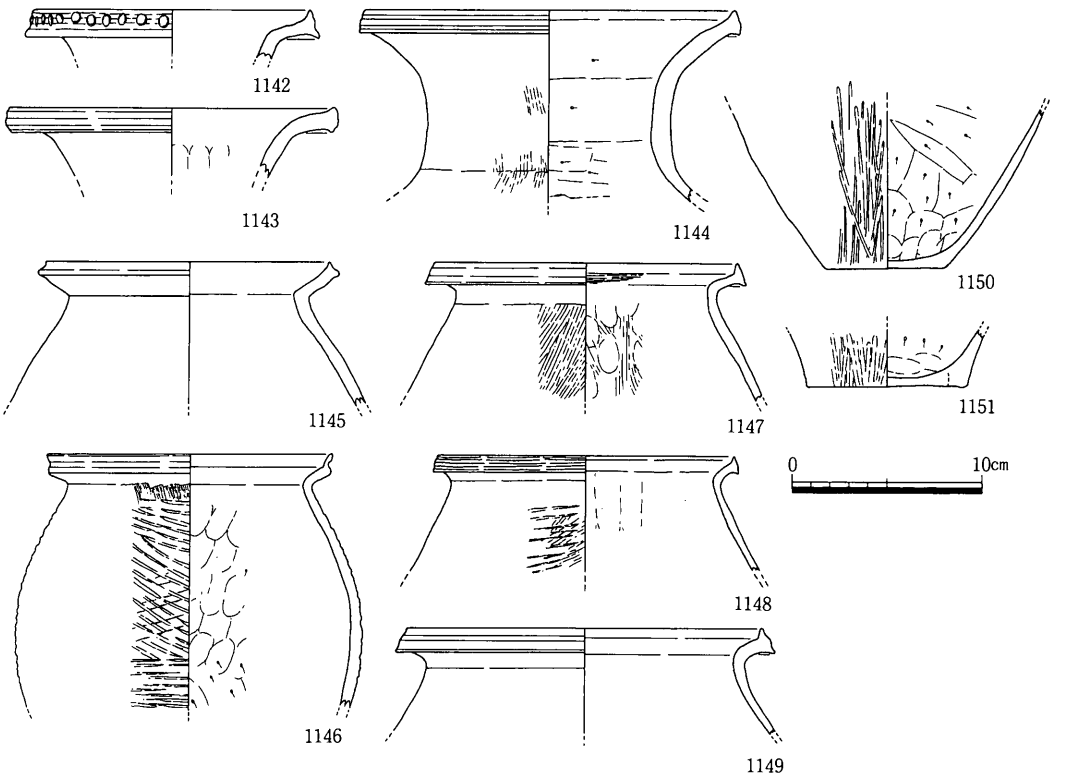
直口壷（1135・1138）は鈍く口縁端部を肥厚するもので，この系統では頸部の凹線文は狭くまたかなり不明瞭となる。（1136）は緩やかに外反して下半部に斜線文を配する典型的な形態。体部の張りは強い。（1137）は頸部まで縦ハケ調整で無文となる。（1139・1140）は短頸形態で，体部の張りはやや弱い。（1140）は体部に並行短線の記号文を見る。（1141）は太頸の発達した直口壷。口縁部

に鈍い凹線を１条のみ配する。本地方に多い系統の壷ではない。広口壷（1142）は口縁端面に円形刺突文を施す。(1143）では口縁部は外傾する頸部から折り返し，端部を小さく摘み出す。このような口頸部形態の広口壷では頸部にかなり明瞭な凹線文を連続させるこ



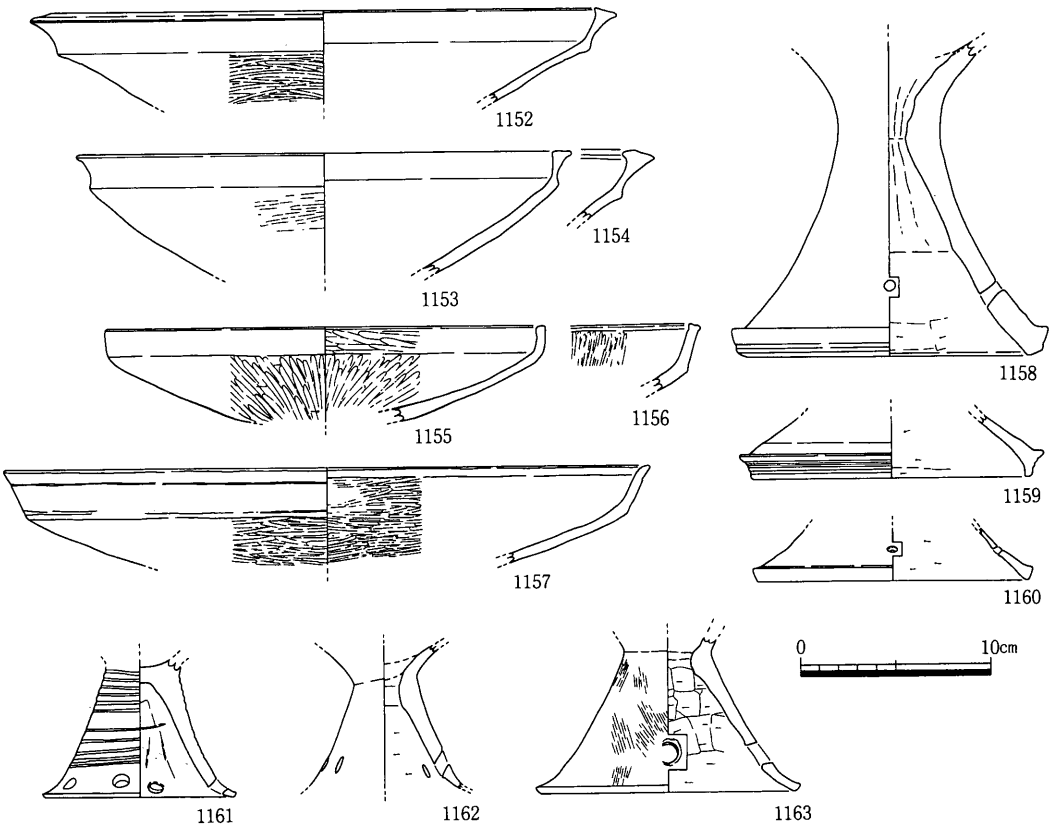
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1135	直口壷	12.0			細・極多	明黄褐色	口頸部は外反気味に立ち上がり、端部は小さく外方に摘み出し、頂部に凹線２条。外面縦ﾊｹ後凹線、内面横ﾅﾃﾞ。	1/4	角閃石極多、石英等
1136	直口壷	12.0			細・極多	明赤褐色　黒色	体部の張りは強い。口頸部は外反して立ち上がり端部は尖る。口頸部上半・基部に凹線、下半に斜線文。体上半部縦ﾊｹ、下半部縦ﾐｶﾞｷ、内面上半部指押さえ、下半部ｹｽﾞﾘ。最大径部の押さえは指頭で強い。以上は浅い指腹。	1/4	角閃石極多、石英等多
1137	直口壷	10.6			細・極多、中・普	黄褐色	口頸部はやや外傾して立ち上がり端部は四角く納める。外面縦ﾊｹ、肩上部弱い横ﾅﾃﾞ、内面体下半部縦ｹｽﾞﾘ、中位横ｹｽﾞﾘ後、肩部・頸部指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等
1138	直口壷				細・極多	橙色	口頸部はやや外反気味に立ち上がり端部は外方にやや張って四角く納める。内面指押さえ		角閃石極多、石英等少
1139	直口壷	10.6			細・極多、中・多	明黄褐色	口頸部は短く直立する。端部は鈍く外方に摘み頂部に凹線１条。外面縦ﾊｹ後ﾅﾃﾞ、頸部内面横ﾊｹ体部上端まで横ｹｽﾞﾘ。	1/2	角閃石極多、石英等多
1140	直口壷	10.7			細・極多、中・多	明黄褐色	張りの弱い体部から口頸部は短く直立する。端部は丸く納める。口頸部横ﾅﾃﾞ、体部外面縦ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘ。肩上部に篦描の並行短線４条の記号文	1/2	角閃石極多、石英等多
1141	直口壷	13.8			細・極多	橙色	直線的にやや外傾する口頸部。端部は四角く納め、口縁部直下に鈍い凹線１条。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面縦ﾅﾃﾞ	4/5	角閃石極多

第304図　４区ＳＫ01出土遺物１（１／４）



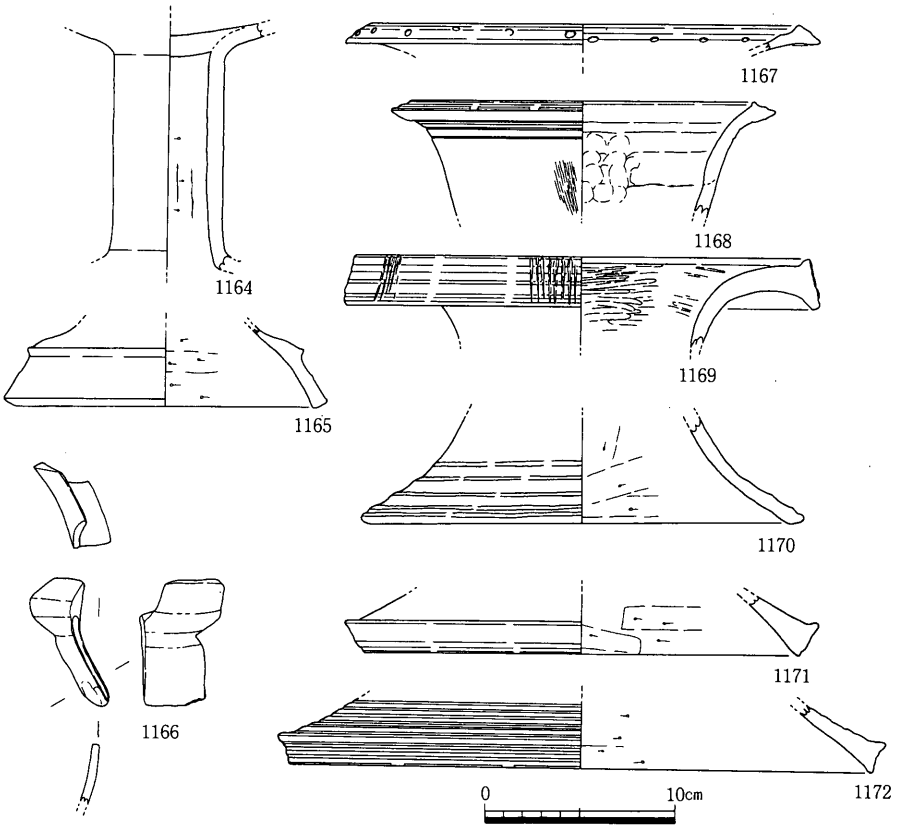
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1142	広口壺	14.4			細・極多	にぶい黄橙色	やや外傾する頸部から強く折り返して口縁部は短く開く。端部は上下に摘み出して端面に不明瞭な凹線後、円形刺突文。	1/8	角閃石極多、赤色粒
1143	広口壺	17.0			細・極多、中・多	明黄褐色	外傾する頸部から折り返して口縁部は短く水平に開く。端部は鈍く上下に摘み、端面に鈍い凹線。	1/8	角閃石極多（含粗粒）、石英等多
1144	広口壺	19.4			細・極多、中・普、粗・普	明赤褐色	口縁部は頸部から緩やかに外反して開く。端部は上下に小さく摘み出し端面に凹線。外面頸部縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面頸基部以下横ｹｽﾞﾘ。	1/3	角閃石極多（含粗粒）、石英等多
1145	甕	14.8			細・極多、中・普	暗灰黄色	体部最大径低い。口縁部は強く折り返して直線的に開く。端部は小さく摘み上げると共に下方もやや張る。	1/4	雲母・片岩　搬入品
1146	甕	14.8			細・極多	褐色	張りの弱い体部から強く折り返して短く開き二重口縁。立上り部はやや外傾して凹線。上端は丸く納める。体部外面は中位で方向を替える並行叩き後上端部に縦ﾊｹ。内面上半部指押さえ下半部縦ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多
1147	甕	16.0			細・極多	黒褐色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は上方に摘み出すと共に下方も突出して端面に鈍い凹線。肩部外面縦ﾊｹ、内面縦ﾊｹ後指押さえ。	1/8	角閃石極多
1148	甕	15.6			細・極多	明黄褐色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み出し端面に鈍い凹線。肩部外面並行叩き後斜ﾊｹ、内面指押さえ。	1/4	角閃石極多、石英等多
1149	甕	18.6			細・極多	黄橙色	痕跡的な頸部から口縁部は強く折り返して短く開く。端部は鈍く肥厚しつつ上下に摘み、端面に鈍い凹線。	1/8	角閃石極多、雲母
1150	壺？			6.4	細・極多	黄褐色	薄作り底部。外面疎らな縦ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘ。	全周	角閃石極多、石英等・雲母
1151	？			8.2	細・極多	にぶい黄色	比較的薄作りの底部。外面縦ﾐｶﾞｷ、内面ｹｽﾞﾘ後底面指押さえ。	3/4	角閃石極多、石英等多

第305図　４区ＳＫ01出土遺物２（１／４）



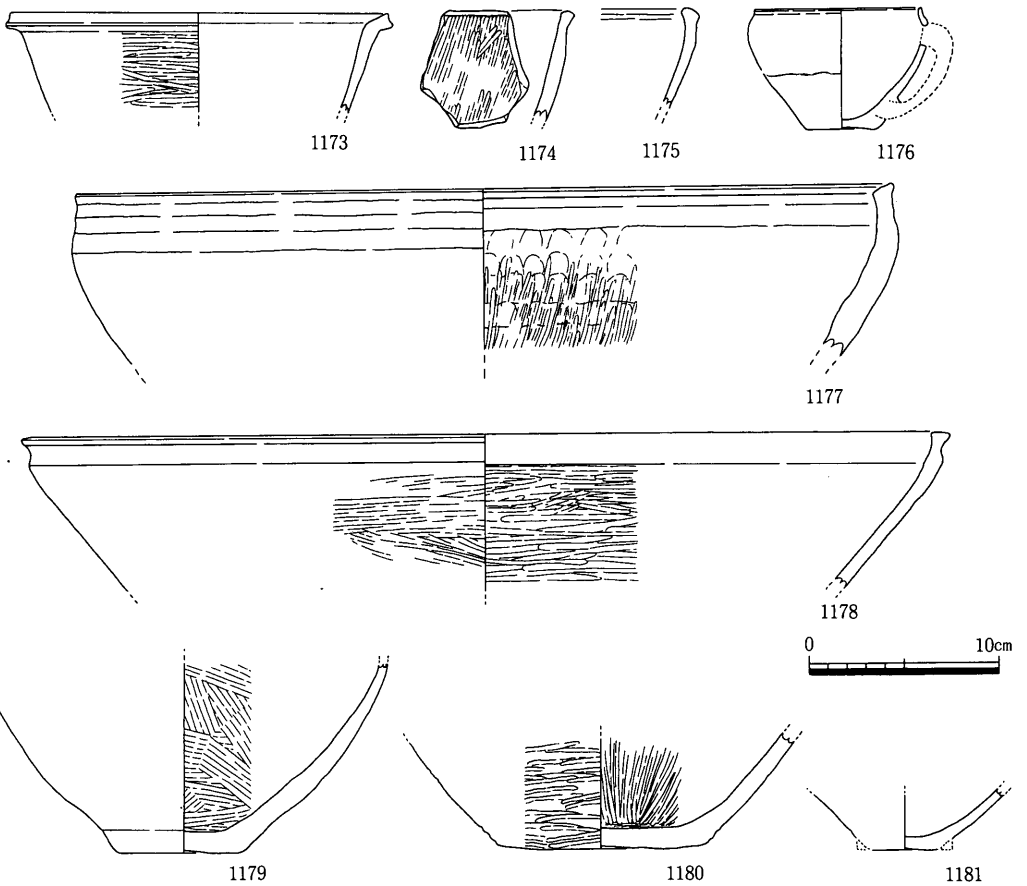
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1152	高坏	28.6			細・極多、中・普	明黄褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部短く外傾して端部は内外に摘み出し、頂部に平坦面。下半部外面横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多（含粗粒）、石英等
1153	高坏	24.6			細・極多	明黄褐色	中位で強く屈曲して鈍い段。上半部短く直立して端部は外方に摘み出し、頂部に平坦面。下半部外面横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、石英等・雲母・赤色粒
1154	高坏				細・極多、中・少	明黄褐色	中位で弱く屈曲して鈍い段。上半部短く外傾して端部は内外に摘み出し、頂部に平坦面。		角閃石極多、赤色粒少
1155	高坏	23.0			細・極多、中・普、粗・普	黄褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は短く直立して端部は四角く納める。上半部外面横ﾅﾃﾞ、内面横ﾐｶﾞｷ、下半部内外面放射状ﾐｶﾞｷ。	1/4	角閃石極多（含粗粒）、石英等多
1156	高坏				細・極多	明黄褐色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は短く外傾して端部は内外に張り気味に四角く納める。上半部外面横ﾐｶﾞｷ、内面縦ﾐｶﾞｷ、下半部外面放射状ﾐｶﾞｷ		角閃石極多、石英等・雲母少
1157	高坏	33.8			細・極多	橙色	中位で屈曲して鈍い稜。上半部は外傾して端部は尖る。上半部外面横ﾅﾃﾞ、他横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、石英等 赤色顔料
1158	脚			14.4	細・極多、中・多	黄褐色	脚部の開きは弱い。端部は鈍く肥厚して上端を摘み出す。内面下端のみ横ｹｽﾞﾘ。円形透かし	1/4	角閃石極多、石英等多、雲母
1159	脚			14.2	細・極多	橙色	脚端部は上下に摘み出して幅広の端面に並行沈線。外面横ﾅﾃﾞ、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、石英等多
1160	脚			14.2	細・極多	黄橙色	脚端部は鈍く肥厚して上下に張り出す。内面横ｹｽﾞﾘ円形透かし	1/8	角閃石極多、赤色粒・石英等・雲母
1161	脚			9.9	細・極多、中・多	明黄褐色	脚部は緩やかに開き端部は小さく反って丸く納める。並行沈線と下端に大形円形透かし。	全周	角閃石極多、石英等多
1162	脚				細・極多、中・多	明赤褐色	脚部は緩やかに開き端部は小さく反る。内面横ｹｽﾞﾘ、上端円盤充塡。２孔１対の円形透かし。	全周	角閃石極多、石英等多
1163	脚			15.4	細・極多	明黄褐色	脚部は緩やかに開き端部は小さく反って四角く納める。外面縦ﾊｹ、内面横ｹｽﾞﾘ。大形円形透かし。	2/5	角閃石極多、石英等・赤色粒

第306図　４区ＳＫ01出土遺物３（１／４）



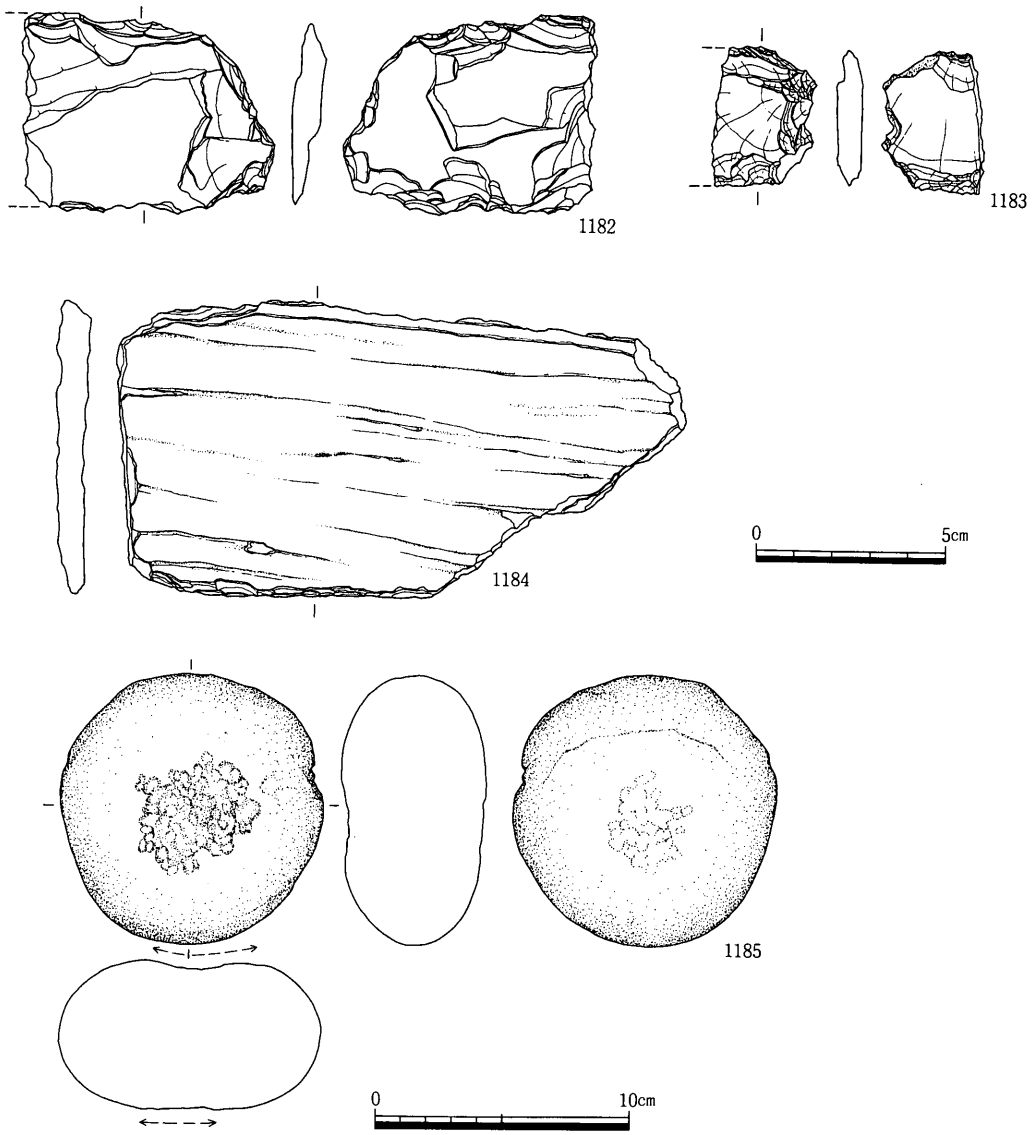
挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1164	脚				細・極多	赤色	整った柱状の軸部、裾部は強く屈曲して開く。内面横ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ。上端部円盤充填	全周	角閃石極多、石英等少
1165	装飾高坏			15.6	細・極多	明黄褐色	脚裾部有段。屈曲部は突帯状に鈍く突出。端部はわずかに肥厚して四角く納める。内面横ｹｽﾞﾘ	1/8	角閃石極多、石英等多
1166	把手付広片口皿				細・極多	にぶい黄褐色	片口部。口縁部は鈍く屈曲して伸び、端部は丸く納める。側縁端部は四角く納める。ﾅﾃﾞ		角閃石極多、石英等・赤色粒少　外面煤　赤色顔料
1167	小形器台	22.6			細・極多	橙色	口縁部は強く開き、端部は外方に引き出しつつ上方も小さく突出する。端面凹線、口縁部内面凹線後、円形刺突文	1/8	角閃石極多、石英等・赤色粒
1168	直口壺？	17.8			細・極多	明黄褐色	外傾する頸部から口縁部は小さく外反する。端部は外方に鈍く引き出しつつ内方も小さく突出する。端面凹線、口縁部直下細い沈線、頸部外面縦ﾊｹ後横ﾅﾃﾞ、内面指押さえ。	1/8	角閃石極多、石英等・雲母・赤色粒
1169	大形器台	23.8			細・極多、中・普、粗・普	明黄褐色	口縁部は強く折り返して水平に開く。端部は下方に引き出しつつ上方も突出する。端面に不明瞭な凹線後８条１単位の短刻線。口縁部内面分割横ﾐｶﾞｷ。	1/5	角閃石極多（含粗粒）、石英等多、赤色粒
1170	器台			22.4	細・極多、中・普	橙色	脚裾部は緩やかに外反して開き端部は丸く納める。裾部凹線４条、内面横ｹｽﾞﾘ。	1/15	角閃石極多（含粗粒）、石英等多
1171	大形器台			16.0	細・極多	明黄褐色	脚裾部は強く開き端部は鈍く肥厚して上端を摘み出す。端面鈍い凹線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/8	角閃石極多
1172	大形器台			34.0	細・極多、中・多	橙色	脚裾は強く開く。端部は鈍く肥厚しつつ下方に摘み出すと共に上部もやや突出する。裾部・端面に並行沈線。内面横ｹｽﾞﾘ。	1/4	角閃石極多、石英等多

第307図　４区ＳＫ01出土遺物４（１／４）



挿図番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	形態上の特徴など	残存率	備考
1173	鉢	19.7			細・極多	灰黄色　橙色	口縁部で短く折り返して端部は摘み出し気味に四角く納める。外面横ﾐｶﾞｷ。	1/12	角閃石極多、石英等
1174	鉢				細・極多	暗灰黄色	口縁部で短く外傾して端部は張り気味に四角く納める。内面縦ﾐｶﾞｷ。把手付広片口皿側縁部の可能性。		角閃石極多、石英等・雲母　赤色顔料
1175	鉢				細・極多	黄橙色	内湾気味に立ち上がり口縁端部は内外に張り気味に丸く納める。把手付広片口皿側縁部の可能性。		角閃石極多
1176	把手付鉢	8.1	6.1	3.6	細・極多、中・多	暗褐色	内湾気味に立ち上がり端部は反り気味に尖る。側面に縦位の環状把手。	2/5	角閃石極多、石英等多
1177	大形鉢	42.8			細・極多、中・多	明黄褐色　黒褐色	緩やかに開き口縁部は鈍く屈曲して短くやや内傾する。端部は外方に小さく摘み出す。口縁部横ﾅﾃﾞ、屈曲部以下内面指押さえ後放射状ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等多
1178	大形鉢	47.4			細・極多、中・多	明黄褐色	緩やかに開き口縁部は鈍く屈曲して短くやや外傾する。屈曲部に鈍い段。端部は外方に摘み出すと共に内方もわずかに張り頂部平坦面。口縁部横ﾅﾃﾞ、屈曲部以下内外面横ﾐｶﾞｷ。	1/8	角閃石極多、石英等多
1179	壺？			6.7	細・極多、中・多	黒褐色	鈍く突出気味の底部で体部張りは強い。内面ﾊｹ	1/2	角閃石極多、石英等多、雲母
1180	大形鉢			10.8	細・極多、中・多	暗褐色	底部は薄い。外面叩き目顕著に残る。内面縦ﾐｶﾞｷ。	1/2	角閃石極多（含粗粒）、石英等・雲母多　赤色顔料
1181	？			4.0	細・極多	黄橙色	本来は突出気味の底部で体部の張りは強い。縁辺部剥落。内外面ﾅﾃﾞ。	全周	角閃石極多、石英等少

第308図　４区ＳＫ01出土遺物５（１／４）



挿図番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1182	打製石庖丁	6.8	4.9	0.8	37.9	片岩		折損
1183	打製石庖丁	2.6	3.6	0.7	10.4	ｻﾇｶｲﾄ	短辺抉り部	折損
1184	板状剝片	15.0	7.8	0.9	168.5	片岩	板状素材	
1185	凹み石	10.5	10.3	5.6	894.3	砂岩	両面中央部と縁辺部に敲打痕集中	

第309図　4区ＳＫ01出土遺物6（1／2・1／3）

とが多いが本例は無文となる。(1144) は大形の短頸壷。口頸部はよく発達している方である。甕 (1145) は直線的に開く「く」字口縁形態で，胎土中に片岩粒を含む。阿波地方からの搬入品である。(1146) は受け口状口縁甕。体部の張りは弱く外面には顕著に叩き